こまちダム遺跡発掘調査報告 3

堂田（どうでん）A 遺跡
西田（にしだ）H 遺跡

序　　文

福島県の多目的ダムであるこまちダムは，田村郡小野町を流れる夏井川支流の黒森川流域の菖蒲谷地内に建設が計画され，現在，工事が進行中です。

このダムの水没予定地内及び県道付替え予定地には，先人が残した貴重な埋蔵文化財包蔵地が所在し，表面調査の結果，数多くの遺跡等が確認されました。

埋蔵文化財は，地域の長い歴史の中で育まれた文化的遺産であると同時に，わが国の歴史や文化の正しい理解と，将来における文化の向上発展の基礎をなすものであります。

このため，福島県教育委員会では，福島県土木部河川港湾領域及び県中建設事務所と埋蔵文化財の保護・保存について協議を重ね，平成11年度には県道付替え予定地の表面調査，平成12年度からは試掘調査を実施し，現状保存が困難な遺跡については，記録として保存することとし，平成14年度からは発掘調査を実施してきました。

本報告書は，平成15年度に実施した堂田Ａ遺跡と平成14年度と15年度に実施した西田Ｈ遺跡の発掘調査結果をまとめたものです。堂田Ａ遺跡からは，縄文時代と平安時代の集落跡が，また，西田Ｈ遺跡からは縄文時代早期・前期・晩期と平安時代の集落跡が確認されました。阿武隈山地のそれぞれの時代の人々の生活の様子を明らかにする上で，両遺跡とも重要な資料を提供しています。

今後，この報告書につきましては，県民の皆様の文化財に対する理解を深める上での資料として，さらには，生涯学習の中で，地域の歴史を解明するための学習資料として活用していただければ幸いに存じます。

おわりに，発掘調査の実施から報告書の作成にあたり，御協力いただいた福島県土木部，財団法人福島県文化振興事業団をはじめとする関係機関並びに関係各位に対し，感謝の意を表するものであります。

平成17年３月

福島県教育委員会

教育長　富　田　孝　志

あ　い　さ　つ

財団法人福島県文化振興事業団では，福島県教育委員会からの委託により，県内の大規模な開発に先立ち，対象地域内にある埋蔵文化財の調査を行っております。小野町のこまちダム建設に関連する埋蔵文化財の調査もそのひとつであり，平成14年度より本格的な発掘調査を開始いたしました。

この報告書は，平成14・15年度に実施した発掘調査のうち，堂田Ａ遺跡・西田Ｈ遺跡についての調査成果をまとめたものです。

堂田Ａ遺跡では，狭小な陽当たりの良い斜面に今から約6,500年前から約6,000年前までの縄文時代早期から前期と約1,000年前頃の平安時代の集落跡が確認されました。もう一方の西田Ｈ遺跡では，堂田Ａ遺跡と共通する時代に加えて縄文時代晩期の集落跡が確認されました。また５万点を超える縄文土器・石器・石製品が出土し，本県阿武隈高地における同時期の良好な資料が得られました。

今後，この報告書を，郷土の歴史を学ぶ基礎資料として，広く役立てていただければ幸いに存じます。

おわりに，この調査にご協力いただきました小野町ならびに地元の方々に深く感謝の意を表するとともに，今後とも埋蔵文化財の保護と活用に一層の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成17年３月

財団法人福島県文化振興事業団

理事長　髙　城　俊　春

緒　　言

1．本書は，平成14・15年度に実施したこまちダム遺跡発掘調査の報告書である。

2．本書には，福島県田村郡小野町に所在する以下の遺跡の調査成果を収録した。

堂田（どうでん）Ａ遺跡　　福島県田村郡小野町大字菖蒲谷字堂田　遺跡番号　52200135

西田（にしだ）Ｈ遺跡　　福島県田村郡小野町大字菖蒲谷字西田　遺跡番号　52200144

3．本事業は，福島県教育委員会が福島県土木部の委託を受けて実施し，調査にかかる費用は福島県土木部が負担した。

4．福島県教育委員会では，発掘調査を財団法人福島県文化振興事業団に委託して実施した。

5．財団法人福島県文化振興事業団では，遺跡調査部遺跡調査課の次の職員を配して調査に当たった。

平成14年度担当職員

文化財主査　　高　橋　信　一　　文化財主事　　横須賀　倫　達

平成15年度担当職員

文化財主査　　吉　野　滋　夫　　文化財主事　　横須賀　倫　達

（平成15年12月31日付退職）

文化財主事　　山　元　　出

（平成16年１月１日付配置）

平成16年度担当職員

文化財副主査　　山　元　　出

さらに，文化財主査　佐々木慎一・文化財主査　井　憲治・文化財副主査　大河原　勉・文化財副主査　阿部　知己・文化財主事　福田　秀生・文化財主事　丹治　篤嘉・文化財主事　笠井　崇吉・文化財主事　遠藤千映美・文化財主事　三浦　武司の協力を得ている。

6．本書の執筆は，調査を担当した職員が分担して行い，各文末に文責を明記した。

7．本書に使用した地図は，国土交通省国土地理院長の承認を得て，同院発行の２万５千分の１地形図を複製し使用したものである。（承認番号　平16東複第259号）

8．本書掲載の自然科学分析は次の諸機関に依頼し，その結果については付編に掲載した。

堂田Ａ遺跡

付編１：火山灰分析・花粉分析・放射性炭素年代測定・石器石質肉眼鑑定　㈱古環境研究所

西田Ｈ遺跡

付編２：火山灰分析・花粉分析・樹種同定・種実同定・放射性炭素年代測定

㈱古環境研究所

付編３・４：土器胎土分析・黒曜石原産地推定・石器石質肉眼鑑定　パリノ・サーヴェイ㈱

付編５：土器付着炭化物の放射性炭素年代測定　国立歴史民俗博物館

９．本書に収録した遺跡の調査記録および出土資料は，福島県教育委員会が保管している。

10．発掘調査および報告書作成にあたって，次の機関および個人の方々から指導・助言・協力をいただいた。（順不同・敬称略）

小野町教育委員会　横須賀市人文博物館　㈶いわき市教育文化財団　㈶郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団　国立歴史民俗博物館

石川日出志　稲村繁　今泉令子　大塚真弘　押山雄三　樫村友延　日塔とも子　今村峯雄　西本豊弘　小林謙一

用　　例

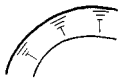
1．本書における遺構図の用例は，以下のとおりである。

方　位　　遺構図・地形図中の方位は真北を示す。座標は国土座標Ⅸ系に基づき，座標値もこれに従う。

縮　尺　　縮尺率は遺構の大きさと性格により適宜決定し，スケールの右に示した。

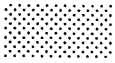
標　高　　水糸レベルは標高を示す。

ケ　バ　　遺構内の傾斜面はａ，緩斜面はｂで表した。人為的な削平・撹乱範囲などの傾斜面はｃで示している。

a　 　b　 　c　 

土　層　　遺跡内の標準堆積土層はローマ数字（ＬⅠ・ＬⅡ…），遺構内堆積土は算用数字（ℓ１・ℓ２…）で表記した。土色については『新版　標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄　1997）により判定した。

網　点　　挿図中における網点は以下を示す。ここにないものは図中に凡例を示した。

　柱痕　  　被熱範囲　 　礫

その他　　重複する遺構の新旧関係については，原則的に挿図の主となる遺構よりも所属時期の新しい遺構の上端のみを表現した。ただし，重複関係が複雑な場合はこの限りではなく，適宜両者を表現して文章中で説明する。また撹乱やトレンチは挿図中に「カクラン」「トレンチ」「サブトレンチ」と片仮名表記し，上端線のみで表現している。

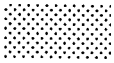
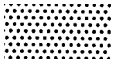
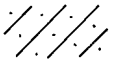
2．本書における遺物図の用例は，以下のとおりである。

縮　尺　　縮尺率は遺物の大きさと性格により適宜決定し，スケールの右に示した。

土器断面　縄文土器・弥生土器・土師器は白ヌキとし，須恵器は黒ベタで表記した。また，繊維土器には▲を付し，粘土積上げ痕は一点鎖線で示した。

番　号　　遺物番号は挿図ごとの通し番号とし，出土位置・層位は番号右の（　）中に示した。写真図版中には遺物の右下に挿図番号－番号のように付した。

網　点　　挿図中における網点は以下を示す。ここにないものは図中に凡例を示した。

 　黒色処理　  　磨面・磨滅　 　炭化物付着　  　節理面

法　量　　遺物の法量については，挿図番号の下位に付記した。また，推定値は（　），残存値は［　］内に示した。

石　質　　石器の石質にあるデ質凝灰岩は，デイサイト質凝灰岩の略である。

3．本報告書で使用した略号は，次のとおりである。

小野町	…ＯＮ	堂田Ａ遺跡	…ＤＤ－Ａ	西田Ｈ遺跡	…ＮＤ－Ｈ
グリッド	…Ｇ	竪穴住居跡	…ＳＩ	掘立柱建物跡	…ＳＢ
土坑	…ＳＫ	屋外焼土遺構	…ＳＧ	土器埋設遺構	…ＳＭ
道跡	…ＳＦ	小穴・ピット	…Ｐ	遺物包含層	…ＳＨ
遺跡内基本土層	…Ｌ	遺構内堆積土	…ℓ		

目　　次

〔本　　文〕

序　　章 …… 1

第 1 節　調査に至る経緯…… 1

第 2 節　地理的環境…… 4

第 3 節　歴史的環境…… 6

第 1 編　堂田Ａ遺跡

第 1 章　遺跡の概要 ……13

第 1 節　位置と地形……13

第 2 節　調査の経過と方法……14

第 3 節　遺構の分布と基本土層……15

第 2 章　平安時代の遺構と遺物……19

第 1 節　竪穴住居跡……19

1 号住居跡（19）　2 号住居跡（24）　3 号住居跡（29）　4 号住居跡（29）

第 3 章　縄文時代の遺構と遺物……35

第 1 節　竪穴住居跡……35

5 号住居跡（35）　6 号住居跡（39）　7 号住居跡（41）　8 号住居跡（45）　9 号住居跡（47）

10号住居跡（48）　11号住居跡（49）　12号住居跡（51）　13号住居跡（51）　14号住居跡（54）

15号住居跡（56）　16号住居跡（59）　17号住居跡（63）　18号住居跡（64）　19号住居跡（65）

第 2 節　土　　坑……69

1 号土坑（69）　2 号土坑（69）　3 号土坑（69）　4 号土坑（71）　5 号土坑（71）

第 3 節　その他の遺構……72

屋外焼土遺構（73）　小穴（73）

第 4 節　遺物包含層……73

第 4 章　ま　と　め ……91

第 1 節　平安時代の遺物……91

第 2 節　平安時代の遺構……92

第 3 節　縄文時代の遺物……93

第 4 節　縄文時代の遺構……99

第２編　西田Ｈ遺跡

第１章　遺跡の概要……105

第１節　位置と地形……105

第２節　調査の経過と方法……106

第３節　遺構の分布と基本土層……110

第２章　遺構と遺物……119

第１節　住居跡……119

１号住居跡（119）　２号住居跡（124）　３号住居跡（131）　４号住居跡（133）　５号住居跡（136）

６号住居跡（143）　７号住居跡（146）　８号住居跡（155）　９号住居跡（157）　10号住居跡（161）

11・12号住居跡（164）　13号住居跡（166）　14号住居跡（169）　15号住居跡（171）　16号住居跡（174）

17号住居跡（177）　18号住居跡（180）　19号住居跡（183）　20号住居跡（186）　21号住居跡（187）

22号住居跡（189）　23・24号住居跡（192）　25号住居跡（193）　26号住居跡（201）　27号住居跡（206）

28号住居跡（207）　29号住居跡（210）　30号住居跡（214）　31号住居跡（215）　32号住居跡（216）

33号住居跡（218）　34号住居跡（220）　35号住居跡（222）　36号住居跡（223）　37号住居跡（225）

38号住居跡（226）　39号住居跡（228）　40号住居跡（230）　41号住居跡（232）

第２節　掘立柱建物跡……233

１号掘立柱建物跡（234）　２号掘立柱建物跡（236）　３号掘立柱建物跡（238）　４号掘立柱建物跡（241）

５号掘立柱建物跡（245）　６号掘立柱建物跡（247）　７号掘立柱建物跡（248）　８号掘立柱建物跡（249）

第３節　土　　坑……251

縄文時代早期前葉～中葉の土坑（251）　縄文時代早期後葉～前期前半の土坑（252）

縄文時代前期後半以降の土坑（落し穴状土坑）（255）　縄文時代晩期の土坑　（258）　時期不明の土坑　（259）

第４節　その他の遺構……273

屋外焼土遺構（273）　土器埋設遺構（275）　ピット群（275）　道跡（275）

第５節　遺物包含層……281

第３章　ま　と　め……409

第１節　遺　　構……409

第２節　出土土器の特徴……413

第３節　出土石器の特徴……417

第４節　ま　と　め……418

〔写真・付編〕

写真図版

第１編　堂田Ａ遺跡

第２編　西田Ｈ遺跡

付　　編

１．福島県，堂田Ａ遺跡の自然科学分析　　㈱古環境研究所

２．福島県，西田Ｈ遺跡の自然科学分析　　㈱古環境研究所

３．西田Ｈ遺跡出土遺物の自然科学分析　　パリノ・サーヴェイ㈱

４．西田Ｈ遺跡石器石質鑑定　　パリノ・サーヴェイ㈱

５．福島県西田Ｈ遺跡出土土器付着物の^{14}Ｃ年代測定

小林謙一・坂本稔・松崎浩之

挿図・表　目次

序　　章

［挿図］

図１　こまちダム位置図 ……1
図２　こまちダムと遺跡 ……2
図３　周辺表層地質図 ……5
図４　周辺遺跡位置図 ……8

［表］

表１　こまちダム遺跡一覧 ……3
表２　こまちダム周辺遺跡一覧 ……9

第１編　堂田Ａ遺跡

［挿図］

図１　調査範囲と工事計画図 ……13
図２　遺構配置図（平安時代） ……15
図３　遺構配置図（縄文時代） ……16
図４　基本土層図 ……17
図５　１号住居跡（１） ……20
図６　１号住居跡（２） ……21
図７　１号住居跡出土遺物（１） ……22
図８　１号住居跡出土遺物（２） ……23
図９　２号住居跡（１） ……25
図10　２号住居跡（２） ……26
図11　２号住居跡出土遺物（１） ……27
図12　２号住居跡出土遺物（２） ……28
図13　３号住居跡 ……30
図14　３号住居跡出土遺物 ……31
図15　４号住居跡 ……32
図16　４号住居跡・出土遺物（１） ……33
図17　４号住居跡出土遺物（２） ……34
図18　５号住居跡 ……36
図19　５号住居跡出土遺物（１） ……37
図20　５号住居跡出土遺物（２） ……38
図21　６号住居跡・出土遺物 ……40
図22　７号住居跡 ……41
図23　７号住居跡出土遺物（１） ……42
図24　７号住居跡出土遺物（２） ……43
図25　７号住居跡出土遺物（３） ……44
図26　８号住居跡・出土遺物 ……46
図27　９号住居跡・出土遺物 ……47
図28　10号住居跡・出土遺物 ……49
図29　11号住居跡・出土遺物 ……50
図30　12号住居跡・出土遺物 ……52
図31　13号住居跡・出土遺物 ……53
図32　14号住居跡・出土遺物 ……55
図33　15号住居跡 ……56
図34　15号住居跡出土遺物（１） ……57
図35　15号住居跡出土遺物（２） ……58
図36　16号住居跡 ……60
図37　16号住居跡出土遺物（１） ……61
図38　16号住居跡出土遺物（２） ……62
図39　17号住居跡・出土遺物 ……63
図40　18号住居跡・出土遺物 ……65
図41　19号住居跡・出土遺物（１） ……67
図42　19号住居跡出土遺物（２） ……68
図43　１～５号土坑・出土遺物 ……70
図44　１・２号屋外焼土遺構・小穴 ……72
図45　遺物包含層出土遺物（１） ……74
図46　遺物包含層出土遺物（２） ……75
図47　遺物包含層出土遺物（３） ……77
図48　遺物包含層出土遺物（４） ……78
図49　遺物包含層出土遺物（５） ……79
図50　遺物包含層出土遺物（６） ……80
図51　遺物包含層出土遺物（７） ……81
図52　遺物包含層出土遺物（８） ……82
図53　遺物包含層出土遺物（９） ……83
図54　遺物包含層出土遺物（10） ……85
図55　遺物包含層出土遺物（11） ……86
図56　遺物包含層出土遺物（12） ……87
図57　遺物包含層出土遺物（13） ……88
図58　遺物包含層出土遺物（14） ……89

図59　石鏃未成品と剥片の分類 ……97
図60　住居跡変遷図 ……100

［表］

表１　非掲載剥片石質別点数 ……95
表２　非掲載剥片分類別点数 ……99

第２編　西田Ｈ遺跡

［挿図］

図１　周辺地形と遺跡の範囲 ……105
図２　グリッド配置図 ……109
図３　調査区東部遺構配置図（１） ……111
＜ＬⅢ・ＬⅣ上面＞
図４　調査区東部遺構配置図（２） ……112
＜ＬⅥ上面＞
図５　調査区西部遺構配置図 ……114
図６　基本土層（１） ……116
図７　基本土層（２） ……117
図８　１号住居跡（１） ……120
図９　１号住居跡（２） ……121
図10　１号住居跡（３）・出土遺物（１） ……122
図11　１号住居跡出土遺物（２） ……123
図12　２号住居跡（１） ……125
図13　２号住居跡（２） ……126
図14　２号住居跡（３） ……127
図15　２号住居跡（４） ……128
図16　２号住居跡出土遺物（１） ……129
図17　２号住居跡出土遺物（２） ……130
図18　３号住居跡 ……131
図19　３号住居跡出土遺物 ……133
図20　４号住居跡 ……134
図21　４号住居跡出土遺物 ……135
図22　５号住居跡（１） ……137
図23　５号住居跡（２） ……138
図24　５号住居跡出土遺物（１） ……139
図25　５号住居跡出土遺物（２） ……140
図26　５号住居跡出土遺物（３） ……141
図27　５号住居跡出土遺物（４） ……142
図28　６号住居跡（１） ……144
図29　６号住居跡（２）・出土遺物 ……145
図30　７号住居跡（１） ……147
図31　７号住居跡（２） ……148
図32　７号住居跡出土遺物（１） ……151
図33　７号住居跡出土遺物（２） ……152
図34　７号住居跡出土遺物（３） ……153
図35　８号住居跡・出土遺物 ……156
図36　９号住居跡（１） ……158
図37　９号住居跡（２）・出土遺物 ……160
図38　10号住居跡 ……162
図39　10号住居跡出土遺物 ……163
図40　11・12号住居跡・出土遺物 ……165
図41　13号住居跡 ……167
図42　13号住居跡出土遺物 ……168
図43　14号住居跡・出土遺物 ……170
図44　15号住居跡・出土遺物（１） ……172
図45　15号住居跡出土遺物（２） ……173
図46　16号住居跡・出土遺物 ……176
図47　17号住居跡（１） ……178
図48　17号住居跡（２）・出土遺物 ……179
図49　18号住居跡 ……181
図50　18号住居跡出土遺物 ……182
図51　19号住居跡 ……184
図52　19号住居跡出土遺物 ……185
図53　20号住居跡・出土遺物 ……186
図54　21号住居跡・出土遺物 ……188
図55　22号住居跡 ……190
図56　22号住居跡出土遺物 ……191
図57　23・24号住居跡 ……193
図58　25号住居跡 ……194
図59　25号住居跡出土遺物（１） ……196
図60　25号住居跡出土遺物（２） ……198
図61　25号住居跡出土遺物（３） ……199
図62　25号住居跡出土遺物（４） ……200
図63　26号住居跡 ……202
図64　26号住居跡出土遺物（１） ……203
図65　26号住居跡出土遺物（２） ……204
図66　26号住居跡出土遺物（３） ……205
図67　27号住居跡・出土遺物 ……207
図68　28号住居跡 ……208
図69　28号住居跡出土遺物 ……209
図70　29号住居跡 ……211
図71　29号住居跡出土遺物（１） ……212
図72　29号住居跡出土遺物（２） ……213
図73　30号住居跡・出土遺物 ……214
図74　31号住居跡・出土遺物 ……216

図75　32号住居跡 ……217
図76　32号住居跡出土遺物 ……218
図77　33号住居跡 ……219
図78　33号住居跡出土遺物 ……220
図79　34号住居跡 ……221
図80　34号住居跡出土遺物 ……221
図81　35号住居跡 ……222
図82　35号住居跡出土遺物 ……223
図83　36号住居跡 ……224
図84　36号住居跡出土遺物 ……224
図85　37号住居跡・出土遺物 ……225
図86　38号住居跡・出土遺物 ……227
図87　39号住居跡・出土遺物 ……229
図88　40号住居跡・出土遺物（１） ……231
図89　40号住居跡出土遺物（２） ……232
図90　41号住居跡・出土遺物 ……233
図91　１号掘立柱建物跡（１） ……234
図92　１号掘立柱建物跡（２）・出土遺物 …235
図93　２号掘立柱建物跡（１） ……237
図94　２号掘立柱建物跡（２） ……238
図95　３号掘立柱建物跡（１） ……239
図96　３号掘立柱建物跡（２）・出土遺物 …240
図97　４号掘立柱建物跡（１） ……242
図98　４号掘立柱建物跡（２） ……243
図99　４号掘立柱建物跡出土遺物 ……244
図100　５号掘立柱建物跡・出土遺物 ……246
図101　６号掘立柱建物跡・出土遺物 ……247
図102　７号掘立柱建物跡・出土遺物 ……248
図103　８号掘立柱建物跡・出土遺物 ……250
図104　１～４号土坑 ……260
図105　５～７号土坑 ……261
図106　８～10号土坑 ……262
図107　11～15号土坑 ……263
図108　16・20・25号土坑 ……264
図109　17～19・21・22号土坑 ……265
図110　23・24・26・27号土坑 ……266
図111　28～33号土坑 ……267
図112　34～37号土坑 ……268
図113　１～５号土坑出土土器 ……269
図114　５～９号土坑出土土器 ……270
図115　10・13・15～18・20・23・25
・30・35・37号土坑出土土器 …271
図116　土坑出土石器 ……272
図117　１～６号屋外焼土遺構 ……274
図118　１・２号土器埋設遺構 ……276
図119　ピット群（１） ……277
図120　ピット群（２） ……278
図121　ピット群（３）・出土遺物 ……279
図122　１号道跡・出土遺物 ……280
図123　遺物包含層出土土器（１） ……283
図124　遺物包含層出土土器（２） ……284
図125　遺物包含層出土土器（３） ……286
図126　遺物包含層出土土器（４） ……287
図127　遺物包含層出土土器（５） ……289
図128　遺物包含層出土土器（６） ……290
図129　遺物包含層出土土器（７） ……291
図130　遺物包含層出土土器（８） ……293
図131　遺物包含層出土土器（９） ……294
図132　遺物包含層出土土器（10） ……295
図133　遺物包含層出土土器（11） ……297
図134　遺物包含層出土土器（12） ……299
図135　遺物包含層出土土器（13） ……300
図136　遺物包含層出土土器（14） ……301
図137　遺物包含層出土土器（15） ……303
図138　遺物包含層出土土器（16） ……304
図139　遺物包含層出土土器（17） ……305
図140　遺物包含層出土土器（18） ……306
図141　遺物包含層出土土器（19） ……307
図142　遺物包含層出土土器（20） ……308
図143　遺物包含層出土土器（21） ……310
図144　遺物包含層出土土器（22） ……311
図145　遺物包含層出土土器（23） ……312
図146　遺物包含層出土土器（24） ……313
図147　遺物包含層出土土器（25） ……314
図148　遺物包含層出土土器（26） ……317
図149　遺物包含層出土土器（27） ……318
図150　遺物包含層出土土器（28） ……319
図151　遺物包含層出土土器（29） ……320
図152　遺物包含層出土土器（30） ……321
図153　遺物包含層出土土器（31） ……322
図154　遺物包含層出土土器（32） ……323
図155　遺物包含層出土土器（33） ……324
図156　遺物包含層出土土器（34） ……325
図157　遺物包含層出土土器（35） ……326
図158　遺物包含層出土土器（36） ……327
図159　遺物包含層出土土器（37） ……328
図160　遺物包含層出土土器（38） ……329
図161　遺物包含層出土土器（39） ……330
図162　遺物包含層出土土器（40） ……331
図163　遺物包含層出土土器（41） ……333
図164　遺物包含層出土土器（42） ……335
図165　遺物包含層出土土器（43） ……336

図166　遺物包含層出土土器（44）　……337
図167　遺物包含層出土土器（45）　……338
図168　遺物包含層出土土器（46）　……339
図169　遺物包含層出土土器（47）　……341
図170　遺物包含層出土土器（48）　……342
図171　遺物包含層出土土器（49）　……343
図172　遺物包含層出土土器（50）　……344
図173　遺物包含層出土土器（51）　……345
図174　遺物包含層出土土器（52）　……346
図175　遺物包含層出土土器（53）　……347
図176　遺物包含層出土土器（54）　……348
図177　遺物包含層出土土器（55）　……350
図178　遺物包含層出土土器（56）　……351
図179　遺物包含層出土土器（57）　……353
図180　遺物包含層出土土器（58）　……355
図181　遺物包含層出土土器（59）　……356
図182　遺物包含層出土土器（60）　……357
図183　遺物包含層出土土器（61）　……358
図184　遺物包含層出土土器（62）　……359
図185　遺物包含層出土土器（63）　……360
図186　遺物包含層出土土器（64）　……361
図187　遺物包含層出土土器（65）　……362
図188　遺物包含層出土土器（66）　……363
図189　遺物包含層出土土器（67）　……365
図190　遺物包含層出土土器（68）　……366
図191　遺物包含層出土土器（69）　……367
図192　遺物包含層出土土器（70）　……368
図193　遺物包含層出土土器（71）　……370
図194　遺物包含層出土土器（72）　……371
図195　遺物包含層出土土器（73）　……372
図196　遺物包含層出土土器（74）　……373
図197　遺物包含層出土土器（75）　……375
図198　遺物包含層出土土器（76）　……376
図199　遺物包含層出土土器（77）　……377
図200　遺物包含層出土土器（78）　……379
図201　遺物包含層出土土器（79）　……380
図202　遺物包含層出土土器（80）　……382
図203　遺物包含層出土土器（81）　……383
図204　遺物包含層出土土器（82）　……384
図205　遺物包含層出土石器（１）　……386
図206　遺物包含層出土石器（２）　……387
図207　遺物包含層出土石器（３）　……388
図208　遺物包含層出土石器（４）　……389
図209　遺物包含層出土石器（５）　……390
図210　遺物包含層出土石器（６）　……391
図211　遺物包含層出土石器（７）　……393
図212　遺物包含層出土石器（８）　……394
図213　遺物包含層出土石器（９）　……395
図214　遺物包含層出土石器（10）　……396
図215　遺物包含層出土石器（11）　……397
図216　遺物包含層出土石器（12）　……398
図217　遺物包含層出土石器（13）　……399
図218　遺物包含層出土石器（14）　……400
図219　遺物包含層出土石器（15）　……401
図220　遺物包含層出土石器（16）　……402
図221　遺物包含層出土石器（17）　……403
図222　遺物包含層出土石器（18）　……404
図223　遺物包含層出土石器（19）　……405
図224　遺物包含層出土
　　ミニチュア土器・土製品　……406
図225　遺物包含層出土土製品・石製品　……407

序　　章

第１節　調査に至る経緯

事業の概要と平成13年度までの経緯

こまちダムは，福島県が田村郡小野町大字菖蒲谷地内に建設を予定しているダムである。このダムは重力式コンクリートダムを採用し，堤高37m・総貯水量770,000㎥・集水総面積４㎢の規模を持ち，右支夏井川の支流である黒森川の洪水対策・流水の正常な機能の維持・水道用水の確保を目的とする多目的ダムである。

水没地帯(15ha)における埋蔵文化財の調査は，当初，小野町教育委員会が主体になって平成10年４月７日から８日に表面調査が実施された。調査の結果，周知の遺跡も含めて８遺跡が確認された。その後，平成11年度にはダムを周回する県道矢吹・小野線予定路線の区間20haの表面調査を実施し，遺物が表面採集できた地点を遺跡として４ヵ所認定し，また遺構や遺物は発見できなかったが地形的条件から遺跡の可能性が高く，試掘調査を必要とする遺跡推定地を９ヵ所，計13ヵ所を確認した。この調査成果は，平成12年３月刊行の『福島県内遺跡分布調査報告６』に掲載した。

平成12年度は，このうち遺跡推定地７ヵ所についての試掘調査と湛水により水没する20haについて再確認を含めて表面調査を実施した。表面調査では新たに遺跡推定地５ヵ所が確認され，試掘調査ではＢ６・９地点で遺構・遺物が検出された。Ｂ６では平安時代と縄文時代早期末の集落跡が確認され，要保存面積1,300㎡が確定し，堂田Ａ遺跡とした。Ｂ９では縄文時代前期・晩期の土坑と遺物包含層が検出され，要保存面積1,600㎡が確定し，沢目木遺跡とした。調査成果は，平成13年３月刊行の『福島県内遺跡分布調査報告７』に掲載した。

平成13年度は，堂田Ａ遺跡と遺跡推定地５地点，及び工事計画の変更になったダムを周回する付け替え道路建設予定地10haの表面調査を実施し，新たに１地点を確認した。堂田Ａ遺跡は付け替え道路の建設予定地が南側に変更されたため，再度試掘調査を実施した。平安時代と縄文時代早期末葉の集落跡が確認され，要保存面積800㎡が確定した。Ｂ８は宅地造成予定地内を含めて試掘調査を

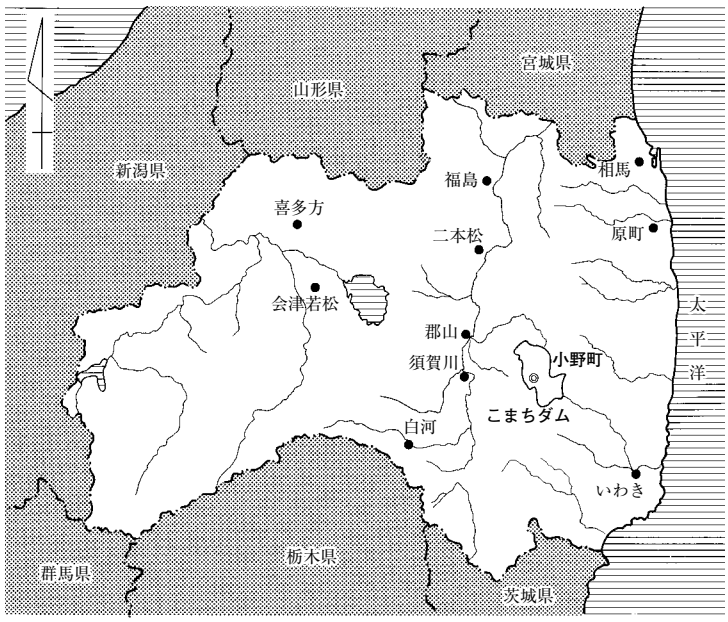


図１　こまちダム位置図

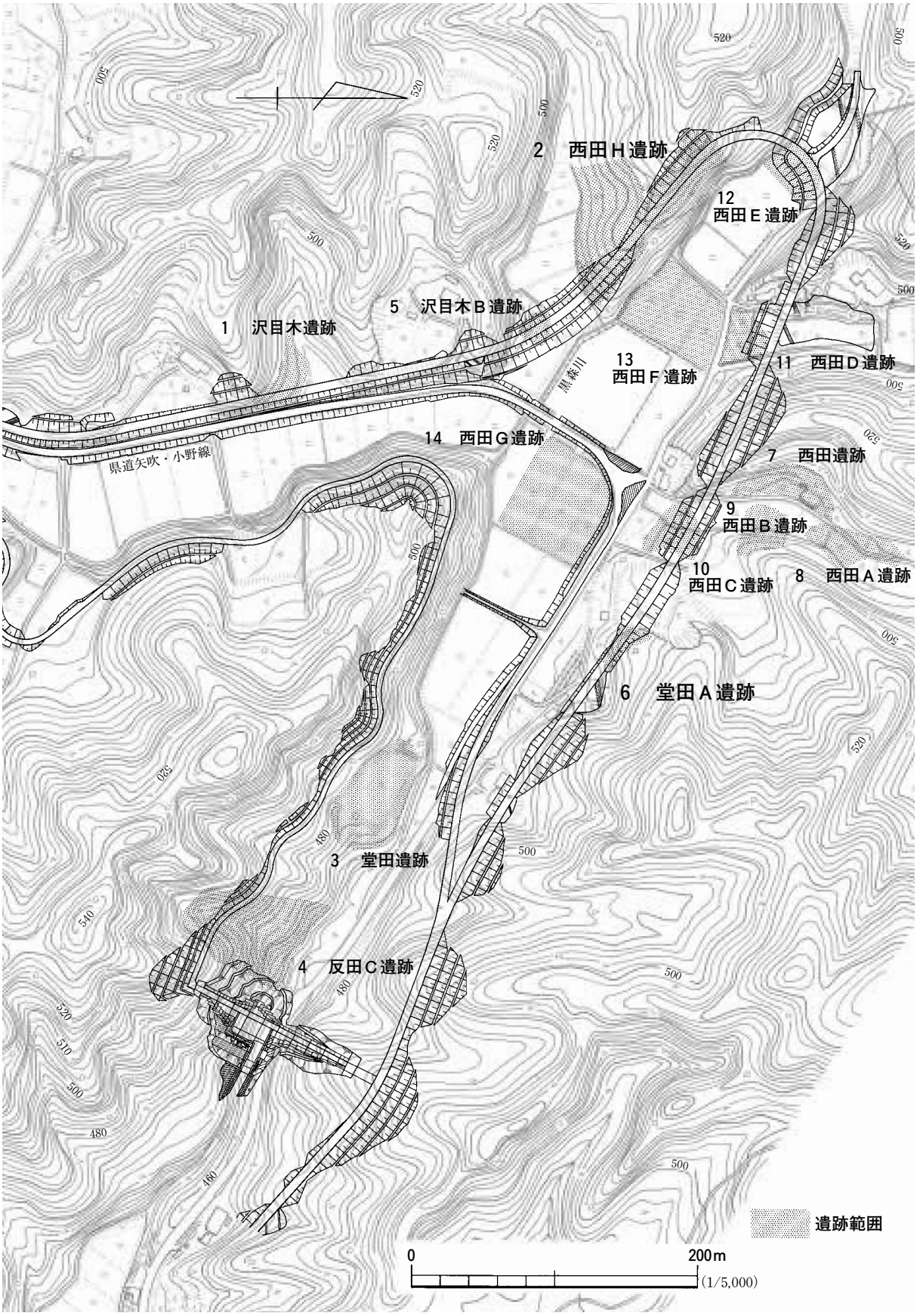

2　西田Ｈ遺跡
12
西田Ｅ遺跡
5　沢目木Ｂ遺跡
1　沢目木遺跡
13
西田Ｆ遺跡
11　西田Ｄ遺跡
黒森川
14　西田Ｇ遺跡
県道矢吹・小野線
7　西田遺跡
9
西田Ｂ遺跡
10
西田Ｃ遺跡
8　西田Ａ遺跡
6　堂田Ａ遺跡
3　堂田遺跡
4　反田Ｃ遺跡
遺跡範囲
0
200m
(1/5,000)

図２　こまちダムと遺跡

表１　こまちダム遺跡一覧

№.	遺　跡　名	所　在　地	時　代	種　別
1	沢目木遺跡	小野町菖蒲谷字沢目木	縄文早・前・晩期，弥生前期	集落跡・散布地
2	西田Ｈ遺跡	小野町菖蒲谷字西田	本書収録	集落跡・狩猟地
3	堂田遺跡	小野町菖蒲谷字反田	縄文後・晩期	散布地
4	反田Ｃ遺跡	小野町菖蒲谷字反田	縄文前期	散布地・狩猟地
5	沢目木Ｂ遺跡	小野町菖蒲谷字沢目木	縄文晩期	散布地
6	堂田Ａ遺跡	小野町菖蒲谷字堂田	本書収録	集落跡
7	西田遺跡	小野町菖蒲谷字西田	縄文	散布地
8	西田Ａ遺跡	小野町菖蒲谷字西田	縄文後・晩期	散布地
9	西田Ｂ遺跡	小野町菖蒲谷字西田	縄文後・晩期	散布地
10	西田Ｃ遺跡	小野町菖蒲谷字西田	縄文	散布地
11	西田Ｄ遺跡	小野町菖蒲谷字西田	縄文	散布地
12	西田Ｅ遺跡	小野町菖蒲谷字西田	縄文	散布地
13	西田Ｆ遺跡	小野町菖蒲谷字西田	縄文	散布地
14	西田Ｇ遺跡	小野町菖蒲谷字西田	縄文	散布地

実施した。縄文時代早・前・晩期の竪穴住居跡・土坑・遺物包含層と平安時代の竪穴住居跡を検出し，調査範囲の7,400㎡を要保存範囲として確定し，遺跡名を西田Ｈ遺跡とした。他の遺跡では，数点の縄文土器や土師器が出土したが，遺構が確認できず工区内での要保存面積は確定しなかった。以上の調査成果は，『福島県内遺跡分布調査報告８』に掲載した。（高橋）

平成14年度以降の調査経緯

平成14年度は西田Ｈ・西田Ａ・西田Ｂ・西田Ｄ・西田Ｅ・西田Ｆ・西田Ｇの７遺跡と，遺跡推定地４箇所について試掘調査が実施された。調査の結果，遺跡推定地のなかで２箇所が遺跡であることが判明し，それぞれ反田Ｃ遺跡・沢目木Ｂ遺跡とした。発掘調査を必要とする面積は反田Ｃ遺跡が1,200㎡，沢目木Ｂ遺跡が600㎡である。また，西田Ｈ遺跡は未調査部分を対象にした２次試掘調査であったが，これによって新たに2,600㎡が遺跡の範囲として追加された(『福島県内遺跡分布調査報告９』)。

同年度には，沢目木遺跡と西田Ｈ遺跡の発掘調査を実施した。沢目木遺跡は１次調査として1,600㎡を調査した。縄文時代早期の竪穴状遺構・掘立柱建物跡・土坑などが検出され，縄文時代早期・前期・晩期，弥生時代前期の遺物包含層も確認された。この成果は『こまちダム遺跡発掘調査報告１』としてまとめている(福島県教育委員会2003)。西田Ｈ遺跡は，１次調査として前年度確定した要保存範囲のうち県道工事予定地内にあたる2,700㎡について調査を開始した。遺跡は縄文時代早・前・晩期，奈良・平安時代の複合遺跡であり，複数の文化面が確認されたため，同年８月に県土木部県中建設事務所・県文化課・㈶県文化振興事業団の３者による協議の結果，既に調査の及んでいる範囲で同年度の調査を終了し，本来調査予定であった堂田Ａ遺跡とあわせて次年度に繰り延べることとなった。

平成15年度は，２名の調査員を配置し，反田Ｃ・沢目木・堂田Ａ・西田Ｈ・沢目木Ｂ遺跡の５遺跡計5,700㎡を対象に発掘調査を行うこととなった。各遺跡の発掘調査は県中建設事務所の工事工程を受けて，先行して着工する反田Ｃ遺跡と堂田Ａ遺跡から順に実施することとした。

反田Ｃ遺跡は1,200㎡について調査を実施した。縄文時代の落し穴状土坑３基を検出し，１ヶ月ほどで調査を終了した。沢目木遺跡の２次調査は，１次調査で未調査であった100㎡を対象とし，前年度検出した遺物包含層の続きの部分を調査した。調査は４日ほどで終了した。以上の成果は『こまちダム遺跡発掘調査報告２』にまとめている(福島県教育委員会2004)。堂田Ａ遺跡は800㎡を調査した。遺跡は２ｍ近い縄文時代の遺物包含層を挟んで平安時代の集落と縄文時代早期の集落が重複しており，調査に手間取った結果，終了まで６ヶ月を要した。西田Ｈ遺跡は前年度までに未調査であった道路工事用地内の3,000㎡についての２次調査である。調査区の中でも急斜面である西部についてはトレンチ調査を行い，遺構・遺物が確認できなかった西端部については，それで調査終了とした。それ以外の部分では，縄文時代前期・晩期の集落と遺物包含層が確認された。12月17日に上記の遺跡を県中建設事務所に引き渡し，平成15年度の調査を終了した。当初調査を予定した沢目木Ｂ遺跡は，協議の結果，次年度以降に繰り延べることとなった。（吉野・山元）

第２節　地理的環境（図３）

堂田Ａ遺跡と西田Ｈ遺跡は，福島県田村郡小野町に所在する。福島県は県内を南北に走る奥羽山脈・阿武隈高地などの山地山脈により大きく３地域に分けることができる。太平洋に面した「浜通り」，阿武隈高地と奥羽山脈に東西を区切られ，中央を阿武隈川が北流する「中通り」，奥羽山脈から西側全域の「会津地方」である。

小野町は阿武隈高地のほぼ中央，中通りと浜通りのほぼ中間に位置する。小野町の面積は125.11㎢，人口は12,359人(平成14年10月現在)である。周辺市町村は，東にいわき市，西に郡山市と境を接し，北に田村郡船引町・大越町・滝根町，南に石川郡平田村が隣接している。町の東部に矢大臣山(964m)，北西部に黒石山(896m)・高柴山(884m)，西部に一盃山(856m)・日影山(879m)，南西部に十石山(718m)などの山々が連なり，隣接する市町村との境界をなしている。小野町の中心部には右支夏井川が南東方向に向かって流れ，町の西側山地を水源とした車川・黒森川・十石川などの諸支流が流れ込む。標高480～560mの丘陵地はこれら小河川により開析され，その裾部や埋没谷底平野は集落や田畑として利用されている。

小野町の地質は花崗岩類を主とした深成岩類を主な基盤層とし，一部現河床に沿う段丘上や埋積谷などに砂・泥・礫を主とする未固結の第四紀堆積物が分布している。深成岩類は北西端の黒石山周辺の狭い地域にはんれい岩，小野新町西部を除くほとんどの地域に分布する古期花崗岩類(片状花崗閃緑岩，黒雲母角閃石花崗閃緑岩)，町の北西部，日影山～高柴山周辺に分布する新期花崗岩類(黒雲母花崗岩，桃色花崗岩)に大別される。未固結の第四紀堆積物は，腐植土との漸移層である暗褐色土壌，及び褐色火山灰層，帯黄褐色火山灰層などが認められる。

気候区分は，海洋性気候の浜通り南部と内陸的気候の中通りとの中間に当たり，季節風の影響により非常に変化に富んだ気候を醸成する。また阿武隈高地内の内陸盆地であるため，厳冬酷暑の厳

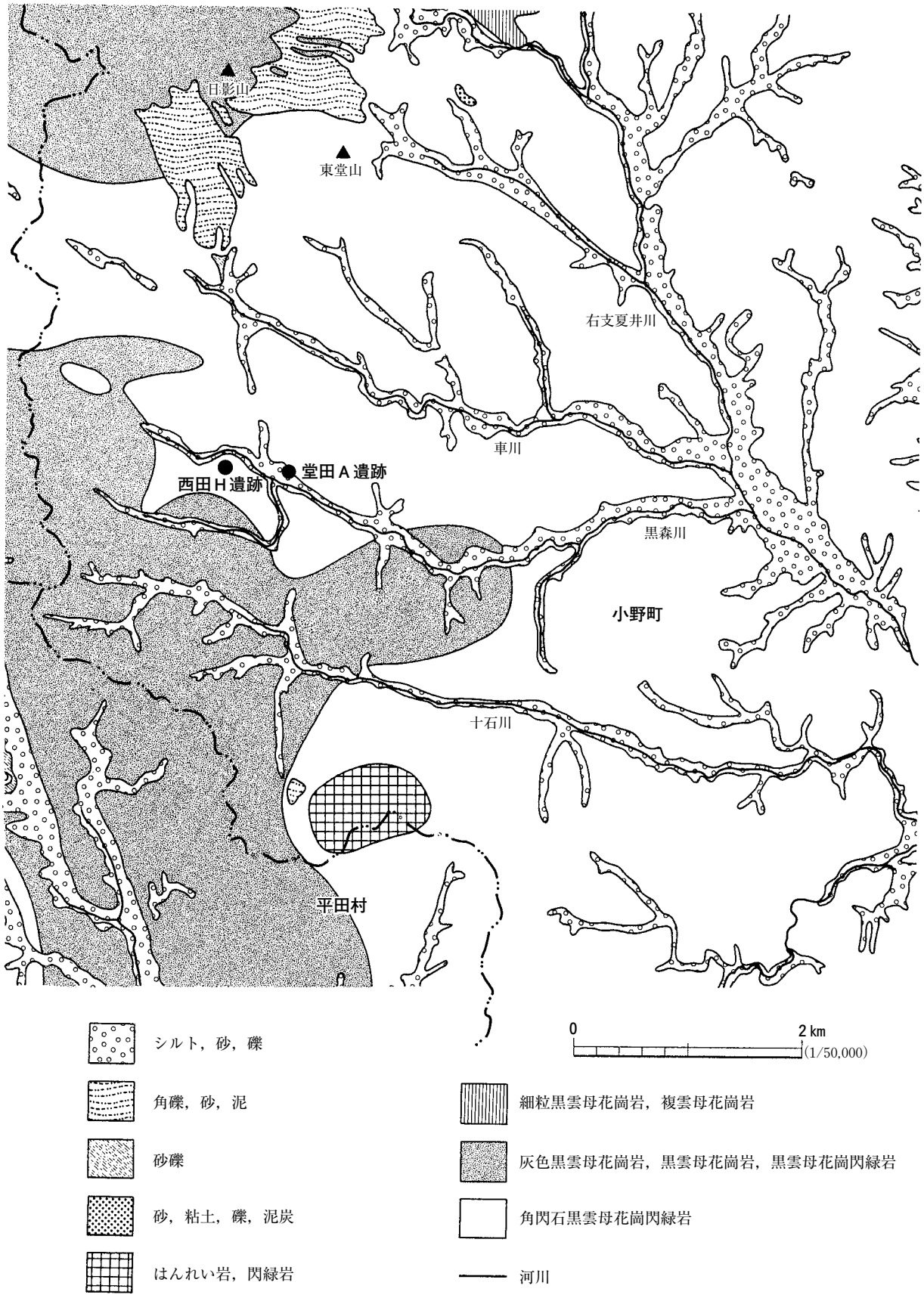


図３　周辺表層地質図『土地分類基本調査：小野新町』（福島県農林水産部農地計画課1996）を基に作成

しい環境となり，年変化，日変化が大きい。冬季は，最新積雪の平均値が30㎝と雪量は少ないものの，寒さが厳しく降霜や氷結することが多い。夏季は山間部特有のフェーン現象が起こることが多く，雷雨や降雹が多発する地域となっている。またこの季節にオホーツク海高気圧の勢力が強いと，異常低温が続き，北東の冷たい季節風(山背)が吹きつける。年平均気温は10.9℃，年間降水量は1,294㎜である。

小野町が位置する阿武隈高地の現在の植生(極相)区分は，冷温帯夏緑広葉樹林帯下部にあたり，温暖帯広葉樹林帯上部への推移地帯に位置している。標高700.0m付近を境にして，山地にはミズナラ林，丘陵や平地にはコナラ林が発達している。また近年までは林業も盛んであり，植林によるスギ林も数多く分布する。（横須賀）

第3節　歴史的環境（図4）

小野町内における歴史的環境を『福島県埋蔵文化財地図及び一覧表』(1984・10刊行)，『福島県遺跡地図』(1996・3刊行)や最近の文化財調査報告書を参考に概観していく。『福島県遺跡地図』で町内には117ヵ所の埋蔵文化財包蔵地が登録されている。また，平成4年から平成5年にかけて磐越自動車道建設に関連する10遺跡の発掘調査が実施され，報告書も刊行され多大な成果を上げている。本書に所収する遺跡が所在する菖蒲谷・雁股田地区では，平成10・13・14年度にあぶくま高原道路建設に関連して7遺跡で発掘調査が行われている。以下時代ごとに記述を進める。

町内ではまだ旧石器時代の遺構・遺物は発見されていない。縄文時代になると，遺跡数は爆発的に増加する。この中には，縄文時代草創期に属する御子柴系尖頭器(石槍)が出土した猪久保城跡，早期前葉の稲荷台式系土器が出土した小滝遺跡・鴨ヶ館跡，同時期の無文系土器が出土した沢目木遺跡，日計式押型文系土器が出土した柳作Ｂ遺跡がある。中葉では田戸下層式期や常世式期などの貝殻・沈線文系土器が出土した小滝・糀内・長久保・柳作Ｂ遺跡・鴨ヶ館跡などがある。後半期になると鍛冶久保・糀内・畑ヶ田・葭作・仁井殿遺跡や鴨ヶ館跡で土器片と共に竪穴住居跡などの遺構が発見されている。鍛冶久保遺跡では茅山下層式期の竪穴住居跡，仁井殿遺跡・鴨ヶ館跡では大畑Ｇ式期の竪穴住居跡が検出されている。この他に早期と考えられる落し穴状土坑が鴨ヶ館跡・糀内・鍛冶久保遺跡で検出されている。

前期では小滝・沢目木遺跡がある。この2遺跡では大木2ｂ・4・6式期の東北系土器と浮島Ⅰ～Ⅲ式・諸磯ｂ式の関東系土器が出土している。この他に，鴨ヶ館跡・沢目木遺跡では大木6式土器，鍛冶久保遺跡では浮島Ⅰ式や諸磯ｂ式期，柳作Ｂ遺跡では大木3式の竪穴住居跡と土坑・屋外炉と考えられる焼土遺構がそれぞれ発見されている。小野町内では，縄文時代でも早期中頃から前期前半にかけて比較的まとまって土器片が出土しており，この時期において福島県南部地域では東北系土器と関東系土器とが混在する傾向がある。

中期では町道建設に伴って平成3年に発掘調査が実施された矢大臣山(新田)遺跡が代表的である。

大木８ａ式期の大型竪穴住居跡，大木９・10式期の竪穴住居跡と多量の遺物が出土した遺物包含層が調査された。あぶくま高原道路関連では反田Ｂ遺跡で大木９式の埋設土器が確認されている。この他に堀切・清太郎遺跡は耕作中に大木８ａ・８ｂ式期の土器が採集され，特に堀切遺跡では石囲炉跡とほぼ完形の大木８ｂ式土器が出土している。

後期から晩期にかけては矢大臣・猪久保・小滝・長久保・長賀遺跡があるが，遺跡数が減少する傾向にある。矢大臣遺跡では綱取Ⅰ・Ⅱ式期の竪穴住居跡や配石遺構が，加曽利Ｂ式期は猪久保城跡，瘤付土器や土偶は長久保遺跡から出土している。晩期では反田Ｂ遺跡で大洞Ｃ２式期の住居跡，梅ノ木畑遺跡では埋設土器が検出され，長久保遺跡で大洞Ｂ式期の土器が出土している。

弥生時代では，万景Ｂ・小滝・本飯豊・鍛冶久保・アセミタチＡ・アセミタチＢ・沢目木遺跡，猪久保城跡・鴨ヶ館跡などで遺物が散見される。万景Ｂ遺跡では石包丁やモミ圧痕付土器片が，鴨ヶ館跡では中期(龍門寺式期から天神原式期)の土器片が発見されている。竪穴住居跡や土坑など明確な遺構はまだ確認されていない。

古墳時代の遺跡は，落合・安橋・本飯豊・万景Ｅ遺跡と大豆柄古墳群がある。このうち落合遺跡と本飯豊遺跡の発掘調査が実施されている。従来の研究成果では，阿武隈高地内の標高480m前後の丘陵地帯では高塚式古墳の分布が少なく，古墳時代の集落跡の存在は疑問視されていた。しかし，平成４年に調査された落合遺跡は古墳時代前期の大規模な集落遺跡で，今後研究指標となり得る良好な一括遺物や外来系の土師器が出土した。また，落合遺跡の北側にある本飯豊遺跡では古墳時代終末期の竪穴住居跡や畑跡，土師器・須恵器の他に石製紡錘車・鉄鏃などが出土している。付近には円墳群によって構成される大豆柄古墳群が存在し，落合遺跡との関係が考えられる。祭祀に関する遺物は，安橋遺跡で中期の石製有孔円盤や土製丸玉が出土している。

奈良・平安時代では，落合・本飯豊・糀内・作田Ｂ・柳作Ｂ・柳作Ｃ・鹿島・鍛冶久保・猪久保・北ノ内・柿人・滝・小滝遺跡など各遺跡で竪穴住居跡や掘立柱建物跡などが発見されている。この中には古墳時代から継続する落合遺跡・本飯豊遺跡，奈良時代から平安時代に継続する糀内遺跡・作田Ｂ遺跡・柳作Ａ遺跡・柳作Ｃ遺跡，また平安時代に１軒または２～３軒の少数の竪穴住居で構成される鍛冶久保遺跡・猪久保城跡・北ノ内遺跡・滝遺跡・小滝・鹿島遺跡などがある。これまでの調査例から，集落の出現時期・変遷・構成について多種多様であることが確認された。

中世おいて小野町周辺は小野保と呼ばれ，平安時代後期(11世紀後半頃)に安積郡から分出し成立したと考えられている。小野保は現在の小野町・滝根町・大越町の一部を含む地域と考えられている。記録としては建武２年に陸奥国守北畠顕家が結城親朝に宛てた陸奥国についての国宣案において，小野町に関する記述が「小野保」として初めて文献に登場する。これ以後，白川結城・石川・三春田村・相馬・岩城・伊達各氏などの攻防が繰り返され，概ね15世紀初頭まで白川結城氏，その後三春田村氏，天正17(1589)年には伊達政宗が支配するようになる。

この時期の代表的な城館跡として，磐越自動車道建設に伴って発掘調査を実施した猪久保城跡や鴨ヶ館跡がある。猪久保城跡は現存する記録・文献には記載がなく，城主や変遷については全く不

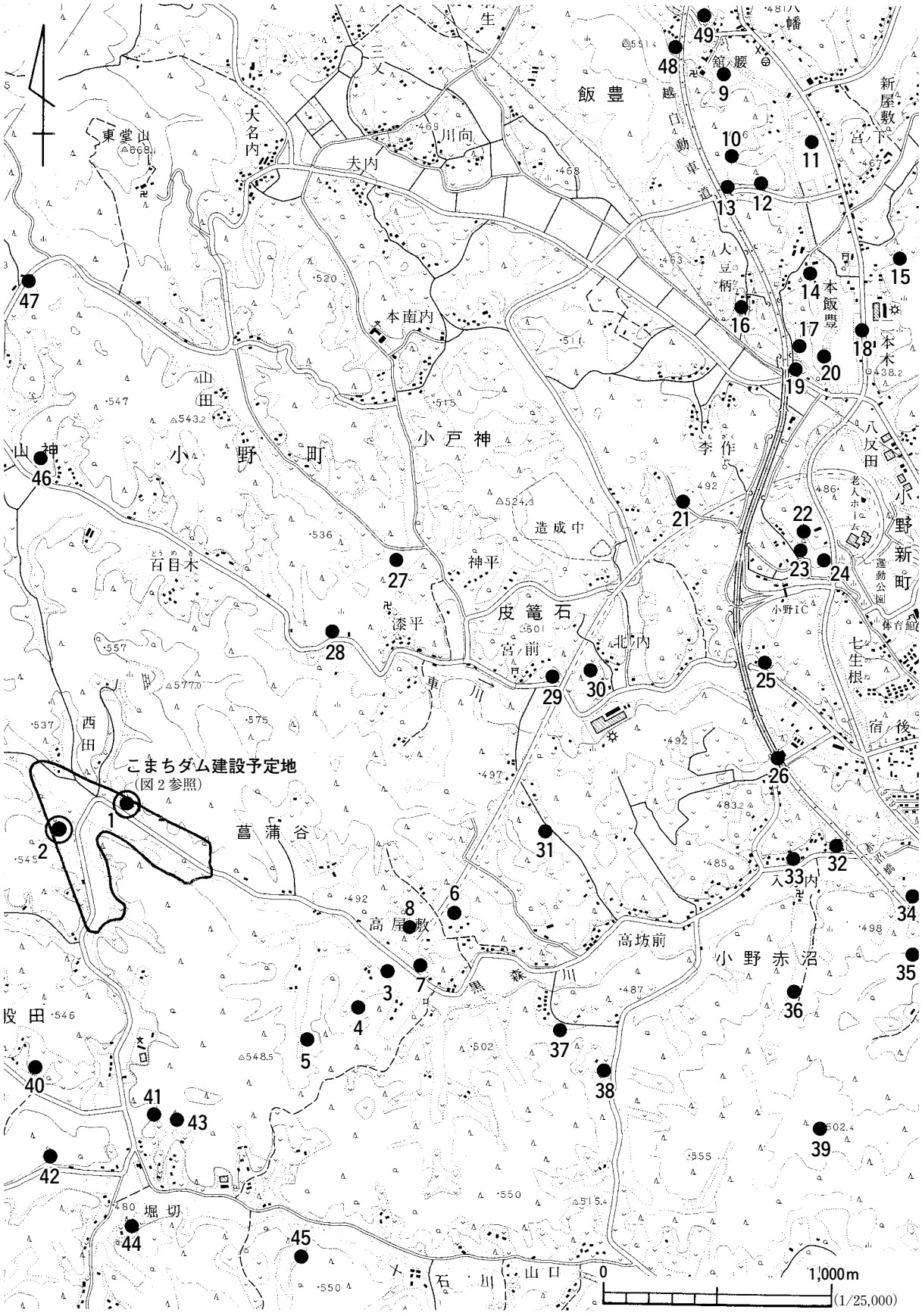


図４　周辺遺跡位置図

（国土地理院１/２.５万地形図承認番号　平16東複第259号）

表2　こまちダム周辺遺跡一覧

No.	遺　跡　名	所　　在　　地	時　　代	種　　別
1	堂田A遺跡	小野町菖蒲谷字堂田	縄文・平安	集落跡
2	西田H遺跡	小野町菖蒲谷字西田	縄文・弥生・奈良・平安	集落跡・狩猟場
3	反田遺跡	小野町菖蒲谷字反田・鹿島	縄文	散布地
4	鹿島遺跡	小野町菖蒲谷字鹿島	縄文・平安・中世	集落跡
5	反田B遺跡	小野町菖蒲谷字反田	縄文	集落跡
6	柳作A遺跡	小野町菖蒲谷字北ノ内・柳作	奈良・平安	集落跡
7	柳作B遺跡	小野町菖蒲谷字柳作	縄文・近世	集落跡
8	柳作C遺跡	小野町菖蒲谷字北ノ内・柳作	奈良・平安・近世	集落跡
9	寺ノ下遺跡	小野町飯豊字寺ノ下	縄文・奈良・平安・近世	散布地
10	前久保遺跡	小野町飯豊字河沼・寺ノ下	縄文・古墳～平安	散布地
11	柿人遺跡	小野町飯豊字柿人	古墳～平安	散布地
12	作田A遺跡	小野町飯豊字作田	奈良・平安	散布地
13	作田B遺跡	小野町飯豊字作田	奈良・平安	散布地
14	本飯豊遺跡	小野町飯豊字本飯豊	奈良・平安・近世	集落跡・墓跡
15	一盃森遺跡	小野町飯豊字一盃森	奈良・平安	散布地
16	月清水遺跡	小野町飯豊字大豆柄	奈良・平安	散布地
17	大豆柄古墳群	小野町飯豊字大豆柄	古墳	古墳
18	二本木遺跡	小野町飯豊字二本木	古墳～平安	散布地
19	落合遺跡	小野町飯豊字落合	古墳～平安	集落跡
20	蔦ノ本遺跡	小野町飯豊蔦ノ本	奈良・平安	散布地
21	李作遺跡	小野町皮籠石字李作	奈良・平安	散布地
22	馬番遺跡	小野町小野新町字馬番・七生根	奈良・平安	散布地
23	西馬番遺跡	小野町小野新町字西馬番	奈良・平安	散布地
24	七生根遺跡	小野町小野新町七生根	奈良・平安	散布地
25	糀内遺跡	小野町皮籠石字糀内	奈良・平安	集落跡
26	五百成遺跡	小野町皮籠石字五百成	奈良・平安	散布地
27	神平遺跡	小野町皮籠石字神平	縄文	散布地
28	古防遺跡	小野町皮籠石字古防	縄文・奈良・平安	散布地
29	宮ノ前遺跡	小野町皮籠石字宮ノ前	古墳～平安	散布地
30	北ノ内遺跡	小野町皮籠石字北ノ内	平安・近世	集落跡
31	四郎坊遺跡	小野町小野赤沼字四郎坊	奈良・平安	散布地
32	関根前遺跡	小野町小野赤沼字関根前	奈良・平安	散布地
33	石崎遺跡	小野町小野赤沼字西ノ内	奈良・平安	散布地
34	西作遺跡	小野町小野赤沼字西作	奈良・平安	散布地
35	猪久保城跡	小野町谷津作字和久・猪久保	縄文・弥生・奈良～中世	城館跡
36	入房内遺跡	小野町小野赤沼字坊入	古墳・奈良	散布地
37	鉢塚遺跡	小野町小野赤沼字鉢沼	縄文	散布地
38	永田原遺跡	小野町小野赤沼字二永田原	縄文・奈良・平安	散布地
39	小塩館跡	小野町谷津作字館	中世	城館跡
40	関場遺跡	小野町雁股田字関場	縄文・奈良・平安	散布地
41	関場B遺跡	小野町雁股田字関場	縄文・平安・近世	散布地
42	仁井殿遺跡	小野町雁股田字仁井殿	縄文	集落跡
43	黒森館跡	小野町雁股田字堀切	中世	城館跡
44	堀切遺跡	小野町雁股田字千保	縄文	散布地
45	神山B遺跡	小野町雁股田字新切	縄文	散布地
46	西牧館跡	小野町小野山神字八升蒔	中世	城館跡
47	畑田遺跡	小野町小野山神字畑田	縄文	散布地
48	切掛遺跡	小野町飯豊切掛	奈良・平安	散布地
49	鴨ヶ館跡	小野町飯豊字舘ノ腰	縄文・弥生・平安・中世	城館跡・集落跡

明であった。調査の結果，平場16ヵ所，主殿・蔵を含む掘立柱建物跡８棟の他に門跡・柵列・土橋跡・堀跡などの多くの遺構が検出された。調査報告書では15世紀前半に自焼の後に破却されたと推定している。鴨ヶ館跡は郡山と三春方面への分岐点に位置し，掘立柱建物跡や竪穴状方形土坑・堀跡・通路跡・門跡を伴う虎口などが検出され，15世紀後半から16世紀前半まで機能していたと考えられている。豊臣秀吉による奥州仕置き以後，田村郡は蒲生氏郷に宛われ会津領となり，慶長３年(1598)には上杉景勝の支配地となる。

関ヶ原の戦い以後には，再び蒲生秀行・忠郷，さらに寛永４年(1627)に丹羽長重の白河藩領となる。18世紀中頃には，天領や越後高田榊原藩・笠間藩などに分割支配されるが，寛政年間に入り笠間藩分領などとして統治された後に幕末を迎える。この時代の関連遺構として鍛冶久保遺跡では17世紀前半から19世紀前半の屋敷跡や墓坑・陶器窯跡などが検出された。このほかに，本飯豊遺跡では墓坑が，柳作Ｃ遺跡では建物跡・土坑・溝跡・畑跡が調査されている。　（高橋）

引用・参考文献

小野町　1987『小野町史　資料編Ⅰ(上)』

小野町　1992『小野町史　通史編』

福島県農林水産部農地計画課　1996『土地分類基本調査：小野新町』

小野町教育委員会　1998『こまちダム関連遺跡群分布調査報告書』

福島県教育委員会　2000『福島県内遺跡分布調査報告６』

福島県教育委員会　2001『福島県内遺跡分布調査報告７』

福島県教育委員会　2002『福島県内遺跡分布調査報告８』

福島県教育委員会　2003『福島県内遺跡分布調査報告９』

福島県企画調整部情報統計領域　2003『平成15年度版福島県県勢要覧』

第1編　堂田（どうでん）Ａ遺跡

遺跡記号　ＯＮ－ＤＤ・Ａ
所在地　小野町大字菖蒲谷字堂田
時代・種類　縄文・平安時代　集落跡
調査期間　平成15年５月13日～11月18日
調査員　吉野滋夫・横須賀倫達

第１章　遺跡の概要

第１節　位置と地形（図１）

堂田Ａ遺跡は小野町西部の菖蒲谷地区にあり，磐越東線小野新町駅から西へ直線距離で約4.5㎞離れた位置にある。菖蒲谷地区は夏井川水系の黒森川の中流域にあたる。黒森川の浸食によって発達した谷底平野を中心とし，両岸には山地性丘陵が東へ延びる。遺跡は黒森川北岸に位置する丘陵に所在し，谷底平野を望む南斜面に位置する。

遺跡は，標高500ｍを越える山地の南裾部の谷間に位置し，現況は杉の植林地であった。遺跡範囲は西側が造成によって掘削が及んでいる部分で，東側は民家と接しているため明確ではない。

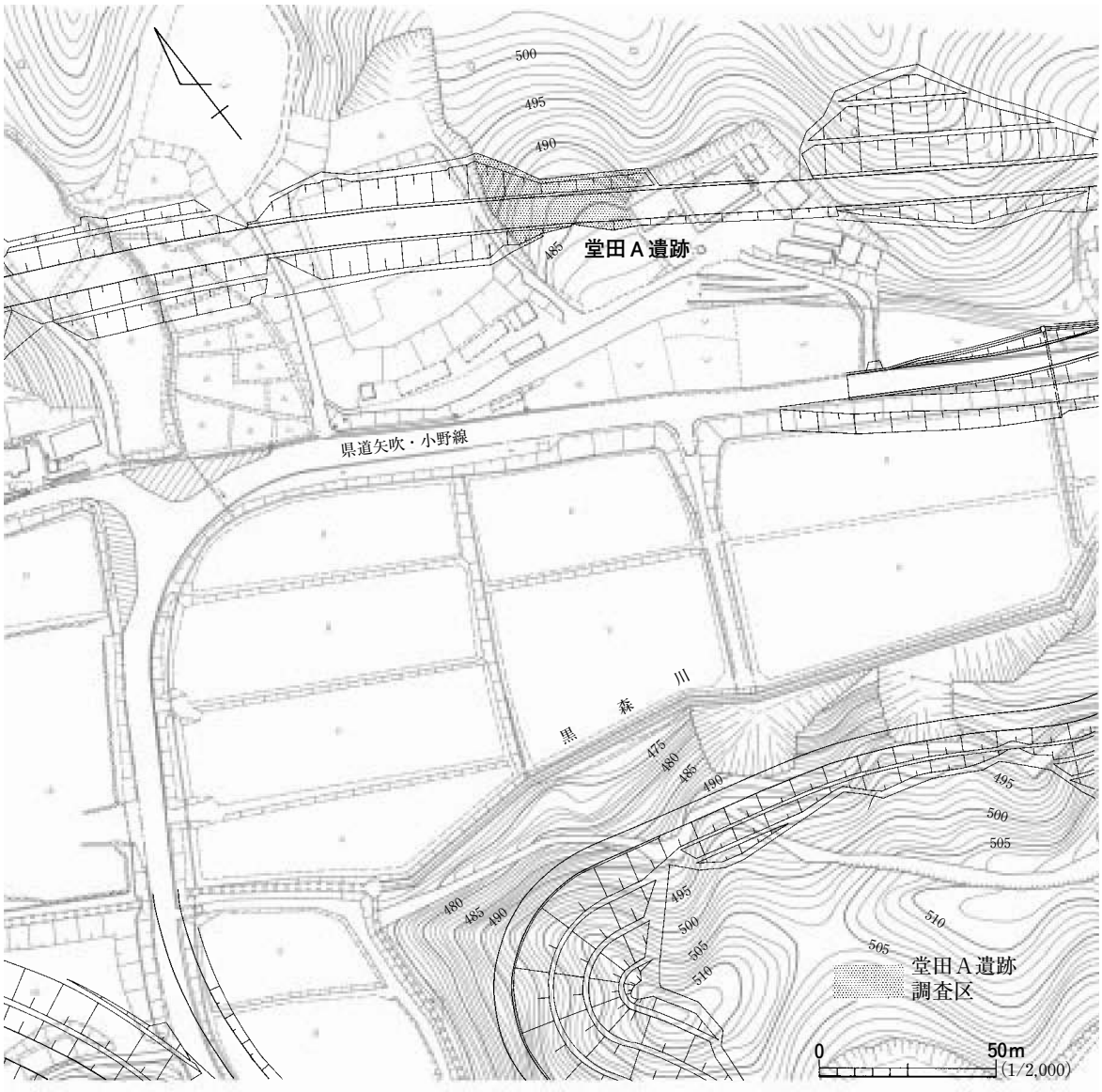


図１　調査範囲と工事計画図

北側は試掘調査によって標高493m付近まで発掘調査を必要な範囲として確定されている。南側は分布調査によって落差３ｍ程の崖線を境界としている。

調査区の標高は484～493ｍで，比高差約９ｍとなる。標高487m以下では緩傾斜であるが，それ以上となると急傾斜となる。調査区は遺跡の西際から谷底を含んだ範囲であり，西部は谷底へ向かう東向き斜面で，東部は平野部へと向かう，南向きの緩斜面となっている。

遺跡付近の気候は夏の炎天下では風が通らず蒸し暑いが，冬場の強風時には，谷間であるため風が当たらず過ごし易い。

近隣に所在する遺跡は，周知の遺跡で縄文土器の散布地として『福島県遺跡地図』に登録されていた堂田遺跡や分布調査によって発見された西田Ｃ遺跡や西田Ｇ遺跡などがあるが，いずれも造成によって消滅してしまったらしい。南西200ｍには第２編に収録の西田Ｈ遺跡がある。

第２節　調査の経過と方法

調査経過　発掘調査は，平成15年５月13日にバックホー１台を搬入して，今回調査区の800㎡の表土剥ぎを行うことから開始した。表土剥ぎは19日にはⅢ層までの廃土を県道際に仮置して終了した。26日には基準杭移動と測量杭打設を行い，27日には，調査員１名と反田Ｃ遺跡から作業員６名を移動させて現地作業に着手した。まず，器材搬入・調査区の縄張り・看板の設置などを行った後，遺構検出作業を開始し，平安時代の竪穴住居跡４軒を検出した。６月に入って各住居跡の調査を順次行い，併行してⅢ層の掘り下げも行った。７月下旬からは作業員を増員して調査を進めた。８月中旬からの天候不良により，調査の進捗も停滞気味となったため，住居跡の調査は８月末までかかった。９月に入ると，縄文時代の遺物包含層であるⅢ・Ⅳ層の掘り下げに作業員を増員し調査を進め，その結果，遺物包含層からは縄文時代早期中葉・後葉・末葉や前期初頭の土器や石器類などが出土した。遺物包含層は約１ｍの深さがあって，Ⅴ層までの掘り下げが難航したため，包含層の掘り込みは９月中旬までかかった。

本遺跡は文化層が２面あるためⅤ層上面で遺構検出を行った。その結果縄文時代早期の竪穴住居跡・土坑・焼土遺構・小穴などが検出された。特に，住居跡は検出当初10軒であったが，調査の進捗に従い，最終的に15軒を数えるに至った。10月下旬にはラジコンヘリによって空中写真撮影を実施し，11月初旬には遺構の調査を終えて，器材を撤収し11月18日には堂田Ａ遺跡の調査を終了した。12月17日に反田Ｃ遺跡・西田Ｈ遺跡と共に現地を県中建設事務所に引渡した。また，１月７日には自然科学分析のための土壌採取を実施している。

調査方法　国土座標Ⅸ系Ｘ＝142,220，Ｙ＝66,720を基点として，遺構の測量のため遺跡に５ｍ方眼を巡らせた。西から東へはＡ・Ｂ・Ｃ…Ｊとし，北から南へは１・２・３…10と称した。それらを組み合わせて各グリッドを表記した。

遺構の記録は，縮尺20分の１で断面図と平面図を作図した。地形図は縮尺200分の１で作図し，一

部のものについては業務委託したものもある。写真は35㎜判のモノクローム・カラーリバーサルフイルムで撮影した。調査区全景写真は，業務委託によりラジコンヘリによる空中写真撮影を実施した。

調査記録・出土資料などは，当事業団が定めた整理基準に沿って整理を行い，それぞれの台帳を作成した後に福島県教育委員会で収蔵・保管する予定である。

第３節　遺構の分布と基本土層

遺構の分布（図２・３，図版１～５）　堂田Ａ遺跡から検出された遺構は竪穴住居跡・土坑・焼土遺構などである。出土遺物は縄文土器5,574点・土師器2,438点・須恵器40点・石器112点・剥片2,285点などで，遺物の年代は平安時代と縄文時代早期・前期であり，常世１式期資料を最古とする。そのなかで主体を占めるのは，縄文時代早期末葉の土器と剥片である。以下，時代毎に遺構の分布を

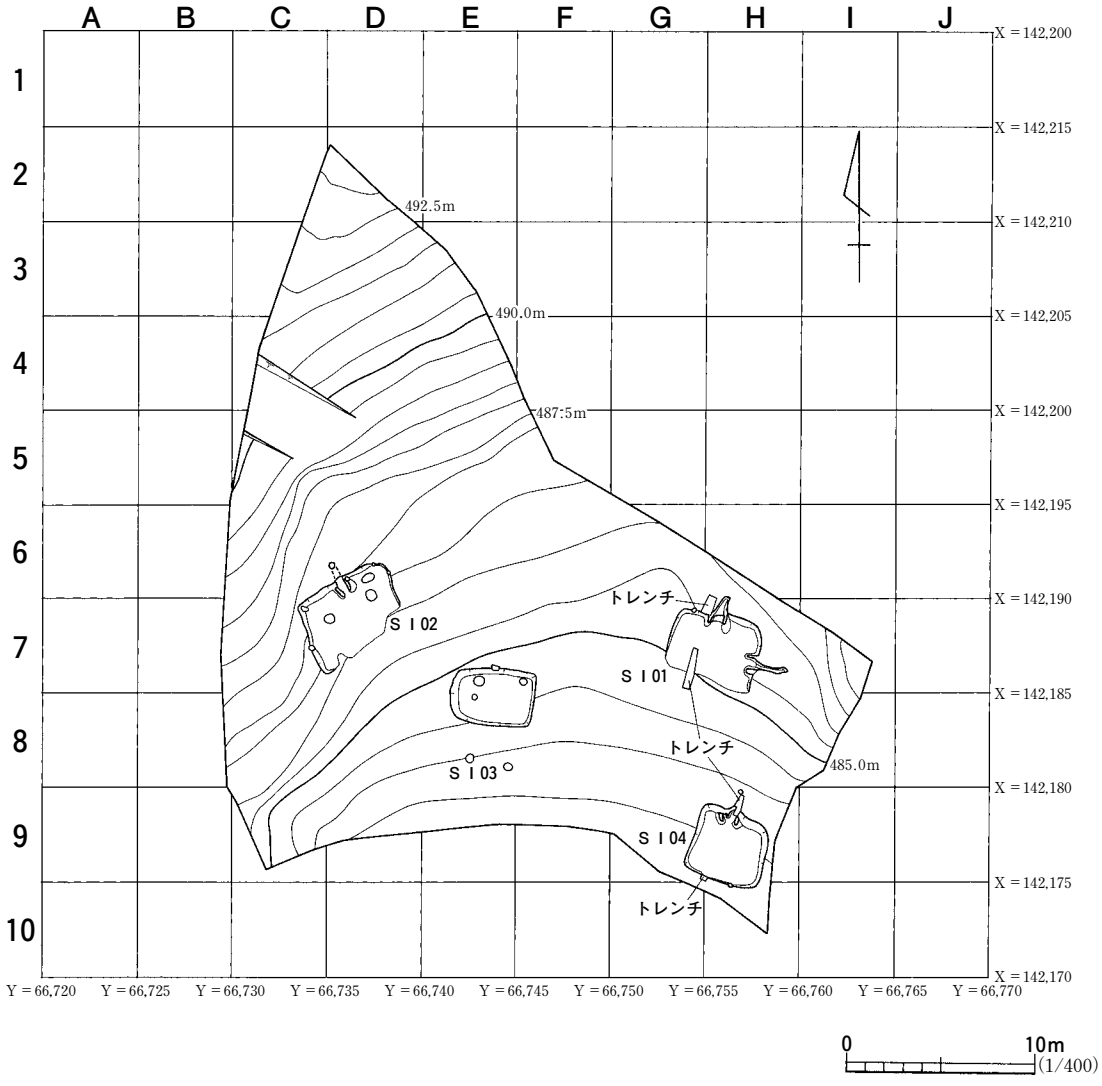


図２　遺構配置図（平安時代）

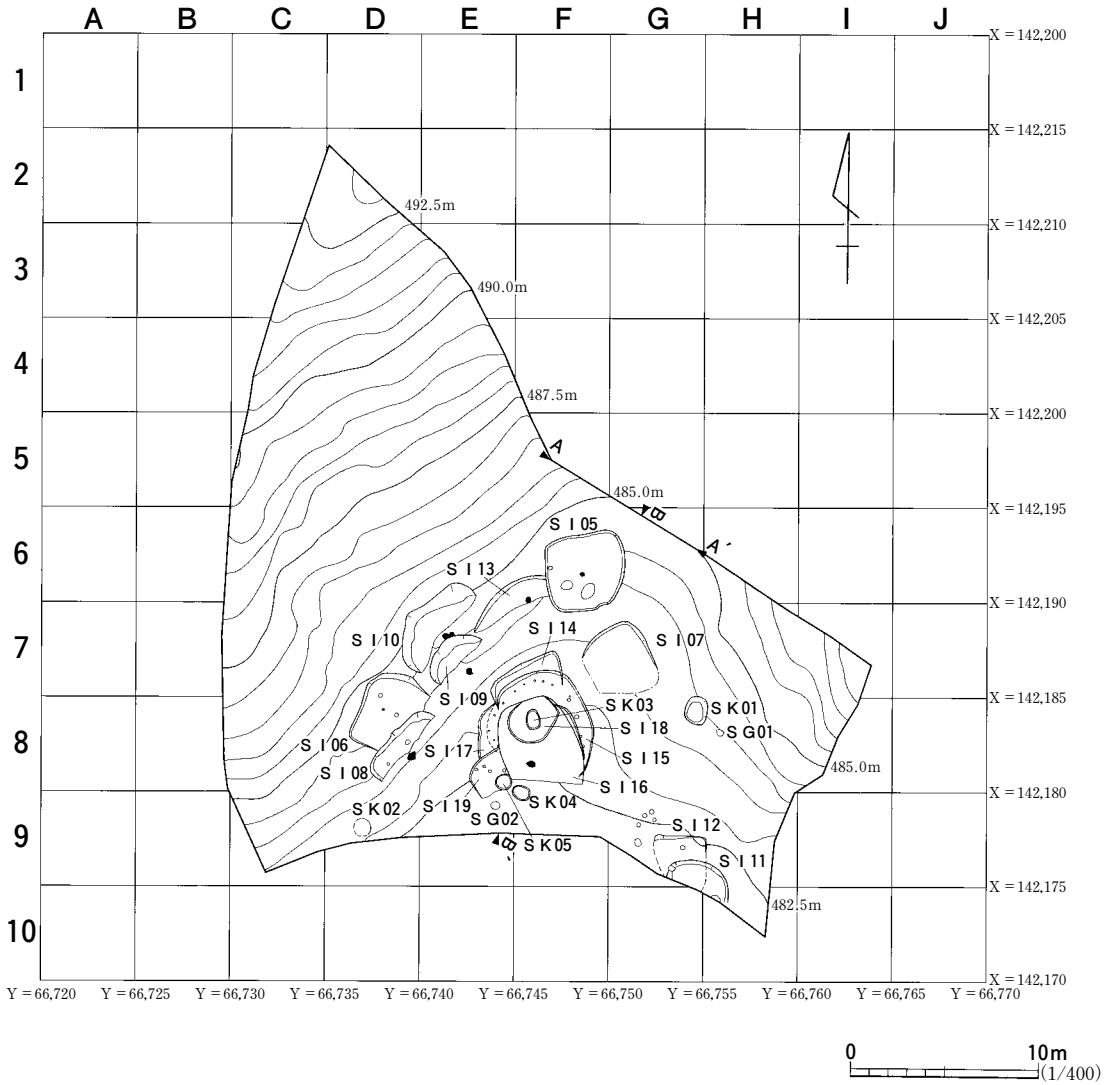


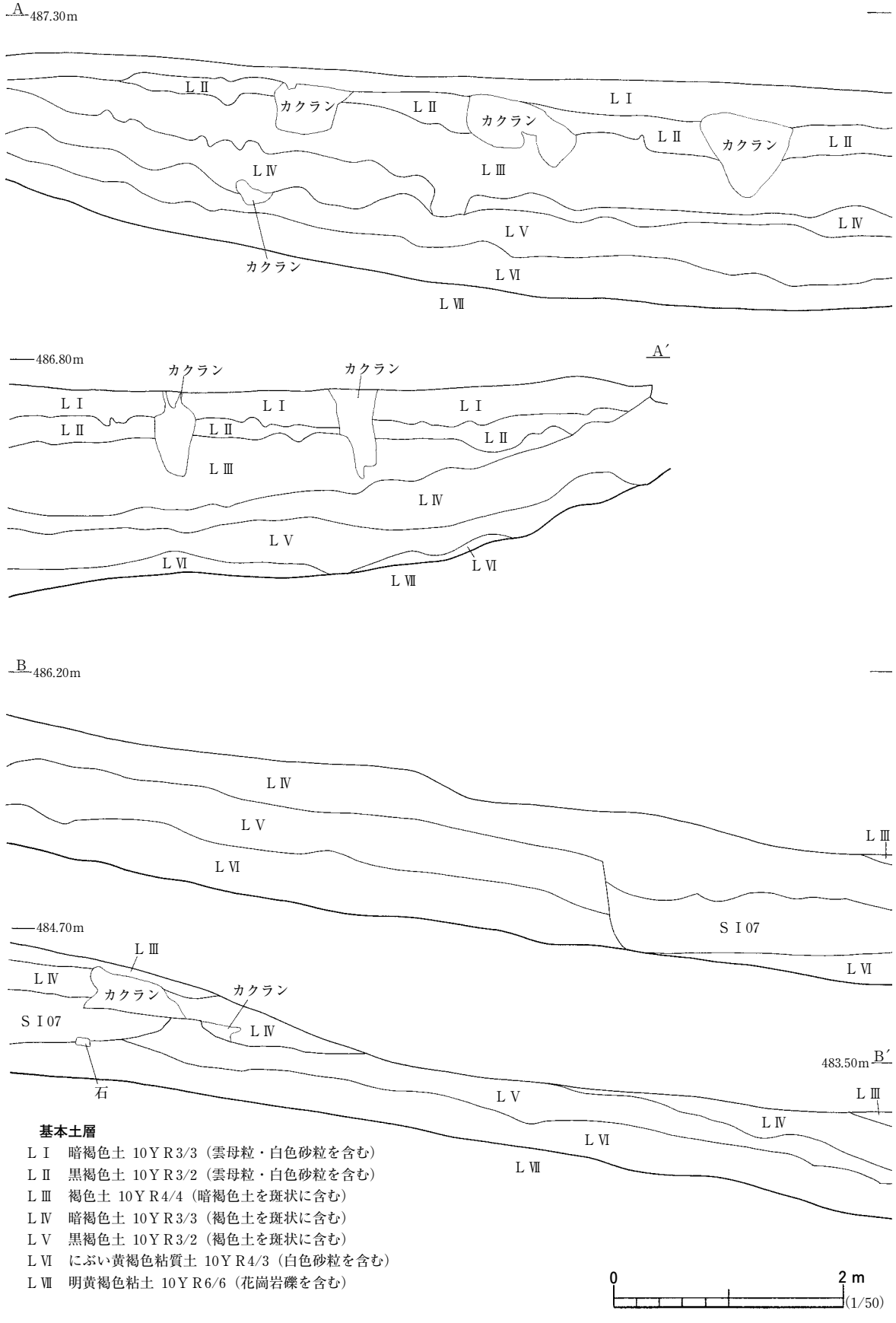
図３　遺構配置図(縄文時代)

述べてゆく。

平安時代の遺構は竪穴住居跡が４棟である。いずれの住居跡も重複せず，適度な間隔をとって分布している。東向き急斜面に位置する２号住居跡以外の１・３・４号住居跡は南向き緩傾斜に位置している。各住居跡から出土している遺物からは，時期差が認められないので同時期である可能性を考えている。

縄文時代の遺構は，竪穴住居跡が15軒，土坑が５基，焼土遺構３箇所である。この他に遺物包含層が形成されていた。住居跡のほとんどが重複し，南向き緩傾斜である谷底に密集していた。縄文時代早期中葉から末葉にかけて居住地として利用されていた。

基本土層(図４，図版６)　調査区の地形は谷となっているため，谷底では表土から基盤層までの深さが３ｍほどとなっている。堆積土は適潤性褐色森林土壌で，角閃石黒雲母花崗閃緑岩を母材とするものである。調査区は北側が急傾斜の斜面で南側は緩傾斜となる尾根先端部であるため，堆積土は南から北へと層厚が増していく。調査区の基本土層を土色の違いから，Ⅰ層～Ⅶ層まで区分し



基本土層

ＬⅠ　暗褐色土 10ＹＲ3/3（雲母粒・白色砂粒を含む）
ＬⅡ　黒褐色土 10ＹＲ3/2（雲母粒・白色砂粒を含む）
ＬⅢ　褐色土 10ＹＲ4/4（暗褐色土を斑状に含む）
ＬⅣ　暗褐色土 10ＹＲ3/3（褐色土を斑状に含む）
ＬⅤ　黒褐色土 10ＹＲ3/2（褐色土を斑状に含む）
ＬⅥ　にぶい黄褐色粘質土 10ＹＲ4/3（白色砂粒を含む）
ＬⅦ　明黄褐色粘土 10ＹＲ6/6（花崗岩礫を含む）

図４　基本土層図

た。なお，図４ＢＢ´はⅢ層をほぼ掘り下げた後に設定したため，Ⅲ層以上が欠落している。

Ⅰ層は表土で土色は暗褐色である。層厚は10～30㎝で，調査区内全域に堆積する。

Ⅱ層の土色は黒褐色で，層厚は10～30㎝である。木の根により層理面はかなり乱れている。層中には土師器・縄文土器が含まれていた。谷底以外の斜面では欠落している。なおテフラ分析の結果，Ⅱ層の下部には沼沢１テフラ(Ｎｍ－１)・榛名二ツ岳渋川テフラ(Ｈｒ－ＦＡ)・榛名二ツ岳伊香保テフラ(Ｈｒ－ＦＰ)が含まれている可能性が指摘されている。よって，この層は６世紀中葉以降に形成されたらしい。平安時代と縄文時代の遺物包含層である。

Ⅲ層の土色は褐色である。層厚は10～70㎝である。この層の上面で，平安時代の遺構を検出している。縄文時代の遺物包含層である。Ⅱ層と同様に斜面では欠落している。

Ⅳ層の土色は暗褐色で，層厚は10～40㎝である。縄文時代の遺物包含層である。調査区全域に堆積する。

Ⅴ層の土色は黒褐色で，層厚は10～50㎝である。縄文時代の遺構はこの層の上面から検出した。縄文時代の遺物包含層である。Ⅳ層と同様に，調査区内全域に堆積する。

Ⅵ層の土色はにぶい黄橙色で層厚は15～40㎝，遺物を包含しない層である。基盤層との漸移層である。縄文時代の遺構をこの層の上面で検出したものもある。

Ⅶ層の土色は明黄褐色で，細かく砕けた花崗岩礫が含まれていた。調査区内の基盤層である。

古環境の復原のため，Ⅲ・Ⅳ層の花粉分析を実施したが，いずれの層からもほとんど花粉を検出することはできなかった。（吉野）

第２章　平安時代の遺構と遺物

第１節　竪穴住居跡

平安時代の遺構は竪穴住居跡が４軒検出された。いずれの住居跡も重複せず，適度な間隔をおいて立地している。東向き急斜面に位置する２号住居跡以外，１・３・４号住居跡は南向き緩傾斜に位置している。３号住居跡にはカマドが付設されていないが，１号住居跡にはカマドが２基付設されている。

１号住居跡　ＳＩ01（図５～８，図版７～９・31・53・54）

遺　　構　１号住居跡はＧ７・Ｈ７グリッドのⅢ層上面で検出したが，すでに試掘調査によって検出されていた。谷底の南向き緩斜面に位置し，付近の標高は486ｍである。本住居跡の斜面下方となる南側約６ｍには４号住居跡が位置する。

平面形は斜面下方側の南壁が欠損しているが，遺存する形状から推定すると隅丸方形と思われる。壁は外傾気味に立ち上がる。規模は北壁が4.1m，西壁が現状で2.7m，東壁が現状で3.6ｍである。壁高は0.3ｍである。長軸方向は真北に対し西に75°傾いている。

堆積土は１～７層に区分した。そのなかで４～７層までが貼床土である。堆積土の大半は２層暗褐色土である。壁際にみられる３層黒褐色土はⅡ層に対応するもので，住居の掘り上げ土を周堤としたものが，再度流入したものとみられる。このことから本住居跡はⅡ層から掘り込まれていたものと考えられる。

カマドは北壁と東壁に１基づつ合計２基あり，いずれのカマドも袖部が遺存していた。カマドの造り替えの状態と異なることから，同時期に機能していたと考えている。

以下の記述は，北壁のカマドを北カマドとし同様に東壁のものを東カマドとする。なお，図５ＢＢ′では住居跡堆積土と北カマド堆積土を併せて掲載しているため，区別するために北カマド堆積土には層位番号の前にカを付した。

北カマドは北壁のほぼ中央にある。燃焼部の最大幅は40㎝で，煙道の長さは燃焼部の段差から煙出部まで約115㎝である。堆積土は18層までを区分した。そのうち，カ15・16層は袖部の構築土で板状の花崗岩を心材としていた。煙出部には花崗岩の角礫が堆積土中に含まれていた。カ13・14層はカマド使用時に溜まった焼土・灰などである。

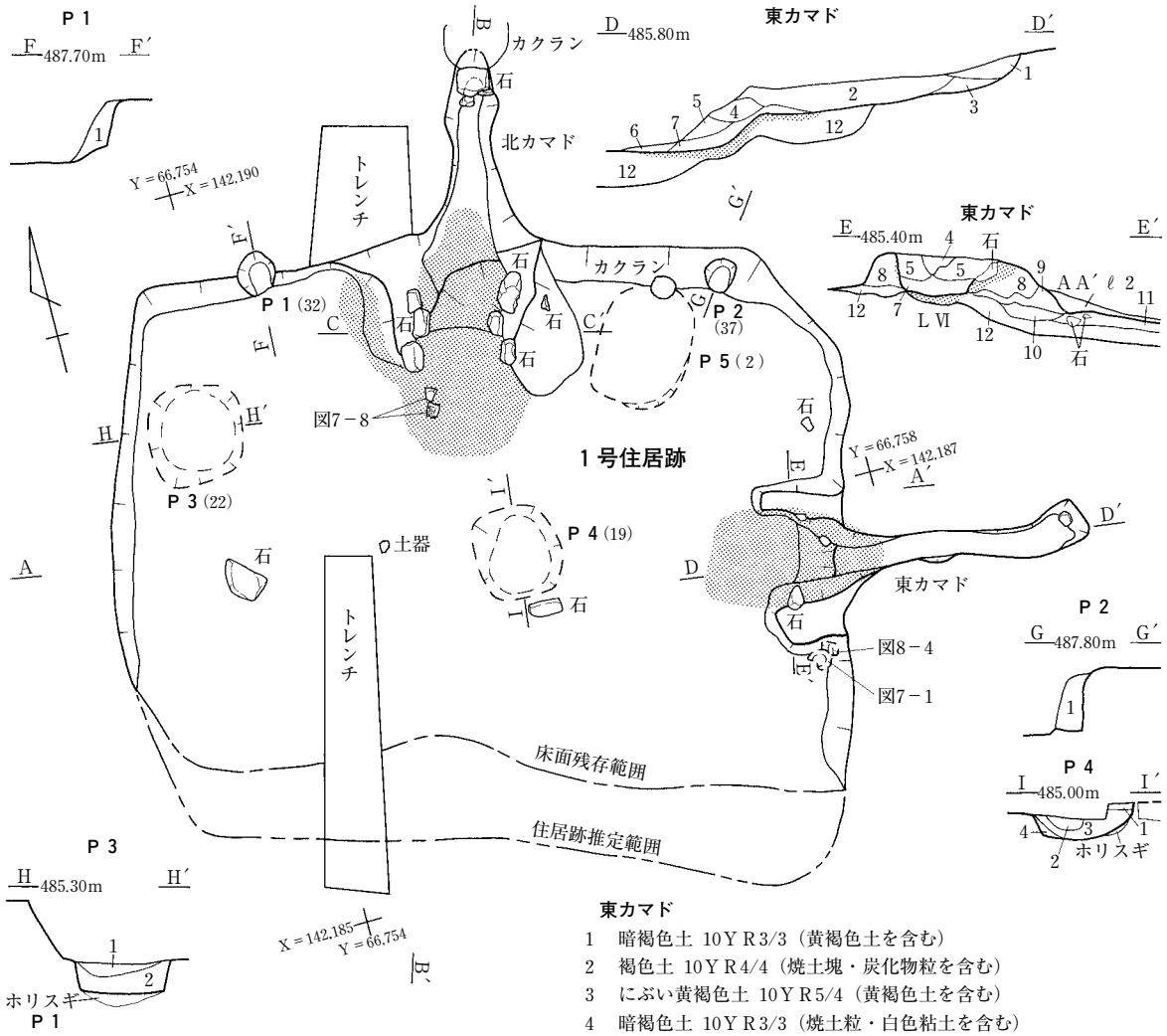
東カマドは南東隅が欠損しているため，壁のどの辺りにあったのかは明確ではない。燃焼部の最大幅は40㎝で，煙道の長さは燃焼部の段差から煙出部まで145㎝である。堆積土は12層までを区分した。そのなかで，８・９層は袖部の構築土である。右袖部の基底面には，15㎝の厚さに10～12層が貼られていた。この入念な貼土と左袖部との差は著しい。東カマドの袖にも花崗岩の礫が含まれて

いたが，北カマドと異なりその数も少なく小さい。

小穴は壁から２基，掘形から３基検出した。Ｐ１・２はいずれも北壁にあり，規模は径18～22cmである。Ｐ３・４は長軸が50～54cm，短軸が44～50cmである。Ｐ５の規模は明確でない。

遺　　物　１号住居跡からは土師器468点，須恵器17点，土製品１点，縄文土器41点，石器３点，剥片７点が出土した。このうち主なものを図７・８に示した。

図７－１～５・７は杯である。底部下端から底面にかけて回転ヘラケズリ調整がなされている。１は図８－４の甕とともに東カマド基底面の堆積土から，底部を下にして出土した。底部外面には



Ｐ１
1　暗褐色土　10ＹＲ3/3

Ｐ２
1　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（黄褐色土を含む）

Ｐ３
1　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（灰白色粘土・黄褐色粘土を含む）
2　黒褐色土　10ＹＲ3/2（白色砂粒を含む）

Ｐ４
1　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（灰白色粘土・黄褐色粘土を含む）
2　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（灰白色粘土を含む）
3　黒褐色土　10ＹＲ3/2（パミスを極少量含む）
4　暗褐色土　10ＹＲ3/4（礫を含む）

東カマド
1　暗褐色土　10ＹＲ3/3（黄褐色土を含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/4（焼土塊・炭化物粒を含む）
3　にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/4（黄褐色土を含む）
4　暗褐色土　10ＹＲ3/3（焼土粒・白色粘土を含む）
5　赤褐色土　５ＹＲ4/6（焼土塊を多量含む）
6　にぶい黄褐色土　10ＹＲ3/4（白色粘土粒・炭化物粒を含む）
7　明褐色土　7.5ＹＲ5/6（焼土塊・炭化物粒を含む）
8　黄褐色粘土　2.5Ｙ5/4（暗褐色土粒・焼土粒を含む）
9　暗褐色土　10ＹＲ3/3（炭化物粒・焼土粒を少量含む）
10　黄褐色粘土　2.5Ｙ5/3（焼土塊を含む）
11　暗褐色土　7.5ＹＲ3/4（焼土塊・炭化物粒・黄褐色粘土粒を含む）
12　暗褐色土　10ＹＲ3/4（炭化物粒・焼土粒・白色砂粒を含む）

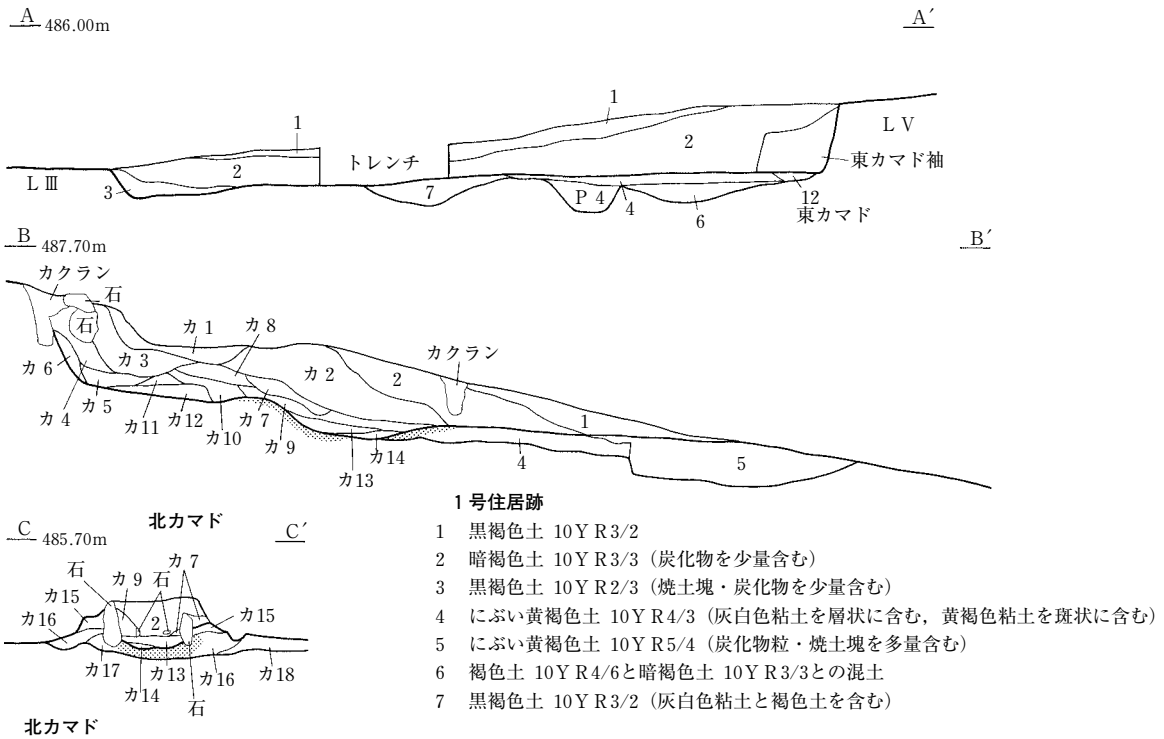
0　2ｍ
(1/50)

図５　１号住居跡（１）

焼成後による「集」の刻書が観察される。外面の体部下端から底部にかけて摩滅が著しい。これは使用による摩滅であろう。底部内面には放射状のミガキがなされている。３は底部外面に「王」とみられる墨書が認められる。墨書土器は他にも５・７があり，５の体部下端の外面に「鬼」が，７には底部外面の文字の部分が一部欠損しているので，文字の詳細は分からない。３は１と同様に，外面の体部下端から底部にかけて摩滅していた。２・４・５については，外面は摩滅していないが，口縁部と体部下端の内面が摩滅していた。特に２の体部内面の摩滅が著しい。

図７－６は同図10よりもさらに小さな小型甕の底部と推定している。底部は回転糸切によってロクロから切り離されている。図７－10・図８－３が小型甕，図７－８・図８－２が鉢，図７－９・11～13，図８－１・４が甕である。このうちロクロ整形によるものは，図７－８～10，図８－１・４・６などである。図８－１については，『福島県内遺跡分布調査報告７』所収の図23－10，２号トレンチ出土土器と接合している。

図７－８は４号住居跡から出土した破片と接合した。特に１・４号住居跡ともにカマド袖基底面



１号住居跡

1　黒褐色土 10Ｙ Ｒ3/2
2　暗褐色土 10Ｙ Ｒ3/3（炭化物を少量含む）
3　黒褐色土 10Ｙ Ｒ2/3（焼土塊・炭化物を少量含む）
4　にぶい黄褐色土 10Ｙ Ｒ4/3（灰白色粘土を層状に含む，黄褐色粘土を斑状に含む）
5　にぶい黄褐色土 10Ｙ Ｒ5/4（炭化物粒・焼土塊を多量含む）
6　褐色土 10Ｙ Ｒ4/6と暗褐色土 10Ｙ Ｒ3/3との混土
7　黒褐色土 10Ｙ Ｒ3/2（灰白色粘土と褐色土を含む）

北カマド

カ１　暗褐色土 10Ｙ Ｒ3/2（焼土粒を少量含む）
カ２　黒褐色土 10Ｙ Ｒ2/3（白色砂粒を含む）
カ３　黒褐色土 10Ｙ Ｒ2/3（白色砂粒を少量含む）
カ４　黒褐色土 10Ｙ Ｒ3/2（白色砂粒を含む）
カ５　灰黄褐色土 10Ｙ Ｒ4/2（炭化物粒・焼土粒・白色砂粒を含む）
カ６　にぶい黄褐色土 10Ｙ Ｒ5/3（焼土粒・白色砂粒を含む）
カ７　にぶい黄褐色土 10Ｙ Ｒ4/3（白色粘土塊・焼土粒を含む）
カ８　褐色土 10Ｙ Ｒ4/4（焼土塊を含む）
カ９　黒褐色土 10Ｙ Ｒ2/3（焼土粒・炭化物粒・白色粘土塊を含む）
カ10　にぶい赤褐色土 5 Ｙ Ｒ4/4（焼土塊を多量含む）
カ11　褐色土 10Ｙ Ｒ4/4（焼土粒を極少量含む）
カ12　暗褐色土 10Ｙ Ｒ3/3（焼土粒・白色粘土粒を含む）
カ13　褐色土 7.5Ｙ Ｒ4/6（焼土塊を多量含む）
カ14　黒色土 10Ｙ Ｒ2/1（炭化物を多量含む）
カ15　暗褐色土 10Ｙ Ｒ3/3（白色粘土塊・黄褐色砂質土塊・焼土粒を多量含む）
カ16　明褐色土 7.5Ｙ Ｒ5/6（焼土塊・白色粘土塊を多量含む）
カ17　オリーブ褐色土 2.5Ｙ4/3（白色粘土塊・黄褐色砂質土塊・雲母を多量含む）
カ18　暗褐色土 7.5Ｙ Ｒ3/4（白色粘土粒・焼土粒・炭化物粒を多量含む）

図６　１号住居跡（２）

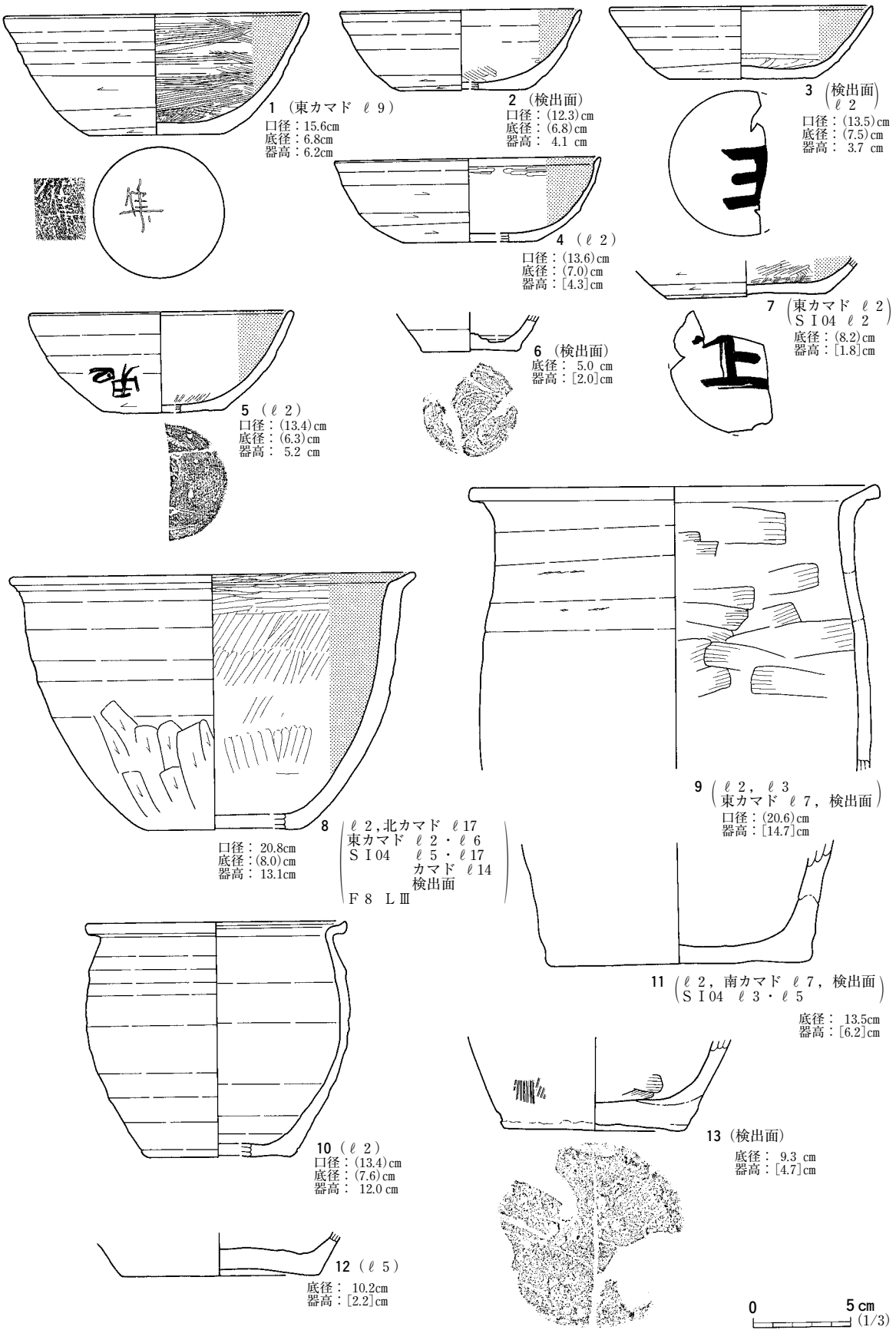


図７　１号住居跡出土遺物（１）

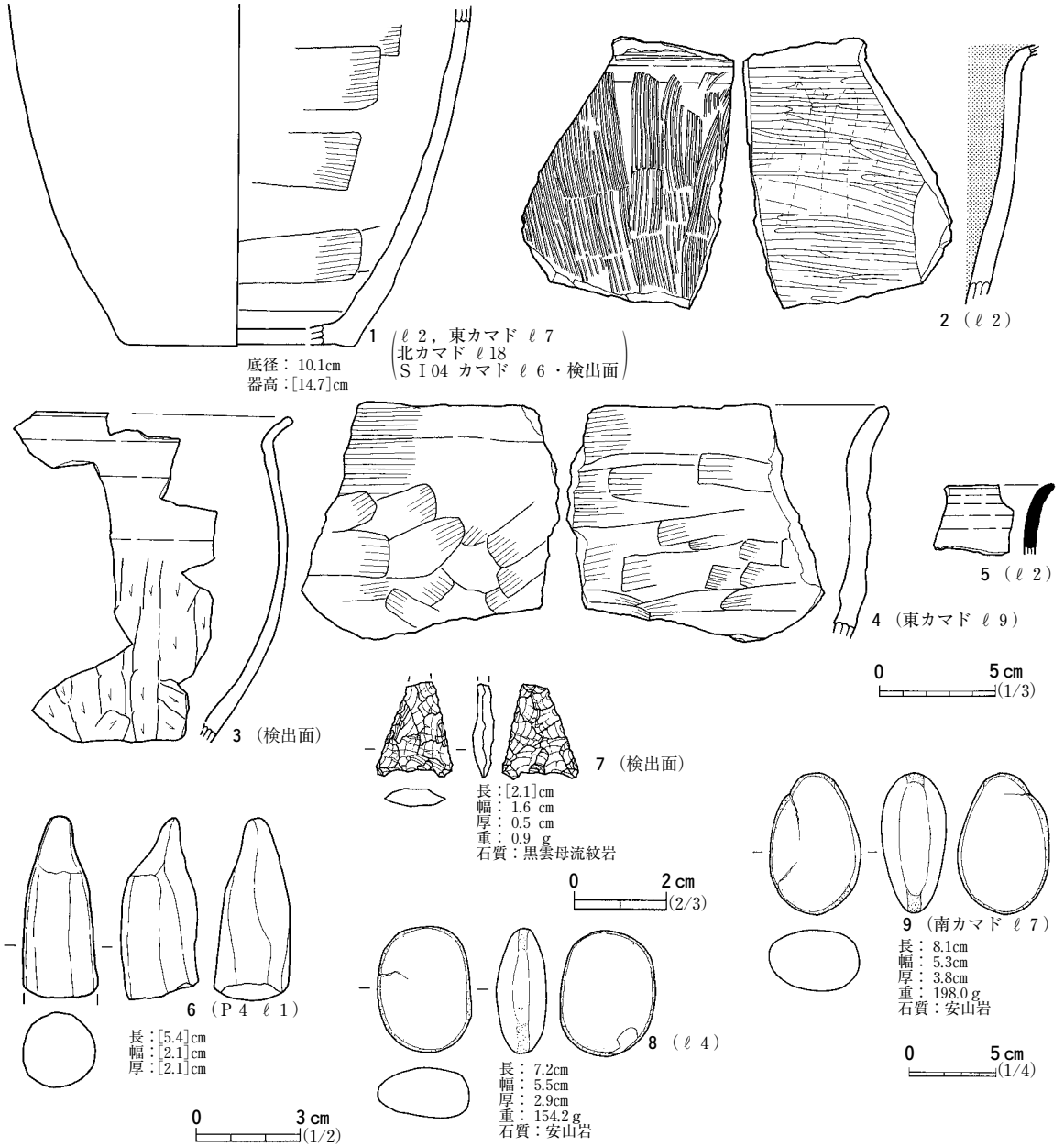


図８　１号住居跡出土遺物（２）

の堆積土から出土したものが接合しているので，２軒の住居が造られる時にはすでに破片の状態で堆積土に含まれていたのだろう。同様な例は図７－７・図８－１などがある。

図８－２は鉢の破片で，外面のハケメ調整はロクロナデがなされた後，器面がある程度乾燥した段階でなされている。内面は縦方向のナデがなされた後，ミガキがなされている。胎土は杯と同じようにあまり砂粒が含まれていない。図８－５は須恵器で長頸瓶の口縁部である。図８－６は土製品であるが，用途がよく分からない。手捏によって成形がなされ，先端が尖っている。

図８－７は先端部が欠損した石鏃で凹基無茎式，図８－８・９は磨石である。これらのものは，流入によるものであろう。

ま　と　め　本住居跡には明確な柱穴がないことから，壁で上屋を支えていたことが想定できる

が根拠となるような，調査所見は得られていない。本住居跡にはカマドが２基あるが，いずれも袖が残っていたので，同時に機能していたことを考えている。時期は，東カマド袖基底面から出土した杯の検討により９世紀前葉と考えられる。

２号住居跡　ＳＩ02（図９～12，図版10・11・31～33・53・54）

遺　　構　２号住居跡はＣ６・Ｄ６・Ｃ７・Ｄ７グリッドⅣ・Ⅴ層上面で検出した。ここは東向き斜面の下方，標高486～487ｍの地点である。住居跡の西側は急傾斜で，北側から東側にかけては緩斜面となっている。本住居跡の南東側約５ｍ降った地点には３号住居跡がある。平面形は南壁が欠損しているが，周壁から復元してみると隅丸長方形となる。周壁は西壁からカマドにかけては外傾気味に立ち上がり，北東隅はやや直立気味に立ち上がる。規模は北壁が4.7ｍ，西壁が3.85ｍ，東壁が現状で1.25ｍ，最大壁高は0.77ｍである。長軸方向は真北方向に対して70°東に傾く。堆積土は12層に区分した。そのうち１～８層までが住居内堆積土で，９～12層までが貼床土である。各層理面は斜面の傾斜に沿っている。貼床土は粘土・炭化物・砂を含み，深さ５～25㎝でなされていた。

カマドは北壁やや東側寄りにある。燃焼部の幅は55㎝で，袖の先端から煙道煙出部までの長さは1.95ｍである。堆積土は18層に区分し図９ＢＢ´に示したが，住居内堆積土と区別するためにカマド堆積土には「カ」を付した。そのなかで，カ10～12・15～17層は燃焼部に貼土されたものである。袖は花崗岩礫を心材としてカ12～14層などで構築されていた。カマドの前面には長方形の花崗岩礫があった。下の面をみると，火を受けたように赤くなっていることと長さ75㎝で袖の上に架けるのに十分な大きさであることから，燃焼部の天井として利用されていたものであろう。

煙道は天井が遺存し，煙出部には土師器甕が口縁部を下にして据えられていた。これは煙出部の補強のためであろう。煙道の横断面は上部が潰れたような形でなので，土圧によるものであろう。高さは撹乱によって明確ではないが37㎝程で，幅は22㎝である。

小穴は床面からＰ１・２・８を検出した。Ｐ１・２は規模・位置関係・柱痕などから柱穴と考えている。長軸50～60㎝で，Ｐ２から径25㎝の柱痕を確認している。柱穴と貼床土との関係は図10ＥＥ´に示すとおりに，貼床土を施した後に柱穴を掘り込んでいる。

Ｐ８はカマド脇に位置することから貯蔵穴と考えている。Ｐ８には２層暗褐色土を貼って底面としていた。

壁面からはＰ３～７・９を検出した。いずれも壁柱穴である。平面形はＰ３・４・９が不整長方形で，Ｐ５～７は円形である。このようにカマドを挟んで東側と西側では平面形が異なっている。掘形からＰ10～13を検出した。Ｐ13からは口縁部を上にして図11－４の土師器杯が出土した。Ｐ13の形状は土器が入る大きさで掘り込まれているので，土器を埋納した小穴であろう。

遺　　物　土師器1,173点，須恵器５点，土製品３点，縄文土器９点，石器１点，鉄滓１点である。そのうち土師器・須恵器・土製品・石器を図11・12に示した。

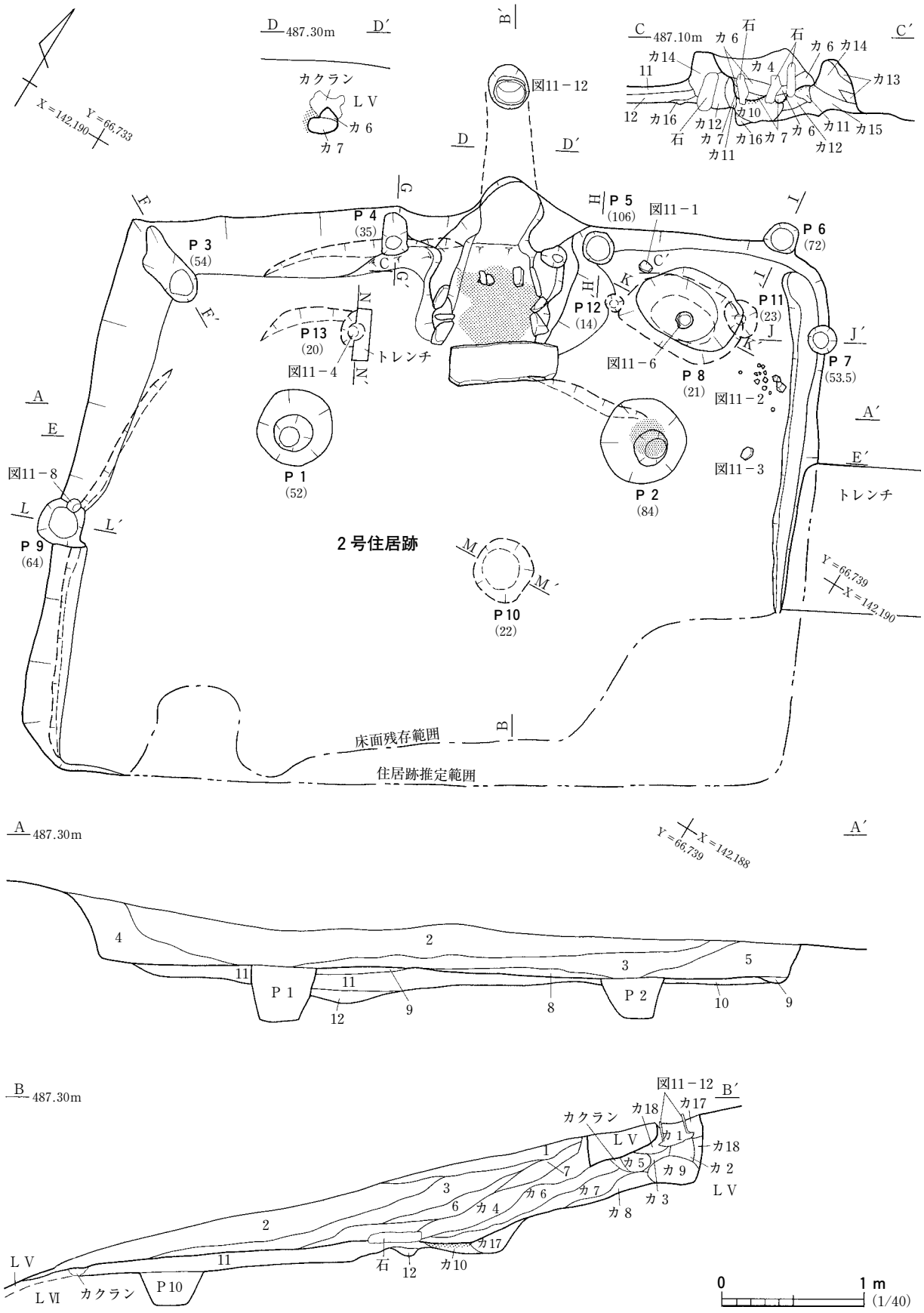
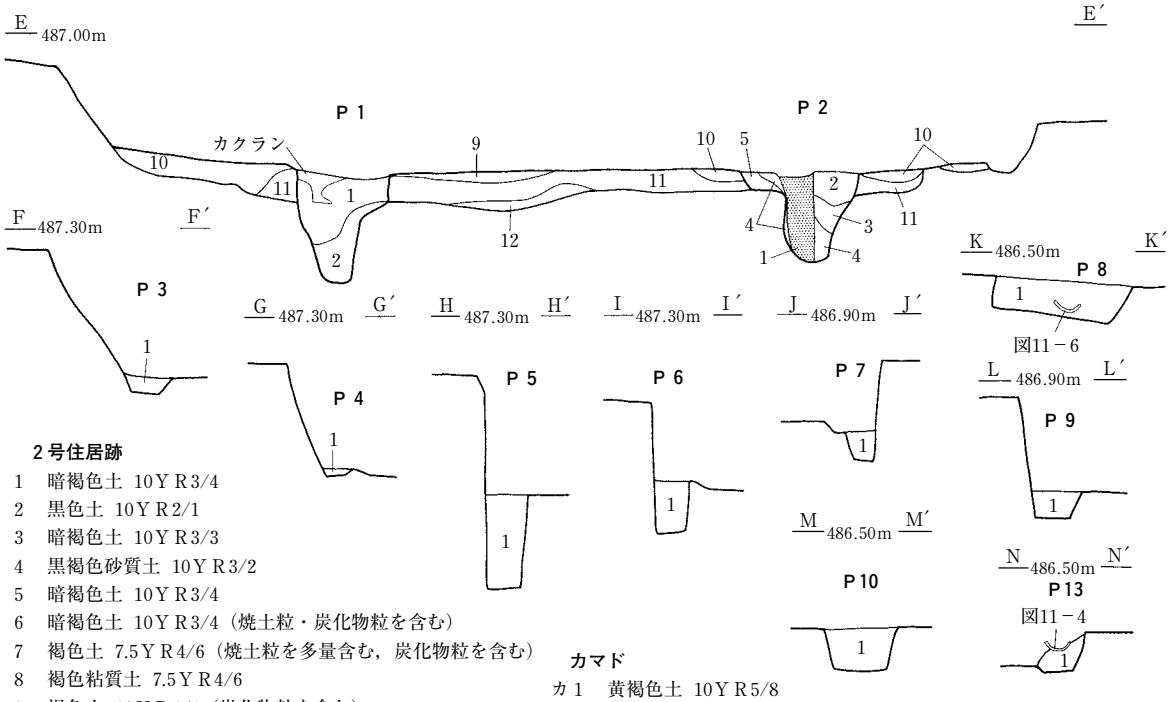

D 487.30m
D′
カクラン
ＬＶ
カ６
カ７
X＝142,190
Y＝66,733
B′
図11－12
C 487.10m
C′
カ６
石
カ14
カ４
カ13
カ10
カ16
カ12
カ11
カ15
カ７
P 3
(54)
P 4
(35)
P 5
(106)
図11－1
P 6
(72)
P 12
(14)
P 11
(23)
P 13
(20)
トレンチ
図11－4
図11－6
P 8
(21)
P 7
(53.5)
図11－2
P 1
(52)
P 2
(84)
図11－3
図11－8
P 9
(64)
2号住居跡
P 10
(22)
Y＝66,739
X＝142,190
床面残存範囲
住居跡推定範囲
A 487.30m
A′
Y＝66,739
X＝142,188
P 1
P 2
B 487.30m
B′
図11－12
カクラン
カ18
カ17
カ１
カ５
カ９
カ２
カ３
カ８
カ６
カ７
カ４
カ17
カ10
石
LⅥ
P 10
0
1 m
(1/40)

図９　２号住居跡（１）



２号住居跡

1　暗褐色土　10ＹＲ3/4
2　黒色土　10ＹＲ2/1
3　暗褐色土　10ＹＲ3/3
4　黒褐色砂質土　10ＹＲ3/2
5　暗褐色土　10ＹＲ3/4
6　暗褐色土　10ＹＲ3/4（焼土粒・炭化物粒を含む）
7　褐色土　7.5ＹＲ4/6（焼土粒を多量含む，炭化物粒を含む）
8　褐色粘質土　7.5ＹＲ4/6
9　褐色土　10ＹＲ4/4（炭化物粒を含む）
10　にぶい黄橙色土　10ＹＲ6/4（白色粘土を含む）
11　褐色土　10ＹＲ4/4（炭化物粒・白色砂粒を含む）
12　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（炭化物粒を含む）

Ｐ１

1　褐色土　10ＹＲ4/6（炭化物粒を含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/4（にぶい黄橙色砂質土を含む）

Ｐ２

1　黒褐色土　10ＹＲ3/2（炭化物粒・焼土粒を含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/6（浅黄橙色粘土塊を含む）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/4（炭化物粒・焼土塊を含む）
4　褐色土　10ＹＲ4/4（明黄褐色砂粒を含む）
5　暗褐色土　10ＹＲ3/3（炭化物粒・焼土粒を含む）

Ｐ３

1　褐色土　10ＹＲ4/4

Ｐ４

1　褐色土　10ＹＲ4/6

Ｐ５

1　褐色土　10ＹＲ4/6（焼土・炭化物を微量含む）

Ｐ６

1　暗褐色土　10ＹＲ3/4

Ｐ７

1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（黄褐色土粒を含む）

Ｐ８

1　暗褐色土　10ＹＲ3/3（黄褐色土・焼土・炭化物を少量含む）

カマド

カ１　黄褐色土　10ＹＲ5/8
カ２　褐色土　10ＹＲ4/4と黄褐色土　10ＹＲ5/8との混土
カ３　黒褐色土　10ＹＲ3/2（黄褐色土を含む）
カ４　褐色粘質土　10ＹＲ4/6（白色粘土を含む）
カ５　褐色土　7.5ＹＲ4/3（黄褐色土・炭化物粒を含む）
カ６　にぶい赤褐色土　5Ｙ4/4（焼土・炭化物を多量含む）
カ７　赤褐色土　2.5ＹＲ4/6（焼土塊・炭化物を多量含む）
カ８　暗褐色土　10ＹＲ3/4（黄褐色土・焼土粒を含む）
カ９　黒褐色土　10ＹＲ3/2
カ10　明褐色土　7.5ＹＲ5/6（焼土塊・炭化物を多量含む）
カ11　にぶい褐色粘質土　7.5ＹＲ5/4（焼土粒・炭化物粒を含む）
カ12　明黄褐色粘質土　10ＹＲ6/6（焼土粒・炭化物粒を含む）
カ13　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（焼土粒・炭化物粒・土器片を含む）
カ14　にぶい黄橙色粘土　10ＹＲ6/3（炭化物粒を含む）
カ15　黄褐色土　10ＹＲ5/6（炭化物を含む）
カ16　にぶい黄橙色砂質土　10ＹＲ6/4（炭化物粒を含む）
カ17　にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/4
カ18　黄褐色土　10ＹＲ5/6（褐色土を含む）

Ｐ９

1　褐色砂質土　10ＹＲ4/4

Ｐ10

1　褐色砂質土　10ＹＲ4/4

Ｐ13

1　褐色土　10ＹＲ4/4（炭化物粒・白色砂粒を含む）

図10　２号住居跡（２）

図11－１～10は土師器杯であり，このうち１～３は床面から出土した。１の底部には墨書が認められるが，文字は判然としない。外面には全体にわたって気泡が弾けた痕跡がみられるので，焼成後に再度火を受けたとみられる。２は細かい破片の状態で出土した。外面は摩滅しているので調整がよくわからない。３の内面のミガキは幅の広い工具でなされている。４はＰ13から出土した。Ｐ13は貼床土を除去した掘形から検出したものである。このことから，本住居跡が造られる以前に使われた土器とすることができる。内面には底面から体部の一部にかけて傷がみられる。土器を使用する際に匙などでついた痕跡と推定している。６はＰ８から出土した。体部内面には入念な横方向

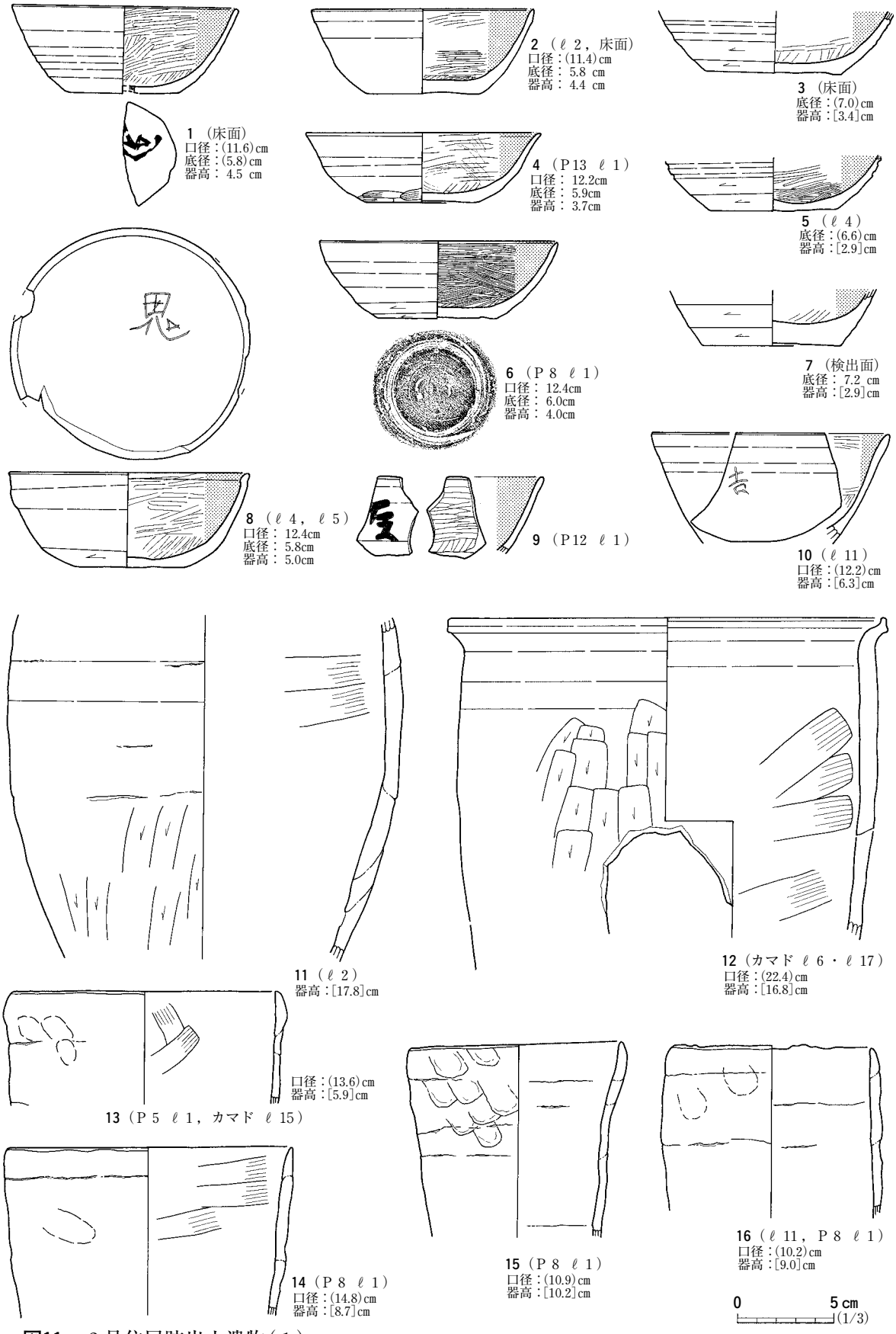


図11　２号住居跡出土遺物（１）

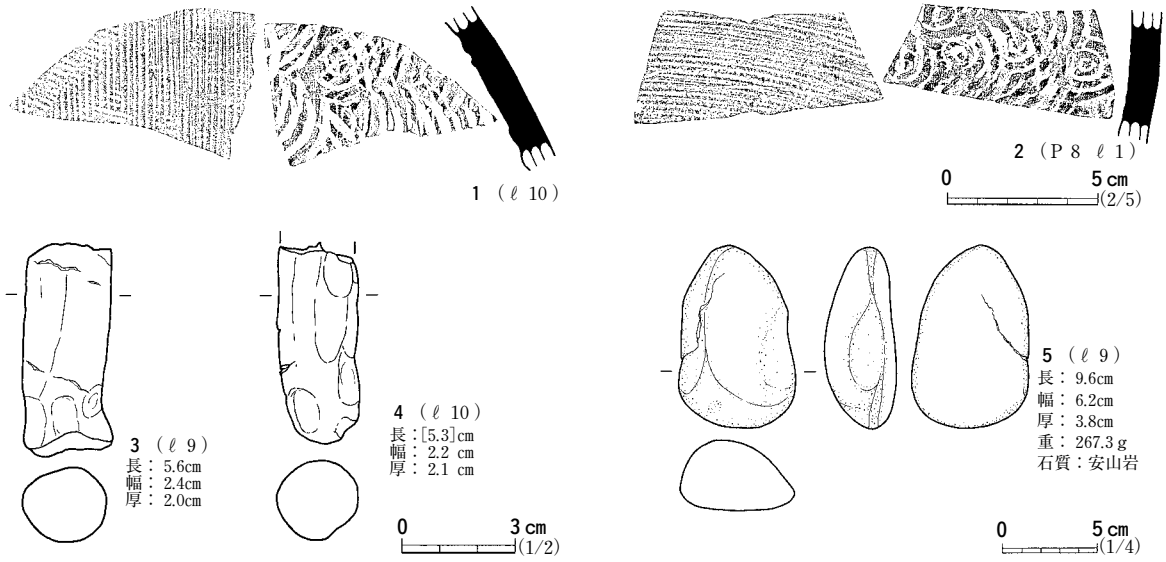


図12　２号住居跡出土遺物（２）

のミガキがなされている。底部外面には回転ヘラケズリ調整ののち，溝状の窪みを周縁に施している。８はＰ９の際から，壁面にへばり付くような出土状態であった。このことから，棚状の施設がありそこから落ちたものと考えている。底部内面には「鬼」の文字が刻書されていた。９は体部外面に墨書がなされ，「集」の一部であろう。10には体部外面に「吉」の刻書が認められる。

図11－11は土師器甕の胴部破片である。器面の内外面には接合痕が明瞭に観察でき，接合痕の上下で調整が異なっていた。接合痕より上ではロクロナデ，それより下では縦方向のケズリがなされている。このことから胴部の上下で別々に作り，のちに接合したのであろう。図11－12はカマド煙出部に据え付けられていた土師器甕である。胴部の欠損部には円形状に打ち欠いた部分がある。口縁部から胴部上方にかけては内外面ともにロクロナデが，胴部中程では外面がケズリ，内面にはナデ調整がなされているが剥離が著しい。これにより，ロクロナデは口縁部と胴部上方の調整に限定されていたことが分かる。図11－13～16は筒形土器である。外面には成形時の指頭圧痕が残り，内面にはナデが施されているようであるが，剥離や摩滅によって明瞭ではないものもある。図12－１・２は須恵器甕の胴部破片である。図12－３・４は用途不明の土製品である。３の先端は台形状で，４の先端は丸みを帯びている。図12－５は磨石で全面にわたって使用されている。この磨石は混入とみられる。

ま　と　め　本住居跡は他の住居跡の立地と異なり急斜面にある。住居内施設はカマド１基・柱穴２基・壁柱穴６基・小穴６基を検出した。これらの柱穴が配置されているのは，斜面上方となる住居跡の北半分である。このことから，上屋は斜面の傾斜に沿った片流れ造りであったと推定される。時期は床面から出土した土師器杯の特徴から９世紀前葉の時期と考えている。

３号住居跡　ＳＩ03（図13・14，図版12・53）

遺　　構　本遺構はＥ７・Ｅ８・Ｆ７・Ｆ８グリッドのⅡ・Ⅲ層上面で検出した竪穴住居跡である。本住居跡が位置するのは，調査区のほぼ中央の谷底で標高484.5mの地点である。本住居跡の北西側には２号住居跡がある。さらに，本住居跡の南側には小穴２基がある。

平面形は東側が整った隅丸長方形である。周壁は概ね外傾しながら立ち上がるが，特に西壁では外傾の度合いが著しく，東壁ではやや直立気味となっている。規模は北壁４m，南壁４m，東壁2.8m，西壁2.5mで，最大壁高は0.4mである。長軸方向は真北に対して83°西に傾き，等高線に対してやや東に傾く。堆積土は６層に区分した。区分した層理面をみると凹凸が著しい。特に１・４・５層の層理面は溝状になっていることから，斜面上方からの流水によって運ばれた土が堆積した状況を示している。床面からはＰ１・２・５とした小穴を３基検出した。Ｐ１・２は相互の位置関係により柱穴と考えている。いずれも北壁際にあることから，上屋は片流れ造りに相当するものであろう。Ｐ３・４については住居跡南側の深さ30㎝程度の小穴である。

遺　　物　３号住居跡からは土師器54点，須恵器３点，縄文土器35点，石器１点が出土した。図14に図示した。１・２は土師器杯である。１の底部外面には墨書がなされているが判読不明である。３は土師器甕で口縁部の破片で，欠損部がちょうど粘土紐を積み上げたところで剥離している。内外面ともにヨコナデののちにヘラナデがなされている。４・５は須恵器甕の胴部である。

ま　と　め　本遺構にはカマドがないにも関わらず住居跡としたのは，１・２・４号住居跡と規模が大差ないこと，柱穴を確認していることなどからである。よって，本住居跡は通常の住居と異なった使われ方をしていたと推測できるものの，今回の調査所見からはどのような使われ方をしていたのかは確認できなかった。一応，カマドを有する竪穴住居跡と有機的な関係のある遺構と推定している。

４号住居跡　ＳＩ04（図15～17・図版13・14・33・53・54）

遺　　構　本遺構は調査区南東隅のＧ９・Ｈ９グリッドⅡ・Ⅲ層上面から検出した竪穴住居跡である。ここの場所は，谷底の南向き緩斜面標高483.5mである。周辺には本住居跡から北西側に約６m登ったところに１号住居跡がある。平面形は西半分が整った方形であるのに対して東側が台形となっている。規模は北壁3.6m，南壁3.9m，東壁３m，西壁3.1mで，最大壁高は0.7mである。主軸方向は真北に対し東に23°傾き，等高線に対し直交している。

堆積土は土色や含有物の違いにより17層に区分した。そのうち貼床土は12～17層である。10・11層には炭化物・焼土が多量に含まれ，床面中央に集積していた。これにより本住居跡は火災に遭ったらしい。炭化物は細かなものが多く，取り上げると砕けてしまう程であった。そのため，上屋の構築材として検討できるような材料は得られなかった。すでに，カマドは壊されているので失火による火災ではなく，構築材をかたづけるために火を付けたとみられる。

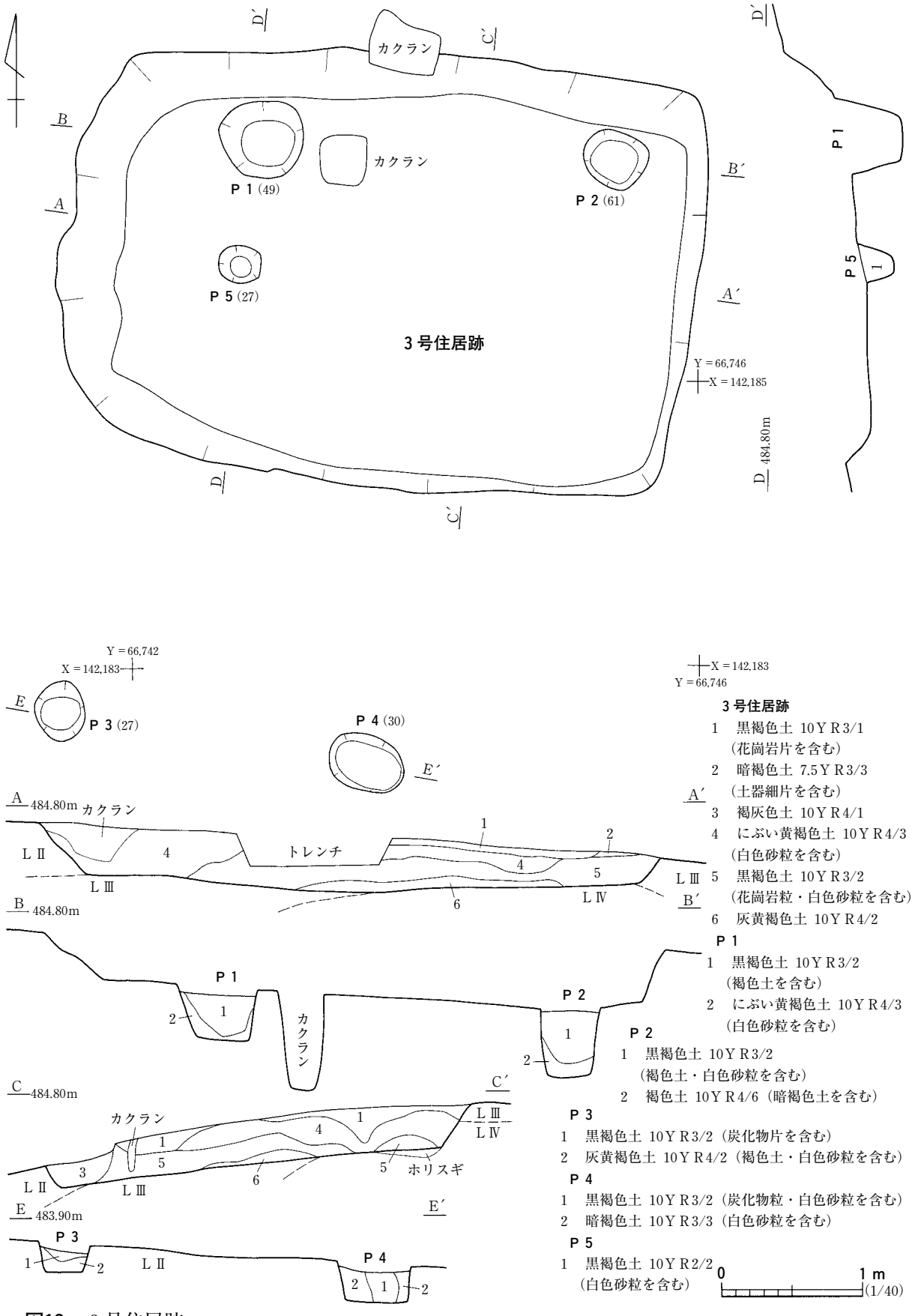

カクラン
カクラン
P 1 (49)
P 2 (61)
P 5 (27)
3 号住居跡
Y = 66,746
X = 142,185
D 484.80m
P 1
P 5
1
Y = 66,742
X = 142,183
P 3 (27)
P 4 (30)
A 484.80m
B 484.80m
C 484.80m
E 483.90m
カクラン
トレンチ
ホリスギ
L Ⅱ
L Ⅲ
L Ⅳ
X = 142,183
Y = 66,746
3 号住居跡
1　黒褐色土 10Y R3/1
（花崗岩片を含む）
2　暗褐色土 7.5Y R3/3
（土器細片を含む）
3　褐灰色土 10Y R4/1
4　にぶい黄褐色土 10Y R4/3
（白色砂粒を含む）
5　黒褐色土 10Y R3/2
（花崗岩粒・白色砂粒を含む）
6　灰黄褐色土 10Y R4/2
P 1
1　黒褐色土 10Y R3/2
（褐色土を含む）
2　にぶい黄褐色土 10Y R4/3
（白色砂粒を含む）
P 2
1　黒褐色土 10Y R3/2
（褐色土・白色砂粒を含む）
2　褐色土 10Y R4/6（暗褐色土を含む）
P 3
1　黒褐色土 10Y R3/2（炭化物片を含む）
2　灰黄褐色土 10Y R4/2（褐色土・白色砂粒を含む）
P 4
1　黒褐色土 10Y R3/2（炭化物粒・白色砂粒を含む）
2　暗褐色土 10Y R3/3（白色砂粒を含む）
P 5
1　黒褐色土 10Y R2/2
（白色砂粒を含む）
0　1 m
(1/40)

図13　３号住居跡

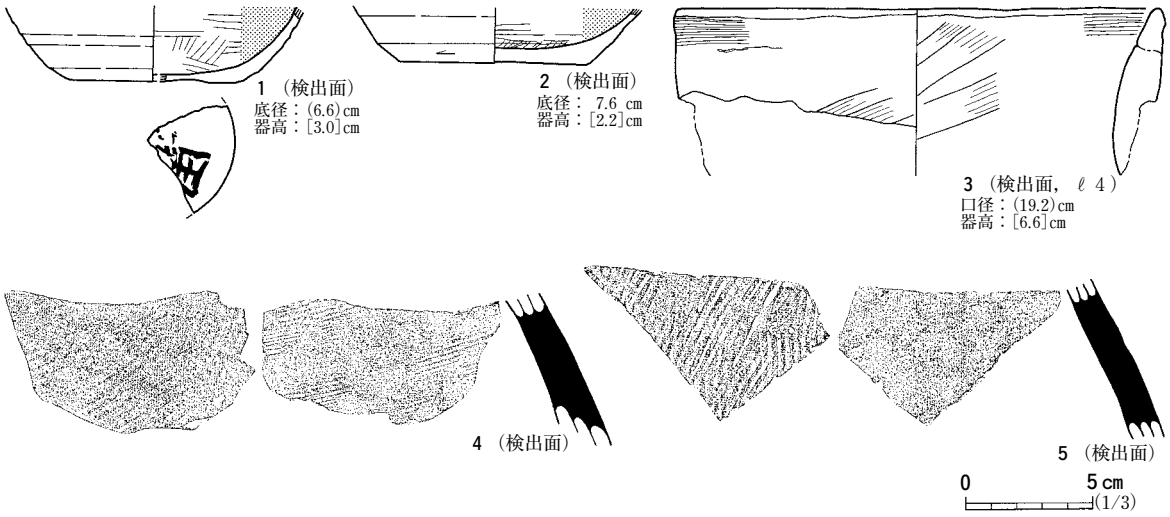


図14　３号住居跡出土遺物

カマドは北壁のほぼ中央やや西寄りに位置する。燃焼部の幅は0.52m，袖の先端から煙出部までの長さは2.2mである。煙道はⅣ層をトンネル状に掘り抜いて造られ，煙出部には土師器甕が口縁部を下にした斜位の状態で据え付けられていた。堆積土は13層に区分した。袖は板状の花崗岩を心材として11～13層で構築されていた。

床面には小穴がなかったので，上屋は柱穴で支えたのではなく壁で支えていたことが想定できる。

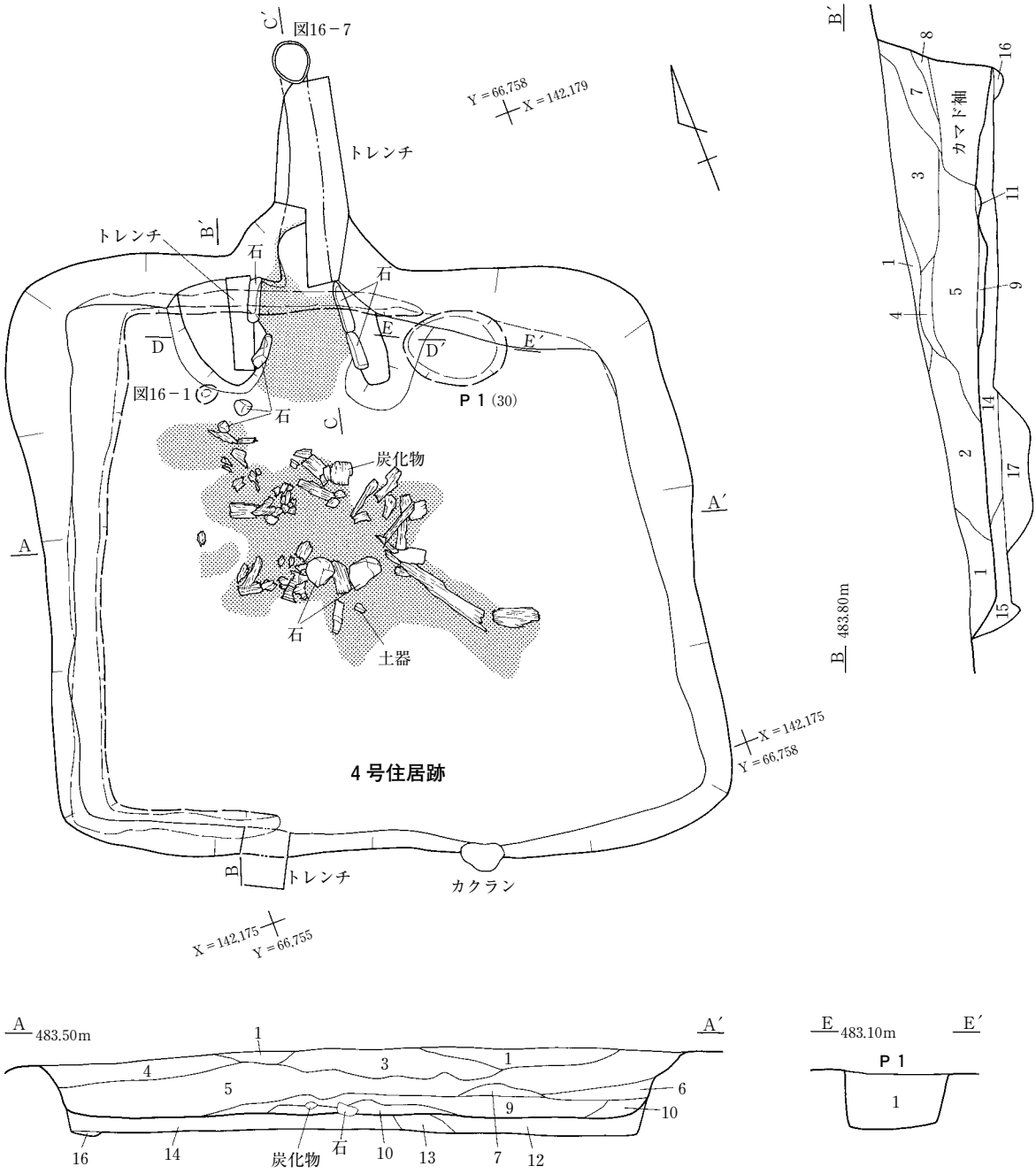
掘形からは小穴Ｐ１と壁溝を検出した。Ｐ１の長軸は60cmで，カマドの東側に位置する。壁溝はカマド下から西壁を経て南西隅に至る。幅は16～35cmで北西隅が最も広くなる。

遺　　物　４号住居跡からは土師器627点，須恵器13点が出土し，混入とみられる縄文土器223点，石器１点，剥片８点もあった。そのうち土師器・須恵器・土製品・石器を図16・17に示した。

図16－１～10・図17－１・２は土師器杯である。そのうち図16－２・３・６には墨書がなされ，図16－３・５・７・９には刻書がなされている。３については同じ箇所に墨書と刻書がある。書が認められる箇所は２・３・５～７が底部外面で，１・９が底部内面である。各記銘文字は３が墨書・刻書ともに「集」，６は「鬼」，他は判読できなかった。

図16－１はカマド袖前方の貼床土から出土したもので，内面の黒色処理は焼成後に再び火を受けてあらかた消滅している。底部外面には櫛歯状の工具で部分的に引っかいたような痕跡がみられる。同図４は他の杯よりも底径が小さく底部が厚い特徴がみられる。図17－１の底部外面から体部下半にかけて著しく摩滅している。図17－２は他の杯と比べて大型である。さらに，底部外面から体部下端にかけてヘラケズリ調整がなされている。

図16－11は小型甕である。本住居跡の堆積土から出土したものと３号住居跡の検出面から出土したものとが接合した。また，『福島県内遺跡分布調査報告８』の図23－１に示された12号トレンチⅢ層出土土器とも接合している。胴部外面の器面はロクロメが明瞭である。胴部内面の調整は，あたかも化粧土を塗ったようにのっぺりとした状態で，よく分からなかった。図16－７はカマド煙出に据え付けられた土師器甕である。おそらく，補強に用いられたのだろう。甕の形状は楕円形となる。



4 号住居跡

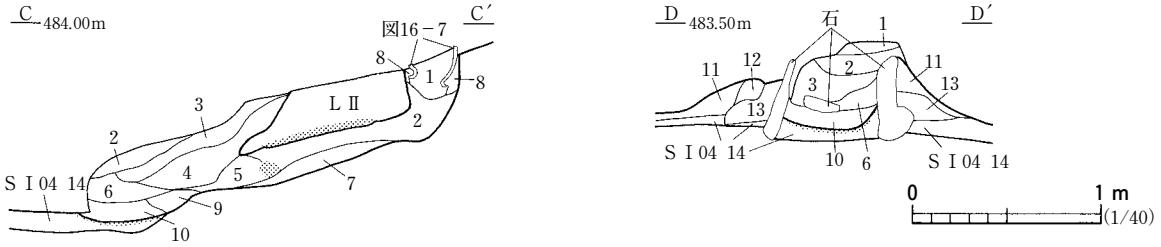
1　暗褐色土 10Ｙ Ｒ3/3（炭化物を含む）
2　黒褐色土 10Ｙ Ｒ3/2（焼土粒・炭化物粒を極少量含む）
3　にぶい黄褐色土 10Ｙ Ｒ4/3（焼土粒・炭化物粒を少量含む）
4　黒褐色土 10Ｙ Ｒ2/3（焼土粒・炭化物粒を少量含む）
5　黒褐色土 10Ｙ Ｒ3/2（炭化物を多量含む）
6　灰黄褐色土 10Ｙ Ｒ4/2（炭化物粒を含む）
7　灰黄褐色土 10Ｙ Ｒ5/2（炭化物粒を極少量含む）
8　黒褐色土 10Ｙ Ｒ3/2（白色砂粒を含む）
9　黒褐色土 10Ｙ Ｒ3/1（白色砂粒を含む）
10　灰褐色土 7.5Ｙ Ｒ4/2（焼土塊を多量含む）
11　黒褐色土 10Ｙ Ｒ3/1（炭化材を多量含む）
12　黒褐色土 10Ｙ Ｒ3/1（白色砂粒を含む）
13　黒色土 10Ｙ Ｒ2/1（白色砂粒を含む）
14　黒褐色土 10Ｙ Ｒ2/3（白色砂粒・暗褐色土・礫を含む）
15　黒褐色土 10Ｙ Ｒ3/2（白色砂粒を含む）
16　黒色土 10Ｙ Ｒ2/1（白色砂粒・褐色土・炭化物粒を含む）
17　にぶい黄褐色土 10Ｙ Ｒ4/3（焼土塊・炭化物粒を含む）

P 1

1　灰黄褐色土 10Ｙ Ｒ4/2（Ｌ Ⅵ塊・炭化物粒・灰白色粘土塊を含む）

0　1 m
(1/40)

図15　4 号住居跡



カマド

1　黒褐色土 10ＹＲ3/2
2　黒褐色土 10ＹＲ3/1（白色砂粒を含む）
3　黒褐色土 10ＹＲ3/2
4　黒褐色土 10ＹＲ3/2（白色砂粒・小礫を含む）
5　暗褐色土 7.5ＹＲ3/3（焼土塊を多量含む）
6　黒褐色土 10ＹＲ3/2（白色砂粒を含む）
7　暗褐色土 10ＹＲ3/3（炭化物粒・焼土粒を含む）
8　暗褐色土 10ＹＲ3/3（白色砂粒・褐色土を含む）
9　明褐色土 7.5ＹＲ5/8（焼土塊・炭化物を多量含む）
10　黒褐色土 10ＹＲ3/2（白色砂粒・褐色土を含む）
11　黒褐色土 10ＹＲ2/3（炭化物粒を含む）
12　灰黄褐色土 10ＹＲ5/2（炭化物粒を極少量含む，白色粘土を含む）
13　灰白色粘土 10ＹＲ8/2（黒褐色土・焼土塊・炭化物粒を含む）

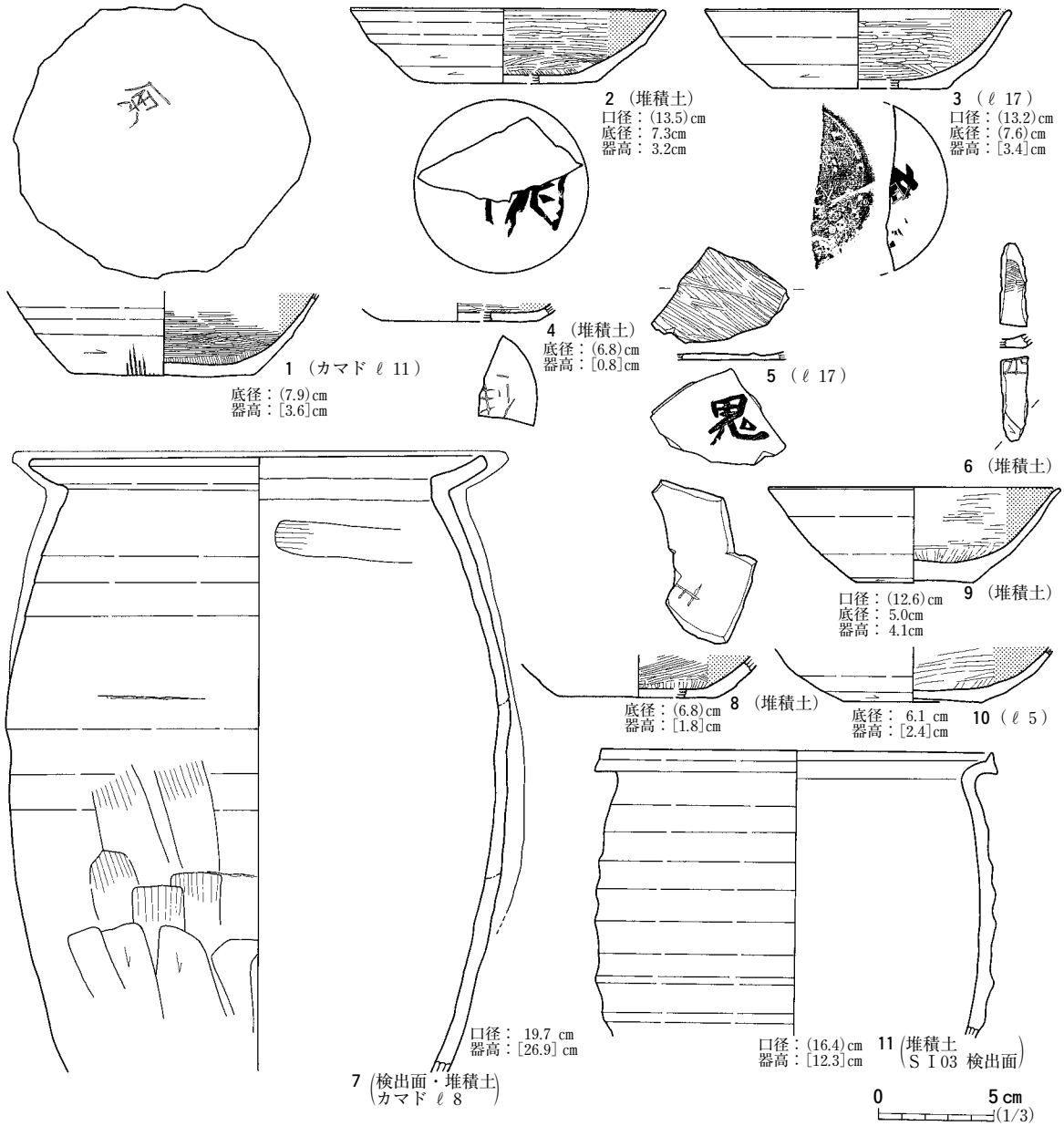


図16　4号住居跡・出土遺物（１）

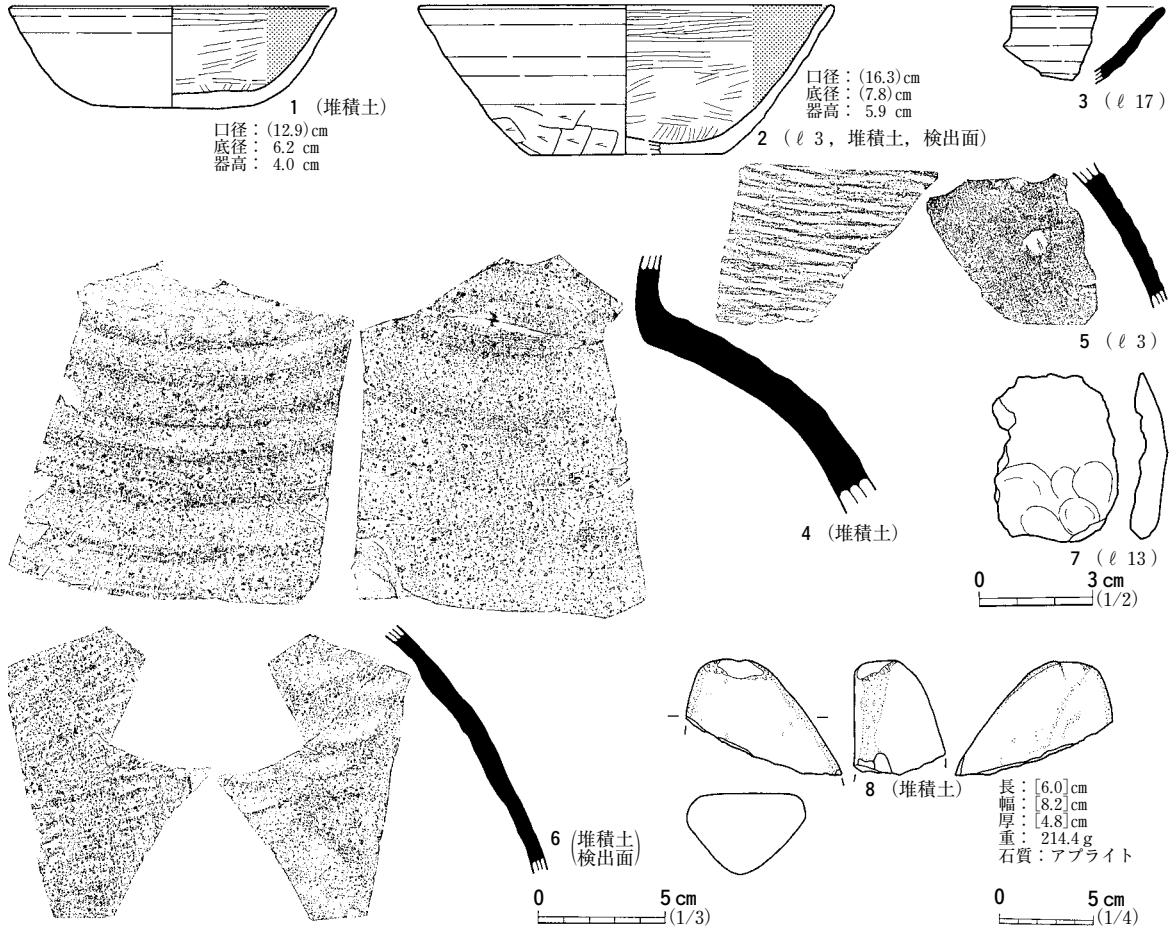


図17　４号住居跡出土遺物（２）

口縁部から胴部上半にかけてはロクロナデ，胴部下半ではケズリ・ナデがなされているので，それぞれ別に作って胴部中程で接合したのであろう。内面にはススが付着していた。

図17－３～６は須恵器で，３が杯・４～６が甕の破片である。４・５は胴部で６は頸部である。図17－７は用途不明の土製品で外面には成形時の指頭圧痕や内面には繊維混入痕がみられる。

図17－８は磨石で大半が欠損し，全面を使用していた。この遺物は流れ込みと判断している。

ま と め　４号住居跡の堆積土下部から炭化物がややまとまって出土した。これは住居の廃絶後に廃材などを燃やしてかたづけたものと考えている。

さらに，図７－８に示した１号住居跡から出土した土師器鉢は，本住居跡のカマド袖基底面や貼床土などから出土した破片と接合した。この出土層位からすると，住居を造る以前に破片の状態で地山に含まれていたと考えることができる。

時期については，カマド袖前面に置かれていた土師器杯(図16－１)から９世紀前半と考えている。墨書土器のなかで「鬼」は，１・２号住居跡からも出土しているので集落跡における共通の文字の使用が窺われる。　（吉野）

第３章　縄文時代の遺構と遺物

第１節　竪穴住居跡

縄文時代の遺構は主にⅥ層上面から竪穴住居跡15軒，土坑５基，焼土遺構２箇所，小穴５個を検出した。竪穴住居跡は谷底と東向き斜面下方に立地し，大半のものは重複していた。いずれも縄文時代早期中葉から末葉に含まれるものである。

遺物は縄文土器・石器・石核・剥片などがある。縄文土器は5,574点が出土し，主体を占めているのは早期末葉の外面撚糸文で内面条痕文のものである。石器は112点が出土し，石鏃・石匙・磨製石斧・掻器・磨石・凹石・石皿などがある。そのなかで，主体を占めるのは石鏃である。石鏃は調査区内で作られたらしく未製品や剥片を含めた点数は2,285点となっている。

５号住居跡　ＳＩ05（図18～20，図版15・34・35・55）

遺　　構　５号住居跡は調査区の北際中央Ｆ６・７，Ｇ６グリッドⅤ層上面で検出した。この場所は標高484m前後の谷底である。谷底は南向き緩斜面の上方に位置する。13号住居跡と重複し，新旧関係は，本住居跡が13号住居跡を掘り込んでいるので，本住居跡の方が新しい。南側には７号住居跡が位置する。

５号住居跡はすでに試掘調査で検出されていた。平面形は西半分が方形であるのに対して，東半分は隅丸方形である。規模は東西が4.3m，南北は４ｍである。主軸方向は北西隅と北東隅の中点で，10°西に傾いている。

堆積土は４層に区分した。１層は住居跡の北側に堆積する。２層は住居跡の中央から南側にかけて堆積する。３層は壁際に堆積しⅥ層に対応する。４層は住居跡の中央から南側にかけての窪みに堆積する。遺構掘り込みの段階では４層の上面を床面と考えたが，焼土や炭化物が含まれていたので掘り下げたところ，炉を検出したため４層は堆積土であることが判明した。

床面は中央から南側にかけてやや窪む，Ⅴ・Ⅵ層をそのまま床とし貼床などはされていない。周壁は斜面上方となる北壁の残りが良く最大壁高は39㎝で，斜面下方となる南壁の立ち上がりは僅かである。床面からは２基の小穴を検出した。Ｐ１・２とした小穴は検出当初，住居跡が作られる以前の土坑と考えた。だが，堆積土に焼土・炭化物が含まれているので，これを付近にある炉から流入したものと判断し，さらに石皿などもＰ１から出土したので関連する小穴とした。Ｐ１は床面中央のやや南西側にあり，長軸0.7m，短軸0.5ｍである。Ｐ２は床面中央の南側にあり，長軸１ｍ，短軸0.5ｍである。いずれも平面形は楕円形で，柱痕がみられないので柱穴とすることはできない。炉は床面中央にあり地床炉である。長軸は0.32ｍで，炉の下部には掘り込みなどはみられなかった。

遺　　物　５号住居跡からは縄文土器357点，石器17点，剥片434点が出土した。このうち，縄文土

器20点を図19に，石器18点を図20にそれぞれ図示した。縄文土器は検出面・第１～３層から出土している。出土遺物のなかで胎土に繊維を含むものは少ない。１は床面から底部を下にした状態で出土したものと第１層から出土した破片が接合した深鉢である。内外面に条痕文が施されている。底部は鋭角的な尖底である。胎土には多量の砂粒が含まれている。２は平行沈線で格子文，３は２と異なった施文具で平行沈線を引いている。４は底部で乳首状の尖底である。５～７には胎土に繊維が含まれず，絡条体圧痕文が施される。５・６には絡条体圧痕文を施文後に貝殻を用いた条痕文が加えられている。７は絡条体圧痕文とナデ整形による擦痕がなされる。３～７は子母口式に併行する土器であろう。８～17・20の外面には細隆起線文によって幾何学模様が描かれる。胎土には繊維がほとんど含まれず，器厚は薄く４㎜ほどである。５・16・17は条痕文を地文として細隆起線文が加わっている。８・９・15～17は内面にも条痕文が施されている。12は微隆起線文の文様帯が口縁部

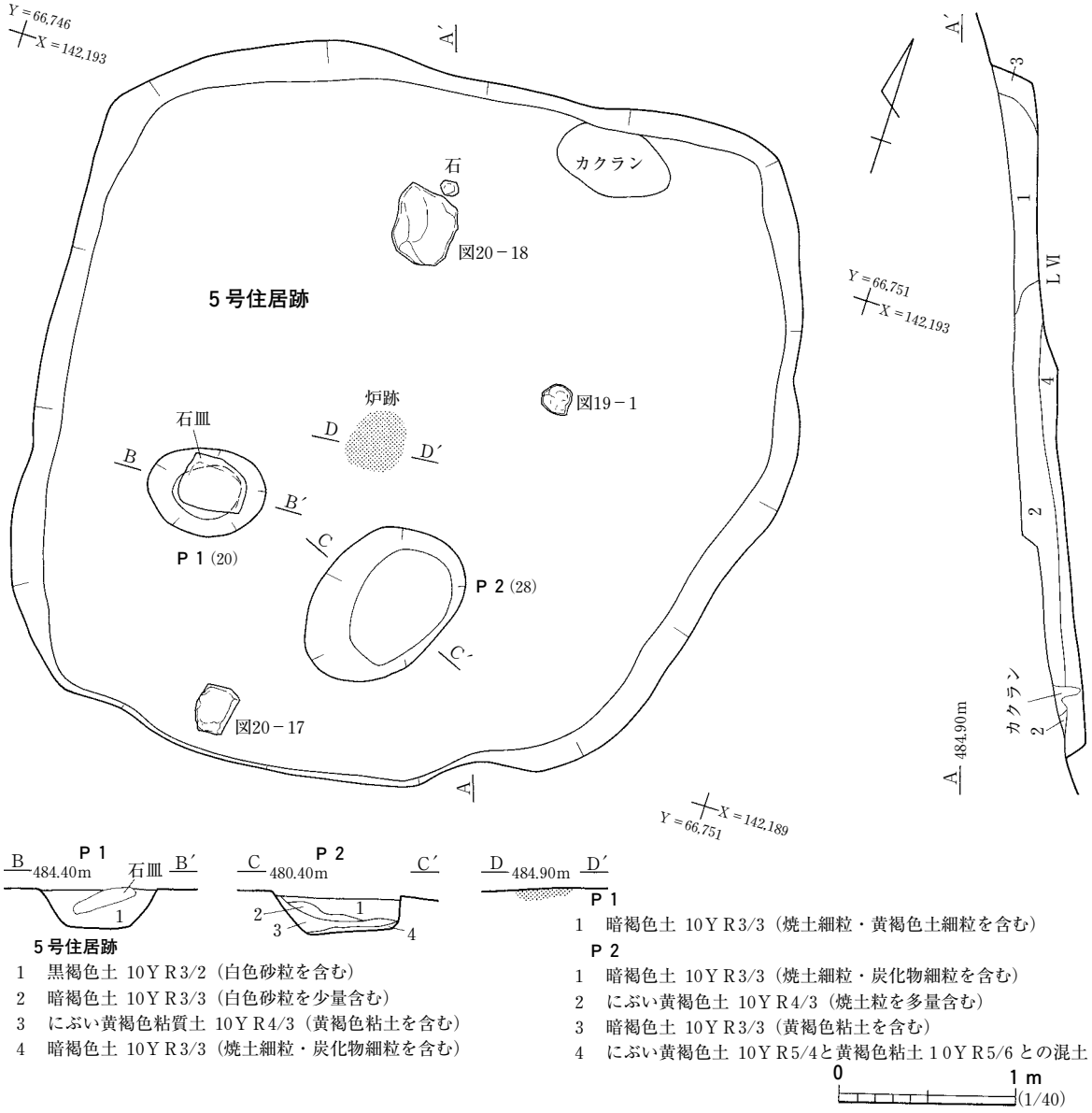


図18　５号住居跡

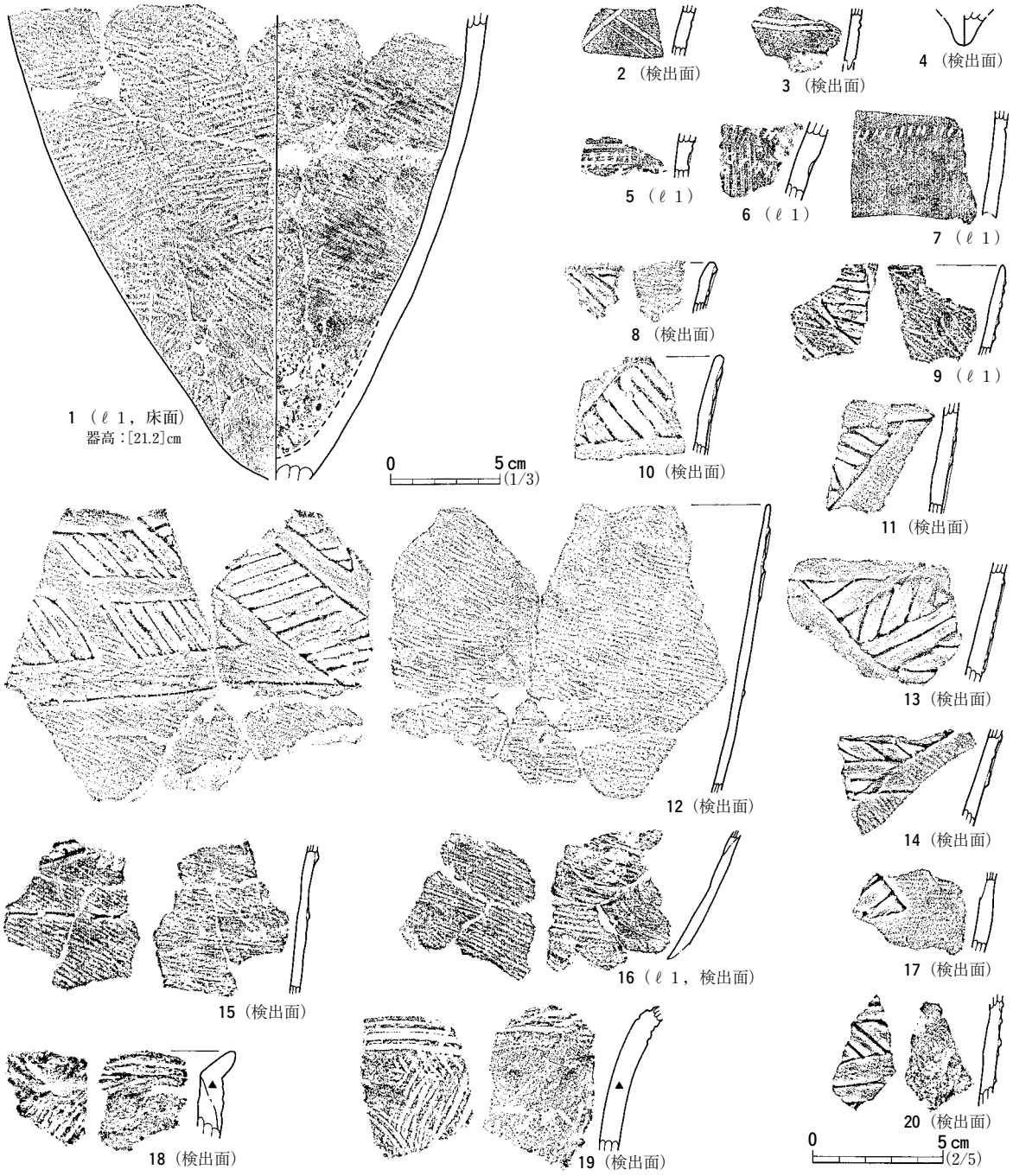


図19　５号住居跡出土遺物（１）

から胴部上方になされ，それ以下では条痕文となっている。16は内外面ともに条痕文が施されている。18・19は胎土に繊維が含まれるもので，検出面から出土した。18は口縁部でくの字状に屈曲する。外面が撚糸文で，内面の外反部分にも撚糸文が認められる。19は口端部を欠損する同様の破片である。

１～７・９は石鏃である。そのなかで１～７は凹基の無茎鏃，10・11は平基の無茎鏃である。２～４・６・７は先端部が，３・７・９は基部の一部が欠損している。５・７は素材の腹面を残している。９は石材によるものか風化が著しい。８は黒曜石製で，石鏃もしくは石槍の先端部である。

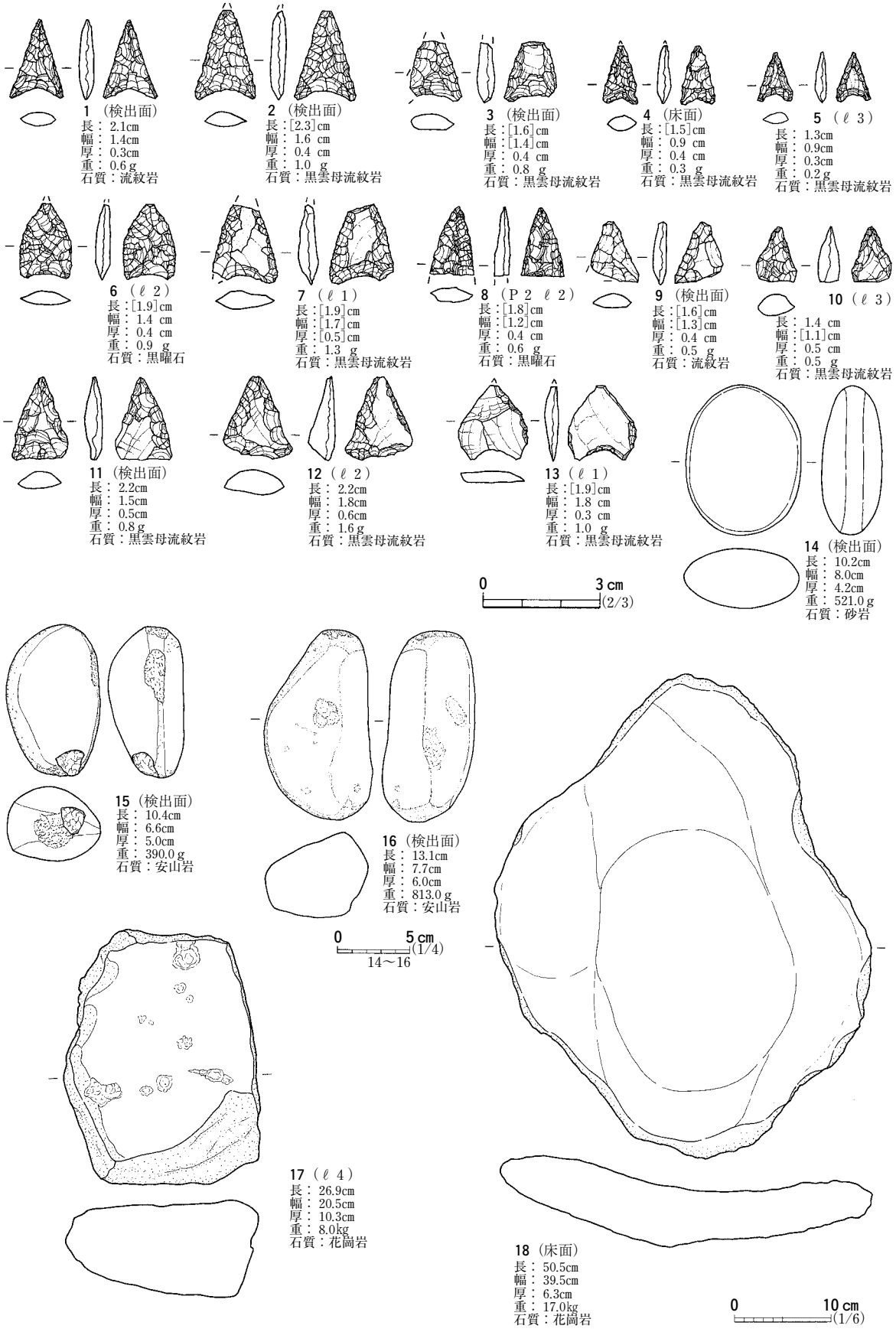


図20　５号住居跡出土遺物（２）

10～13は石鏃の未製品である。10・11は腹面に素材の剥離面をそのまま残している。10の基部は欠損し，12の基部は素材の厚みがそのまま残っている。13は基部を調整し，凹基を作出してある。14～16は磨石で全面にわたって磨っている。14は端部に敲打痕がある。17・18は石皿である。17は平坦面を全面磨っている。18の磨り面は皿状に窪む。

ま　と　め　５号住居跡は，調査区で検出した住居跡のなかでも全体の規模がわかる数少ないものである。石器は黒雲母流紋岩を石材とするものや未製品・剥片などが出土しているので，本住居内もしくは周辺で石器の製作が行われていたことが推察できる。住居跡の年代は堆積土から図19－２～４の常世１式，８～17・20の槻木１式，18・19の大畑Ｇ式の土器が出土しているが，床面から出土した図19－１の深鉢から縄文時代早期後葉槻木１式段階を考えている。

６号住居跡　ＳＩ06（図21，図版16・35）

遺　　構　６号住居跡は調査区南西部のＤ７・８，Ｅ７・８グリッドⅥ・Ⅶ層で検出した。東向き斜面の下方となる標高484.5m付近に位置する。重複する遺構は８号住居跡である。住居が造られた前後関係はよく分からない。各住居跡とも同時に掘り下げてしまったこともあるが，ちょうど本住居跡の床面が流出しているところで重複していたので，堆積土での検討ができなかったことによる。付近には本住居跡の北東側に９・10号住居跡が近接する。

本住居跡の平面形は，東壁が流出しており全体的な形状は不明だが，方形を基調とする。残存する長軸の方向は真北に対し70°西に傾いている。周壁は西壁から南壁にかけて直立気味に立ち上がり，北壁は外傾気味に立ち上がる。周壁のうち遺存が良好なのは斜面上方側の北西隅で，最大壁高は0.8ｍである。

堆積土は３層に区分した。堆積土のいずれもⅥ・Ⅶ層と似ている土色であることや花崗岩粒が含まれているので，住居の掘削土が再堆積したものであろう。

床面は斜面の傾斜に沿って東側に傾斜しているが，その場に立ってみてもあまり傾斜しているような感じはしない。

Ⅵ・Ⅶ層を床面として貼床などはされていない。床面からは小穴を２基検出した。Ｐ１は径0.22ｍで床面の北西部にあり，Ｐ２は径0.3ｍで床面のほぼ中央にある。これらの小穴だけで上屋を支えることは考え難いので，柱穴とすることはできない。炉は床面中央やや西側から検出し，地床炉である。長軸は0.12ｍで，炉の下部に掘り込みなどは確認できなかった。

遺　　物　６号住居跡から出土したのは縄文土器だけで120点である。図21－１は床面からつぶれた状態で出土した深鉢である。口縁部と底部を欠損し，胎土には多量の繊維が含まれている。外面は撚糸文，内面は無文で丁寧なナデが施されている。底部は欠損しているがおそらく尖底であろう。図21－２は口縁部の破片であるが口唇部が欠損している。胎土には多量の繊維を含んでいる。外面には撚糸文，内面には条痕文が施されている。器面は脆弱で手に持つと砂がこぼれ落ちてくる程である。

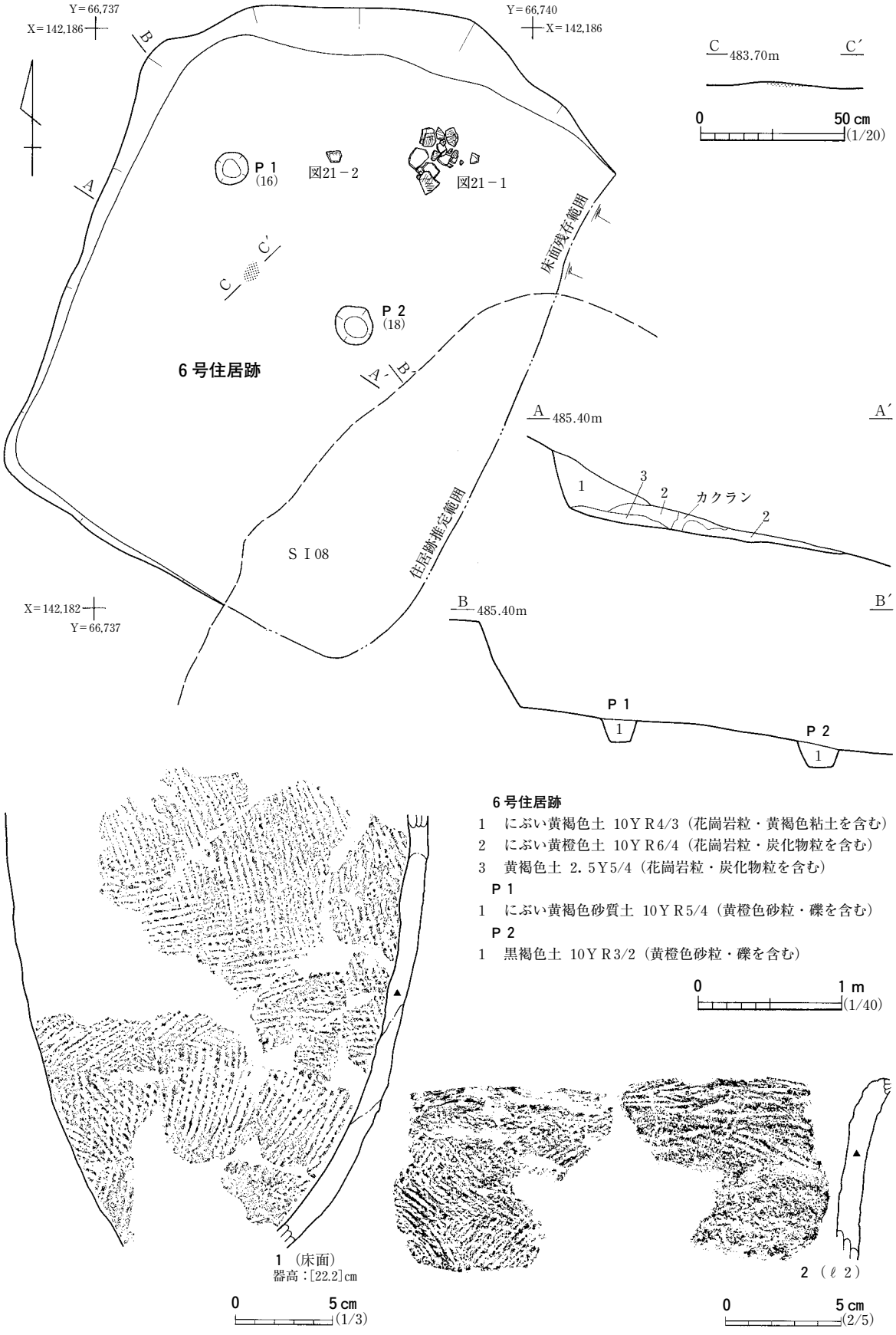


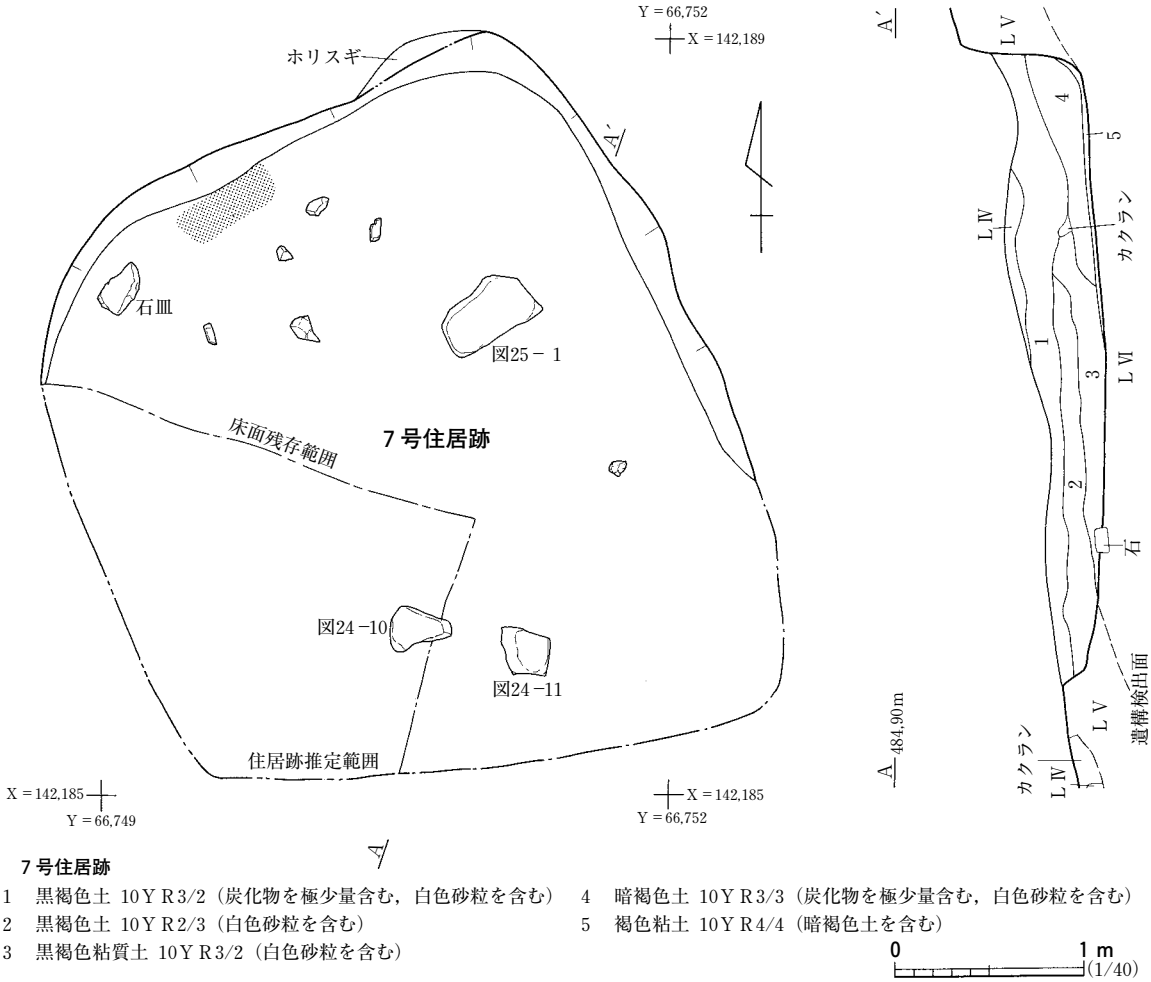
図21　6 号住居跡・出土遺物

ま　と　め　本住居跡は調査区内で検出したなかでも壁の立ち上がりが良好で，形状も整っている。時期は床面出土の土器から縄文時代早期末葉大畑Ｇ式期と考えている。

７号住居跡　ＳＩ07（図22～25，図版17・35・55～57）

遺　　構　本遺構は調査区北東部のＦ７・Ｇ７グリッドⅤ層上面で検出した竪穴住居跡である。住居跡が造られた場所の標高は483.5ｍで，谷底の南向き緩斜面となっている。本住居跡の南西側には６軒の住居跡が重複し，北側には５号住居跡が位置する。本住居跡は他の遺構との重複関係は認められない。

本住居跡は調査区の南北に設定した土層観察用ベルトから検出した。平面形は壁をすべて検出していないので明確ではないが，現状で隅丸方形であったとみられる。規模は現状で東西3.2ｍ，南北2.7ｍとなっている。周壁は北壁と東壁の一部を検出した。土層観察用ベルトで確認した最大壁高は0.6ｍである。堆積土は５層に区分した。１～３層は黒褐色土でⅤ層に対応するものであろう。谷底に立地していることから，降雨による斜面上方からの流水で掘削土が再流入したとみられる。５層褐色粘土は床面直上をほぼ一定の厚さで堆積している。



７号住居跡

1　黒褐色土 10ＹＲ3/2（炭化物を極少量含む，白色砂粒を含む）
2　黒褐色土 10ＹＲ2/3（白色砂粒を含む）
3　黒褐色粘質土 10ＹＲ3/2（白色砂粒を含む）
4　暗褐色土 10ＹＲ3/3（炭化物を極少量含む，白色砂粒を含む）
5　褐色粘土 10ＹＲ4/4（暗褐色土を含む）

図22　７号住居跡

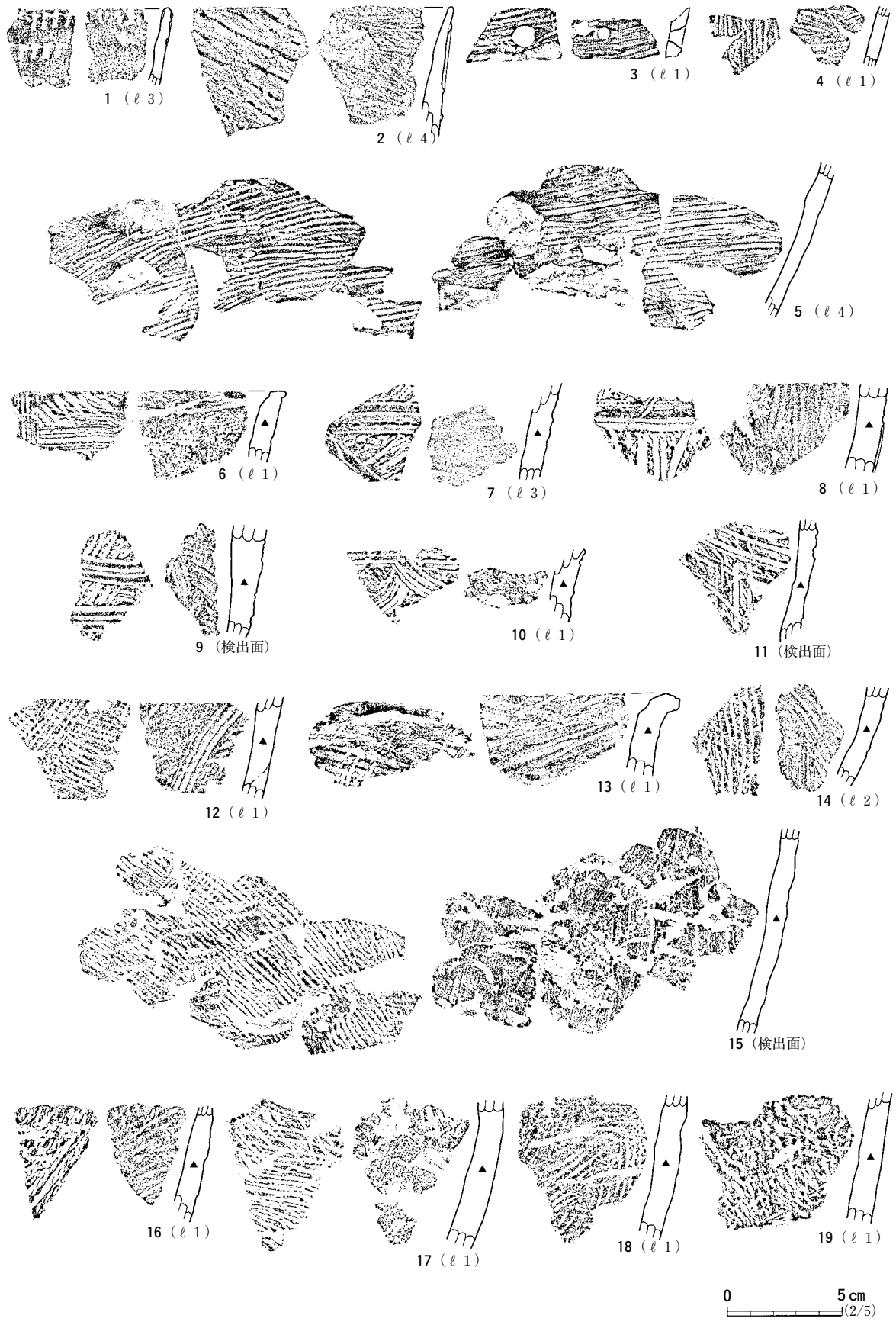


図23　７号住居跡出土遺物（１）

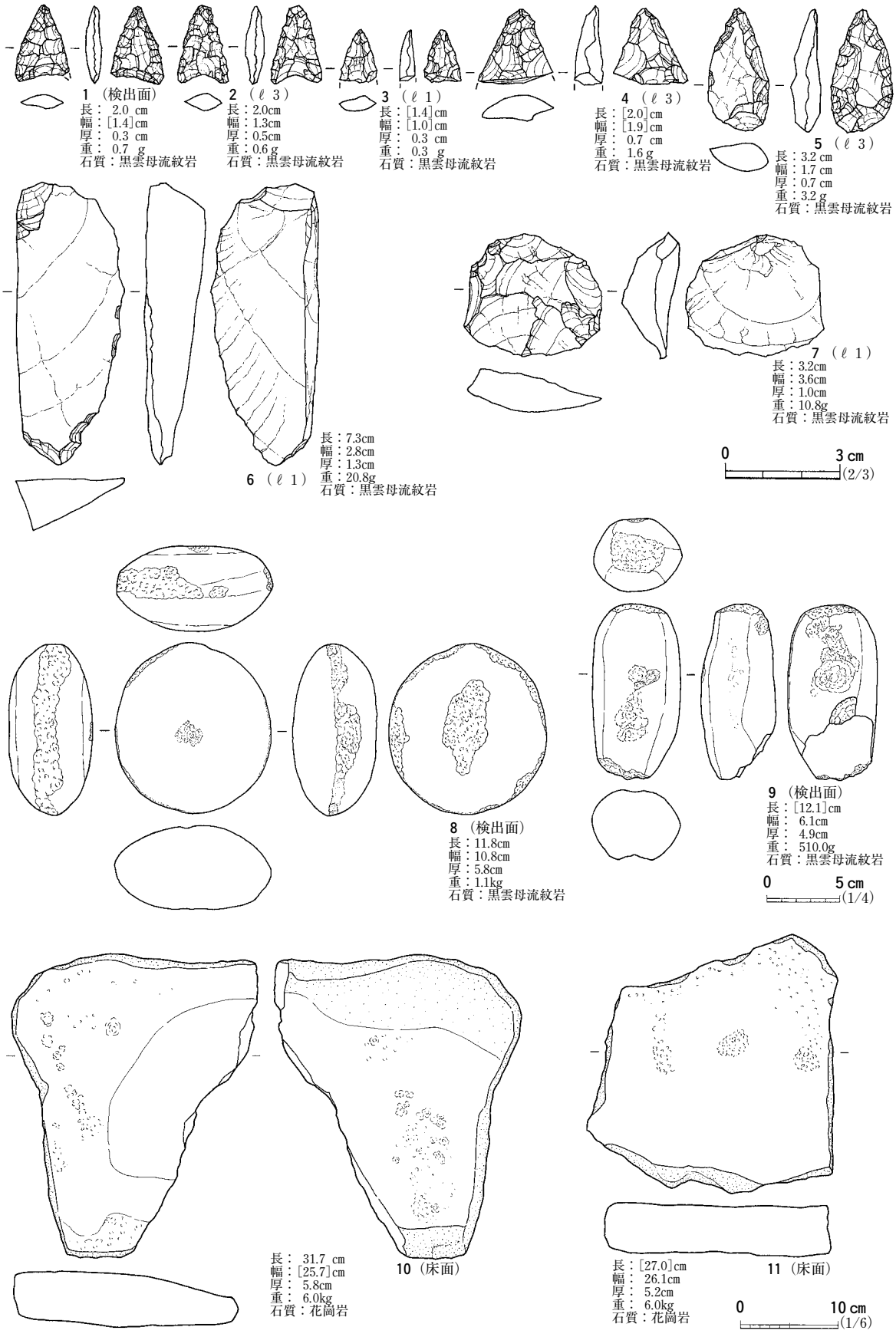


図24　７号住居跡出土遺物（２）

床面はほぼ平坦である。５層は貼床土の可能性も考えられるが，精査の段階では判断できなかった。北壁際中央のやや西寄りからは焼けた粘土が出土したが，炉や小穴などは検出されなかった。

遺　　物　７号住居跡から出土した遺物は縄文土器111点，石器14点，剥片112点である。そのうち縄文土器19点，石器10点・剥片２点を図23～25に示した。図23－１～５の胎土には繊維がほとんど含まれていない。１・２は口縁部の破片で，１の外面は櫛歯状工具刺突文，口縁部内面には棒状工具刺突文が施されている。２は外面に細隆起線文，内面に条痕文が施されている。３～５は内外面ともに条痕文が施されている。３は補修孔が穿たれ，５の条痕文は貝殻を用いて施文されている。図23－６～19の胎土には多量の繊維が含まれていた。いずれも外面に撚糸文が施され，内面は11・18・19が無文のほかは，条痕文が施される。６～11は半截竹管腹面による沈線で文様を描いている。14の撚糸文は他のものと比べて細かい撚りとなっている。６・７・10・13は口縁部の破片であるが，７・10の口唇部は欠損している。13は屈曲の度合いが強く，器面の摩滅が著しい。

図24－１～７は石鏃・石鏃未製品・剥片を示した。１は石鏃で凹基の無茎鏃である。２～４は石鏃の未製品である。２は先端部が１と比べると，丸いので未製品と判断した。３は欠損品を再利用して調整を加えている可能性もある。

６・７は二次加工のある剥片である。６は長さ７㎝，幅５～６㎝程度の剥片を折り，その末端に二次加工がなされる。左側縁には刃こぼれ状の微細剥離がみられるので，不定型石器として使用されていたことも窺われる。７は打点の横に二次加工がなされている。素材は背面構成から，打面が作業面上を周回する石核から剥離されている。

図24－８・９は凹石である。８は全面にわたり磨っていて側面を敲いている。９は両端部を敲いている。図28－10・11，図29－１は石皿で，いずれも床面から出土した。堂田Ａ遺跡の基盤岩である花崗岩を利用している。10・11の使用面はまばらに敲打痕がみられるものの，表面が滑らかで頻繁な使用が窺われる。各使用面は図28－10が窪んでいて，図28－11が平坦である。図29－１の使用面は風化の度合いが著しく，砂粒がこぼれ落ちる程である。明瞭な磨面は部分的にしか認められない。

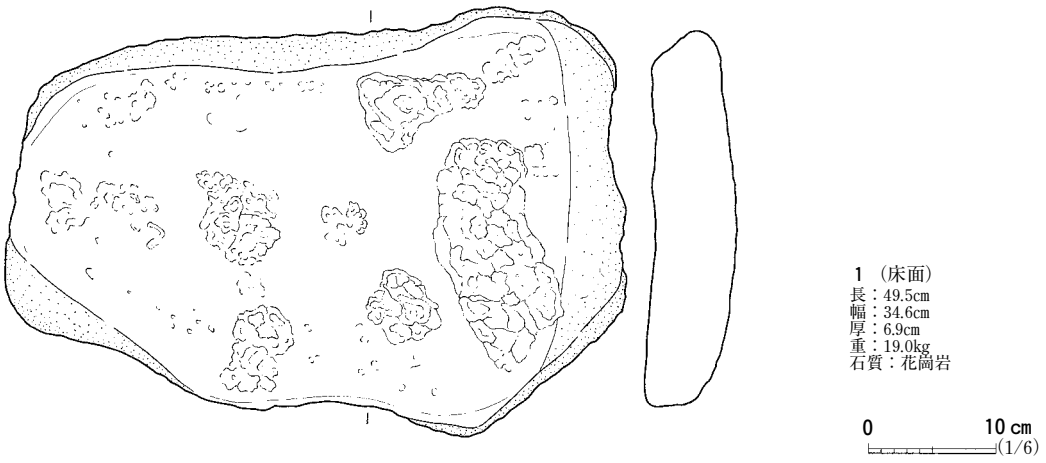


図25　７号住居跡出土遺物（３）

ま　と　め　本遺構からは炉や小穴などが検出されていないが，規模・床面の状況・出土遺物が他の住居跡と遜色がないことなどから竪穴住居跡と判断した。特に床面から多くの石皿が出土している点は５号住居跡と共通している。

住居跡の時期は，出土した遺物を参考にして，縄文時代早期末葉の大畑Ｇ式期と考えている。

８号住居跡　ＳＩ08（図26，図版18）

遺　　構　８号住居跡は調査区南西部のＤ８・Ｅ８グリッドⅥ・Ⅶ層で検出した。東向き斜面下方の標高484m付近に位置し，周囲の傾斜は比較的急である。重複する遺構は６号住居跡である。住居跡が造られた前後関係は，調査では把握することができなかった。

本住居跡の周囲には，斜面を北東側に上がったところに９・10号住居跡が，斜面を下った東側の谷底に14～19号住居跡など６軒の住居跡が頻繁に建て替えられていた。

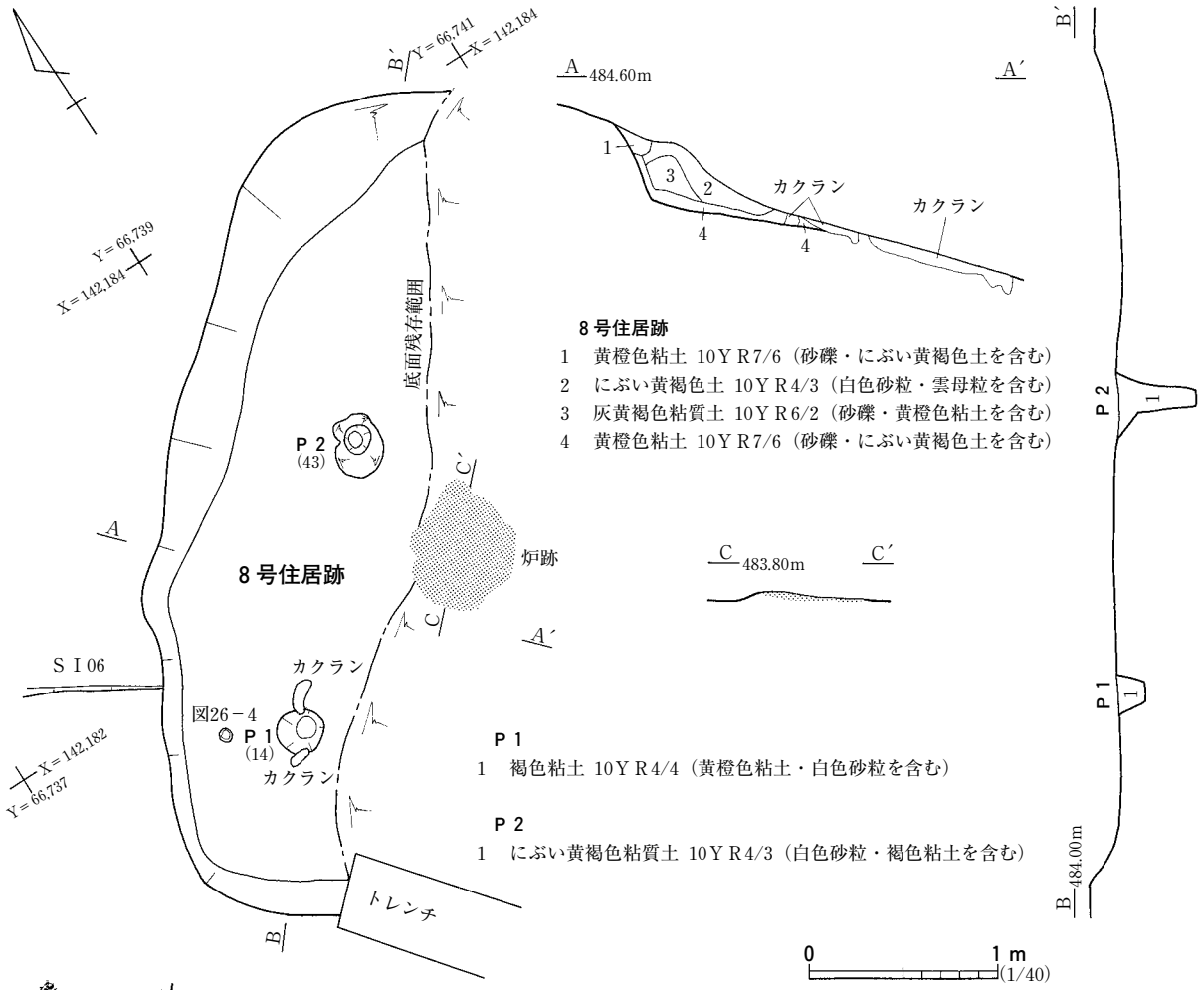
平面形は住居跡の大半を検出できなかったが，方形と思われる。規模は南北が4.4m，西壁から床面が遺存しているところで1.4mとなる。周壁はやや外傾気味に立ち上がる。最大壁高は斜面の上方側である西壁で0.57mとなる。

堆積土は４層に区分した。いずれの堆積土もⅥ・Ⅶ層と似ている土色であるので，住居を造る際の掘削土によって埋没していることが窺われる。各層の層理面はいささか特異である。特に３層は塊状に堆積し，４層はほぼ厚さを一定に堆積している。このような特徴から，人為的に埋め戻されたと考えている。床面からは小穴２と床面が失われていた部分から炉を検出した。Ｐ１・２の規模は径がほぼ0.25mである。炉は地床炉で，長軸は0.7mである。炉の下部には掘り込みはなかった。

遺　　物　８号住居跡からは縄文土器30点，石器２点，剥片５点が出土した。そのうち図26に縄文土器３点と石器２点を示した。１～３には胎土に繊維が含まれていた。１は撚糸文を地文とし，半截竹管の腹面によって沈線文が描かれている。２は縦走する縄文で，３は撚糸文が施されている。

４は磨石で全面にわたって使用されている。５は石皿で扁平な花崗岩礫の両面を使用面としている。表面は使用頻度が多かったらしく磨耗が著しい。裏面は使用頻度が少なかったらしく凹凸が著しく，磨面は部分的である。

ま　と　め　８号住居跡は一部しか検出できなかった。さらに，６号住居跡との新旧関係は把握できなかった。時期については出土土器がいずれも検出面からのもので，時期決定としての判断材料としては不十分である。本住居跡の検出面は当初の掘り込み面からすると，かなり下がっていることから，検出面とはいえ本来の堆積土からすると下層に相当するものである。このことから，出土土器を参考にすると縄文時代早期末葉の大畑Ｇ式期と考えておきたい。



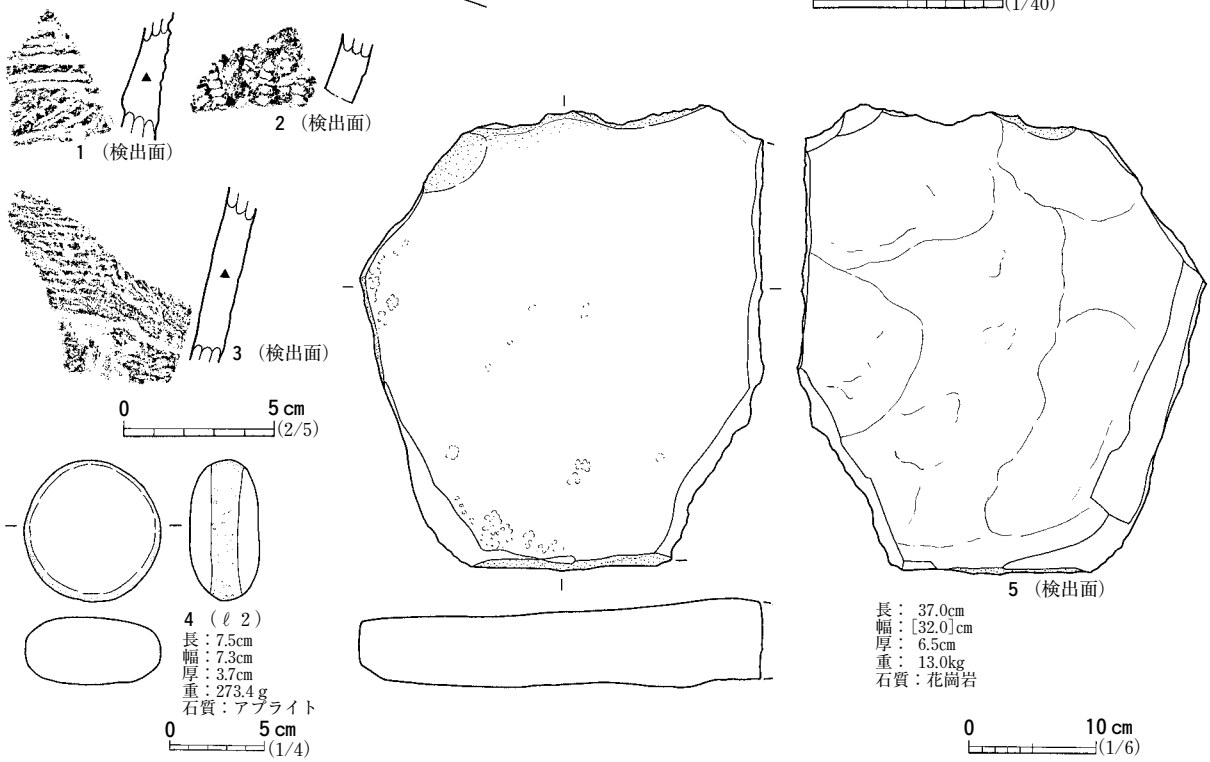


図26　８号住居跡・出土遺物

９号住居跡　ＳＩ09（図27，図版19）

遺　　構　９号住居跡は調査区中央のやや西寄りとなるＥ７グリッドⅣ層で検出した。この場所は標高484.5ｍで，東向き斜面から谷底に降りる変換点で急傾斜となっている。重複する遺構は10号住居跡で，本住居跡の西壁上端に10号住居跡の炉が設けられていた。このことにより新旧関係は，本住居跡が古い。

平面形は住居跡の大半を検出できなかったため明確ではないが，隅丸方形であったのだろう。規模は南北3.3ｍ，東西は西壁から床面が遺存するところで1.3ｍとなる。周壁は外傾気味に立ち上がる。西壁は斜面上方側であるためか，残りは比較的良く最大壁高は0.5ｍであった。

堆積土は４層に区分した。各層とも斜面上方からの流入土によって埋没した状況を示している。床面には小穴がなかった。しかし，床面が流失した部分から炉を検出した。炉は地床炉で長軸0.38

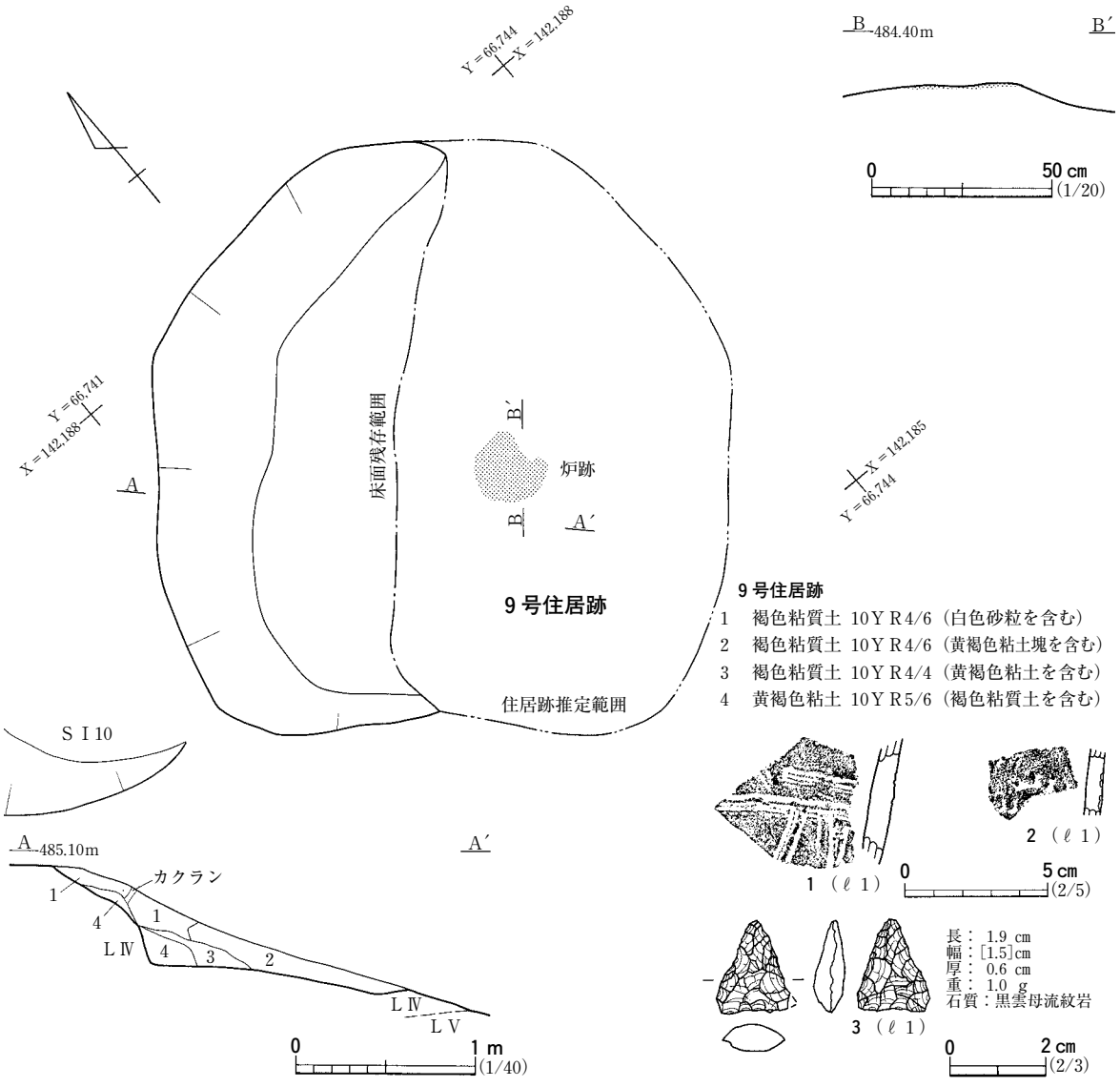


図27　９号住居跡・出土遺物

m，下部には掘り込みはなかった。炉は床面から15㎝程下の地点にあるので，当初はかなり下層まで焼土面が及んでいたことが分かる。

遺　　物　９号住居跡からは縄文土器７点，石器１点，剥片11点が出土した。そのなかで図示したのは縄文土器２点・石器１点のみである。

１・２は第１層から出土し，胎土には繊維が含まれない。１は半截竹管と櫛歯状工具によって沈線文が，２は半截竹管による刺突文が描かれている。３は石鏃で平基の無茎鏃である。器面全体に調整が及んでいるものの厚みがあるので，粗割した素材から作られたとみられる。

ま　と　め　９号住居跡は急斜面に位置していたためか，一部しか検出できなかった。炉は床面が流失した部分から検出した。時期は出土土器を参考にすると縄文時代早期中葉常世１式期と判断される。

10号住居跡　ＳＩ10（図28，図版20）

遺　　構　10号住居跡は調査区中央部のＤ７，Ｅ６・７グリッドⅣ・Ⅴ層から検出した。本住居跡は東向き斜面下方の標高485ｍにあり，調査区の住居跡で最も高い場所にある。重複する遺構は９号住居跡である。本住居跡の炉が９号住居跡の検出面に作られていたので，新旧関係は本住居跡が新しい。付近にある遺構は南側に６号住居跡，北東側に13号住居跡が位置する。

平面形は住居跡の一部を検出したのみであるが，おそらく不整方形であろう。南北は5.3m，東西は西壁から床面が遺存しているところまで2.6ｍとなる。周壁は西壁のみを検出した。壁は外傾気味に立ち上がり，西壁の北半分は２段となる。壁の遺存状態は良好で，最大壁高は1.06ｍである。

堆積土は５層に区分した。大きく分けるとⅢ・Ⅳ層と対応する１～３層とⅦ層と対応する４・５層となる。このことから，住居の掘削土および壁の崩落土によって埋没していることが分かる。

床面からは小穴を検出していない。炉は床面遺存範囲の東端から検出した。炉の長軸は0.7ｍで，下部には掘り込みなどはみられなかった。

遺　　物　10号住居跡からは縄文土器66点，剥片３点が出土した。そのうち８点を図示した。

１～５・８は胎土に繊維を含まないものである。１～４は口縁部の破片で，いずれも口唇部にも施文されている。そのうち２・３は波状口縁である。外面と口唇部ともに施文が同じなのは１・２で，１は絡条体圧痕文，２は半截竹管による斜め方向の刺突文である。３・４には櫛歯状工具による刺突文が，口唇部にはキザミがなされる。８は底部で，乳首状の尖底である。８は内外面ともに条痕文がなされ，外面には炭化物が付着している。６・７には胎土に繊維が含まれている。６は口縁部の破片で，強く外反している。外面に撚糸文，内面は，口唇部では撚糸文，胴部では無文で，ナデのみ認められる。７の外面は斜行する撚糸文，内面はナデである。

ま　と　め　10号住居跡は調査区の住居跡のなかで規模が最も大きく，高い位置に造られていた。重複する遺構は９号住居跡で，本住居跡が新しい。時期は堆積土から出土した遺物を参考にすると，縄文時代早期末葉大畑Ｇ式期と考えておきたい。

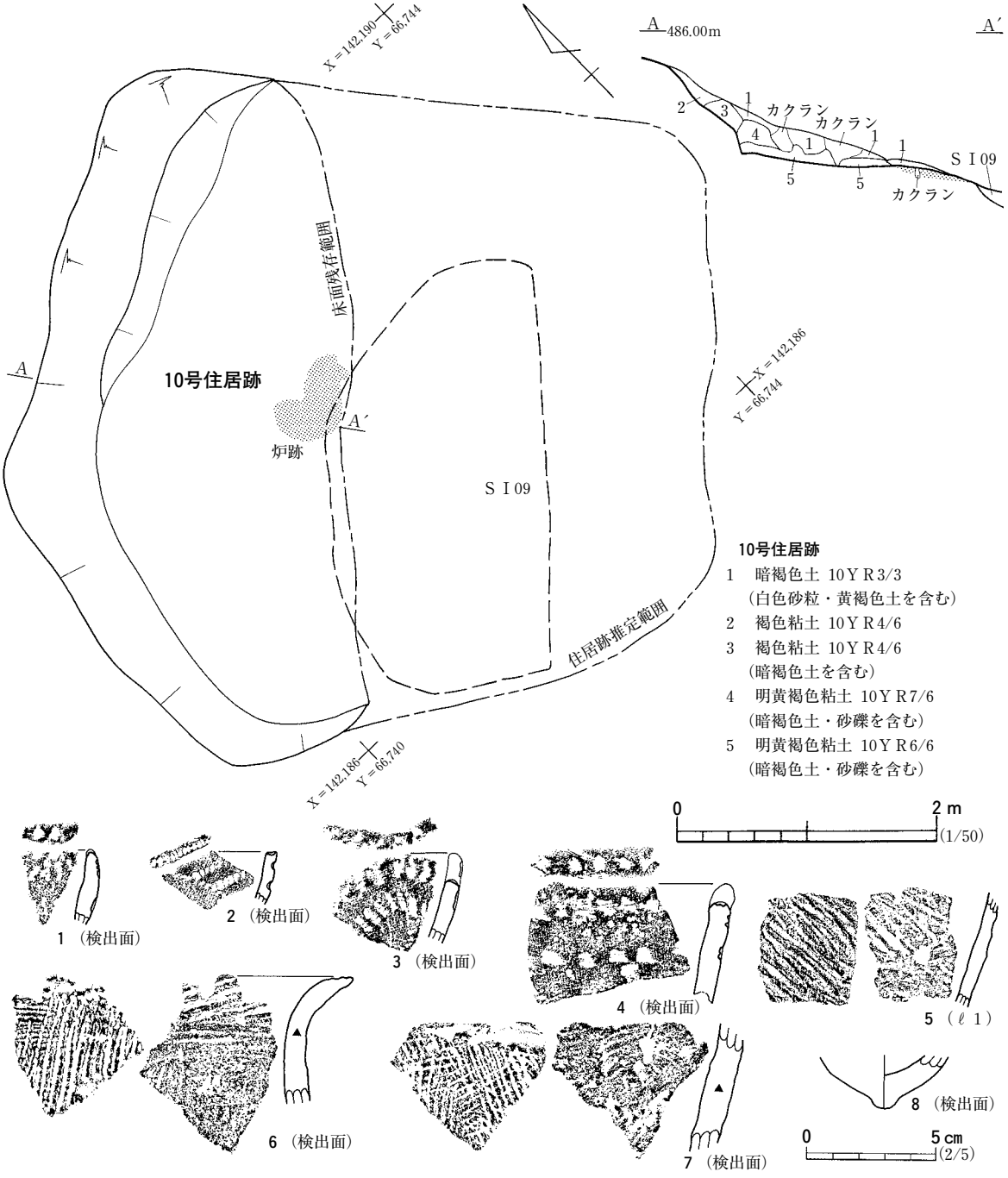


図28　10号住居跡・出土遺物

11号住居跡　ＳＩ11（図29，図版21）

遺　　構　本遺構は調査区南東端のＧ９，Ｈ９・10グリッドⅣ層上面から検出した竪穴住居跡である。ここは標高482ｍの南向き緩斜面で，谷底が広がるところである。住居跡が集中して構築されている箇所に対してやや離れた場所にあり，さらに最も標高の低い場所でもある。

重複する遺構は12号住居跡である。本住居跡の検出面に炉が設置されていたので，新旧関係は本住居跡の方が古い。

平面形は住居跡の大半が調査区外にあるため明確ではないが，楕円形であると思われる。東西は3.6m，南北は北壁から調査区際まで1.6mである。周壁はやや直立気味に立ち上がり，最大壁高は0.33mである。堆積土はいずれも黒褐色土であるが，含有物の違いで３層に区分した。斜面上方からの流入土によって住居跡が埋没している。

床面はほぼ平坦で，小穴１基を検出した。Ｐ１は半分ほどが調査区外にあり，規模は残存する長軸0.74mである。

遺　　物　11号住居跡からは縄文土器18点，剥片類84点が出土した。そのうち図29に縄文土器を３点，石核１点を掲載した。図29－１～３はいずれも胎土に繊維を含まないものである。１は口縁部の破片で，口唇部にキザミがなされる。１・２は櫛歯状工具による押引文である。３は内外面とも

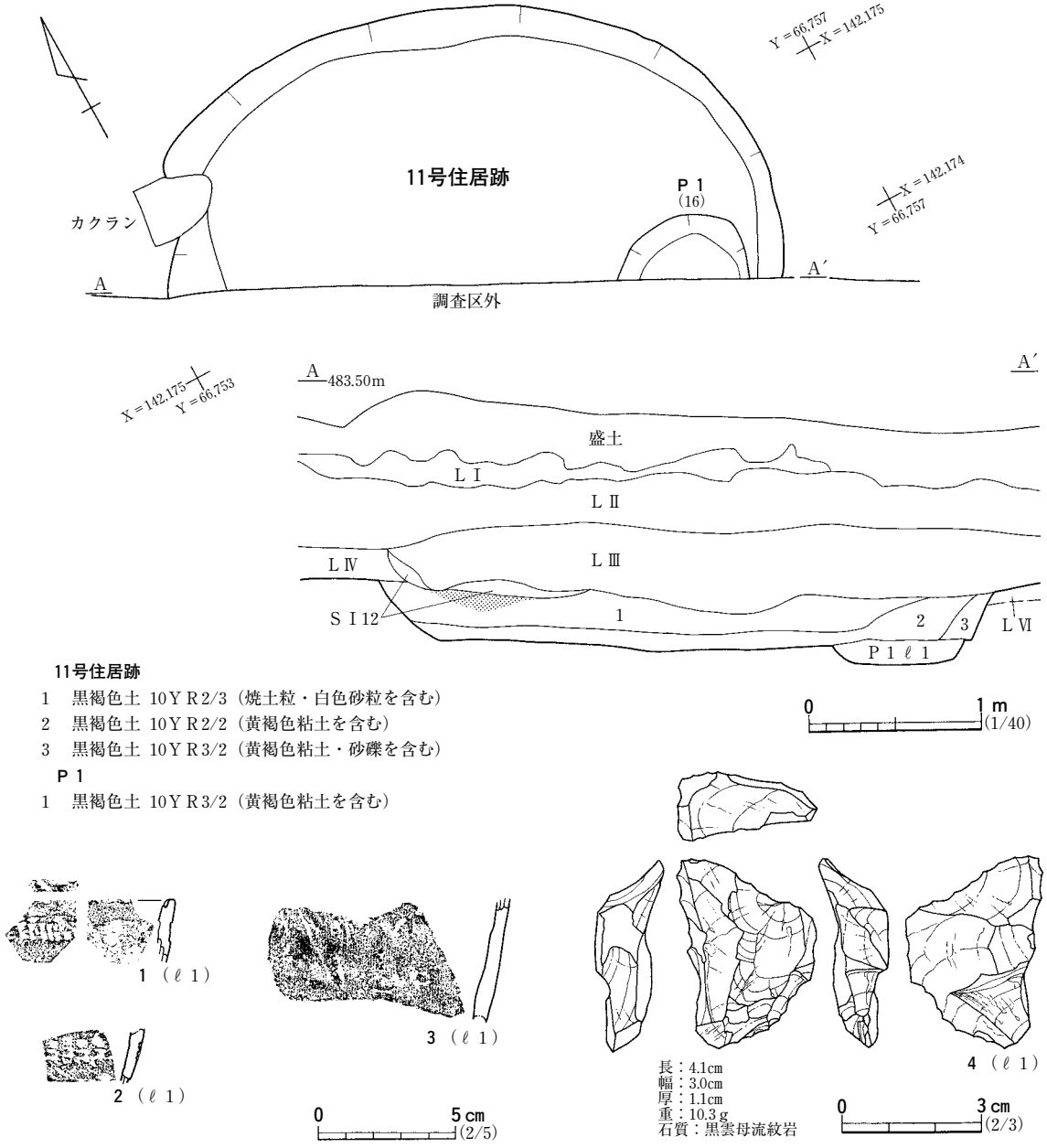


図29　11号住居跡・出土遺物

に無文でナデ調整のみが認められる。４は剥片素材の残核であろう。図正面の上が最終剥離面である。打面転移が著しく，定型的な剥片を採っていたのではないとみられる。

ま　と　め　11号住居跡はその大半が調査区外にあるために，住居跡全体の形状や内部施設などは不明な点が多い。時期は，出土遺物から縄文時代早期中葉常世１式期と考えられる。

12号住居跡　ＳＩ12（図30，図版22・35）

遺　　構　本遺構は調査区南東部端のＧ９・Ｈ９グリッドⅣ層上面で検出した竪穴住居跡である。この場所は標高482.5ｍで，谷底が東側へと広がる南向き緩斜面となっている。重複する遺構は11号住居跡である。遺構検出の段階では11号住居跡を新しいと判断して精査を行ったため，本住居跡の大半を失ってしまった。だが，結果的に新旧関係は図30ＡＡ´に示すとおり，本住居跡が新しいことが判明した。

平面形は北壁と東壁の一部を検出した。そのため，住居跡全体の形状は明確ではないが，長方形を基調とすると推定している。規模は東西が2.7ｍ，南北は住居跡の南西部が調査区外にあるため，北壁から調査区際までが2.8ｍである。周壁の最大壁高は0.15ｍであり，立ち上がりは僅かである。

堆積土は２層に区分したが，堆積土の大半は第１層である。図30ＡＡ´をみると，本住居跡の堆積土が断片的にしかみられず，堆積土が流失してしまったことを示している。

床面からは小穴２基を検出した。Ｐ１は床面の北西端に位置し，径0.24ｍである。Ｐ２は床面の北東部に位置し，径0.32ｍである。炉は11号住居跡を精査の際に掘り下げてしまった。

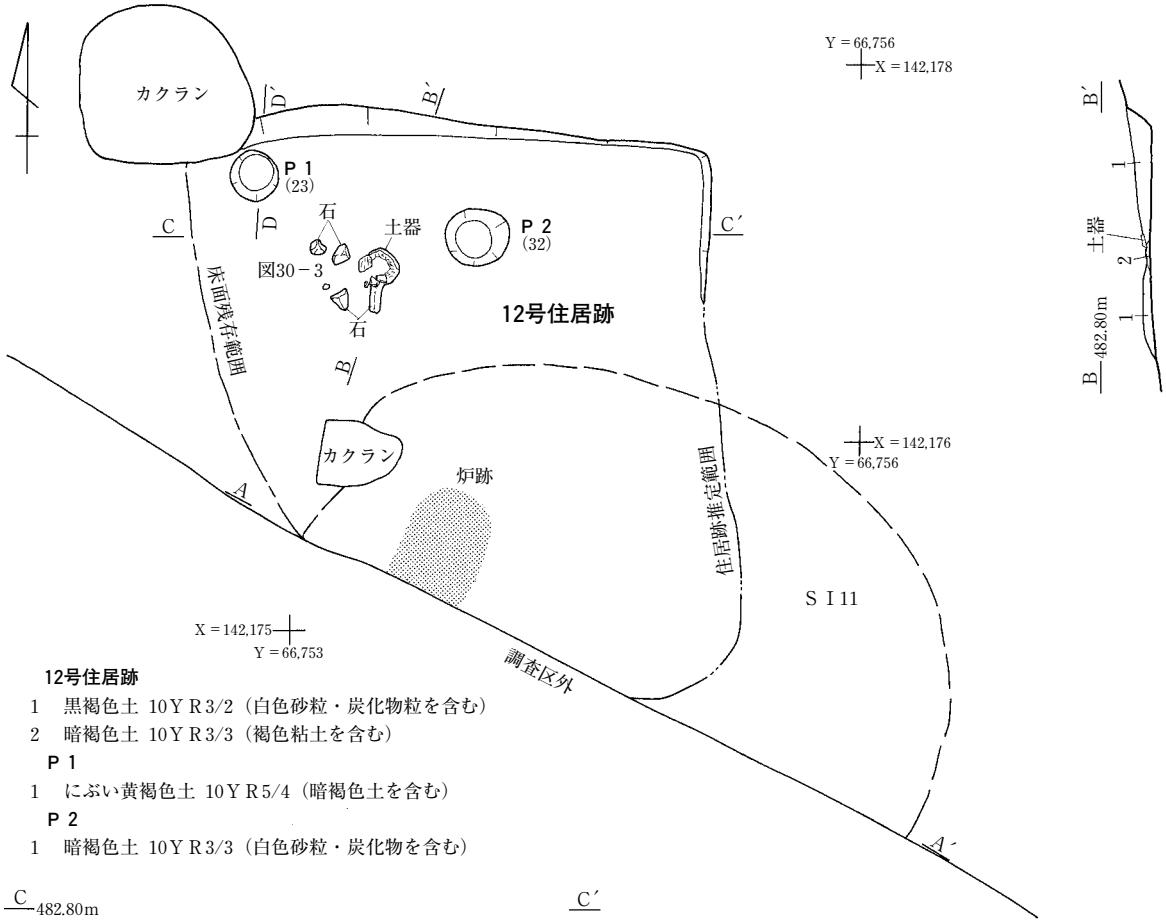
遺　　物　12号住居跡からは縄文土器91点，剥片６点が出土した。土器は床面北西部から破片の状態で内面を上にして出土した。それらの多くは，再度火を受けたような状況であった。周辺には礫が散らばっていた。そのなかで，図30に縄文土器４点を掲載した。図30－１～４はいずれも胎土に繊維を含むものである。１は撚糸文を地文として，半截竹管による沈線文が描かれている。胎土には長石が多量に含まれていた。２～４には撚糸文が施されているが，３・４では施文の方向を変えている。２・３の内面は外面と比べ脆く，焼成後再度火を受けたような状況を示している。

ま　と　め　12号住居跡は調査の不手際により，住居跡の大半を欠損してしまった。時期は床面から出土した土器から，縄文時代早期末葉大畑Ｇ式期と考えている。

13号住居跡　ＳＩ13（図31，図版23・55）

遺　　構　本住居跡は調査区中央やや北西寄りのＥ６・Ｆ６・Ｅ７グリッドⅥ層で検出した。この場所は標高484.5ｍ，東向き斜面で谷底への落ち際である。重複する遺構は５号住居跡である。新旧関係は５号住居跡が本住居跡を掘削して造られているので，本住居跡の方が古い。付近には南東に近接して９号住居跡が，谷底には14～19号住居跡など６軒の住居跡が重複していた。

本住居跡の平面形は，北壁しか検出できなかったので全体の形状はよく分からない。規模は東西が現状で4.9ｍ，南北は北壁から床面遺存範囲までが1.4ｍである。壁の立ち上がりは外傾気味で，



12号住居跡

1　黒褐色土 10ＹＲ3/2（白色砂粒・炭化物粒を含む）

2　暗褐色土 10ＹＲ3/3（褐色粘土を含む）

Ｐ１

1　にぶい黄褐色土 10ＹＲ5/4（暗褐色土を含む）

Ｐ２

1　暗褐色土 10ＹＲ3/3（白色砂粒・炭化物を含む）

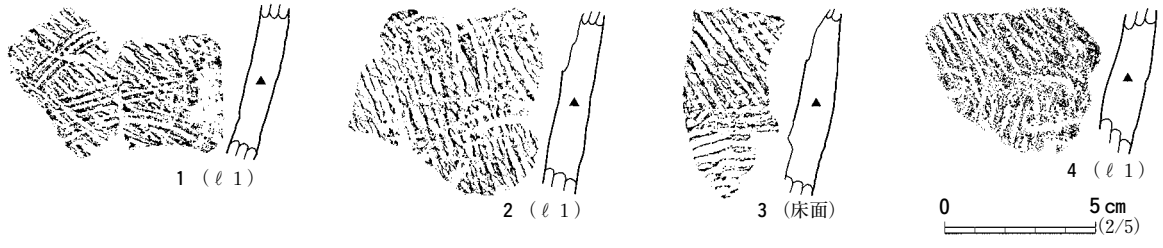


図30　12号住居跡・出土遺物

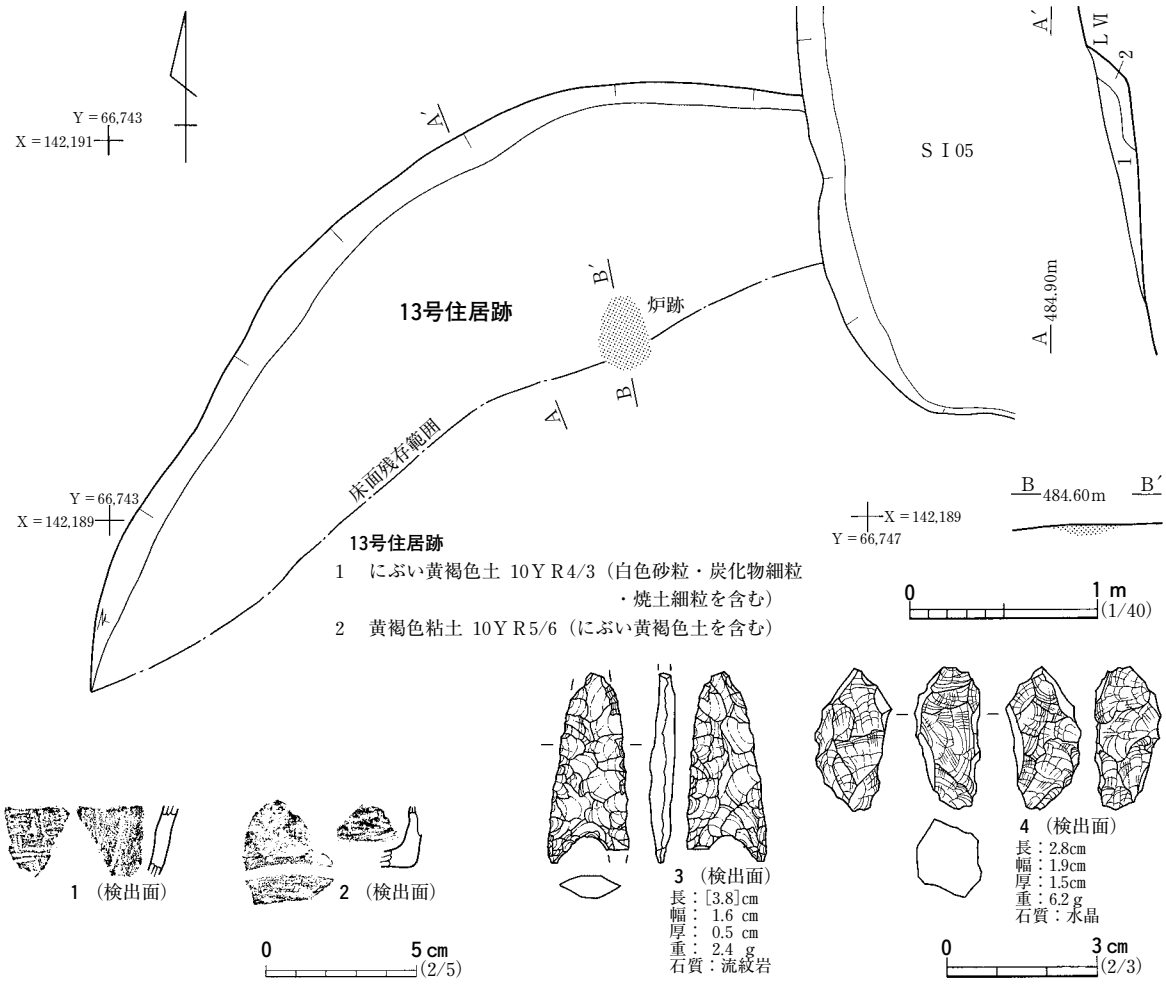


図31　13号住居跡・出土遺物

最大壁高は0.21ｍである。

堆積土は２層に区分した。いずれも斜面上方からの流入土により埋没している。床面は斜面の傾斜に沿って僅かに傾斜している。床面からは炉のみを検出した。炉は床面遺存範囲の際にあり，住居跡全体の形状を推定してみると，北側に寄っているようである。長軸は0.4ｍで，下部には掘り込みなどはなかった。

遺　　物　13号住居跡からは縄文土器６点，石器１点，剥片類７点が出土した。そのうち，縄文土器２点，石器類２点を掲載した。図31－１・２は胎土に繊維がほとんど含まれないものである。１は内外面ともに条痕文である。２は平底の底部で，外面の器面は剥離，内面には条痕文が施されている。図35－３は大型の石鏃で凹基の無茎鏃である。先端と基部の一部が欠損している。先端部の鋭角さが鈍い。図35－４は水晶の石核で，最終剥離面は図面正面の上である。剥離面の大きさからみると，小さな剥片を採取したと思われる。

ま　と　め　13号住居跡は壁の一部のみを検出しただけなので，全体の形状は明確ではない。時期は５号住居跡との新旧関係から，縄文時代早期中葉と推定している。

14号住居跡　ＳＩ14（図32，図版24・36・55）

遺　　構　本遺構は調査区中央のＥ７・Ｆ７・Ｅ８グリッドⅤ層で検出した竪穴住居跡である。本住居跡が位置する場所は，標高483ｍの谷底であるがやや東向き斜面側に位置する。重複する遺構は15～19号住居跡である。新旧関係は本住居跡が最も新しい。付近には７号住居跡が北東側に近接する。

本住居跡の南半分を検出できなかったが，平面形は逆台形となっている。規模は東西が3.8m，南北が北壁から床面遺存範囲までが2.5mである。周壁は外傾気味に立ち上がり，最大壁高は0.31mである。堆積土はいずれも暗褐色土であったが，含有物の違いで２層に区分した。１層からは大型の炭化物が出土している。２層は貼床土である。

床面はほぼ平坦である。床面からは小穴や炉などはなかった。西壁からは焼土塊が出土したが，おそらく炭化物に伴うものであろう。

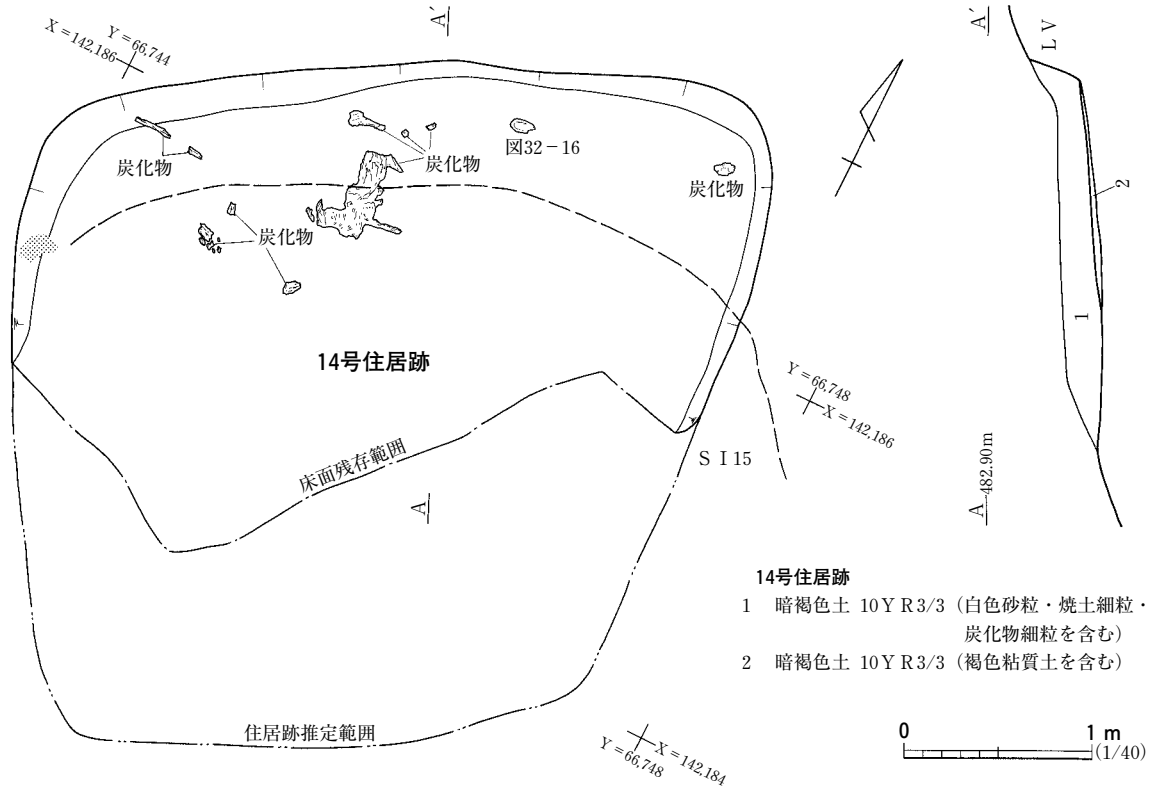
遺　　物　14号住居跡から出土した遺物は縄文土器83点，石器３点，剥片類44点，炭化物などである。炭化物は第１層から出土したもので出土状況からみると，住居跡の廃材等に火を付けた状況が窺われるものの，炭化物の量が少ない。出土遺物のうち，縄文土器12点，石器類４点を図32に示した。

１～４の胎土には繊維がほとんど含まれていない。１は線間幅の狭い平行沈線が施され，２は口縁部の破片で，施文は頸部に指頭圧痕と線間幅の広い平行沈線の組み合わせとなっている。３は口縁部の破片で外面に細隆起線文，内面に条痕文がなされる。４は平底の底部で内外面とも条痕文がなされる。

５～12は胎土に繊維が含まれている。５～８の外面には撚糸文を地文とし半截竹管による沈線文が描かれている。５～７は外反する口縁部の破片で，内面上端部には条痕が認められる。５・12の器面は脆く砂粒がこぼれ落ちる程で，内面には繊維混入の痕跡が窪みとなって認められる。８の内面は無文でナデが施されている。９～12は外面に斜方向の撚糸文が施されているが，10・11はさらに方向を変えて撚糸文を加えている。内面は無文でナデが施されている。

13・14は石鏃で，凹基の無茎鏃である。14の背面には素材剥離時の剥離面を残している。16は床面から出土している凹石で，ほぼ全面に磨り痕も認められる。15は黒雲母流紋岩の剥片素材の石核で，裏面に素材時の剥離面を残す。上下端に細かい剥離が認められ，両極打法による石核と思われる。

ま　と　め　14号住居跡は，大型の炭化物が出土するが，焼失家屋とするには炭化物の出土量が少ない。炭化物の一部については炭素年代測定を実施した。暦年代は5465～5315ｃａｌＢＣで約９割の確率で5475～5315ｃａｌＢＣの年代となっている（付編１参照）。遺構の時期は，堆積土から出土した遺物を参考にすると縄文時代早期末葉大畑Ｇ式期と考えられる。



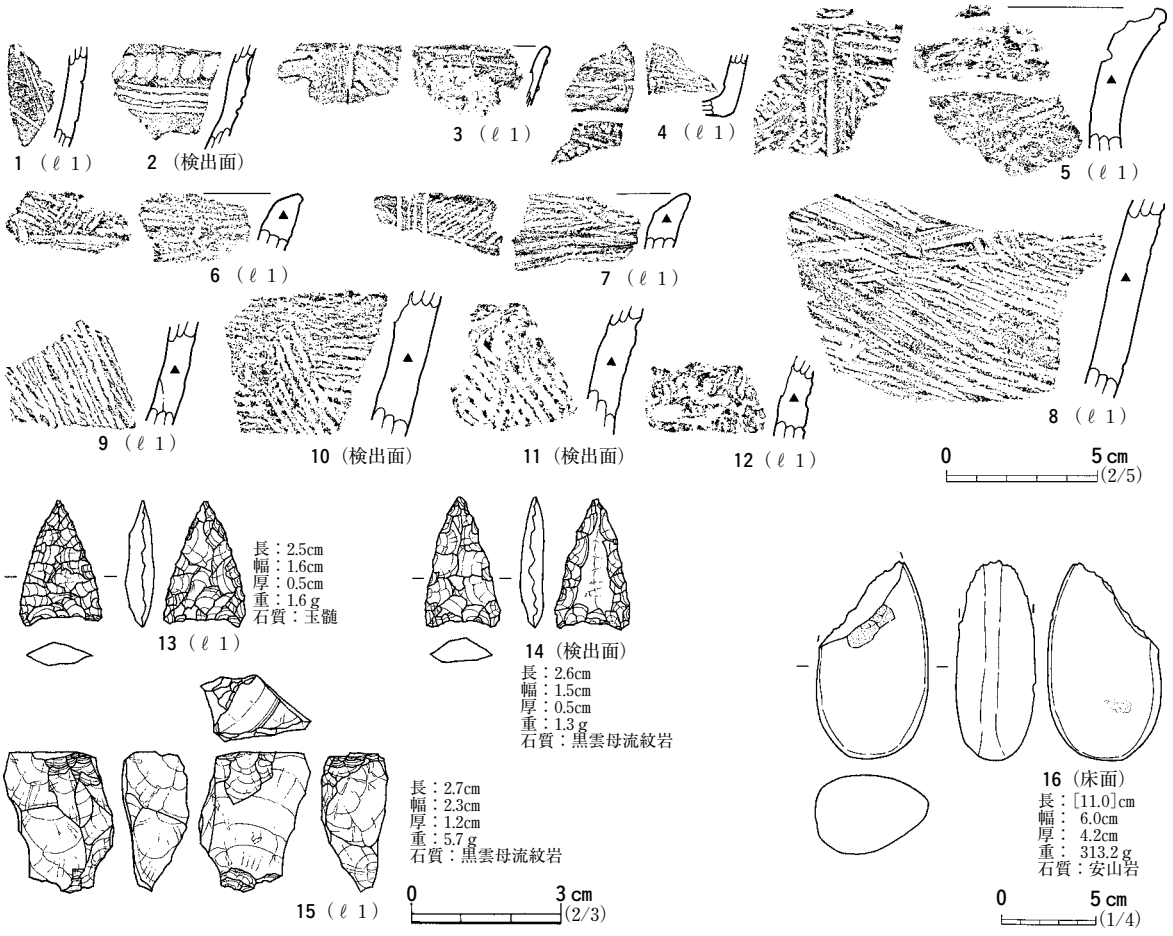


図32　14号住居跡・出土遺物

15号住居跡　ＳＩ15（図33～35，図版25・37・55～57）

遺　　構　本遺構は調査区中央からやや南寄りとなるＥ７・Ｅ８・Ｆ７・Ｆ８グリッドⅤ層から検出した竪穴住居跡である。この場所は谷底の中央にあたり南向きに緩やかに傾斜し，標高は483m前後である。重複する遺構は14・16～19号住居跡である。新旧関係は14号住居跡よりは古く，16～19号住居跡よりは新しい。周辺には７号住居跡が北東側に近接する。

本住居跡は北壁のみしか検出できなかったが，小穴の配置状況から平面形は不整楕円形とみられる。規模は推定値であるが東西5.1m，南北6.2mほどである。周壁は外傾気味に立ち上がり，最大壁高は0.24mである。

堆積土は３層に区分した。３層はⅦ層を床面とした部分の掘削土が再流入したものであろう。

床面は北西部のみを検出したに過ぎない。住居内施設は小穴を16個検出したものの，炉はなかった。Ｐ１～16は周壁に沿って配置されているが，住居跡の南側では検出していない。小穴の直径は

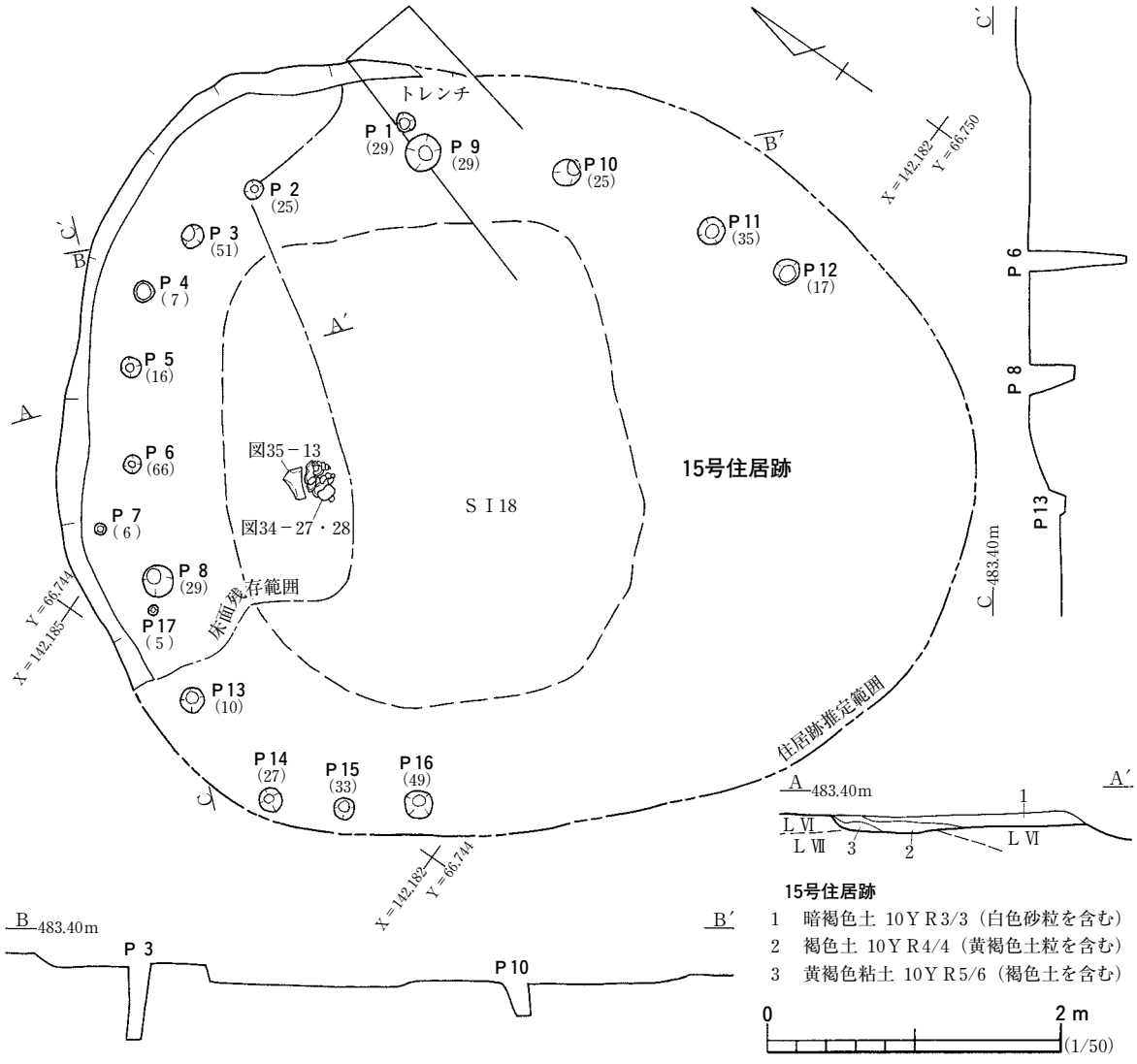


図33　15号住居跡

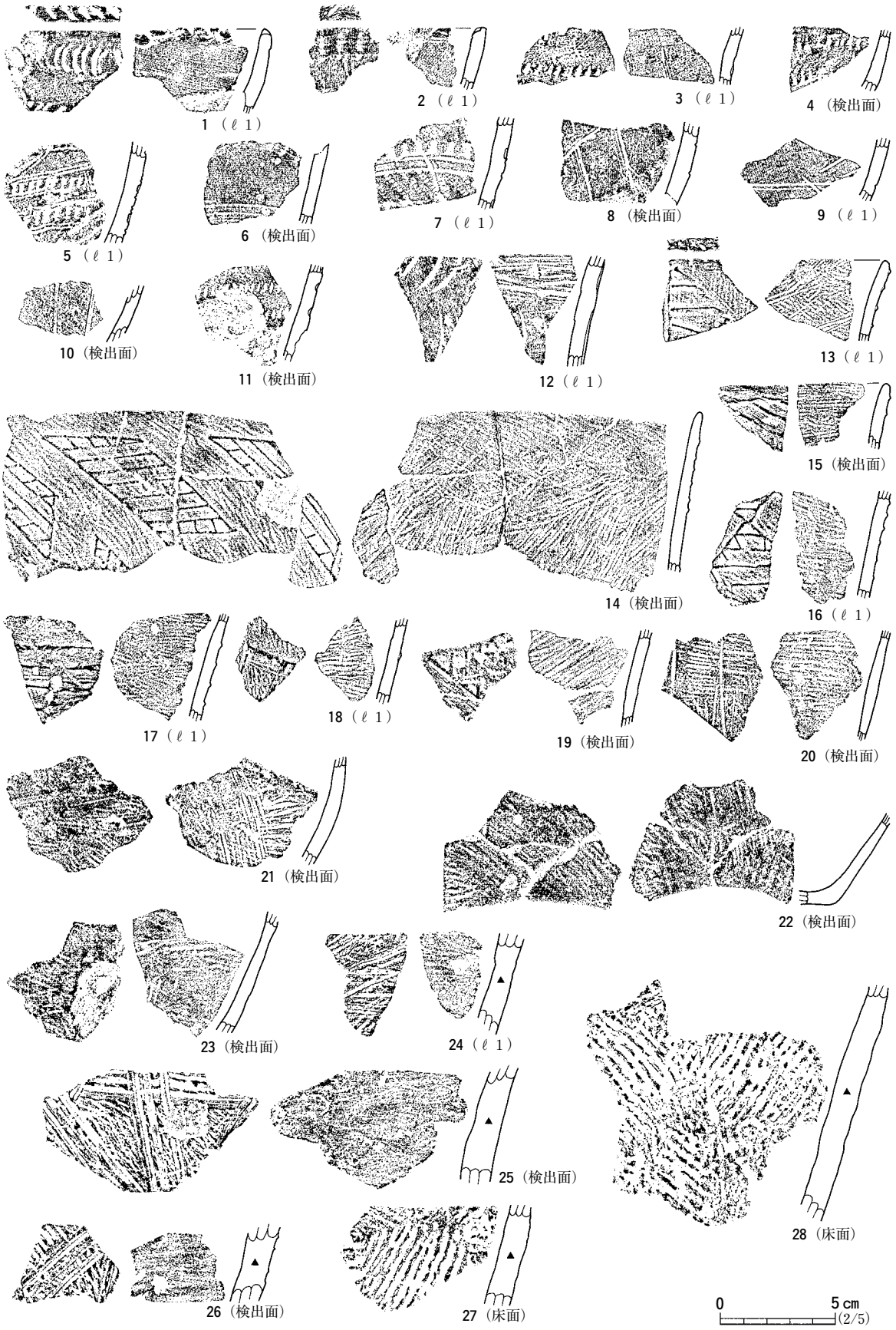


図34　15号住居跡出土遺物（１）

８～25cmまであり，大半のものは15cm前後となっている。深さは５～51cmまであるが，大半のものは16～35cmの範囲に収まる。Ｐ１～16はその配置から壁柱穴とみられるが，主柱穴がないので壁柱穴で上屋を支えていたと思われる。

遺　　物　15号住居跡からは縄文土器222点，石器５点，剥片162点が出土した。そのうち図34に縄文土器，図35に石器・剥片を示した。

掲載した土器のなかで，早期中葉～後葉に比定される土器については，重複する16・18・19号住居跡の出土土器と同一個体とみられるものがある。それは図34－１と16号住居跡図37－２・３などである。

図34－１～21には胎土に繊維がほとんど含まれていない。１・２は口縁部の破片で，押引文に口

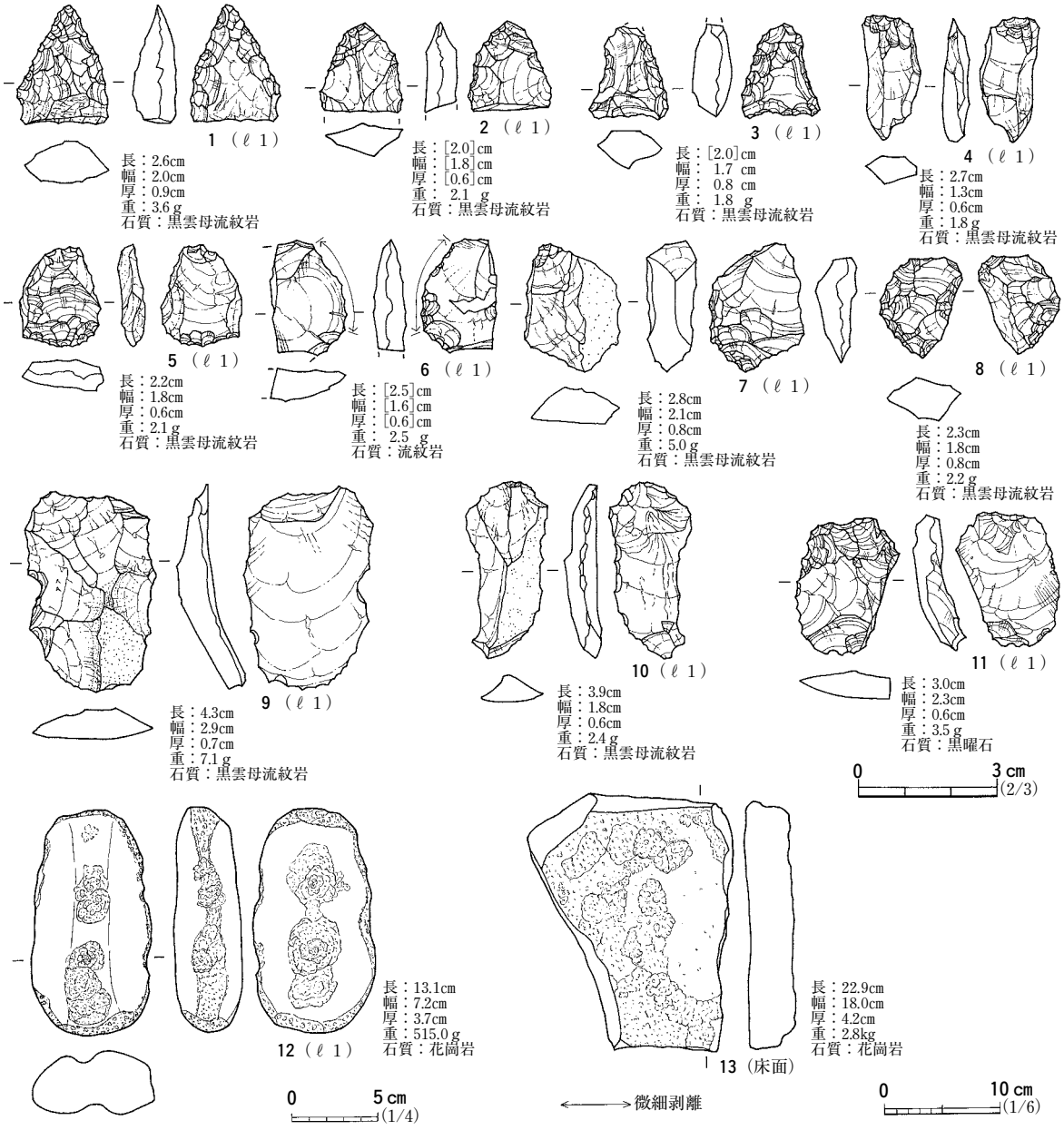


図35　15号住居跡出土遺物（２）

唇部は刻みがなされている。３・４・11は絡条体圧痕文，５・６は押引文と平行沈線文とが組み合わさる。７は押引文・絡条体圧痕文・平行沈線文が組み合わさる。８～10は沈線文で，９の器面は丁寧にナデられている。12の外面は貝殻腹縁文，内面は貝殻条痕文であろう。

13～15は口縁部，19～21は胴部下半，23は平底の底部である。13～18は外面が細隆起線文で幾何学文様を描き，内面が条痕文である。16～19は条痕文を地文として細隆起線文を描いている。19～23は内外面ともに条痕文がなされている。23の内面には炭化物が付着している。

24～28は胎土に繊維を含むものである。24～26は撚糸文を地文とし，半截竹管によって沈線文が描かれている。27・28は外面に撚糸文，内面にはナデが施されている。この２点は床面から出土しているが，重複する14号住居跡の遺物である可能性が高い。

図35－１～３は石鏃未製品で，１・３はある程度石鏃としての形状が整えられている。１は基部に節理面が残っている。

図35－４～11は剥片である。４は両側縁を折った剥片で打面部に二次的な剥離がなされている。５は側縁に二次加工，６は折った剥片素材の側縁に不連続な剥離が行われている。７は大型剥片を分割したもので，腹面の上下から二次加工がなされている。10・11は末端に二次加工がなされる。打面はいずれも多剥離打面となっている。

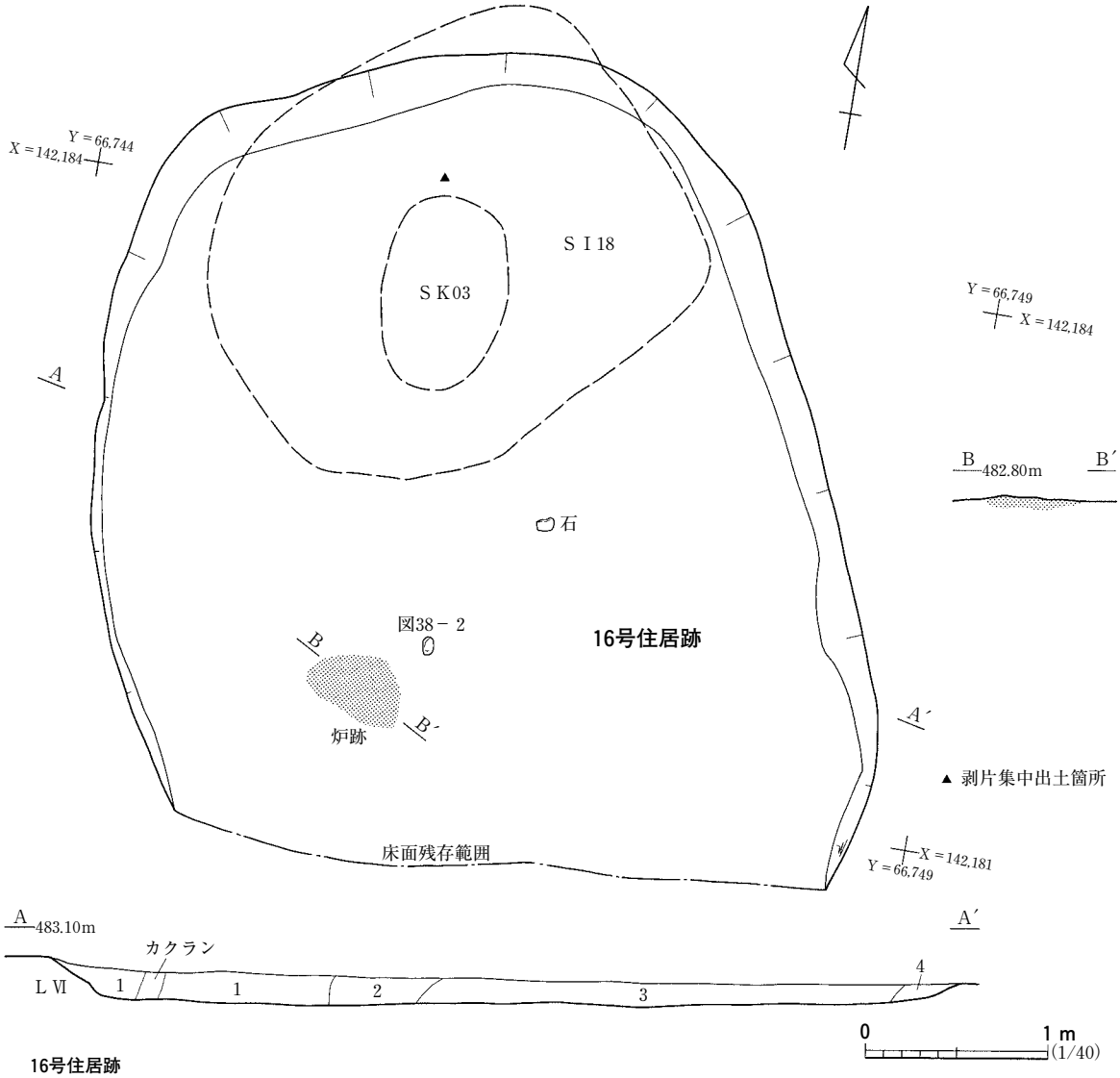
図35－12は凹石であるが，磨石・敲石も兼ねている。凹みの度合いが著しい。図39－13は石皿で床面から出土した。表面は敲打痕と部分的に磨面が認められる。

ま　と　め　15号住居跡は調査区から検出した住居跡のなかで，唯一柱穴の構成が窺われ，壁柱で上屋を支えていたらしい。時期は，床面から出土した土器は縄文時代早期末葉のものであるが，混入の可能性もあり，住居跡の形態，出土遺物の大多数を占める土器から早期後葉槻木１式期と考えている。

16号住居跡　ＳＩ16（図36～38，図版26・38・55～57）

遺　　構　本遺構は調査区の中央南寄りＥ・Ｆ８グリッドⅥ層上面から検出した竪穴住居跡である。ここは標高483m前後で，谷底の真中で南に向って緩やかに傾斜している。重複する遺構は15～19号住居跡と３号土坑である。本住居跡からみた新旧関係は14・15号住居跡が新しく，18・19号住居跡と３号土坑が古い。付近には７号住居跡が北東側に位置する。

平面形は隅丸長方形である。規模は東西が４ｍ，南北は南壁が欠損しているため現状で4.7ｍとなる。周壁は外傾気味に立ち上がり，最大壁高は0.37ｍである。堆積土は４層に区分した。層理面を観察すると，斜面上方からの流入によって堆積した状況がみられないので，人為堆積と考えている。床面はほぼ平坦である。床面からは炉を検出したものの，小穴などは認められなかった。炉は床面の南西部で検出した。地床炉で，北西－南東方向の軸が28㎝となる。炉の下部には掘り込みなどは確認されなかった。そのほか，住居跡の北半において黒雲母流紋岩製の剥片の集中出土が認められたが，確実に本住居跡に伴うものかは不明である。



16号住居跡

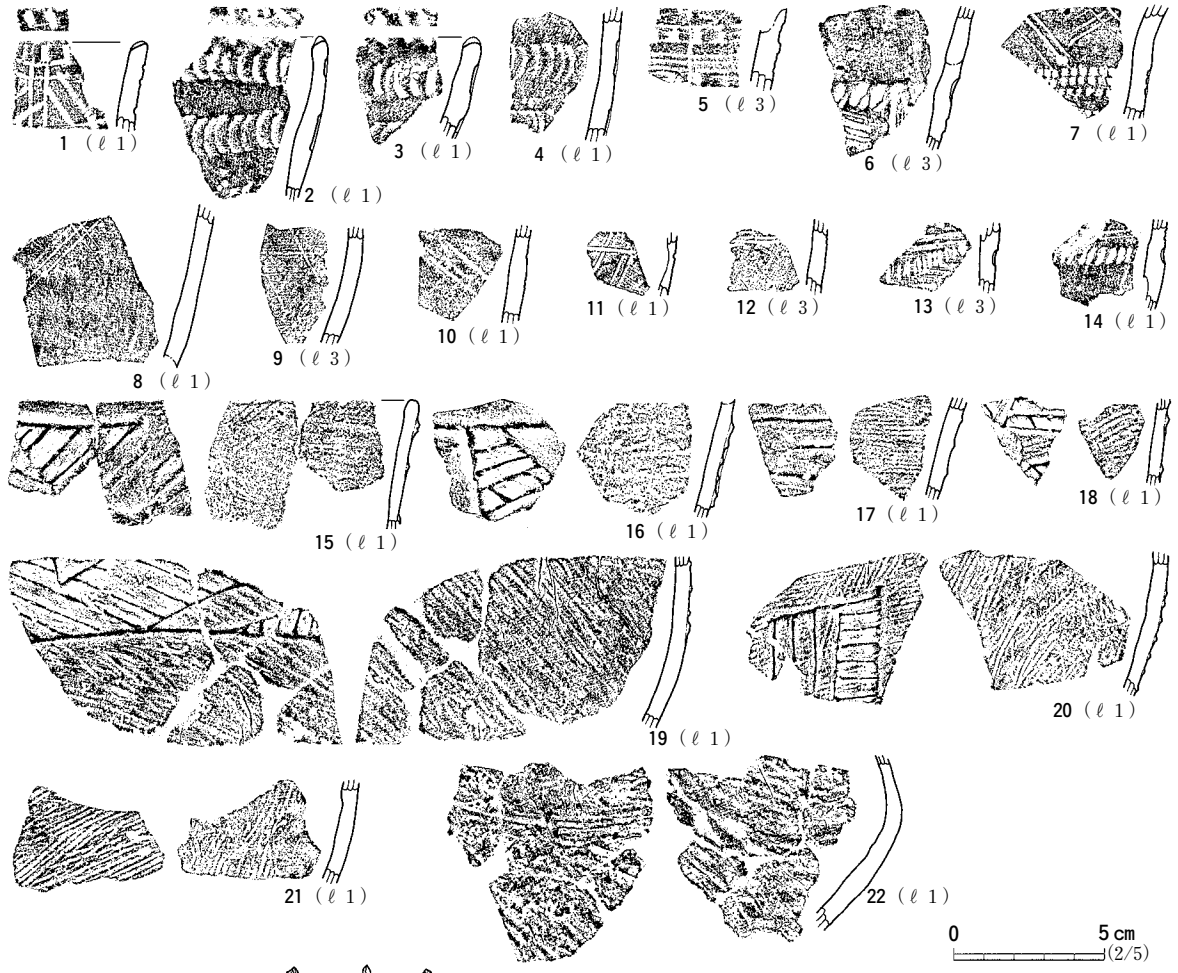
1　黒褐色土 10ＹＲ3/2（褐色土粒・白色砂粒・炭化物粒を含む）
2　暗褐色土 10ＹＲ3/3（褐色土粒・白色砂粒・炭化物粒を含む）
3　黒褐色土 10ＹＲ2/3（褐色土粒・白色砂粒・炭化物粒を含む）
4　褐色土 10ＹＲ4/4（黒褐色土を含む）

図36　16号住居跡

遺　　物　16号住居跡からは縄文土器183点，石器７点，剥片類473点が出土した。剥片類の出土点数は，他の住居跡と比較するとかなり多い。

出土遺物のうち図37に縄文土器22点，図37・38に石器・剥片類14点を図示した。掲載した土器のなかには，15・19号住居跡の出土土器と同一個体とみられるものがある。それは図37－２・３と15号住居跡図38－１，図37－６と19号住居跡図41－４，図37－17と15号住居跡図34－16・17である。時期的には，早期中葉から末葉までの土器が見られ，数量的には早期中～後葉に属するものが多く，末葉の破片は小破片が混じる程度である。

図37－１～22の胎土には繊維が含まれていない。１～３・15は口縁部の破片である。１～３は口唇部に刻みが施されている。１は絡条体圧痕文・押引文・平行沈線文が組み合わさる。２～４は押引文，５は押引文と平行沈線文が組み合わさる。６は押引文と平行沈線が組み合わさる。押引文は



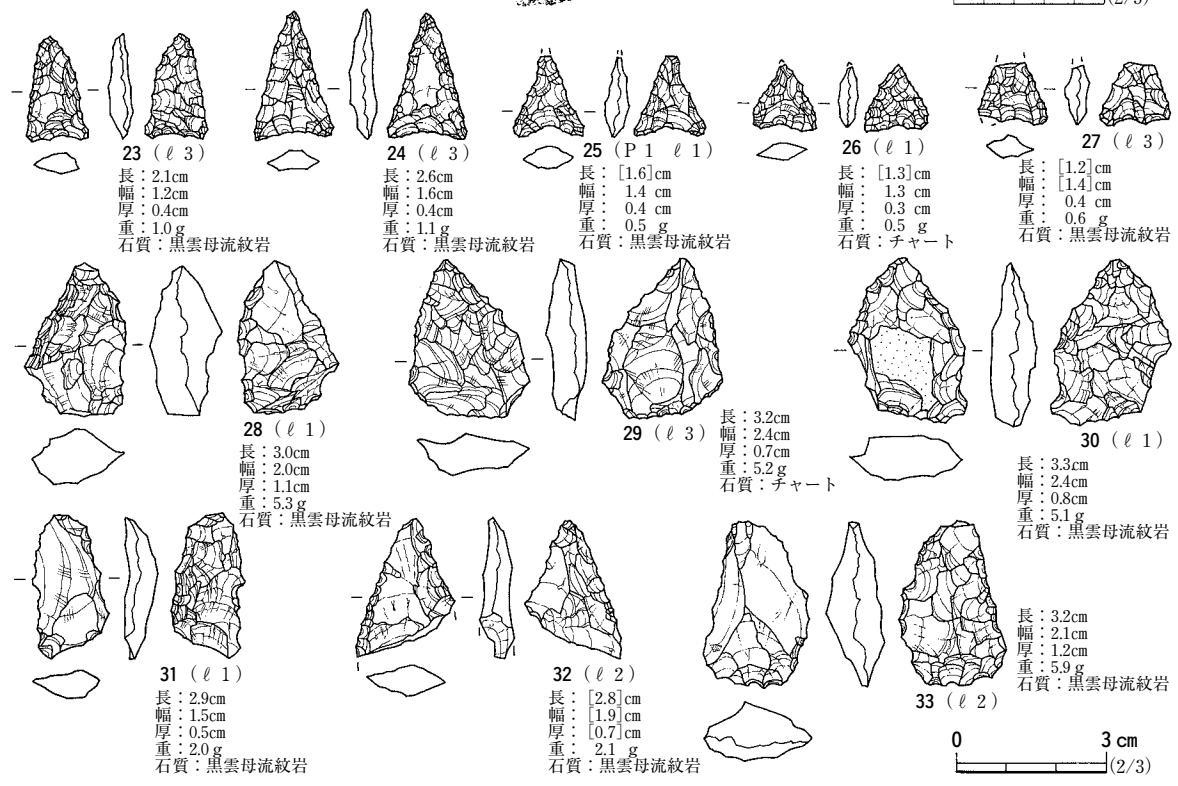


図37　16号住居跡出土遺物（１）

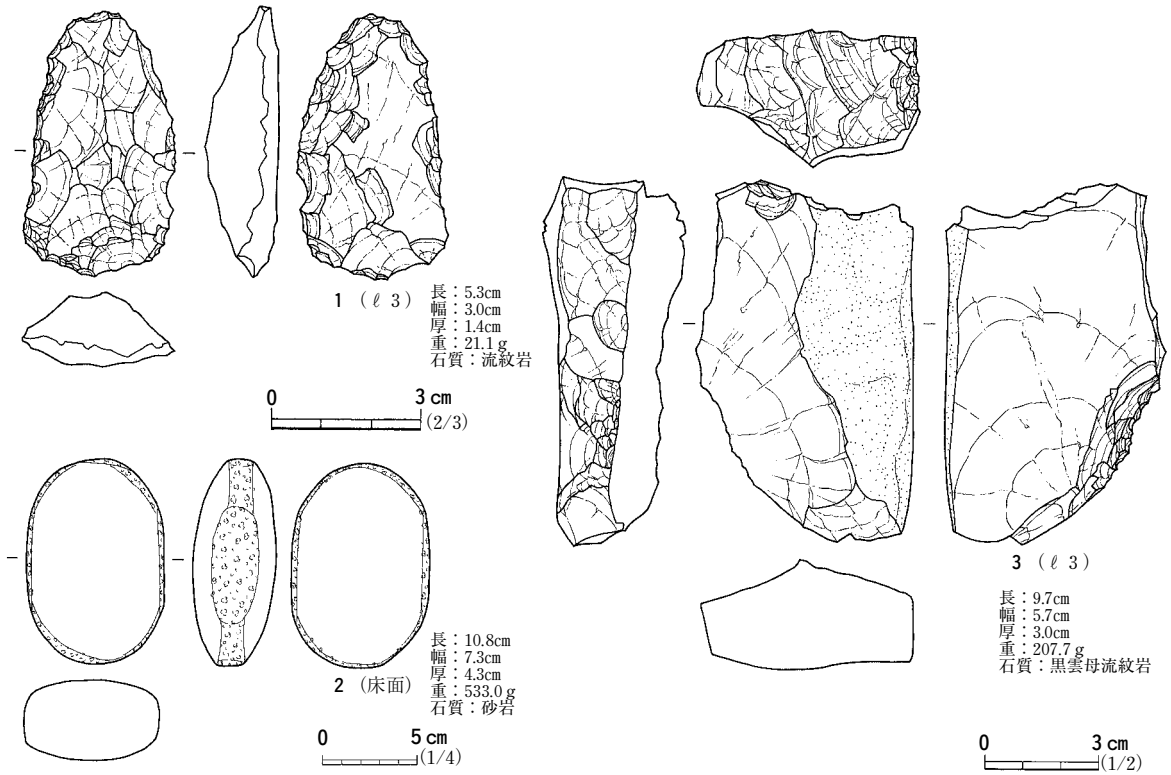


図38　16号住居跡出土遺物（２）

方向を違えて２方向から施文されている。７は貝殻腹縁文と平行沈線が組み合わさる。８～12は沈線文が描かれているが，そのうち８・９は沈線の深さがとても浅い。13・14は絡条体圧痕文と平行沈線文が組み合わさる。15～20は外面に細隆起線文で幾何学文様を描き，内面が条痕文である。21・22は内外面ともに条痕文が施されていた。19の内面や22の内外面には炭化物が付着している。

図37－23～27は石鏃でいずれも凹基の無茎鏃である。24の背面には素材時の剥離面が残っている。25・27は先端部が欠損し，27は基部の一部も欠損している。28～32は石鏃未製品である。28は切断した剥片を粗割したもの。29は切断・粗割して三角状に整形されている。30は粗割が途中のもの。31は折った剥片の末端に二次加工がなされる。32は切断した剥片の側縁に二次加工がなされ，背面左側の剥離が素材の主要剥離面である。33と図38－１は掻器である。図38－２は磨石で，敲石を兼用する。表裏とも全面を磨っている。側縁と端部にわたって敲き，特に端部が著しい。図38－３は大型剥片素材の石核である。打面と作業面を固定し，大きな剥片の剥離は認められない。

ま　と　め　16号住居跡からは剥片類が多数出土し，剥片集中箇所もみられる。剥片類は堆積土から出土したもので，住居跡周辺で石器製作を行い，住居廃棄後に剥片類を捨てたことが窺われる。時期は，堆積土から出土した土器の数量から早期後葉槻木１式期と考えている。

17号住居跡　ＳＩ17（図39，図版27・55）

遺　　構　17号住居跡は調査区南西部のＥ８グリッドⅥ層上面で検出した。ここは標高483m前後で，谷底の西際であり南に向かって緩やかに傾斜している。重複する遺構は14・15・19号住居跡である。本住居跡からみた新旧関係は14・15号住居跡が新しく，19号住居跡が古い。付近には斜面を東側に上がったところに８号住居跡が位置する。

平面形は住居跡の北西隅を検出したのみであるため不明である。規模は現状で北壁が3.3m，西壁が2.1mとなる。周壁はやや外傾気味に立ち上がる。最大壁高は斜面の上方側である西壁で0.32mとなる。

堆積土は３層に区分した。いずれの堆積土も斜面からの流入土で埋没する状況を示している。床

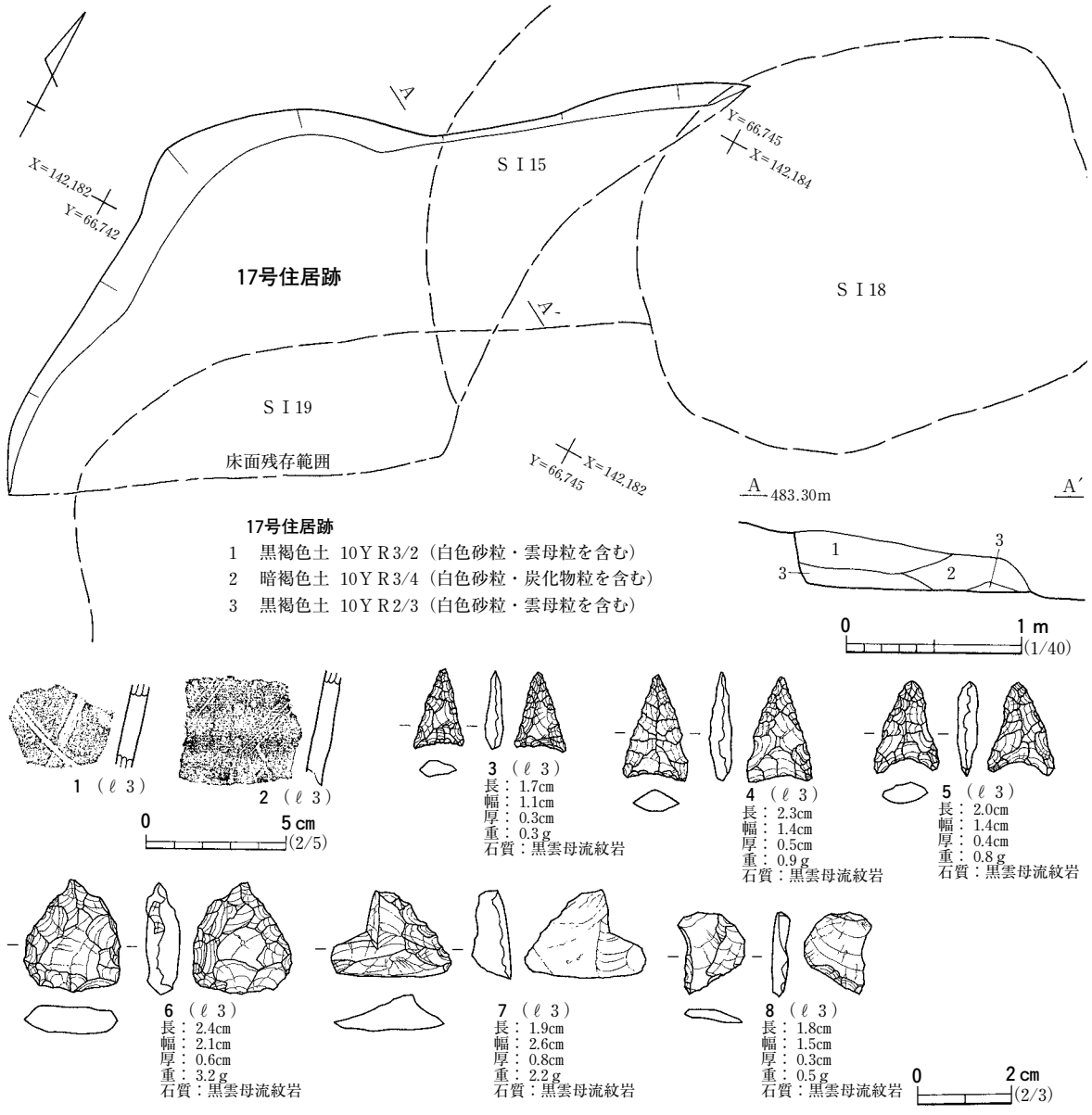


図39　17号住居跡・出土遺物

面からは小穴や炉などの住居内施設などは検出されなかった。

遺　　物　17号住居跡から縄文土器２点，石器３点，剥片類157点が出土した。そのうち図39に縄文土器２点，石器３点，剥片３点を示した。図39－１・２は早期中葉に比定される資料で，胎土に繊維をほとんど含まず，沈線文が描かれている。

図39－３～５は石鏃で凹基の無茎鏃である。５は先端部が丸く，左右非対称なので未製品の可能性がある。図39－６は石鏃の未製品である。切断・粗割して，台形状に整形したものである。図39－７・８は二次加工ある剥片である。７は打面角が直角に近い平坦打面から剥離した剥片を折ったもので，一部縁辺に二次加工が入る。背面は打瘤裂痕が切られ，節理面でほとんど折れている。８は平坦に剥離し，薄い。

ま　と　め　17号住居跡は部分的にしか検出できなかった。時期は19号住居跡との新旧関係および出土土器から，縄文時代早期中葉常世１式期と考えている。

18号住居跡　ＳＩ18（図40，図版28・55）

遺　　構　18号住居跡は調査区ほぼ中央のＥ８・Ｆ８グリッドに位置し，16号住居跡の床面で検出した。この場所は標高483m前後，谷底の真中である。重複する遺構は15・16号住居跡と３号土坑で，新旧関係は本住居跡がいずれよりも古い。付近には７号住居跡が北東側に位置する。

平面形は西半分が隅丸方形であるのに対して，東半分は方形である。規模は東西が2.6m，南北は2.3mである。主軸方向は北壁と南壁の中点で，41°西に傾いている。

堆積土は３層に区分した。堆積土の大半は３号土坑によって掘削されている。

周壁は外傾気味に立ち上がる。最大壁高は北壁で0.24mとなり，西・南壁の立ち上がりは僅かである。床面はほぼ平坦である。床面からは５基の小穴を検出した。Ｐ１～５の径は15～20cm，深さは15～36cmである。そのなかでＰ１は床面の北側中央，Ｐ３は南東隅，Ｐ４は南西隅にある。このような位置から，Ｐ１・３・４は柱穴と考えている。炉は床面からは検出されなかった。

遺　　物　18号住居跡からは縄文土器15点，石器４点，剥片類90点が出土した。そのうち図40に縄文土器５点，石器・剥片７点を掲載した。

図40－１～５は早期中葉から後葉にかけての資料で胎土に繊維が含まれていない。１は口縁部の破片である。押引文と口唇部に刻みがなされる。２・３は櫛歯状工具の刺突，４には沈線文が認められる。２・３は19号住居跡出土土器と同一個体の可能性が在る。５は外面に条痕文地に細隆起線文を幾何学的に配したもので，内面には条痕がなされる。

図40－６～８・10は石鏃である。６・７は平基，８・10は凹基の無茎鏃である。７は背面に素材剥離時の剥離面が残っている。９は基部を欠損している。10の腹面中央部は摩滅している。図40－11は石鏃未製品である。背面は素材剥片に残された剥離面である。図40－12は石槍を調整中の欠損品で，裏面に素材の主要剥離面の末端を残している。

ま　と　め　18号住居跡は調査区の住居跡のなかで最も規模が小さいものである。時期は16号住

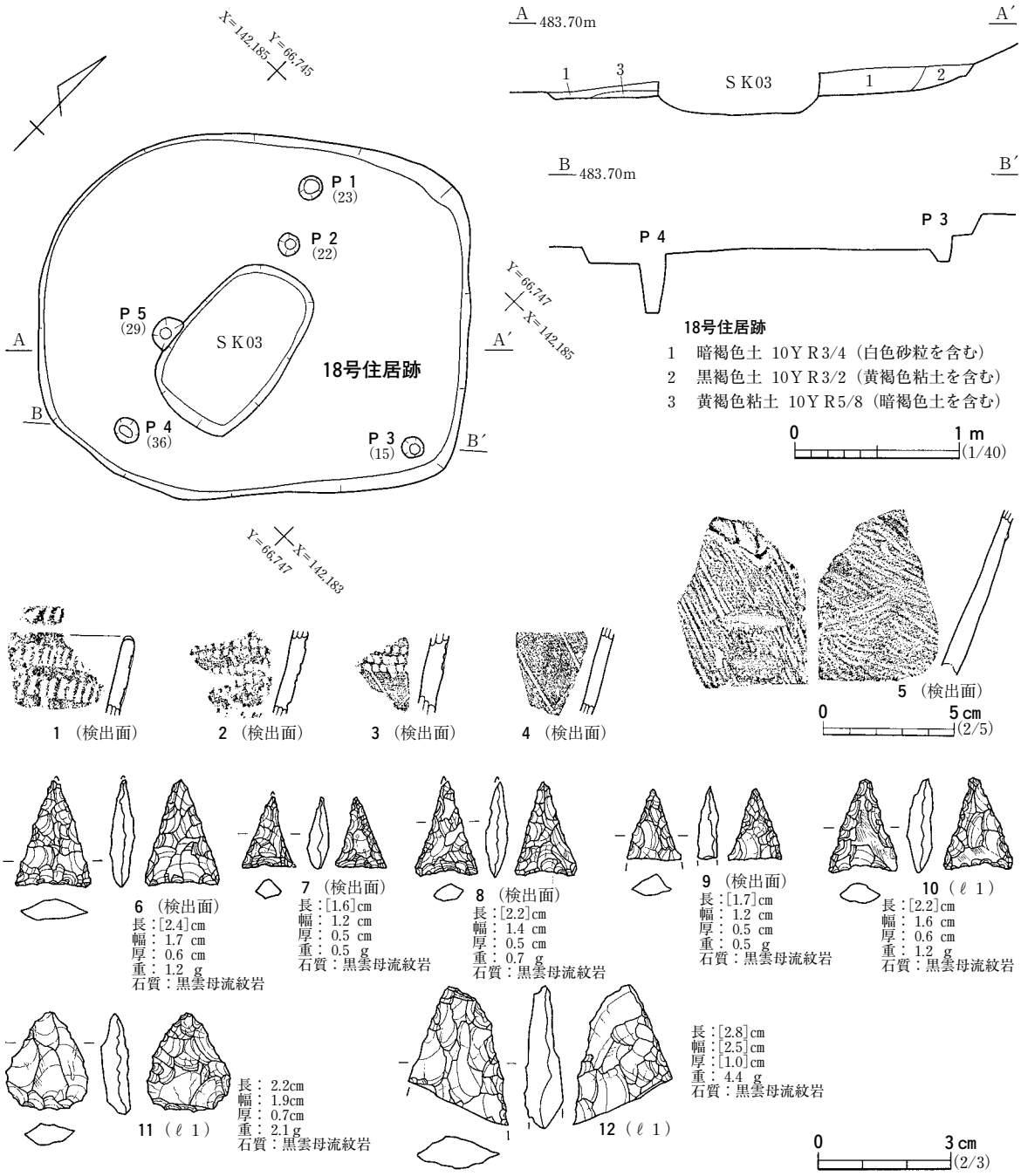


図40　18号住居跡・出土遺物

居跡との新旧関係および出土した土器から，縄文時代早期中葉～後葉と考えられる。

19号住居跡　ＳＩ19（図41・42，図版29・39・55）

遺　　構　本遺構は調査区の中央南寄りＥ８・Ｆ８・Ｅ９グリッドⅥ層上面から検出した竪穴住居跡である。ここは標高482.5m前後，谷底の南側寄りで南に向かって緩やかに傾斜している。重複する遺構は16～18号住居跡と５号土坑で，新旧関係はいずれも本住居跡が古い。付近には４号土坑・２号焼土遺構が南側に位置する。

本住居跡は南半分を検出できなかったが，平面形は隅丸長方形と推定している。規模は，東西が６ｍ，南北は南壁が欠損しているため現状で3.8ｍとなる。周壁は外傾気味に立ち上がり，最大壁高は東壁で0.22ｍとなる。

堆積土は２層に区分した。堆積土はいずれも斜面上方からの流入によって埋没した状況がみられる。床面はやや斜面の傾斜に沿って傾斜している。床面からは炉と小穴８基を検出した。Ｐ１～８の径は18～23㎝，深さは７～46㎝である。Ｐ１～８からは上屋を構成していたような配置は窺うことができなかった。

炉は床面の北側中央から検出した。炉は地床炉で，長軸は35㎝となる。炉の下部には掘り込みなどはなかった。

遺　　物　19号住居跡から出土した遺物は縄文土器70点，石器７点，剥片類371点である。時期的には早期中葉から後葉の土器を中心としており，末葉の土器は細片が若干含まれる。そのうち縄文土器・土製品13点を図41に，石器・剥片類24点を図42に示した。なお，掲載した土器のなかには，15・16・18号住居跡の出土土器と同一個体とみられるものがある。

図41－１～13は常世１式土器で胎土に繊維の混入が認められない。１～４は口縁部の破片である。１は櫛歯状工具による垂直方向の刺突，２・３は押引き状の刺突文で，２には口唇部にキザミがなされている。３・７は同様の押引状の文様，４は平行沈線状文・指頭圧痕と口縁には刺突文が巡る胴部破片である。５は棒状工具の刺突，６は貝殻腹縁文と櫛歯状工具の２つを組み合わせた刺突文，８・９は沈線文が描かれている。10は押し引き状の施文と平行沈線を組み合わせている。11・12は外面に条痕が認められる。13は内外面ともに条痕がなされる。14は焼成粘土塊である。

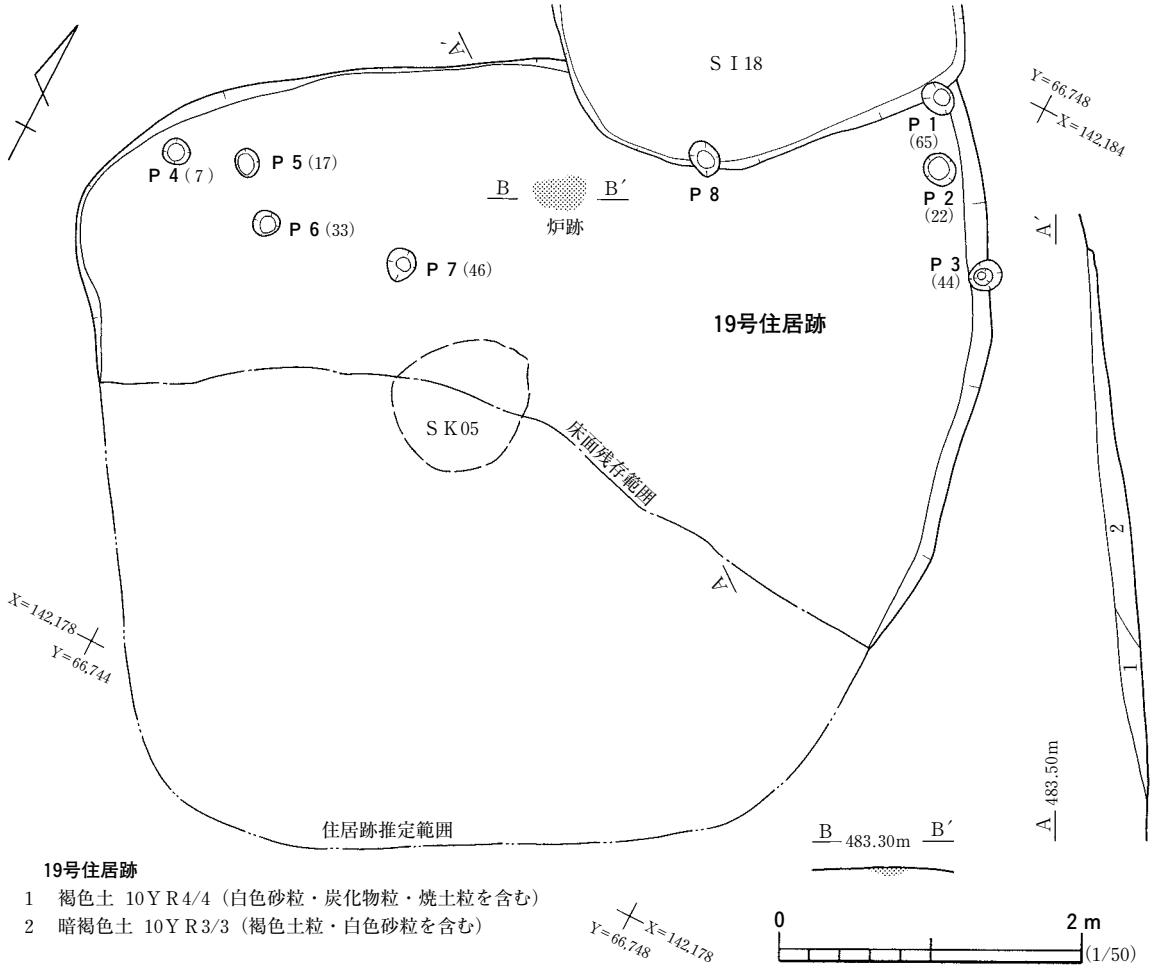
図42－１～５は石鏃である。１～４は凹基の無茎鏃で，１・２・４・５は先端部，２・３・５は基部の一部が欠損している。３は全体的に風化している。４は腹面に素材の剥離を大きく残している。腹面の加工は基部に連続的な剥離と先端部に微細剥離が認められる。５は腹面中央に素材の剥離を残すことから，元来，薄い小型の剥片素材である。

図42－６～14は石鏃未製品である。６・８・９は切断・粗割などをして，三角形に整形されたもので，厚みが残っている。７・10は先端部のみを作り出したものだろう。11は周縁から階段状の剥離が入るものの形状が整っていないので，粗割が途中なものと思われる。12～14は剥片を切断し，若干の加工がなされているものである。

図42－15・16・24・25は二次加工のある剥片である。15・16は側縁に加工が入る。24は大型剥片を切断し，末端に二次加工が入る。25も同様である。

図42－17～23は剥片である。17～22は鋭角な多剥離面打面から剥離され，背面には複数方向の剥離が認められる。23は折った剥片である。

ま　と　め　19号住居跡はその南半分を検出することができなかった。調査区で最も住居跡が重複する箇所にあり，そのなかの新旧関係で最も古い住居跡である。時期は，重複する遺構の時期と，出土した土器から縄文時代早期中葉常世１式と考えている。　（吉野）



19号住居跡

1　褐色土　10ＹＲ4/4（白色砂粒・炭化物粒・焼土粒を含む）

2　暗褐色土　10ＹＲ3/3（褐色土粒・白色砂粒を含む）

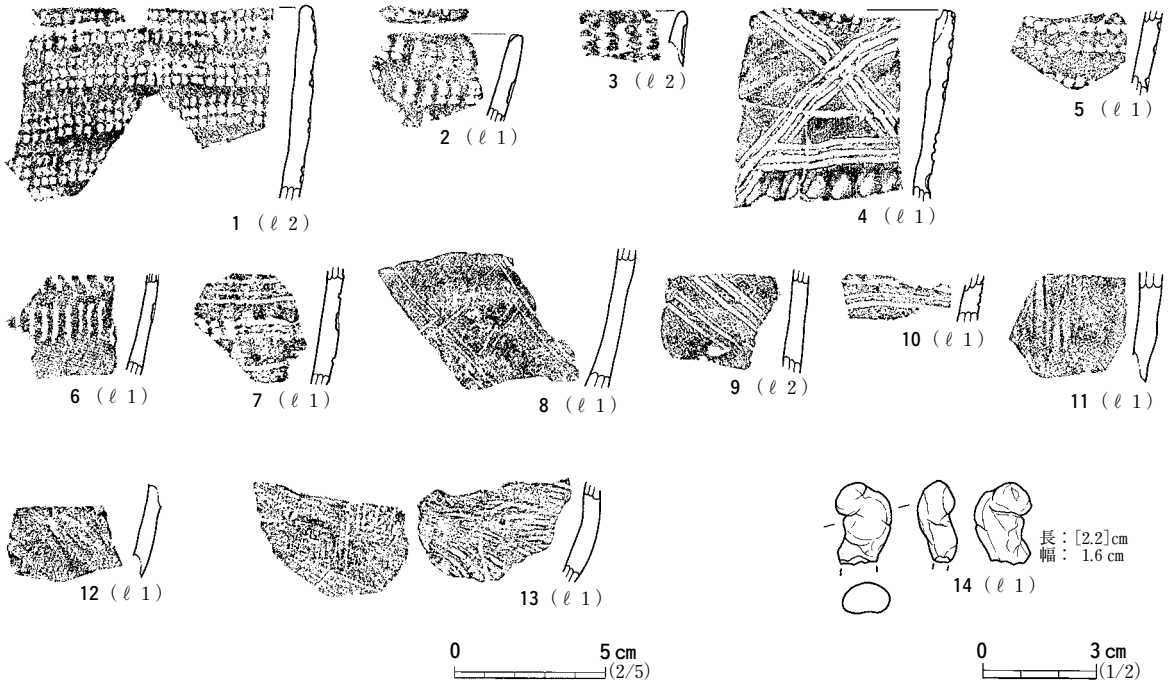


図41　19号住居跡・出土遺物（１）

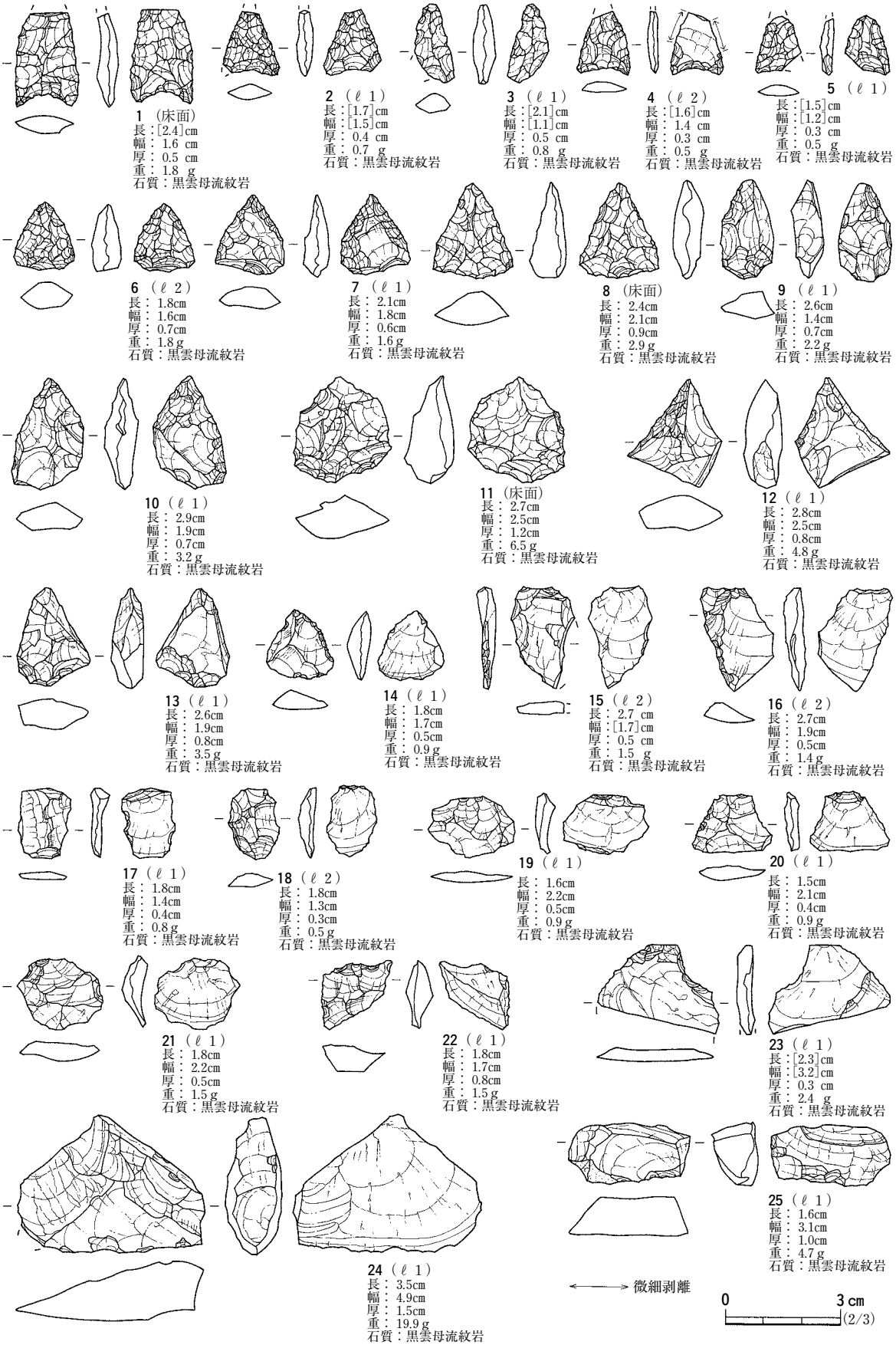


図42　19号住居跡出土遺物（２）

第２節　土　　坑

調査区から検出した土坑は５基である。住居跡の数と比べると少ないのが目を引く。それらの位置は調査区の南側に散在している。土坑の機能を特定できるような，調査所見は得られていない。そのなかには，２号土坑のように底面に焼土面があるものも検出している。

１号土坑　ＳＫ01（図43，図版30）

１号土坑は調査区北西部のＧ８グリッドⅥ層上面で検出した。ここは南向き斜面で谷底への落ち際，標高484ｍの地点である。本土坑の東側には１号焼土遺構が隣接し，谷底となる西側には７号住居跡が２ｍ離れた位置にある。

平面形は隅丸長方形で，整った形状である。断面形は皿形となり，底面は斜面の傾斜に沿ってやや傾いている。規模は長軸が1.4m，短軸は1.2m，深さは0.47ｍである。長軸方向は真北に対して東に10°傾く。堆積土は２層に区分した。そのなかで第２層がⅥ層と対応することから，土坑の掘削土が再流入したことを考えている。土坑内からは，縄文土器２点，剥片３点が出土しているが，細片のため図示していない。本遺構の機能は不明である。時期は明確ではないが，検出面がⅥ層上面であることから縄文時代早期に属するものであろう。

２号土坑　ＳＫ02（図43，図版30・57）

２号土坑は調査区南西端のＤ９グリッドⅤ層上面で検出した。ここは南向き斜面から谷底への落ち際となる標高483ｍの急傾斜である。本土坑から北東側２ｍ上った地点には８号住居跡がある。

平面形は不整楕円形，断面形はフラスコ状，底面はやや凹凸がみられる。底面からは焼土面２箇所を検出した。規模は底面で測ると長軸が1.14m，短軸が1.1m，深さが0.3mである。長軸方向は真北に対して東に48°傾く。焼土面の長軸は0.22～0.44ｍで，今回調査した住居跡の炉よりも焼けている。堆積土は３層に区分した。第２層は焼土面を覆う堆積土で，焼土粒が多量に含まれていた。第１・３層は内傾する壁の崩落土であろう。土坑内からは磨石が１点出土している。図41－６は表裏とも全面磨っている。側縁は全周にわたって敲いている。

本土坑は内傾する壁や底面の焼土面などの特徴から，調査区で検出した土坑のなかでも特異な形状なものである。何らかのものを焼成したことが窺われるが，その目的を判断できるような調査所見は得られなかった。時期については明確ではないが，検出面がⅤ層であるので縄文時代早期のものであろう。

３号土坑　ＳＫ03（図43，図版30）

本遺構は調査区中央南寄りのＦ８グリッドに位置する土坑で，16号住居跡の床面において検出し

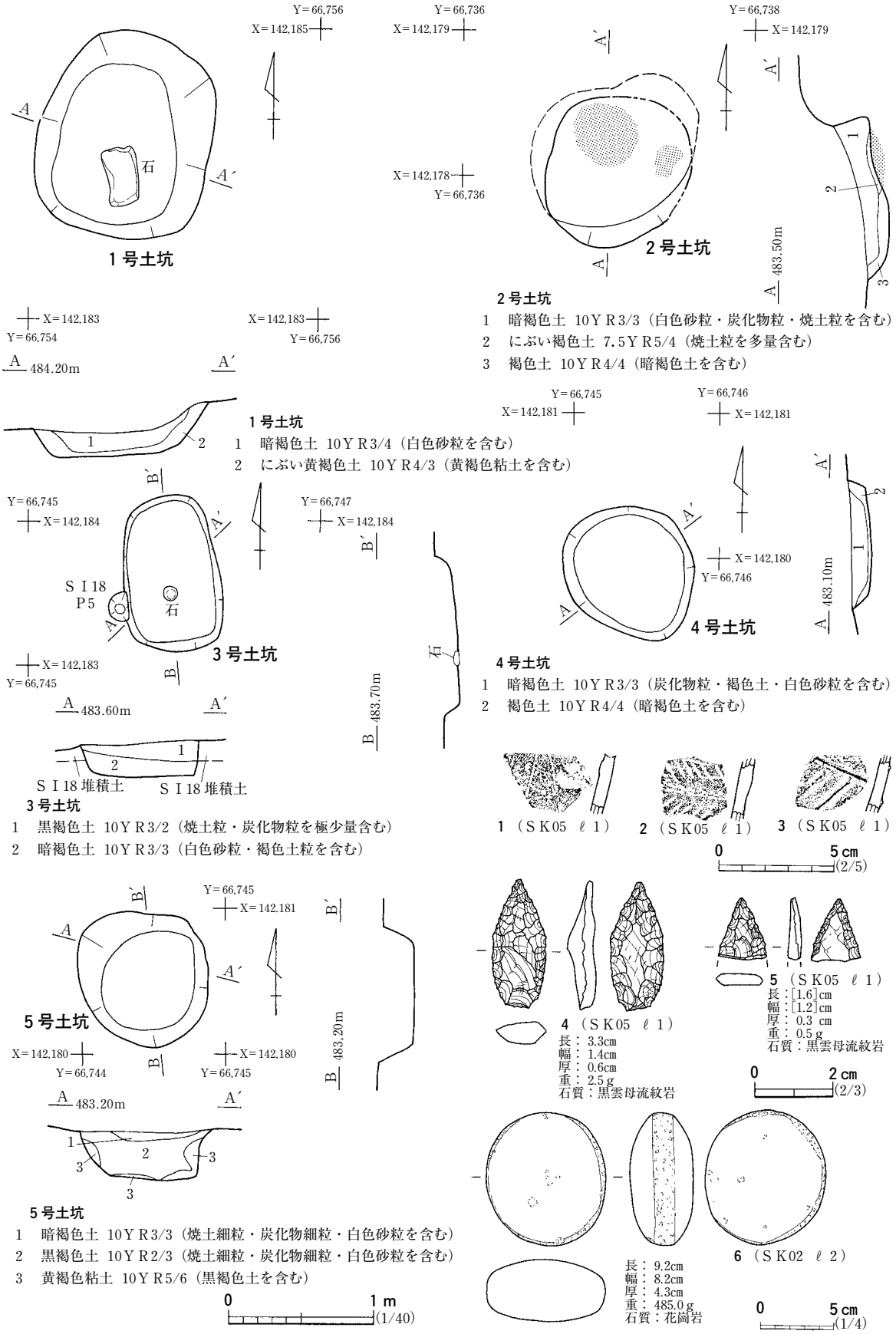


図43　１～５号土坑・出土遺物

た。本土坑が位置するのは，谷底のほぼ中央で標高483ｍの地点で，調査区内で最も遺構が重複している場所でもある。重複する遺構は16・18・19号住居跡である。新旧関係は16号住居跡とでは本土坑が古く，18・19号住居跡とでは本土坑が新しい。

平面形は整った隅丸長方形，断面形は箱形，底面は平坦である。規模は長軸が1.1ｍ，短軸が0.65ｍ，深さが0.16ｍである。長軸方向は真北に対して西に５°傾いている。堆積土は２層に区分した。ほぼ流入土で埋没した状況を示している。出土遺物は，縄文土器７点，剥片４点であるが，細片のため図示していない。本土坑の機能は明確ではないが，時期は住居跡との新旧関係から，縄文時代早期後葉頃と考えている。

４号土坑　ＳＫ04（図43，図版30）

本遺構は調査区南端中央のＦ８・９グリッドⅥ層で検出した土坑である。本土坑が位置するのは，谷底の標高482ｍの地点で，調査区内で最も遺構が重複している場所の南側にあたる。付近には５号土坑が北西側に，南側には２号焼土遺構が位置する。

平面形は不整楕円形，断面形は皿形，底面はほぼ平坦である。規模は長軸が１ｍ，短軸が0.86ｍ，深さが0.15ｍである。長軸方向は真北に対して西に10°傾いている。堆積土は２層に区分した。ほぼ流入土で埋没した状況を示している。土坑内からは縄文土器２点，剥片２点が出土しているが細片のため図示していない。本土坑の機能は明確ではないが，時期は検出面がⅥ層であることから縄文時代早期と考えている。

５号土坑　ＳＫ05（図43，図版30）

５号土坑は調査区南端中央のＥ８グリッドに位置する。19号住居跡の床面上で検出した。本土坑が位置するのは，谷底の標高482ｍの地点で，調査区内で最も遺構が重複している場所でもある。付近には４号土坑が南東側に，16号住居跡が東接する。19号住居跡よりも新しいが，その他の住居跡との関係は不明である。

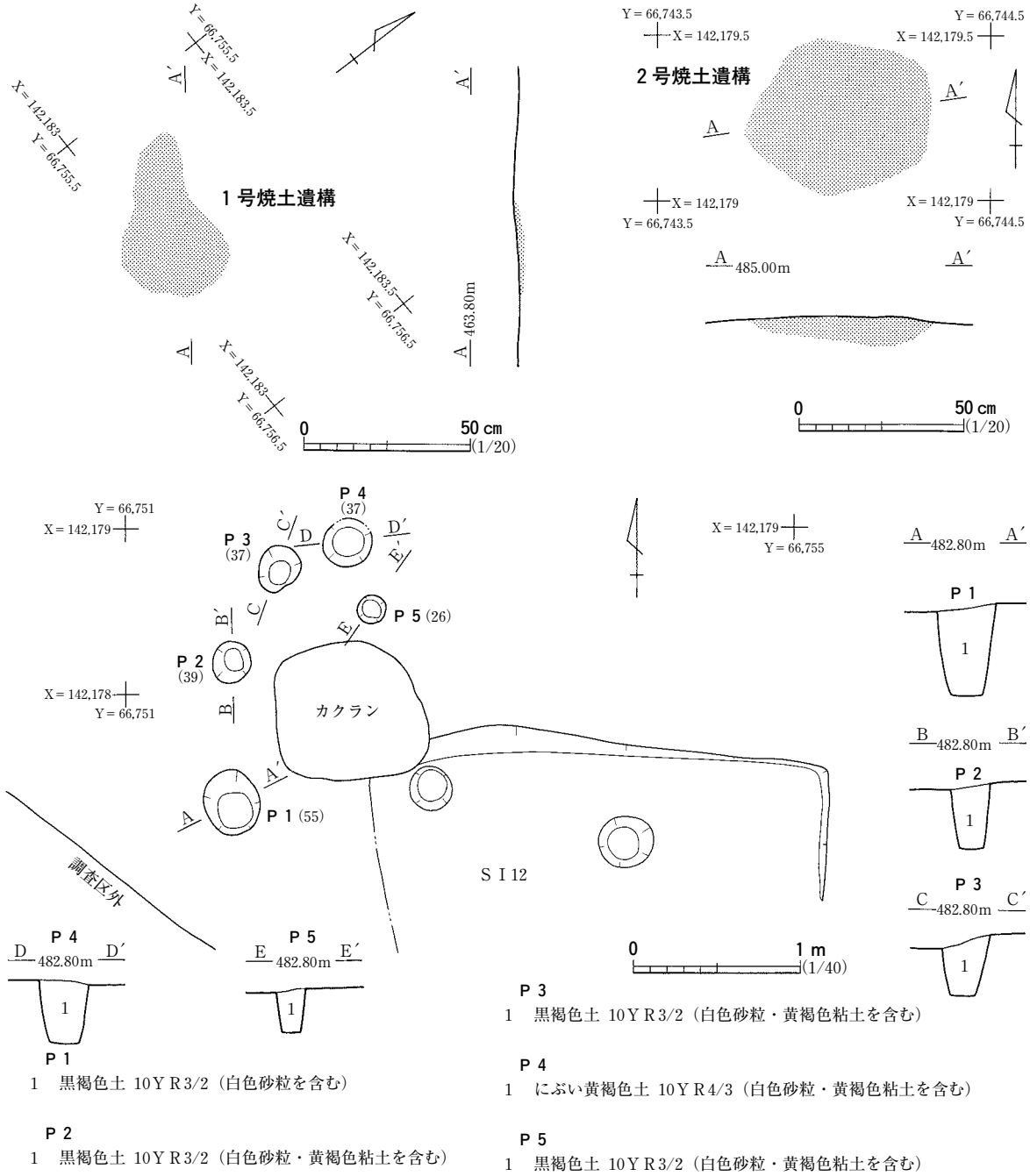
平面形は不整方形，断面形は箱形，底面はほぼ平坦である。規模は長軸が１ｍ，短軸が0.88ｍ，深さが0.24ｍである。長軸方向は真北に対して西に61°傾いている。堆積土は３層に区分した。堆積土の状況から人為堆積を考えている。

出土遺物は縄文土器11点，剥片85点が出土している。内容は，重複する住居跡群に近い。図47－１～３は縄文土器で，胎土に繊維を含まないものである。１は沈線文，２は矢羽根状の沈線文，３は細隆起線文である。４・５は石鏃である。４は円基の無茎鏃で，基部は外皮に近い風化層で，背面に素材の腹面が残っている。５は基部が欠損している。背面に素材の腹面を残し，薄手の剥片を切断して加工したものである。

本土坑の機能は明確ではないが，時期は堆積土からの出土土器や住居跡の新旧関係などから縄文時代早期中葉と考えている。　　（吉野）

第３節　その他の遺構

ここでは焼土遺構２基と小穴５基をその他の遺構としてまとめた。焼土遺構については，当初住居跡の炉と考え，その周辺を精査したが柱穴などは検出できなかった。これにより焼土遺構とした。小穴は建物跡として構成できなかったものである。



Ｐ１
1　黒褐色土　10ＹＲ3/2（白色砂粒を含む）

Ｐ２
1　黒褐色土　10ＹＲ3/2（白色砂粒・黄褐色粘土を含む）

Ｐ３
1　黒褐色土　10ＹＲ3/2（白色砂粒・黄褐色粘土を含む）

Ｐ４
1　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（白色砂粒・黄褐色粘土を含む）

Ｐ５
1　黒褐色土　10ＹＲ3/2（白色砂粒・黄褐色粘土を含む）

図44　１・２号屋外焼土遺構・小穴

屋外焼土遺構　ＳＧ（図44）

１号焼土遺構は調査区東側中央のＨ８グリッドⅤ層で検出した。標高484mの南向き斜面にあり，付近には１号土坑が北西側に位置する。長軸は48cmで，下部には掘り込みなどはなかった。

２号焼土遺構は調査区南端中央のＥ９グリッドⅤ層で検出した。標高482mの谷底にあり，北側には14～19号住居跡が重複している。長軸は60cmで，下部には掘り込みなどはなかった。

１・２号焼土遺構は屋外炉としての機能を考えている。それは，住居跡のなかに炉がないものがあることによる。時期については住居跡の時期と併行する縄文時代早期中葉～末葉を考えている。

小穴　Ｐ（図44，図版30）

小穴は調査区南東部のＧ９グリッドⅣ層で５基検出した。この場所は標高482.5mの谷底がちょうど東側に広がるところである。付近には12号住居跡が南東側に位置する。

Ｐ１～５は径15～38cm，深さ26～55cmである。このなかでＰ１～４は目隠塀のような配置がみられ，12号住居跡との位置関係から関連性も窺われる。

時期は検出面がⅣ層であることから，縄文時代早期と考えている。　（吉野）

第４節　遺物包含層

遺物包含層から出土した縄文土器の点数は，Ⅱ層546点，Ⅲ層1,293点，Ⅳ層1,035点，Ⅴ層976点の計3,850点である。同じく石器はⅡ層43点，Ⅲ層188点，Ⅳ層128点，Ⅴ層204点の計563点を数える。土器の時期は早期が大部分を占め，前期初頭までの時期にあたる。石器は黒雲母流紋岩の剥片が多く，石鏃およびその未成品も多く出土している。

出　土　土　器（図45～53，図版40～52）

土器の分類については，破片資料が主のため，胎土や文様の特徴によって行い，先学の研究に従って時期比定を行った。時期区分については，草創期から晩期の６期区分を採用している。

早期中葉～後葉の土器　この時期の土器は図45～47に示した。胎土に繊維を含まない，もしくはほとんど含まない土器で，器壁は薄く，焼成は良好で硬質である。

１類　図45は，棒状・櫛歯状の工具や貝殻腹縁による刺突と沈線による文様に特徴づけられるものである。焼成は良好で，胎土に砂粒・雲母を含む。器壁は５㎜程度と薄手である。

１～６は刺突と平行沈線を組み合わせて用いるものである。１が半截竹管状工具，２・３が櫛歯状工具，４・６は角棒状工具による刺突を半截竹管状工具による平行沈線に沿わせる。５は放射肋のある貝殻の腹縁圧痕と平行沈線の区画によって文様を描く。

７は角棒状工具の押引きが横位に施されている。８は半截竹管状工具の押引きで区画した内部に，刺突文を充填する。９・10は櫛歯状工具の刺突を重層的に施文するもので，下位には沈線により斜

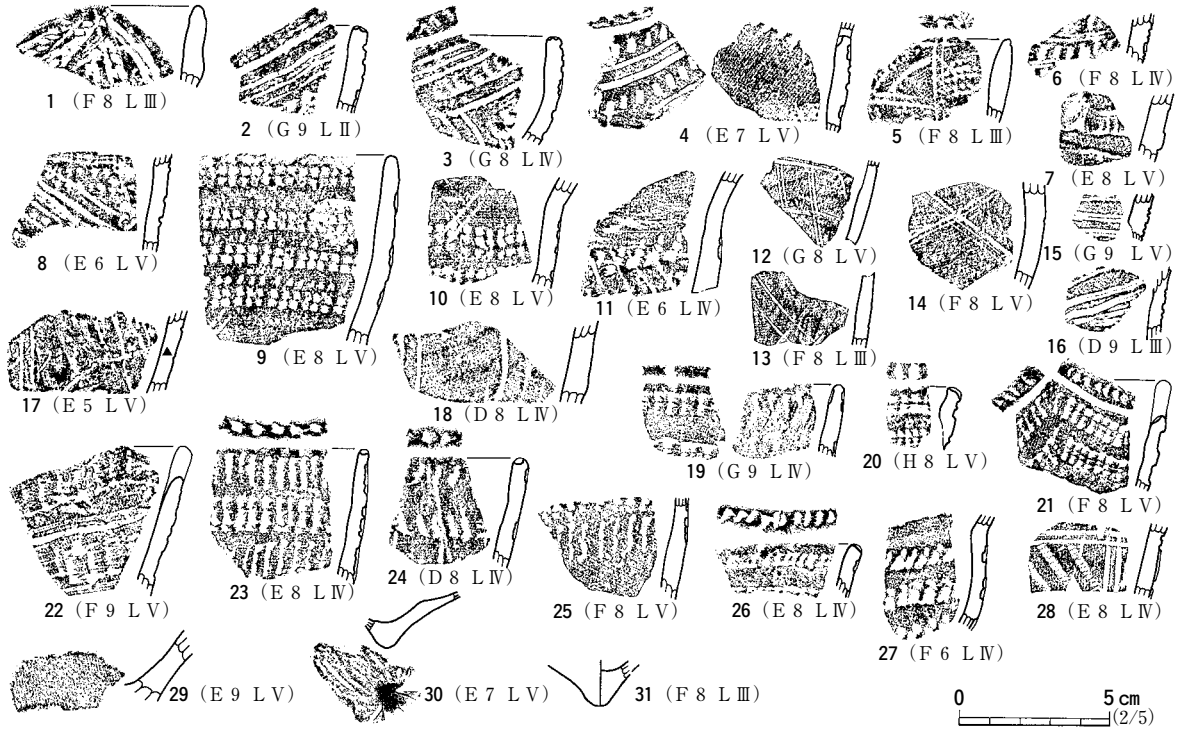


図45　遺物包含層出土遺物（１）

格子文を描く。19号住居跡から同一個体の可能性を持つ破片が出土している。11は櫛歯状工具の刺突と無肋の貝殻腹縁刺突を矢羽上に組み合わせている。12～16は半截竹管状工具による沈線が認められ，12～14は表面をなでたような沈線によって斜格子が，15・16は横線が深く描かれる。17・18は単沈線が描かれる破片である。

19～27には櫛歯状工具を押し引くように刺突しているものを示した。口縁部は大波状も認められ，口端部上には棒状，半截竹管状の工具による押引きが施される。28は十字に区画する平行沈線と絡条体圧痕が認められる。29は無文の胴部下半の破片である。30・31は乳房状の尖底部である。30の外面には条痕が認められる。

以上のように器形が窺い知れるものはないが，口縁部は波状となるものもあり，底部は乳房状の尖底である。これらの特徴からこの一群は，常世１式土器に比定される。

２類　図46には，胎土にほとんど繊維を含まない薄手の絡条体圧痕文や条痕文を施文される土器を集めた。器厚は６～８㎜で，胎土に砂粒・雲母を含むが，繊維の混和痕は顕著には認められない。

１～９は絡条体圧痕が認められる土器である。うち５までは口縁部で，口縁部上端に絡条体圧痕が施される。１は肥厚する口縁部上端に斜位に押圧し，口端部上にはこれと矢羽状になるように配する。２以降は口唇部に平行に圧痕が遺る。２は２個一組の小突起が口縁部につき，口唇部上にはヘラ状工具による刺突が認められる。３は棒状工具による刻みが斜めに施されている。４は口唇部が強く外反する。口端部上には貝殻か櫛歯状工具の圧痕が認められる。５は内面に条痕が認められる。絡条体圧痕の上位には平行沈線が「Ｖ」字状に引かれている。

10～21は条痕文が認められる破片である。12・13は内外面に条痕が施され，口端部上に絡条体圧痕

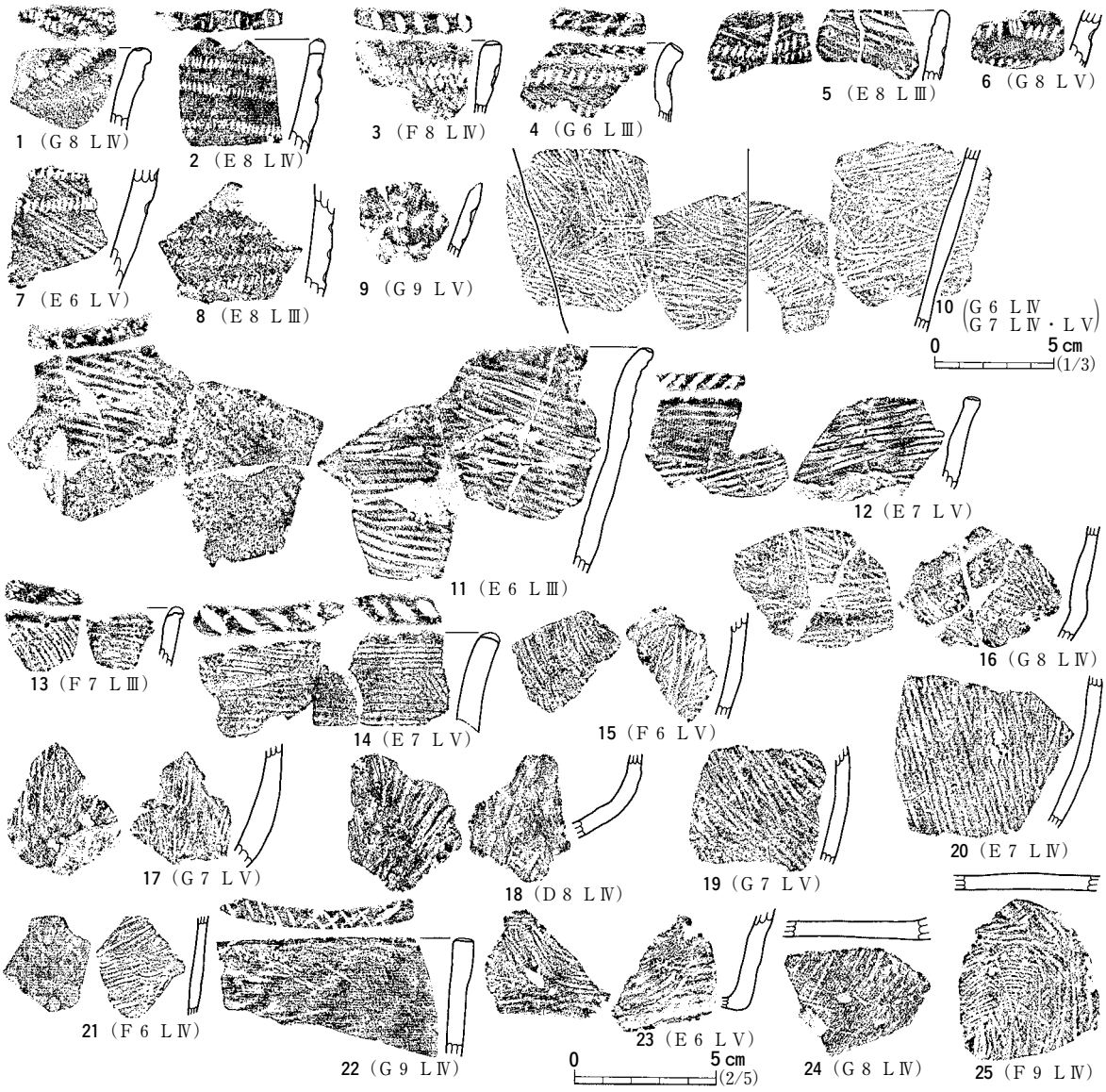


図46　遺物包含層出土遺物（２）

が施される。11は口縁部が強く外に開く。内外面に条痕，口端部上には貝殻による圧痕が施される。14は外面に条痕，口端部上には幅のある工具による斜方向の刻みが加えられる。10・15～18は内外面に条痕の認められる胴部破片で，径の復元できる10からは底部から口縁部に向かって開く砲弾型の器形を呈していたものと推測される。19・20は外面のみに，21は内面にのみ条痕が認められる胴部破片である。22は内外面無文の口縁部破片で，内面には擦痕が認められる。口端部上にはヘラ状工具による刻みが「ハ」字状に，一部は重なるようにして配されている。23～25は底部の破片である。いずれも平底で，底部外面に条痕が認められる。器壁の遺る23は器壁の内外面に条痕が認められる。本類土器は，いずれも破片で全体の器形は不明である。絡条体圧痕や条痕が認められ，底部が平底である点から，関東の子母口式に並行する時期の土器と考えられる。

３類　図47には，細隆起線によって幾何学文を描く資料を示した。器壁は５㎜程度で，砂粒を少量と雲母を多量含んでいる。繊維は顕著には認められない。いずれも破片で，モチーフの全容は窺

えないが，細隆起線によって区画した内部に更に細隆起線を梯子状に充填する。細隆起線はソウメン状の粘土紐を貼り付けて，丁寧に器面に擦り付けている。地文は，細隆起線貼付前に，条が細かく，浅い条痕が横もしくは斜位に施されている。１～９は口縁部，10～14は文様帯中位，15以下は文様帯最下部から胴部下半の破片である。口縁の形態は平縁のみ認められる。胴部は若干上に向かって開く寸胴で，くびれや段は存在しない。１の外面，11の外面には焼成後の盲孔があり，補修孔を穿とうとしたものと思われる。また，15の内外面，16の内面には炭化物の付着が認められる。23・24は底部破片で，内外面とも無文の尖底である。これらの土器は，文様の特徴からは，野島式期の土器であることが分かる。さらに，薄手で，胎土に繊維をあまり含まず，文様を全て細隆起線で描くなどの特徴から，宮城県槻木貝塚資料を標識とする槻木１式に比定されよう。

早期末葉の土器　これらの土器は，図48～52に示した。胎土に極めて多量の繊維を含む厚手の土器で，地文に撚糸文，条痕文，縄文が施される。そこに半截竹管状工具などを用いて，弧線文や縦・横・斜め方向の直線を組み合わせた「米」字や「ユニオンジャック」状と称される文様を描くものが多い。器壁は厚いものが多く,0.8～1.2㎝を計る。口縁部は,「舌断面」状と呼ばれる口端が強く外反する形状を呈する。

１類　図48－１～10，図49－１～７に示した，弧線文を描く土器である。文様は，直線によって縦横に区画した内部に弧線を入れるものが多く，弧線のみを連ねて文様を描くものは図48－３，図49－１・３くらいである。文様は２～３本１組となる半截竹管状工具の凹部による平行沈線で描くものが多い。沈線の横断面が蒲鉾状となるものも認められる。地文は，外面が撚糸文のみで，内面は条痕が主で，無文となるものもある。施文順序は，地文→横沈線→縦沈線→弧線となるものが主であるが，図48－３は沈線施文後に再び撚糸文を施文している。

２類　図49－８～図50－７に示した,「ユニオンジャック」状の文様を持つものである。直線による縦横の区画に，対角線上に引く鋸歯状の直線を組み合わせて描かれる文様である。図50－１・２のように集合沈線となるものもある。文様は，弧線文を描く土器と同様２～３本１組の半截竹管状工具で描くものも認められるが，２～３本１組の割り箸状の平たい工具によると思われる，沈線内に繊維の条線があるものも認められる。地文は，図49－11が外面条痕文であるほかは，撚糸文のみ認められる。内面は口縁部上端に必ず条痕が施され，以下は条痕もしくは無文である。施文順序は，弧線文を描く土器と同様である。

３類　図50－８～23に示した，モチーフ不明な沈線施文土器である。外面の地文は８・９が条痕である以外は，すべて撚糸文である。内面はいずれも条痕である。

４類　図51－１～図52－８に示した，地文の撚糸文のみ認められるものである。図51は口縁部破片，図52－１～８は胴部破片である。図51－１は口縁部と胴部で回転方向を変えて，羽状に施文している。図51－２・３・５は菱形に配している。図51－８～12は口唇直下が横方向，以下は斜方向に施文するもので，図52－７のように同様の胴部破片もある。そのほか，図51－４・６・７・13・14，図52－１・４・５は粗雑な斜格子状，図51－12～17，図52－２・３は斜方向，図51－19～22，図

図47　遺物包含層出土遺物（３）

図48　遺物包含層出土遺物（４）

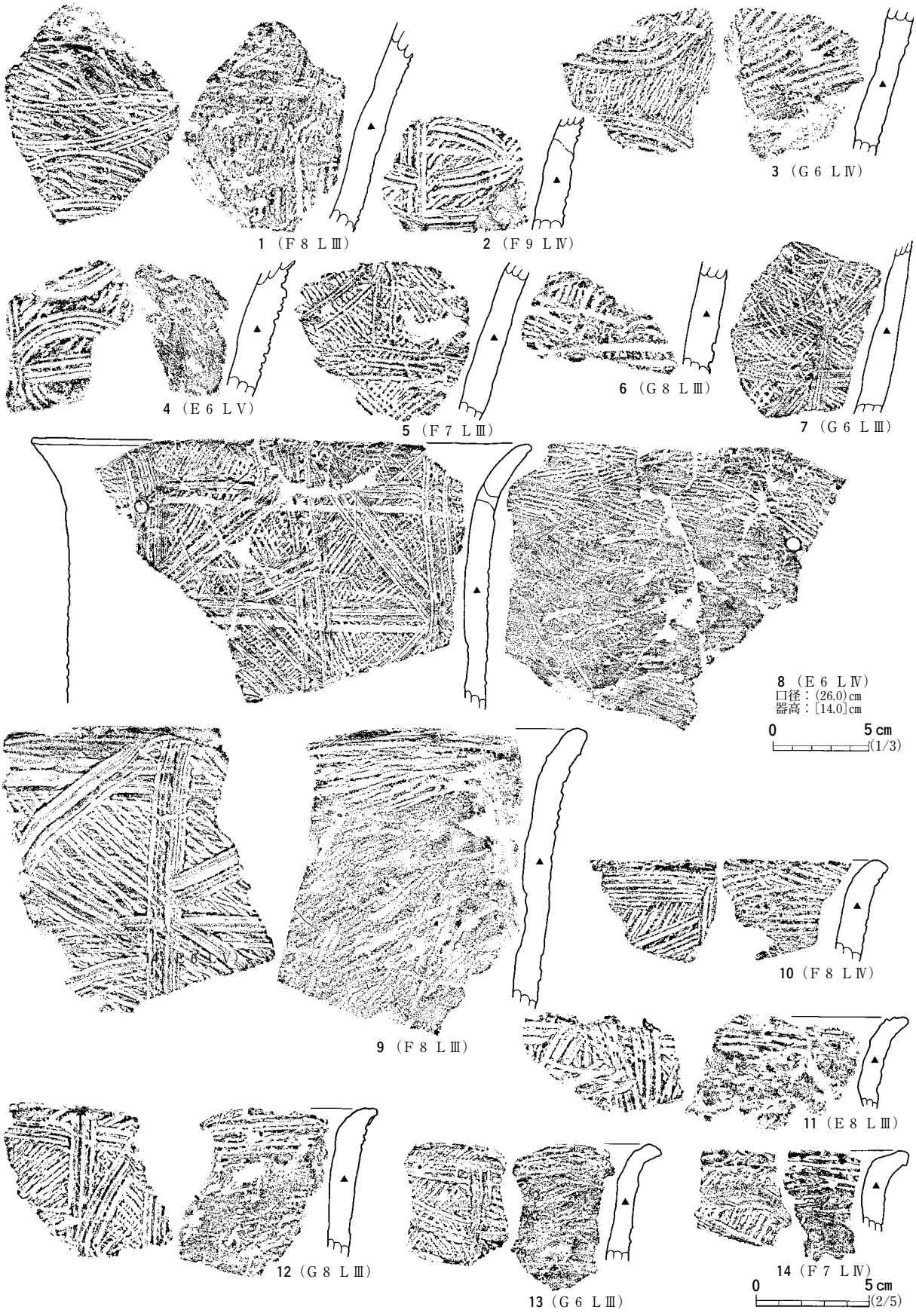


図49　遺物包含層出土遺物（５）

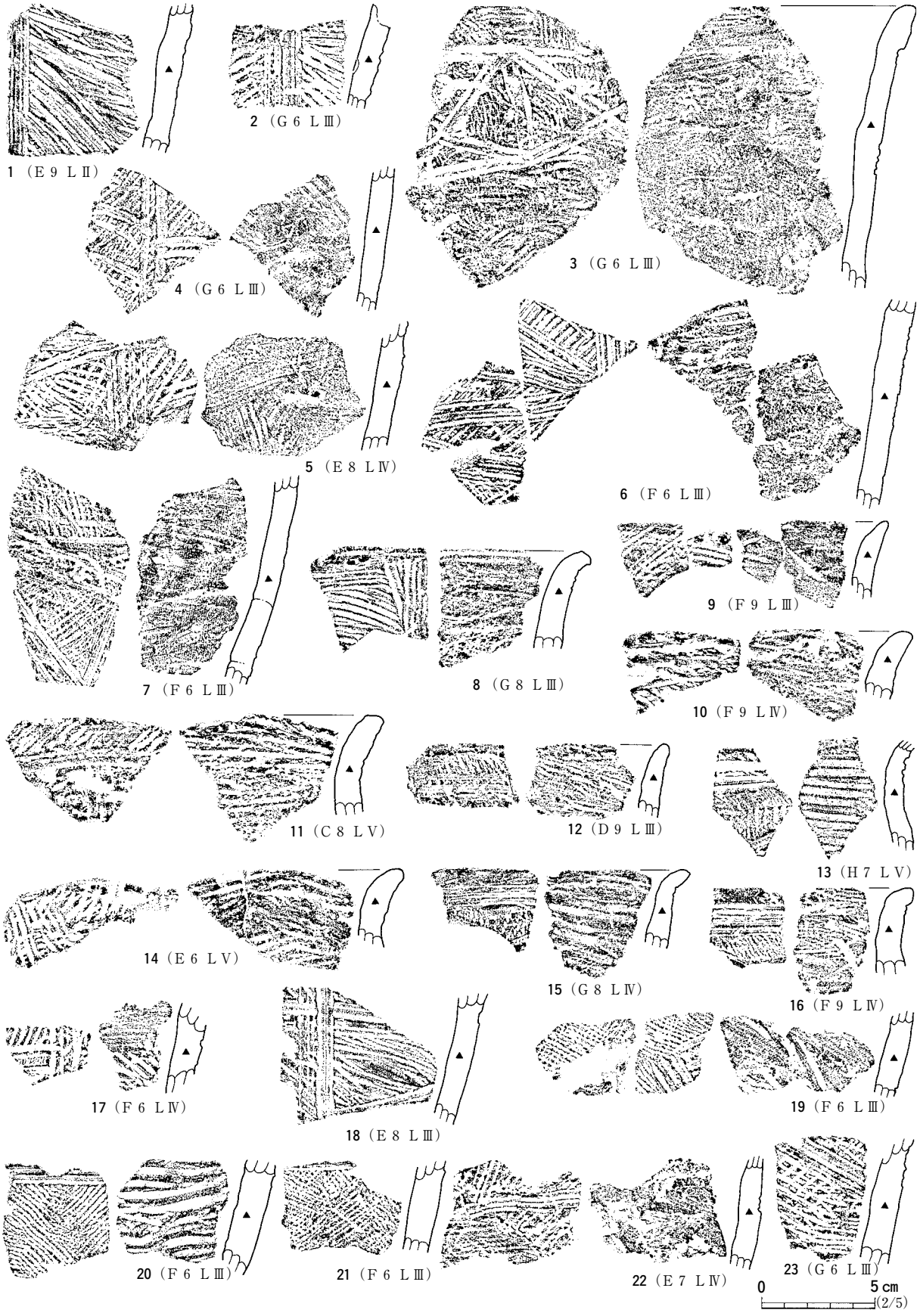


図50　遺物包含層出土遺物（６）

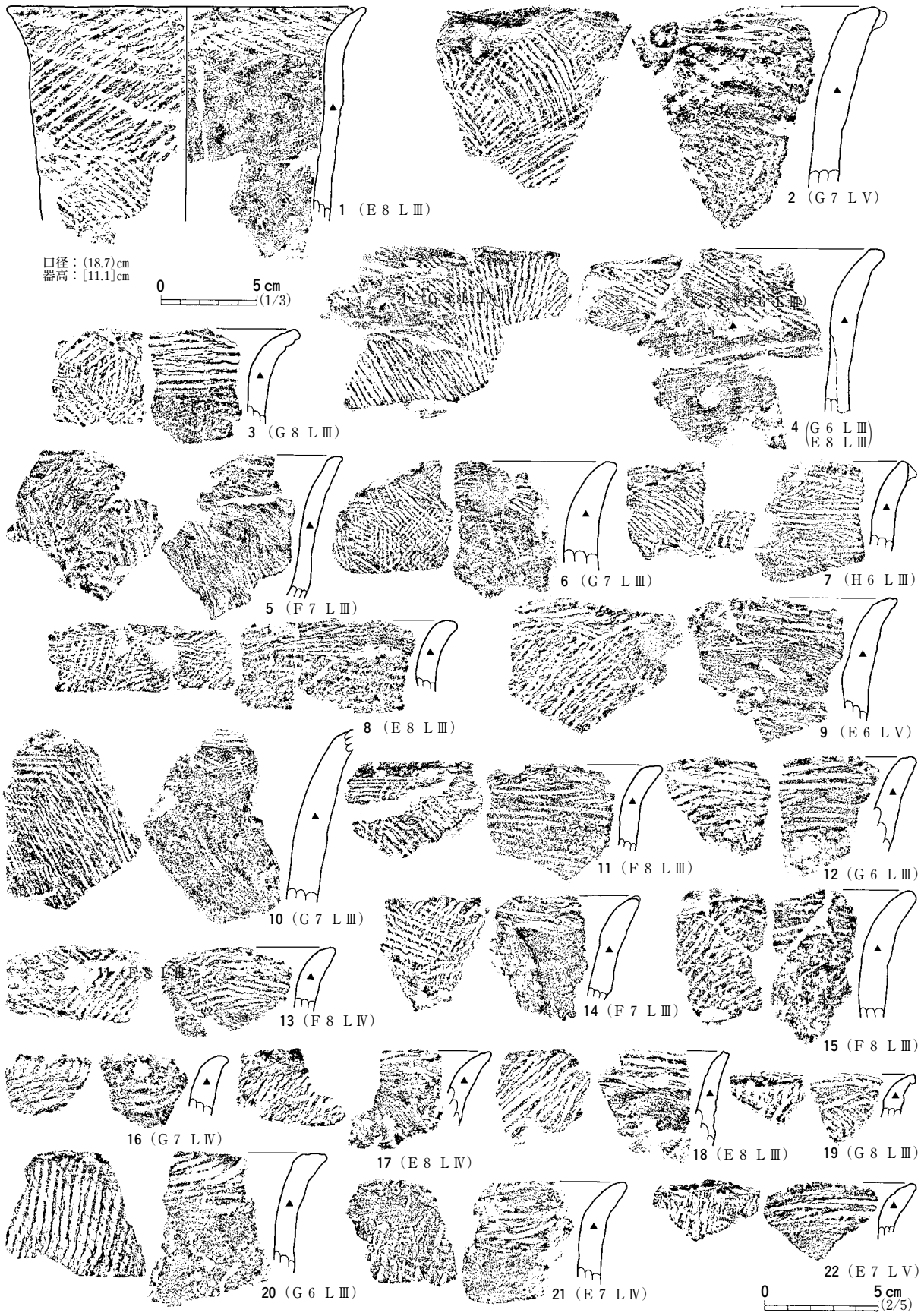


図51　遺物包含層出土遺物（７）

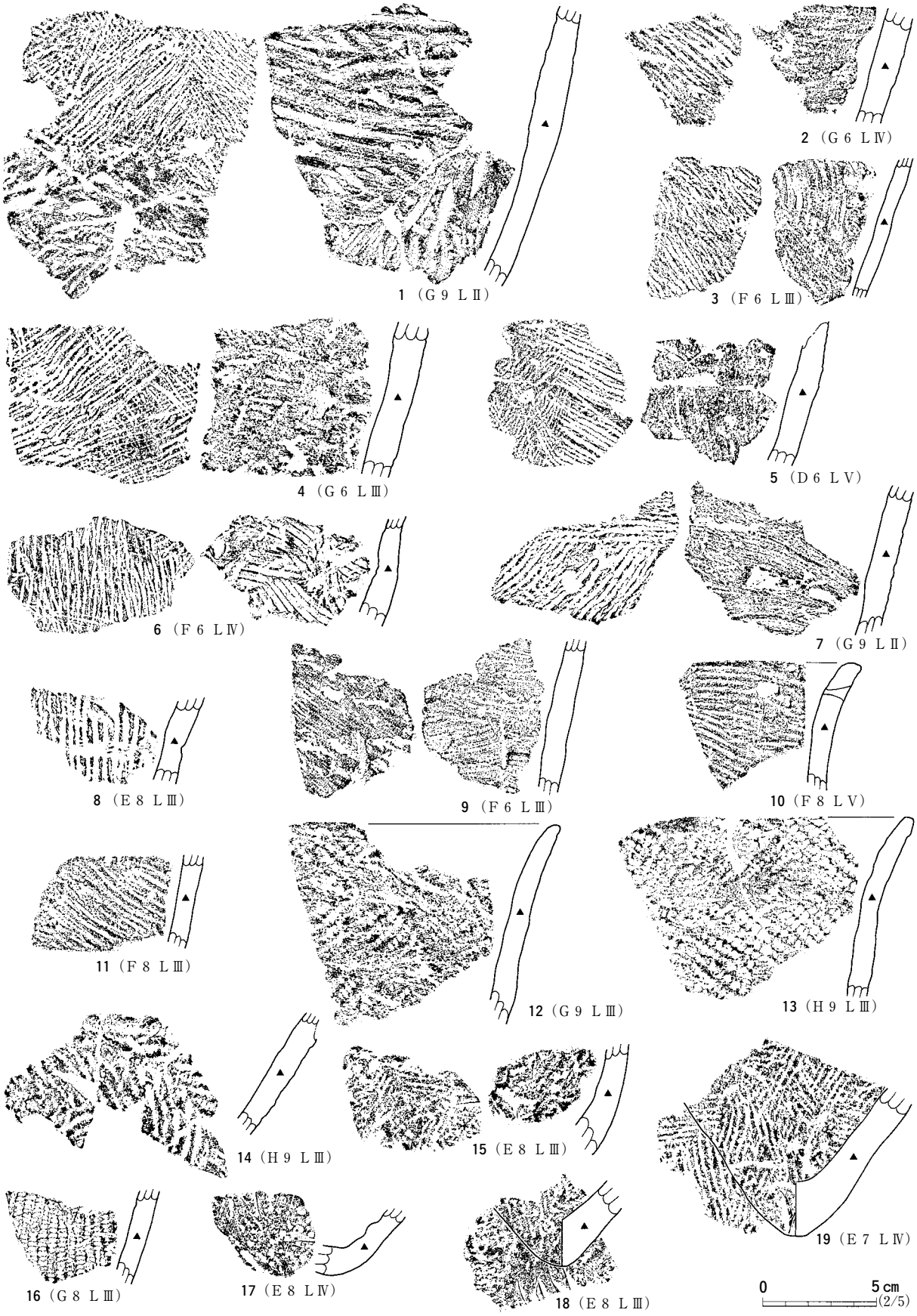


図52　遺物包含層出土遺物（８）

52－６・８は縦方向に施している。図51－16・19については口唇直下に原体である絡条体を押しつけた痕跡が認められる。外反する口縁の上端内面には，外面と同原体による撚糸文が施され，下に条痕・擦痕が認められるもの(図51－１～４・10・13・18・20・22)もあるが，それ以外は条痕および擦痕のみが施されるものであり，無文の場合もある。

５類　図52－９～11に示した，条痕文のみを施すものである。９は内外面条痕，10・11は外面のみ条痕である。

６類　図52－12・13に示した地文斜縄文の土器である。口縁部である。内面は無文となる。

７類　図48－11・図52－16に示した，縦走縄文を施すものである。図52－15は胴部破片で，内面が無文である。図48－11は地文に縦走縄文を施す，沈線施文土器で，先端の丸い工具による単沈線で描かれる。胎土には繊維を多量含み，内面は無文となる。

８類　図52－15・17～19に示した，底部付近の資料である。15・18・19は外面撚糸文，内面無文，17は内外面とも無文である。

１～４類は，舌断面状と称される強く外反する口縁部形態や文様から大畑Ｇ式またはそれと近縁性のある土器群に比定される。７類は薄手で，縄文を縦位に配していることから，いわゆる日向前Ｂ式と称される一群に比定されるよう。

前期初頭の土器　これに比定される土器は，図52－14および図53に示した。胎土に砂粒，雲母，繊維を含む。器壁は８～13㎜と厚い。器表面には羽状縄文が施され，内面は無文でナデ調整される。

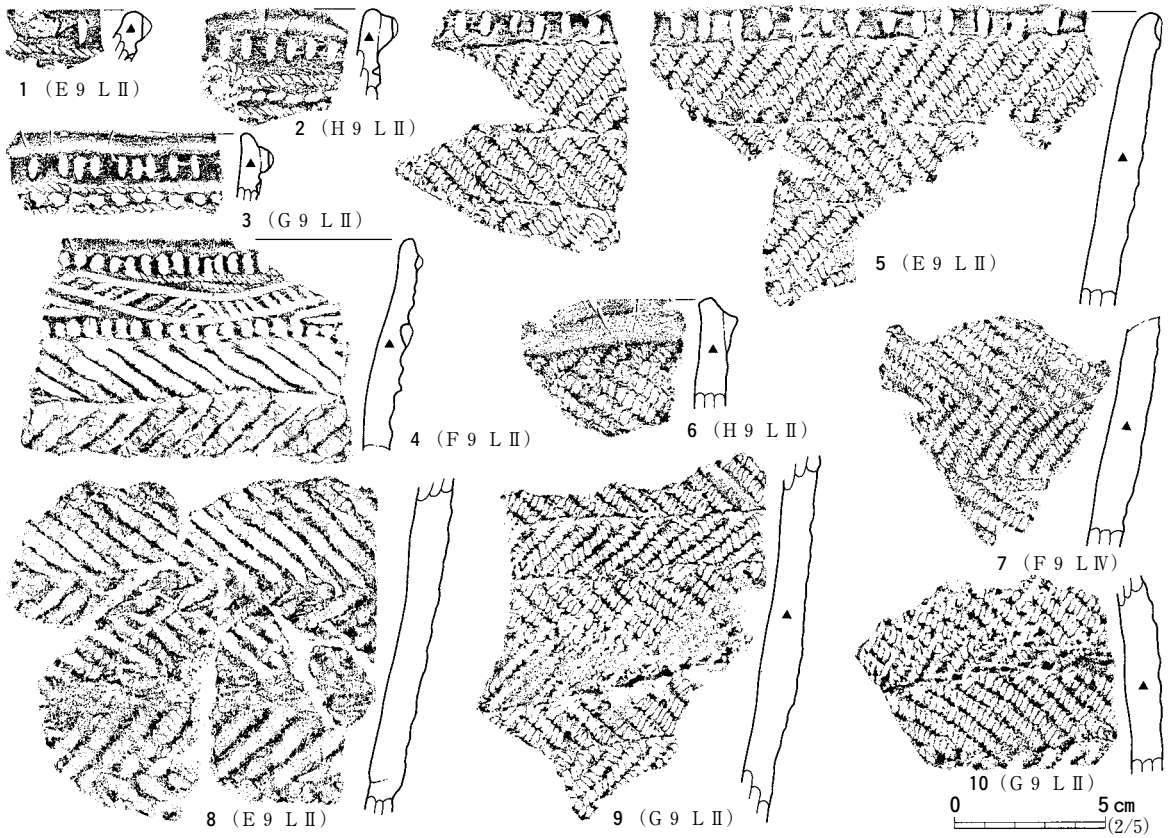


図53　遺物包含層出土遺物（９）

縄文は，長さ２～３㎝の０段多条の縄を原体としている。文様は，肥厚する口縁部上端に刻みが施され，直下の文様帯は狭く，棒状工具の刺突や縄側面圧痕によって文様を描く。これらの一群は，文様の特徴から花積下層式に比定される。

１類　１～４に示した，文様帯を持つ口縁部破片で，いずれも口縁部上端に刻みのある隆帯を貼り付け，縄圧痕によって文様を描く。１～３は隆帯直下に縄圧痕を沿わせ，その下に刺突文を１列並べる。縄圧痕による文様は失われており，モチーフは不明である。刺突文は，１は円形竹管，２・３は棒状工具を左から右へと斜めに刺突している。４は口縁部上端を無文とし，その下部が棒状工具による刺突によって区画した文様帯となる。文様は沈線と１条の縄圧痕を用いて弧線文を描く。弧線間には弧線と同じ縄による側面圧痕が充塡される。文様帯下は非結束羽状縄文が施される。

２類　５・６に示した，縄圧痕による文様帯を持たない口縁部である。６は無文の口縁部下に非結束羽状縄文が施される。５は口縁部上端に棒状工具による刻みを施すのみである。

３類　非結束羽状縄文が施される胴部破片である。図52－14は丸底もしくは尖底部近くの胴部下半の資料で，図53－７～10は胴部破片である。

出　土　石　器（図54～58，図版58・59）

石鏃　図54－１～15に示した。１～４は平基の石鏃である。いずれも素材の剥離面を残していない。１が側縁の内湾する形であるほかは二等辺三角形に成形されている。１・２が黒雲母流紋岩，３が流紋岩，４は石英である。流紋岩でも３のみ斑晶が少ない流理構造が認められる石質である。石英とした４は白色半透明なものである。５～11は二等辺三角形を呈する凹基の石鏃である。全て二次加工によって器体が覆われ，素材の剥離面を残していない。５・７・８は基部が幅狭く痩身な印象を受ける。いずれも黒雲母流紋岩である。12～15は正三角形を呈する小型の石鏃である。12が水晶であるほかは黒雲母流紋岩である。13～15は裏面に素材の腹面を残していることから，小型，薄手の剥片を素材としたことが分かる。

石鏃未成品　図54－16～20に示した。小型の両面石器で，鋭い尖頭部や刃部を有さないものである。三角形に成形されているものの，石鏃よりも大型で厚みがある。しかし，その他の石器よりも明らかに小さく，その他の石器の未成品とは思えないことから，最終調整前の石鏃未成品と考える。いずれも黒雲母流紋岩である。

16・18は粗く剥離して三角形に成形したものである。17は円形で，素材の剥離面を残しており，成形途中の資料と考える。19は切断した小型の剥片の縁辺に二次加工されるものである。尖頭部・基部とも形作られてはいるが，縁辺の加工として急斜な剥離が入っているため鋭さがなく，未成品と判断した。20は素材の腹面を残しており，19同様小型剥片を素材としたと考えられる。

石槍　図54－21・22に示した。石鏃よりも大型の尖頭部を持つ両面加工の石器である。21は尖頭部・基部を欠く。小型だが，押圧による交互剥離が認められることから槍と判断している。石質は白色の石英である。22は硬質頁岩製で，基部に抉りを持つ。調整は押圧の交互剥離による。

磨製石斧　図55－１～３に示した。１は断面楕円形，両刃の石斧である。研磨が足らず，成形時

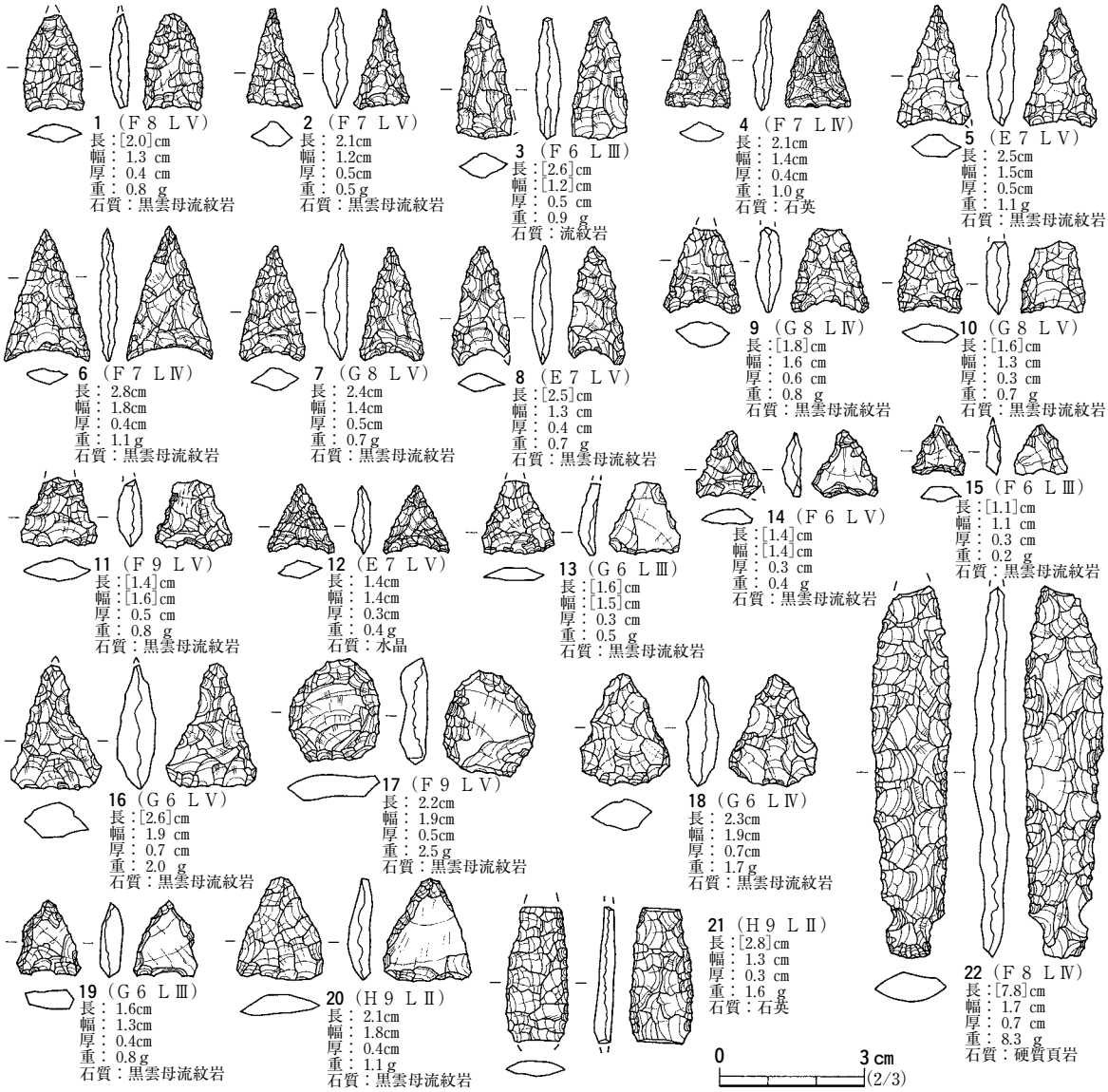


図54　遺物包含層出土遺物(10)

の剥離や敲打の痕が残る。２は小型の擦切磨製石斧で，扁平で，片刃である。片刃の平らな面には，基軸と平行な使用痕が認められ，鑿のような使用法を取られたと考えられる。３は擦痕が認められる平滑面が背面となる剥片の縁辺に二次加工が認められる。裏面には明確なリングやフィッシャーは認められないことから目的的に剥離したものでなく，背面の状態を評価して，磨製石斧の破損品を再利用したものと考えている。石質は３が頁岩であるほかはいずれも蛇紋岩である。

打製石斧　図55－４・５に示す，末端に鈍い刃部を有する大型の両面加工石器である。４はホルンフェルス製で，風化が著しく，剥離痕の詳細は不明である。側縁にツブレなどの着柄痕は認められず，石核の可能性もあるが，同石材の剥片石器は今回の調査では皆無である。５は安山岩製である。基部付近の側縁にツブレが認められ，これは石斧の可能性が窺える。

スクレイパー　図55－６・７に示した。石鏃未成品とするものよりも大型の，刃部を有する両面加工石器である。６は緑色凝灰岩製で，厚みの残る末端に，剥離を集中させている。この末端を刃

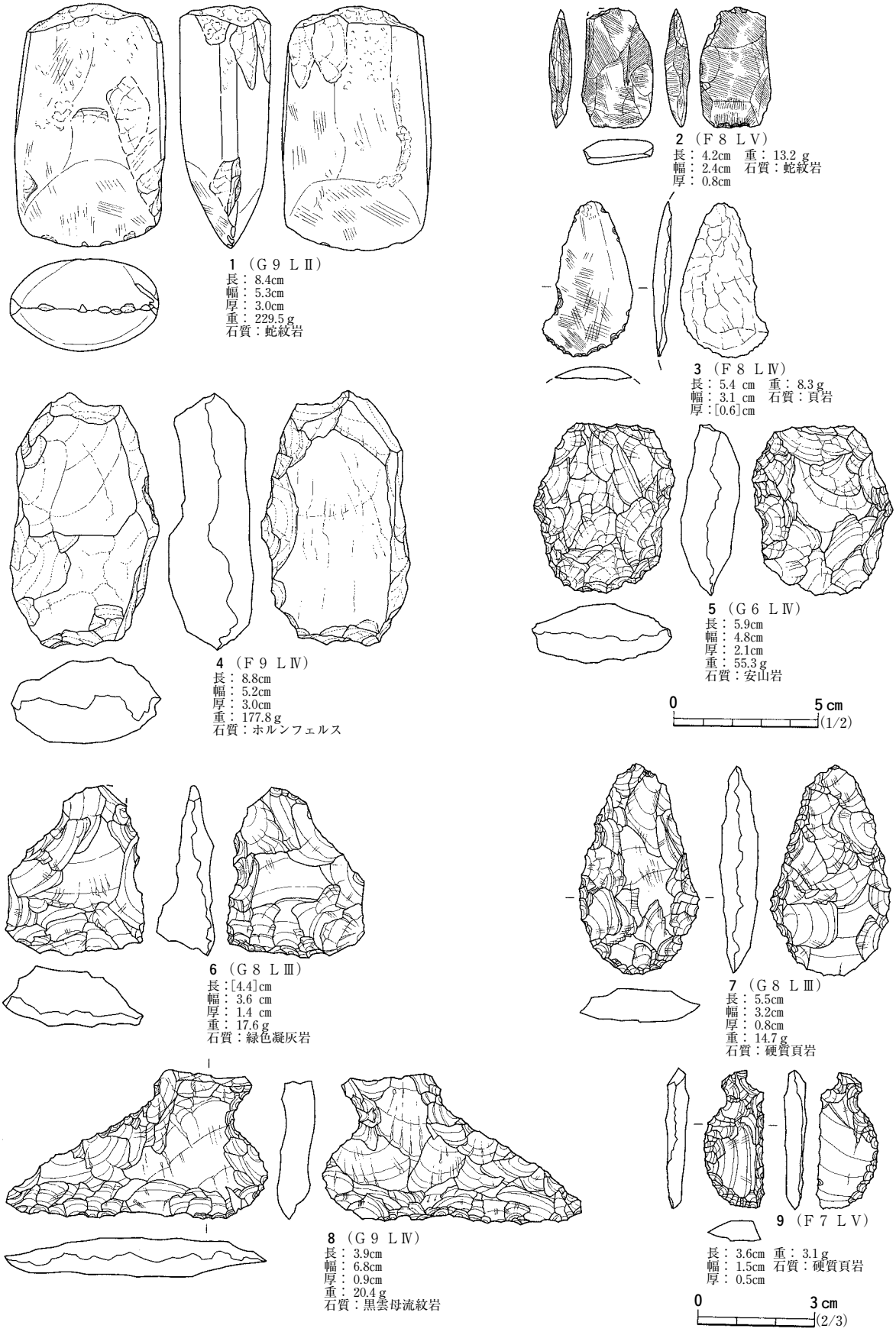


図55　遺物包含層出土遺物(11)

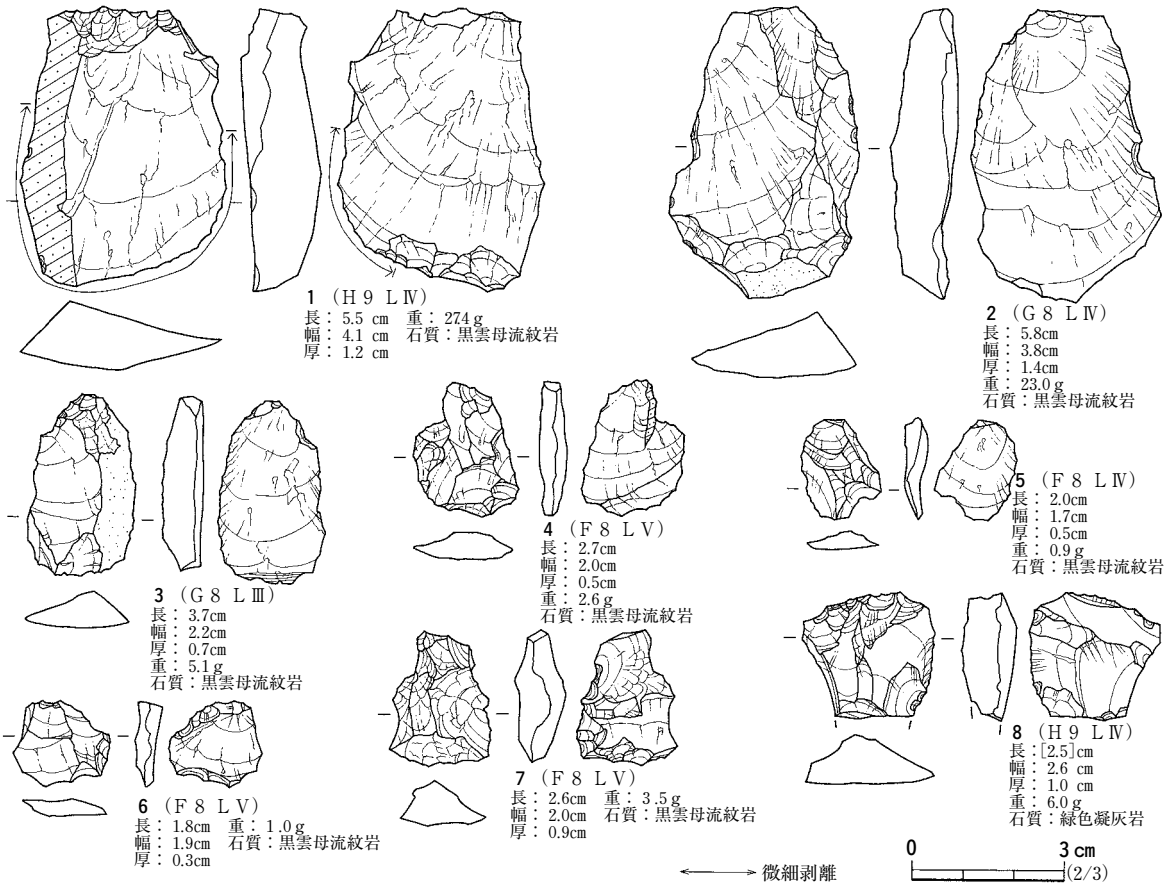


図56　遺物包含層出土遺物(12)

部とする掻器の可能性があると考えている。7は硬質頁岩製で，縦長剥片の側縁に二次加工を集中させている。この側縁を刃部とする，削器だろうか。

石匙　つまみと刃部を有する石器である。図55－８・９に示した。８は黒雲母流紋岩製の横型石匙で，作りが粗い。大型剥片を粗割りして三角形に成形した後に，刃部とつまみ下部の抉れ部分に剥離を集中させている。下端の刃部中央付近は，使用によるものか小型の剥離が集中し，つぶれたようになっている。９は硬質頁岩製で，小型の縦型石匙である。腹面側に二次加工はあまり入らず，素材の剥離面を大きく残している。左側縁から末端にかけては角度の浅い剥離が入り，つまみのつく右側縁には角度の急な剥離が入る。左側縁が刃部，右側縁が背となるのだろう。

剥片　213点出土している。大半は黒雲母流紋岩製で，その他に硬質頁岩やチャート，緑色凝灰岩などが僅かに認められる。

８点を図56に示した。８を除いてはすべて黒雲母流紋岩である。１は大型の剥片で，自然面打面から剥離されている。背面は剥離方向と同一の大きな剥離面１枚と打面縁に遺る小型の剥離で構成され，剥片剥離初期の剥片と判断される。側縁から末端にかけて微細な剥離が認められ，腹面末端には二次加工も入っている。２は打面と末端に自然面を残し，背面の剥離は全て外側を向いている。ここから，素材は礫であり，作業面を固定させ，作業面周囲の自然面上に打点を周回させる形で剥離していることが分かる。３は右側縁に自然面を残す剥片で，末端は階段状となる。打面角の鋭角

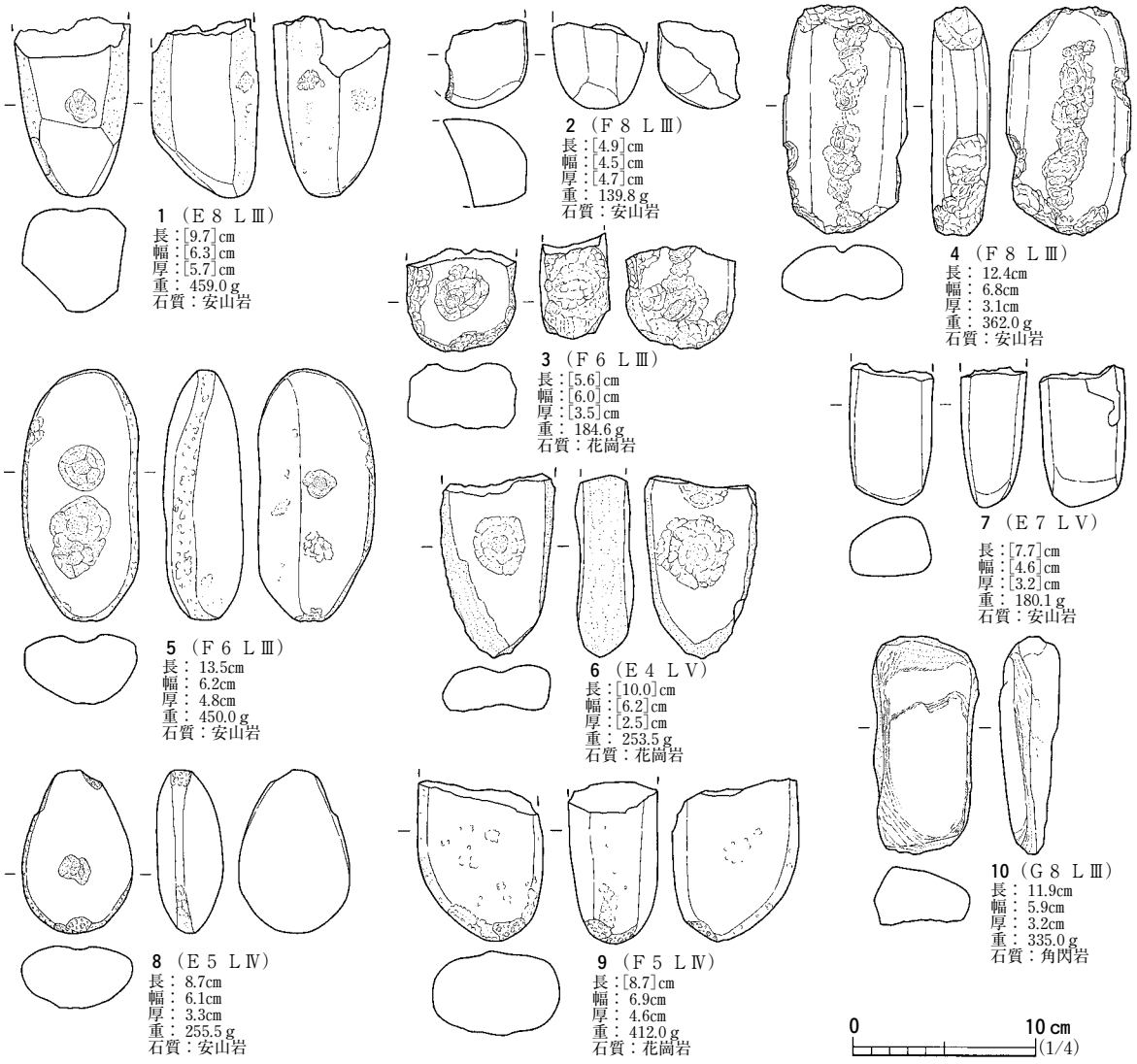


図57　遺物包含層出土遺物(13)

な複剥離面打面から剥離され，背面は剥片剥離方向と同一方向の剥離面と末端に直行方向の剥離面が認められる。４は打面角の鈍角な平坦打面から剥離されたと思われるが，剥離時の衝撃でバルブが節理面から半分欠損している。腹面の折れ面際にバルバースカーが残される。背面は器体の外側を向く剥離によって構成される。石核周縁に設定した打面から求心的な剥離を行ったものであろう。５・６は打面角の鋭角な打面から剥離された小型の剥片である。５は複剥離面，６は多剥離面打面である。背面は，器体の外側に向いた小型の剥離面によって構成されている。これらの状況から，打面と作業面の入れ替えの激しい小型の石核からの求心的な剥離作業が想定され，おそらくは石器の成形時の剥片と判断される。５の背面剥離面は稜が高く，６は平坦な剥離であることから，６の方が整形の進んだ状態での剥片といえるだろう。７は背面右側縁からの剥離が表裏に認められ，主要剥離面は残存しない。左側縁は折れ面であり，石核，もしくは成形途上の石器から落としたものと判断される。８は緑色凝灰岩の残核と思われる。作業面，打面を入れ替えながら，求心的な剥離を行っている。背面上部からの小型の剥離が最終剥離面である。左側縁と下端は折れ面であり，石

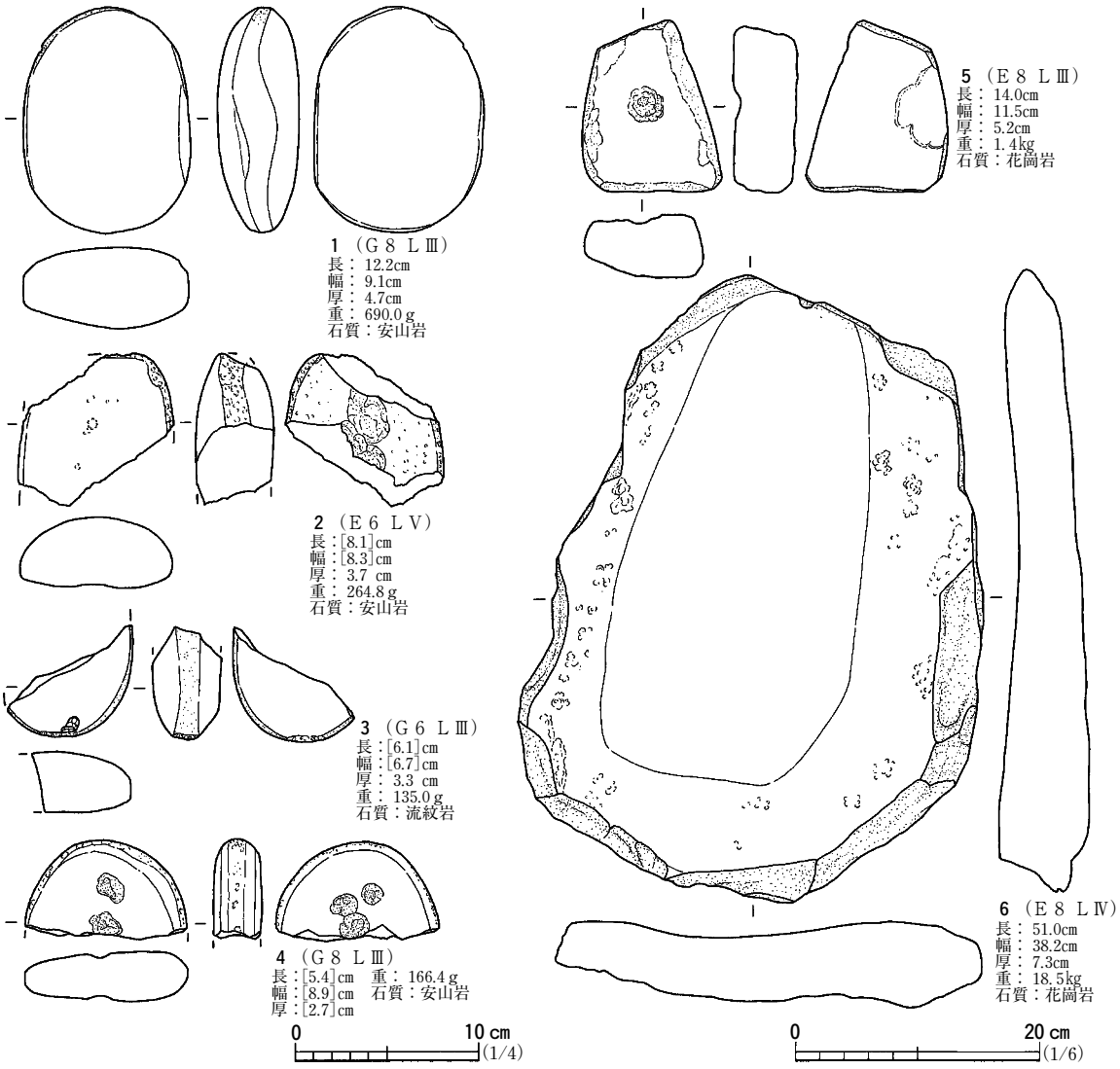


図58　遺物包含層出土遺物(14)

器の素材としようとしたのかも知れない。

磨石　図57・図58－１～４に示した。自然礫上に研磨・敲打の痕跡が残されるものである。いずれも礫の全体を研磨・敲打に使用し，複数の痕跡が認められるものが多く，敲いて，磨るという行為が一連の作業として行われていたことを窺わせるため，器種としては一括する。磨り面は平滑で，凸面を呈するものが多く，擦痕が分かるものは少ない。

図57－１・２は三角柱状を呈する礫の平坦面を磨り面に，角の稜を敲打と磨り面に使用する。そのため，平坦面は平滑に，稜の部分はざらついた面となっている。１には敲打による浅い凹みも認められる。図57－７は亜角礫を素材とし，平坦な４面を磨り面としている。図57－10は縞状構造が認められる角閃岩で，部分的に節理で剥落している礫を素材としている。

そのほかは亜円礫・亜角礫を素材とし，亜円礫は平坦面を研磨中心，側面・端部は敲打を中心として使用している。敲打は平坦面上でも行われ，敲打が集中した結果，凹みとなっていると思われるが，図57－３～６の凹みは深く，意図を持って穿たれているようである。３・４には側面にも凹

みが認められる。これらの石質は安山岩と花崗岩が多い。円磨度の高いものは大体安山岩で，花崗岩は図57－３・６のみである。

石皿・台石　研磨・敲打の痕跡が残される，大型で掌中にての使用が不可能なものである。５点出土しているが，いずれも風化が著しく使用痕が明瞭に見て取れない。状態の良い２点を図58－５・６に示した。いずれも花崗岩を用いている。５は破砕した礫の中央に凹みが残される。表・裏とも研磨していると思われるが，風化が著しく明瞭には確認できない。６は表面のみ研磨・敲打に使用され，皿状に窪む。縁辺は風化した剥離痕が連続するような状態であり，使用しやすいように成型作業を行っている可能性もある。（山元）

第４章　ま　　と　　め

第１節　平安時代の遺物

土師器の特徴と年代

平安時代の遺物は，竪穴住居跡から出土したものが大半である。遺物の主体を占めるのは土師器である。須恵器の出土量はごく少なく杯・甕・長頸瓶の破片がみられる程度である。このため，ここで取り上げるのは，住居跡の床面から出土した土師器を対象とする。器種は，杯・甕・鉢・筒形土器などである。以下，器種ごとの特徴をまとめておくこととする。

杯はすべてロクロ整形によるものである。内面はミガキ・黒色処理されている。ミガキが入念にされているもの，ミガキの幅が広いもの(図７－３)などがある。ロクロからの底部の切り離し後に調整の有無で，底部から体部下端にかけて再調整されるもの(Ⅰ類)とされないもの(Ⅱ類)に分けられる。Ⅱ類は図14－１の１点しか出土していないので，Ⅰ類が主体を占めている。さらにⅠ類はⅠａ～ｃ類まで分けられる。Ⅰａ類は回転ヘラケズリ，Ⅰｂ類はヘラケズリ，Ⅰｃ類はヘラナデなどである。Ⅰｂ類(図17－２)とⅠｃ類(図11－４)は各１点しか出土していないので，Ⅰａ類が主体を占めている。

次に器形をみてみる。器形分類については径高指数・外傾度・彎曲指数(仲田1994)を用いると，Ⅰａ類の径高指数は32～40，外傾度は30～40，彎曲指数は8.3～13となり，広網遺跡第３群土器(仲田1994)に相当するようである。Ⅰｂ類は黒森川流域では西田Ｈ遺跡１号住居跡・柳作Ｃ遺跡２号住居跡・鹿島遺跡２号住居跡などからも出土している。

小型甕は１号住居跡(図７－10・図８－３)・４号住居跡(図16－11)から出土している。いずれもロクロナデがなされている。外面ではロクロメが強調され，特に図12－11は顕著である。口唇部は須恵器模倣の面取りされている。

甕はその全体の形状が分かるものがない。そのなかでも，比較的全体の形状が分かるのは２・４号住居跡カマド煙出部に埋設された甕(図11－12・図16－７)である。口縁部から胴部上半の内外面はロクロナデされている。胴部下半の調整は外面がヘラケズリ，内面はナデとなっている。このように，胴部上半と下半とで調整が異なっていることから，別々に作られ後に接合したものであろう。ロクロ整形のもの以外にも，１号住居跡からは，内外面にヘラナデ，口縁部にヨコナデの甕(図８－４)がある。

鉢は１号住居跡(図７－７・８，図８－２)から出土している。いずれも内面にミガキ・黒色処理されている。図12－２は口縁部の破片であるが，外面にロクロナデを加えてハケメ調整がなされている。

筒形土器は２号住居跡から細片の状態で出土している(図11－13～16)。外面には成形時の指頭圧痕，

積み上げ痕などがみられ，内面にはヨコナデがなされている。

１・２・４号住居跡から出土した土師器杯の器形から，従来の研究成果によると２ｂ段階(木本1990)・広網遺跡第３群土器(仲田1994)に相当することから，９世紀前葉の頃となろう。

土師器杯の使用痕

１号住居跡出土杯のなかで，底部から体部下半にかけて外面の器面が荒れているもの(図７－１)，口縁部と体部下端，内面の器面が荒れているもの(図７－２・４・５)などがある。さらに，４号住居跡でも底部から体部下端にかけて内面の器面には，半円を描くような線状痕がみられる(図７－４)。これは，どのような状況から生じたものであろうか。器面が荒れているものは，収納時に重ねて置かれ，使用・収納の際ほかの土器と器面が擦れて生じたもの。内面に線状痕があるものは，使用の際に匙などが器面に当たり生じたものと推測している。

墨書・刻書土器

杯には墨書・刻書されたものが出土している。判読できたものでは墨書が「鬼」(図７－５・図11－８・図16－５)，「集」(図11－９・図16－３)，「王」(図７－３)である。刻書は焼成後に書かれた「集」(図７－１)，焼成前に書かれた「吉」(図11－10)がある。このうち「鬼」・「集」は墨書・刻書とも両方みられることと，１・２・４号住居跡からは「鬼」の墨書・刻書土器が出土している。このことは「鬼」が，「集落内におけるある種の集団の標識的文字」(高島1994)とも考えることができる。

堂田Ａ遺跡では１号住居跡カマド周辺の貼床土中と４号住居跡の床下の小穴から，杯が底部外面を下にした状態で刻書土器が出土している(図７－１・図16－１)。この２点の出土状況については，何らかの意図を持って埋めたことを示している。さらに，土器に刻書がなされていることから，土器を埋めることに際し文字を刻んだ行為を想定することができる。さらに，１・２号住居跡から用途不明な土製品(図８－６，図12－３・４)が出土している。この土製品は明らかに日常雑器と異なることから，祭祀具することもできる。土製品と墨書・刻書土器については共伴関係が認められない。墨書・刻書土器については「祭祀形態に付随した形で一定の字形，なかば記号化した文字」(平川1991)とされ，祭祀に伴うものと評価されている。堂田Ａ遺跡では墨書・刻書土器の一部の資料については，特異な出土状況なものがあるが，すべてのものが同様な状況を示してはいない。

第２節　平安時代の遺構

調査区から検出した平安時代の遺構は，竪穴住居跡４棟である。１・３・４号住居跡は標高483.5～485.5ｍの南向き緩斜面に，２号住居跡は標高486～487ｍ東向き急斜面に，住居跡との重複はなく，ある程度の間隔をとって建てられている。

第４章第１節で述べたように，出土遺物からは明らかな時期差はなかったと考えている。よって，これら４棟の住居跡は同時に存在していたことも，可能性の一つとして挙げることができよう。

２・４号住居跡のカマドはいずれも北壁に付設されていた。１号住居跡には，北壁と東壁にもカマドが付設されていた。いずれのカマドにも袖が残っていたことから，カマド２基が共存していたものと考えている。

３号住居跡にはカマドがなかった。このため，他の住居跡と異なった使われ方をしていたことが推測できるのだが，具体的な内容はよく分からない。他の住居跡と比べ遺物の出土量が少なく，生活の痕跡をあまり感じさせない。

明確な柱穴を検出したのは２号住居跡で，斜面上方側に２基を検出した。上屋を復元すると斜面下方に向って上屋が傾斜する片流れ造りを推定している。１・４号住居跡では柱穴がなかった。これにより，上屋は壁で支えられていたのだろう。

堂田Ａ遺跡が位置する黒森川流域で，同時期の住居跡は西田Ｈ遺跡１号住居跡，柳作Ｃ遺跡２号住居跡，鹿島遺跡１・２号住居跡などがある。このうち西田Ｈ遺跡１号住居跡では，カマド煙出部に土師器甕が口縁部を下にして埋設されていたこと，カマドに角柱状の石材が利用されていたことなど，本遺跡とのカマドの造り方で共通点がみられる。だが，西田Ｈ・柳作Ｃ・鹿島などの諸遺跡の住居跡には，掘立柱建物跡が伴っている。堂田Ａ遺跡では掘立柱建物跡が検出されていないので，これらの遺跡とは様相が異なっている。しかし，集落跡の一部を調査しただけなので，竪穴住居跡と掘立柱建物跡の占地が異なり，未調査部分に存在している可能性を考えることができる。

さらに，小野町町内で同時期の集落跡は，黒森川流域に西田Ｈ遺跡・柳作Ｃ遺跡，夏井川流域に本飯豊遺跡・鍛冶久保遺跡・小滝遺跡，車川流域に麹内遺跡がある。このうち，本飯豊遺跡は７世紀から集落が形成されるのに対して，鍛冶久保遺跡・小滝遺跡では，９世紀から小規模な集落が形成されている。本飯豊遺跡を除くと黒森川流域の集落跡と共通する特徴が見られる。　　（吉野）

第３節　縄文時代の遺物

出土土器の特徴と編年的位置

今回の調査では，縄文時代早期中葉・後葉・末葉，前期初頭の土器が確認されており，それ以外の時期の土器は皆無である。それぞれの出土状況は，遺物包含層での出土状況は，層位毎に異なる土器が出るということはなく，住居跡内からも数時期にわたる土器が伴出する状況であり，層位学的に型式を分析するのは不可能である。繰り返しになるが，各時期の土器の特徴をまとめてみる。

早期中葉～後葉の１類としたものは，常世１式に比定される。これは，胎土に繊維を含まず，砂粒・雲母を含む。器壁５㎜程度，焼成は良好で硬質である。文様は，無文地に沈線と各種工具の刺突を組み合わせたものである。器形は大波状口縁が認められ，底部は乳房状の尖底となる。

同じく２類は，子母口式併行期とした。これらの特徴は，胎土に繊維をほとんど含まず，砂粒・雲母を含む。器壁は６～８㎜で，焼成は良好で硬質な土器で，この辺りの特徴は，常世１式としたものに近しい。文様は，無文地もしくは条痕文地に，絡条体圧痕を配し，口唇部上には貝殻や櫛歯

状工具による刺突が施される。器形は，平縁が多く，一部に波状口縁も認められる。底部は平底だと思われる。ただし，今回は１類に含めた，地文に条痕が施される乳房状の尖底資料(図49－30)は，本類との類縁性が窺え，これらの資料が併行関係にあることを示すと思われる。県内出土の資料では，絡条体圧痕を施される一群として常世２式土器があるが，これらは胎土に繊維を含むものであり，本遺跡出土の該期土器とは異なるものである。胎土に繊維を含まず，絡条体圧痕文を施す土器としては，飯舘村松ヶ平Ａ遺跡(２次調査)のⅡ群３類土器やいわき市竹之内遺跡の15類－絡条体圧痕紋系土器などがある。そのほか塩川町南原遺跡や長沼町ジダイ坊遺跡などでも出土しており，中村五郎氏が「塩川南原期」とする段階の一群に比定できよう(中村2002)。本遺跡が所在する黒森川流域でも柳作Ｂ遺跡および本書第２編所収の西田Ｈ遺跡でも出土しており，本遺跡との関連が窺える。

同じく３類としたものは，槻木１式に比定した。胎土に繊維をほとんど含まず，砂粒・雲母を含む。器壁は５㎜程度で，焼成は良好な硬質な土器である。文様は，条痕文地に細隆起線のみを用いて幾何学的モチーフを描く。口縁部は平縁のみである。底部は尖底と思われるが，15号住居跡出土の平底資料(図38－22)は，細隆起線を持っており，この時期には平底の土器も存在していることがわかる。また，県南地方によく見られ，上記した西田Ｈ遺跡でも出土している併行もしくは後続する時期の関東系土器である野島式は全く見られなかった。

早期末葉１～４類・８類は，大畑Ｇ式に比定される。これは，今回出土した土器としては最も数量的に多いものである。胎土には繊維を多量含む。器壁は８～12㎜で，焼成は良好であるが，多量の繊維痕のため軟質な印象を受ける。地文は撚糸文が大半を占め，条痕，縄文は若干認められる程度である。内面には条痕が施されていることが多く，口縁部上端に撚糸文が施されるものもある。内面縄文は認められない。文様は，平行沈線を用いて弧線文や「ユニオンジャック」状の格子文様を描く。器形は，口縁部上端が強く外反し，胴部は寸胴で，底部は尖底・丸底を呈する。

７類としたものは，縦位に縄文を配したものであり，これについては日向前Ｂ式と呼ばれる一群に比定されるが，数的には微量なものである。

５・６類としたものについては，これらよりもやや古いものの可能性もあるが，出土点数が少なく詳細は不明である。

前期初頭としたものは花積下層式に比定される。胎土に，砂粒・雲母・繊維を含む。器壁は８～13㎜で，焼成良好な土器である。外面には地文として，０段多条の原体による羽状縄文が施され，沈線・刺突・縄の側面圧痕を文様要素とする口縁部文様帯を持つ。内面は無文で，ナデ調整される。器形は，若干口縁が外傾するが，底部は出土しておらず不明である。本県における花積下層式は，飯舘村羽白Ｄ遺跡出土土器を元にした細分案が幾つか提示されている。「羽白Ｄ遺跡(第２次)」に示された５細分に従えば(福島県文化センター1988)，これの２段階目に相当する同遺跡５・19号住居跡出土土器に併行するものである。

以上出土土器から堂田Ａ遺跡を考えると，早期の中葉から前期初頭に至る比較的長い時間にわたっ

た土器群が出土している。早期中葉から後葉の時期に常世１式から槻木１式への継続性が認められ，一旦断絶期間を挟んで早期末葉大畑Ｇ式期に活発化するといえる。

石器の組成と製作技術

器種組成　今回出土した石器については，全てあわせて石鏃50点，石鏃未成品96点，石槍３点，磨製石斧３点，打製石斧２点，スクレイパー３点，石匙２点，磨・敲・凹石21点，石皿・台石12点，二次加工ある剥片46点を数える。石器製作の副産物である剥片・砕片は1,855点，石核が５点を数える。成品では，石鏃が卓越し，その他の利器としての石器は貧弱である。多量に出土している剥片については，表１に未掲載剥片類の石質別点数を示した。これを見れば，今回出土した石器については，剥片石器では黒雲母流紋岩が９割方を占めていることが分かる。

石鏃については，大部分が黒雲母流紋岩製である。石鏃未成品が多く出土していることと，表１のように剥片類の大部分がこの石材であることを考慮すれば，本遺跡において黒雲母流紋岩の石鏃を製作していたのは間違いない。その他の利器としたものについては図55に示しているが，黒雲母流紋岩製のものは少ないことが分かる。さらに，その他の利器に使われた石材の剥片出土数もかなり少ない。このことから，この遺跡で大量に製作していた石鏃についてはその場に捨てられていったが，それ以外の剥片石器は遺跡外へと持ち出され，このような組成になったものと理解される。

そのほか，石槍については，基部に抉りの入ったもの(図58－22)が出土しており，これは「押出型ポイント」や「有撮石器」と呼ばれるものに近い。他遺跡での出土例では，前期中葉から後葉の土器に伴うことが多く，本遺跡の出土土器とは時期が合っていない。

利用石材　序章第２節に述べたように，小野町の表層地質は，河床および氾濫原に砂礫，その後背地である丘陵部には花崗岩・斑糲岩類のみしか認められない。すなわち，花崗岩のみ在地の石材で，それ以外はすべて異地性の石材といえる。

表１　非掲載剥片石質別点数

	SI05	SI06	SI07	SI08	SI09	SI10	SI11	SI12	SI13	SI14	SI15	SI16	SI17	SI18	SI19	SK	SH	計
黒雲母流紋岩	407	1	120	5	6	1	81	3	8	36	138	465	148	87	353	88	429	2376
流紋岩																	9	9
赤玉(鉄石英)																	1	1
硬質頁岩	4		1							2	4	1			3		6	21
珪質頁岩																1	5	6
頁岩			1							1	1	3			1		2	9
緑色凝灰岩	2											2					1	5
チャート	4		2					1									4	11
石英	1		2								2						8	13
水晶												1				1	30	32
黒曜石																		0
無斑晶質デイサイト			2		1						1			1		1	2	8
ホルンフェルス						1						1					6	8
安山岩											1							1

前述したように，出土石器の大部分を黒雲母流紋岩が占めている。この岩石は，風化面が白色を呈し，破断面は青灰色で珪質である。内部には黒色・透明の斑晶が認められる。これは，いわき市内の遺跡，または双葉郡南部での常磐道関連遺跡において石器石材として多用されている流紋岩と同質のものである(門脇2003)。これらは阿武隈山地東縁の湯長谷層群椚平層中に含まれているもので(真鍋2003)，椚平層自体は，いわき地方を中心として分布している。すなわち，黒雲母流紋岩は，いわき市域を中心として流通する石材ということができ，この流通圏の中に小野町域も入っていたということができる。

剥片石器としては，ほかに硬質頁岩，チャート，石英および水晶，緑色凝灰岩，ホルンフェルス，黒曜石などが認められる。また，剥片のみ認められた石材として，無斑晶質デイサイトがある。硬質頁岩は成品と剥片が，少数ではあるが確認されている。これについては，東北地方の日本海側が産地として考えられる(秦2003)。チャート，石英および水晶については，阿武隈山中でも産出する岩石である。その他の岩石の産地は不明である。

そのほかの石器としては，磨製石斧には蛇紋岩を使用している。この種の剥片は１点も出土しておらず，成品の状態で搬入されたと考えられる。川原石をそのまま利用したと考えられる磨・敲・凹石には，安山岩が多用され，その他には流紋岩，アプライト，花崗岩などが認められる。前記したように花崗岩を除いては，近隣では獲得できないものである。また，材料が巨礫である石皿・台石類は花崗岩のみであり，これらは，近隣の岩帯や崖錐性堆積物中から獲得されたものであろう。

石鏃未成品・剥片の分類と石鏃製作方法　上記したように，本遺跡では流紋岩製石鏃の製作が行われていたと考えることができる。ここでは，出土した多量の石鏃未成品および剥片が，石鏃製作のどの段階に伴うものか，分類を行った上，推察してみたい。ただし，住居跡の重複の著しさからその製作方法がどの時期に帰属するかは不明であることを先に述べておく。

まず，石鏃未成品は以下のように分類できた。

１類　剥片を３㎝程度の大きさに切断したものに，周縁からの二次剥離が入るもの
２類　粗く割ることによって三角形もしくは台形に成形されたもの
３類　基部・尖頭部の形状がある程度整えられているが，厚さなど細部の調整が未完のもの
４類　剥片３類・４類を切断したものに，押圧剥離を加えたもの
５類　素材の剥離面が残る剥片に，尖頭部もしくは基部のみ作出されたもの

ここからは，①素材を切断してある程度の大きさにする，②粗割りを行って三角形に成形する，③厚み，形状の調整，④尖頭部，基部の仕上げという工程が考えられる。大きく①・②の成形段階，③・④の調整段階と作業工程は分けられよう。②の工程途上のものが１類，②が終了したものが２類，③が終了したものが３類と考えられる。４・５類の存在は，厚みの薄い剥片などは②・③の成形工程をとばして，①からいきなり④へと進むものの存在が窺える。これは成品の中からも窺え，５号住居跡から出土した図24－５などの小型の石鏃は，全面的な二次加工は行わず，ある程度の成形と縁辺の調整だけで製作されている。調整は，片面ずつ剥離を行っており，交互剥離は認められな

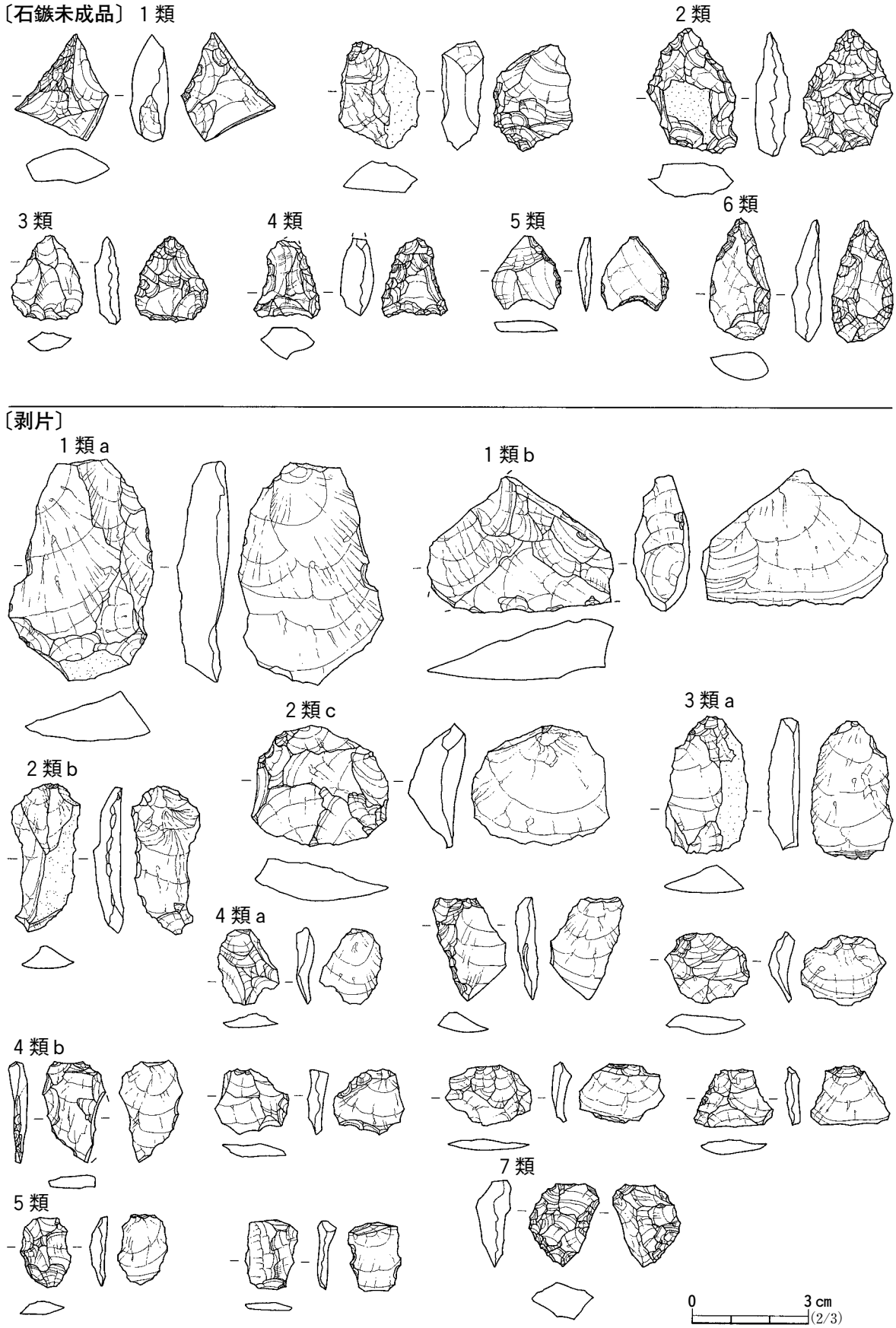


図59　石鏃未成品と剥片の分類

い。

剥片の分類は以下のようである。なお，非掲載の黒雲母流紋岩剥片の分類別点数は表２に示した。

１類　大きさは長軸５㎝以上，厚さは１㎝以上の大型の剥片で，自然面および平坦面打面の端を打撃することによって剥離されたものが目に付く。遺存度によってａ：完全なもの，ｂ：折れているものの２つに細分した。

２類　大きさは長軸３㎝以上で，厚さは１㎝未満。打面角が直角に近しい自然面および平坦面打面から剥離されたもの。背面構成によって細分でき，ａ：自然面および打点の遠い剥離痕が１～２枚，ｂ：中央に高い稜を持つもの，ｃ：多方向の剥離痕を持つものに分けられる。またこれらとは別に，折れたものが少なくなく，ｄ：切断されたものとした。

３類　大きさは20～25㎜で，厚さ５㎜ほどの剥片。打面角がやや鋭角な平坦もしくは複剥離面打面から剥離されたものである。背面構成からａ：自然面と打点の遠い剥離痕をもつもの，ｂ：剥片剥離方向と同一の剥離痕を持つものに分けられ，ｃ：切断されたものも認められる。

４類　長さ20㎜，厚さ４㎜程度の剥片で，打面角が鋭角な複剥離面か多剥離面打面から剥がされたもの。背面には多方向からの剥離が入る。打面と腹面の間に口唇部状の出っ張りを持ち，主要剥離面が内湾するものも少なくない。背面の状態からａ：背面の稜が高く，厚みがあるもの，ｂ：平坦な剥離痕で，薄いものがあり，ｃ：切断されたものも認められた。数量が最も多い。

５類　長さ10～15㎜，厚さ３～４㎜程度の小型で薄い剥片。線状もしくは連続する細かな多剥離面を打面として剥離する。背面には多方向からの剥離が入る。口唇部を持ち，主要剥離面は内湾している。数量的に４類に次いで多い。

６類　長軸10㎜以下，厚さ１㎜程度の細かな砕片。貝殻状を呈し，バルブが発達し，主要剥離面は内湾している。

７類　二次的な剥離が認められる剥片を折ったもの。

８類　分類不能な砕片。

１類は大型の剥片で，今回の調査ではこれを剥離したような大型の剥離痕を持つ石核は出土していない。２類については，背面に自然面が残されるものがあることから，素材が礫であることが分かる。打面が平坦打面もしくは自然面であることから，礫素材の端を１～２面大きく剥離して打面・作業面を作りだし，そこから連続的に剥離したと考えられる。ａはその初期の段階であり，ｂはある程度剥離が進み，ｃは作業面を固定して，求心状に剥離したものと考える。

これらを剥離した石核は，剥片の数に比して非常に数が少なく，さらに小型の残核が多い。石核として残らなくなるまで剥離を進めているか，石核を更に石器に加工しているためと考えられる。16号住居跡出土の石核(図42－３)のようなものは珍しい。これにしても，かなり大型ではあるが剥片を素材としたものである。この資料の存在から，本遺跡の石器石材は，すでに１類のような大型の剥片の状態で持ち込まれた可能性もあるが，確実に指摘するには根拠が薄い。

３類は打面・背面の状態から，石核は１類および２類などの大型の剥片だったと考えている。４

表2　非掲載剥片分類別点数

分　類	SI05	SI06	SI07	SI08	SI09	SI10	SI11	SI12	SI13	SI14	SI15	SI16	SI17	SI18	SI19	計
1類a	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1	0	0	0	3
1類b	24	1	18	0	0	0	1	2	0	1	5	10	2	4	7	75
2類a	9	0	8	0	0	0	5	0	0	0	5	4	0	0	12	43
2類b	7	0	7	0	0	1	3	0	0	2	4	3	0	4	4	35
2類d	20	0	3	1	0	0	9	0	0	10	20	27	22	5	23	140
2類c	0	0	1	1	1	0	3	0	0	0	0	1	1	1	0	9
3類a	29	0	5	0	1	0	3	0	0	0	3	16	4	3	19	83
3類b	19	0	1	0	0	0	0	0	0	1	4	6	0	8	0	39
3類c	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	4	0	6
4類a	52	0	8	2	0	0	13	0	0	0	8	35	12	8	35	173
4類b	48	0	10	0	0	0	6	0	3	3	20	76	39	11	40	256
4類c	15	0	23	0	0	0	9	0	0	10	23	43	22	1	54	200
5類	103	0	16	0	3	0	10	0	0	6	19	71	31	23	101	383
6類	34	0	0	0	0	0	0	0	1	2	3	95	5	0	15	155
7類	18	0	7	0	0	0	3	0	1	0	1	0	0	7	14	51
8類	17	0	1	0	0	0	10	0	1	0	6	50	9	0	10	104
二次加工ある剥片	3	0	2	1	0	0	0	0	2	1	3	21	1	3	4	41
石鏃未成品	9	0	10	0	0	0	6	0	0	0	12	6	0	5	15	63
計	407	1	120	5	6	1	81	3	8	36	136	465	148	87	353	1857

類は調整の入った鋭角な打面から剥がされたものである。剥離の進んだ盤状の石核から剥離されたと考えられ，bの背面が平坦剥離であることを考えれば，その石核とは成形途上の石器と考えられる。5類も同様に，石核上に残す剥離痕が，明らかに平坦剥離と考えられる。打面・背面の状況から考えても，調整剥離と捉えられ，大型石器の調整や石鏃の成形時の剥片と考えられる。4・5類は口唇上の出っ張りの存在や，平坦剥離である点からソフトハンマーの打撃による剥片と考えられる。6類については押圧剥離による砕片で，石鏃の調整段階の剥片だろう。このように3～6類は石器製作の一連の作業における副産物と捉えられ，数量的に多いのも首肯される。

また，1～4類にはそれぞれ割裂したものが多く確認され，切断したと判断されるものも少なくない。これらは石鏃製作の上で見られた，切断による成形作業に伴うものと考えられ，これは7類とした二次加工途上に切断した剥片の存在からも窺える。

以上をまとめれば，本遺跡の黒雲母流紋岩製石鏃は，求心状に剥離した剥片を切断して小割りしたもの，もしくは石器の成形段階の剥片を素材とし，切断やソフトハンマーによって粗割りを行うことによって粗形を作り，それを押圧剥離によって調整することによって作り出している。これらの加工は片面ずつ行われ，両面交互の剥離はない。また，同時に出土した剥片の多くは，これの製作各工程に伴うものであることが確認できた。（山元）

第4節　縄文時代の遺構

縄文時代の遺構は竪穴住居跡15棟・土坑5基・焼土遺構2箇所・小穴5基を検出した。これら遺構の大半は，調査区中央やや東寄りの谷底と東向き斜面に位置する。

検出した住居跡15軒のうち，すべてのものが縄文時代早期に含まれ，3時期に分かれる。それは

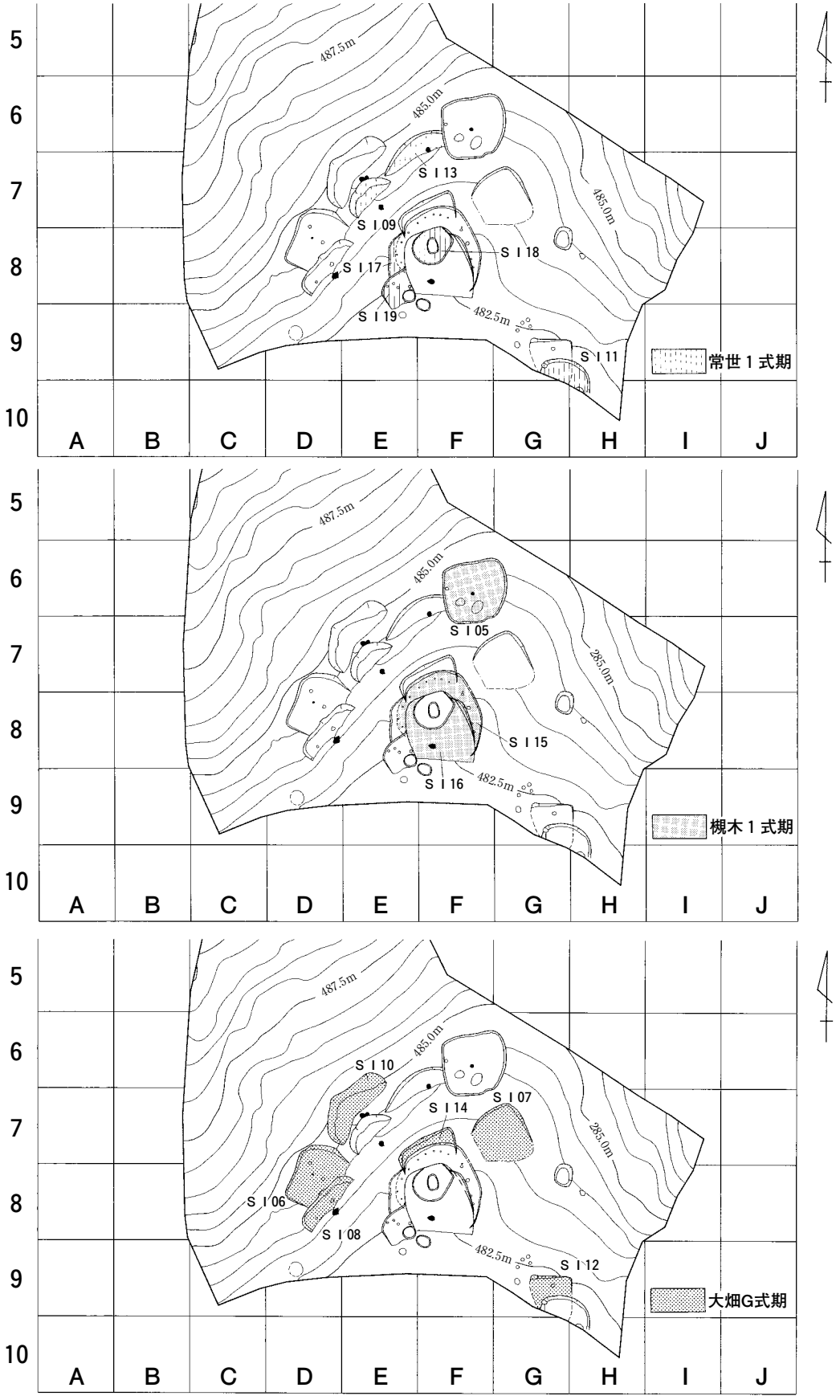

5
6
7
8
9
10
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
487.5m
485.0m
482.5m
285.0m
ＳＩ13
ＳＩ09
ＳＩ18
ＳＩ17
ＳＩ19
ＳＩ11
常世１式期
ＳＩ05
ＳＩ15
ＳＩ16
槻木１式期
ＳＩ10
ＳＩ07
ＳＩ14
ＳＩ06
ＳＩ08
ＳＩ12
大畑G式期

図60　住居跡変遷図

時期の近接する常世１式期・槻木１式期と大畑Ｇ式期である。各時期に含まれる住居跡は，常世１式期が９・11・13・17～19号住居跡，槻木１式期が５・15・16号住居跡，大畑Ｇ式期が６～８・10・12・14号住居跡である。各時期の軒数は，常世１式６軒，槻木１式期に３軒，大畑Ｇ式期が６軒となる。各期の住居跡はほとんどが重複もしくは近接した位置にある。集落の景観としては１～３軒の住居が建っていたに過ぎない。

常世１式期の９・11・13・17～19号住居跡は，小型の18号住居跡を除いて，周壁のすべてを検出できていない。そのため住居跡の平面形を復元してみると，18号住居跡を含めて楕円形基調のものに限られる。炉は９・13号住居跡で確認されるが，重複の著しい17～19号住居では確認できない。柱穴は18・19号住居跡で壁際に廻る以外は確認できない。

これと時期的に近い槻木１式期の５号住居跡は，すべての周壁を検出している。規模は東西4.3m，南北４ｍである。平面形は方形基調で，炉を確認している。明確な柱穴はみられない。16号住居跡も一部周壁を失うものの平面形・規模など諸特徴が共通する。15号住居跡は，やや大型で６×５ｍの楕円形を呈すると考えられ，壁柱穴が0.5～1.2ｍの間隔で一巡する。炉は確認していない。

大畑Ｇ式期の６～８・10・12・14号住居跡は，いずれも周壁のすべてを検出できなかった。そのため住居跡の平面形を復元してみると，いずれも方形基調のものである。柱穴の配置はいずれも不規則である。このなかで，炉が検出されているものは６・８・10・12号住居跡で，炉のあるものとないものとで半数となっている。この時期の周辺遺跡の住居と比較すれば，黒森川流域では同時期の住居跡が西田Ｈ遺跡から６軒検出されている。いずれも方形基調のもので，住居内に炉はほとんど確認されていない。柱穴は，規格的な配置のものは２軒のみで，壁の一辺に壁柱穴が巡る。本遺跡から南西に約1.2㎞離れた黒森川流域から山地を挟んで隣接する十石川流域に位置する仁井殿遺跡では同時期の住居跡が２軒検出されている。いずれの住居跡も方形基調で，住居内から炉が検出されている。柱穴は１号住居跡で検出されているものの，規格的な配置ではない。ここから方形基調，不規則な柱穴配置，炉は必ずしも住居内に造られないということがこの地域における大畑Ｇ式期の住居跡の特徴といえよう。

なお，仁井殿遺跡１号住居跡から出土した炭化材と炭化種実について，放射性炭素年代測定がなされている。その結果は，補正年代で炭化材が6,570±100ＢＰ（補正年代6,550±100ＢＰ），炭化種実が6,220±40ＢＰ（補正年代6,190±40ＢＰ）であった。本遺跡では，大畑Ｇ式期の15号住居跡から出土した炭化物と遺物包含層から出土した土器付着炭化物の測定結果について，炭化物が6400±40ＢＰ（補正年代6,420±40ＢＰ），土器付着炭化物が6,300±40ＢＰ（補正年代6,270±40ＢＰ）となっており，仁井殿遺跡の炭化種実と本遺跡の土器付着炭化物が，かなり近い年代を示している。

本遺跡は常世１式期から槻木１式期において居住地として利用され，断絶期間を挟んで大畑Ｇ式期において，再び継続的な居住地として選ばれた。県内ではいわき市中倉Ｂ遺跡で縄文時代の住居跡36軒中，早期末葉の住居跡は22軒を占めている。早期末葉の頃に集落内における住居跡の増加が見られ，本遺跡においても同様の傾向が認められる。（吉野）

参考文献

馬目順一編　1974 『大畑貝塚調査報告』福島県・いわき市教育委員会
伊東信雄　1978 『宮城県遠田郡不動堂村素山貝塚調査報告』(覆刻版)寧楽社
いわき市教育文化事業団　1982 『竹之内遺跡』いわき市教育委員会
金子直行　1982 「野島式土器について－金平遺跡出土土器を中心として－」『土曜考古』 6
中村五郎　1983 「東北地方南部の縄紋早期後半の土器編年試論」『福島考古』24
福島県文化センター　1984 「松ヶ平Ａ遺跡(第２次)」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅵ』
小野町　1987 『小野町史　資料編Ⅰ(上)』
長沼町教育委員会　1987 『永光院浅ノ内・ジダイ坊・京塚』
福島県文化センター　1987 「羽白Ｄ遺跡(第１次)」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅹ』
福島県文化センター　1988 「羽白Ｄ遺跡(第２次)」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅺ』
小野町　1992 『小野町史　通史編』
芳賀英一　1992 「塩川町南原遺跡の縄紋土器」『福島考古』33
福島県文化センター　1993 「小滝遺跡」・「鴨ヶ館跡(第１次)」『東北横断自動車道遺跡調査報告21』
いわき市教育文化事業団　1995 「中倉Ｂ遺跡」・「中ノ内Ｃ遺跡」『東北横断自動車道関連遺跡Ⅰ』
長野県考古学会縄文時代(早期)部会　1997 『押型文と沈線文』
M.-L. Inizan ほか著，大沼克彦ほか訳　1998 『石器研究入門』クバプロ
小野町教育委員会　1998 『こまちダム関連遺跡群分布調査報告書』
福島県文化センター　1999 「上田郷Ⅵ遺跡(１次調査)」『常磐自動車道遺跡調査報告18』
福島県文化センター　1999 「柳作Ａ・Ｂ・Ｃ遺跡」『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告４』
福島県立博物館　1999 『常世原田遺跡－吉田格氏昭和23年調査資料』
福島県教育委員会　2000 『福島県内遺跡分布調査報告６』
福島県教育委員会　2001 『福島県内遺跡分布調査報告７』
福島県文化センター　2001 「上田郷Ⅵ遺跡(２・３次調査)」『常磐自動車道遺跡調査報告22』
中村五郎　2002 「常世式土器から槻木１式土器まで」『福島考古』43
福島県教育委員会　2002 『福島県内遺跡分布調査報告８』
福島県文化振興事業団　2002 「鹿島遺跡」『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告16』
笠懸野岩宿文化資料館・岩宿フォーラム実行委員会2003『第11回岩宿フォーラム／シンポジウム　刺突具の系譜　予稿集』
門脇秀典　2003 「楢葉町馬場前遺跡の調査成果　［２］縄文石器に関する２・３の問題―楢葉町馬場前遺跡出土の石器について―」『福島県文化財センター白河館研究紀要2002』
秦　昭繁　2003 「東北地方の珪質頁岩石材環境」『月刊考古学ジャーナル』2003－３
福島県教育委員会　2003 『福島県内遺跡分布調査報告９』
福島県文化振興事業団　2003 「沢目木遺跡」『こまちダム遺跡発掘調査報告１』
真鍋健一　2003 「付編１馬場前遺跡の複式炉を構成する礫の産地について」『常磐自動車道遺跡調査報告34』福島県文化振興事業団編
福島県文化振興事業団　2004 「仁井殿遺跡」『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告17』

第2編　西田（にしだ）H遺跡

遺跡記号　ON－ND・H
所在地　小野町大字菖蒲谷字西田
時代・種類　縄文・奈良・平安時代　集落跡・狩猟地
調査期間　平成14年6月26日～12月20日
平成15年6月23日～12月17日
調査員　高橋信一・吉野滋夫・横須賀倫達
山元　出

第１章　遺跡の概要

第１節　位置と地形（図１）

西田Ｈ遺跡は，田村郡小野町大字菖蒲谷字西田に所在する。小野町の商業・居住地の中心は，町の中央やや東寄りの小野新町地区である。ここに国道349号線・磐越自動車道・ＪＲ磐越東線がそれぞれ南北に走り，磐越自動車道小野インターチェンジやＪＲ磐越東線小野新町駅が設けられている。大字菖蒲谷西田地区は小野町の西部，小野新町からは西へ約4.5㎞の距離に位置する。本地区は，北は大字小野山神，東は大字塩庭，西は郡山市田母神地区，南は大字雁股田，平田村蓬田地区と境を接している。本地域には主幹道路として県道矢吹・小野線があり，小野町を南北に縦断する国道349号と平田村を南北に走る国道49号を結んでいる。

菖蒲谷地区の南端部には，西方の蓬田岳を中心とした山地帯を水源とする黒森川が東流し，小野新町地区で右支夏井川へと注ぐ。本地区には黒森川とこれらの水源となる小支流によって形成された小規模な段丘が点在し，この上に集落が営まれている。本地区の現況は丘陵部が山林，沢周辺は水田となっており，丘陵の中腹や裾部は一部造成されて住宅地やタバコなどの畑作地となっている。湿地帯である沢地形に造られた水田は水はけが悪く，生産性の低さが問題となっていた。

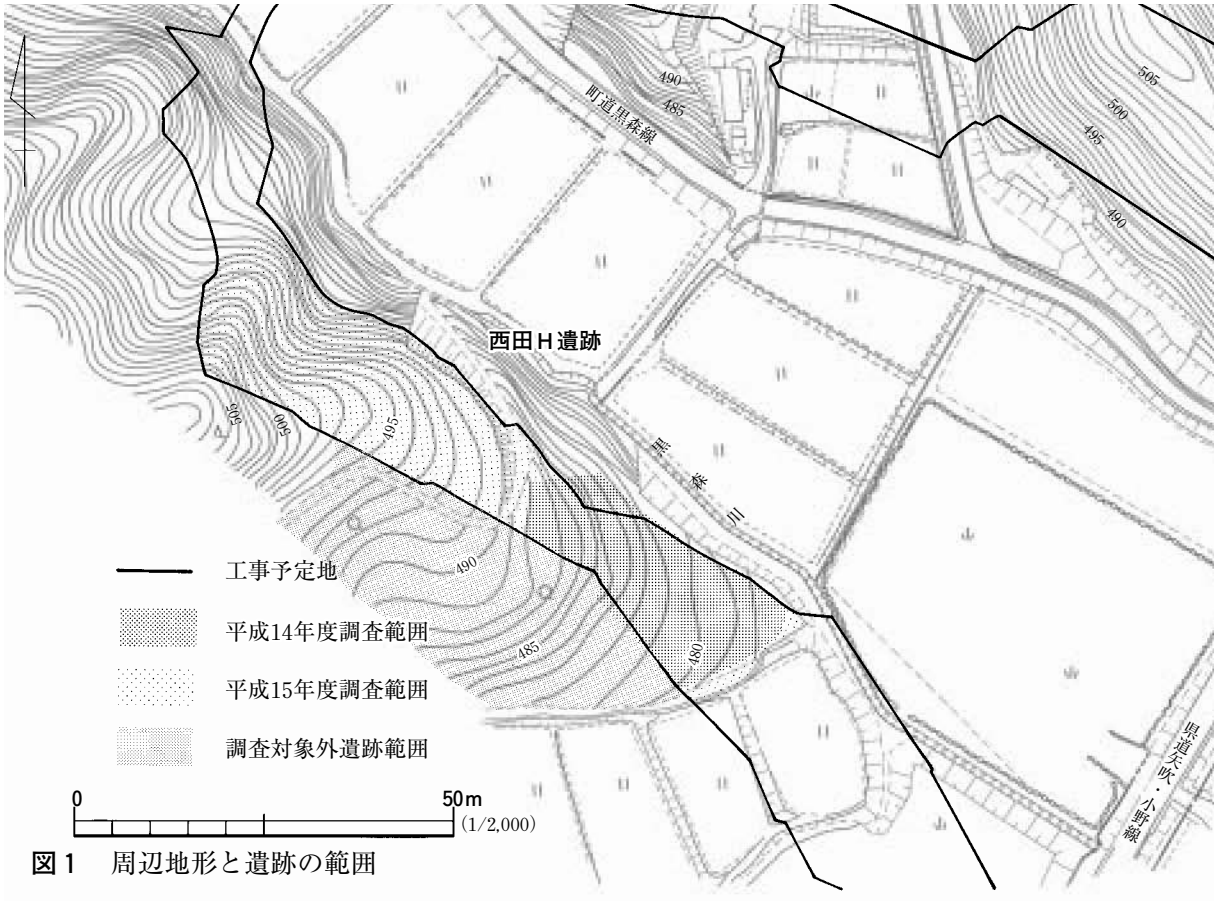


図１　周辺地形と遺跡の範囲

西田Ｈ遺跡は，黒森川の南に隣接する標高500ｍ程度の丘陵上に位置する。丘陵は東南東に流れる黒森川が，一旦北に蛇行しているため，北に出っ張る格好となる。また，南には沢が流れ，丘陵の東端部を舐めて黒森川へと注いでおり，遺跡の所在する部分は東に向かって舌状に張り出す形になっている。丘陵の斜面は，黒森川に向かう北側は険峻な崖である。南・東側は非常に日照条件が良く，傾斜も相対的に緩やかである。また西側が高い地形条件となるため，冬季の厳しい西風が通りにくい。さらに黒森川やこれに注ぐ沢の存在など水資源も豊富であり，住環境には非常に適した環境であったことが理解できる。

遺跡の範囲であるが，東側は黒森川と南の沢で画される。丘陵の北斜面は，北西部については試掘・確認調査の結果，東から２つ目の沢までは遺構・遺物の広がりが確認できず範囲から除外されている。また，黒森川までの急斜面については，黒森川と工事予定地との間は試掘・確認調査を行っていないが，遺物包含層が存在する可能性がある。尾根上および南斜面については，遺跡の西側が未試掘であり，遺跡の範囲は確定していない。南の沢部についても，東部は遺跡範囲から除外されているが，その奥は試掘・確認調査を行っておらず，範囲は未確定である。上記の遺跡範囲のうち，今回の調査範囲となったのは，県道矢吹・小野線迂回路の予定地である丘陵の北半部分である。

調査の成果では，尾根から続く緩斜面に集落，北側斜面部に遺物捨て場である遺物包含層が形成されている。地形から推定すれば，集落は標高500ｍ前後の丘陵尾根上まで続き，南側の斜面にも遺物包含層が形成されている可能性が高い。併せて，沢部にも遺物が流れ込んでいる可能性もあり，有機質遺物の存在などに注意を要するだろう。また，落し穴状土坑も確認されており，狩猟場としての遺跡の範囲がさらに丘陵の西側奥へと続く可能性も否定できない。　　（横須賀・山元）

第２節　調査の経過と方法（図２）

調査経過　西田Ｈ遺跡は平成13年度に(財)福島県文化振興事業団が行った試掘調査の成果により，縄文時代前期・晩期の遺物散布地として登録された遺跡である。遺跡は，ダムによって水没する県道矢吹・小野線の付け替え予定地にあたり，工事用地内5,150㎡の発掘調査を平成14年度・15年度の２カ年にわたって行い，整理作業を平成16年度に行った。平成14年度の調査を１次調査，平成15年度の調査を２次調査と呼称している。以下にその経過を概述する。

平成14年度　平成14年度の調査は，当初，西田Ｈ遺跡のほかに沢目木遺跡(指示面積1,600㎡)・堂田Ａ遺跡(指示面積800㎡)の２遺跡について発掘調査を行う計画が立てられていた。西田Ｈ遺跡については丘陵尾根中腹から裾部の2,700㎡を対象としていた。

６月26日，西田Ｈ遺跡の一部について伐採が終了したとの連絡が入り，重機を導入して事前に事業者側から明示された範囲に従い表土の除去作業を開始した。この際に水田耕作に利用される流路への土砂流入を防ぐため，指示範囲の北側及び東側は流路際や崖面より幅1.5～２ｍ前後内側を調査範囲とした。また，条件整備の整わない斜面上位については，斜面下位の2,150㎡分の調査終了後に

行う予定が立てられた。調査区内のほとんどの範囲では，表土下に黒色～褐色土の遺物包含層が認められている。

７月中旬，先行して行っていた沢目木遺跡の発掘調査が終了し，調査員・作業員は西田Ｈ遺跡へ移動して本格的な調査が開始された。当初は試掘調査時のトレンチを掘りあげ，その後遺構検出作業と遺物包含層（ＬⅡ）の掘り込みを併行して進めた。

８月上旬，遺物包含層ＬⅡの掘り込みが終了し，縄文時代晩期，弥生時代前・中期の遺物を多数検出した。この際，調査区中央部及び東部において古代の竪穴住居跡と掘立柱建物跡，調査区東部では縄文時代晩期の掘立柱建物跡や土器埋設遺構，さらに遺物包含層が希薄な調査区西部の尾根上から縄文時代早期末葉の竪穴住居跡や土坑を検出する。

８月21日，県土木部県中建設事務所・県文化課・㈶県文化振興事業団の３者が参加して西田Ｈ遺跡における複数の文化面の存在とこれに伴う調査面積・工程についての協議がもたれた。この結果，当年度におけるこまちダム関連の発掘調査事業は，調査を終了した沢目木遺跡（1,600㎡）と現状における西田Ｈ遺跡の調査範囲（2,150㎡）に複数文化層範囲（1,800㎡相当）を加えた5,550㎡相当分で調査を終え，西田Ｈ遺跡の残部分及び未着手であった堂田Ａ遺跡800㎡は次年度の発掘調査へ順延された。

９月中旬，古代の遺構については精査が終了し，調査区北側を含めた遺物包含層（ＬⅢ・ＬⅣ）の掘り込みを開始する。また，調査区西部，縄文時代早期末葉の遺構群についても精査を終え，調査範囲は調査区東部へと移行している。９月28日にはボランティア研修事業「遺跡の案内人」の会場となり，雨天の中66名が参加して発掘調査についての研修を受講した。

10月中旬，調査区中央部から，古代の遺構の下層から縄文時代早期後葉の竪穴住居跡や土坑が検出され，精査を開始している。10月29日にはＮＨＫ福島放送局が取材に訪れ，11月１日朝のニュースで発掘調査風景や出土遺物などが放映された。

11月中旬になると，調査区西半の遺構精査及び遺物包含層の掘り込みがほぼ終了し，調査区中央部では縄文時代早期前葉～中葉の遺構群が検出され始める。12月５日，遺構の精査がほぼ終了し，ラジコンヘリコプターによる空中写真撮影が行なわれた。12月20日には現地プレハブや器材の撤収作業を終えて，平成14年度の西田Ｈ遺跡１次調査を終了している。（横須賀）

平成15年度　平成15年度は，前年度の残部分である，１次調査区北西に当たる丘陵上から黒森川支流に向かう北斜面が主たる範囲で，土砂流出防止策として残した１次調査区東端部分も調査することとなった。

６月23日，前週に先行していた沢目木遺跡の追加調査が終了したことから，西田Ｈ遺跡の２次調査を開始した。まず，東端部の調査に着手し，人力による表土の除去から開始した。確認されたのは，前年度確認していた遺物包含層の続きおよび旧河道で，その掘り込みがこの部分での主たる調査となった。

翌週の７月１日より，重機を投入して２次調査区の表土除去を開始した。まずは，１次調査区から続く比較的緩斜面である部分から作業を開始し，急斜面である西部は表土を剥ぐ前にトレンチ調

査を行って対応を決めることにした。この部分の表土除去作業は７月中旬に終了した。

７月22日に，遺跡西部のトレンチ調査を開始した。トレンチ調査は８月上旬まで行い，その結果遺構・遺物の確認できなかった西端部はこれで調査を終了とし，谷部に関しては遺物包含層の堆積が認められたことから，継続して調査を行うこととした。

８月５日，東端部の調査・西部のトレンチ調査が終了し，作業員全員が２次調査区の緩斜面部分へと集合して遺物包含層ＬⅢ上面での検出作業を開始した。この部分は遺構の重複が激しく，土色および遺物の出土状況から縄文時代晩期から弥生時代前期の住居跡が複数軒あることが想定できたが，平面プランの確認に手間取った。検出面を下げ，サブトレンチを掘り込んだりしながら確認作業を行った。結果，竪穴住居跡５軒，掘込の確認できない住居跡５軒の計10軒の該期に属する住居跡を確認した。

盆休みを挟んで，８月20日には北側斜面に堆積した遺物包含層の掘り込みを開始した。８月26日には重機を再投入して，黒森川への土砂流入防止のための鉄板覆設作業を開始し，それが終了した同月28日から調査区西部の表土剥ぎを開始し，９月４日まで継続した。

９月から11月も，緩斜面部の遺構の調査と遺物包含層の掘削を継続して行った。緩斜面部では縄文時代晩期の住居跡の調査を行いながらも，遺物包含層を削りながら検出作業を行い，縄文時代早・前期の竪穴住居跡14軒をさらに確認した。最終的な遺構数は，竪穴住居跡24軒，土坑10基，道跡１条となった。進捗状況を概述すれば，９月は，縄文時代晩期のＳＩ20～25・30および，前期のＳＩ18・19の調査をおもに行っている。10月には，縄文時代晩期のＳＩ21・27・28の調査を行い，晩期の遺構を終了させた。前期の遺構としては，ＳＩ26・31～34・37・38の調査を行っている。ＳＩ26は比較的大型の住居跡であり，掘り込みに時間がかかり，翌月も継続して調査した。11月は，ＳＩ26およびＳＩ29・35・36・39～41を調査した。また，11月５日，堂田Ａ遺跡に併せて空中写真撮影を行った。同月19日に，手間取っていた堂田Ａ遺跡の調査が終了し，調査員１名が合流した。同月22日には現地説明会を開催し，県内外から約140名の見学者が訪れた。

12月上旬には，残っていた比較的大型であったＳＩ29と道跡ＳＦ01の調査，およびピット等の掘り残し確認のダメ押し調査を行っている。これらの遺構精査作業を終了した後に，地形測量，空中写真撮影を行い，同月16・17日に器材の撤収，リース物品の返却を行った。同月17日に，福島県土木部県中建設事務所に調査範囲を引き渡し，調査終了となった。（山元）

調査方法　調査で用いた測量座標の設定は，国土座標Ⅸ系の座標値を有する設計杭を基準とした。任意に調査区北西側の地点［Ｘ；142,300・Ｙ；66,300］を測量原点に定め，座標値は測量原点の下３桁を利用し，原点はＸ300・Ｙ300，東方向へはＹ310・Ｙ320・Ｙ330…，南方向へはＸ290・Ｘ280・Ｘ270…と表記する。グリッドの設定は調査区内を東西南北５ｍの幅に区切り，原点から東西方向にはＡ～Ｚ・ＡＡ～ＡＺのようにアルファベットを，南北方向には１・２・３…と算用数字を付した。グリッド名はこの組み合わせによりＡ１・Ｂ２・Ｃ３…ＡＥ29などとなる。

遺跡内の堆積土は試掘調査の成果を基に，表土（ＬⅠ）については重機を用いて除去した。その後

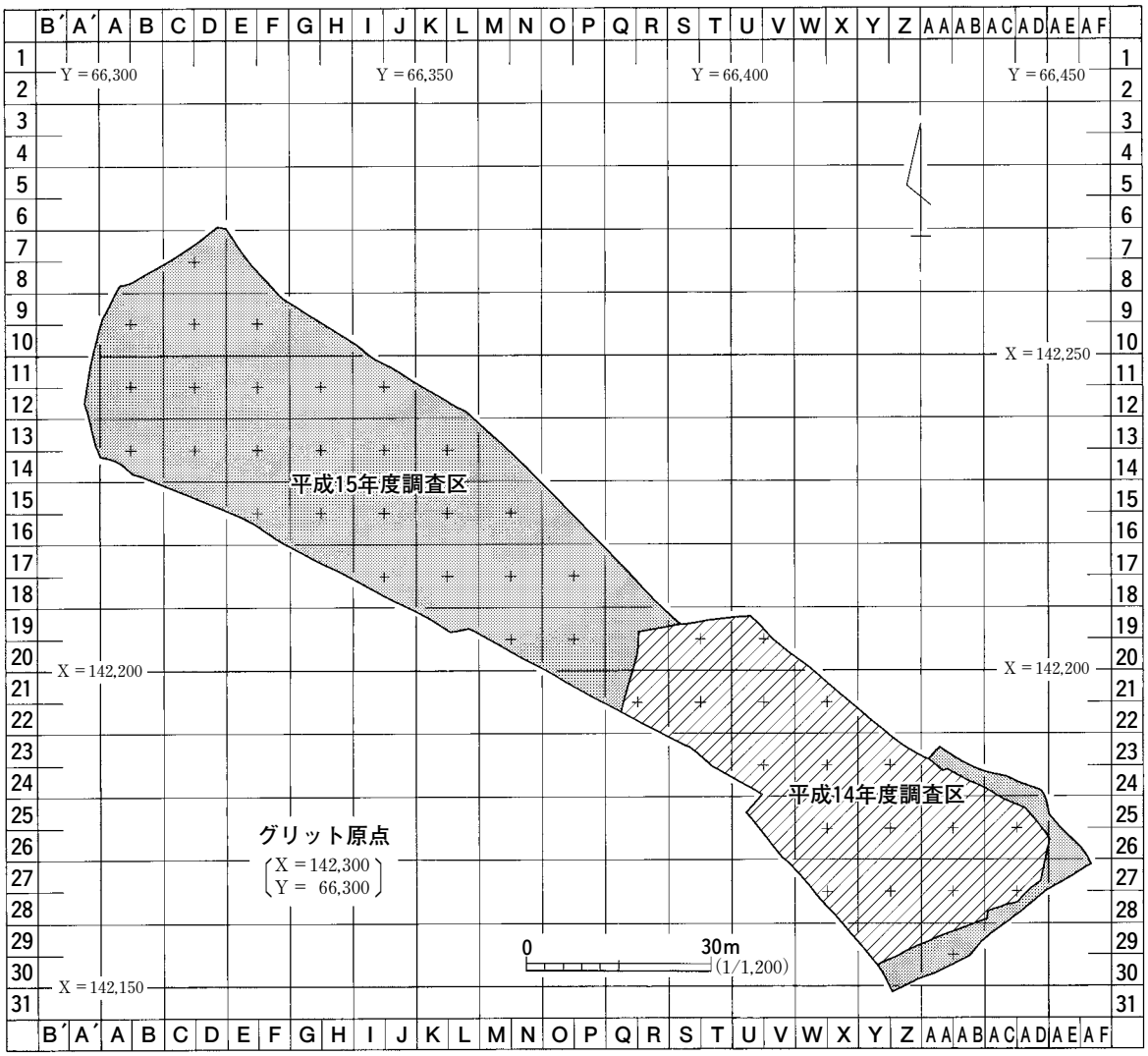


図２　グリッド配置図

に試掘トレンチにおいて遺跡の標準堆積土層の観察を行い，これを基準に遺構検出や遺物包含層の掘り込みを行った。遺物包含層の掘削は，包含する土器や石器などの遺物の検出に留意しながら人力で行った。出土した遺物は，適宜設定した土層観察用のベルトや調査区壁を利用し，グリッド単位で層位ごとに取り上げた。遺構の掘り込みは原則として掘立柱建物跡の柱穴や土坑については２分割，竪穴住居跡には土層観察用のベルトを設定し，それぞれ上位の堆積土から掘り下げている。

記録写真は，遺構調査の各段階において，35㎜の小型カメラを基本として用い，６×4.5㎝の中型カメラも必要に応じて用いた。フィルムはモノクロ・カラーリバーサルを併用している。調査区全景写真は，ラジコンヘリを用いた空中写真撮影を委託・実施した。遺構の実測記録は前述の測量座標を用いて，原則的に遺構は１/20，地形測量図は１/200の縮尺で作成した。

西田Ｈ遺跡の発掘調査によって得た調査記録・出土資料などは，当事業団が定めるところの整理基準に沿って整理し，報告書が完成した後，福島県教育委員会に移管している。　（横須賀）

第３節　遺構の分布と基本土層（図３～７）

調査区の位置と遺構の分布　平成14・15年度に行った西田Ｈ遺跡の発掘調査は，現在確定している遺跡範囲の北部を対象としている。調査区内の地形を概観すれば，調査区東部は丘陵尾根の突端から裾部にあたる東向きの緩斜面，中央部は丘陵尾根上の緩斜面および黒森川へと至る北向きの急斜面，西部は北東側から深い沢の入り込む北向きの急斜面となっている。東端部には，現在遺跡の東を流れる沢の旧河道が検出されている。調査区内における遺跡の基盤であるⅥ層の標高は475.2～504.0ｍであり，最高所となる調査区西端と最低所となる調査区東端の高低差は約30ｍに及ぶ。調査区中央部の490.0ｍ付近は，山道が築かれ削平を受けている。これより下位を平成14年度に１次調査として，これより上位および調査区東端部の最低所を平成15年度に２次調査として調査を実施している。したがって，本編で調査区東部という場合は１次調査区東半を指し，同様に中央部は１次調査区西半から２次調査区東半にかけて，西部は２次調査区西半を指している。斜面下位の１次調査区遺構配置図は図３・４に，上位の２次調査区遺構配置図は図５に示した。

１次調査で検出した遺構は，竪穴住居跡（ＳＩ）17軒，掘立柱建物跡（ＳＢ）８棟，土坑（ＳＫ）27基，焼土遺構（ＳＧ）６基，土器埋設遺構（ＳＭ）２基，ピット群（Ｐ），遺物包含層（ＳＨ）である。２次調査では住居跡24軒，土坑10基，道跡（ＳＦ）１条，遺物包含層が検出されている。したがって，２ヵ年の調査で検出した遺構は，住居跡41軒，掘立柱建物跡８棟，土坑37基，屋外焼土遺構６基，土器埋設遺構２基，道跡１条，およびピット群，遺物包含層となっている。

これらのうち時期の明らかなものは，縄文時代早期～前期・晩期，古代に属する。１次調査ではまずＬⅢ・Ⅳ面上で古代，縄文時代晩期の遺構を検出し，この面での遺構配置図・地形測量図を作成した（図３）。これらの遺構精査終了後，遺物包含層の掘り込み，ＬⅥ面での遺構検出・精査を行い，縄文時代早期～前期及び時期不詳となる遺構の配置図，ＬⅥ面での地形測量図を作成している（図４・５）。

また，調査区内の基盤層であるⅥ層は，およそ標高482.0ｍ以上がＬⅥａとした風化火山砕屑物起源の粘質土層，これ以下はＬⅥｂとしたシルト～砂質土層であり，これらの境界となる斜面中腹のＶ～Ｙグリッド一帯には花崗岩塊が露頭している。各遺構はこれを避けるように分布している状況が見て取れる（図４）。以下に遺構の分布について，時期ごとに述べてゆく。

古代の遺構は，調査区中央の斜面中腹にあたる標高482ｍ付近に竪穴住居跡２軒（ＳＩ01・02），調査区東部の丘陵裾部にあたる標高479～480ｍ付近には竪穴住居跡１軒（ＳＩ06）・掘立柱建物跡１棟（ＳＢ01）が位置する（図３）。１号・２号住居跡，６号住居跡・１号建物跡はそれぞれ重複し，該期は少なくとも２小期に分かれる。

縄文時代晩期の遺構は，調査区中央部の尾根上緩斜面にあたる標高490～492ｍ付近では住居跡10軒（ＳＩ20～25・27・28・30・31）を（図５），調査区東部の丘陵裾部一帯においては掘立柱建物跡７棟

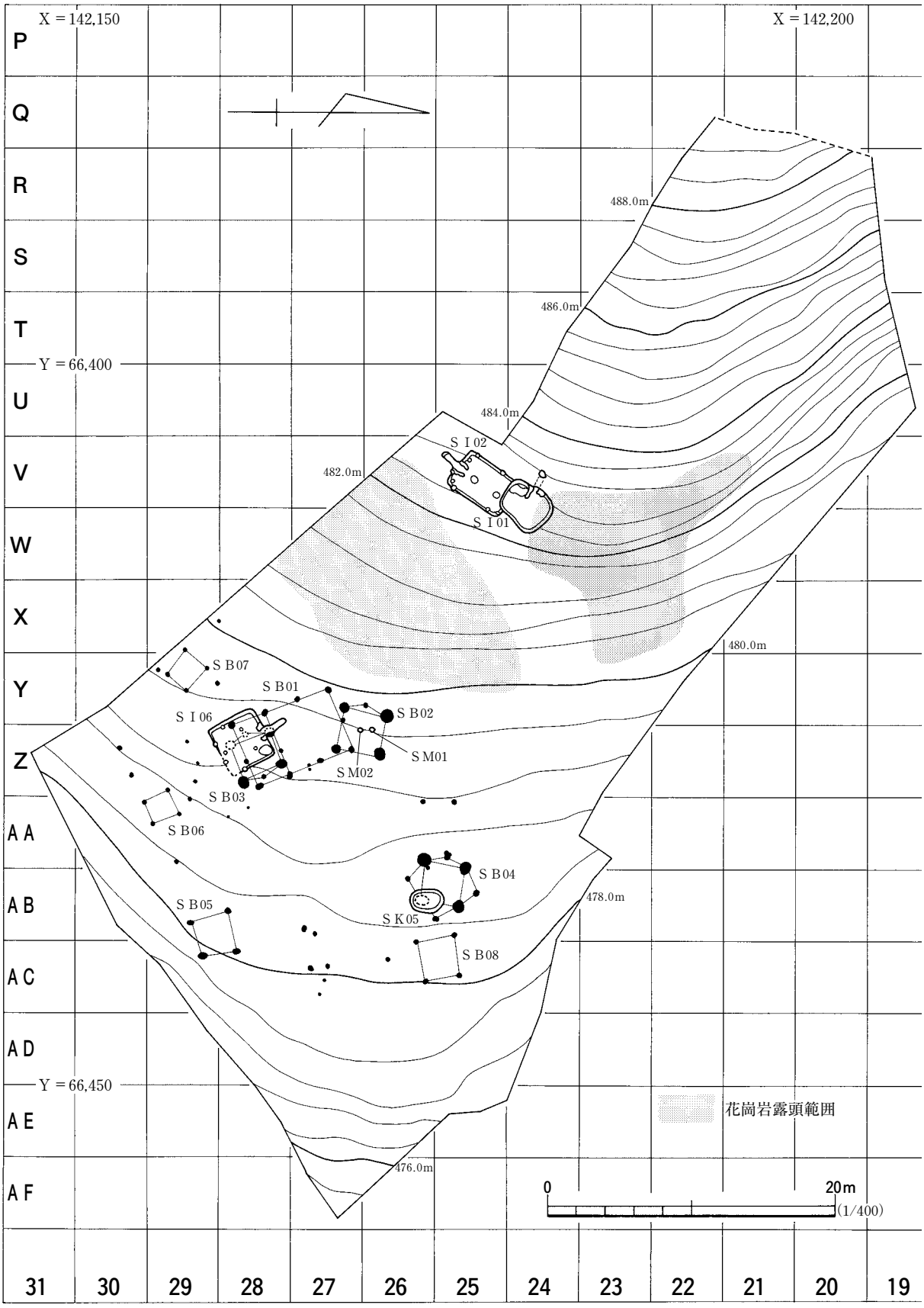


図３　調査区東部遺構配置図（１）＜ＬⅢ・ＬⅣ上面＞

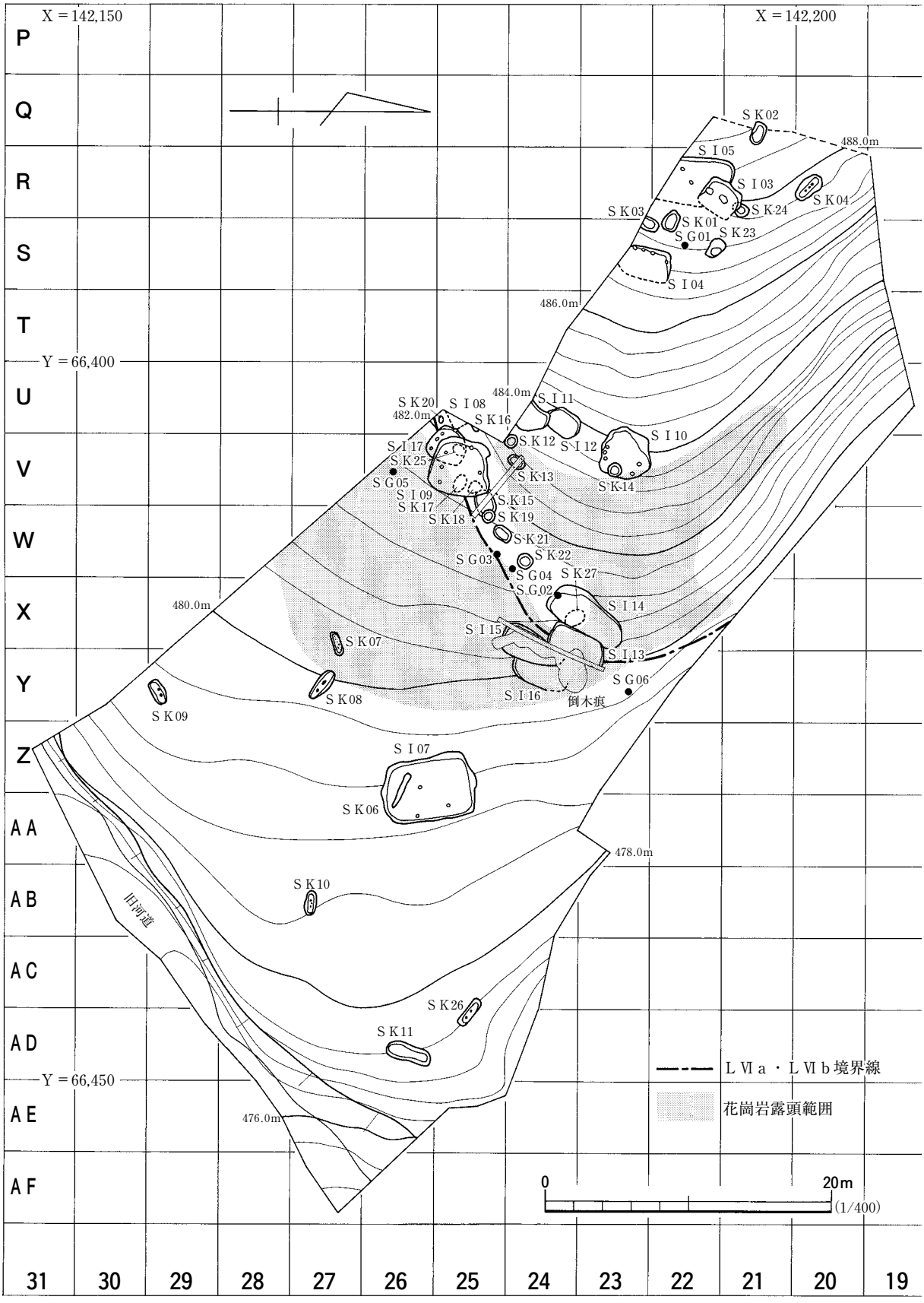


図４　調査区東部遺構配置図（２）＜ＬⅥ上面＞

（ＳＢ02～08），土坑１基（ＳＫ05），土器埋設遺構２基（ＳＭ01・02），ピット群を集中して検出している（図３）。遺構の種別によって分布域を違えていることがわかる。中央部の住居跡群からは，晩期前葉～中葉・弥生時代前期の土器を伴出しており，複数時期にわたって集落が営まれていたようである。土器埋設遺構２基は，いずれも２号建物跡内部に位置する。

いわゆる落し穴状土坑は，７基検出され（ＳＫ04・06～10・26），いずれも縄文時代前期後半以降と推定している。７基のうち１基（ＳＫ04）は調査区中央部の尾根上，他の６基は調査区東側の丘陵裾に位置する（図４）。これらの土坑群は形態などから大きく３タイプに分かれるようで，１時期に機能していたものではない様である。

縄文時代前期初頭～中葉の遺構は，調査区中央の尾根上緩斜面上位で，竪穴住居跡11軒（ＳＩ18・19・26・29・32・33・35～38・40），土坑７基（ＳＫ28・29・33～37）を集中して検出している（図５）。これらの住居は，尾根の縁に沿って並ぶような様相を呈している。また，同時期の土坑は住居跡の間隙に構築されているようである。

縄文時代早期後葉～末葉の遺構は，調査区西部に入る沢の東側尾根上と調査区中央の尾根上緩斜面中腹に分布する。調査区西部の標高496m付近には竪穴住居跡３軒（ＳＩ34・39・41）が存在し，これらからは早期末葉～前期初頭の遺物が出土している。緩斜面中腹の標高486～488m付近には竪穴住居跡３軒（ＳＩ03～05），土坑４基（ＳＫ01・03・23・24），屋外焼土遺構（ＳＧ01）１基が分布し，主に縄文時代早期末葉頃の遺物を出土する。同じく斜面中腹の標高482～484m付近には，花崗岩の露出域を避けるように，竪穴住居跡５軒（ＳＩ08～12），土坑３基（ＳＫ12～14），屋外焼土遺構（ＳＧ02～04）３基が存在する。８号住居跡では，底部を欠いた深鉢が倒置されており，内部から円盤状の土製品が伴出している。この付近の遺構からは，主に縄文時代早期後葉～末葉の土器が出土している。

縄文時代早期前葉～中葉の遺構は調査区中央の丘陵中腹一帯を中心として分布する。遺構は竪穴住居跡６軒（ＳＩ07・13～17），土坑９基（ＳＫ15・17～19・21・22・25・27），屋外焼土遺構２基（ＳＧ05・06）が検出された。竪穴住居跡については早期前葉（ＳＩ13・14・17）と中葉（ＳＩ07・15・16）に分かれると推定されるが，その他については分明的でない。ＳＫ16・20の２基の土坑についてもこの時期に属する遺構と思われるが，詳細な時期について判断を下すことは出来なかった。

その他に，調査区西部の尾根上には，北東から入り込む沢に沿って近世以降の道跡（ＳＦ01）が１条検出されている。また，時期不明な遺構としては，土坑５基（ＳＫ02・11・30～32）がある。このうち，ＳＫ30～32については，調査区中央部に位置する晩期の住居跡の縁にかかるように検出されている。

この他，調査区のほぼ全域を覆うＬⅡ～Ⅳには多量の遺物を含んでおり，遺物包含層として認識される。堆積状況は位置によって様々であるが，概ね，北部の急斜面および東部の丘陵裾部は堆積が厚く，尾根部の堆積は薄い。これらの層には縄文時代早期前葉の撚糸文系・押型文系土器および同時期の無文土器から，早期中葉の沈線文系土器，早期後葉の条痕文系土器，前期前半の羽状縄文

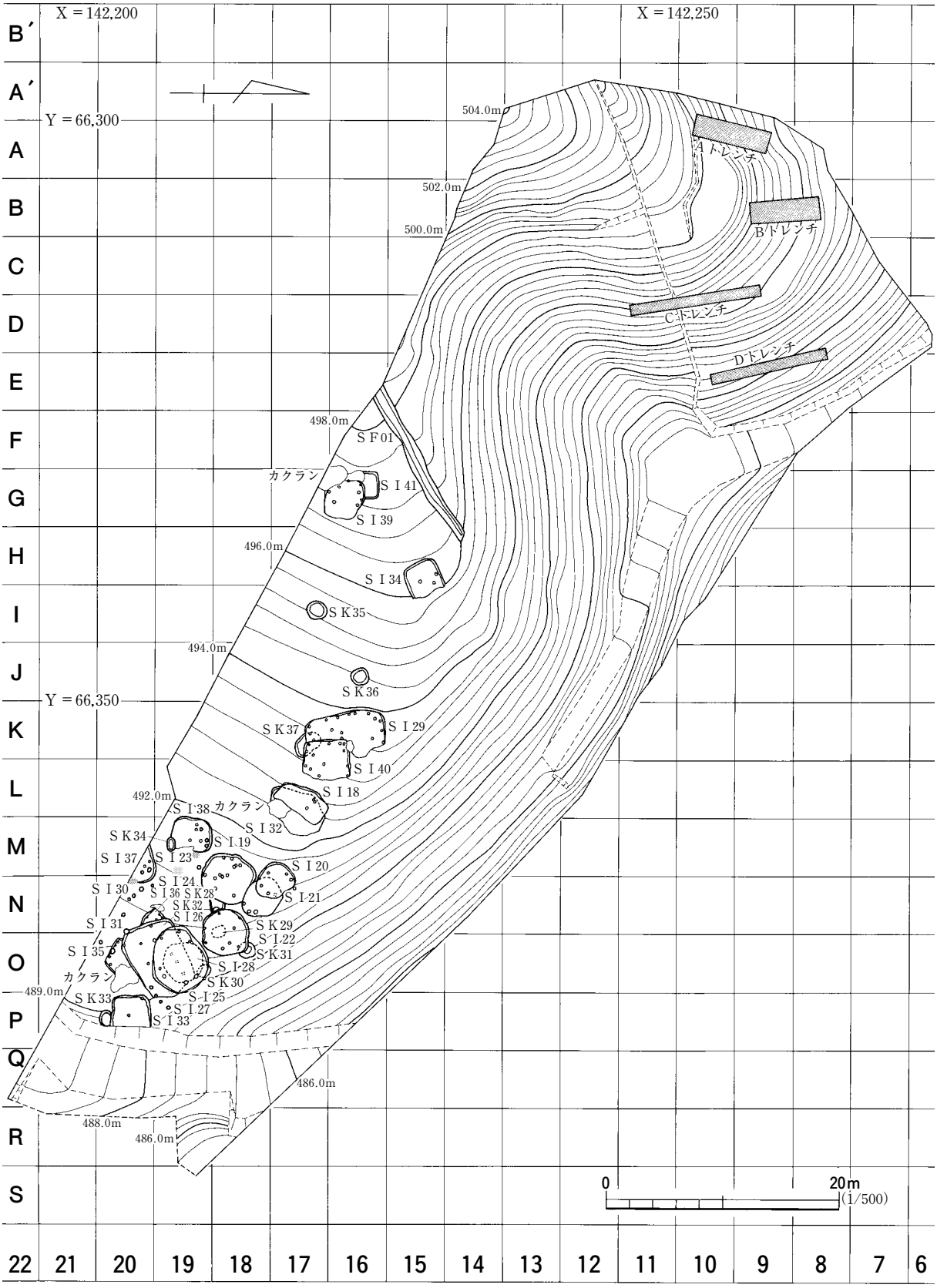


図５　調査区西部遺構配置図

系土器・大木系土器，さらに晩期の亀ヶ岡系土器，弥生時代前期～中期の土器に加え，各種の石器や石器剥片，土製品・石製品が大量に包含されていた。各遺構はこの包含層を掘り込んで構築されているため，複数時期の遺物が遺構内から出土する状況であった。

基本土層　調査区内の堆積土は，更新世の堆積層であるＬⅥを遺跡の基盤として，その上に黒～暗褐色土が１ｍ，深い部分では２ｍ近く堆積していた。それらを表土であるⅠ層から基盤層のⅥ層まで大きく分層し，細分が可能であった層はａ・ｂ…とアルファベットの小文字で表記している。また，調査が進展した後に分層しえた層は，遺物などの出土層位の混乱を避けるため´を付して対応した。確認した各層については以下に詳述する。

ＬⅠ：遺跡のほぼ全域を覆う表土層である。

ＬⅠ´：黒褐色土層。調査区北部の埋没した沢にのみ認められる。本層は，当初色調からＬⅡと認識し掘り込んだが，遺物がほとんど含まれず層中にパミス状の含有物が認められたため，ＬⅡとは区別した。最終的に遺物の含有が些少であり，ＬⅡ上に堆積することからＬⅠの範疇に含めたものである。本層は火山灰分析の結果，榛名二ツ岳伊香保軽石（Ｈｒ－ＦＰ）又は榛名二ツ岳渋川テフラ（Ｈｒ－ＦＡ）に比定される火山ガラスが検出されている（付編２参照）。［確認地点②～⑤・ア・ウ～オ・キ・Ａ－Ａ´］

ＬⅡ：黒色土層。調査区東部の丘陵裾に認められ，主に縄文時代晩期の遺物包含層となる。［確認地点⑤～⑦・ク～コ・Ｃ－Ｃ´・Ｄ－Ｄ´］

ＬⅡ´：ＬⅠ´下位のパミスを含有する層として分層したものである。東端部を除いた調査区のほぼ全域に薄く堆積する。本層は火山灰分析の結果，榛名二ツ岳伊香保軽石（Hr－FP）に比定される火山ガラスおよび沼沢１テフラ（Nm－１）に比定されるテフラ粒子が含まれている可能性が指摘された（付編２参照）。［確認地点②～④・ア～キ・Ａ－Ａ´］

ＬⅢ：暗褐色土層。丘陵尾根に堆積する暗褐色土層をＬⅢとした。主に縄文時代早期～前期前半の遺物を包含する。調査区中央部では，ＬⅣとともに古代の遺構検出面となる［確認地点①・②・ア～オ］

ＬⅣ：黒褐色土層。丘陵斜面～裾部に堆積する。調査区北部ではａ～ｄの４層に，丘陵中腹ではａ・ｂの２層が確認できた。その他に流路内にのみｅとする砂層が確認できる。丘陵裾部では堆積が薄く，分層しえないが，色調からＬⅣｂに比定した。

ＬⅣａ：調査区北側の埋積谷部や丘陵の中腹部に堆積する。調査区中央では古代の遺構検出面となる。主に縄文時代早期後葉～前期前半の遺物を包含する。［確認地点②・③・ウ～カ・Ａ－Ａ´・Ｂ－Ｂ´］

ＬⅣ´：調査区中央部西寄り，W26グリッド周辺にのみ認められる。この範囲は丘陵尾根南側に位置し，南へと延びる沢状地形となるため堆積が厚い。この付近のＬⅣａとＬⅣｂの間に堆積する層として確認している。主に縄文時代早期後葉の遺物を包含し，該期に属する遺構の検出面となる［確認地点ウ～オ］

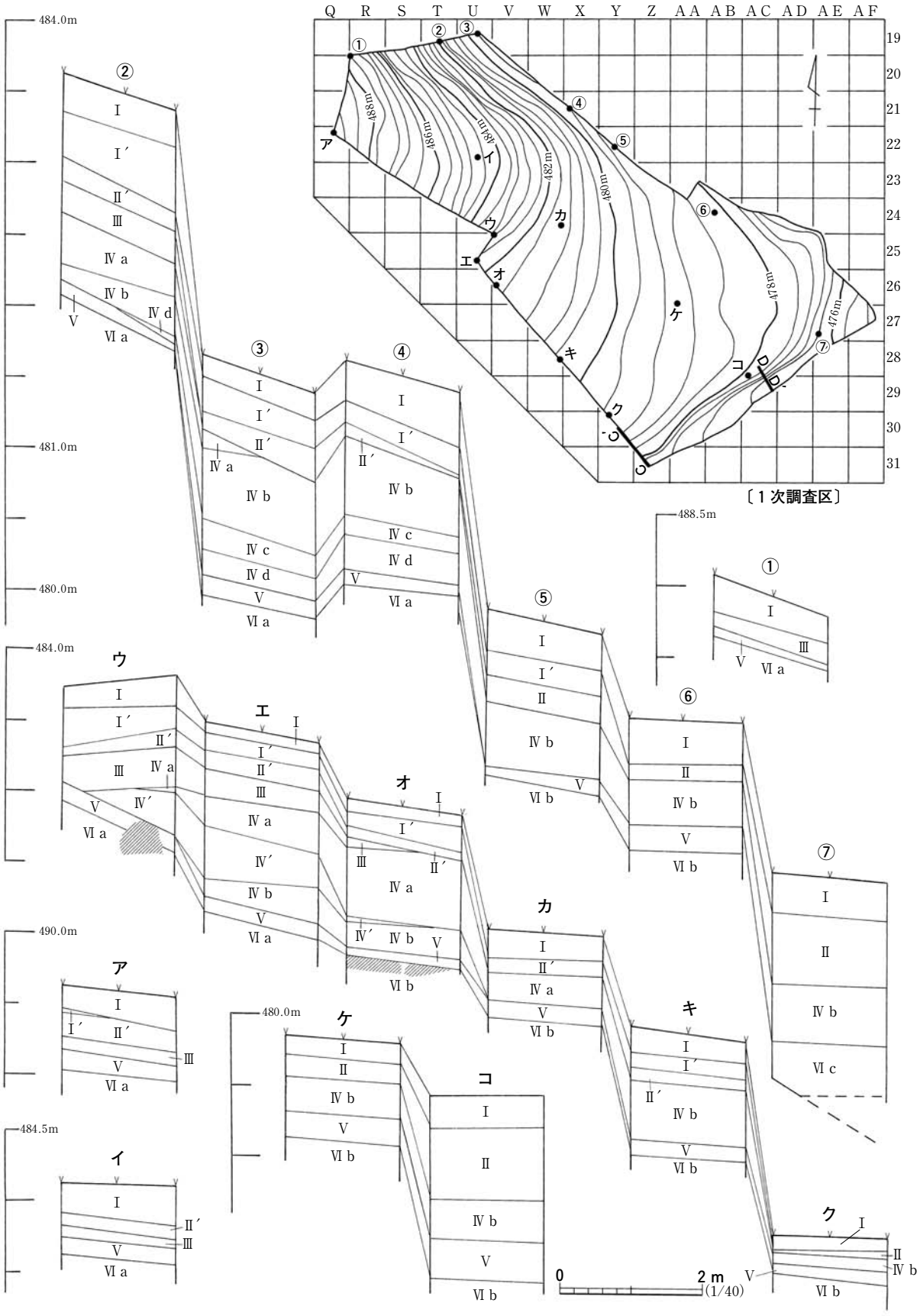
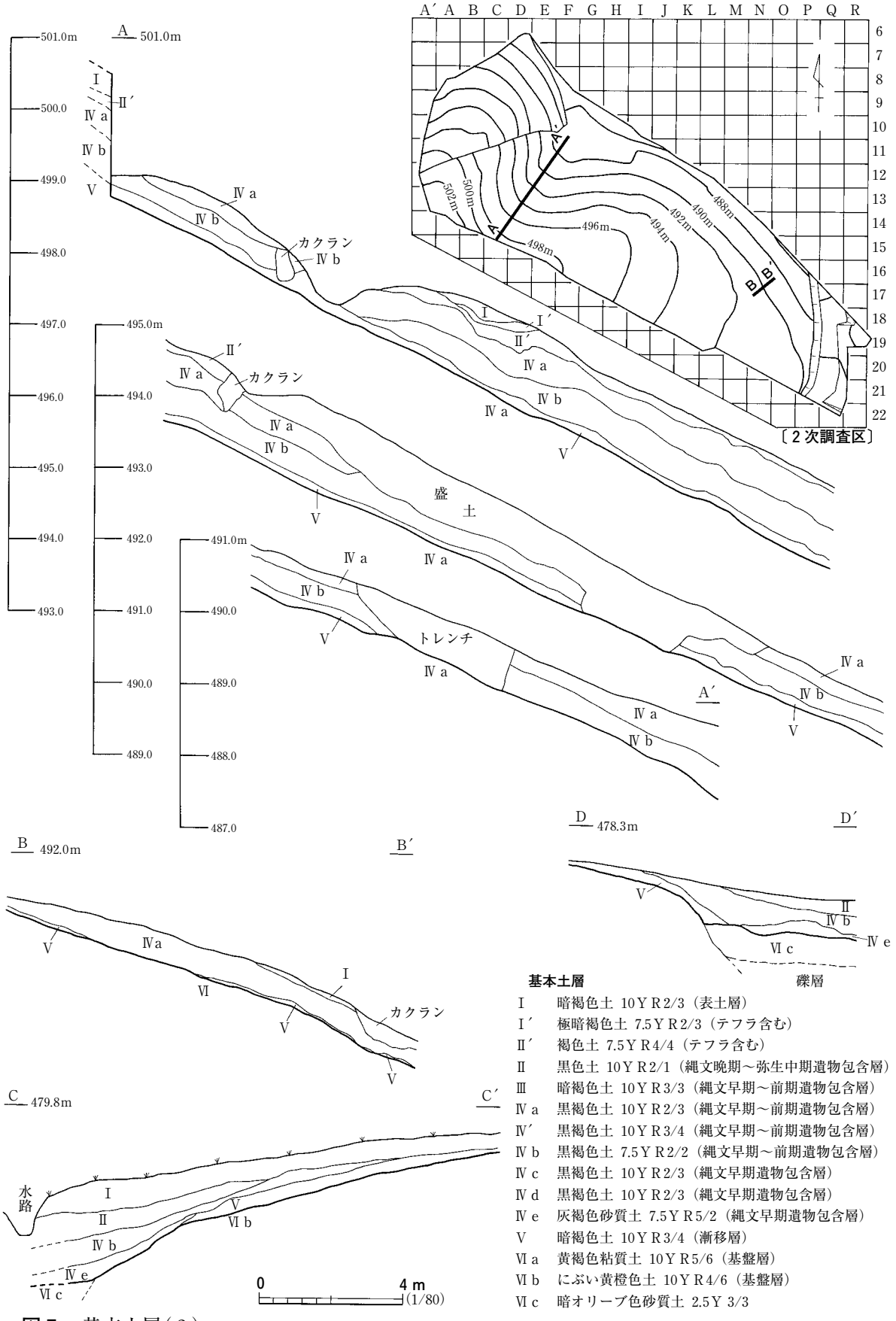

Q R S T U V W X Y Z AA AB AC AD AE AF
19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31
488m
484m
482m
480m
478m
476m
ア イ ウ エ オ カ キ ク ケ コ
A A' B B' C C'
〔１次調査区〕
484.0m
481.0m
480.0m
488.5m
490.0m
484.5m
0 2m (1/40)

図６　基本土層（１）



基本土層

Ⅰ　暗褐色土 10ＹＲ2/3（表土層）
Ⅰ′　極暗褐色土 7.5ＹＲ2/3（テフラ含む）
Ⅱ′　褐色土 7.5ＹＲ4/4（テフラ含む）
Ⅱ　黒色土 10ＹＲ2/1（縄文晩期～弥生中期遺物包含層）
Ⅲ　暗褐色土 10ＹＲ3/3（縄文早期～前期遺物包含層）
Ⅳa　黒褐色土 10ＹＲ2/3（縄文早期～前期遺物包含層）
Ⅳ′　黒褐色土 10ＹＲ3/4（縄文早期～前期遺物包含層）
Ⅳb　黒褐色土 7.5ＹＲ2/2（縄文早期～前期遺物包含層）
Ⅳc　黒褐色土 10ＹＲ2/3（縄文早期遺物包含層）
Ⅳd　黒褐色土 10ＹＲ2/3（縄文早期遺物包含層）
Ⅳe　灰褐色砂質土 7.5ＹＲ5/2（縄文早期遺物包含層）
Ⅴ　暗褐色土 10ＹＲ3/4（漸移層）
Ⅵa　黄褐色粘質土 10ＹＲ5/6（基盤層）
Ⅵb　にぶい黄橙色土 10ＹＲ4/6（基盤層）
Ⅵc　暗オリーブ色砂質土 2.5Ｙ 3/3

図７　基本土層（２）

ＬⅣｂ：調査区北部・西部の埋積谷下位や丘陵裾部全域に堆積する。主に縄文時代早期前葉～後半の遺物を包含する。丘陵裾部において，古代・縄文時代晩期の遺構検出面となる。［確認地点②～⑦・エ～コ・Ａ－Ａ´・Ｃ－Ｃ´・Ｄ－Ｄ´］

ＬⅣｃ・ｄ：調査区北側の埋積谷下位にのみ認められ，ＬⅣｂよりも下位に堆積する。主に縄文時代早期前葉～中葉の遺物を包含する。［確認地点②～④］

ＬⅣｅ：調査区東端にある沢の旧流路にのみ認められる。ＬⅣｂの下位に存在する砂質土で縄文時代早期前葉～中葉の遺物を包含する。［確認地点Ｃ－Ｃ´・Ｄ－Ｄ´］

ＬⅤ：基盤層としたＬⅥへの漸移層である。遺跡のほぼ全域で確認できる。まれに縄文時代早期前葉～中葉の遺物が出土する。縄文時代早期前葉～中葉，及び上層で認識しえなかった遺構の検出面である。

ＬⅥ：黄褐色～黄橙色を呈する，遺跡の基盤にかかると判断される層をＬⅥとした。堆積土の希薄な丘陵尾根上や，上層では認識しえなかった遺構の検出面である。ＬⅥは，丘陵尾根部における風化火山砕屑物起源の粘質土であるＬⅥａ，及び丘陵裾部におけるシルト質～砂質土のＬⅥｂに２分され，丘陵中腹部，ＬⅥａとＬⅥｂとの境界部分には花崗岩塊が露頭する。また，丘陵裾の端部ではＬⅣ下に砂層が確認されこれをＬⅥｃとした。

なお，一部の土壌に対して火山灰分析をかけているが，そのサンプリングについては発掘調査担当調査員が行った。ただ，付編１に所収した堂田Ａ遺跡のテフラ分析，花粉分析の結果と本遺跡の同様の分析結果はほぼ調和的であり，両遺跡の堆積土については，ほぼ番号どおり対応するものと考えられる。（横須賀・山元）

第２章　遺構と遺物

第１節　住　居　跡

住居跡は，41軒を検出した。１次調査で１～17号，２次調査では18～41号住居跡を調査している。年代的には縄文時代早期前葉～中葉６軒（７・13～17号住居跡），縄文時代早期後葉～末葉11軒（３～５・８～12・34・39・41号住居跡），縄文時代前期11軒（18・19・26・29・32・33・35～38・40号住居跡），縄文時代晩期～弥生時代前期10軒（20～25・27・28・30・31号住居跡），古代３軒（１・２・６号住居跡）に分けられる。多くは竪穴住居跡であるが，晩期～弥生時代に属するものの一部には掘込を有さないもしくは失っているものもある。

これらの住居跡は，いずれも尾根上から裾部へと至る東向き斜面に位置している。縄文時代早期前葉～中葉及び古代は下位，縄文時代早期後葉～末葉は中位，縄文時代前期・晩期は上位と時期によって立地が違い，それぞれ著しく重複している。

なお，遺構平面図上の遺物については，出土位置を示している（縮尺は任意）。

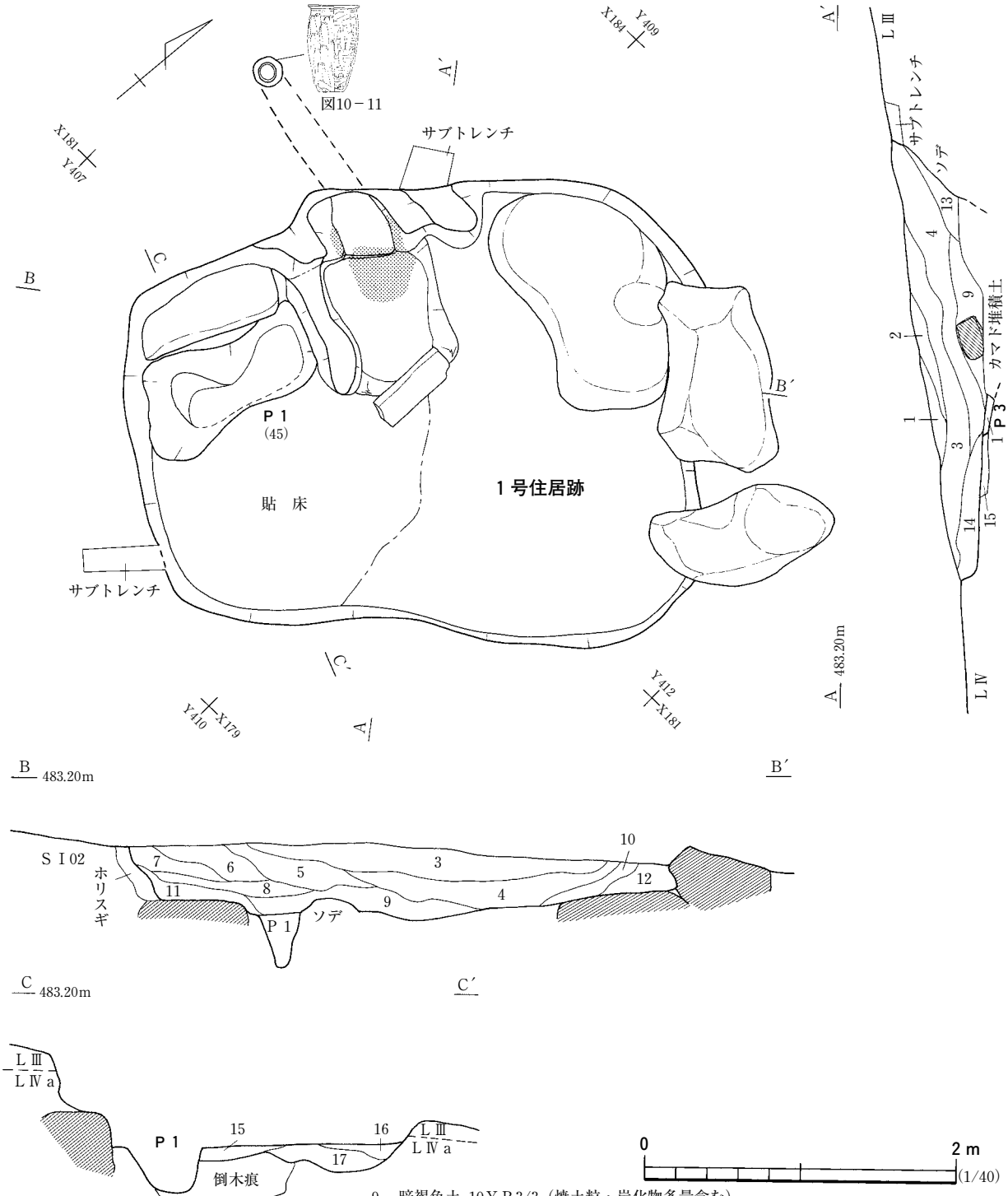
１号住居跡　ＳＩ01（図８～11，図版７～10・125）

遺　　構　Ｖ・W24グリッド，ＬⅢ面で確認した。南東方向に下がるやや急峻な斜面上に位置する。遺構の南西部分で２号住居跡と重複し，本遺構が新しい。遺構内堆積土は14層に分けられ，北西方向からの顕著な自然流入が確認できる。

カマドを基準とする遺構の主軸は，構築面である斜面に正対する形で北西方向を向く。遺構のプランは隅丸長方形を呈し，長辺約3.7m，短辺約2.8mを測る。検出面からの深さは斜面上位部分において40cm前後と深く，斜面下位の遺構南東部分は流失してしまったものと考えられ，かろうじてプランが確認できた程度である。

遺構内には基盤層である花崗岩が多く露頭し，施設の構築範囲を制限せしめている。貯蔵穴と考えられるＰ１は遺構の南西隅に位置し，花崗岩を一部壁面として利用する。柱穴は確認していない。床面の南西半は貼床されており，土層断面から貼床部分中央→周囲に向かって貼り込まれている。Ｐ２・Ｐ３は人為的に埋められた浅い楕円形の掘り込みであり，住居機能時は開口していないものと考えられる。

カマドは北西壁のやや南西寄りに構築され，斜面上位に向かって煙道を伸ばす。煙道は天井が崩落しておらず，煙突として利用された転用甕を含め良好な状態で遺存していた。煙道部分を含めたカマド内の堆積土は11層に分けられ，ℓ11は煙突埋置するための掘形埋土，ℓ８～10は燃焼部天井構築土を含む崩落土，ℓ７は住居内堆積土と同起源，ℓ５・６は煙突からの自然流入，ℓ４は煙突を埋置した際の埋土が崩落したもの，ℓ１～３は煙突埋置用の掘形からの自然流入と推定される。



１号住居跡

1　黒色土 10ＹＲ2/1
2　黒褐色土 10ＹＲ3/1
3　黒褐色土 10ＹＲ2/2
4　黒褐色土 10ＹＲ3/2（焼土粒少量含む）
5　暗褐色土 10ＹＲ3/4（焼土粒少量含む）
6　暗褐色土 10ＹＲ3/2（焼土粒含む）
7　暗褐色土 10ＹＲ3/3（焼土粒少量含む）
8　黒褐色土 10ＹＲ2/3（焼土粒多量含む）
9　暗褐色土 10ＹＲ3/3（焼土粒・炭化物多量含む）
10　暗褐色土 10ＹＲ3/3（褐色土塊多量含む）
11　暗褐色土 10ＹＲ3/4（黄褐色土塊多量含む）
12　暗褐色土 10ＹＲ3/4（黄褐色土塊多量含む）
13　にぶい黄褐色粘土 10ＹＲ4/3（黄褐色土塊多量含む）
14　暗褐色土 10ＹＲ3/3（褐色土粒含む）
15　暗褐色土 10ＹＲ3/3（黄褐色土との混土，しまり強：貼床）
16　暗褐色土 10ＹＲ3/3（黄褐色土との混土，しまり強：貼床）
17　褐色土 10ＹＲ4/4（黄褐色土との混土，しまり強：貼床）

Ｐ３　1　暗褐色土 10ＹＲ3/3（炭化物・焼土含む混土）

図８　１号住居跡（１）

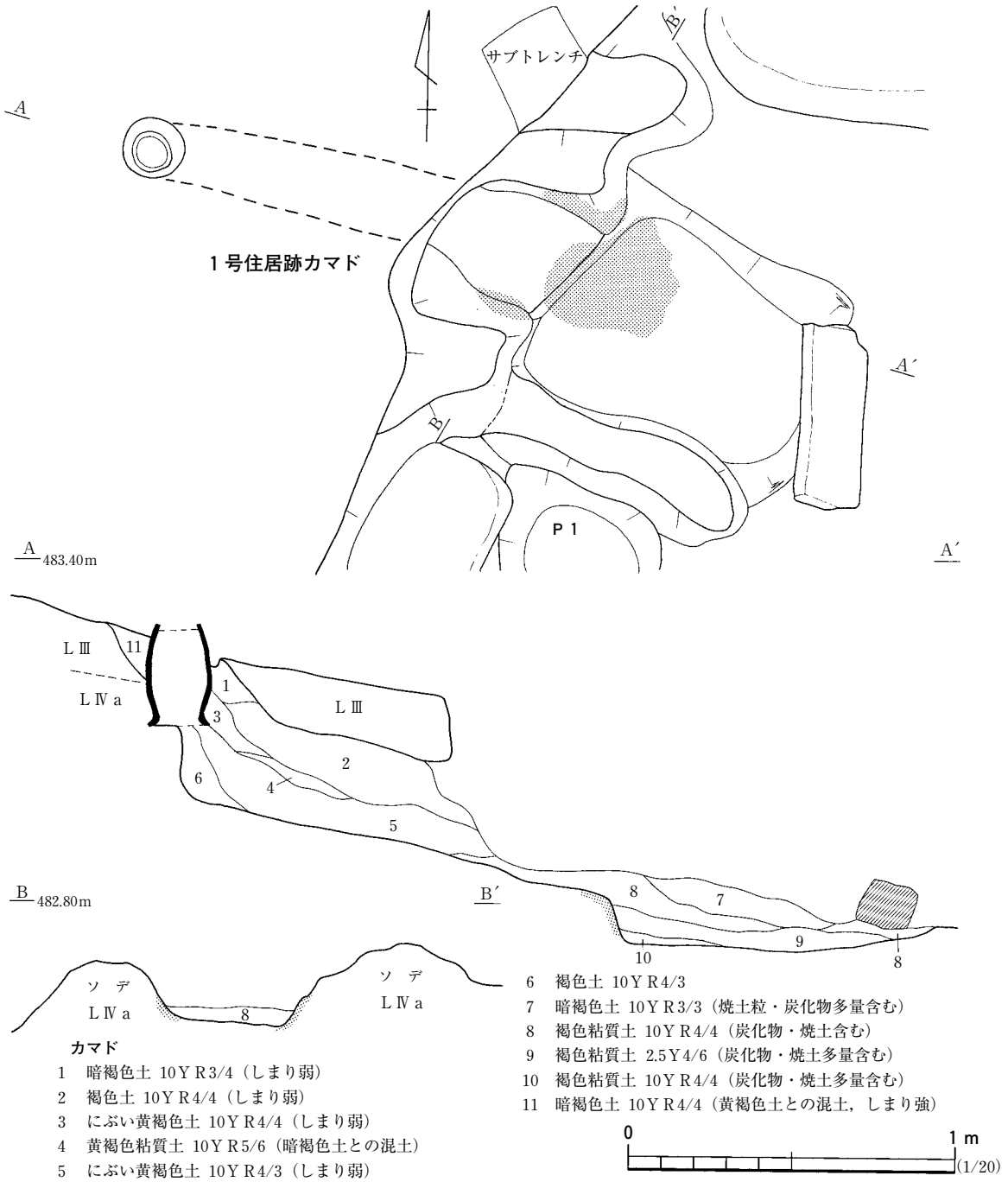
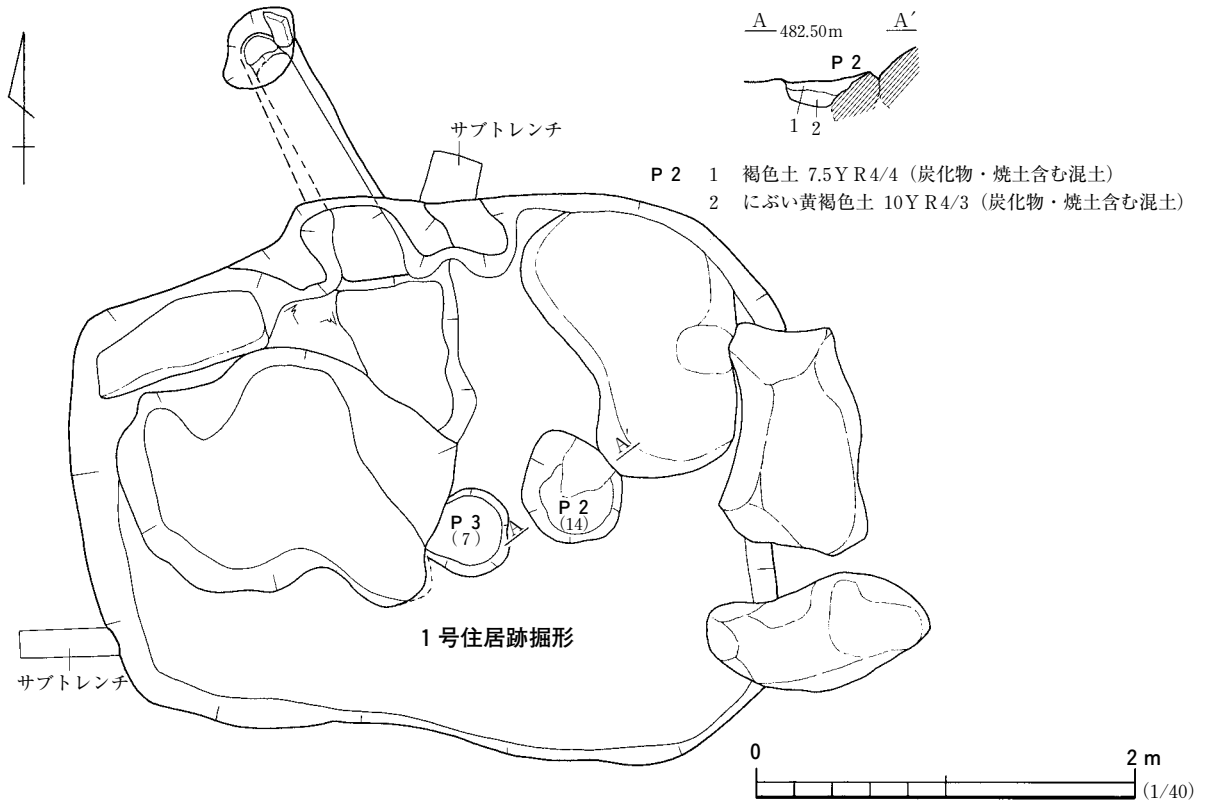


図9　1号住居跡（2）

燃焼部は住居跡壁面から40cm手前にあり，約80×60cmを範囲とする。最奥部～煙道部手前に顕著な被熱が認められる。煙道部分入り口の両脇には地山から作出された袖部が付く。燃焼部両脇の袖部は左袖の一部に構築粘土が遺存するのみであり，廃棄時に取り去られたものと考えられる。燃焼部手前，床面に近いレベルからは長さ60cm・幅25×15cm程を測る角柱状の石材を検出しており，この石材は出土位置や形状などから焚口の架構石である可能性が高い。

煙道部は燃焼部奥壁からの長さが140cm，断面形は円形を呈し直径20cm前後を測る。煙出し穴には土師器甕を転用した煙突が口縁部を下にして埋置されており，底部を打ち欠いた状態で使用されて



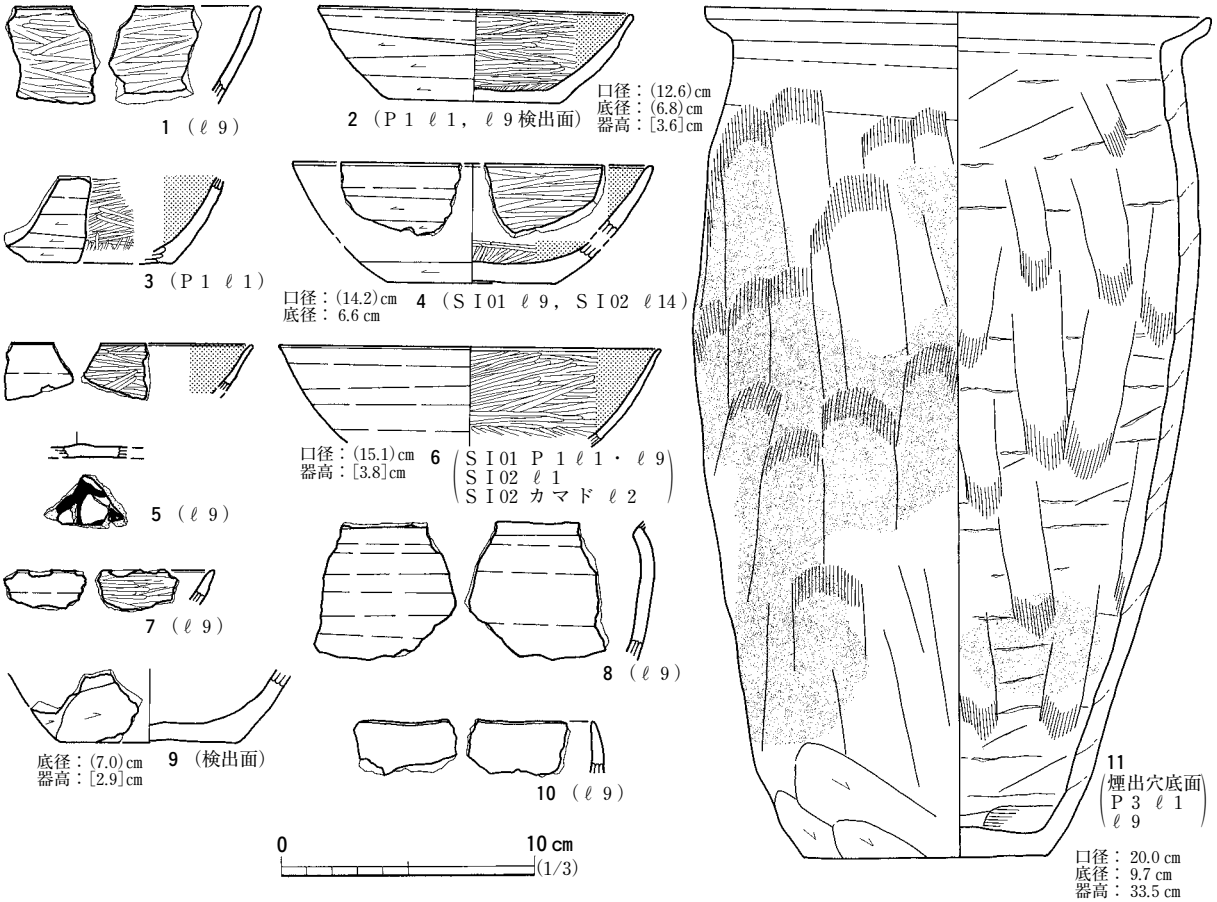


図10　１号住居跡（３）・出土遺物（１）

いる。煙出し穴の底面は煙突を置くための段が作出されており，煙道部底面とは約45㎝のレベル差が認められる。煙道は緩く傾斜しながら燃焼部奥壁に接続する。

遺　　物　図10はいずれも土師器であり，１～７は杯，８・９・11は甕，10は筒形土器である。煙突として転用されていた11以外は堆積土中から出土した破片資料であり，４・６は重複する２号住居跡出土の破片と接合している。１は非ロクロ成形であり，両面にミガキが観察される。２～７はロクロ成形であり，内面は黒色処理される。２～４の体部下半から底部周辺にかけては回転ケズリ，２・３の底部は回転ケズリ再調整される。５の底部には墨書が確認できるが，判読不明である。７は黒色処理がとんでいる。11は底部を故意に欠いた状態で煙突として使用されており，底部の一部はＰ３の堆積土中などから出土している。口縁部周辺はロクロ整形であり，口縁部は面取りされる。外面底部周辺のみケズリで整形され，体部全体は内外面ともナデで調整されている。外面には煤が顕著に付着している。

図11には堆積土中に混入した縄文土器・石器をまとめた。なおＰ１下には風倒木痕が存在し，一部を本住居跡のものとして取り上げてしまったため，ここでは「カクラン」として示している。

１・２は縄文時代早期中葉の沈線文系土器である。外面に半截竹管による平行沈線文が認められ，焼成は堅緻で薄手の作りである。

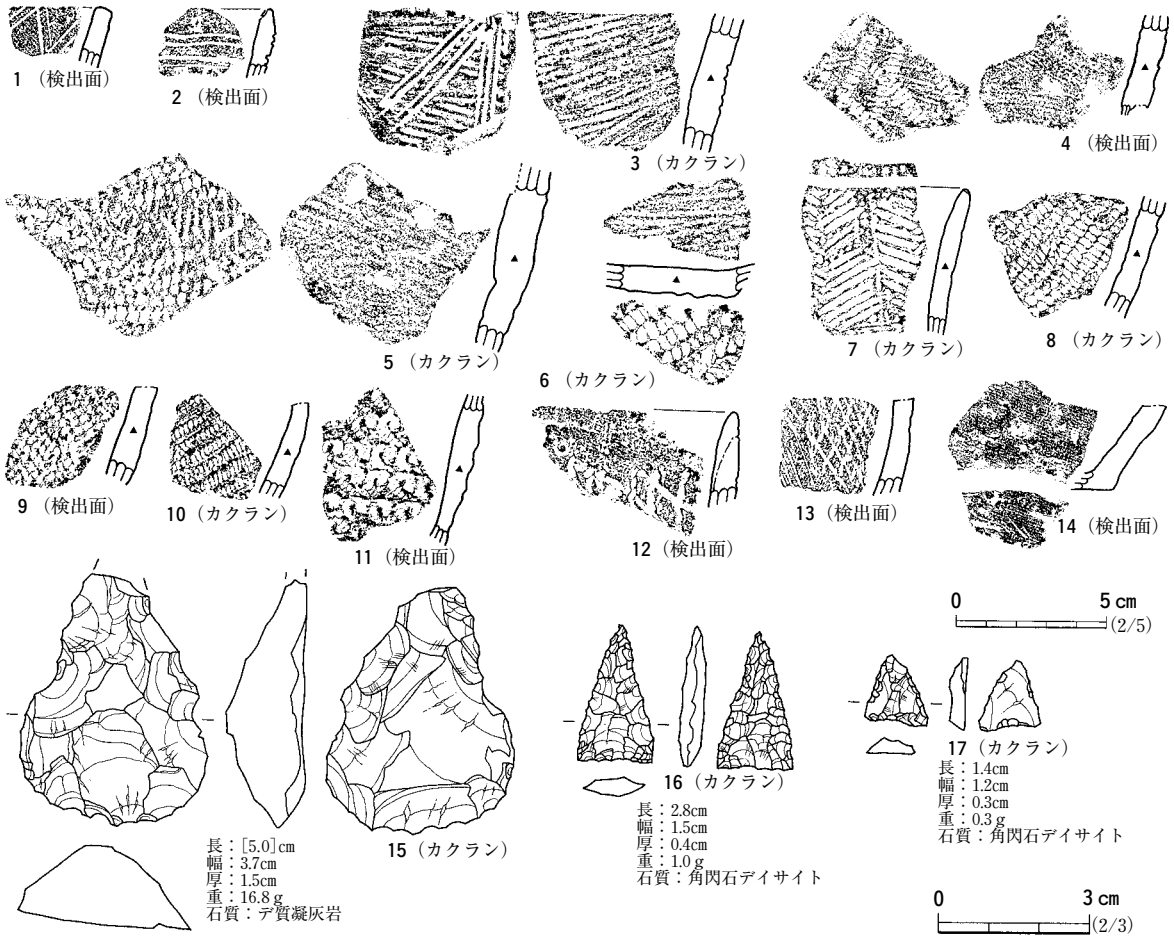


図11　１号住居跡出土遺物（２）

３・４は縄文時代早期後葉～末葉の土器である。３は内外面に貝殻条痕を施し，半截竹管による平行沈線文が認められる。４は内外面に絡条体条痕を施し，絡条体圧痕により文様を描出する。いずれも胎土に繊維を含んでいる。

５～11は縄文時代早期末葉～前期前葉の土器である。５は外面に縄文，内面に貝殻条痕，６は平底の底面に縄文が施文されている。７は口縁部が僅かに外反する比較的薄手の土器である。縦走縄文地に沈線により綾杉状の文様を描き，口端部には刻みを付す。11にはループ文が重層的に認められる。12～14は縄文時代晩期中葉の土器である。12・13には網目状撚糸文が認められる。

15～17には石器を示した。15はスクレイパー，16・17は石鏃である。

ま　と　め　本遺構は柱穴を持たない小型の竪穴住居跡である。カマドが良好な状態で遺存しており，煙突として土師器甕の転用が認められている。本遺構は煙突として利用された土師器甕，及び堆積土中の土師器片の特徴から，平安時代初頭に機能していたものと考えられる。　（横須賀）

２号住居跡　ＳＩ02（図12～17，図版11～14・125・142）

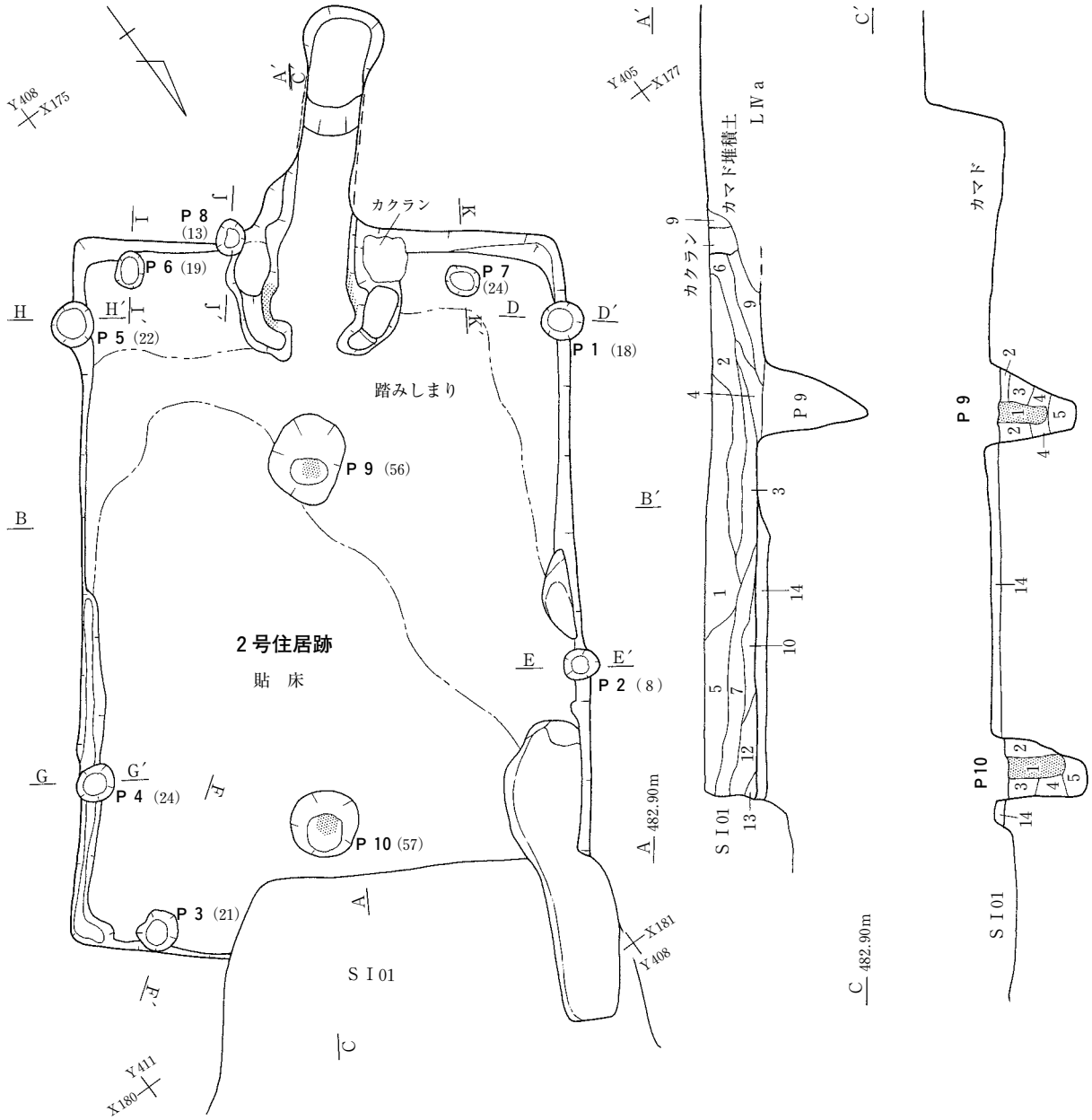
遺　　構　Ｖ25グリッド，ＬⅢ・ＬⅣ面で確認した。南東方向に下がるやや急峻な斜面上に位置する。遺構の北部で１号住居跡と重複し，本遺構が古い。また検出面を違えて，縄文時代に属する９・17号住居跡，15・17・18・25号土坑と重複する。遺構内堆積土は13層に分けられ，北西方向からの顕著な自然流入が確認できる。

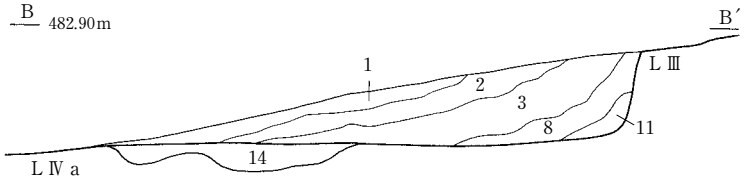
カマドを基準とする遺構の主軸は南西方向を向き，斜面に平行する。遺構のプランは長方形を呈し，長辺約4.2m，短辺約3.0m，平面積は約12.6㎡を測る。検出面からの深さは斜面上位部分において50cm前後と深く，遺存状態は良好であった。

遺構内からは主柱穴が２個，壁柱穴が８個確認されている。Ｐ９・10とした主柱穴は遺構の主軸に平行して並ぶ。柱穴の平面形は方形を基調とし，床面からの深さはそれぞれ60cm弱である。柱痕径はそれぞれ13cm前後を測り，柱間寸法は2.10mとなる。壁柱穴８基はカマド周辺を含めた遺構南西部に５個，北東部に３個が位置し，遺構長辺の両端に集中する傾向がみられる。

遺構北東部床面には２カ所の掘込が確認され，Ｐ11・12とした。この２基は人為的に埋められた浅い掘り込みであり，住居機能時には埋められた状態であったと考えられる。また，遺構東端にのみ壁溝状の施設が確認できる。床面の東半は貼床されており，床面全体に顕著な踏みしまりが認められる。

カマドは南西壁のほぼ中央に構築される。堆積土は21層に分けられ，煙道部分の堆積状況から本カマドにおける新旧期の存在が推測される。ℓ12～14・17～21は旧期カマド煙道部分の埋覆層と考えられ，白色粘土・焼土・炭化物を含む混土層である。このうちℓ12～14は崩落した状態と推測される。ℓ16新期カマド廃絶直後の自然流入土，ℓ15はカマドソデ構築土を含む崩落土，ℓ７～11は燃焼部・煙道部天井の崩落土，ℓ２～６はカマド崩壊後の自然流入と判断した。新期カマドの煙出し穴と考えられる位置には，煙突として使用された円筒形土器の一部が遺存していた。またカマドソ

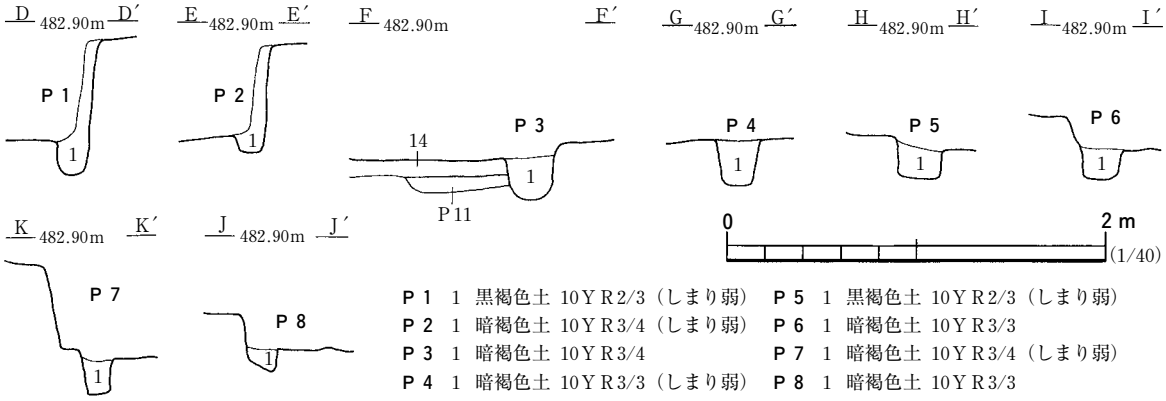




2号住居跡

1　黒褐色土　10YR2/3
2　黒褐色土　10YR2/2
3　黒褐色土　10YR2/3
4　黒褐色土　10YR3/2（炭化物含む）
5　暗褐色土　10YR3/3（炭化物少量含む）
6　暗褐色土　10YR3/3（炭化物極少量含む）
7　黒褐色土　10YR2/1（炭化物少量含む）
8　黒褐色土　10YR2/3
9　黒褐色土　10YR2/3（炭化物極少量含む）
10　暗褐色土　10YR3/4（炭化物極少量含む）
11　黒褐色土　10YR3/2（褐色土塊多量含む）
12　褐色土　10YR4/6（黄褐色土多量含む）
13　黄褐色粘質土　10YR5/6（暗褐色土含む）
14　褐色土　10YR4/4　（黄褐色土との混土，しまり強：貼床）

図12　2号住居跡（1）



Ｐ１　１　黒褐色土　10ＹＲ2/3（しまり弱）
Ｐ２　１　暗褐色土　10ＹＲ3/4（しまり弱）
Ｐ３　１　暗褐色土　10ＹＲ3/4
Ｐ４　１　暗褐色土　10ＹＲ3/3（しまり弱）
Ｐ５　１　黒褐色土　10ＹＲ2/3（しまり弱）
Ｐ６　１　暗褐色土　10ＹＲ3/3
Ｐ７　１　暗褐色土　10ＹＲ3/4（しまり弱）
Ｐ８　１　暗褐色土　10ＹＲ3/3

Ｐ９　１　暗褐色土　10ＹＲ3/3（しまり弱）
　　２　暗褐色土　10ＹＲ3/4（黄褐色土との混土，しまり強）
　　３　褐色土　10ＹＲ4/6（黄褐色土との混土，しまり強）
　　４　暗褐色土　10ＹＲ3/4（黄褐色土との混土，しまり強）
　　５　暗褐色土　10ＹＲ3/3（黄褐色土との混土，しまり強）

Ｐ10　１　暗褐色土　10ＹＲ3/2（しまり弱）
　　２　褐色土　10ＹＲ4/6（黄褐色土との混土，しまり強）
　　３　褐色土　10ＹＲ4/4（黄褐色土との混土，しまり強）
　　４　暗褐色土　10ＹＲ4/4（黄褐色土との混土，しまり強）
　　５　暗褐色土　10ＹＲ3/4（黄褐色土との混土，しまり強）

図13　２号住居跡（２）

デはℓ22，燃焼部掘形埋土はℓ23としている。

燃焼部は約70×40㎝を範囲とし，両カマドソデの一部に顕著な被熱が認められた。カマドソデは黄褐色粘質土によって掘形埋土上から構築したものである。煙道部の掘形長(旧期カマド)は約1.2mであり，推定される新期カマドの煙道長さは約60㎝程となる。煙道部の底面はほぼ水平であり，煙出し穴の底面は若干低くなる。検出面からの深さは60㎝を測る。

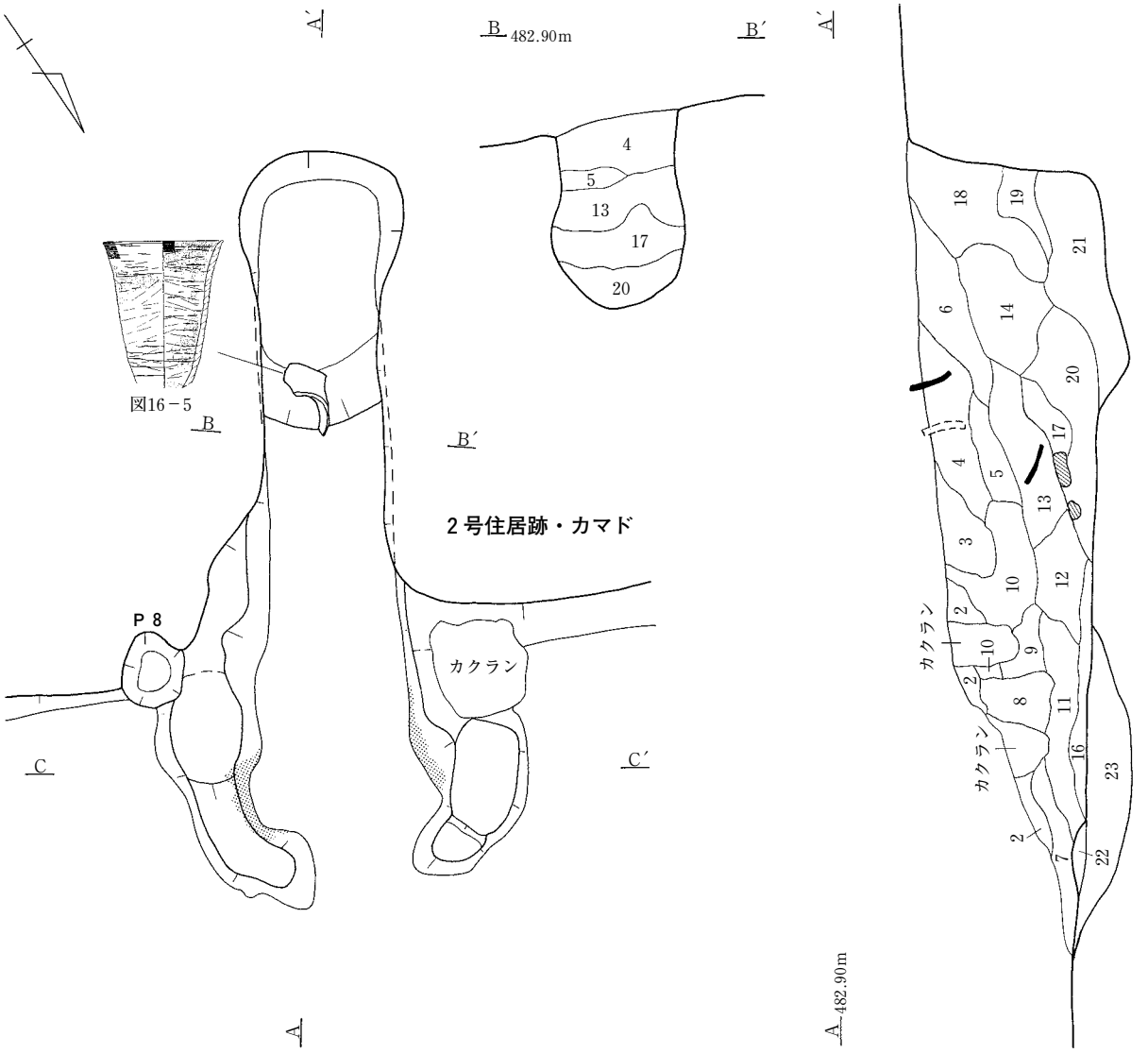
遺　　物　すべて遺構内あるいはカマドの堆積土中から出土した破片資料である。図16に示した円筒形土器はカマド内堆積土から出土した破片が多く接合している。

図16には土師器・須恵器を示した。２は土師器，３は須恵器の杯である。２は非ロクロ成形であり，外面にはケズリ，内面にはミガキが観察される。

１・４・５・６・８はカマドの部材として製作・使用された土器と推定され，円筒形土器とした。なおこれらの円筒形土器について，出土状況からカマドにおける使用部位を特定することは不可能であった。４は新期カマドの煙出し穴部に遺存していた破片である。円筒形土器の器形には若干のバリエーションが認められるが，いずれも口縁部が外反する。体部の調整は非常に粗雑であり，粘土紐積み上げ痕が明瞭に残る。１・６は外面，５は両面に煤が付着する。７は調整の丁寧さから甕の底部と判断した。底部には木葉痕が観察される。

図17は堆積土中から出土した縄文土器・弥生土器・石器である。１・３は縄文時代早期中葉～後葉の土器である。１は横位に爪形文が付される。３は口縁部が外反する深鉢であり，櫛歯状の工具によって縦位の直線文と波状文が交互に施文される。また口縁端部にもキザミが入れられている。胎土には繊維を若干含むが，焼成は堅緻，器厚は８㎜前後を測り比較的厚手につくられる。

２・４～８は縄文時代早期後葉～末葉の土器である。４は内外面に貝殻条痕文が施文される。５は口縁部端が強く外反する比較的薄手の深鉢である。外面及び口縁部内面には縄文，内面体部には貝殻条痕文が付される。６はおそらく５と同種の土器の体部片であろう。７・８は共に口縁部の破



カマド

1　黒褐色土 10ＹＲ2/2（焼土少量含む）
2　黒褐色土 10ＹＲ3/2（炭化物・焼土含む）
3　暗褐色土 7.5ＹＲ3/3（焼土含む）
4　黒褐色土 10ＹＲ2/2（焼土・白色土含む）
5　黒褐色土 10ＹＲ2/3（炭化物・焼土含む）
6　黒褐色土 2.5Ｙ3/2（焼土・白色土含む）
7　黄褐色砂質土 2.5Ｙ3/2（炭化物・焼土含む）
8　赤褐色土 5ＹＲ4/8（硬質焼土塊多量・白色土含む）
9　暗褐色土 7.5ＹＲ3/3（硬質焼土塊多量含む）
10　暗赤褐色土 5ＹＲ3/4（焼土含む）
11　赤褐色土 5ＹＲ4/6（炭化物・焼土含む）
12　暗褐色土 7.5ＹＲ3/3（焼土多量含む）
13　暗赤褐色土 7.5ＹＲ3/3（焼土含む）
14　黒褐色土 10ＹＲ2/3（焼土含む）
15　黄褐色土 10ＹＲ5/6（焼土多量含む）
16　暗褐色土 7.5ＹＲ3/3（炭化物・焼土多量含む）
17　暗黒色土 10ＹＲ3/3（焼土・白色土含む混土，しまり強）
18　暗褐色土 10ＹＲ3/3（焼土含む混土，しまり強）
19　暗オリーブ褐色粘質土 2.5ＹＲ3/3（黄褐色土との混土しまり強）
20　赤褐色土 5ＹＲ4/8（焼土含む混土，しまり強）
21　暗褐色土 10ＹＲ3/4（焼土含む混土，しまり強）
22　黄褐色粘質土 10ＹＲ5/6（暗褐色土との混土，しまり強：カマドソデ）
23　暗褐色土 10ＹＲ3/4（焼土含む混土，しまり強）

0　1 m
(1/20)

図14　2号住居跡（3）

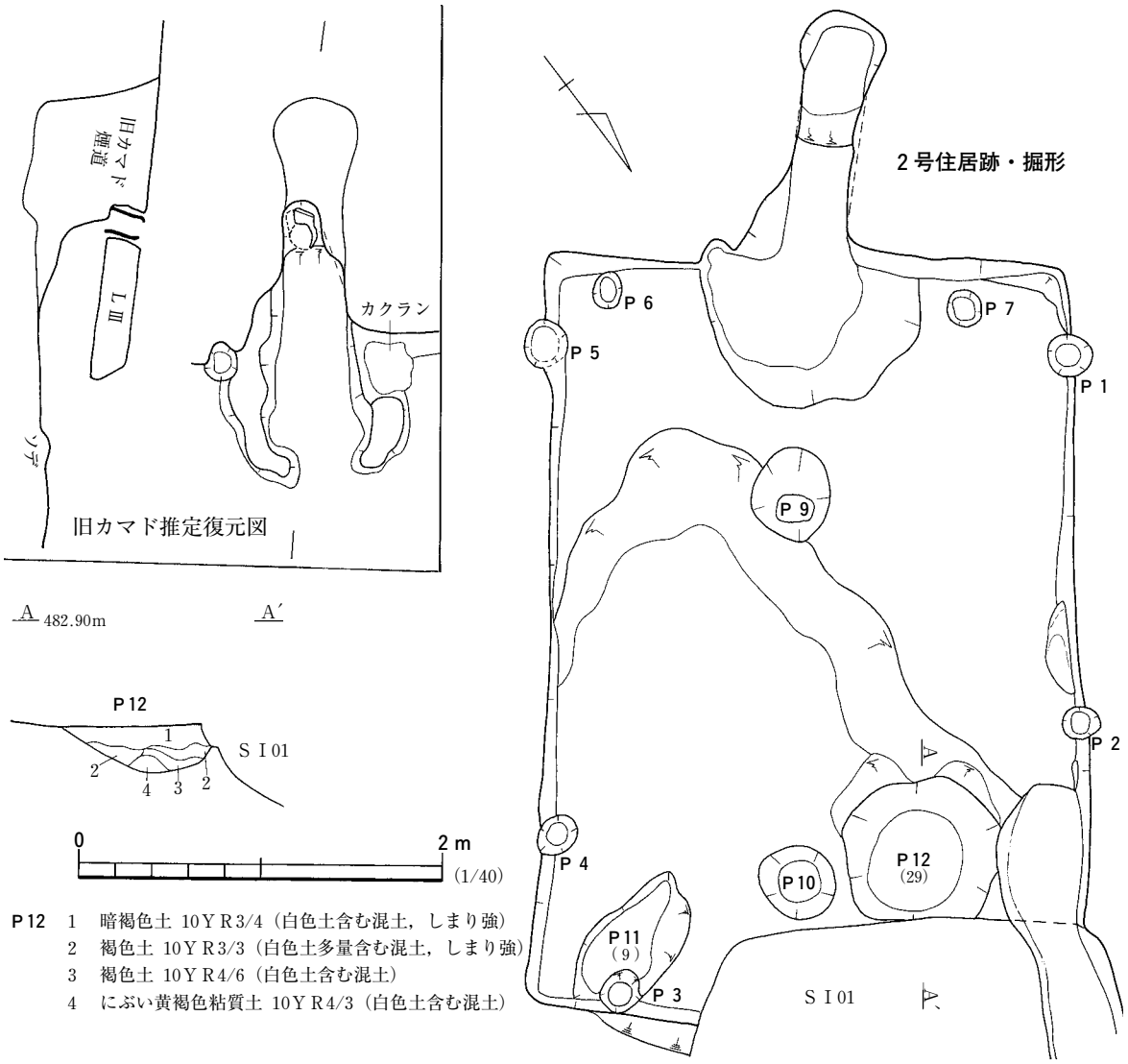


図15　２号住居跡（４）

片であり，７は僅かに，８は口端部近くで強く外反する。７の外面は条痕文，７の内面及び８の内外面は擦痕である。２は外面に撚糸文が施文され，形状から尖底もしくは丸底となる底部直上の破片と考えられる。

９～11は縄文時代前期初頭～前期中葉の土器である。９は非結束の羽状となる縄文の間に短沈線が巡る。内面は平滑に整えられる。10は波状となる口縁部片であり，口縁部端及び沈線間に櫛歯状工具による刺突を充填する。11には断面三角形状の凸帯が付され，その上下に半截竹管による刺突文が巡る。

12・13は縄文時代晩期中葉，14は弥生時代中期前葉の土器である。13には横走する３条の沈線，14には沈線と充填縄文が観察される。

15～22には石器を示した。15～17は石鏃であり，いずれも基部は平基無茎となる。17には黒色の付着物が認められる。18は石鏃の未製品，19は石錐，20～22はいずれも輝石安山岩製の磨石である。

ま　と　め　本遺構は２個の主柱穴を有する長方形プランの竪穴住居跡である。カマドには作り

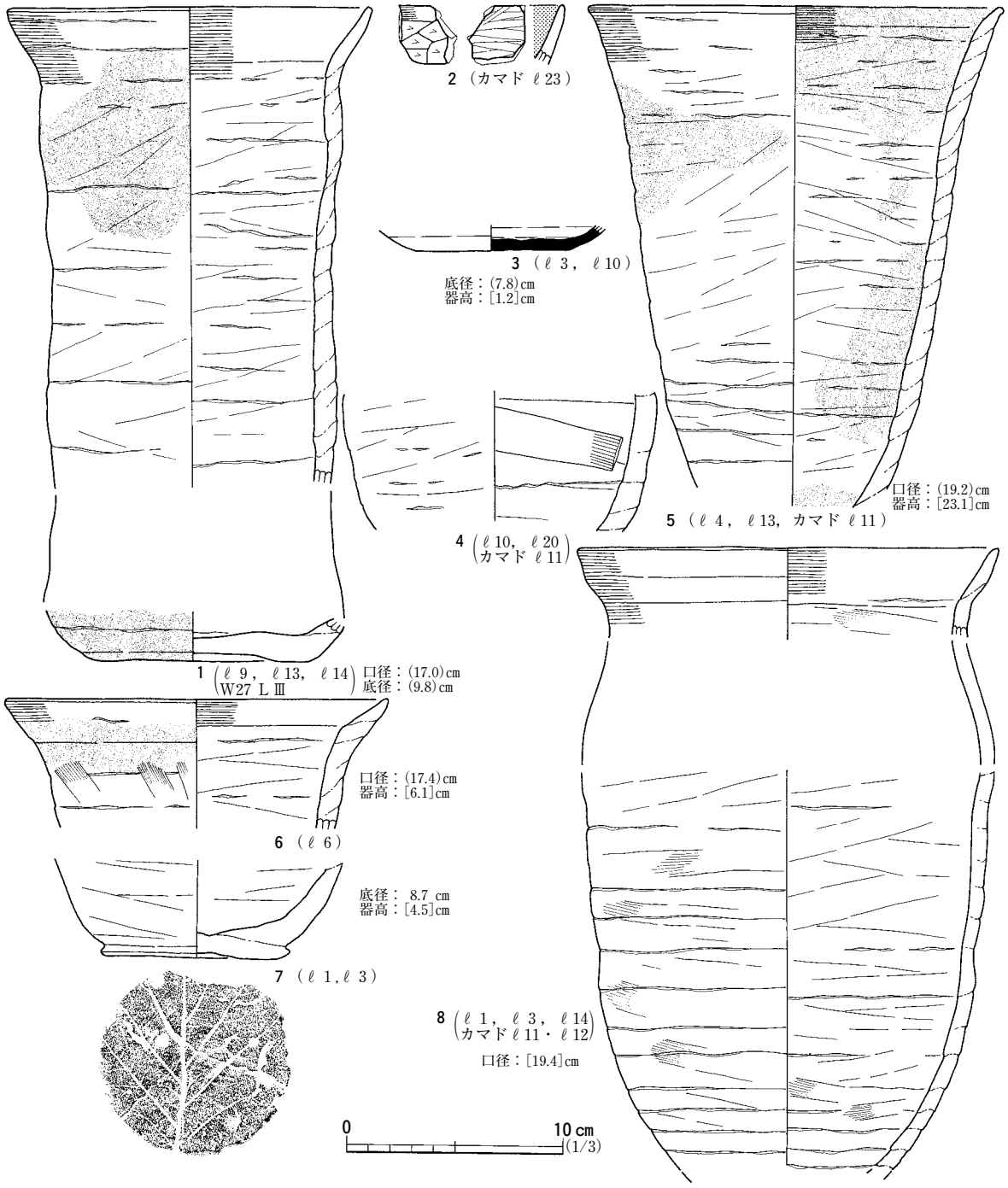
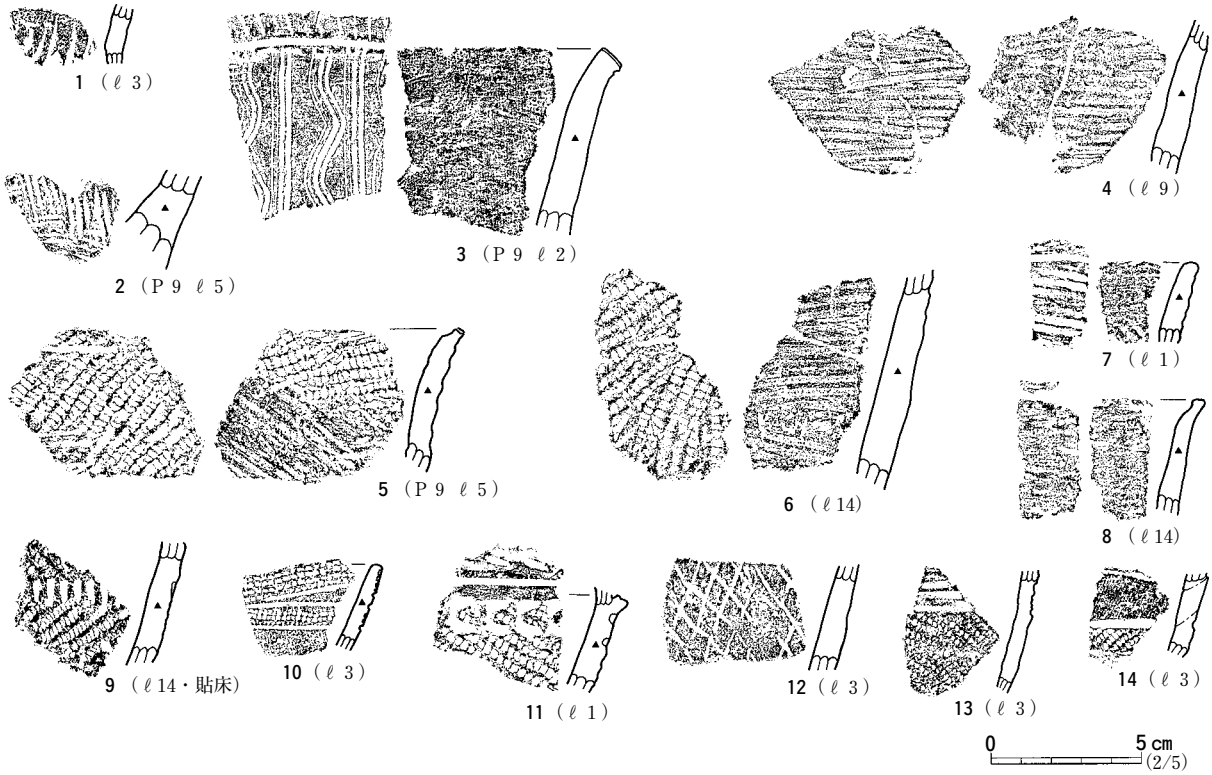
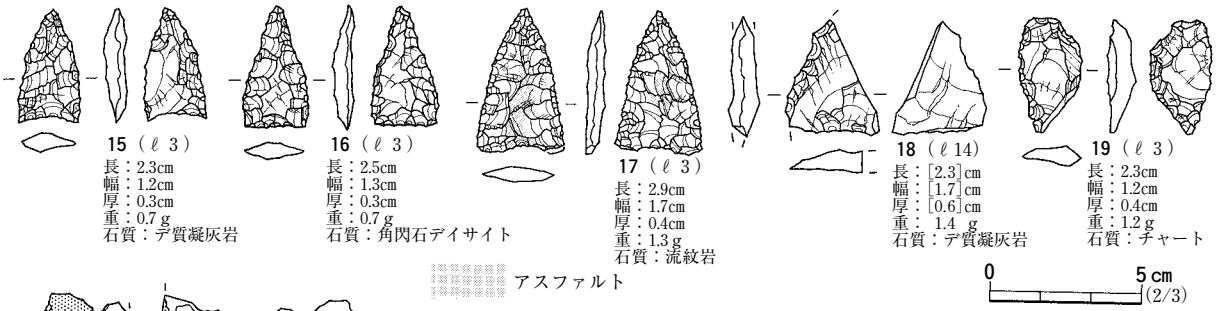


図16　2号住居跡出土遺物（1）

変えが認められ，堆積土中からはカマドの部材と考えられる円筒形土器が出土している。

遺構の機能年代については特定する材料に乏しいが，1号住居跡との重複関係から奈良時代後半～平安時代初頭としておきたい。遺構内の堆積土は自然堆積であり，1号住居跡とは若干の時期差を有する可能性がある。　（横須賀）





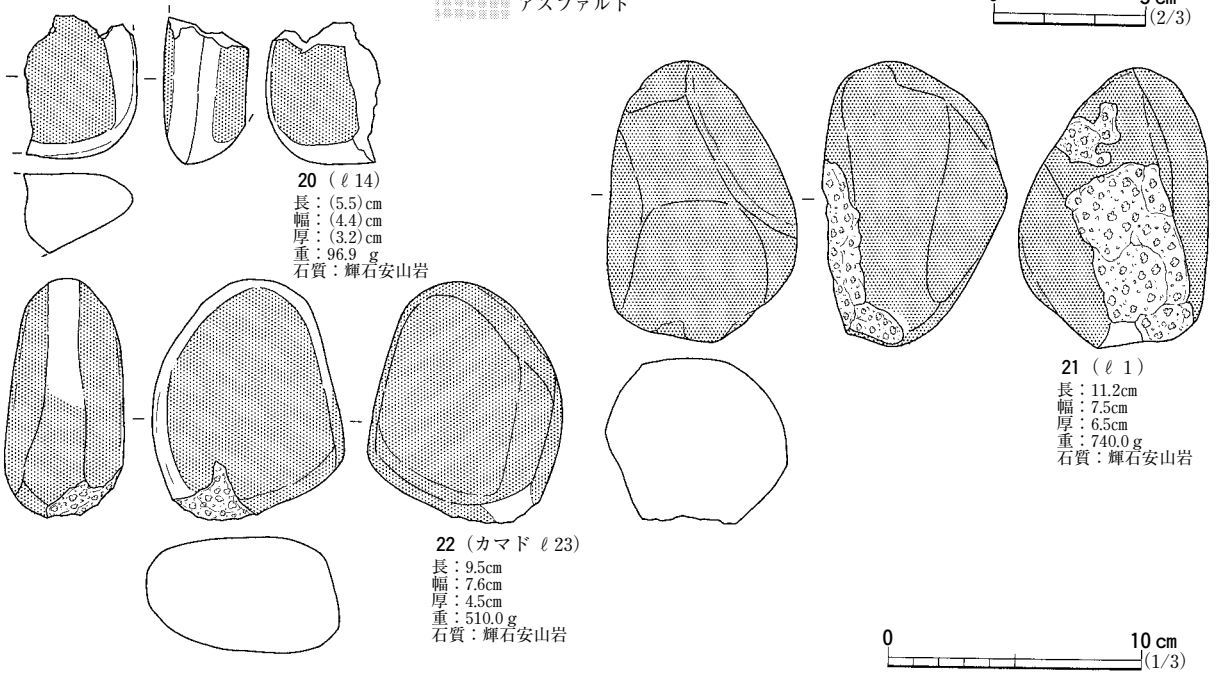


図17　２号住居跡出土遺物（２）

3号住居跡　ＳＩ03（図18・19，図版15・16・127）

遺　　構　本遺構は調査区中央部，１次調査区西端にあたるＲ21・22グリッドに位置する。丘陵の頂部に近い東向き斜面である。本遺構の北斜面は黒森川に向かって急激に下る地形である。検出面はＬⅢからぼんやりした不整形の広がりを確認していた。平面形を明確にするためにＬⅥ面まで掘り下げて再検出を行った。その結果，２軒の竪穴住居跡が重複している状況が看取できた。重複している北寄りの新しい竪穴住居を３号住居跡とし，南寄りの古い住居跡を５号住居跡と呼称した。本遺構の平面形は黒褐色土の不整な方形として認められた。本遺構周辺には住居跡と土坑が確認できる。本遺構と重複して５号住居跡，24号土坑がある。いずれも本遺構よりも古い遺構である。重複しないものの周囲には１・２・４・23号土坑，１号焼土遺構が確認されている。

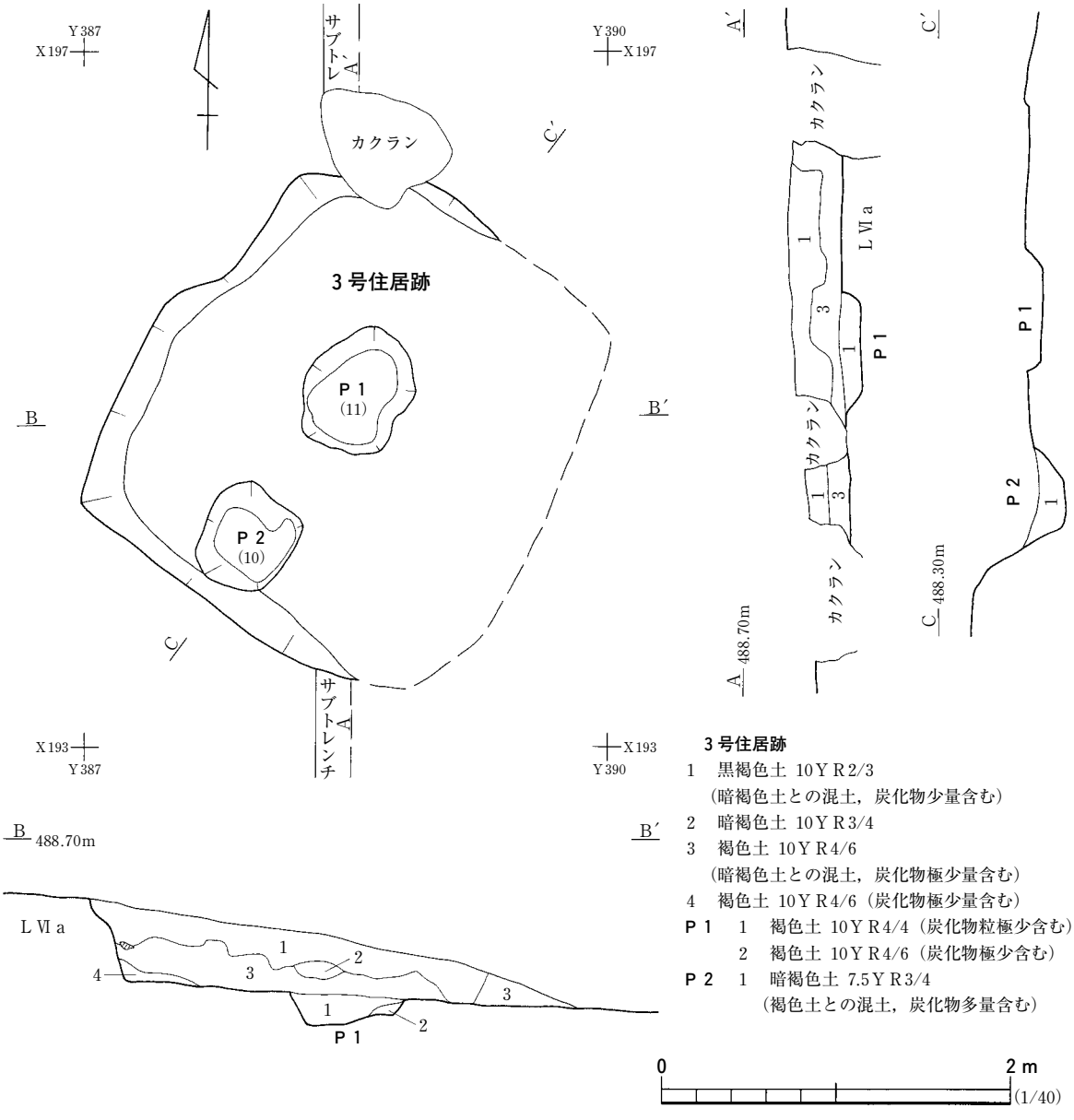


図18　3号住居跡

遺構内堆積土は４層に分層できた。ℓ １～ℓ ３は主体となる黒褐色土や褐色土に暗褐色土が含まれる混土であり，層境が不自然であるため人為堆積と判断した。ℓ ４は壁際に三角状に認められる層厚10cm足らずの層で自然堆積と判断した。

本遺構は東壁が確認されていない。斜面による壁面の流失によるものか，本遺構使用時から無かったのか定かではない。精査時において比較的平坦であった部分を本遺構の床面推定ラインとして破線で図示している。この推定ラインを含めた検出時における平面形は2.6×2.5ｍであり正方形となる。僅かに南西－北東軸が長い。床面形は不整に歪んだ方形である。床面は平坦であるが，硬化部分や炉跡は確認できなかった。床面からはピットを２個確認した。いずれも柱穴状のピットではなく，機能については不明である。Ｐ１は炭化物粒を含んだ褐色土で不整な楕円形である。長軸70cm，短軸60cm，床面からの深さは16cmを測る。Ｐ２は褐色土や炭化物粒を斑らに含んだ暗褐色土で円形状である。長軸60cm，短軸54cm，深さ18cmである。Ｐ２の堆積土の色調が暗褐色であり，遺構内堆積土ℓ３・４層とは異なることから，本遺構使用時には埋められていた可能性が高い。

遺　　物　本遺構からの出土遺物は縄文土器片104点，石器類15点で，多くはℓ１から出土している。出土した土器は縄文時代早期末葉頃の土器片が多数を占めるが，縄文時代早期中葉から縄文時代前期前葉期の土器片も混在する。縄文土器片21点を図示した。

図19－１～４は縄文時代早期中葉の土器片である。いずれも器壁が薄く硬質で繊維混和痕は認められない。１は口縁部資料で絡条体圧痕が２段に施文される。口端部上面には棒状工具を押奈し，刻みを加えている。２は口端部上面に指頭により刻みを施している。爪の痕跡も残る。器面にも指で押さえた痕跡が確認できる。３は櫛歯状工具または放射肋のある貝殻により浅く押引き施文を施している。口端部上面には棒状工具により刻みを施している。４は胴部破片である。細い半截竹管による有節沈線文で円形の文様を描く。同図５は縄文時代早期後半の土器である。器壁は厚く胎土は粗い。口端部は沈線により「×」字状の文様を描く。これら「×」字状の文様から延びるようにして1.5cm程沈線が引かれる。沈線の止めている痕跡が確認できることから，上から下に向かって施文されているようである。

同図６～16は縄文時代早期末葉～前期初頭にかけての土器である。６～９は外面が撚糸文で，内面は条痕文が施文されている。６は口縁部資料で口端部が舌状に尖り，僅かに外傾する。外面は地文に撚糸文を施し横位に沈線を引いている。内面は横方向に施文された条痕が確認できる。胎土には多量の繊維混和痕が認められる。７～９は深鉢胴部の資料である。同図10～16は外面が撚糸文で，内面は擦痕が認められる土器である。10は口縁部資料である。器壁は５㎜程度で非常に薄いが，胎土は脆く多くの繊維混和痕が残る。11は胴部上半の資料である。胴部から口縁部にかけて外傾する屈曲部の破片である。同図17～21は縄文時代前期の土器である。いずれにも繊維混和痕は認められるが，内面は丁寧に磨かれている。17は縄文時代前期初頭期の土器片である。鋸歯状短沈線を用いる。その下位には縄文が施文されている。以降は縄文時代前期前半に属する。18・19は重層ループ文が認められる土器片である。20・21は組紐によって施文した土器片である。

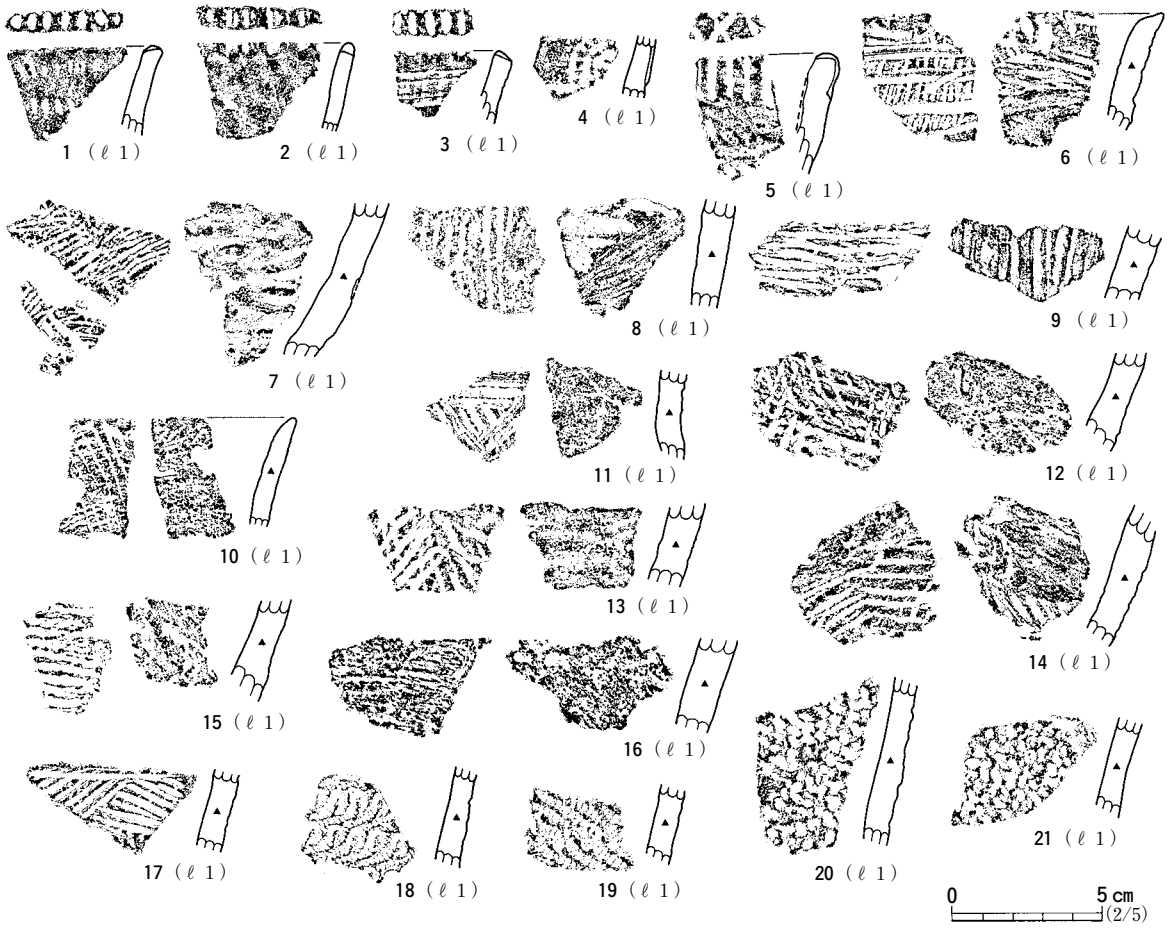


図19　3号住居跡出土遺物

ま　と　め　本遺構は東壁が認められなかったもののほぼ正方形に造られた竪穴住居跡である。木の根による撹乱を多く受けて遺存状況は悪い。遺構の規模は推定ラインを含めても2.5m四方とかなり小型である。床面からピットを2個検出した。いずれも大きく浅いピットであり，位置からしても柱穴とは異なる機能を持っていたと推測できる。その他炉や柱穴などの住居内施設は確認されず，遺構の面積から判断すると「住居」として使用されていたかは疑問が残る。本遺構の遺物はすべて堆積土中からの出土であり，小破片が多い。そのため時期の限定は困難であるが，縄文時代早期末葉の土器片が多く出土している。周囲の遺構からも同時期の土器片の出土が多いことから，本遺構の所属時期は縄文時代早期末葉頃の可能性を考えたい。　（三浦）

4号住居跡　ＳＩ04（図20・21，図版17・18・142）

遺　　構　本遺構は，調査区中央部，1次調査区西部にあたるＳ23グリッドに位置する。丘陵斜面に位置し，本遺構は東向き斜面を掘り下げて造られている。本遺構の検出は，調査区南壁に基本土層とは異なる暗褐色土を確認したことに始まる。この暗褐色土が調査区内に延びることを確認し，平面形を検出した。検出面はＬⅥ面で暗褐色土の方形プランとして認められた。検出時点では土坑と判断していた。本遺構が調査区南壁にかかっていることから，1ｍ程度猶予がある調査範囲を拡

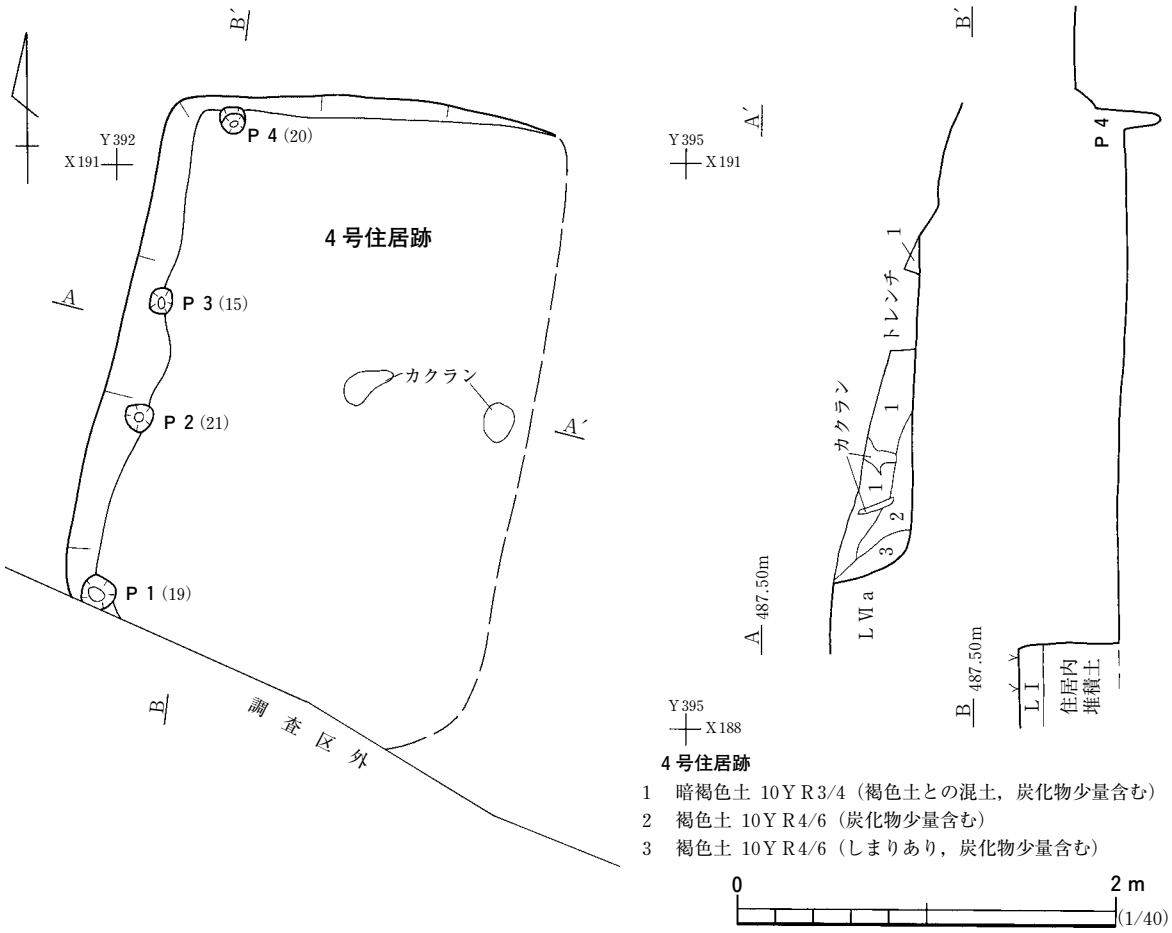


図20　４号住居跡

張して再検出を行った。その結果，暗褐色の長方形プランが確認できた。長軸が３ｍを超えることから，本遺構は竪穴住居跡と再認識して調査を行った。本遺構と重複する遺構は認められないが，西側に１・３号土坑が近接する。

東西方向は２ｍ程度であったため南北にはベルトは設定せず，東西方向のみ土層観察用のベルトを設定した。遺構内堆積土は３層に分層した。ℓ１は暗褐色土で遺構内を覆う層である。ℓ３はℓ２よりも硬く締まる土性で，壁際に見られる。いずれの層も斜面の高い部分から流れ込んでいる様相が認められることから自然堆積と判断した。

平面形は東壁が認められないが，精査時に平坦であった部分を本遺構の床面推定ラインとして破線で図示している。推定ラインを含めて平面形を推察すると長軸を南北にもつ長方形となる。検出面の長軸線上の長さは3.1m，短軸線上の長さは2.2mを測る。床面の平面形も長方形である。床面の規模は長軸３ｍ，短軸２ｍである。検出面から床面まで40㎝を測る。床面は平坦であるが，硬化面は認められなかった。床面から壁面にかけて４個のピットを確認した。南側よりＰ１～Ｐ４と呼称する。すべて径20㎝未満，深さ20㎝前後の小型であり，壁柱穴である。断面形から掘形などはなく，杭を打ちつけて立てた柱であると推測できる。北壁や床面東側及び推定ラインの外も精査を行い柱穴状のピットの検出に努めたが，確認することはできなかった。その他炉跡などの住居内施設

は確認できなかった。壁面は僅かに丸みを帯びて立ち上がる。北西隅はほぼ直角に造られていて，角を意識して造られていたようである。

遺　　物　本遺構からの出土遺物は縄文土器22点，石器26点である。遺物は遺構内堆積土ℓ１・２から満遍なく出土している。石器はすべて剥片石器で，石質は多くはデイサイト質凝灰岩である。このうち図示した遺物は縄文土器７点，石器３点である。

図21－１は微細な土器片であるが，縄文時代早期中葉の土器である。本遺構廃絶後に堆積土に紛れて流入してしまったと考えられる。丁寧に磨いた器面に有節沈線文を施し，その下位には絡条体を押奈している。同図２は竹管の凸部のような施文具で横位や斜位に条痕を施文したような文様である。内面は無文である。同図３・６は撚糸文－条痕文土器である。同図４は口縁部破片である。外面は撚糸地文上に半截竹管により斜位に沈線を施文する。内面の口端部には撚糸文が施文され，胴部は擦痕となる。胎土は黒色で多量の繊維混和痕が認められ，脆い。同図５は表裏条痕文土器である。同図７は外面が縦走縄文，内面は擦痕である土器である。焼成は良く硬質で，胎土にはわずかに繊維混和痕が確認できる。

同図８・９は石鏃である。いずれもデイサイト質凝灰岩である。同図８は小型の無茎凹基石鏃である。先端は欠損しているものの，形態は２等辺３角形となる。同図９は無茎平基石鏃である。形態は軸線がずれる斜軸である。同図10は珪質頁岩製の石匙である。

ま　と　め　本遺構の東壁は認められないが，推定した床面の範囲から長方形の竪穴住居跡であると考えている。斜面の標高が高い西壁際に４個の壁柱穴を確認した。いずれも小型であり，打ち込んで柱としていたようである。４個のピット以外に本遺構に付随する施設や床の硬化面などは確認できず，簡易的な住居跡の印象を受けた。本遺構の内外にピットが認められないことから，西壁に並ぶ４個のピットで上屋を支えていたのであろうか。本遺構の出土の土器片は縄文時代早期後半

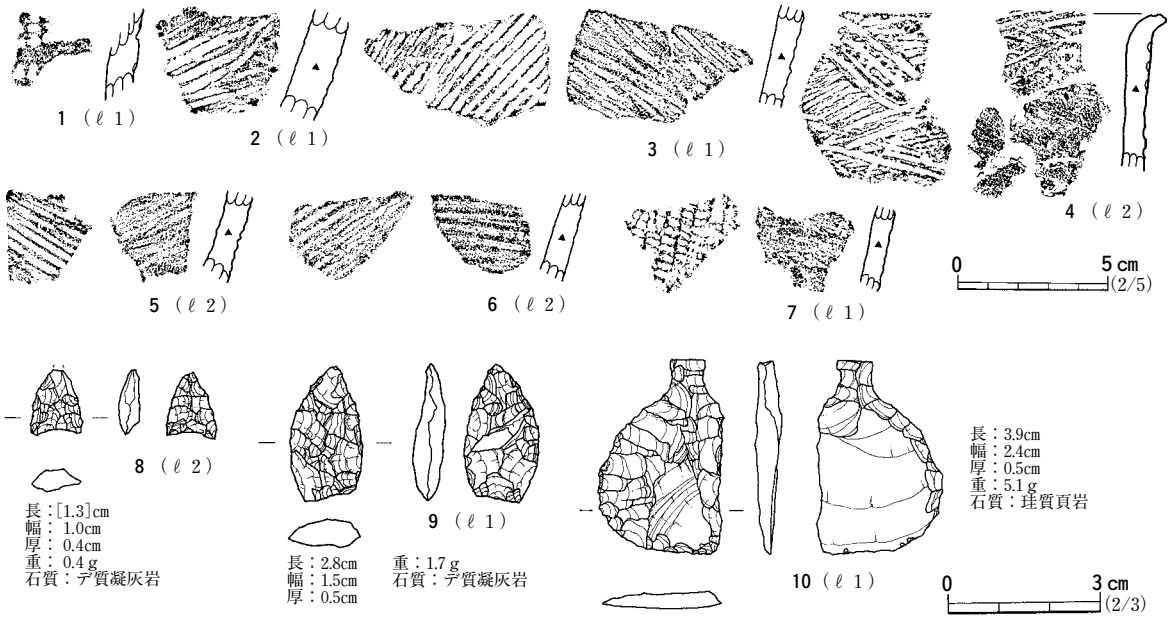


図21　４号住居跡出土遺物

の時期にほぼ限定されることから，縄文時代早期後葉～末葉と推定できる。　（三浦）

５号住居跡　ＳＩ05（図22～27，図版19・20・126・128）

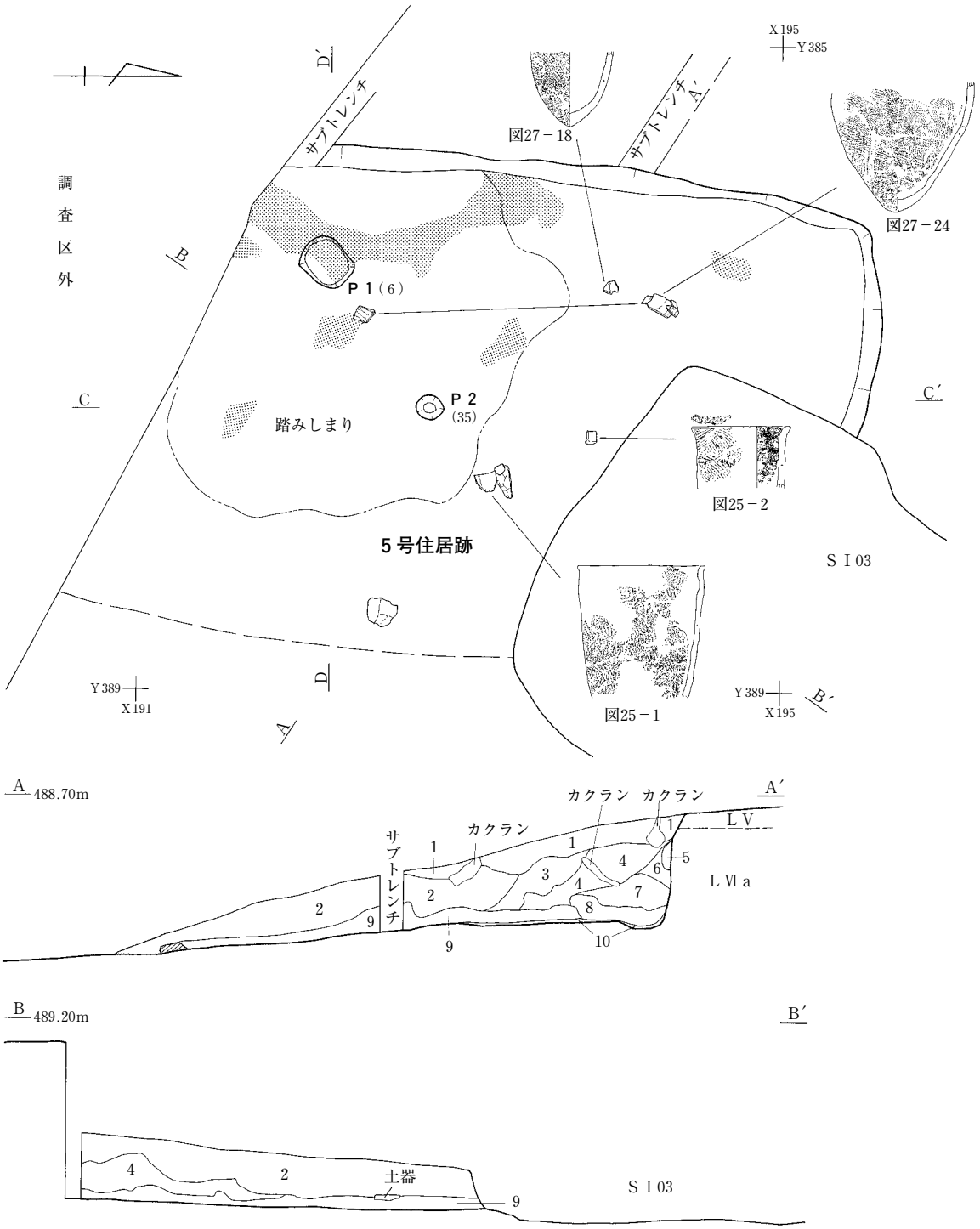
遺　　構　本遺構は調査区中央部，１次調査区西部にあたるＲ21・22グリッドに位置する。丘陵尾根上の東向き斜面を大きく掘り下げて造られている。３号住居跡検出時に，３号住居跡に重複する竪穴住居跡らしきぼんやりした暗褐色土の広がりを確認した。検出当初，この広がりがあまりにも長大であるために住居跡が２・３軒重複しているもの可能性を考慮して調査区壁際・東西軸中央・南北軸中央に重複状況確認のためのサブトレンチを３本設定した。その結果，すべてのトレンチにおいて床面の段差の違いや堆積土の差異が見られないことから１軒の住居跡と判断して調査を進めた。本遺構の検出面はＬⅥ面である。平面形はぼんやりした暗褐色の長方形として認識した。本遺構よりも新しい遺構として３号住居跡が重複し，北壁の一部を破壊している。本遺構北側の調査区西壁には２号土坑が近接する。

遺構内堆積土は９層に分層した。その堆積土は２つに大別できる。ℓ１～７までは自然堆積層で斜面の標高の高い西側から流入した層である。ℓ８・９には多量の炭化物・焼土塊を含むことから，本遺構が焼失家屋である可能性を考慮して調査を行った。しかし，炭化物や焼土塊が住居跡南側床面にのみ広がり，北東床面には確認することができないことからℓ８・９は人為的に投棄された層であると判断した。

本遺構の東壁は認められないが，精査時に平坦であった面を本遺構の床面推定ラインとして破線で示した。また南壁の一部は調査区外に延びており，本遺構の平面形を明確にすることは困難である。これらを考慮し本遺構の平面形を推測すると長軸を南北にもつ長方形となる。調査区内の規模は長軸直線上で4.4m，短軸直線上は3.1mを測る。床面の平面形も長方形で，規模は長軸4.3m，短軸３ｍである。

調査区南壁から本遺構西壁際の床面上には，焼土塊が投棄されていた。この焼土塊は調査区外に向かって延びているようである。また床面上には20～30cm大の焼土塊が疎らに確認できた。この焼土塊を断ち割った結果，床面と焼土塊に間入する層はなく本遺構が廃絶するとすぐに投棄したものと思われる。

住居内施設はピット２個を確認した。Ｐ１は床面上の焼土塊を除去後に西壁際で検出したピットである。規模は長軸33cm，短軸28cmの楕円形である。床面からの深さは10cmと非常に浅い掘り込みである。Ｐ１の機能は不明である。Ｐ２は本遺構中央部から検出した。平面形は円形で規模は径16cmで，床面からの深さは35cmを測る。断面形の形状から，杭状の柱を打ち込んだ柱穴と考えられる。長大な住居跡であるので柱穴の検出を丁寧に行なったが，これらの他には確認できなかった。床面は平坦であり，床面中央部から本遺構南床面の調査区外壁にかけて踏み締まりによると思われる硬化面が確認できた。調査範囲内からは炉跡は確認できなかった。西壁では床面から壁面にかけてほぼ垂直に立ち上がる。遺存の良好な壁面部分では60cmを超える。北壁は30cm程度であり，東寄りで



5号住居跡

1　暗褐色土 10Y R3/4（炭化物少量・橙色土極少量・砂粒含む）
2　黒褐色土 10Y R2/3（炭化物多量・橙色土多量含む）
3　暗褐色土 10Y R3/3（褐色土・炭化物少量含む）
4　暗褐色土 10Y R3/3（褐色土・炭化物少量含む）
5　褐色土 10Y R3/3
6　褐色土 10Y R4/4（炭化物多量含む）
7　暗褐色土 10Y R3/3（褐色土・炭化物少量含む）
8　暗褐色土 10Y R3/4（褐色土との混土，炭化物少量含む）
9　暗褐色土 10Y R3/4（褐色土との混土，炭化物多量含む）
10　褐色土 10Y R4/6

0　2 m
(1/40)

図22　5号住居跡（1）

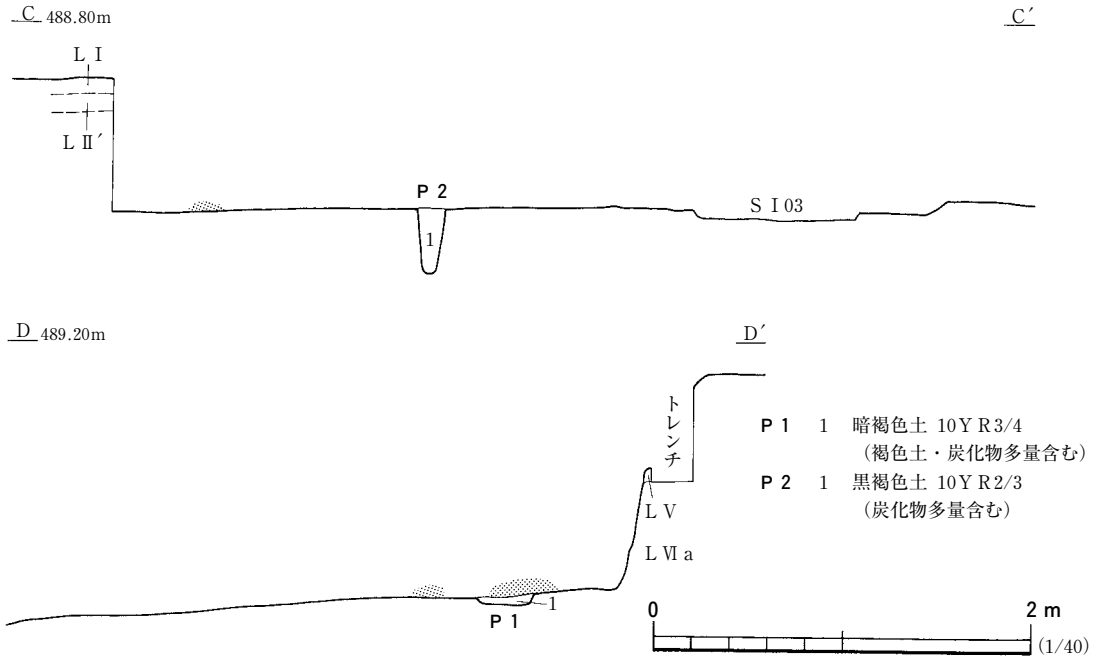


図23　５号住居跡（２）

は壁高は低くなる。

遺　　物　本遺構からは縄文土器片854点，石器類136点が出土した。多くは堆積土中からの出土遺物であり，中でも遺構内堆積土ℓ９出土遺物が量も多く，接合復元できた資料も多い。内訳はℓ２からは縄文土器片470点，石器類136点，ℓ４は縄文土器片14点，石器類９点である。人為堆積土であるℓ９では縄文土器片370点，石器類90点である。床面からは石器類１点が出土している。このうち縄文土器片101点，石器７点を図示した。

図24－１～３は縄文時代早期中葉の土器片である。１は口縁部資料である。横位の絡条体圧痕文が３段認められる。口端部上面にも同工具による圧痕が認められる。２・３は胴部資料で半截竹管による押引状の刺突文が施文される。

同図４・７は早期後葉の条痕文土器である。いずれも内外面に条痕のみが施される小破片である。

図24－５・６・８～30，図25－１～21，図26－１～25，図27－１～10は縄文時代早期末葉～前期初頭の縄文条痕文系土器である。若干の個体差はあるものの概ね器壁は厚く，胎土には多量の繊維混和痕が認められ粗い。外面の撚糸文中には明らかに引きずっている資料も見られ，絡条体条痕に近い資料も認められる。図24－５・６・８～30は外面撚糸または縄文，内面条痕文土器をまとめている。８～20は口縁部または口縁部に近い資料である。口端部が直線状に立ち上がる11・20や外反するもの12・16・19，口端部が舌状に尖り外反するもの８・９・13・14・17・18がある。いずれも口縁部内面は撚糸文である。21～30は胴部資料である。21～24は撚糸文施文後，半截竹管による沈線により横位や斜位に施文し文様を描出する。５・６・25～27は外面撚糸文のみの胴部破片，28～30は外面斜縄文の胴部破片である。

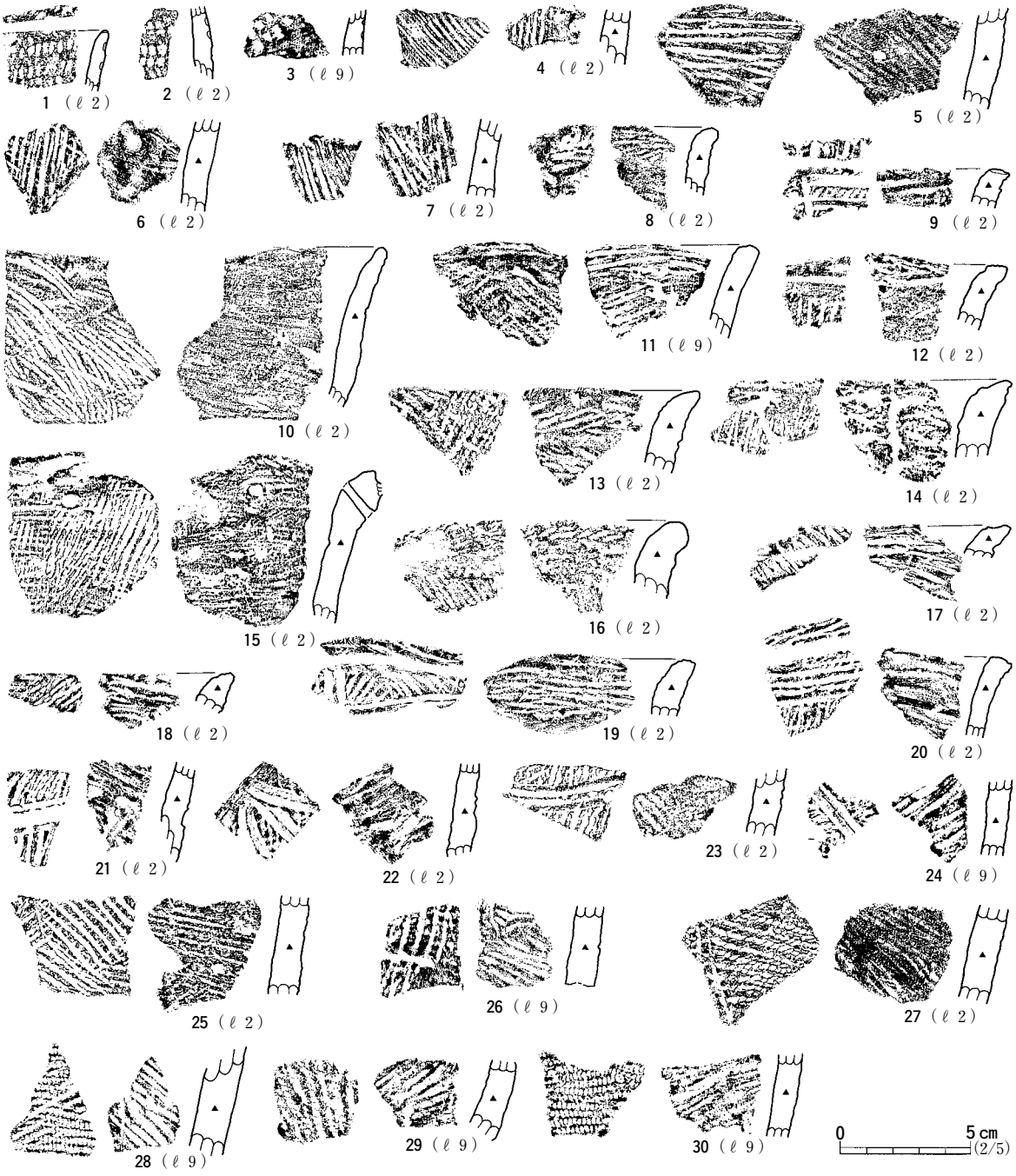


図24　5号住居跡出土遺物（1）

図25には外面撚糸文または縄文で，内面擦痕の土器をまとめた。16のみ地文縦走縄文で，他は地文撚糸文である。1・2はそれぞれ接合し，土器の器形が推定可能な資料である。1は直線的に立ち上がり口端部が僅かに外反する深鉢である。外面には撚糸文が全面に施文され，内面は無文で僅かに擦痕が認められる。2は直立する器形で口端部が外反する深鉢である。口縁部外面には貝殻によるものであろう条痕文で菱形の文様を構成する。3～9は口縁部資料，10～21は胴部資料である。口端部が直立する4・5や外反する1～3・6・7，舌状に尖り外反する8・9がある。3・7については2と同一個体の可能性のある破片資料である。12～15は撚糸施文後半截竹管により沈線を描く。16

図25　５号住居跡出土遺物（２）

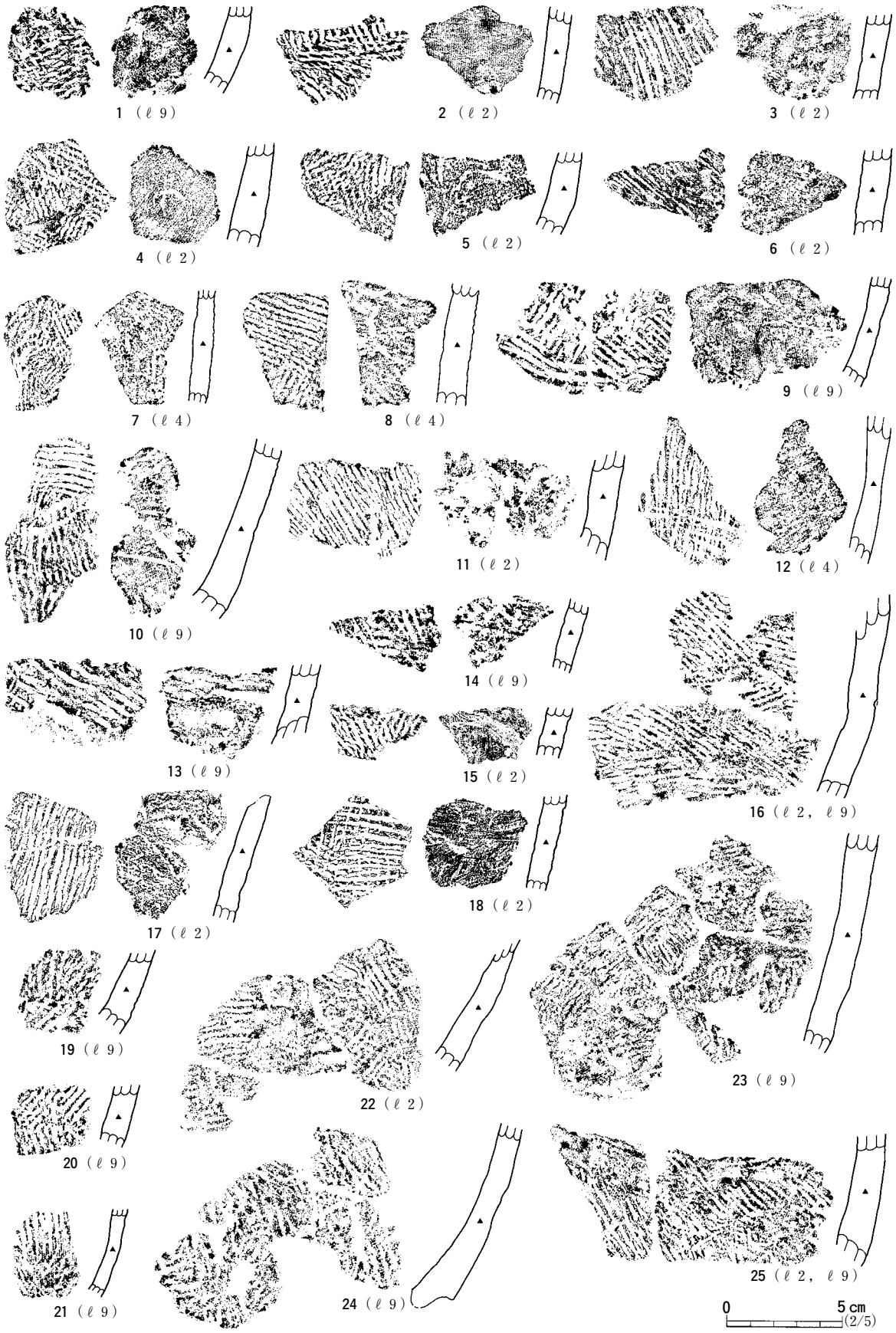


図26　5号住居跡出土遺物（3）

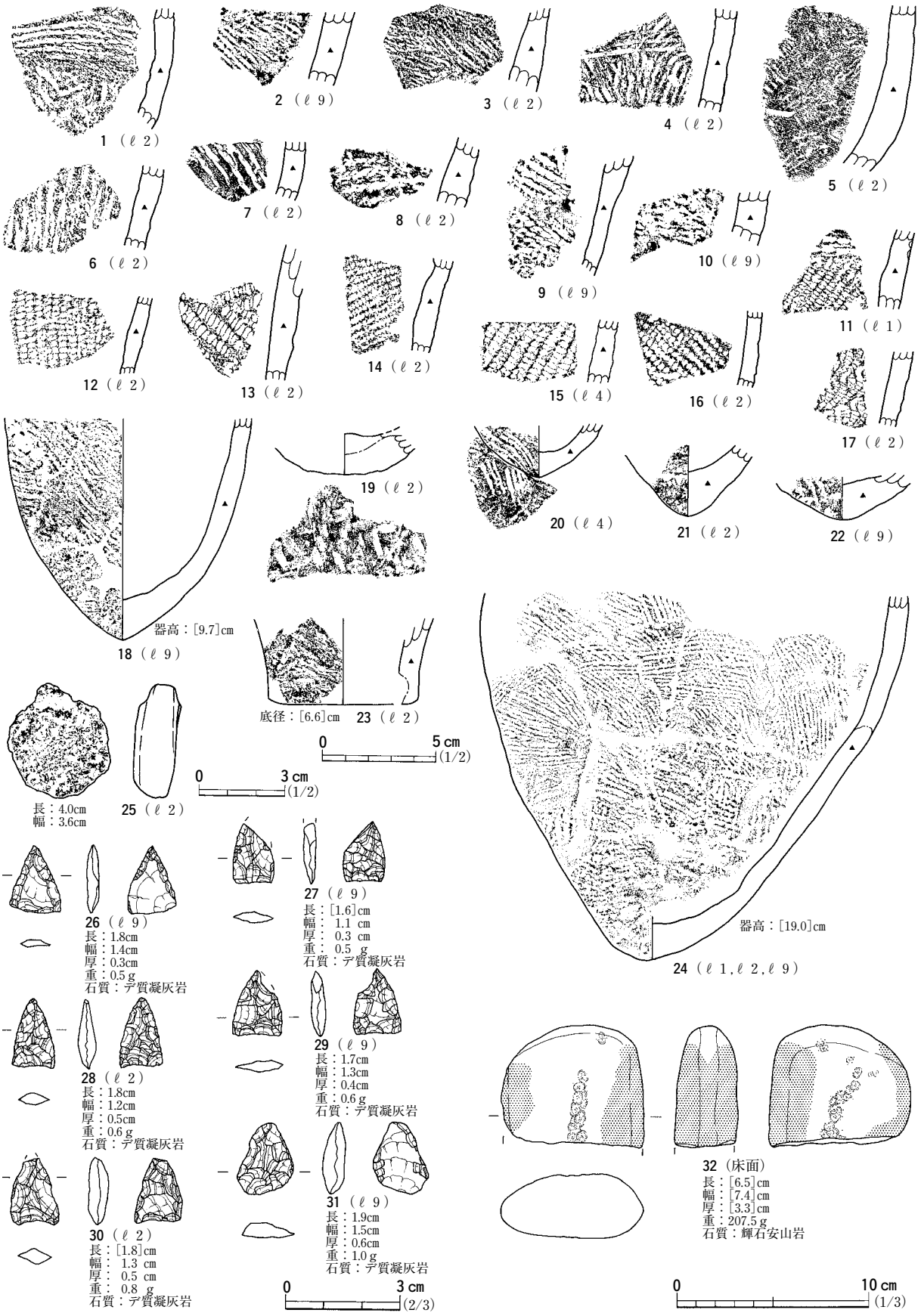


図27　５号住居跡出土遺物（４）

は縦走する縄文地に斜方向の沈線を施文し，鋸歯状文を描く。17～21は体部下半の資料である。

図26・図27－１～10は撚糸文－擦痕または無文の胴部破片をまとめた。図26－１～18，図27－１～10は内面が擦痕のもの，図26－19～25は内面が無文のものである。

図27－11～17は縄文時代前期の土器である。胎土に繊維混和痕が認められる。内面は特に平滑に仕上げられている。11は無文部に半截竹管により横位の押引きを施し，下位には斜縄文を施文する。17は重層ループ文を施文した土器片である。それ以外は地文の縄文のみ認められる。

図27－18～24は土器底部をまとめた。18～22・24は丸底・尖底土器である。19は丸底の底部に網代痕が認められる資料である。23は小破片であるが平底になると推定される。

図27－25は土器片製円盤である。深鉢の胴部破片を円形に成形している。器面は荒れているため施文具は確認できない。裏面は無文である。

図27－26～32は石器を図示した。26～31は石鏃，32は礫石器である。26～27は平基無茎である。30は凹基無茎である。26は両面に大きく剥離面を残して，縁片部にのみ微細な剥離を施している。27・28・30は先端が欠損している。31は剥離も疎らで形態も整っていないことから，未成品であると思われる。32は中央部付近に敲打痕，側縁部に磨部が認められる。本資料の半分は欠損している。

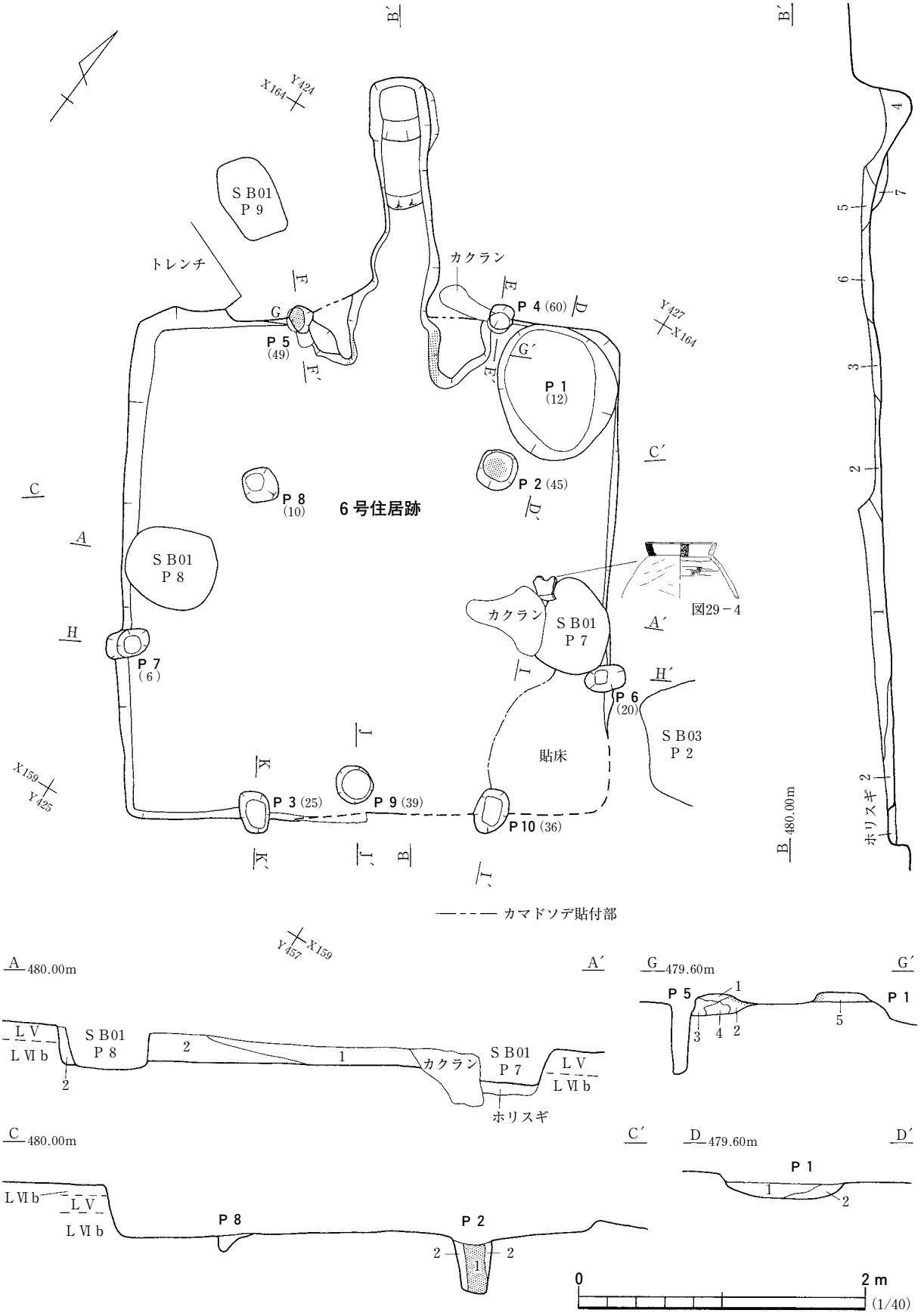
ま　と　め　本遺構は東壁が認められないが，平坦であった部分を床面と推定した。この推定部と遺存部から推測して，本遺構は長方形に造られた竪穴住居跡であると判断した。サブトレンチを適宜設定し，重複遺構であることも考慮して調査を進めた。壁面や床面の段差や堆積土の差異が認められなかったことから１軒と判断した。本遺構の一部は調査区から外れているために全体の平面形を理解することはできない。遺存規模は4.4×3.1ｍを測る。床面には多量の炭化物・焼土塊が認められた。検出状況から本住居跡廃棄とそれほど時間を空けずに投棄されたものと判断している。住居内施設は２基のピットのみ認められた。Ｐ２は位置や規模，断面形から柱穴と判断した。炉跡は検出できなかった。

本遺構からの出土遺物は若干早期後半と前期前葉の時期の土器が混入しているが，ほとんどは縄文時代早期末葉～前期初頭の土器である。器形が復元できる資料で，人為堆積土であるℓ９より出土する遺物の多くは縄文時代早期末葉大畑Ｇ式期の土器であることから，本遺構はこの年代のものであると推定できる。（三浦）

６号住居跡　ＳＩ06（図28・29，図版21～24・125・142）

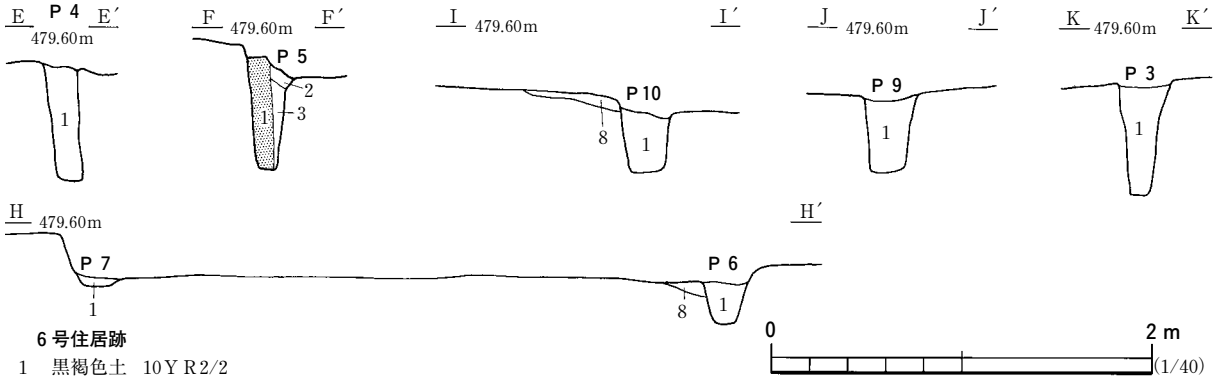
遺　　構　Ｙ・Ｚ28グリッド，ＬＶ面で確認した。東方向に下がる緩斜面上に位置する。本遺構は１号掘立柱建物跡の南部分，３号掘立柱建物跡の西部分と重複し，３号建物→６号住居→１号建物と変遷する。遺構内堆積土はカマド部分を含めて７層に分けられ，堆積状況から自然流入によって埋没したと判断できる。

カマドを基準とする遺構の主軸は，北北西方向を向き，遺構の立地する斜面の傾斜方向とほぼ一致する。遺構のプランは正方形に近く，約3.5ｍ四方を測る。平面積は約12.3㎡である。



B′
B′
Y424
X164
S B01
P 9
トレンチ
カクラン
P 4 (60)
Y427
X164
P 5
(49)
P 1
(12)
P 2 (45)
P 8
(10)
6 号住居跡
S B01
P 8
カクラン
S B01
P 7
図29－4
P 7
(6)
P 6
(20)
S B03
P 2
貼床
X159
Y425
P 3 (25)
P 9 (39)
P 10 (36)
B 480.00m
ホリスギ
カマドソデ貼付部
Y457
X159
A 480.00m
A′
G 479.60m
G′
P 5
P 1
L V
L Ⅵ b
S B01
P 8
カクラン
S B01
P 7
L V
L Ⅵ b
ホリスギ
C 480.00m
C′
D 479.60m
D′
P 1
L Ⅵ b
L V
L Ⅵ b
P 8
P 2
0
2 m
(1/40)

図28　６号住居跡（１）



6号住居跡

1　黒褐色土　10Y R2/2
2　黒褐色土　10Y R2/3
3　暗オリーブ褐色土　2.5Y 3/3（炭化物・焼土含む）
4　オリーブ褐色土　2.5Y 4/3（炭化物多量含む）
5　暗オリーブ褐色土　2.5Y 3/3（炭化物・焼土含む）
6　黒褐色土　10Y R2/2（焼土含む）
7　黒褐色土　10Y R2/2（しまり強）
8　黒褐色土　10Y R3/2（黄褐色土との混土，しまり強：貼床）

カマドソデ

1　明黄褐色砂質土　10Y R6/6（暗褐色土との混土，しまり強）
2　黒褐色土　10Y R2/3（黄褐色土との混土，しまり強）
3　褐色土　10Y R4/4（焼土多量含む混土，しまり強）
4　明黄褐色砂質土　10Y R2/1（暗褐色土との混土，しまり強）
5　暗オリーブ褐色土　2.5Y 3/3（暗褐色土との混土，しまり強）

P 1　1　暗褐色土　10Y R3/3（炭化物含む）
　　2　黒褐色土　10Y R2/3（炭化物含む）
P 2　1　黒褐色土　10Y R2/3（しまり弱）
　　2　黄褐色砂質土　2.5Y3/4（暗褐色土との混土，しまり強）
P 3　1　オリーブ褐色土　2.5Y4/3（暗褐色土との混土）
P 4　1　黒褐色土　10Y R2/2（しまり弱）
P 5　1　暗褐色土　10Y R3/3（しまり弱）
　　2　黒褐色土　10Y R3/3（黄褐色土との混土，しまり強）
　　3　黄褐色土　2.5Y 5/6（暗褐色土との混土，しまり強）
P 6　1　暗褐色土　10Y R3/3（しまり弱）
P 7　1　暗褐色土　10Y R3/4（しまり弱）
P 8　1　黒褐色土　10Y R2/3（焼土含む混土）
P 9　1　黒褐色土　10Y R2/2（黄褐色土との混土）
P10　1　黒褐色土　10Y R2/3（黄褐色土との混土）

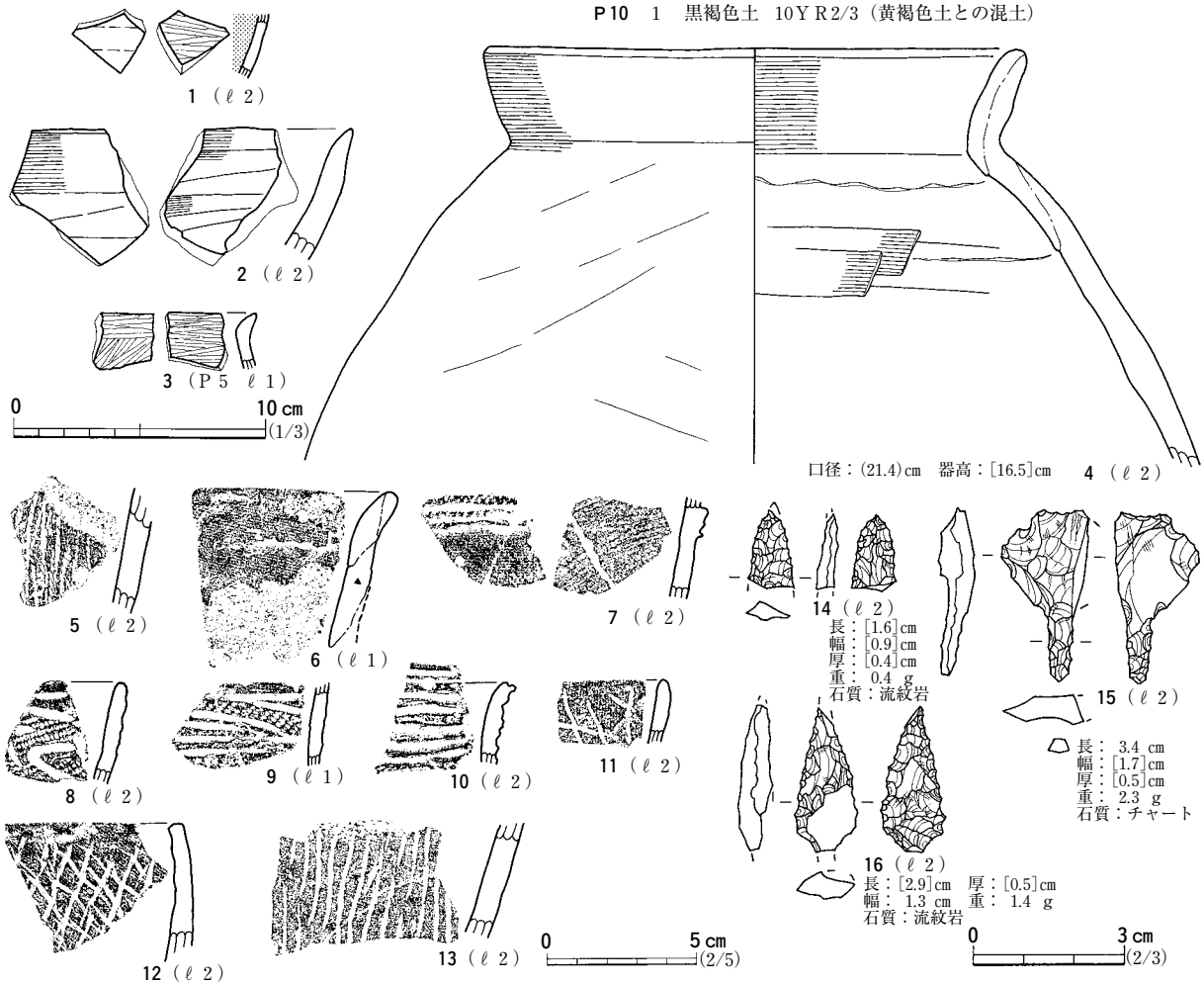


図29　6号住居跡（2）・出土遺物

柱穴は９個確認され，掘形の規模からＰ２及び壁際に位置するＰ３・Ｐ10の３個が主柱穴と考えられる。Ｐ８は位置的に３基の主柱穴に対応するが，掘り込みが著しく浅い。Ｐ４～Ｐ７は壁柱穴であり，位置関係はシンメトリーとなる。Ｐ９は南壁中央やや内側に存在し，位置的に入口施設の一部である可能性を有する。Ｐ２・Ｐ５からは柱痕が確認され，それぞれ直径13㎝・９㎝を測る。

遺構の北東隅には楕円形のＰ１が存在する。堆積土は流入したものであり，本ピットは住居廃棄時には開口していたと考えられる。また，遺構南東隅のみ貼床が確認される。

カマドは北壁のほぼ中央に構築され，煙道は斜面上位に向かって伸びる。カマドソデの遺存状況は良好でないが，燃焼部両端，左右ソデには被熱が認められた。煙道は住居北壁から長さ約1.7ｍを測る。煙道底面は燃焼部から一度緩やかに上がり，煙道中程から煙出し穴に向かって下がってゆく，煙出し穴の底面は煙道より一段低く作られる。

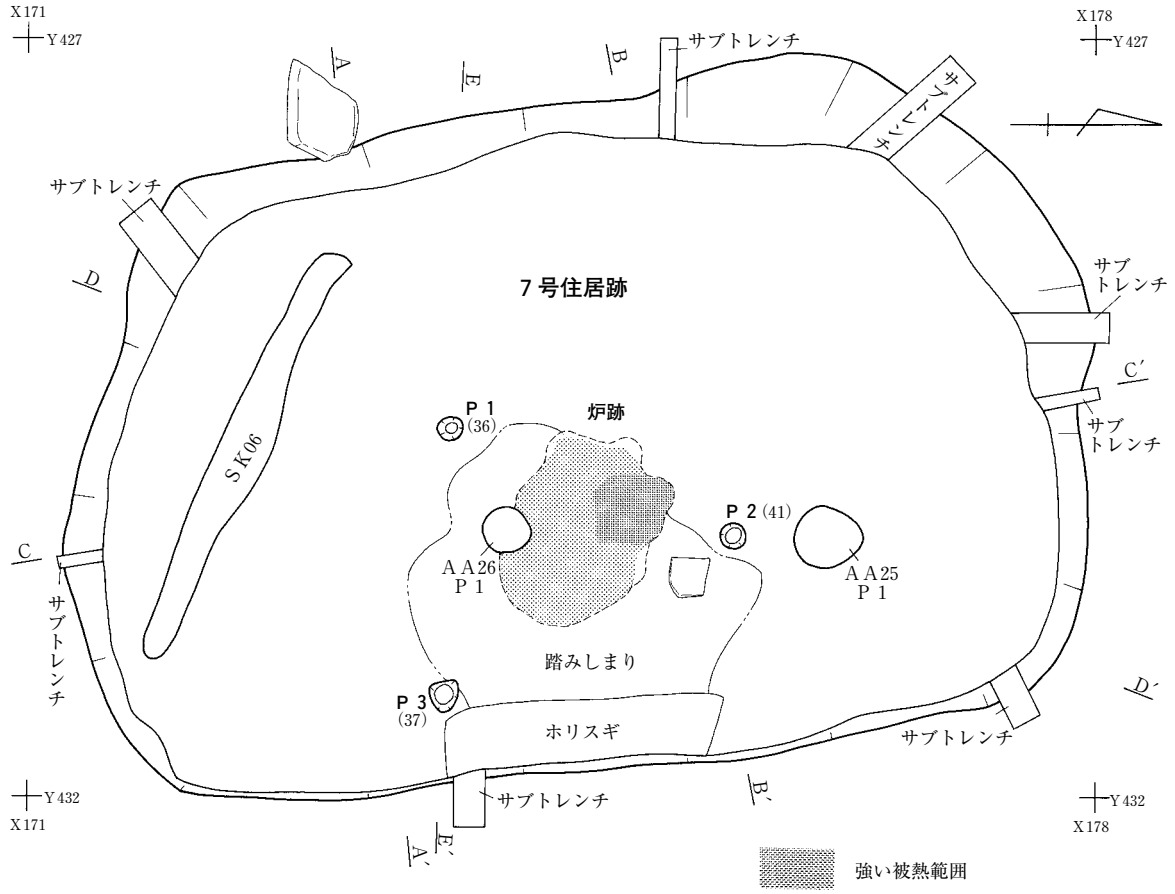
遺　　物　すべて堆積土中から出土し，土器はすべて破片資料である。図29－１～４は土師器である。１はロクロ成形の杯，２は非ロクロ成形の大型杯あるいは鉢であろう。３は小型の甕と考えられ，内外面とも丁寧なミガキが観察される。４は大型・粗製の甕あるいは壷である。

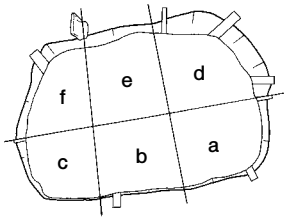
図29－５～13は縄文土器である。５は早期前葉の撚糸文系土器であり，疎らな撚糸文，比較的厚手の器厚が観察できる。６は早期前葉～中葉の無文土器である。口縁部は強く外反し，肥厚する。内外面ともナデで整えられるが，口縁部外面には粘土を貼り付けた痕跡が明瞭に残る。胎土には多量の繊維が混和され，砂粒を多量に含む。７は早期後半の土器である。隆帯が横位に巡り，この隆帯上には２条の絡条体圧痕が平行に付される。内面には弱い条痕が認められる。８～13は縄文時代晩期中葉の土器である。８・９は精製土器であり，雲形文が観察される。10は半精製，11～13は撚糸文が施文された粗製土器の破片である。14は石鏃の尖頭部片，16は有茎の石鏃，15はつまみを有する石錐である。

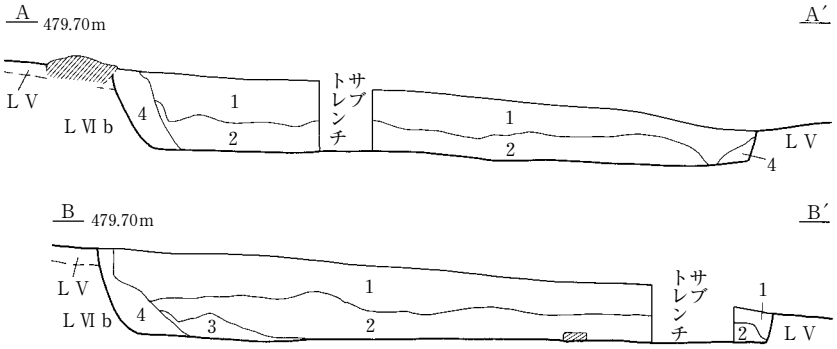
ま　と　め　本遺構は一辺約3.5ｍ四方の小型竪穴住居跡である。長い煙道を有するカマド，及び壁面沿いに位置する主柱穴が特徴的である。ほぼ同時代の１号建物跡，縄文時代晩期の３号建物跡とは重複関係にある。遺構の機能年代については判断する材料に乏しいが，出土した土器の特徴，及び周囲の遺構の年代観から奈良時代後半～平安時代初頭としておきたい。　（横須賀）

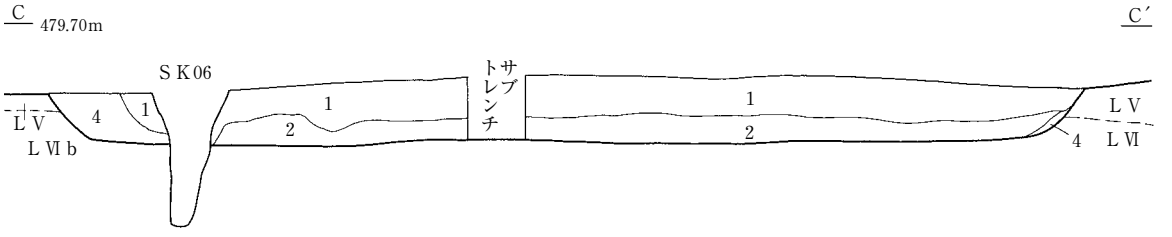
７号住居跡　ＳＩ07（図30～34，図版25～28・129・131）

遺　　構　本遺構はＺ25・26，ＡＡ25・26グリッドに位置する。地形は黒森川に向かって僅かに下る傾斜地であるが，概ね平坦である。検出状況は，ＬⅣ面からぼんやりとした黒褐色土の大きな広がりが認められた。大きな広がりであったため遺構の重複関係も考慮に入れ，南北方向にトレンチを設定した。その結果，トレンチ中央部付近の底面から炉跡と考えられる焼土面が認められた。また，トレンチの底面は段差が認められず層の差異も認められないことから１軒の竪穴住居であると判断した。当初の検出で明確でなかった北壁・東壁の再検出を行い，平面形を確定した。検出面はＬＶ面で，暗褐色の楕円形として確認した。しかし遺構内堆積土と検出面が類似した土色であった







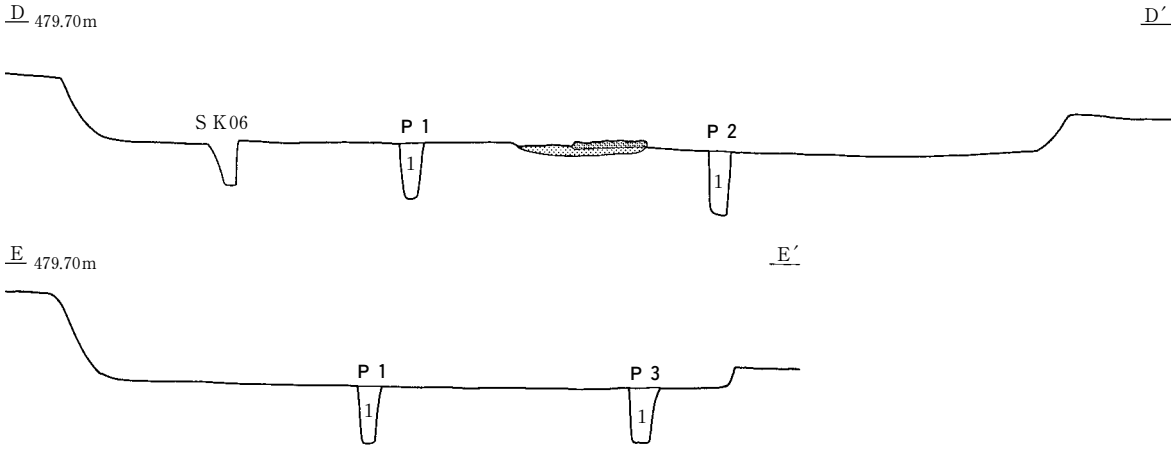


7号住居跡

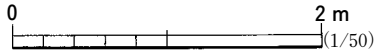
1　黒褐色土 10YR2/3（焼土塊との混土，花崗岩粒多量含む）
2　黒褐色土 10YR2/3（焼土塊との混土，花崗岩粒多量含む）
3　黒褐色土 10YR2/3（褐色土塊との混土，花崗岩粒多量含む）
4　褐色土 10YR2/3（暗褐色土との混土，花崗岩粒多量含む）

0　2m
(1/50)

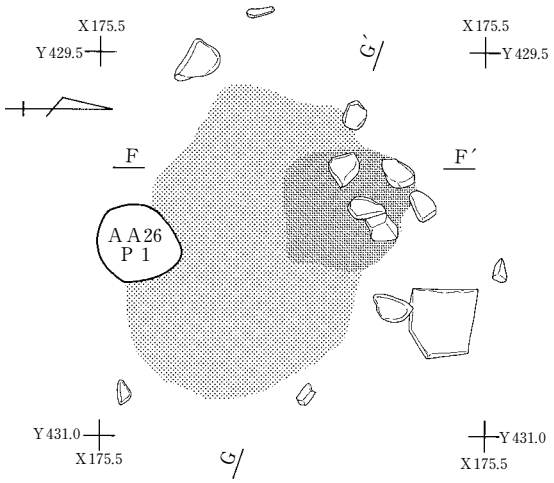
図30　7号住居跡（1）



Ｐ１　１　黒褐色土 10ＹＲ2/2（炭化物極少量含む）
Ｐ２　１　黒褐色土 10ＹＲ2/2（炭化物極少量含む）
Ｐ３　１　黒褐色土 10ＹＲ2/2（炭化物極少量含む）

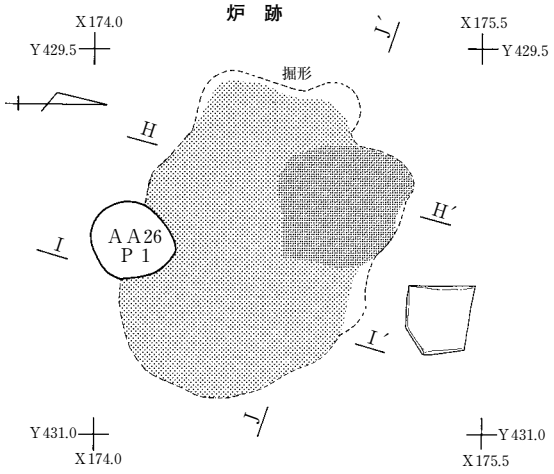


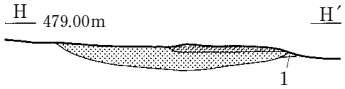
炉跡遺物出土状況



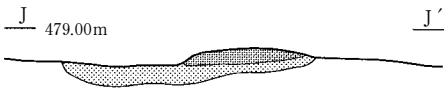
強い被熱範囲

炉　跡





炉跡　１　黒褐色土 10ＹＲ2/2（炭化物極少量含む）



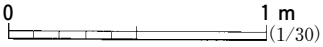


図31　７号住居跡（２）

ため，その都度サブトレンチを設定し壁面の確認をしながら調査を行った。本遺構の平面形を明確にするために検出面を下げて確認したが，遺構本来の掘り込み面はⅬⅣ面であると推測する。本遺構では1基の土坑と2個のグリッドピットとの重複関係が認められた。これらの遺構と本遺構との新旧関係は，本遺構よりも6号土坑が新しく本遺構の床面を破壊している。また，検出面上での確認はできなかったが，炉の一部を破壊していることからグリッドピット2個も本遺構よりも新しい遺構であると判断した。

遺構内堆積土は4層に分層した。大別すると2つに分類できる。ℓ1～3は人為堆積土である。黒褐色土を主体として褐色土ブロック，焼土ブロックが含まれる層である。ℓ4は壁面に沿って認められる層で，流入による堆積土であり自然堆積と判断した。花崗岩粒を含み硬く締まる層で住居壁との区別は困難であった。そのため適宜サブトレンチを設定し，壁面と堆積土とを確認しながら掘り進めた。

本遺構の平面形は長軸を南北にもつ楕円形である。東壁の2隅はきれいな隅丸を呈するが，西壁の2隅は一様ではない。平面形の規模は中央長軸線上6.9m，中央短軸線上4.4mである。床面の平面形も楕円形である。床面の規模は中央長軸線上6.2m，中央短軸線上4.1mを測る。床面は平坦である。部分的にⅬⅥ砂礫層が露出していた。床面ほぼ中央東寄りには炉跡が位置している。炉跡周囲には踏み締まりによる不整方形の硬化面が存在する。硬化範囲は一点鎖線で図示したが，炉の周囲から斜面下方に位置する東壁際までに及ぶ。硬化面東側から東壁にかけて床面の一部を掘りすぎてしまったが，これは硬化面と硬化していない床面の硬さの差が顕著であり，床面であることを気付かずに掘りすぎてしまったミスである。

本遺構の施設であるピットは3個検出した。Ｐ1・2は円形で径16cm前後である。Ｐ3は三角形状で，径は20cm未満である。床面からの深さは35～40cmである。断面形はピット底面に向かって窄まる。本遺構の大きさから数多くのピットの存在を考慮して幾度も精査を行ったが，その他のピットを認めることはできなかった。東壁ではほぼ垂直に立ち上がり，残りの良い部分で20cmを測る。南西北壁は緩やかに丸みを帯びながら立ち上がる。西壁が最も遺存が良く検出面まで63cmを計測する部分がある。

炉跡は本遺構中央部やや東寄りに位置する。炉跡の検出時，この周囲にのみ礫が検出されることから炉の施設である可能性を含めて調査を行った。その結果，礫と焼土面との間にℓ2が挟まれていること，礫には熱を受けた痕跡が認められないことから，本遺構廃棄時に炉の上面や周囲に意識的に投げ込んだ礫であると判断した。炉の平面形は不整形で，長軸は東西方向である。焼け面全体の長軸は120cm，短軸は95cmを測る。全体的に強く硬化している。焼け面の北側にはさらに強く焼けている僅かに盛り上がる円形部分が確認できる。炉跡の構造把握のため断ち割った結果，床面を掘り込んで造られていることが確認できた。炉を構築する際に掘り込んだ窪地に多量の焼土塊を投棄して，炉として使用していた様相が伺えた。また，焼土面とさらに強い焼土面には硬化状況や色調などの明確な差異が認められた。

遺　　物　本遺構内から出土した遺物は縄文土器片564点，石器195点である。出土する遺物の多くはℓ１・２から出土している。また，床面・炉面からも若干ながら土器片が出土している。堆積土中から出土する土器片は，縄文時代早期前葉から縄文時代晩期中葉までの多時期にわたって出土している。床面及び炉面から出土する土器片は縄文時代早期中葉の土器片に限られる。石器は剥片石器・礫石器共に出土している。剥片石器は堆積土中から出土しており本遺構廃棄の際の堆積土に紛れ込んだものと考えられる。石皿を初めとした礫石器は主に床面からの出土である。内訳は本遺構検出時に設定したトレンチから縄文土器片85点，石器類２点。ℓ１からは縄文土器片230点，石器類74点。ℓ２からは縄文土器片238点，石器類115点。（床面直上で縄文土器片３点），床面で縄文土器片２点，石器類２点。炉からは縄文土器片６点，石器類２点が出土している。このうち図示した遺物は縄文土器片90点，石器11点である。

図32－１～３は縄文時代早期前葉の撚糸文系土器群に含まれる一群である。いずれも器壁は薄く，胎土は緻密である。１は口縁部資料で，口端部が若干肥厚している。口端部は無文であり，その下位には縦走する撚糸文が確認できる。２・３は胴部破片である。縦走する撚糸文が施文される。

同図４～９は絡条体圧痕文が施文された土器である。胎土には繊維を含まない。４・５は口縁部破片である。いずれも体部には絡条体圧痕が認められる。４の口端部上面には絡条体圧痕が施文され，５の口端部上面には刺突が認められる。９は弧状に施され，柔かい軸を使用している。

同図10～17・26は文様主体が押引文である。10～13・14・16は口縁部資料である。いずれも口端部上面には刺突が認められる。９・12・14は施文具が半截竹管，10・11・13は櫛歯状工具による押引文である。15～17はヘラ状工具の角による施文であろうか，三角状の刺突に近い押引文である。12は３条の押し引き沈線の下位に，沈線が認められる。16は波状口縁であり，押引文と沈線文と交互に施文している。

同図18～25は貝殻側面圧痕文である。18・20・21・23・24は口縁部資料である。18～22は平坦な貝殻を使用している破片である。18は金雲母を顕著に含む胎土を使用している。21は無文の口縁部下位には隆帯状に形成された部分に貝殻による刻みを施文している。20は口端部に粘土紐が貼り付けられ，肥厚する口端部である。23・24は肋脈のある貝殻を使用している破片である。23は波状口縁である。24は口端部が肥厚し，外反する器形である。

同図27～34は沈線を施した土器である。25・30は細沈線による施文。27・28は胎土や文様から同一個体である。胎土は精製され，丁寧に製作された感じを受ける。33は太い沈線を横方向に施文している。34は横方向の貝殻沈線を２条施文した下位に波状の沈線を施している。

同図35～52は外面に条痕文及び擦痕が認められ，内面は無文である土器片である。46～52は胎土や器壁の厚さから同一個体と判断した。

図33－１～17は無文土器である。

同図18～20・25は条痕－条痕文土器である。18～20はすべて貝殻を使用している。18は口縁部資料である。口端部には半截竹管により刺突を施している。19は条痕施文後，縦位の半截竹管刺突を施

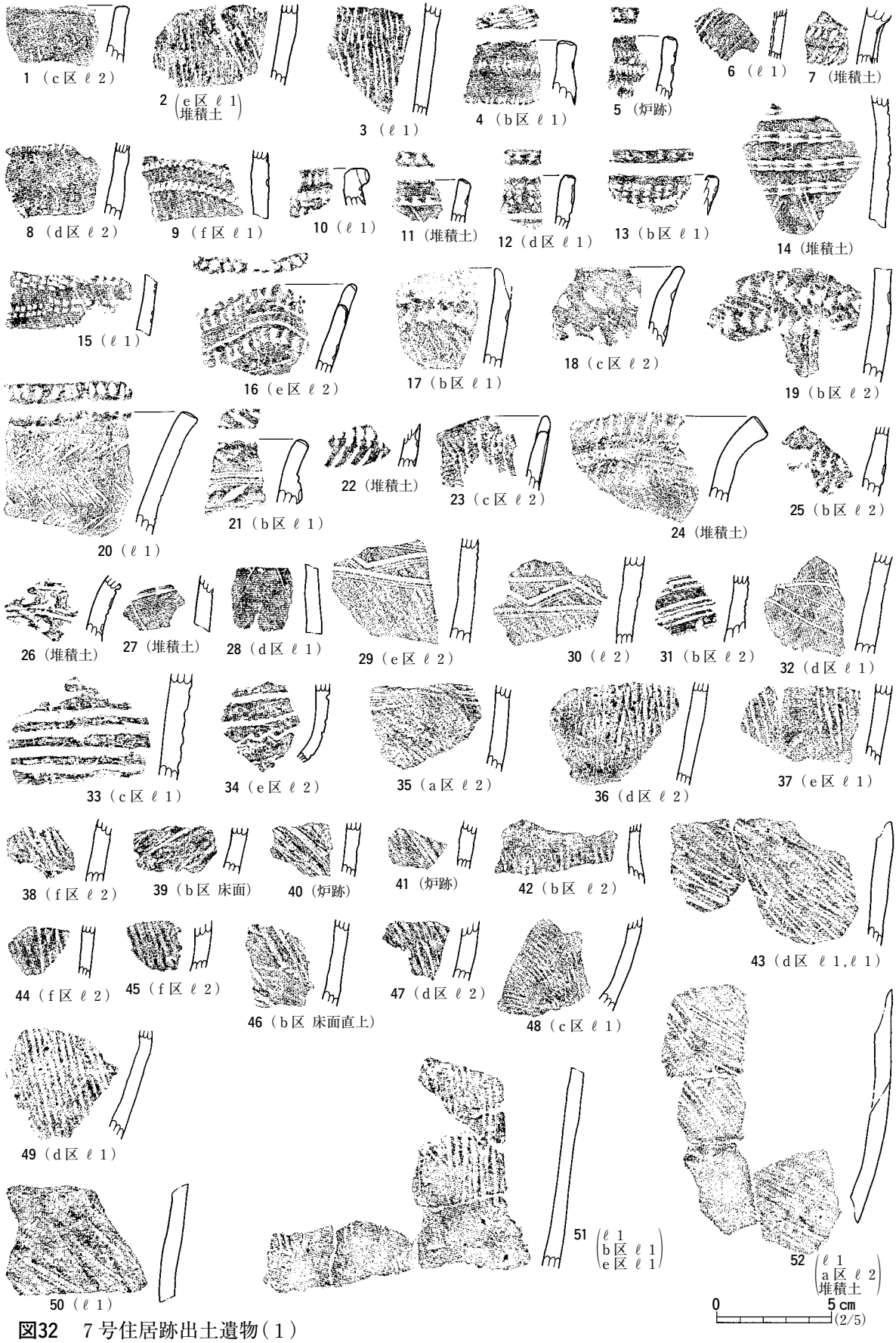


図32　7号住居跡出土遺物（1）

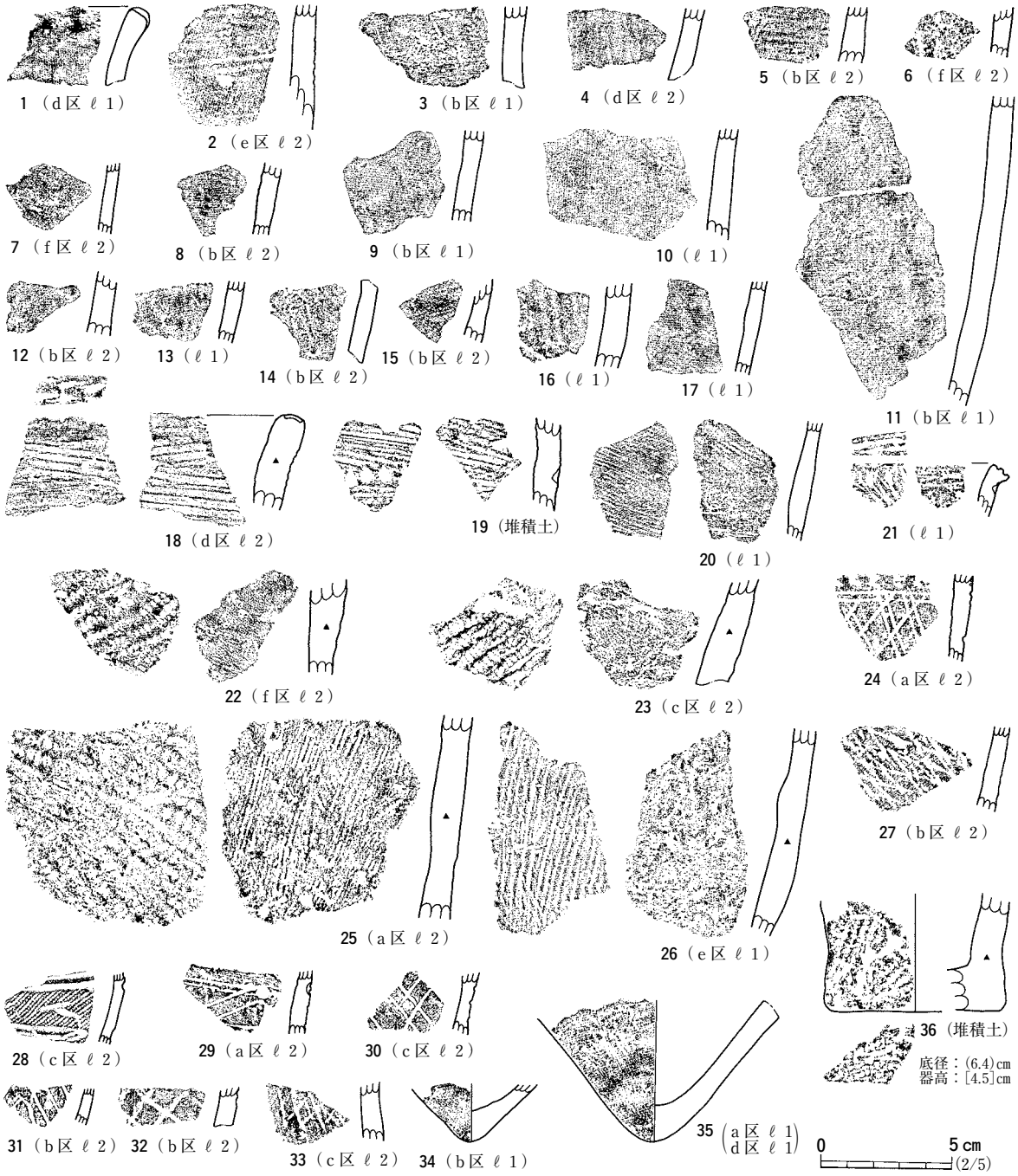


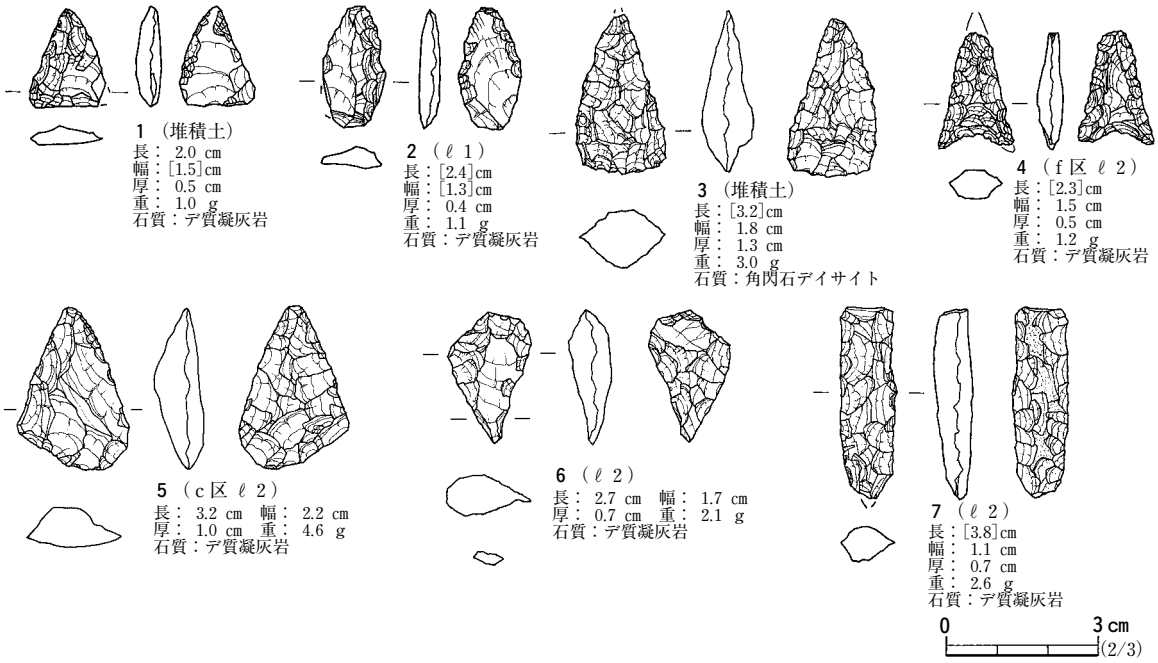
図33　７号住居跡出土遺物（２）

している。21・26は絡条体条痕文土器である。同図22・23・25は縄文－条痕文土器である。

同図24は半截竹管刺突の下位に網目状沈線を施文している。早期中葉の土器の可能性がある。

同図27～33は縄文時代晩期中葉の土器片である。28・29は口縁部に近い胴部資料である。27・30～33は網目状撚糸文が施文された土器片である。

同図34～36は底部資料である。34・35は胎土が密で良く精製されている点や繊維混和痕が認められない点から縄文時代早期中葉の尖底土器である。36は平底土器で，外面・底面に縄文が施される。胎土に繊維混和痕が認められることから，縄文時代早期後葉～末葉頃の土器片である。しかし，ト



1（堆積土）
長：2.0 cm
幅：[1.5]cm
厚：0.5 cm
重：1.0 g
石質：デ質凝灰岩

2（ℓ1）
長：[2.4]cm
幅：[1.3]cm
厚：0.4 cm
重：1.1 g
石質：デ質凝灰岩

3（堆積土）
長：[3.2]cm
幅：1.8 cm
厚：1.3 cm
重：3.0 g
石質：角閃石デイサイト

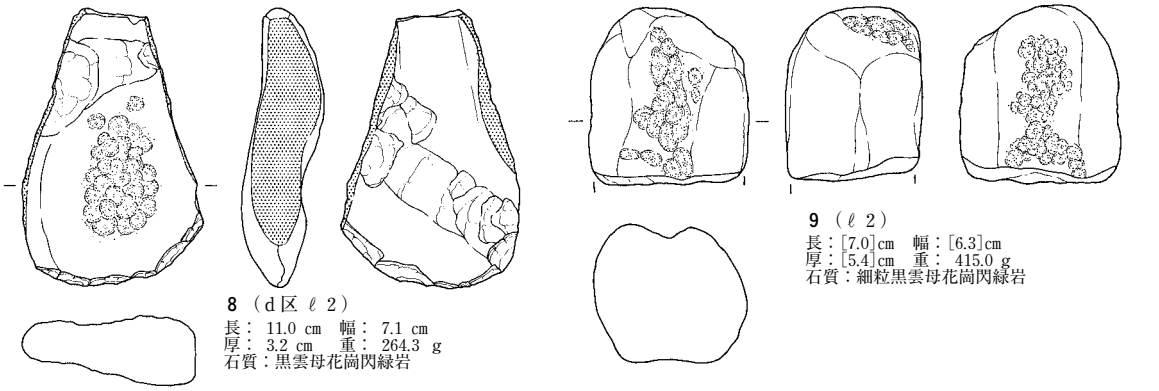
4（f区 ℓ2）
長：[2.3]cm
幅：1.5 cm
厚：0.5 cm
重：1.2 g
石質：デ質凝灰岩

5（c区 ℓ2）
長：3.2 cm　幅：2.2 cm
厚：1.0 cm　重：4.6 g
石質：デ質凝灰岩

6（ℓ2）
長：2.7 cm　幅：1.7 cm
厚：0.7 cm　重：2.1 g
石質：デ質凝灰岩

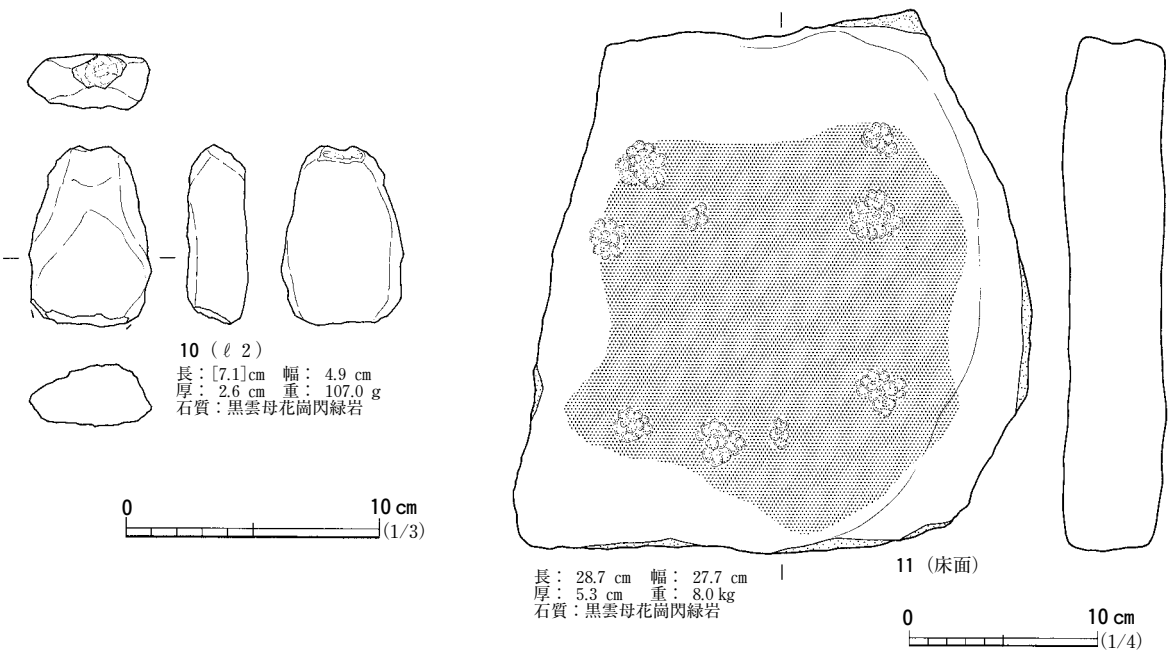
7（ℓ2）
長：[3.8]cm
幅：1.1 cm
厚：0.7 cm
重：2.6 g
石質：デ質凝灰岩

0　3 cm
(2/3)



8（d区 ℓ2）
長：11.0 cm　幅：7.1 cm
厚：3.2 cm　重：264.3 g
石質：黒雲母花崗閃緑岩

9（ℓ2）
長：[7.0]cm　幅：[6.3]cm
厚：[5.4]cm　重：415.0 g
石質：細粒黒雲母花崗閃緑岩



10（ℓ2）
長：[7.1]cm　幅：4.9 cm
厚：2.6 cm　重：107.0 g
石質：黒雲母花崗閃緑岩

0　10 cm
(1/3)

11（床面）
長：28.7 cm　幅：27.7 cm
厚：5.3 cm　重：8.0 kg
石質：黒雲母花崗閃緑岩

0　10 cm
(1/4)

図34　7号住居跡出土遺物（3）

レンチからの出土であり，紛れて混入した可能性も否定できない。

図34は石器を図示した。１～５は石鏃，６・７は石錐，８～11は礫石器である。１は無茎平基である。裏面には主要剥離面を大きく残している。２は石鏃未製品である。表裏面に大きく剥離面を残す。３は無茎平基である。断面形状はかなり厚い。僅かに先端を欠損している。４は無茎凹基石鏃である。きれいな２等辺三角形であるが，先端は大きく欠損している。５は基部が丸みを帯びた形態である。６はつまみ部をもつ石錐である。７は棒状の石錐であるが，ドリル部先端は欠損している。

８は多様な用途に用いられた石器である。刃部が形成されていた痕跡が残り，打製石斧として使用していたようである。敲打痕や磨部は，おそらく打製石斧としての使用に耐えなくなったために，転用した痕跡であろうと考えられる。両面とも薄く剥離を施して握りやすく成形していることもその傍証となろう。９は欠損しているが，３面に敲打痕が認められる。

10は形状より打製石斧と考えられるが，石材の風化が激しく加撃方向は不明である。11は炉跡の傍らに置かれていた石皿である。中央部に大きな磨面が認められ，所々敲打痕も認められる。

ま　と　め　本遺構は長軸方向を南北にもつ７×４ｍの楕円形の竪穴住居跡である。遺構の内外・壁面を明確にするためにサブトレンチを適宜設定しながら調査を行った。非常に遺存が良く検出面から床面まで60㎝を超える壁が認められた。

住居内施設は炉跡とピット３個を確認した。炉跡は1.2×１ｍと大きい。床面を皿状の土坑のように掘り込んで，焼土塊を床面まで埋めている。炉跡には焼土面とさらに強い被熱を受けた焼土面が認められる。便宜的に焼土面を焼土面ａ，強い被熱を受けた焼土面を焼土面ｂと呼称する。焼土面ｂは焼土面ａの構築とは異にして，焼土面ａ上に構築した状態であった。明確に異なる２種の焼土面に時期差があるのか明確ではない。炉の使用方法についても２種の焼土面は焼土の厚さなどに差異は認められるものの，ピットや礫などを用いた付属施設が認められなかったことから異なる使用をしていたとも言及できない。

本遺構のような大型住居跡にしてはピットの数量が少ないことから何度も精査をして検出に努めたが，３個以外確認できなかった。そのため本遺構の上屋構造を推察する材料は持ち合わせていない。検出できたピット３個とも規模や深さから柱穴と判断でき，断面形状より杭状の柱を打ちつけた柱であったと推測できる。その他，炉の周囲には明確な踏み締まりと判断できる硬化面を確認した。炉跡の周囲１ｍ程度まで硬化面が広がっていることから，炉を中心として生活する当時の状況が想像できる。この周囲以外に硬化面は認められず，出入り口などの推定はできなかった。

本遺構のような住居跡は類例が少なく，住居跡の形態より本遺構の時期を推測するのは困難である。そのため出土遺物から年代を推察するほかない。本遺構の出土土器は縄文時代早期中葉の土器片が最も多く出土しているが，縄文時代早期前葉～前期前葉・晩期中葉と多期にわたっている。遺物の多くは堆積土中からの出土であるが，図32－５・39～41は床面や炉からの出土遺物である。これらの土器片は小破片であるが，いずれも縄文時代早期中葉の土器片である。この事実を重視すれ

ば本遺構の時期は縄文時代早期中葉であるということになるが，他時期の遺物の混入が説明できない。早期中葉以前となる早期前葉の遺物の混入は理解できるが，早期後葉以降となる遺物の出土は理論づけられない。現場作業時においての遺物の取り上げミスや木の根による撹乱を考慮しても，縄文時代早期後葉～前期・晩期中葉の土器片は数量が多いと思われる。これらの土器片の多くはａ・ｂ・ｃ区から出土しているようである。これらの区は本遺構の東半分である。本遺構の東壁は検出時においても明確でなく，東壁が流失したと想定すれば本遺構よりも新しい遺物が出土する可能性はあるのではないか。上記のように他時期の遺物が出土している事実から本遺構の年代の推測は慎重に行うべきであるが，調査者の所見としては床面・炉出土遺物の年代観から，縄文時代早期中葉の可能性を考えておきたい。（三浦）

８号住居跡　ＳＩ08（図35，図版29・30・130・131）

遺　　構　Ｕ25グリッドＬⅣ′が確認面であり，遺構上面は地表面下90㎝，遺構底面は基盤層上25㎝の位置にある。本遺構は調査区壁際に位置し，遺構の南東端のみを確認したに過ぎない。本遺構の北側はやせ尾根が東方向に伸びており，本遺構周辺は尾根南裾部分に位置する。そのためこの周辺は堆積土が厚く，確認面であるＬⅣ′はＵ25グリッド周辺でのみ確認される層である。本住居の東側には時期的に併行する可能性の高い９号住居跡が存在する。

本遺構は調査区際に層位確認用のトレンチを入れた際，埋置されていた土器の底部を検出して確認した。しかし，当初は住居跡としてのプランを認識できず，検出した土器のみ位置・出土状況を記録して取り上げた。その後再び調査区際を基盤層まで下げ，断面によって住居跡として確認したものである。調査区内南東方向には遺構のプランが認められず，また埋置された土器を精査した際に記録した土層の状況から，本住居跡は遺構の東隅のみが調査区内に位置すると判断した。

断面上で確認される遺構上端幅は1.9ｍである。遺構の掘り込み面はＬⅣ′上面で，遺構上端から床面までの高さは30～37㎝を測る。堆積土の観察からは自然堆積であることが確認できる。住居跡に伴う施設などは確認していない。

遺　　物　１は住居跡の東隅床面に倒置された状態で出土した。底部は破断面の状態から故意に打ち欠いたものと考えられ，倒置された時点で既に欠損していたものと考えられる。２は１の内部に堆積していた土から出土している。出土状況から両者はセットで使用されていた可能性が高い。３・４は遺構内堆積土中からの出土である。

１は縄文時代早期後葉～末葉の深鉢である。底部から直線的に開く器形であり，口縁部は平縁，底部は欠損するが本来は平底である。器厚は１㎝前後と比較的厚い。内・外面には全面に絡状体条痕が観察され，外面口縁部周辺及び内面底部付近には煤の付着が顕著に認められる。口端部には沈線状の刻み目，口縁部口端部下には縦位，その下には矢羽状に短沈線を巡らす。文様を構成する沈線は一端(始点)が浅く，他端(終点)が深い。そのため口端部下の縦位の沈線は上→下，矢羽状の沈線は中→上・下へ施文されたものと考えられる。文様帯の幅は5.5㎝前後を測る。色調は褐色～黄褐

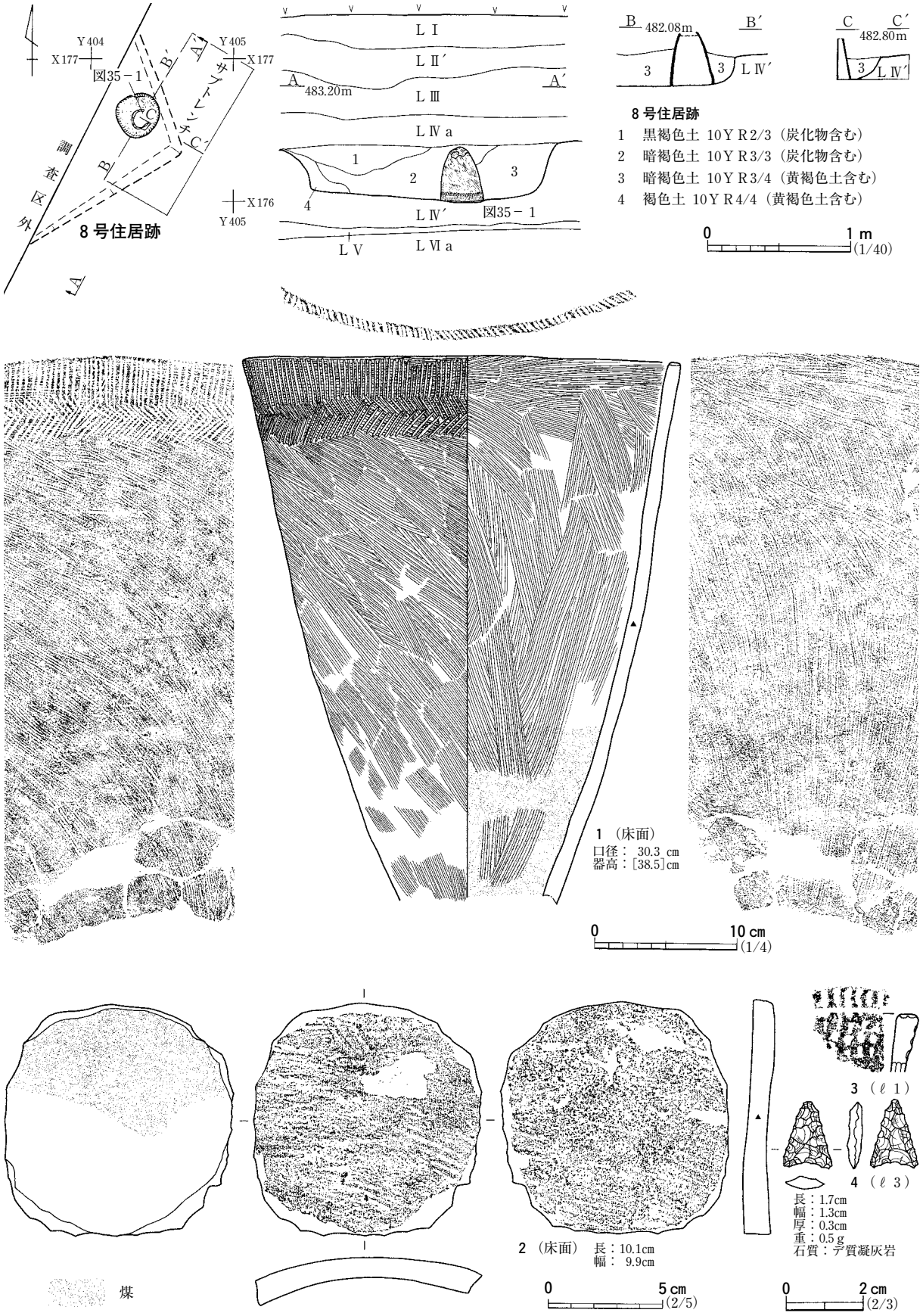


図35　8号住居跡・出土遺物

色，胎土には石英・長石粒を多く含む。

2は土器片を利用して円盤状に成形した土製品である。直径は9.5cmを測る。やや隅が張る円形を呈し，わずかに外面へ反っている。外面には弱い貝殻条痕が観察され，内面は擦痕で仕上げられる。周縁には所々で炭化している範囲が確認され，故意に熱を加えた結果と考えられる。また，外面の一部には煤が付着する。胎土・色調は1と共通する。

3は縄文時代早期中葉～後葉の土器である。口端部には貝殻圧痕によるキザミが巡り，口端部下には貝殻による押引文が施文される。4は凹基となる石鏃である。

ま　と　め　本住居跡は遺構の端部のみを確認し，全容については明らかとならない。特記すべきは底部が故意に欠かれ，内部に円盤状の土製品を含んだ状態で深鉢が伏せ置かれていた点である。土器の周辺に住居施設は確認できず，出土状態が住居跡機能時の土器の使用形態を反映したものとは考えられない。深鉢と円盤状の土製品との関係や，住居跡廃絶の際に深鉢を倒置した意味など検討すべき課題は多い。

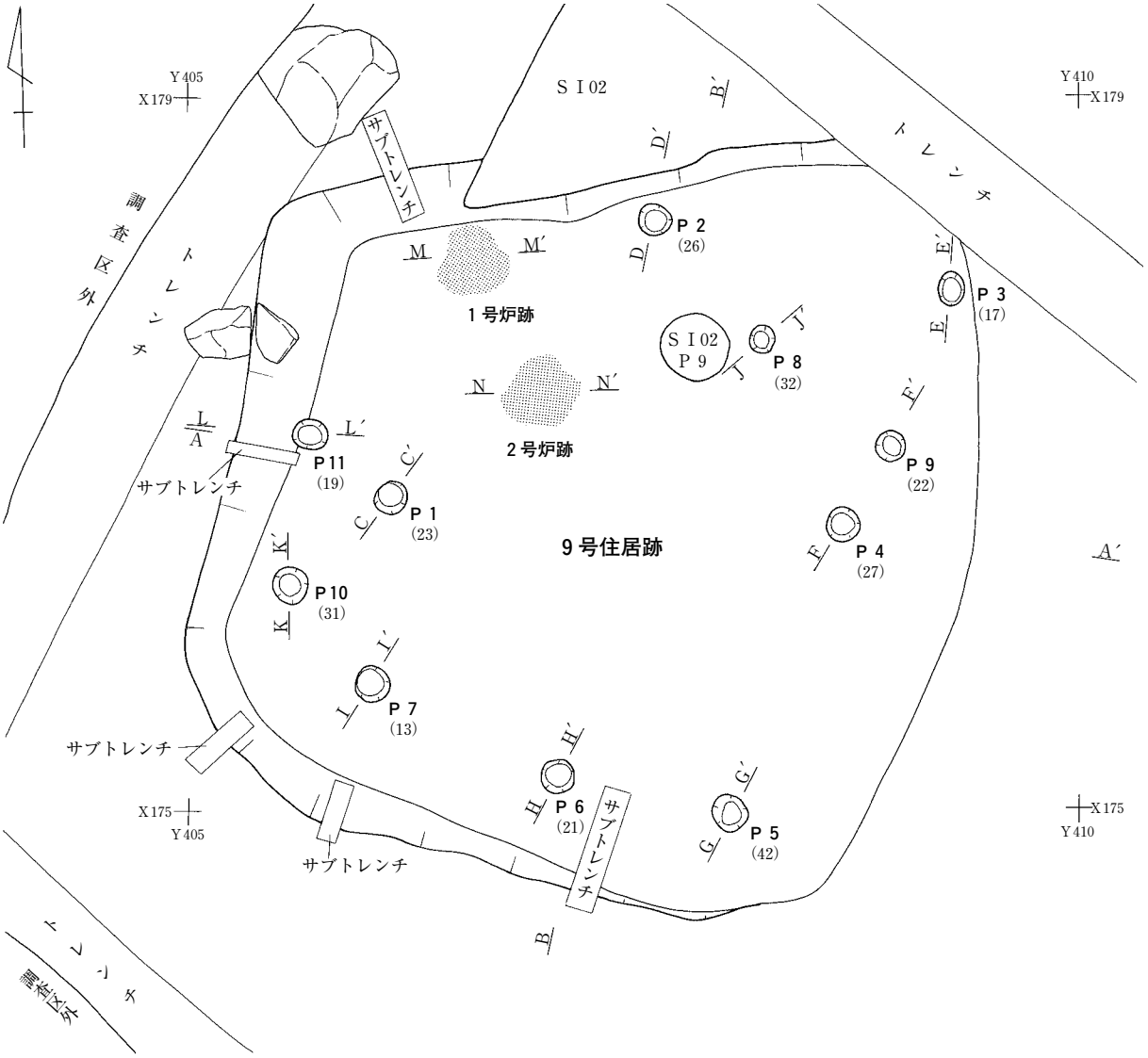
本住居跡の機能年代については，倒置されていた深鉢(図35－1)によって示される。この深鉢から抽出される胎土・色調・器厚・繊維の混和・内外面の絡条体条痕文といった諸属性は，本遺跡の遺物包含層から多量に出土した絡条体圧痕文が施文される常世2式土器群の一部と共通し，両者に大きな年代的な隔たりは考えられない。また，郡山市大槻八頭遺跡では同住居跡内で同様の体部に沈線文のみの土器と，沈線文と絡条体圧痕文が施文される土器が共伴し，両者の同時性を裏付けている。また図35－1には，外面に貝殻条痕文が施され厚手で繊維が混和された土器を材とした円盤状の土製品が伴出している。従って円盤状の土製品の材となった土器は，図35－1に示した深鉢より遡及するか少なくとも併行することは確実である。以上の理由から本住居跡の機能年代は縄文時代早期後葉～末葉常世2式の前後の段階としておきたい。なお，本住居跡内堆積土(ℓ2)から得られた炭化物については，放射性炭素年代測定を行っている(付編参照)。検出層位及び位置関係から隣接する9号住居跡とは時期的に併行，あるいは近接する可能性が高い。　　(横須賀)

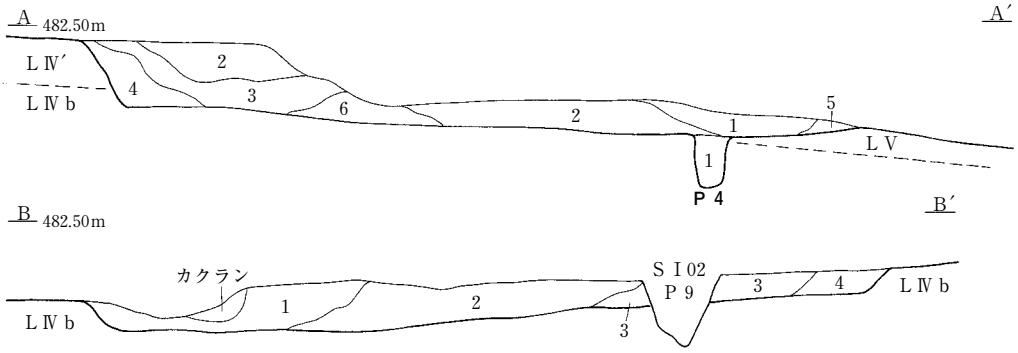
9号住居跡　ＳＩ09（図36・37，図版31・32・126・130）

遺　　構　Ⅴ25・26グリッド，ＬⅣ′及びＬⅣｂが確認面である。本遺構は，東西に伸びるやせ尾根の南裾に位置し，一部花崗岩の露頭がみられない範囲に構築されている。周囲は南東方向に下がる緩斜面となる。本遺構は検出層位を違えて古代の2号住居跡，縄文時代早期前葉の17号住居跡，及び15・17・18・25号土坑と位置的に重複する。

本住居跡の堆積土は6層に分かれ，自然堆積したものと判断できる。本住居跡は斜面下位がやや広がり，隅丸方形あるいは隅丸台形を基調としたプランとなる。東西長は4.2m，南北長は斜面上位が2.8m，斜面下位は4.2mを測る。平面積は約14.7㎡となる。遺構の西壁，斜面上位部分では検出面から36cmの深さを有する。

住居跡の床面からは柱穴11個，炉跡2基を検出している。柱穴は壁面に沿うように配置されてい





1号炉跡

M 482.00m M´

2号炉跡

N 482.10m N´

9号住居跡

1　黒褐色土　10ＹＲ3/2（炭化物含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/3（炭化物含む）
3　褐色土　10ＹＲ4/4（炭化物含む）
4　褐色土　10ＹＲ4/4（黄褐色土少量含む）
5　褐色土　10ＹＲ4/4（黄褐色土少量含む）
6　にぶい黄褐色土　10ＹＲ4/3（暗褐色土含む）

0　2 m
(1/40)

図36　9号住居跡（1）

る。すべて円形を基調とし，直径15～20cmが中心となる。床面からの深さは16～30cmを測る。炉跡は遺構の北西隅に並んで位置しており，両者とも直径40cm程の範囲が被熱していた。

遺　　物　すべて破片資料であり，堆積土中から出土したものである。図37に主なものを示した。

１・２は縄文時代早期後葉～末葉の深鉢である。１は中型の深鉢であり，本住居跡内から11片，遺物包含層中から14片が出土している。住居内から出土した土器片群はほぼ一ヶ所，同層位から集中して出土した。口端部は尖頭状，口縁部は平縁となり，外に大きく開く。体部はほぼ筒状に作られ，底部に至ってやや窄まるようである。器厚は比較的薄手に作られ，７㎜前後を測る。外面は口端部から8.5cm程が文様帯となり，上下を半截竹管による刺突列が付された細隆線によって区画する。文様帯内は横位の貝殻条痕が付され，その上に半截竹管による平行沈線文で斜格子の交差部に円形の文様を付したモチーフが施文されている。体部地文はＬＲ斜縄文である。口縁部内面には口端部直下に斜位，それ以下には横位の縄文を施文する。体部内面には貝殻条痕が付される。外面の口縁部周辺，内面の底部付近には煤の付着が顕著に認められた。胎土には長石や石英粒をやや多く含むが，焼成は良く，比較的堅緻である。

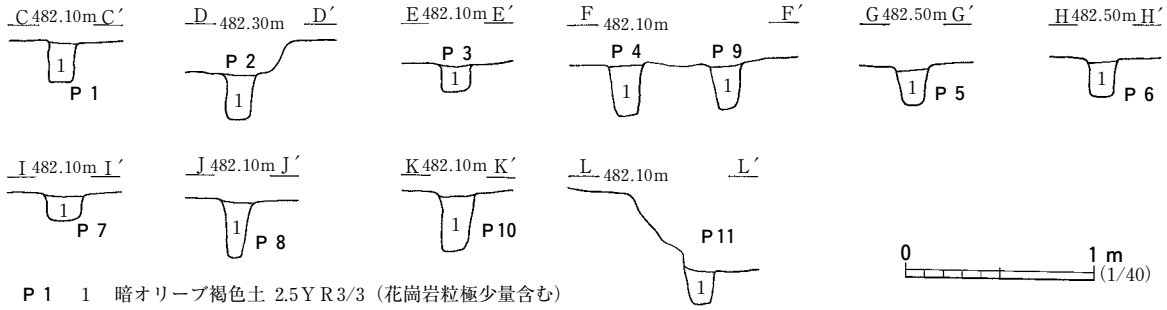
２は本住居跡内から２片，古代に属する２号住居跡内から１片，遺物包含層内から３片が出土している。口縁部は波状口縁となり，ほぼ直線的に外傾する。内外面ともに横位を基準とした絡条体条痕が認められる。口端部には格子状に沈線でキザミを入れ，外面口端部直下には口縁部の上方から棒状工具を刺突した短沈線状の文様を巡らす。波頂部下4.5cm程の位置には断面三角形状の隆帯が巡り，隆帯上には格子状に下(隆帯頂部)から上へ沈線を入れる。器厚は１cm程を測る。胎土には小礫を多く含み，至近に存在する８号住居跡から出土した深鉢と同質のものである。

３・４は縄文時代早期前葉の撚糸文系土器である。両者とも条間は比較的密となる。３は口縁部が肥厚し，わずかに外反する。口端部，及び内面口端部下は平坦状となり，丁寧なナデによって調整される。５～10は縄文時代早期中葉から後半の土器である。５は細沈線が横位多条に施文される。６は波状口縁となる無文土器で，口端部には貝殻頂部による刺突列が付される。７には刺突列及び押引文，８～10には押引文が施文され，10の内外面には貝殻条痕が付される。11・12は縄文時代早期後葉～末葉の土器である。11は平底の底部であり，外面は貝殻条痕が認められる。12は外面縄文，内面貝殻条痕が施文される。

13はつまみのある石錐であり，錐部は欠損している。

ま　と　め　本住居跡は方形プランを基調とし，一辺は４ｍ前後を測る。住居内床面に２基の炉跡と，壁面に沿う位置に柱穴が認められた。炉跡は床面の中心ではなく，壁際に並ぶように配置される。

本住居跡の機能年代については，明確な判断材料を持たない。ただし，古代に属する２号住居跡，及び早期前葉に属する17号住居跡と位置的に重複し，検出面が両者の中間に位置すること，検出面がＬⅣ′・Ⅳｂであること，及び隣接する８号住居跡と検出層位を同じくすることから早期後葉～末葉に属する可能性が高い。住居内から出土した土器片群はすべて流入資料であり，年代決定には使



Ｐ１　１　暗オリーブ褐色土 2.5ＹＲ3/3（花崗岩粒極少量含む）
Ｐ２　１　暗褐色土 10ＹＲ3/4（花崗岩粒極少量含む）
Ｐ３　１　暗褐色土 10ＹＲ3/4（花崗岩粒極少量含む）
Ｐ４　１　暗褐色土 10ＹＲ3/3（花崗岩粒極少量含む）
Ｐ５　１　黒褐色土 10ＹＲ2/3（花崗岩粒極少量含む）
Ｐ６　１　褐色土 10ＹＲ4/4（花崗岩粒極少量含む）
Ｐ７　１　褐色土 10ＹＲ4/4（花崗岩粒極少量含む）
Ｐ８　１　褐色土 10ＹＲ4/4（花崗岩粒極少量含む）
Ｐ９　１　暗褐色土 10ＹＲ3/3（黄褐色土多量に含む）
Ｐ10　１　暗褐色土 10ＹＲ3/3（黄褐色土・炭化物含む）
Ｐ11　１　暗褐色土 10ＹＲ3/3（黄褐色土含む）

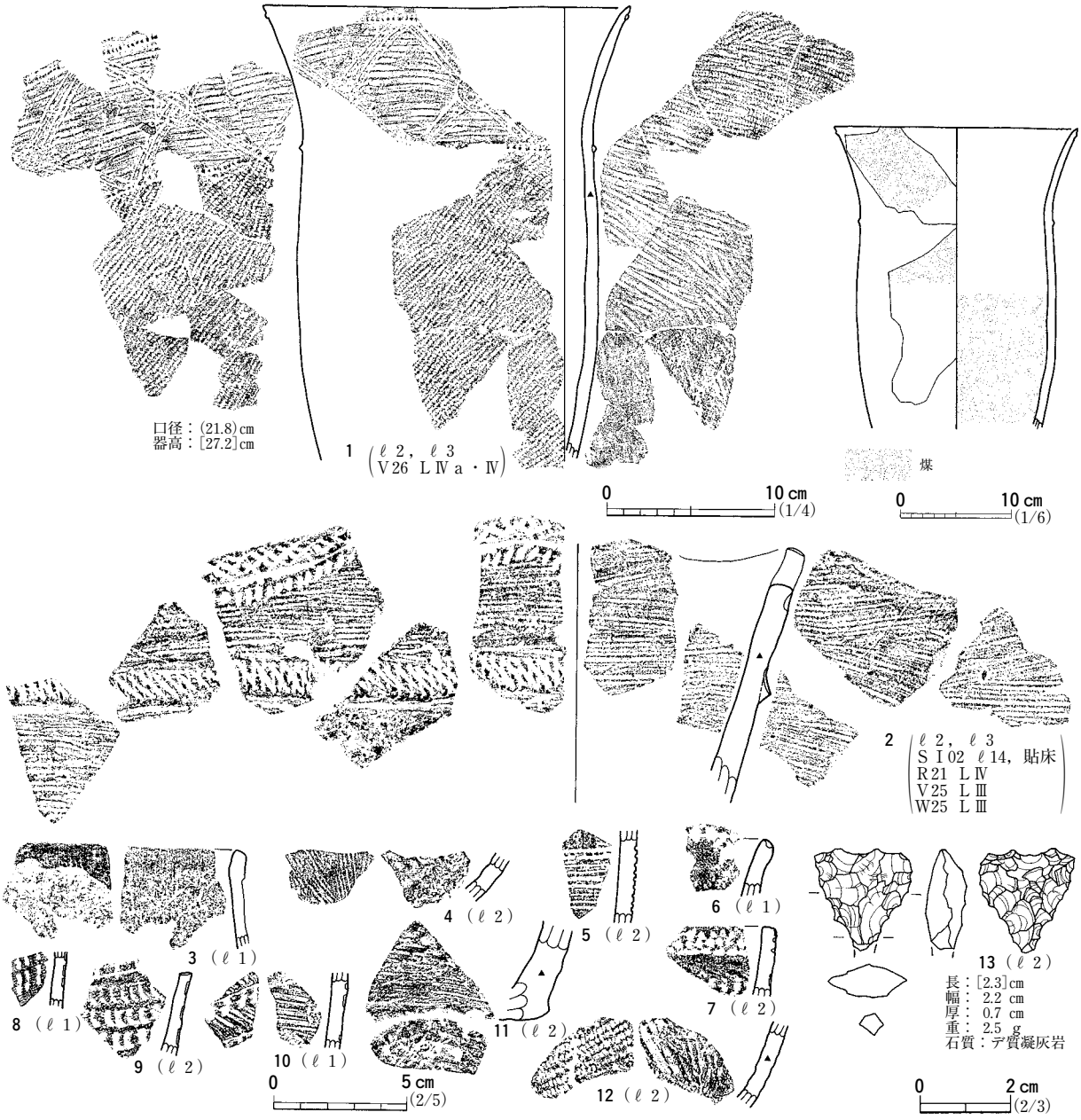


図37　９号住居跡（２）・出土遺物

えない。ただし，図37－1については一ヶ所から破片が集中して出土しており，本住居跡の廃絶年代に近い資料である可能性が高い。（横須賀）

10号住居跡　ＳＩ10（図38・39，図版33・34・131・142）

遺　　構　Ｖ23グリッド，確認面はＬⅥａである。東西に伸びるやせ尾根上に位置し，黒森川に向かう北向き急斜面の縁に立地する。周囲は東に向かって傾斜する急斜面となる。本住居跡は14号土坑と重複関係にあり，土坑が新しい。またほぼ同標高の近接した位置には11・12号住居跡が存在する。

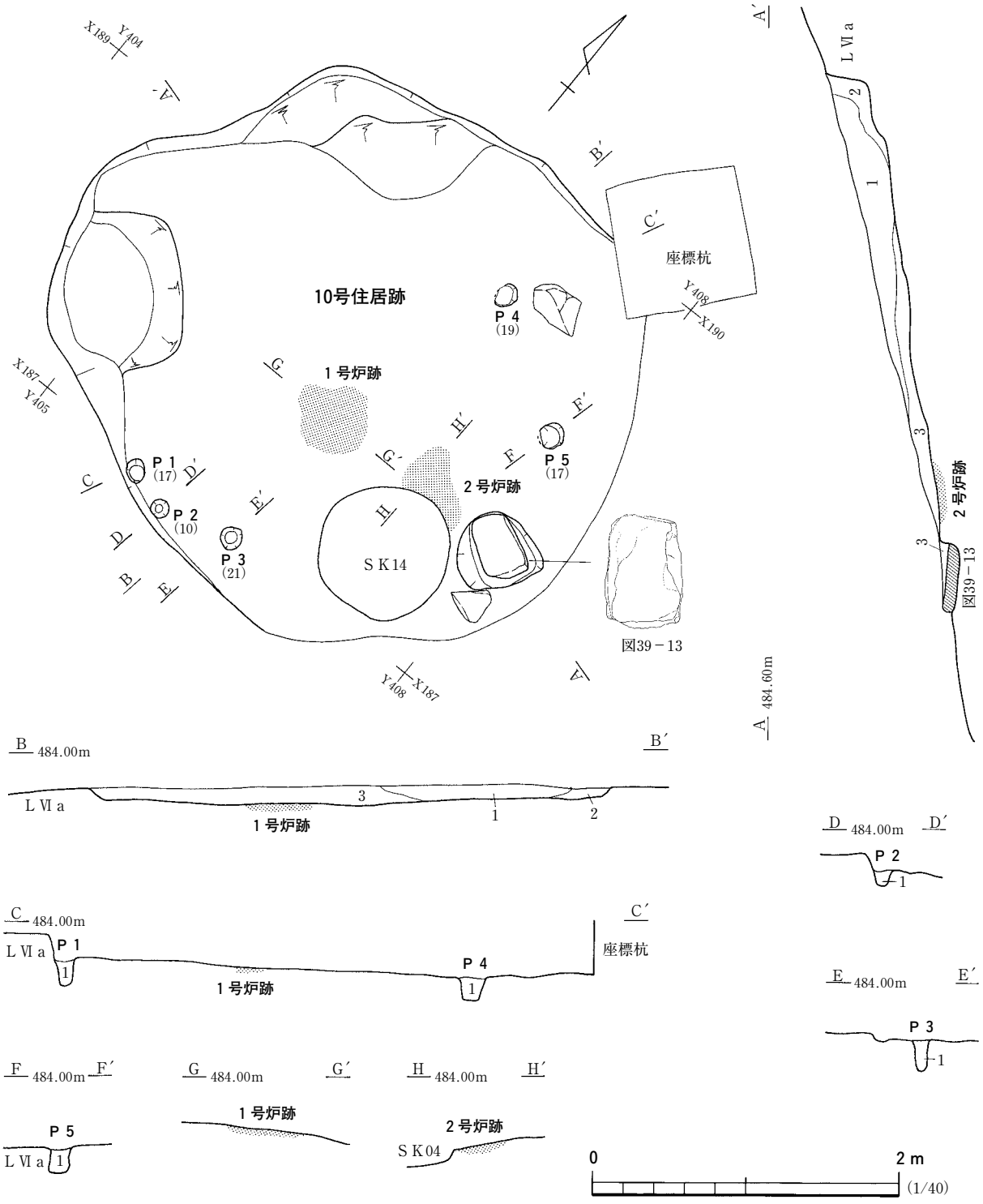
本住居跡の堆積土は3層に分かれ，斜面上方からの自然堆積であることが確認できる。斜面上方の住居西壁は25cm前後の高さで遺存するが，床面及び壁面には基盤層である花崗岩が所々で露頭しており，これが風化して遺構の北西・南西隅が崩れてしまっている。斜面下方となる住居東壁は流失しており，壁面及び遺構プランは確認できない。そのため遺構のプランについては明確でないが，遺存部分から隅丸方形を基調とするものと考えられる。遺存する西壁長は2.7m，南北方向の最大長は3.6mを測る。

住居跡の床面からは柱穴5個，炉跡2基を検出した。柱穴は南壁沿いに3個，北壁沿いに2個が並置され，東西壁周辺からは検出されない。すべて径15cm前後の円形プランを基調とする。炉跡は床面の中心からやや南東方向に外れた位置に2基が並ぶ。炉跡は2号炉跡の一部が14号土坑に壊されているが，2基とも床面幅50cm程の範囲が不整形に被熱している。また，東壁付近と推測される位置には床面に掘られた掘形内に石皿が据えられていた。

遺　　物　明らかに本遺構に伴う遺物は，床面に据えられていた13の石皿である。この他はすべて堆積土中から出土した破片資料である。器形の復元が可能であった1については，図示しえた破片以外も含め，本住居跡内から2片，12号住居内から2片，遺物包含層から28片，表採資料から1片を確認したものであるが，住居内堆積土中から一部が出土したことを重視してここで報告する。

13の石皿は最大長約44cmの長方形を呈し，石質は遺跡一帯の基盤岩である花崗岩類が用いられている。

2は縄文時代早期後葉の土器である。外面には細隆起線と集合沈線，内面には貝殻条痕が認められる。1・3～11は縄文時代早期後葉～前期初頭の土器群である。3～5は内外面ともに貝殻条痕文，3の外面には半截竹管によって沈線文が施文される。1は口縁部が外反し，体部がやや内湾気味に立ち上がる器形の深鉢である。口縁部は尖頭状となり，口端部に向かって器厚を減じてゆく。外面は口端部から17.5cm程が文様帯となり，体部地文との間に区画線はない。文様帯内は曲線をモチーフとして縄圧痕文が施文されている。体部地文は外面ＲＬ単節縄文，内面は貝殻条痕文である。胎土には小礫を多量に含み，混和される繊維は多い。6は外面縄文，内面貝殻条痕文の小片である。7は内外面ともに絡条体条痕文が付され，外面及び口端部端に絡条体圧痕文が施文される。8は外面撚糸文，内面貝殻条痕文，9は外面縄文，内面擦痕の小片である。10・11は平底の底部片であり，



10号住居跡

1　灰褐色土　7.5ＹＲ4/2（炭化物極少量含む）
2　褐色土　7.5ＹＲ4/6（黄褐色土多量含む）
3　褐色土　7.5ＹＲ4/4（黄褐色土極少量含む）

Ｐ１　1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（黄褐色土極少量含む）
Ｐ２　1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（黄褐色土極少量含む）
Ｐ３　1　暗褐色土　10ＹＲ3/4（黄褐色土極少量含む）
Ｐ４　1　暗褐色土　10ＹＲ3/3（黄褐色土極少量含む）
Ｐ５　1　褐色土　10ＹＲ4/4（黄褐色土極少量含む）

図38　10号住居跡

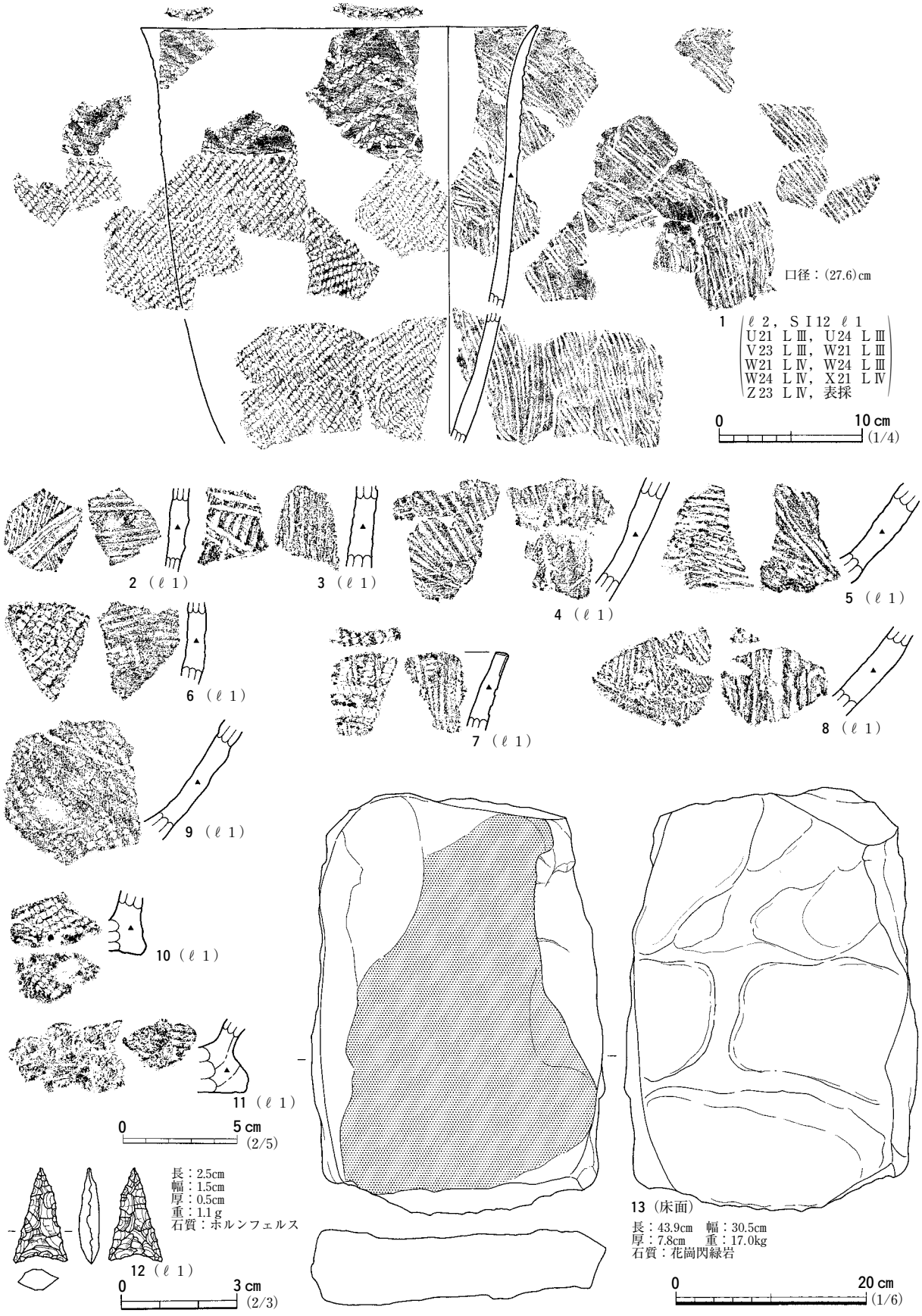


図39　10号住居跡出土遺物

それぞれ縄文や貝殻条痕文が認められる。12は凹基となる石鏃である。

ま　と　め　本住居跡は方形プランに復元され，一辺は３ｍ前後となる小型の住居跡である。住居内施設として床面に２基の炉跡と，５個の柱穴，据え付けられた石皿が認められた。炉跡は床面の中心ではなく，やや壁際に寄って並ぶように配置される。

本住居跡は尾根上に位置し，近接する９号住居跡とは立地を異にするものの，住居プラン及び炉跡のあり方など共通する属性が数多く認められる。この点を重視すれば，本住居跡は縄文時代早期後葉～末葉に機能していたものと判断される。出土した土器群はすべて流入資料ではあるが，概ねこの年代観に沿った資料が多い。（横須賀）

11・12号住居跡　ＳＩ11・12（図40，図版35・36・130）

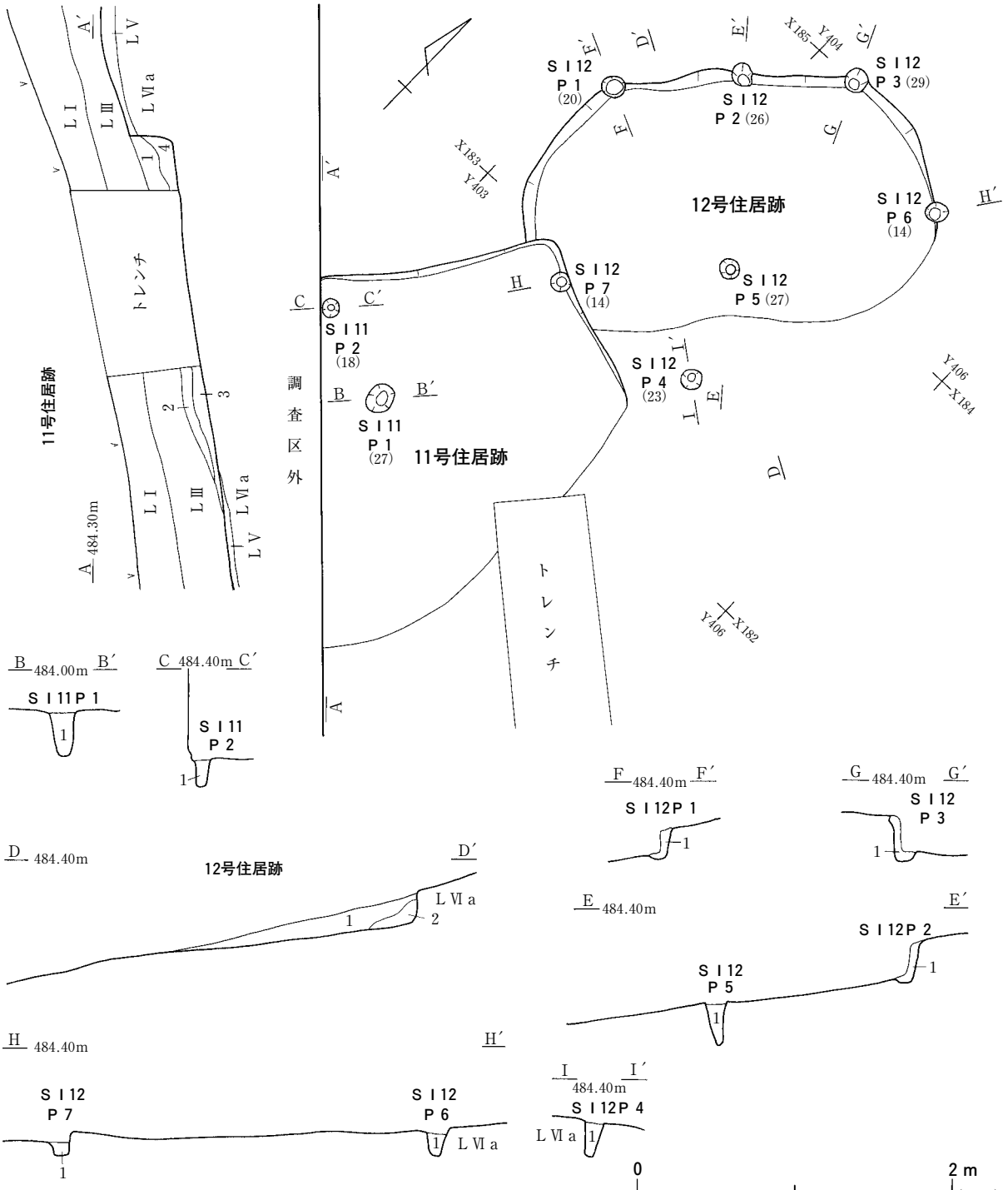
遺　　構　U24グリッド，確認面はＬⅥａである。東西に伸びる尾根筋からやや南側に位置し，周囲は南東に向かって傾斜する急斜面となる。両住居跡は重複関係にあり，11号住居跡が新しい。11・12号住居跡の北側にはほぼ標高を同じくして10号住居跡が存在する。11号住居跡の南半は調査区外へと延びる。

11号住居跡は遺構の北端部分で12号住居跡の南東隅を壊している。本住居跡内堆積土の観察は調査区壁を利用して行ったが，中心部分は試掘調査時のトレンチによって壊されている。この観察の結果，本住居跡周囲はＬⅢ→ＬⅤ・Ⅵａと堆積しており，本住居跡はＬⅢ下から掘り込まれていた。住居内堆積土は４層に分かれ，斜面上方からの自然堆積である可能性が高い。遺構は斜面上方の住居西壁のみが遺存し，調査区内において1.5mが確認できた。遺構の東半，斜面下方部分は流失してしまっており，現状では約2.3mの長さに遺存する。遺構のプランについては北隅のみ確認でき，おそらくは方形～長方形に復元することが可能である。住居内施設としては柱穴２個が認められたのみで，炉跡などは検出されない。また堆積土中を含め，遺物も出土していない。

12号住居跡は遺構の北西半のみ遺存し，隅丸方形のプランに復元できる。遺存する北西壁の長さは2.5mを測る。住居跡内堆積土は２層に分けられ，おそらくは自然堆積と考えられる。柱穴は７個が確認され，このうち５個は壁面沿いに規則的に配置される。炉跡を含めこの他に住居施設は認められない。遺物は堆積土中から１点のみ出土している。

遺　　物　12号住居跡堆積土中から出土した縄文時代早期後葉～末葉の土器小片を示した。内外面ともに絡条体条痕文を地文とし，外面には絡条体圧痕文が施文されている。

ま　と　め　11・12号両住居跡は，遺構の一部が調査区外に延び，また急斜面に構築されたために壁面の一部が流失するなど，その全容については明らかとならない。現状からは両住居跡とも方形を基調とするプランに復元され，規模は小型となる竪穴である。両住居の機能年代についても判然とはしないが，ＬⅢ下となる検出面から縄文時代早期～前期前半に収まることは確実である。隣接する９・10号住居との位置関係や遺構プランの相似性を積極的に評価すれば，11・12号住居跡の機能年代は縄文時代早期後葉～末葉に収まるとの判断も可能であろう。（横須賀）



11号住居跡

1　灰褐色土 7.5ＹＲ4/2（黄褐色土極少量含む）
2　暗褐色土 7.5ＹＲ3/4（炭化物極少量含む）
3　褐色土 7.5ＹＲ4/4（黄褐色土少量含む）
4　褐色土 7.5ＹＲ4/3（黄褐色土少量含む）

Ｐ1　1　褐色土 10ＹＲ3/6（花崗岩粒極少量含む）
Ｐ2　1　暗褐色土 10ＹＲ3/6（花崗岩粒極少量含む）

12号住居跡

1　褐色土 10ＹＲ4/4（炭化物極少量含む）
2　黄褐色土 10ＹＲ5/6（炭化物極少量含む）

Ｐ1　1　褐色土 10ＹＲ4/4（花崗岩粒極少量含む）
Ｐ2　1　褐色土 10ＹＲ4/4（花崗岩粒極少量含む）
Ｐ3　1　褐色土 10ＹＲ4/6（花崗岩粒極少量含む）
Ｐ4　1　褐色土 10ＹＲ4/6（花崗岩粒極少量含む）
Ｐ5　1　褐色土 10ＹＲ4/4（花崗岩粒極少量含む）
Ｐ6　1　褐色土 10ＹＲ4/4（花崗岩粒極少量含む）
Ｐ7　1　褐色土 10ＹＲ4/6（花崗岩粒少量含む）

図40　11・12号住居跡・出土遺物

13号住居跡　ＳＩ13（図41・42，図版37）

遺　　構　本遺構は，１次調査区中央部北端の丘陵斜面が比較的緩やかな勾配となる場所にあり，Ｘ・Ｙ，23・24の４グリッドにまたがって位置する。

本遺構は，遺物包含層のＬⅤ上面での観察で発見できなかったため，包含層を５ｍ四方のグリッドごとに掘り下げた。その際，Ｘ23グリッドの南壁において遺構と思われる土色の変化と，下層のＬⅥ上面にて被熱変色部分が確認されたことから，遺構として認識できた。

本遺構は西に14号住居跡，東には倒木痕と重複し，南側に15・16号住居跡が隣接している。Ｘ23グリッドの南壁を観察すると，本遺構が14号住居跡の東縁辺を壊している。また，本遺構の東側は倒木痕により壊されていた。また，本遺構と15号住居跡との関係は，両者間に倒木の痕跡が介在するため土層断面及び確認面観察では分からなかった。

調査は，掘り残したＸ23グリッドの南壁を土層観察帯として残したまま，遺構の東側にある倒木痕の掘り下げから開始し，次に北側のＬⅥ面上の精査にとりかかった。底面は確認面より20㎝前後掘り下げたところで確認された。帯の北側では，既に底面が露呈しており，底面上からは，円形状に赤黒く被熱変色した部分を１基確認した。底面から被熱変色部分が確認できたことから，被熱変色部分を炉跡，底面を床面，そして本遺構を住居跡として再認識した。

床面の北西縁は，土層観察用の細いトレンチにより壊されていた。床面は，ＬⅥを概ね平らに削り整え，残存した床面規模は南北長3.76m，東西長1.56mの隅丸長方形状を呈していた。床面上には踏み締まりなどの痕跡は確認されなかった。床面中央部において，直径29㎝ほどの被熱変色部分が確認された。変色部分の表面には被熱により硬化した個所は見られなかった。確認した位置から判断して，被熱変色部分は本住居跡の炉跡と考える。壁面は，本住居跡の西及び南側で確認され，底面から約70°の角度で立ち上がる。壁は南西隅において「く」字状に屈折していた。

柱穴と思われる小穴は，床面上及び壁の外周においても確認できなかった。

本住居跡内に堆積していた土は，ℓ１と倒木痕堆積土の２層に分けられる。倒木痕は，南東側を中心に本住居跡の床面下にまで達している。

遺　　物　ℓ１と倒木痕堆積土中からは，大小併せて計39片の縄文土器片と石鏃１点を確認している。この内，ℓ１中から出土した遺物は，１～11の11片を数えるものの，床面より出土した遺物は全くなかった。出土土器片は，文様から無文土器，撚糸文土器，押型文土器，沈線文・刺突文土器そして条痕文系土器の５つに大別できる。

１～７・12の８点は，縄文時代早期前葉頃の撚糸文土器片である。これらは条の太さと，厚さから二分できる。12は，厚さ９㎜，表に条の太さ２㎜のＬの撚糸文を転がしている。残りの７点は，厚さ６㎜前後と12よりもやや薄手で，条の太さも前者の半分ほどのＬの撚糸文を転がしている。１の口縁部小片は，外面の施文後，口縁部を横ナデし，端部を丸く仕上げている。８・20は櫛歯状工具と思われる細かな条痕が認められ，これらとほぼ同時期のものと考えられる。

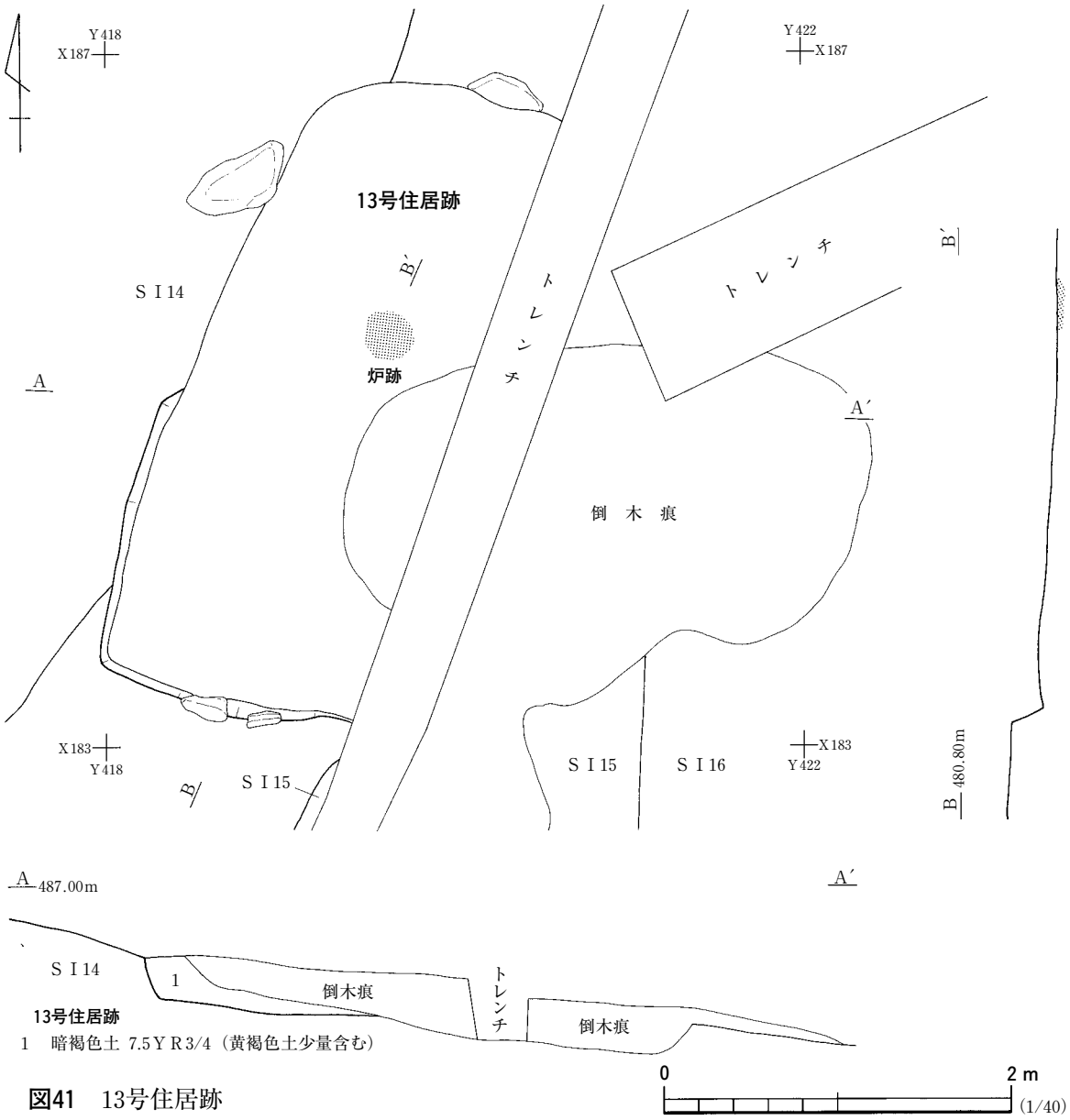


図41　13号住居跡

13は，縄文時代早期前葉から中葉の日計型押型文土器の胴部小片である。

11・15・19は，早期中葉に比定される沈線文または刺突文を表に施文した土器片である。19は表に溝の浅い沈線文を施す。15は浅い連続刺突が認められる。11は表と口端部に絡条体圧痕を施す。18・32・33は条痕が施文されるが胎土に繊維をほとんど含まない。これらと同時期のものであろう。

34～38の5点は，縄文時代早期後半の条痕文系土器片である。34・36は，表裏に絡条体条痕文を施している。37・38の外面にはＲＬ縄文を転がし，内面に貝殻条痕文を施している。35は表裏に条痕を施した後，平行沈線で曲線を描いている。

10・14～17・21～31の16点は無文土器，または明瞭な文様帯のない土器片である。これらは厚さと外面調整の違いから二分できる。10・25・28・30・31の5点の胴部片は，厚さ6㎜以上，外面にはケズリに似た調整を縦方向に施している。残りの11点は，厚さ5㎜以下，使用によって内面が荒れているものもあるが，多くは表裏を丁寧にナデている。後者の内，14・15・26・29の器面には，幅0.6

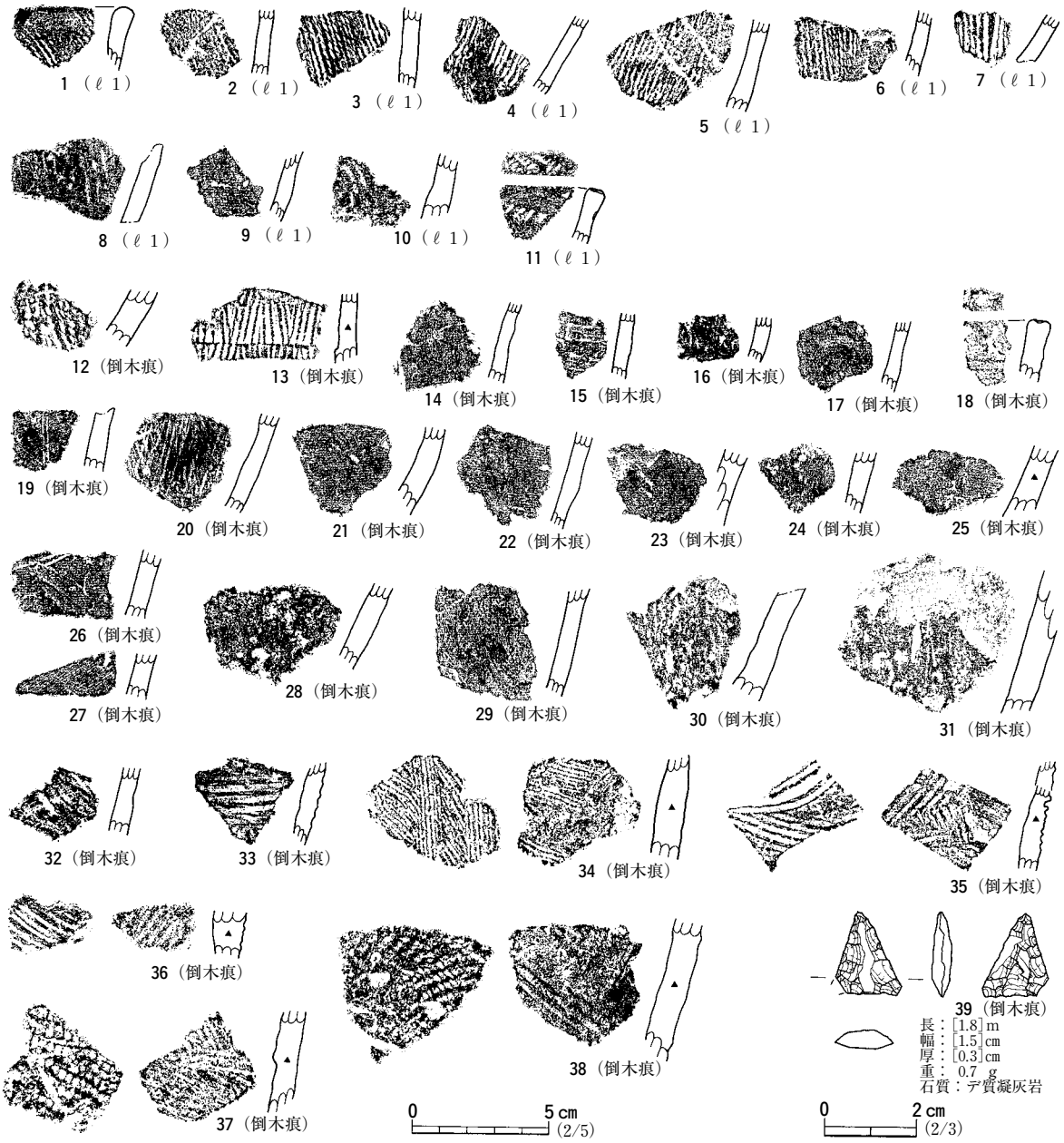


図42　13号住居跡出土遺物

～１㎝の板状工具を用いナデた痕跡が見られる。これらは早期前葉から中葉に帰属する。

39は，デイサイト質凝灰岩製の無茎石鏃である。

ま　と　め　本住居跡は，14号住居跡を壊し掘り込んでいる。床面規模は，南北長3.76m，東西長1.56m以上の隅丸長方形を呈する。床面からは，炉跡と思われる焼土面を１ヶ所確認できた。遺物は，本住居跡に伴う遺物が全く無いことや，ℓ１中から出土した土器片も縄文時代早期前葉～後葉のものが混ざって出土し，また縄文時代早期以降の遺物は全く混入していない。本住居跡の所属時期は，遺構の重複関係から14号住居跡よりも新しく位置付けられる。出土遺物の状況を考え合わせると，縄文時代早期頃と考えられるが，早期の内でもいつ頃かは限定できない。　（阿部）

14号住居跡　ＳＩ14（図43，図版38）

遺　　構　本遺構は，１次調査区中央部北端の丘陵斜面が比較的緩やかな勾配となる場所にあり，Ｘ23・24の２グリッドにまたがって位置する。

本遺構も，13号住居跡と同様に，遺物包含層のＬⅤ上面での観察で発見できなかった。遺物包含層を掘り下げた途中で，土色の変化を確認したことから，遺構として認識できた。本遺構の東縁は13号住居跡と重複する。Ｘ23グリッドの南壁を観察すると，本遺構の東縁は，13号住居跡により壊されていた。また，図中表記していないが，底面中央部には本遺構より古い27号土坑が存在する。

調査は，掘り残したＸ23グリッドの南壁を土層観察帯として残し，帯の南側から掘り下げ，次に北側のＬⅥ面上の精査に入った。底面は，確認面より35㎝下で確認できた。帯の北側では，既に底面が露呈しており，底面上からは朱色に被熱変色した部分を１基，偏平な花崗岩を１個確認した。底面から被熱変色部分が確認できたことから，被熱変色部分を炉跡，底面を床面，そして本遺構を住居跡として再認識できた。

床面の東縁は，13号住居跡に壊されていた。床面中央部から北半分の床面は，ＬⅥ面を概ね平らに削り整えている。一方，南側の床面は，壁裾から床面中央部分に向かって，水平に対し10～15°の緩い角度で傾斜してゆく。残存した床面規模は，南北長5.71m，東西長は最大で2.41mの楕円形状を呈していた。床面上に踏み締まりなどの痕跡は確認されなかった。床面中央部には，57×46㎝の楕円形状に被熱変色部分を１基確認した。変色部分の表面は，被熱によりわずかに硬化していた。被熱変色部分は，確認された位置から判断して本住居跡の炉跡と考えられる。炉跡から北西に30㎝のところに，46×32㎝の平らたい花崗岩が１個，ＬⅥに埋まった状態で確認された。花崗岩周囲の土色の変化からは，岩が人為的に埋め込まれた痕跡を見つけられなかった。また，地面より露出した花崗岩の表面を観察しても，人為的に付けらた顕著な磨り面や，窪み個所を確認できず，単に岩表面が平たいという状況であった。しかしながら，この花崗岩と炉跡との距離，花崗岩表面の偏平さを考え合わせると，この花崗岩が台石的な機能を果した可能性も考えられる

壁面は，本住居跡の西側及び南側にて確認され，底面から60～70°の角度で立ち上がる。大部分の壁は失われたものの，南西側において「し」字状に屈折し残存している。

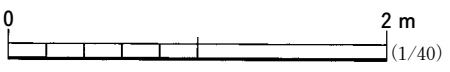
柱穴と思われる小穴は，床面上及び壁の外周においても確認できなかった。

本住居跡内に堆積していた土は，計５層に分けられ，いずれも自然堆積土と考えられる。土中からは，わずかに縄文土器片が出土した。

遺　　物　本住居跡から出土した遺物は，図43に示した４点の土器片のみである。その内，１だけが炉跡付近から出土している。１・３・４の３点は，無文土器ないし明瞭な文様帯のない土器片である。１・３は，厚さ４㎜前後と薄手で，褐色ないし暗褐色を呈し，表裏は丁寧にナデられている。１の口端部は，やや平らに形作られている。４の口縁部片は，表裏に明瞭な文様が施されないものの，口端部には短沈線で刻みをつけている。

14号住居跡

1　褐色土 7.5ＹＲ3/4（黄褐色土極少量含む）
2　褐色土 7.5ＹＲ4/4（黄褐色土少量含む）
3　褐色土 7.5ＹＲ3/4（黄褐色土・炭化物極少量含む）
4　褐色土 7.5ＹＲ3/4（黄褐色土多量含む）
5　にぶい褐色土 7.5ＹＲ5/4（黄褐色土少量含む）



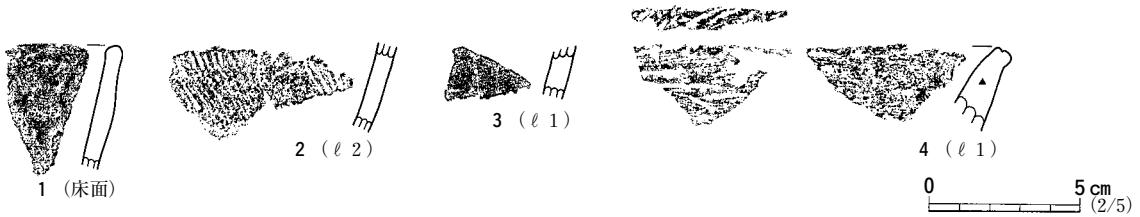


図43　14号住居跡・出土遺物

2の外面には，条の細い撚糸文が施文されている。

ま　と　め　本住居跡は，13号住居跡に先行して掘り込まれる。床面は，南北長5.71m，東西長は最大で2.41m以上の楕円形状を呈していた。床面からは，炉跡と思われる焼土面を1ヶ所確認している。遺物は，わずかに4点の土器片のみで，床面から出土した1は縄文時代早期前葉頃の無文土器の口縁部である可能性が考えられる。しかしながら，本住居跡に伴う遺物が1のみであることと，周囲の包含層中にも無文土器の破片を少なからず含むことから，これをもって本住居跡の所属時期と考えるには無理がある。このことから，本住居跡の所属時期は，概ね縄文時代早期頃と考えたい。（阿部）

15号住居跡　ＳＩ15（図44・45，図版39・132）

遺　　構　本遺構は，1次調査区中央部北端の丘陵斜面が比較的緩やかな勾配となる場所にあり，Ｘ24・Ｙ24の2グリッドにまたがって位置する。

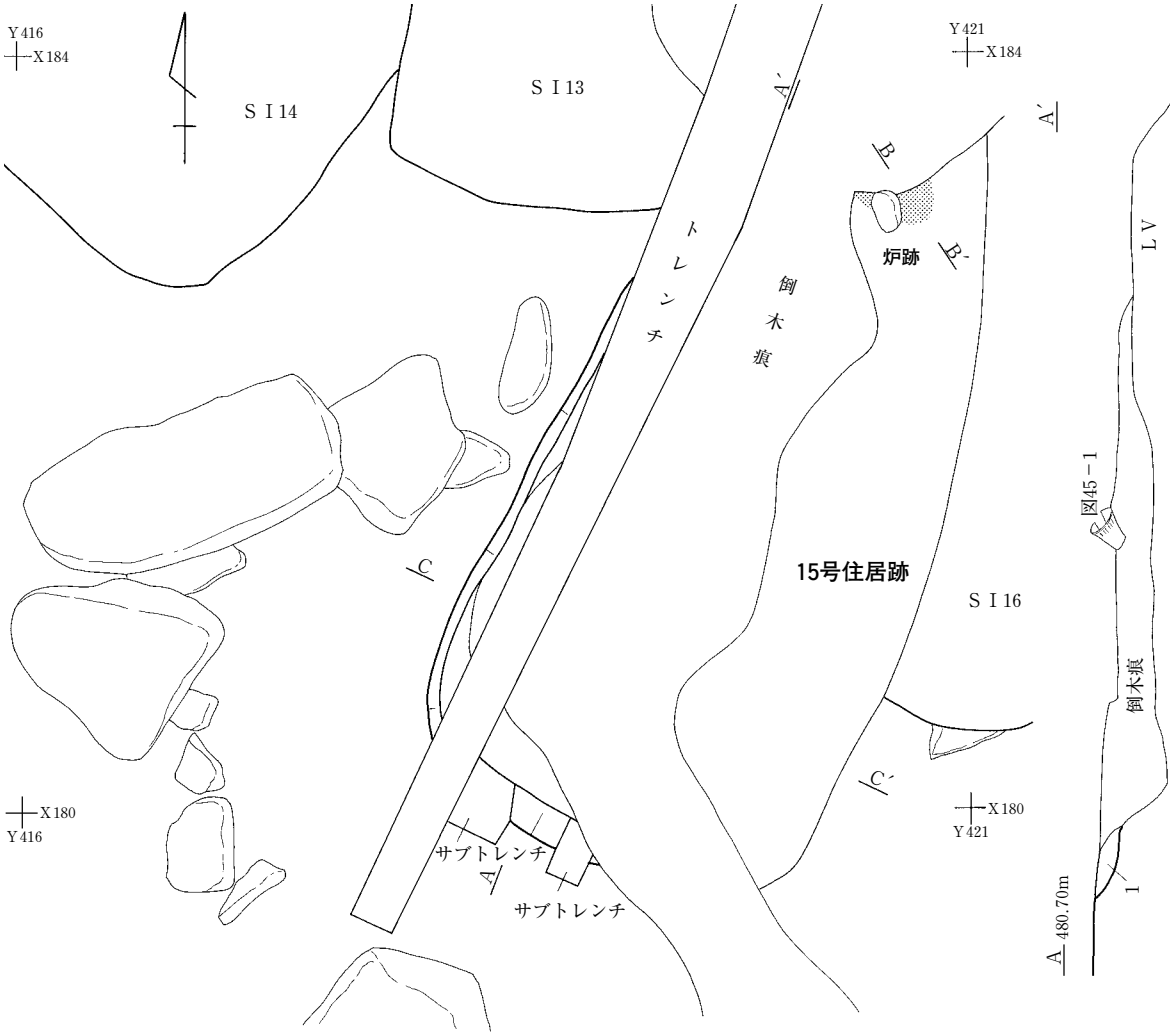
本遺構の中央部は倒木痕により壊され，下層には本遺構よりも古い16号住居跡が存在する。また，本遺構の北西側に13号住居跡が近接するものの，本遺構と13号住居跡との新旧関係は，両者間に倒木の痕跡が介在するため分からなかった。

本遺構は，当初遺構と認識されていなかった。そのため，遺構の西端には幅30㎝，長さ10ｍほどの土層観察用にトレンチを設定した。東側断面を観察したところ，上層には少なからず炭化物粒を含むことから，付近に遺構が存在する可能性が確実視された。しかしながら，本遺構中央部には倒木の痕跡が南北に縦走しており，本遺構を面的に確認することは難しかった。そこで，Ｘ24グリッド内にある遺物包含層ＬＶと倒木痕を，段階的に10㎝ほど削り下げたところ，遺構の南西側においてＬＶと遺構内堆積土との土色の違いがわずかに確認できた。

調査は，先に掘り込まれていた土層観察用トレンチに沿って，土層観察帯を残し，帯を挟んで東西の掘り下げを開始した。底面は，主に本遺構の南西及び東縁で確認され，確認面より5～12㎝ほど下で確認された。底面の北端では，倒木の痕跡に壊されわずかに残存していた被熱変色部分を1箇所確認した。底面より被熱変色部分を確認したことから，被熱変色部分を炉跡，底面を床面，そして本遺構を住居跡として再認識した。

床面は，大半が倒木痕と土層観察トレンチにより壊されていたものの，ＬＶを概ね平らに削り整えている。床面の大部分は，南北に縦走する倒木の痕跡によって壊されていた。残存した床面の規模は，南北長4.17m，東西長2.15ｍを測る。本来の床面形状は，北及び東側へと，底面の規模が広がる隅丸長方形状であったと推測される。

残存した床面の北端には，倒木痕に北半分を壊され，20×41㎝の三日月状に残存する被熱変色部分を1箇所確認した。変色部分の表面には被熱により硬化した個所は見られず，さらに変色部分の周縁を石で囲むような所作もなかった。確認された位置から判断して，被熱変色部分は本住居跡の炉跡と考えられる。壁面は，本住居跡の西及び南側にて確認され，底面から約70°の角度で立ち上が



15号住居跡

1　褐色土 7.5ＹＲ4/3（黄褐色土極少量・炭化物少量含む）

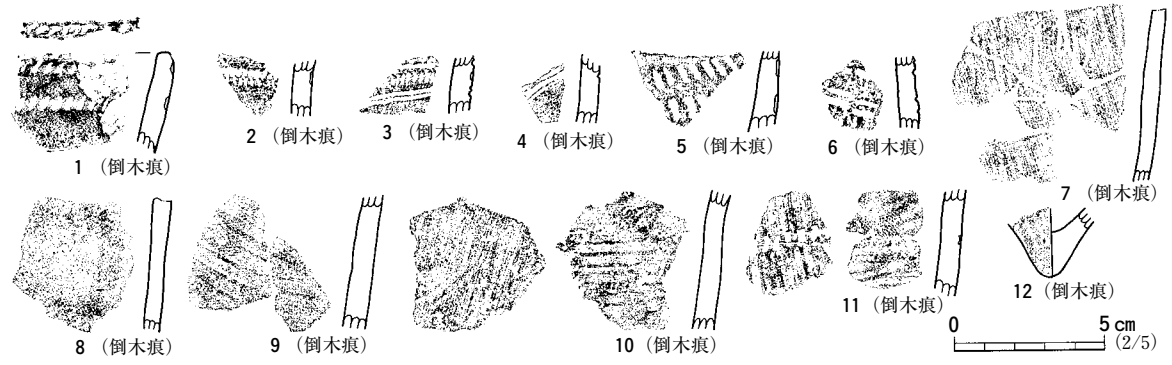


図44　15号住居跡・出土遺物（１）

図45　15号住居跡出土遺物（２）

る。壁は南西隅において「Ｌ」字状に屈折していた。

柱穴と思われる小穴は，床面上及び壁面外縁においても確認できなかった。

本住居跡内の堆積土は，ℓ１と倒木痕堆積土の２つに分けられる。倒木痕堆積土の厚さは，確認面から25㎝ほどで，最深部では下層にある16号住居跡の床面まで及んでいた。

遺　　物　図44・45に掲げた遺物は，倒木痕堆積土より出土したすべての土器片で，ℓ１より出土したものは１片も無い。倒木痕は，下層の16号住居跡の床面まで達している。このことから，倒木痕堆積土中から出土した遺物には，本住居跡内にあったであろう縄文土器片のほかに，下層にある16号住居跡の遺物が混ざっていると判断される。出土した土器片は，外面文様から田戸下層式と，そして子母口式併行期の土器の２つに分かれる。

図45－２は，大小24点の破片からなり，全体の形状を図上復元した田戸下層式に比定される深鉢形土器である。胴部が底からラッパ状に広がり，口縁部はわずかに外反する。外面の文様を見ると，丁寧にナデ仕上げの後，３条１組の横位の平行沈線を３箇所に配し，土器を４段の文様帯に分割している。最上段の口端付近は無文，その下段には半截竹管刺突による縦区画を付し，３条の沈線により横臥した三角文を描く。次の段では単沈線による斜格子文，そして最下段において横走する平行沈線を刻んでいる。図44－１～12，図45－１は，文様が沈線文・刺突文・絡条体圧痕で構成された子母口式期に比定される土器片である。図44－１・５・８は，厚さ，胎土そして色調から同一個体と思われる。口縁部に沿って横位に絡条体圧痕が施される。同図２は絡条体圧痕，３は絡条体圧痕と平行沈線，４は平行沈線のみ認められる。６は半截竹管による刺突文が認められる。図44－７・９～11は，いずれも，厚さ５㎜前後，溝巾３～４㎜の浅い貝殻条痕文を表裏に施している。11の破片中央部には，絡条体圧痕が見られる。同図12は乳房状の尖底部である。図45－１は，底部と口縁部の一部を欠いた深鉢形土器である。器形は胴部下半から口縁部に向かって直線的に外傾し，口縁部上端がわずかに外反している。外面全体には，貝殻条痕文が施される。その後，胴部上半部に斜位方向に３列１組の連続刺突文と沈線を施す。口端部には短沈線を刻んでいる。

ま　と　め　本住居跡は，16号住居跡に先行して掘り込まれる。床面は，南北長4.17m，東西長2.15m以上の隅丸長方形状を呈している。床面からは，炉跡と思われる焼土面を１ヶ所確認している。遺物は，住居内堆積土からの出土品は全く無く，すべて本遺構と重複する倒木痕堆積土中から出土している。倒木痕堆積土より出土した遺物は，下位に存在する16号住居跡の遺物が混ざる可能性があり，実際遺物の時期も田戸下層式と子母口式併行の資料が混在する。ただし，以降の遺物は確認できないことから，概ね縄文時代早期中葉～後葉と考えられる。　（阿部）

16号住居跡　ＳＩ16（図46，図版40）

遺　　構　本遺構は１次調査区中央やや北側Ｙ24グリッドに位置する。北へ下る丘陵斜面から平坦面への変換点に位置する。周囲は基盤層である礫が所々露出している。本遺構は，本遺構を破壊して構築していた15号住居跡と撹乱を掘り下げて検出できた。暗褐色の楕円状の広がりとして確認

でき，検出面はＬⅥである。周囲は13～15号住居跡や撹乱が重複する地域であり，本遺構も多数の重複により激しく破壊を受けている。本遺構の西側大半は15号住居跡と風倒木痕によって遺存していない。遺構の内外を確認するためにサブトレンチを設定して土層の観察に努めた。遺構内堆積土は検出面から床面まで10cm程度と浅いため，１層のみ確認した。堆積土は褐色土ブロックを含んだ暗褐色土であることから，人為堆積と考えられる。

本遺構の西側の大部分が破壊され，北壁は確認できなかった。本遺構の平面形は残存している南壁や東壁から推測して，楕円形であると推定できる。残存している遺構の規模は本遺構堆積土検出地点までの長軸線上は2.9m，短軸線上は2.4mを測る。床面は基盤の礫が部分的に露出しているのが見受けられる以外平坦である。床面より住居内施設としてピット４個，地床炉１基を確認した。ピットはいずれも小型の円形で径20cm未満，深さ30cm前後を測る。すべて規模や深さから柱穴と考えられ，杭状の柱を打ちつけて柱とし，上屋を支えたと想定できる。地床炉は１基で床面南東隅よりから検出した。炉跡が住居跡の隅に位置することから露出する礫の間に意識的に設けていたようである。断ち割りの結果，炉跡は検出面から約８cm程下まで被熱の痕跡が見受けられた。床面に硬化面は確認できなかった。壁高は遺存が良好な壁面で20cm，大部分は10cm程度の壁面であるが，ほぼ垂直に立ち上がっている。

遺　　物　本遺構からは縄文土器片92点，石器49点出土している。多くは堆積土中からの出土である。このうち縄文土器片９点を図示した。

図46－１～６・９は縄文時代早期中葉期の土器片である。本遺構に直接伴う遺物である。１は２本の絡条体をセットとして横位に押圧して文様を構成している。２～６は器壁の厚さや胎土から同一個体であると判断した。文様が口縁部にのみ施文される深鉢土器であると推定される。表面は縦方向に丁寧に磨かれており，光沢を出している。いずれも胴部破片であるが，２は口縁部に近い資料である。半截竹管を束ねた工具で横位に押引きしている。３以下は無文の体部資料であろう。９は表裏に条痕文が施される。繊維の含有率が高く，焼成が悪いためか脆く感じる土器である。

同図７の器壁は薄く，焼成は良好で硬質である。表面には横位に微隆起が貼り付けられ，その下位には条痕が施文されている。早期後葉野島式に比定される。

同図８は縄文時代早期後葉から末葉に掛けての土器で，表裏に条痕文が施文されている。胎土に繊維を多量含んでいる。

ま　と　め　本遺構は重複や撹乱による破壊を受け，東壁と南壁の一部が遺存するのみの竪穴住居跡である。遺損する平面形の規模は2.9×2.4mである。概ね楕円形であるが，破壊が激しく詳細は不明である。住居内施設としてピット４個と炉跡１基を検出した。ピットは杭状の柱を打ちつけるタイプで掘形などはない。形や規模が類似し，堆積土が同一である。炉跡は意識的に礫の周囲に設けている。

本遺構を破壊して構築されていた15号住居跡の出土遺物は，すべて撹乱からの出土であるが，縄文時代早期中葉の土器のみである。これらは撹乱により本来，本遺構に伴う遺物が15号住居跡出土

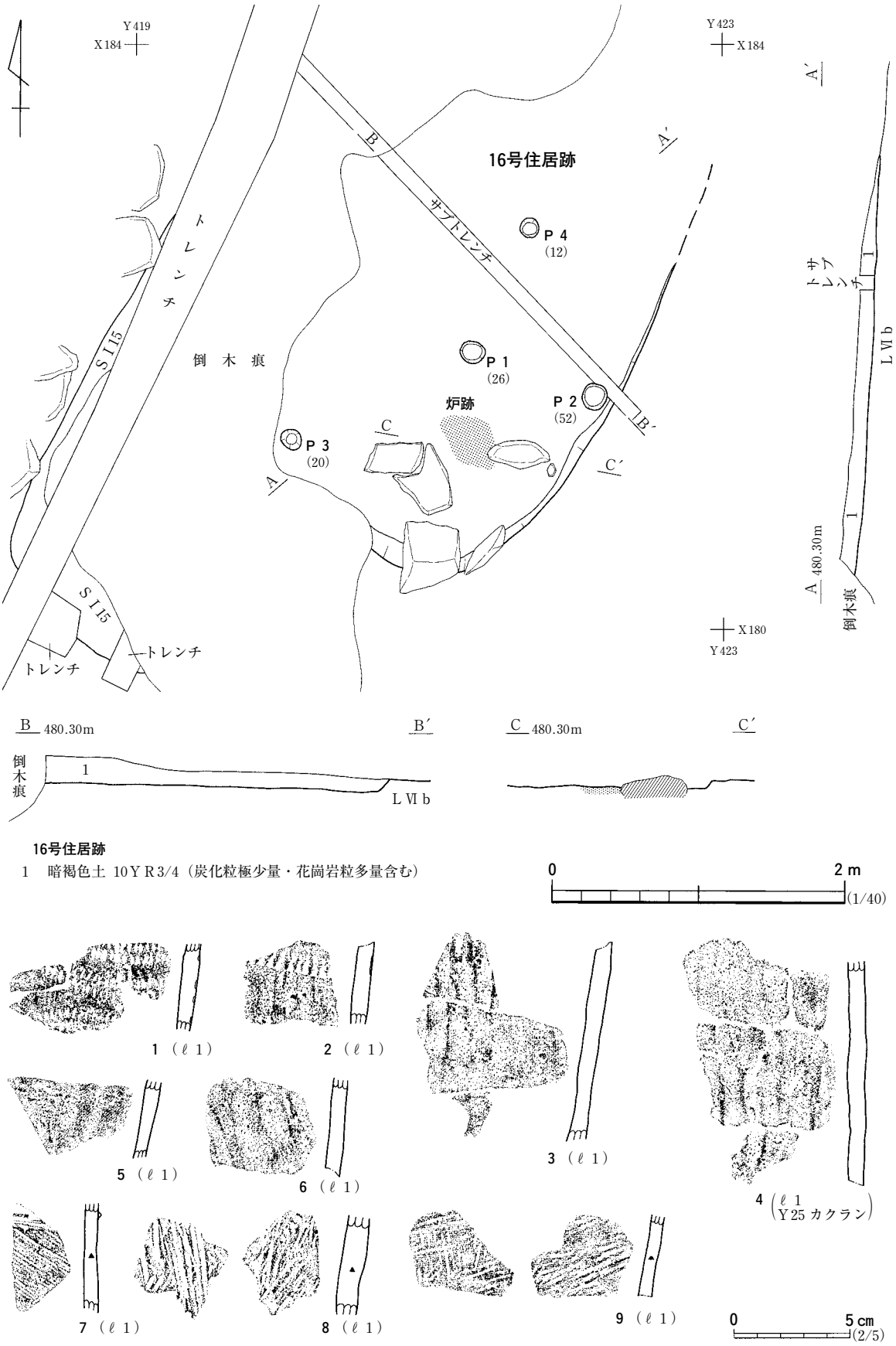


図46　16号住居跡・出土遺物

遺物として取り上げられている可能性も否定できない。またその逆も可能性があるであろう。このように撹乱を多く受けた遺構で遺物から時期を推定するのは困難な作業である。

本遺構からは縄文時代早期中葉・早期後葉の土器が出土している。しかし，15号住居跡で出土した遺物はすべて縄文時代早期中葉の土器であることから，その時期以降に下ることはない。少なくとも本遺構の所属時期は縄文時代早期中葉またはそれ以前の時期であると思われる。遺構内堆積土も暗褐色土であり，ＬⅥに近似する層であったことを付記しておきたい。　（三浦）

17号住居跡　ＳＩ17（図47・48，図版41～46・133）

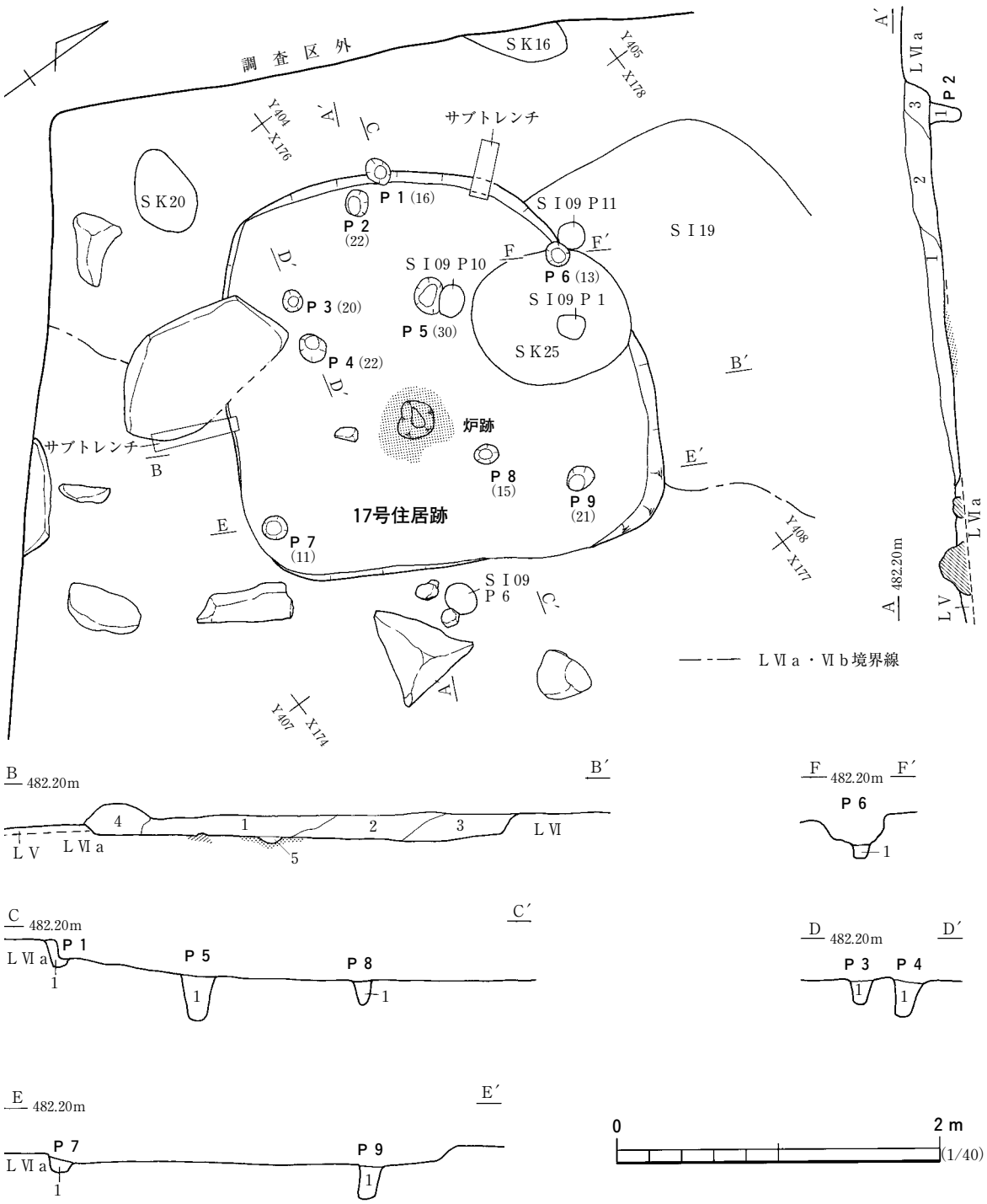
遺　　構　Ｖ25・26グリッド，ＬⅤ及びＬⅥａ・ＬⅥｂが確認面である。９号住居跡を精査後，これを壊しつつ周囲のＬⅣ層を下げた段階で検出しえた。現表土面からは約1.5m下がった位置となる。本遺構は東西に延びる尾根の中腹南側裾に位置し，周辺に顕著な花崗岩の露頭を避けるように構築されている。周囲は南東方向に下がる緩斜面であるが，斜面上位からの再堆積層が厚く堆積する。本住居跡は検出層位を違えて古代の２号住居跡，縄文時代早期後葉～末葉の９号住居跡と重複し，本住居跡は最も下位から検出したものである。また25号土坑と重複し，本住居跡が古い。

本住居跡の堆積土は４層に分かれ，ℓ１～３は自然堆積したものと判断できる。ℓ４については炭化物，焼土などを多量に含む混土であり，住居がある程度埋まった段階で投げ込まれたものと考えられる。本住居跡のプランは斜面下位がやや広がる不整な隅丸方形あるいは台形状であり，最大長は2.6m程となる。

住居跡の床面からは柱穴９個，炉跡１基を検出した。柱穴の配置に明確な規則性は見出せないが，Ｐ５を除いて壁面に沿うように並んでいる。北西寄りに位置するＰ５は唯一楕円形を基調とし，30cm近い深さを有する。炉跡は住居跡床面中央から若干外れた位置に存在する。炉跡の中心部は尖底状に窪んでいる。この中には焼土・炭化物が堆積していた。被熱範囲は径40～50cmの大きさに広がっている。

遺　　物　本住居跡内から出土した土器片は，極力出土位置・層位・レベルを記録して取り上げている。出土した土器はすべて堆積土中から出土した小片であった。

１～３・５は縄文時代早期前葉の撚糸文系土器である。１は口縁部を含めた３片を同一個体と認定した。口縁部は内外端が肥厚し，極僅かに内湾しながら立ち上がる。口端部は丸頭状ではあるが，指頭による調整を加え，口端部右端に凹みを作出している。外面は口縁部上端までＲの撚糸文が，条間を密に施文されている。内面の調整は雑なナデである。器厚は6.5㎜前後を測る。胎土には細かな石英や長石粒を含み，焼成は堅緻である。２は接合資料も含め９片が同一個体である。尖底となる底部から僅かに内湾しながら立ち上がる。外面の撚糸文は底部まで及び，条間は比較的密に深く施文される。内面の丁寧な調整は行なわれず，胎土に含まれる小礫が表面に飛び出し，ザラザラとした状態となる。器厚は６㎜前後である。３はＲの細い撚糸文が密に施文され，外面はミガキが施され，滑沢を有する。内面の調整はナデ，器厚は５㎜を測る。５は底部付近の破片である。やや太



17号住居跡

1　暗褐色土 10ＹＲ3/4 （炭化物・焼土少量含む）
2　褐色土 10ＹＲ4/4 （炭化物・黄褐色土少量含む）
3　にぶい黄褐色土 10ＹＲ4/3 （炭化物・黄褐色土少量含む）
4　暗褐色土 10ＹＲ4/3 （炭化物・焼土多量との混土）
5　黒褐色土 10ＹＲ2/3 （炭化物・焼土多量含む）

Ｐ１　1　暗褐色土 10ＹＲ3/3 （黄褐色土少量含む）
Ｐ２　1　褐色土 10ＹＲ4/4 （炭化物・黄褐色土少量含む）
Ｐ３　1　褐色土 10ＹＲ4/4 （黄褐色土少量含む）
Ｐ４　1　暗褐色土 10ＹＲ3/3 （黄褐色土少量含む）
Ｐ５　1　褐色土 10ＹＲ4/4 （炭化物・黄褐色土少量含む）
Ｐ６　1　褐色土 10ＹＲ4/4 （黄褐色土少量含む）
Ｐ７　1　暗褐色土 10ＹＲ3/3 （黄褐色土少量含む）
Ｐ８　1　褐色土 10ＹＲ4/4 （黄褐色土少量含む）
Ｐ９　1　暗褐色土 10ＹＲ3/3 （黄褐色土少量含む）

図47　17号住居跡（１）

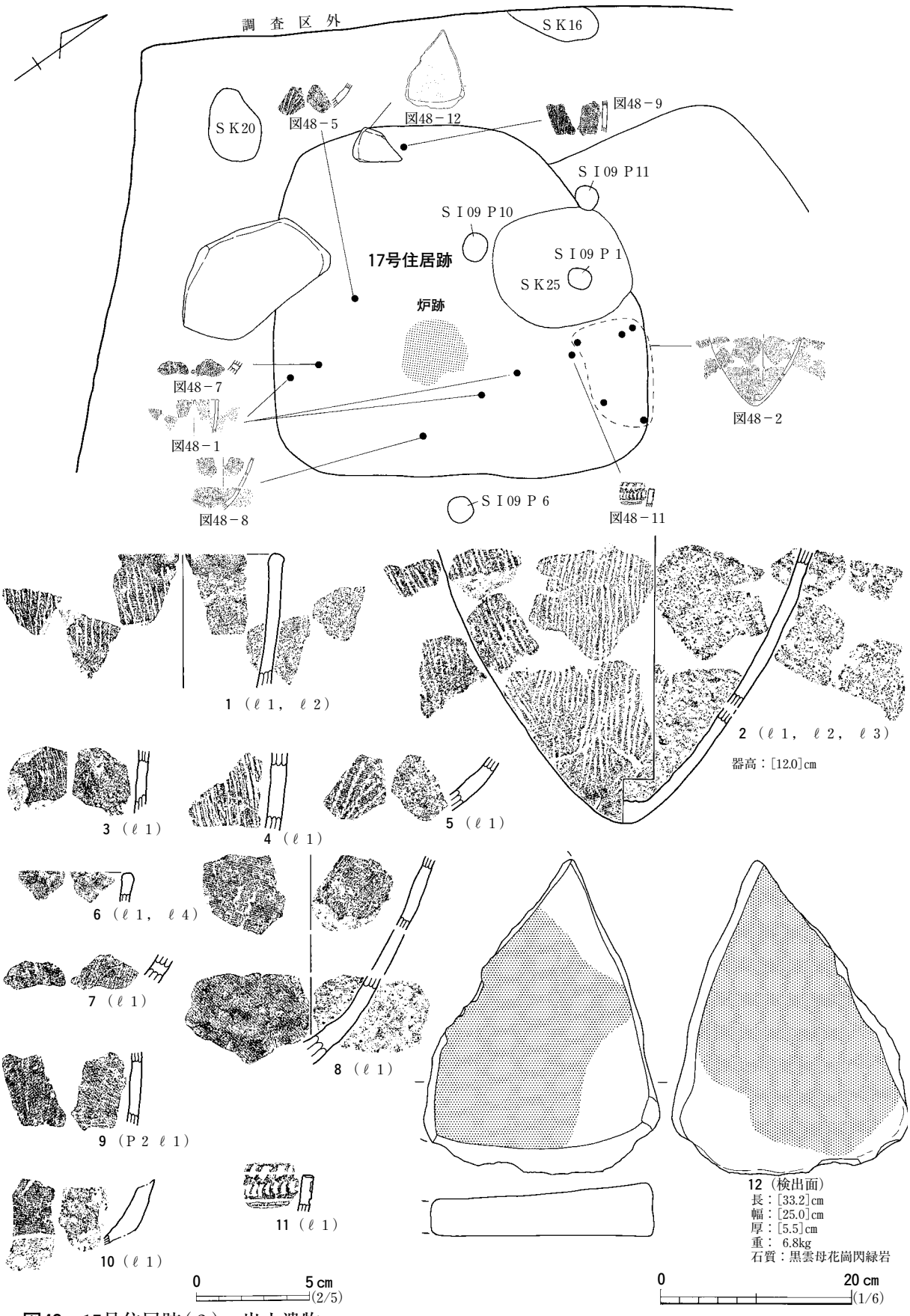


図48　17号住居跡（2）・出土遺物

いＲの撚糸文が認められる。内面は雑なナデである。

６～８・10は縄文時代早期前葉の無文系土器である。６は口縁部の小片であり，内外端が肥厚する。口端部は丸頭状であるが，指頭圧による調整のため歪んでいる。７は器厚が７㎜前後とやや厚く，外面はミガキが施されている。８は底部付近の２片である。外面には縦方向を基本としたユビナデ痕が残り，器面は凹凸が著しい。内面は２と同様に胎土中の小礫が表面に飛び出しザラザラした状態である。器厚は６㎜前後を測る。10は底部直上部分の破片であり，形状から尖底と判断される。外面は丁寧な，内面は雑なナデで調整されている。

11は縄文時代早期中葉の沈線文系の土器である。波状となる口縁部片であり，口端部端は平坦状となる。口端部にはキザミ，口端部直下に半截竹管による刺突列，その下に沈線文が付される。４・９は早期中葉～後葉に属する小片である。４は外面に条痕文が認められ，内面は雑なナデである。器厚は6.5㎜を測る。９は無文であり，器厚が5.5㎜前後，内外面は丁寧にナデられ整えられている。胎土中には金雲母を多量に含む。12は石皿であり，一部が欠損する。内外面ともに磨面が認められる。石材は周辺の基盤層と同一の花崗岩である。

ま　と　め　本住居跡は台形に近い方形プランとなる小型の竪穴住居跡である。住居跡内には炉跡１基と柱穴９個が存在する。柱穴は８個が周壁に沿って配置されるが，深く大きなＰ５のみ位置を違える。炉は中心部が尖底状に窪む構造となる。

本住居跡は検出面が表土下1.5ｍのＬⅤ・Ⅵであること，縄文時代早期後葉～末葉に属する９号住居跡と重複し，これより下位の検出面であることから，少なくとも縄文時代早期中葉以前に機能していたものと判断される。出土した土器片はいずれも堆積土中からの出土であるが，撚糸文系土器，及びこれに併行する無文土器が数量的に圧倒する。本住居跡の周囲には年代を違える遺構が集中することを勘案すれば，本住居跡の機能年代は早期前葉である可能性が高い。なお本住居跡内堆積土ℓ４から採取した炭化物については，放射性炭素年代測定の結果Ｂ．Ｐ．8410±40という年代が与えられている（付編２参照）。　（横須賀）

18号住居跡　ＳＩ18（図49・50，図版47・48・134）

遺　　構　本遺構は，調査区中央部Ｌ・M17グリッドに所在する縄文時代の竪穴住居跡である。立地は尾根上の緩斜面でも北向き急斜面の落ち際に位置している。検出面はＬⅢ中位である。32号住居跡と重複しており，本遺構の方が新しい。本遺構と時期が近い遺構としては，北西１ｍに29・40号住居跡，南東５ｍ程度の位置には19・38号住居跡がある。

住居の東半は流出したのか失われており，残存するのは西壁と南壁の一部のみである。想定される平面形は，方形を基調とする。規模は西壁が4.3ｍ，南壁の残存長は1.6ｍである。西壁から床面残存範囲の東端までは2.3ｍを測る。掘込の深さは最大27㎝である。

堆積土は，２層に分けられ，壁際に堆積するℓ２はＬⅥ粒を含むことから，壁の崩落土を含む土と考えられ，自然流入による埋没状況を想定している。

図49　18号住居跡

床面はＬⅥを平らに削り込んだもので，貼床などはない。床面からは炉と見られる焼土面とピット３個が検出されている。炉跡は床面の残存する範囲の北端部に位置している焼け面を地床炉と考えている。被熱の状況は弱い。Ｐ１は炉の南西に位置する。深さは40cm余りあり，柱穴の可能性がある。Ｐ２・３は西壁際の北寄りに連なって位置している。深さは浅く，機能は不明である。

遺　　物　本遺構からは，縄文土器236点，石器・石製品22点が出土している。土器は早期～前期を中心としており，ℓ１から晩期以降の遺物が出土している。特徴的な出土遺物を図50に示した。

１～７は早期中葉から後葉の時期に属する土器片である。１・２には刺突と沈線，４には絡条体圧痕，５には絡条体圧痕と円形竹管刺突，３・６・７には沈線が確認される。いずれも繊維を含まないか，微量しか確認できない。８～10は早期末葉の撚糸文－条痕文系の土器で，内面は無文となっている。13～25は地文に縄文の施される前期の土器である。縄文には０段多条，側面環付，末端環付，単節などが認められる。11・26は撚糸文が認められる。

12・27は縄文時代前期中葉に属すると思われる土器片である。12は隆帯で区画された口縁部上端に棒状工具による刺突を２段施す。隆帯以下は単節斜縄文が施される。27は底部で，櫛歯状工具に

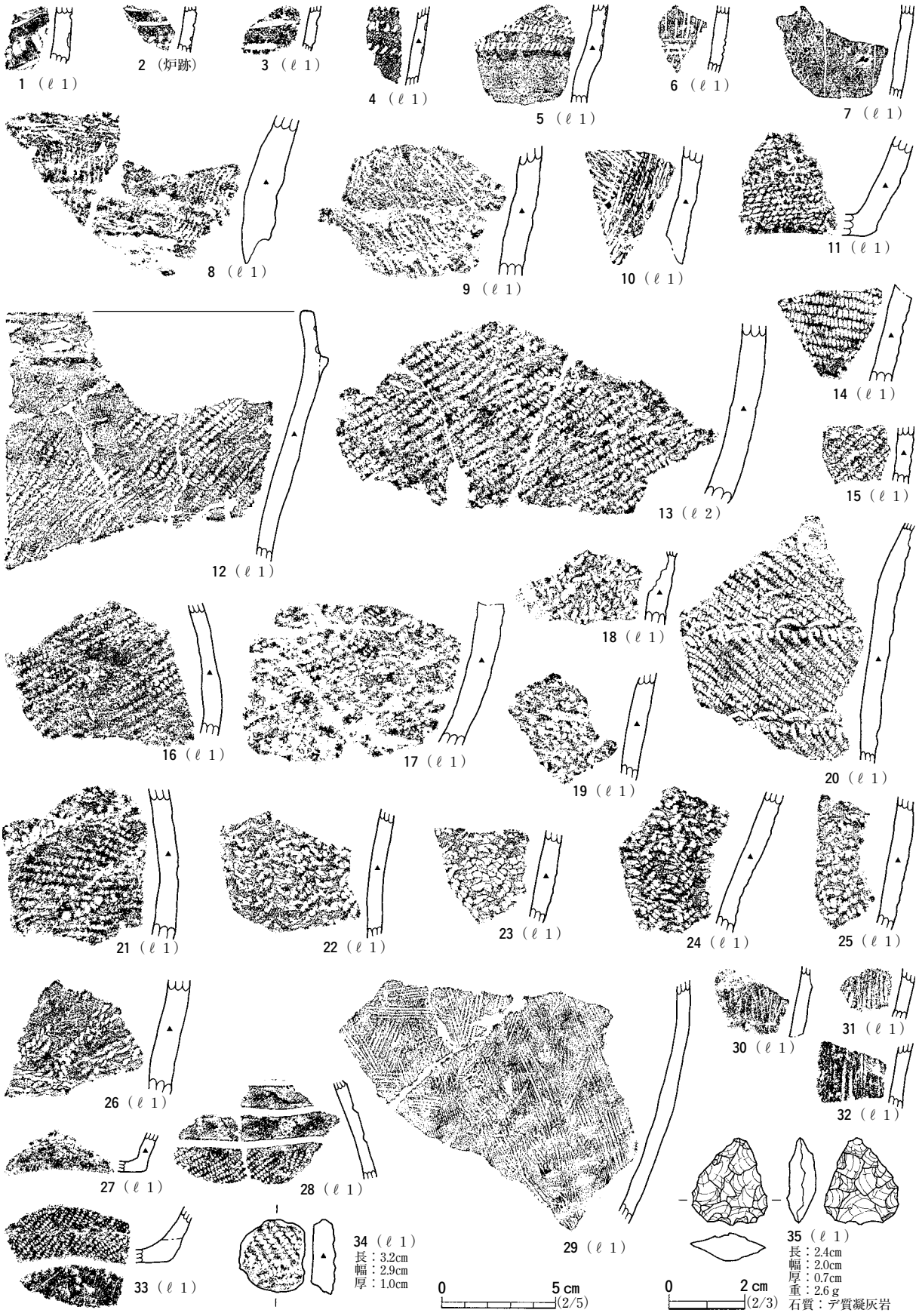


図50　18号住居跡出土遺物

よる横方向の有節沈線状の連続刺突が認められる。

28～33は弥生時代前期に帰属するであろう土器片である。28・33は精製土器と思われ，29～32は条痕文の施された粗製土器である。34は土器片製円盤で，前期の羽状縄文系土器を素材とする。

35は三角形を呈する全面に調整剥離がなされた小型の石器で，石鏃もしくはその未製品と考えている。

ま　と　め　本遺構は縄文時代に属する方形の竪穴住居跡である。掘込内からは地床炉と小穴が見つかっている。時期は，床面からの遺物が無く，確定は出来ない。堆積土中に主体的に含まれる土器の年代から，縄文時代前期前葉～中葉と考えている。（山元）

19号住居跡　ＳＩ19（図51・52，図版49・50・134）

遺　　構　本遺構は，M・N18・19グリッドに位置する縄文時代の竪穴住居跡である。立地は調査区中央部の尾根上緩斜面に位置している。検出面はＬⅢ中位で，褐色～暗褐色土の堆積範囲として確認した。重複する遺構は21号住居跡，28号土坑である。当初，21号住居跡との重複関係を認識せずに調査を開始したが，完掘後に重複することに気づいた。28号土坑については，本遺構精査後にＬⅥ上面で検出しており，本遺構より古いものと認識している。本遺構北側の尾根の縁には晩期の20～22号住居跡が並び，北西５ｍに18・32号住居跡，南西１ｍに38号住居跡，南東４ｍに26号住居跡など縄文時代前期の住居跡が存在する。

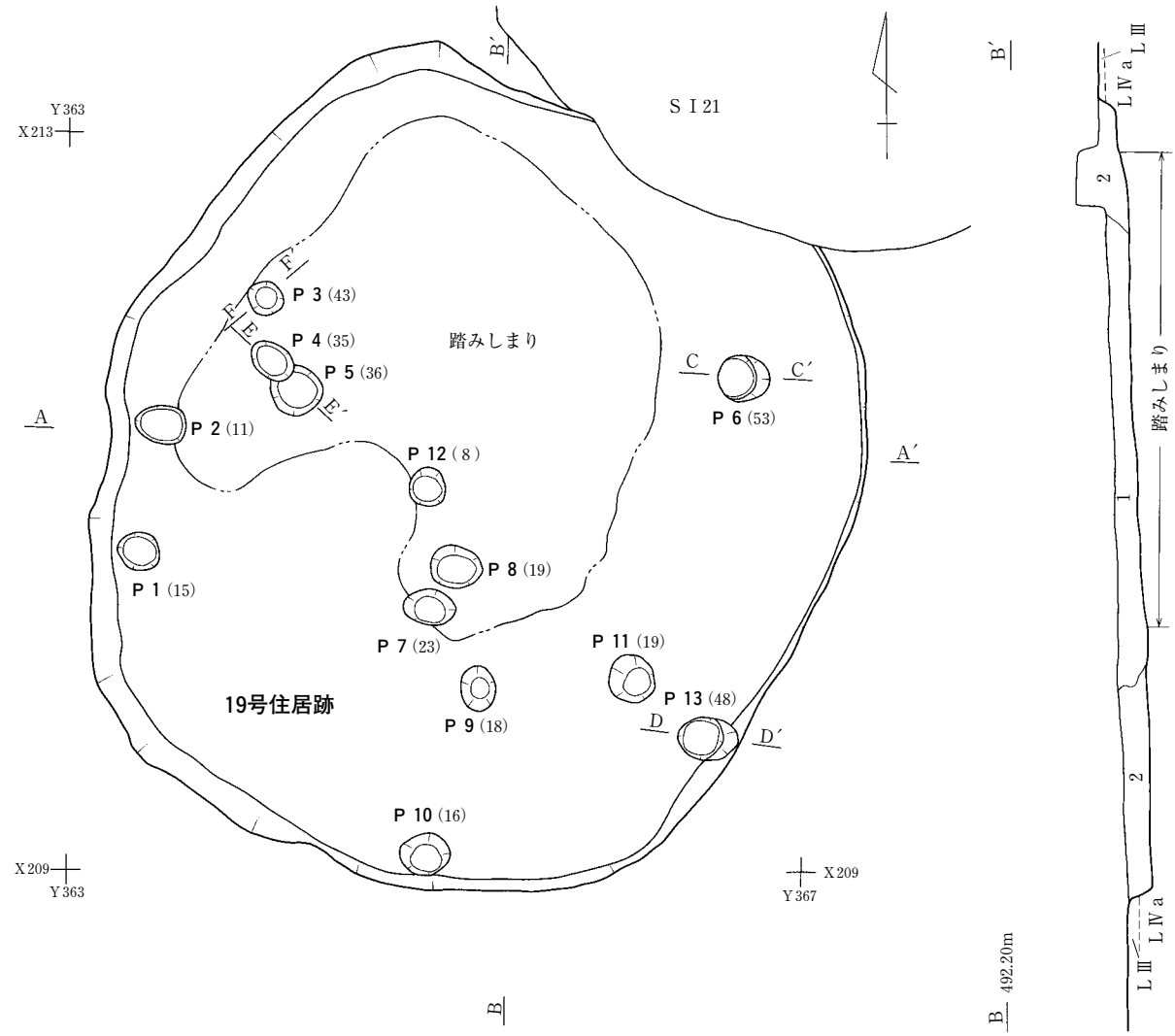
掘込の平面形は長軸を北東－南西方向にもつ隅丸方形を呈する。規模は長軸4.3m，短軸4.0mを測る。掘込の深さは残りの良い西壁で30㎝程度である。堆積土は３層に分層される。堆積土中にはＬⅥをブロック上に含んでおり，その混入状態から人為的に埋め戻されたものと考えている。

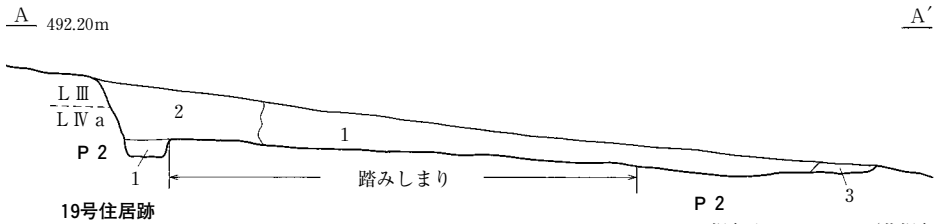
床面は，ＬⅥを平らに削ったもので貼床はされない。床面の中央部から北西隅にかけて逆「Ｕ」字形に硬化しており，踏みしまりと考えている。付帯施設としてピット13個を検出した。そのうちＰ３・６・13は深さ40㎝を超すもので，主柱穴と考えられる。その他のピットは，深さ15～30㎝程度の小型のもので，不規則に配置されている。

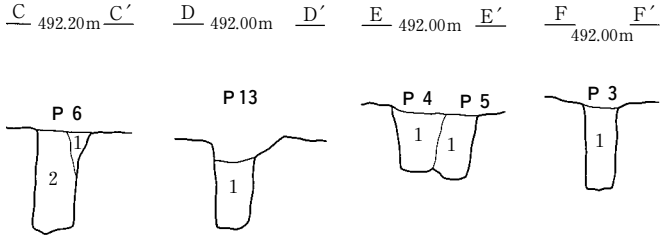
遺　　物　いずれも堆積土中から出土したもので，床面から出土したものは認められない。数量は縄文・弥生土器205点，石器・石製品75点を数える。図52に主要な遺物を示した。

１・２・７・８は胎土に繊維を含まず，櫛歯状工具などによる押引状の刺突と平行沈線によって文様を描くもので，早期中葉～後葉に帰属するものである。４～６・10は外面に撚糸文が施される繊維土器で，早期末葉に比定される。３・９は平行沈線を乱雑に引いた繊維土器で，縄文時代早期後葉のものと考える。

11～21は縄文時代前期に比定される土器で，いずれも胎土に繊維を含む。12・13はループ文が重層施文される。12の口唇部には条線帯が見られる。11・14・15は櫛歯状工具による刺突を地文のように施文している。14はその上から沈線で文様を描く。11は沈線で区画した刺突文帯で文様を描くものと思われる。15は底部で，底面にも同工具による刺突文を廻らせている。16は無地の器面に爪形文







19号住居跡

1　黒褐色土 10Ｙ Ｒ3/2（黄褐色土粒多量，炭化物含む）
2　暗褐色土 10Ｒ Ｙ3/4（黄褐色土粒含む）
3　褐色土 10Ｙ Ｒ4/4（黄褐色土粒含む）

Ｐ 2
1　褐色土 10Ｙ Ｒ4/4（黄褐色土塊との混土）

Ｐ 3
1　暗褐色土 10Ｙ Ｒ3/4（黄褐色土塊との混土，しまり強）

Ｐ 4
1　暗褐色土 10Ｙ Ｒ3/4（黄褐色土塊との混土，しまり強）

Ｐ 5
1　暗褐色土 10Ｙ Ｒ3/3（黄褐色土塊との混土）

Ｐ 6
1　暗褐色土 10Ｙ Ｒ3/4（黄褐色土少量含む，しまり弱）
2　暗褐色土 10Ｙ Ｒ3/4（黄褐色土との混土）

Ｐ13
1　暗褐色土 10Ｙ Ｒ3/3（黄褐色土との混土）

0　2 m
(1/40)

図51　19号住居跡

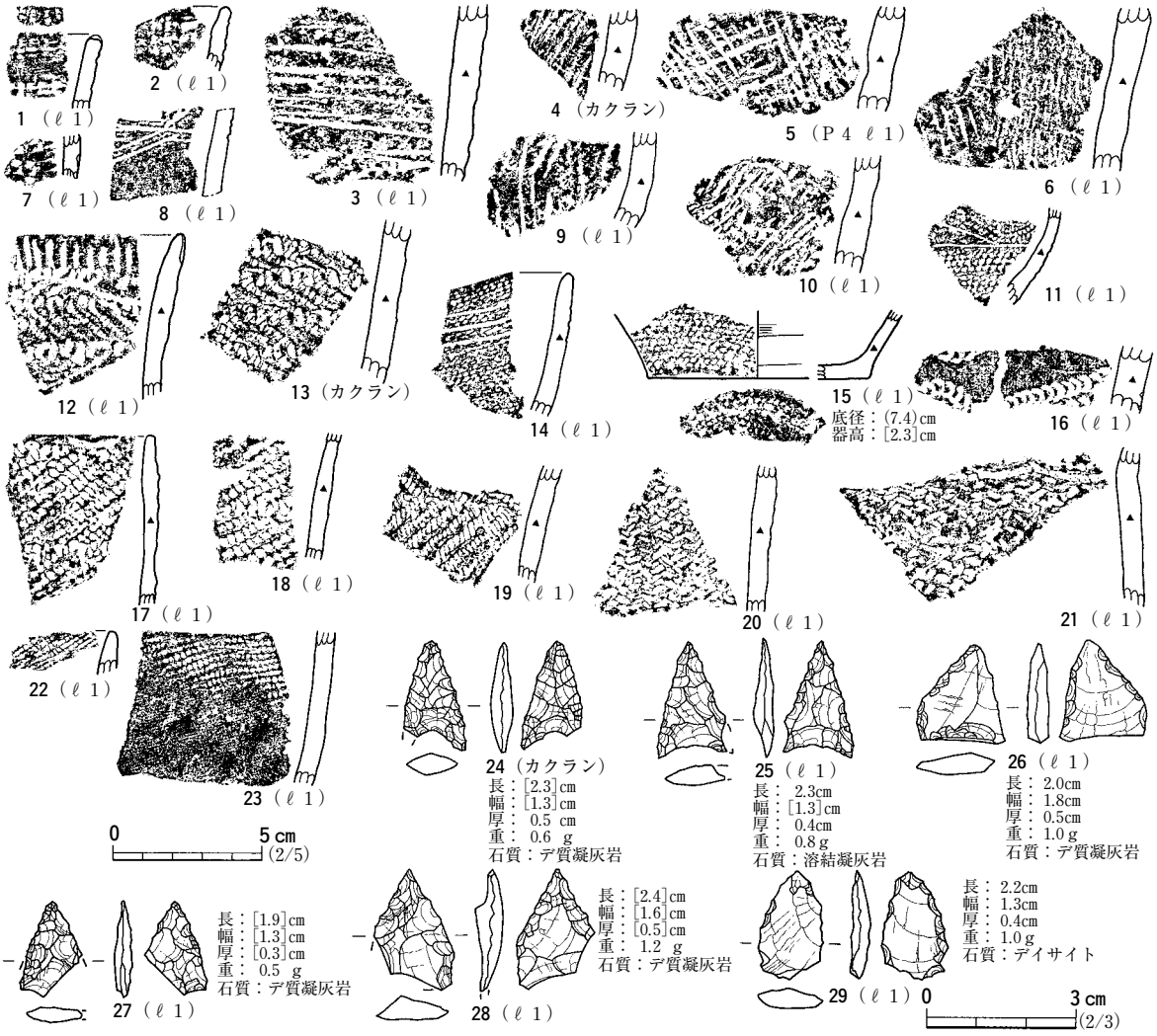


図52　19号住居跡出土遺物

で文様を描く。17～21は地文のみ認められるもので，原体には単節，0段多条，組紐が見られる。

22・23は胎土に繊維を含まず，細密な縄文が施されるもので，弥生時代前期に帰属するものと思われる。

24～29は石器で，いずれも石鏃と思われる。24・25は凹基，27・28は基部を欠損する。26・29は剥片の縁辺に調整剥離を若干加えたもので，未成品であろうか。

ま　と　め　本遺構は，隅丸方形を呈する縄文時代の住居跡である。掘込内からは，柱穴と思われるピットと踏み締まりを検出している。炉跡は確認できない。時期は，床面から出土した遺物がなく，新旧関係も判然としておらず確定できない。堆積土中の出土遺物は，弥生時代前期の土器も出土しているが，縄文時代前期の土器が大半を占めており，検出面がLⅢ中位であることも併せて，前期前葉～中葉のものである可能性を示しておく。　（山元）

20号住居跡　ＳＩ20（図53，図版51・52）

遺　　構　本遺構は，Ｍ・Ｎ17・18グリッドにて検出された，竪穴住居跡である。立地は調査区中央部，丘陵尾根上の緩斜面だが，北向きの急斜面の落ち際に位置している。検出面はＬⅢ上面で，暗褐色土の堆積範囲として確認した。21号住居跡と重複し，本遺構精査後に21号住居跡を検出しているため，本遺構の方が新しいと判断される。本遺構から南東方向の尾根の縁には，近い時期と思われる22・25・28号住居跡が並ぶ。

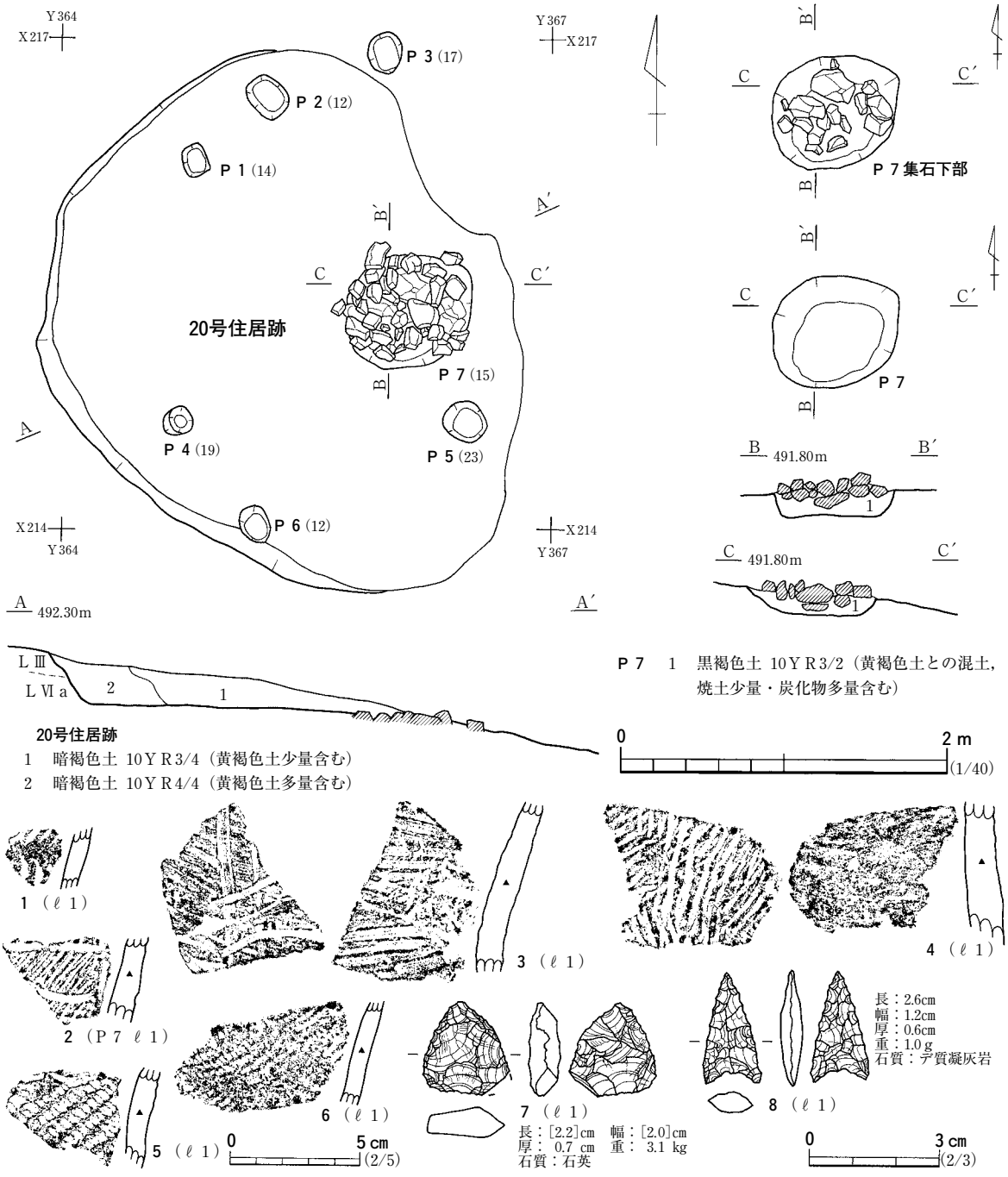


図53　20号住居跡・出土遺物

東壁は土砂の流出のためか失われている。残された西壁から南壁にかけての形状から想定される掘込の平面形は，円形を基調とすると思われる。規模は，壁が残る部分での最大径が3.4m，西壁から床面が残存する東端までは2.9mである。壁の高さは最大34cmを測る。堆積土は2層に分層され，斜面上位から流入したような堆積状況が窺える。

床面はＬⅥを削ったもので，貼床はされない。住居範囲内からはピット7個が検出されている。Ｐ1～6は周壁沿いに配置される。いずれも小型で，深さも浅く10～20cm程度しかない為，機能は不明である。Ｐ7は床面が残存する範囲の中央東寄りに位置する。掘込の上部には集石を伴っている。集積された石はいずれも花崗岩礫で，被熱はしていない。ピットの堆積土中には炭化物，焼土を含んでいた事から，炉であった可能性も考えられるが，焼け面などは存在せず，これの機能についても不明である。

遺　　物　いずれも堆積土中から出土したもので，床面で検出されたものはない。数量は縄文土器68点，石器33点である。土器は早期・前期のもので占められる。特徴的なものを図53に示した。1は爪形の刺突文が施され，早期中葉に比定される。2・4は外面撚糸文，内面条痕が認められる繊維土器で，早期末葉に比定される。3は内外面に条痕が認められ，外面には肋骨状の模様が描かれる繊維土器である。早期後葉に属するものだろう。5・6は単節縄文が施される繊維土器で，前期前半に帰属するものだろう。7は無色透明の水晶製の石鏃と思われるが，尖頭部および縁辺に鋭さが欠けており，石鏃未成品かと思われる。8は凹基の石鏃である。

ま　と　め　本遺構は，円形を呈する縄文時代の竪穴住居跡である。付帯施設としてピットを検出しているが，柱穴として機能しているか不明である。また，掘込の中央から集石を伴ったピットも検出されているが，これについては廃絶された炉であった可能性もある。本遺構の時期については，床面から出土した土器がなく，確かなことはいえない。検出面がＬⅢ上面であること，掘込の形状が円形であることなどから，縄文時代晩期に属するものかと思われるが，該期の土器の出土はなく断定するには至らない。（山元）

21号住居跡　ＳＩ21（図54，図版53・56）

遺　　構　本遺構は，N17・18グリッドに所在する竪穴住居跡である。立地は，調査区中央部，丘陵尾根上の緩斜面だが，北向きの急斜面の落ち際に位置している。検出面は，ＬⅢ中位である。20号住居跡精査後に19号住居跡と共に確認した。検出当初は19号住居跡と重複はないものとして調査を開始したため明確な新旧関係は明らかでない。検出面の違いから20号住居跡よりも古いものとは言える。

掘込の平面形は，円形である。東壁は土砂の流出と試掘坑によって一部失われている。長軸は北西－南東方向を向く。規模は，長軸3.6m，短軸3.0m程度である。掘込は西壁で42cm残存していた。堆積土は3層に分層されるが，各層に炭化物やＬⅥを多く含み人為的に埋められたものと判断している。

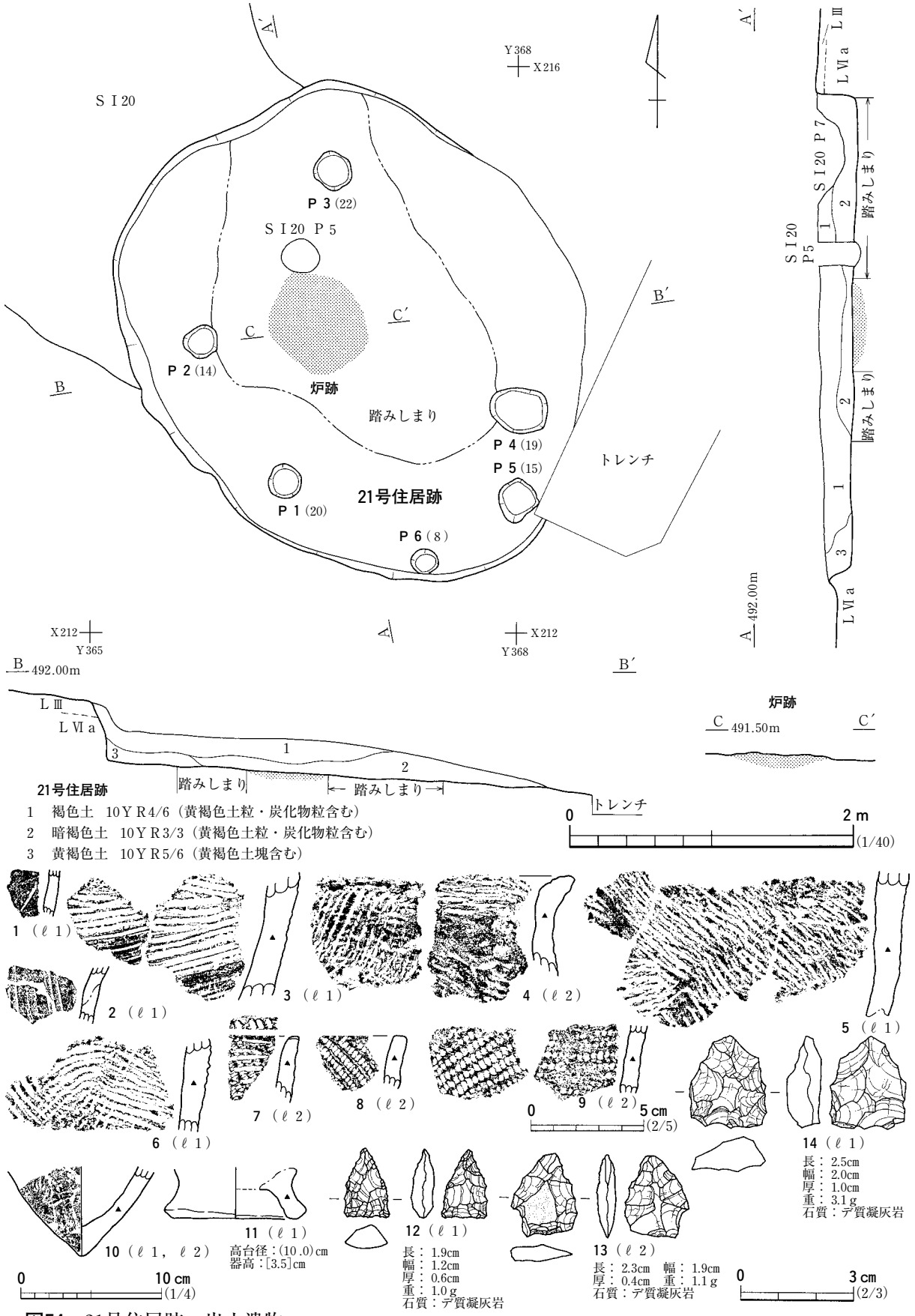


図54　21号住居跡・出土遺物

床面はＬⅥを削ったもので，貼床などはされない。掘込の中央から北壁に向かって床面が硬化しており，踏みしまりによるものと判断できる。掘込の中央には，焼け面が存在しており，地床炉と考えている。62×74cmを測る掘込と同一軸の不整円形を呈する範囲が焼けている。焼土化した厚さは最大９cmである。ピットは炉跡の北・南・西に１個ずつと南東隅付近に３個検出している。いずれも深さが10～20cmの浅いものである。

遺　　物　堆積土中から出土したのみで，床面に残された遺物はなかった。数量は，縄文土器155点，石器52点である。縄文土器については，早期～前期に比定される細片が主体となる。石器は多くが剥片である。図54には特徴的な遺物を示した。１は沈線，２は条痕が認められる細片で，胎土に繊維を含まない。早期中葉に比定される。３は外面に条痕が認められる繊維土器で，早期後葉に属する。４～６・10は外面に撚糸文，口唇部内面に条痕が施される繊維土器であり，底部は尖底である。９は内外面に右撚りの単節縄文が施される。これらは早期末葉に比定される。７は縦走する縄文地に沈線によって文様を描き，口唇端部には刻みが施される。早期末葉から前期初頭に位置付けられる。８は０段多条の縄文が施されている。11は高台状の底部で，胎土に繊維を含む。これらは前期前半に比定される。12～14は石鏃である。13・14は形状が不整で，未成品と思われる。

ま　と　め　本遺構は，縄文時代の円形を呈する竪穴住居跡である。中央には炉が配され，その周囲に踏み締まりが認められる。床面からの遺物がなく，時期を判断する材料に乏しい。堆積土中の遺物には，晩期に属する遺物は存在していないものの，周囲の時期が明確な住居跡と比較して，平面形，規模，炉跡の存在などから縄文時代晩期のものとしておく。（山元）

22号住居跡　ＳＩ22（図55・56，図版54・56・135・136・143）

遺　　構　本遺構は，Ｎ・Ｏ18・19グリッドに所在する竪穴住居跡である。立地は，調査区中央部の尾根上，北向きの急斜面の落ち際に位置している。検出面はＬⅢ上面であり，暗褐色～黒褐色の堆積範囲として確認した。重複する遺構は，28・29・31・32号土坑であり，いずれよりも本住居跡の方が新しい。本遺構の周囲には，尾根の縁に沿って１ｍ以内の位置に21・25・28号住居跡など，縄文時代晩期と考えられる住居跡が隣接する。

平面形は円形を基調としているが，東壁の隅はやや角張ったような形状である。規模は南北3.9m，東西4.0mを測る。検出面からの深さは，残りの良い西壁で52cmを測る。壁はほぼ垂直に立ち上がっている。堆積土は５層に分層される。壁際に堆積するℓ３～５はＬⅥを多量含み，それらが作り出すレンズ状の窪みにℓ１・２が堆積していることから自然に埋没したものと考える。

床面は，地山のＬⅥを削ったもので，貼床はされない。掘込の中央部から南壁にかけては楕円形状に床面が硬化しており，踏み締まりとして認識している。掘込の中央やや西寄りには円形の焼けた窪みが存在しており，地床炉として機能していたものと判断している。焼け面部分の規模は径約40cmで，厚さは７cmである。窪みは径22cmで，床面から２～３cm窪んでいる。窪みの周囲は強く焼けているが，窪み内部の焼け方は若干弱い。断面図Ａ－Ａ´上のℓ６が炉内の窪みに堆積する土で，

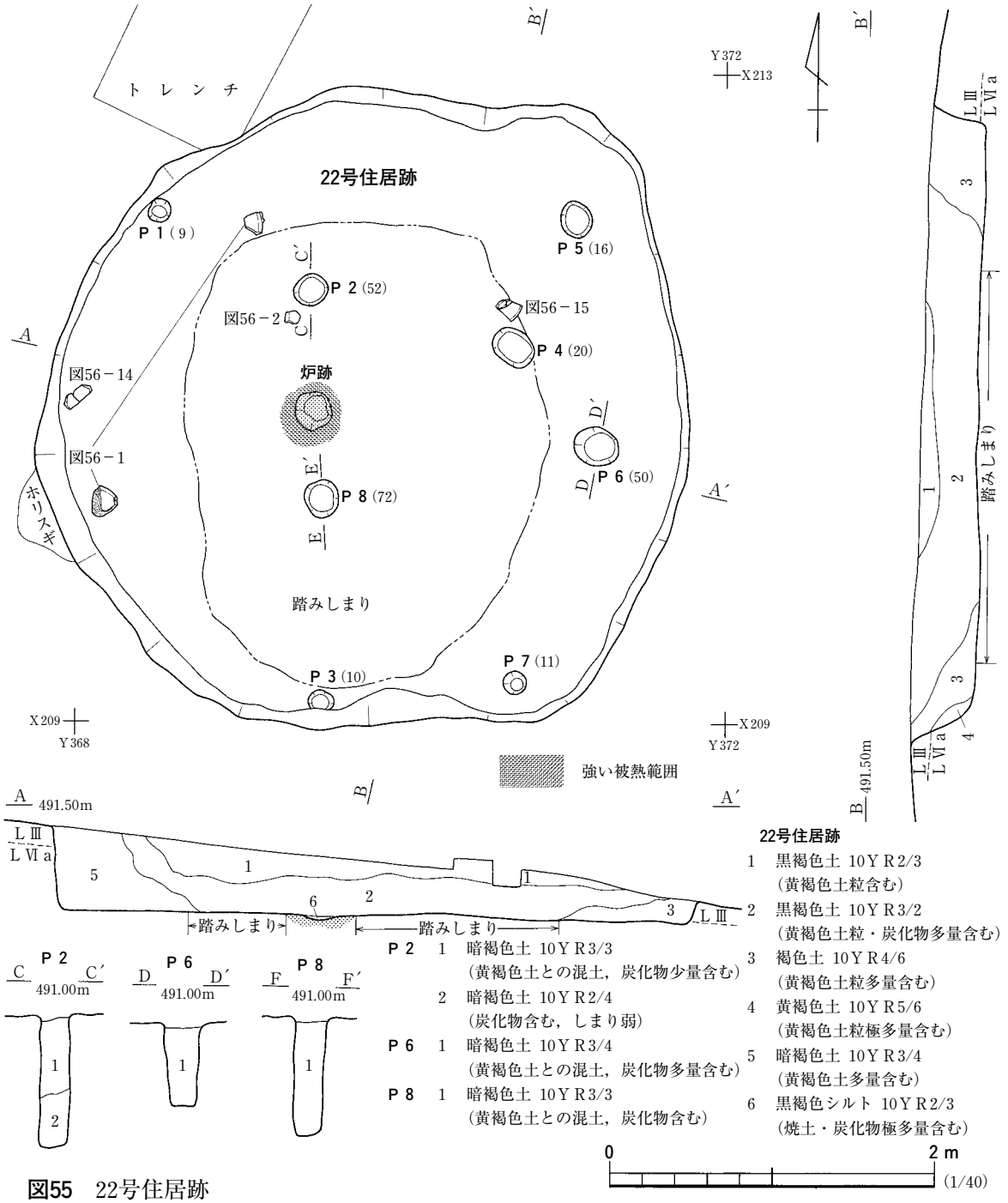


図55　22号住居跡

焼土・炭化物を多量に含んでいる。

ピットは８個検出している。このうち，炉の北・東・南に配されるＰ２・６・８は50～80㎝の深さを有しており，主柱穴と想定される。そのほか，Ｐ３・７は南壁際中央部に対峙するように配されている。硬化面の範囲と併せてこの付近が入口部であった可能性もある。Ｐ１・５は住居の北東および北西隅に配され，支柱穴だと考えられる。ピット内堆積土は主柱穴が暗褐色土であるのに対し，それ以外のものは褐色系の相対的に明るい色調の土が堆積していた。

遺　　物　縄文土器231点，石器85点が出土している。出土土器のうち，多くが堆積土中の出土で

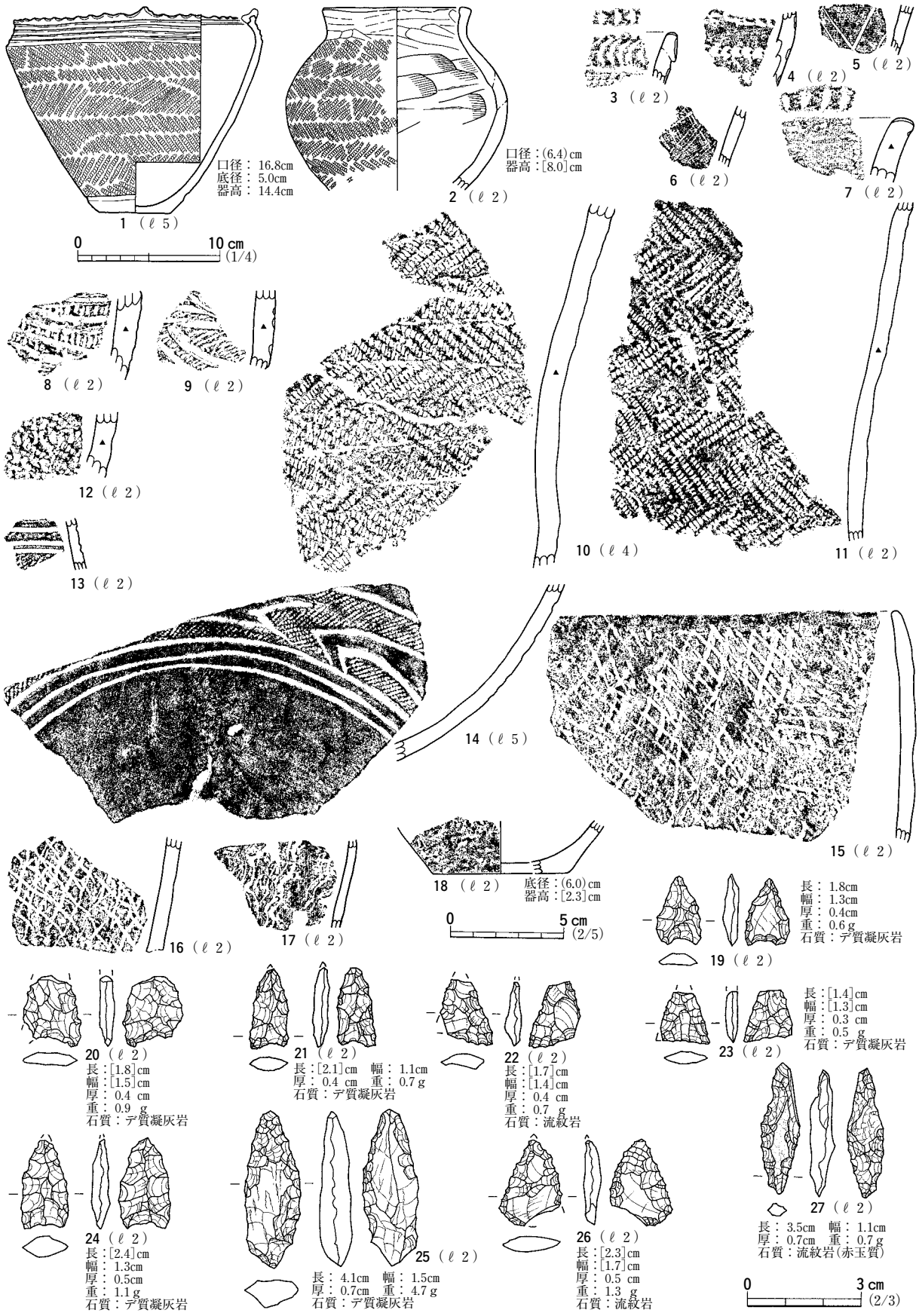


図56　22号住居跡出土遺物

あるが，図56－２・14・15に示した大破片の資料は堆積土最下層の床面直上から出土している。

図56に主な遺物を示した。１は西壁際ℓ５中部から出土した略完形の資料であり，土砂流入の際に一緒に流れ込んだものと思われる。器形は鉢形で，口縁部は横位の沈線を４条廻らせる。口縁部は小波状で，小突起が１ヶ所つく。体部は単節縄文を羽状に施している。２は短頚壷形で，口縁部は無文である。体部は単節縄文を羽状に施文する。14は雲形文の施される浅鉢，15は網目状撚糸文の施される粗製の深鉢である。いずれも晩期中葉に位置付けられるものである。

これら以外は，堆積土中から小破片の状態で出土したもので，13・16～18以外は遺構に伴うものではないと考えている。３～６は押引状の刺突文や沈線による格子文を描くもので早期中葉に比定される。７は口縁端部に刻みを持つ無文の繊維土器で，早期後葉のものである。８・９は撚糸文地文に弧線文を描く繊維土器で，早期末葉のものである。10～12は地文縄文の繊維土器で，10・11が羽状，12はループ文である。それぞれ前期初頭，前葉に比定されよう。

13・16～18は床面直上出土土器と同類の破片である。13は横走する沈線下に撚糸文が施される精製壷形土器の破片である。16は網目状撚糸文，17は櫛歯状工具による蛇行する条線文が施文される粗製深鉢の破片である。18は無文の底部破片である。

19以下には石器を示している。19～26は石鏃で，19～24は凹基で鏃身が長目の形状のものが目立つ。25は整形途上の未成品と考える。26は欠損しているものの円基である。27は両端が尖頭部となる石錐である。

ま　と　め　本遺構は，円形で，中央に地床炉を有する竪穴住居跡である。炉跡の周囲には踏み締まりと考えられる硬化面が認められた。主柱穴は３本で，炉跡の南北脇と東壁際に配されている。南壁際には小型のピットが２個配され，入口部であった可能性を持つ。遺構の時期は，出土遺物から縄文時代晩期中葉大洞Ｃ２式期に属するものと考えている。（山元）

23・24号住居跡　ＳＩ23・24（図57，図版55・56）

遺　　構　本遺構は，M19グリッドで検出されている。検出状況は，ＬⅢ上面で４個のピットを伴う２ヶ所の顕著な焼け面を検出した事により，掘込がない，もしくは失われた住居跡であると考え，調査・記録を行なった。

23号住居跡炉跡とした焼け面は，南北50㎝×東西60㎝の不整円形の範囲が焼けている。24号住居跡炉跡としたものはそれよりも南東に1.5m程離れた位置から検出されている。範囲は径85㎝の不整円形を呈し，西半が特によく焼けている。いずれの炉跡も下部に掘形などはなく，地床炉であったと考えられる。

ピットは23号住居跡炉跡の北西約１mに２個，西２mに１個，同じく東側0.7mで24号住居跡炉跡の北1.4mの位置に１個の計４個検出されている。いずれがどの炉跡に伴うものかは確定できなかったので，番号は通しで付してある。いずれも円形であるが，検出面からの深さは20～30㎝と浅い。ピット内の堆積土はＰ１・４が褐色土，Ｐ２・３が暗褐色土のそれぞれ単層である。

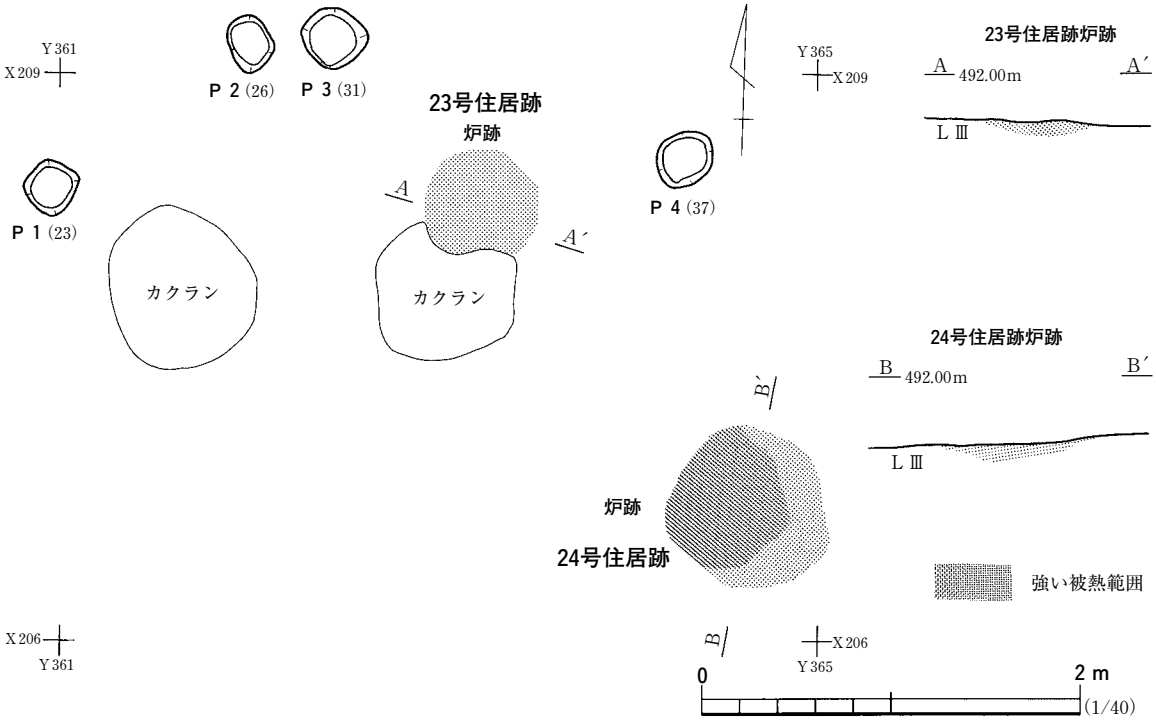


図57　23・24号住居跡

遺　　物　これらからは遺物は出土していない。しかし，検出時に周囲から出土した土器片は縄文時代晩期以降弥生時代前期までのものが多く出土していた。

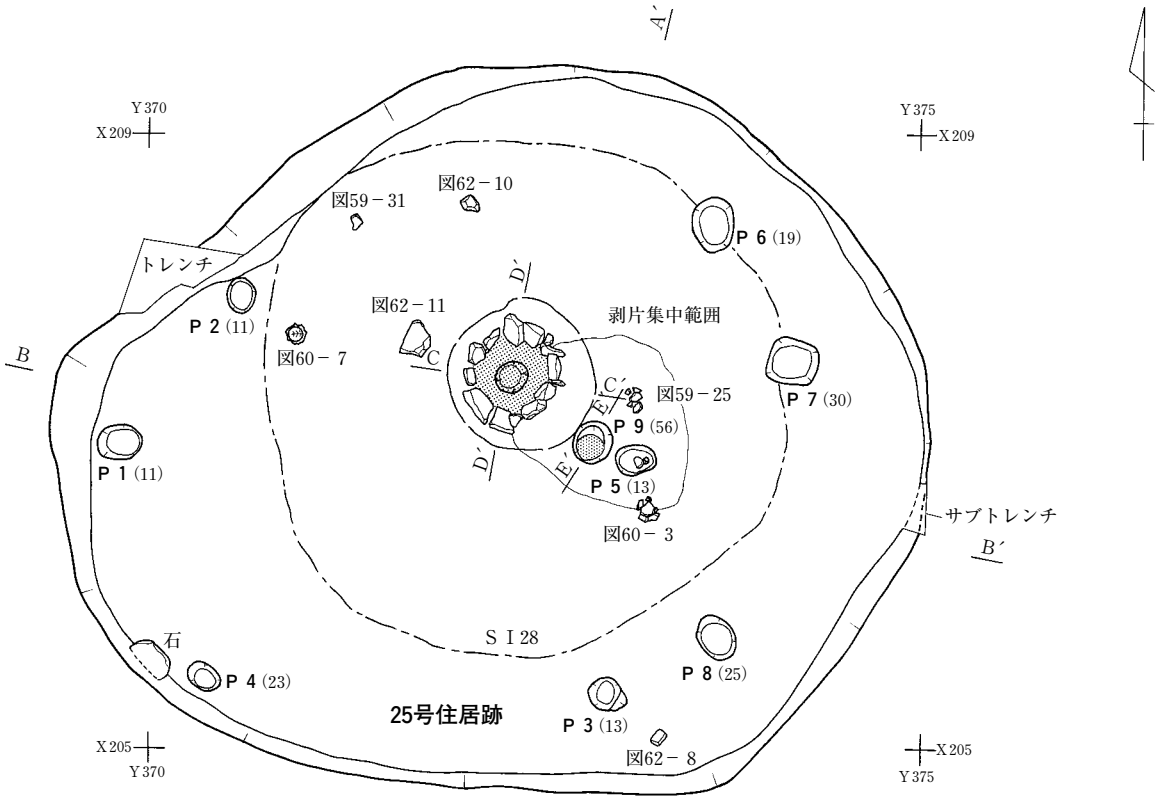
ま　と　め　これらの遺構は，焼土面とピットで構成されるもので，おそらく住居跡と想定されるものである。時期は，検出面から縄文時代晩期～弥生時代前期と考えられる。　（山元）

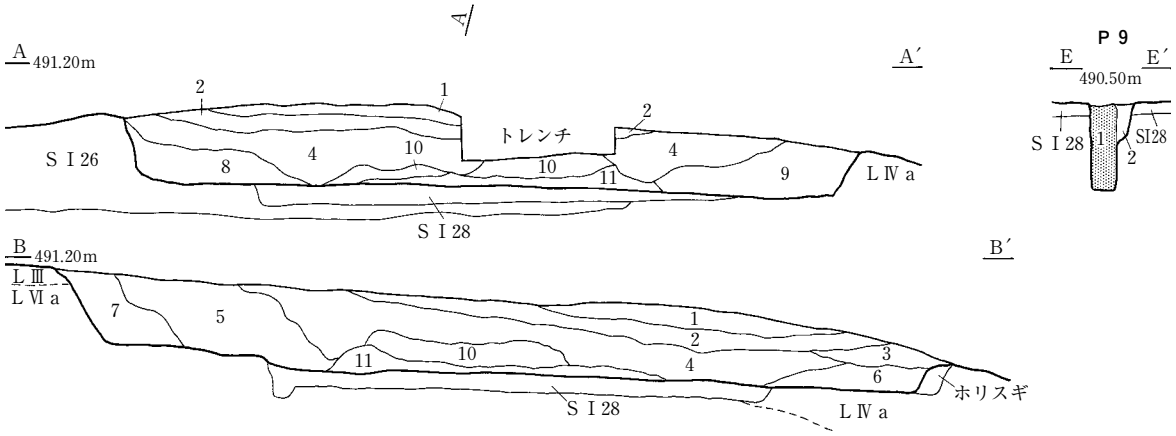
25号住居跡　ＳＩ25（図58～62，図版57～60・135・144・145）

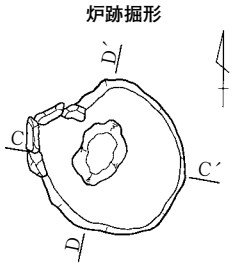
遺　　構　調査区中央部O19グリッドに所在する。丘陵尾根上から北向き急斜面の落ち際に位置している。検出面はＬⅢ上面で，暗褐色～黒褐色土の堆積範囲として確認している。重複する遺構は，26・27・28号住居跡，30号土坑である。いずれも本遺構の方が新しい。特に28号住居跡とは完全に重複した位置に存在し，28号住居跡を埋め立てた上に本住居の床面が存在している。近い時期の遺構としては本住居跡の北東には尾根の縁に沿って20～22号住居跡が確認され，南側の尾根上には掘込の確認できない住居跡群が存在する。

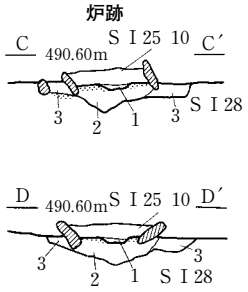
平面形は不整円形である。長軸方向はほぼ東西である。規模は東西5.7m，南北4.7mを測る。深さは遺存状況の良い西壁で52cmを測り，南壁でも40cmを測る。堆積土は11層に分層される。ℓ１～９はその土質から自然流入土と判断される。ℓ10・11は住居の最下層に堆積する土で，石囲炉の内部にまで堆積している。その土質から何らかの意図をもって住居跡の中央および炉を埋めたものと考えている。

床面は，西端はＬⅥａ層で，中央部は28号住居跡堆積土，南部は26号住居跡堆積土，東端はＬⅣａを床面としている。特に貼床はされず，硬化面なども認められない。









炉跡

1　黒褐色土 10ＹＲ3/2（焼土・炭化物多量含む）
2　黒褐色土 10ＹＲ3/2（焼土・炭化物多量含む，しまり強）
3　黒褐色土 10ＹＲ2/2（焼土極多量含む，しまり強）

25号住居跡

1　黒褐色土 10ＹＲ2/2（黄褐色土塊少量含む）
2　褐色土 10ＹＲ4/4（パミス含む）
3　暗褐色土 10ＹＲ3/4（黄褐色土含む）
4　黒褐色土 10ＹＲ3/2（黄褐色土・炭化物少量含む）
5　暗褐色土 10ＹＲ3/4（黄褐色土多量含む）
6　暗褐色土 10ＹＲ3/3（黄褐色土少量含む）
7　褐色土 10ＹＲ4/6（黄褐色土極多量含む）
8　暗褐色土 10ＹＲ3/3（黄褐色土含む）
9　暗褐色土 10ＹＲ3/3（黄褐色土少量含む）
10　暗褐色土 10ＹＲ3/4（黄褐色土との混土，しまり強）
11　黒褐色土 10ＹＲ2/2（炭化物多量含む）

図58　25号住居跡

住居の中央やや北寄りに，石囲炉を検出している。長径75cm，短径65cmをはかる。大小14個の花崗岩礫を円形に組んでいる。火床面は中央がやや窪む。炉内の堆積土は，火床面上の窪みにはまるℓ１のみである。石組部分には住居内堆積土ℓ10が堆積している。炉は下部に掘形を持っており，この埋土がℓ２・３である。この掘形は下の28号住居跡の炉を壊している。掘形の形状は不整円形で，西側には28号住居跡炉跡の石組みが露出する。規模は，直径約１ｍを測る。掘形の中央部分にも長径50cm，短径25cmの窪みを持つが，意図は不明である。掘形の深さは石組み部の外部で床面から10cm，内部で20cm程度である。

ピットは９個検出している。東壁際に４個，西壁際に３個配され，炉の南東側に２個連なっている。炉のすぐ脇のＰ９のみが深さ56cmと深く，柱痕を持っている。それ以外は深さ10～20cmの浅いものである。

遺　　物　遺物のほとんどが堆積土ℓ３・４からの出土で，床面から出土した遺物は，僅かに図59－25・32に示した粗製の深鉢，図62－８・10に示した磨石，図62－11に示した石皿があるに過ぎない。また，炉の東側に剥片，砕片，石鏃未成品が集中して出土している。出土数量は，縄文・弥生土器771点，石器1,018点である。土器は，包含層を掘り込んでいるため早期・前期・晩期など雑多な時期のものを含む。石器は白色・赤色を呈する流紋岩が大半を占め，包含層中に多くみられるデイサイト質凝灰岩の割合は低い。主な遺物を図59～62に示した。

図59－１～10は，床面出土土器よりも明らかに古い特徴を持つもので，本遺構に伴うものではないと考えている。１以外の土器はいずれも胎土に繊維を含んでいる。１は早期中葉の土器で，幅の狭い先割れの工具による刺突を口縁部および口端部に施す。２・３・５は早期後葉の土器で，内外面に条痕文が認められる。段を有するもの(２・３)と口縁部が外反するもの(５)がある。４は早期末葉の撚糸文上に沈線で文様を描くものである。内面は無紋である。６・７は前期初頭の縄側面圧痕と沈線によって文様を描くものである。８は前期前葉の土器で，口縁部条線帯の下に半裁竹管による刺突を３列施す。９・10は櫛歯状工具による有節沈線もしくは連続刺突を加えるもので前期中葉に比定される。

図59－11～16・23・43は床面出土土器と年代の近い，晩期の精製土器である。11は口縁部と体部に２段の羊歯状文の文様帯を持ち，その間のくびれ部に逆「Ｓ」字状の文様を充填した縄文帯を挟んでいる。12は平坦な口端部に沈線を一巡させ，その外面側に凹凸をつけて小波状としたものである。口縁部には沈線を４条廻らせ，その下位に雲形文描いている。内面には炭化物が全面に付着する。23は雲形文の下部の破片と思われる。13～15は鉢もしくは壷形土器の口縁部の一部と思われ，沈線が横走する。口端部を深く抉った刻みを加えるもの(13)，列点を加えるもの(16)が認められる。43は口縁部の突起である。内外面に単節斜縄文，口端部には棒状工具の刺突が施される。図59－17～22・24は，弥生時代前期に比定される変形工字文から派生した文様の一部と思われるものを示した。17・18については波状文と言った方が相応しいかもしれない。42は精製土器の無文部と思われ，外反する器形を持つ。

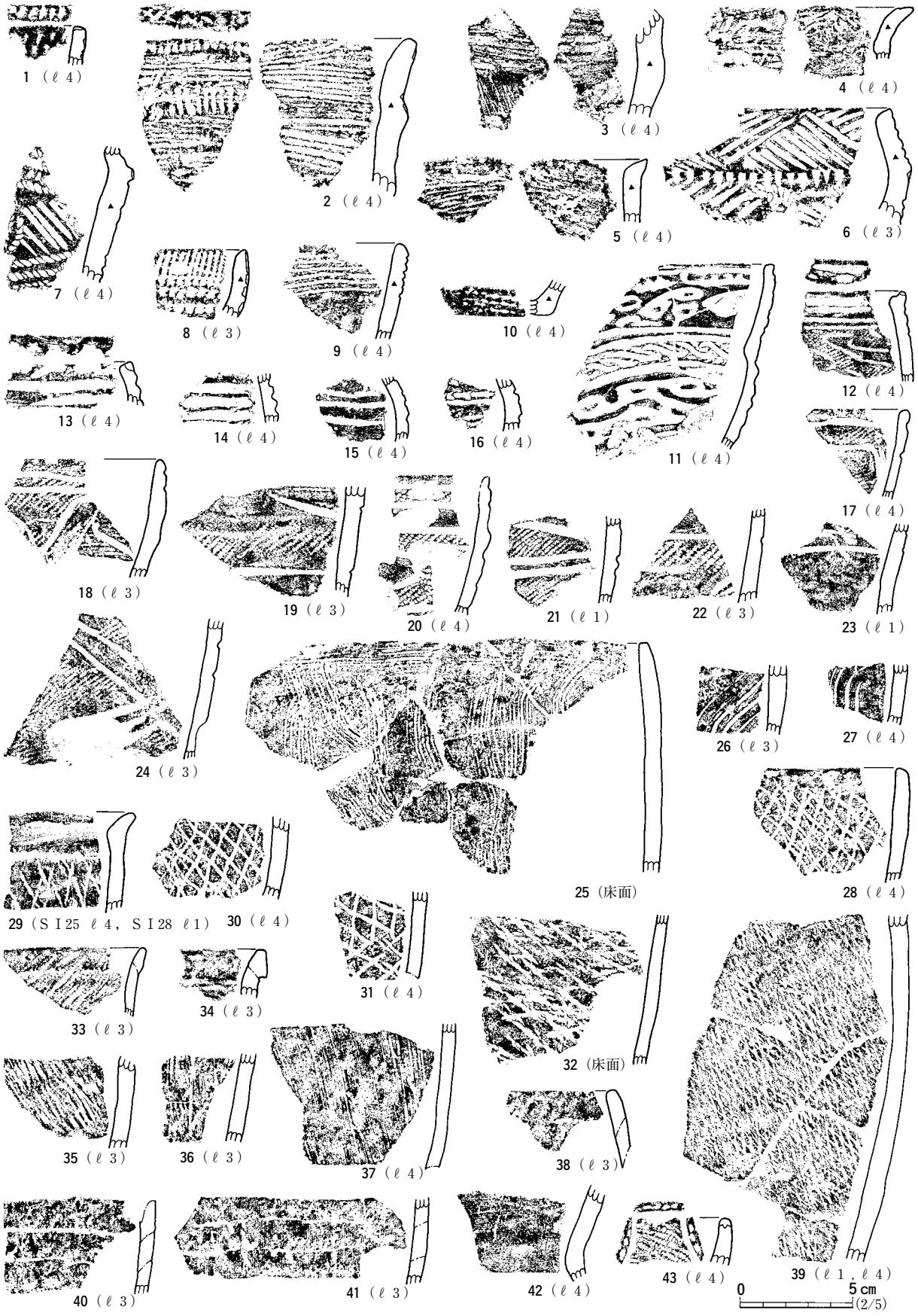


図59　25号住居跡出土遺物（１）

図59－25～41は床面出土土器およびその類の晩期以降に属する粗製土器を集めた。25は口縁部の内湾するもので，外面は波状の櫛描文である。26・27も同種であるが，櫛歯の間隔が広く，且つ太い。28～32・38は網目状撚糸文が施される。口縁部が直立～やや内湾するもの(28)と外反するもの(29)が認められる。33・35～37は条痕文が認められるものである。33は複合口縁となる。34は無文であるが，これと同様に複合口縁となる。38・40・41は無文で，積み上げ痕をそのまま残す。

図60－１～８には底部を集めた。２が縄文時代前期である以外は晩期以降のものである。１は底部直上が縄文帯となる精製土器の底部である。５・８も無文であるが精製土器である。３は網目状撚糸文，４は条痕文，６・７は無文の粗製土器である。底面圧痕として４・５・７には木葉痕，６には網代痕が観察される。図60－９～11は土製品である。９・10はミニチュア土器の破片である。９は皿状の浅い器形が復元される。11は棒状の土製品の一部で，土偶の手であろうか。

図60－12～図62には石器・石製品を示した。前記したように白色もしくは赤色を呈する流紋岩製の石鏃および石錐の未成品が多く，ここに示した以外にも，これらの未成品と同一母岩と思われる剥片が多量に出土している。

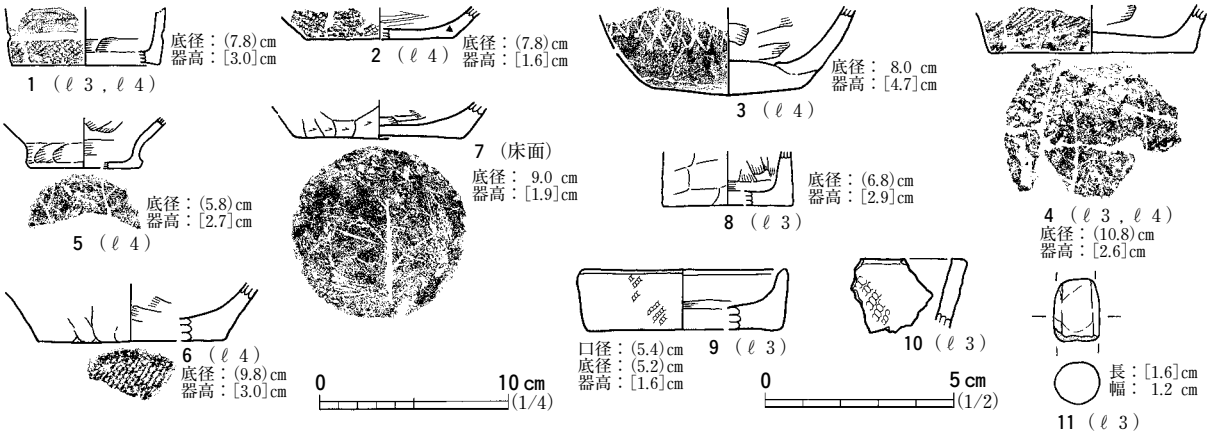
図60－12～図61－27は石鏃とその未成品と考えている。形状の整ったものは，凹基が多く，有茎のものも偶に認められる。図60－12～17は完成品と思われ，17が有茎である以外は凹基無茎である。図60－18～29・31～33・図61－５・９・10は押圧剥離による調整途上に破損したものと思われる。図61－30・34～37・39は尖頭部もしくは基部の形状がある程度整えられているものの，いずれかの加工が未完のものである。図61－３・４は同様の有茎石鏃未成品と考える。図60－38・図61－１・２・６～８・11～12は３㎝以下の小型剥片に直接調整を加えて石鏃状の形状にしようとしている。図61－12～27は３㎝以上の剥片を石鏃の形状に整形する途上のものと考えている。

図61－28～図62－１には石錐を示した。28～32は完成品である。28は一端を角柱状に加工し，錐部を作出する。29・30は両端が錐部となる。31・32は小型剥片の一端に加工して錐部を作り出す。33は先端に鋭さが欠けており，未成品かと思われる。図62－１は欠損品であるが，棒状に錐部を作り出すものと思われる。

図62－２～４は二次加工ある剥片で，側縁に連続的な剥離が認められる。

図62－５以降には剥片石器以外のものを示した。図62－５は磨製石斧の基部，同図６は打製石斧である。６は剥離痕が認められるものの風化が著しい。同図７は小型の礫上に研磨の痕跡が窺えるもので，磨石の一種であろう。同図８～10は磨石で，８・９は安山岩亜円礫の平坦面を磨面とする。同時に敲打も行っており，凹みも認められる。10ははんれい岩の窪んだ一面を磨り面としている。同図11は床面出土の石皿で，花崗岩の平石を用いている。表面を磨り面および敲打面，裏面は敲打に使用する。同図12は滑石製の玉である。孔は中心より偏って開けられており，薄い方の部分は若干欠損している。穿孔は両側から行われている。

ま　と　め　本遺構は縄文時代の石囲炉を持つ，円形の竪穴住居跡である。28号住居跡とは完全に重なった位置に建てられ，且つ，炉もほぼ同位置に造り替えられていることから，28号住居跡を



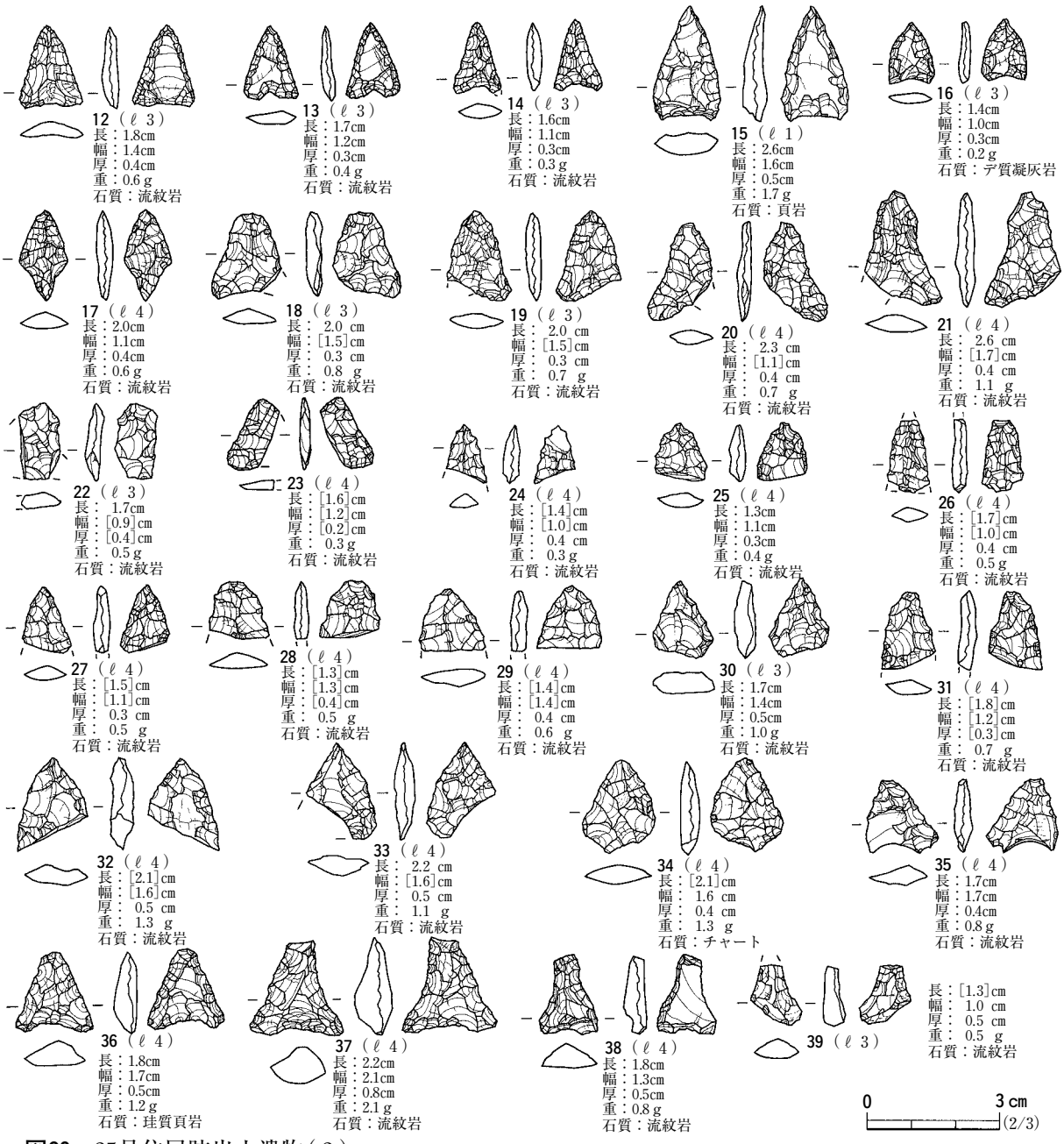


図60　25号住居跡出土遺物（２）

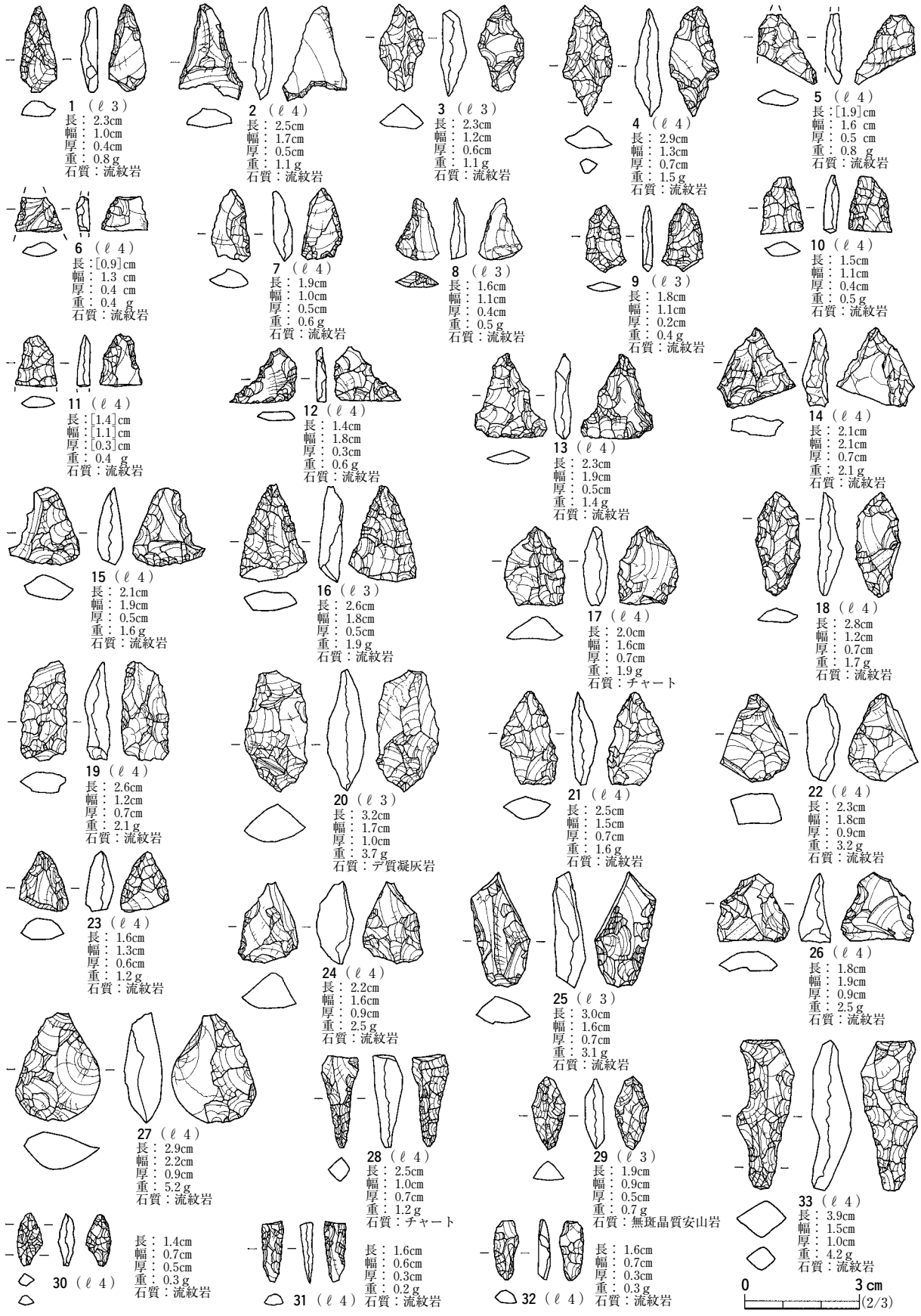


図61　25号住居跡出土遺物（3）

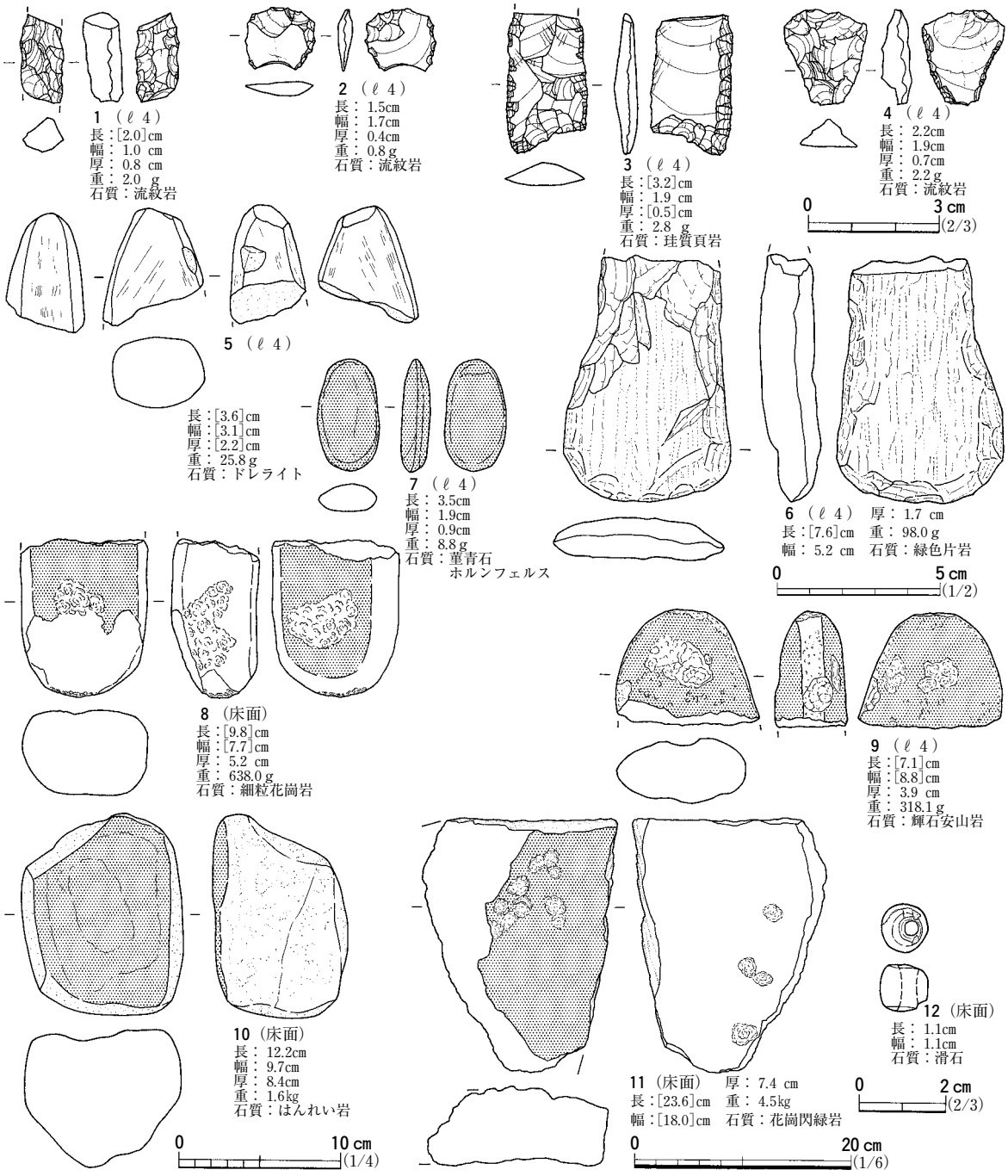


図62　25号住居跡出土遺物（４）

拡張して本住居を構築したものと想定される。床面および堆積土からは，石鏃未成品および剥片が多数出土しており，この場で石器製作が行なわれていた可能性がある。また，住居の廃絶時には，住居の中心部分のみ埋め戻しを行っている。時期は，出土した土器から縄文時代晩期中葉大洞Ｃ２式期と考えられる。　（山元）

26号住居跡　ＳＩ26（図63～66，図版61～63・136・143・145）

遺　　構　本遺構は，Ｎ・Ｏ・Ｐ19・20グリッドに所在する，縄文時代の竪穴住居跡である。立地は丘陵尾根から北側の急斜面への落ち際に位置している。当初の検出面はＬⅢ中位である。ここで，ℓ１とした黒褐色土の円形の広がりを検出し，土中から晩期の土器が多く出土したため，該期の住居跡と誤認して掘り込みを開始した。その後，掘込が当初の検出プランとは異なると判断されたため，ＬⅥまで検出面を下げて再検出したところ大型の方形を呈する掘込であることを確認した。重複する遺構は，25・28・35・36号住居跡で，25・28号住居跡は本遺構よりも新しく，35・36号住居跡は本遺構よりも古い。周囲には近い時期の住居跡が多く，東には33号住居跡が隣接し，西５ｍの位置には37号住居跡，７ｍの位置には38号住居跡，北西５ｍには19号住居跡が存在する。

平面形は，長軸を北東－南西方向にもつ長方形である。東壁は土砂の流出によって失われている。北壁も28号住居跡によって破壊されており，半分以上失っている。規模は残存する短軸が4.7ｍを測る。長軸は，西壁から床面が残存する範囲までが6.7ｍである。

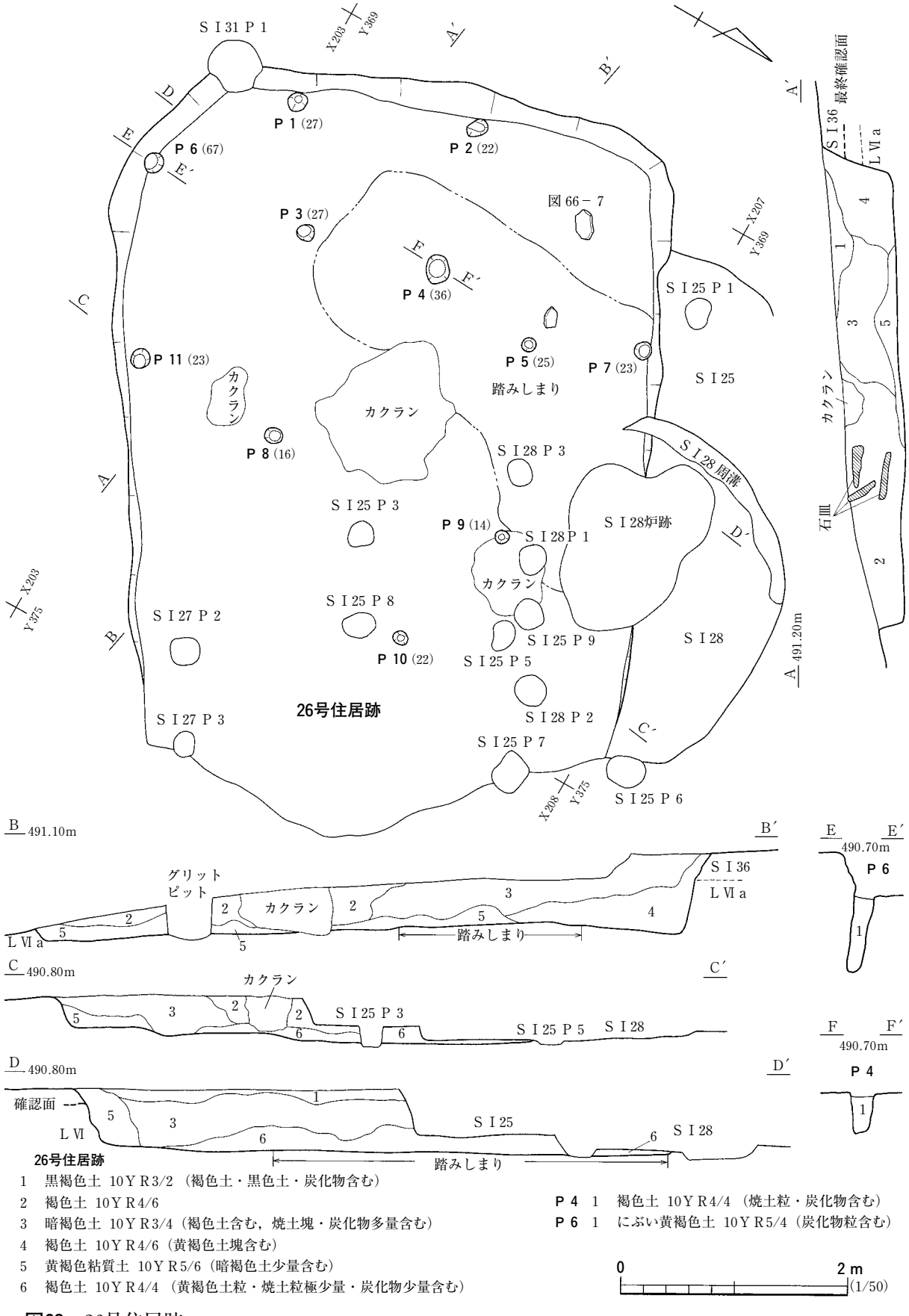
堆積土はベルト設定部分で６層に分層される。ℓ２～６はＬⅥ塊および炭化物を多量含んでいる。その他に，床面の北西隅から焼土塊・炭化物を極めて多量含む土を検出しており，堆積状況と併せて，掘込の大部分は人為的に埋め戻しされたものと考えている。ℓ１については，上記した堆積土上に出来た自然の窪みにはまった状況である。この層には晩期の遺物を含むことから，本遺構を壊している25・28号住居跡構築時にはこの窪みがあったと考えられる。このことから，ℓ１とそれ以下の堆積土の堆積には相当の時間差が存在し，遺構の上面には表土化や流出といった状況があった可能性が想定される。

床面は，ＬⅥを削った状態で使用され，貼床はなされない。床面の状態は，木の根などの自然撹乱や，後世の遺構の破壊を受け平らではない。床面の住居西寄りの中央から北壁にかけての部分には顕著な硬化面が認められ，踏み締まりと認識される。

床面からはピットが11個検出されている。Ｐ１・２・６・７・11を周壁際に配し，その他のピットを周壁際のピットから長軸・短軸に平行させて配している状況が看取される。そのため，いずれも柱穴として機能していたと考えられる。ピットの分布は西半に集中し，東半にはほとんど検出されていない。長軸の両端に柱穴を集めているとすれば，住居の規模は７ｍ以上と推測される。

遺　　物　遺物の多くは堆積土中から出土したものである。ℓ１は上記したように住居埋没から時間が経過してからの堆積層で厳密には本遺構に伴う遺物ではないのだが，接合して大破片となるものが多く，一緒に図示した。出土数量は，ℓ１が縄文・弥生土器191点，石器34点，ℓ２以下が縄文土器201点，石器383点である。ℓ１からは主に晩期の土器が出土し，ℓ２以下には晩期の土器は含まれず，早期中葉～前期中葉の遺物が出土している。図64・図65－１～７には土器，図65－８～31・図66には石器・石製品を示した。

図64－２～４・24・28～32・図65－１～６はℓ１から出土した晩期以降の土器である。図64－２は



26号住居跡

1　黒褐色土　10ＹＲ3/2（褐色土・黒色土・炭化物含む）
2　褐色土　10ＹＲ4/6
3　暗褐色土　10ＹＲ3/4（褐色土含む，焼土塊・炭化物多量含む）
4　褐色土　10ＹＲ4/6（黄褐色土塊含む）
5　黄褐色粘質土　10ＹＲ5/6（暗褐色土少量含む）
6　褐色土　10ＹＲ4/4（黄褐色土粒・焼土粒極少量・炭化物少量含む）

Ｐ4　1　褐色土　10ＹＲ4/4（焼土粒・炭化物含む）
Ｐ6　1　にぶい黄褐色土　10ＹＲ5/4（炭化物粒含む）

図63　26号住居跡

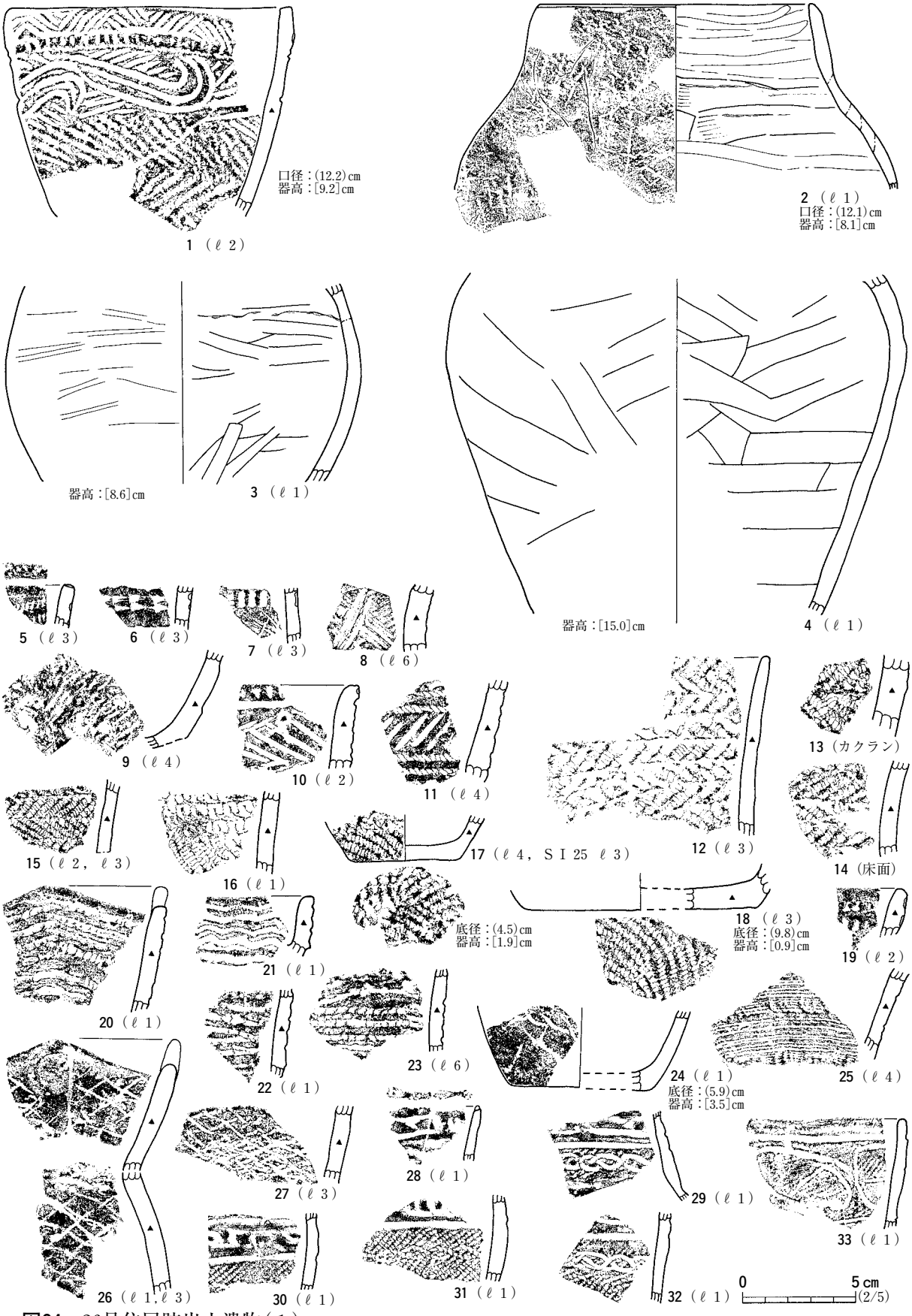


図64　26号住居跡出土遺物（1）

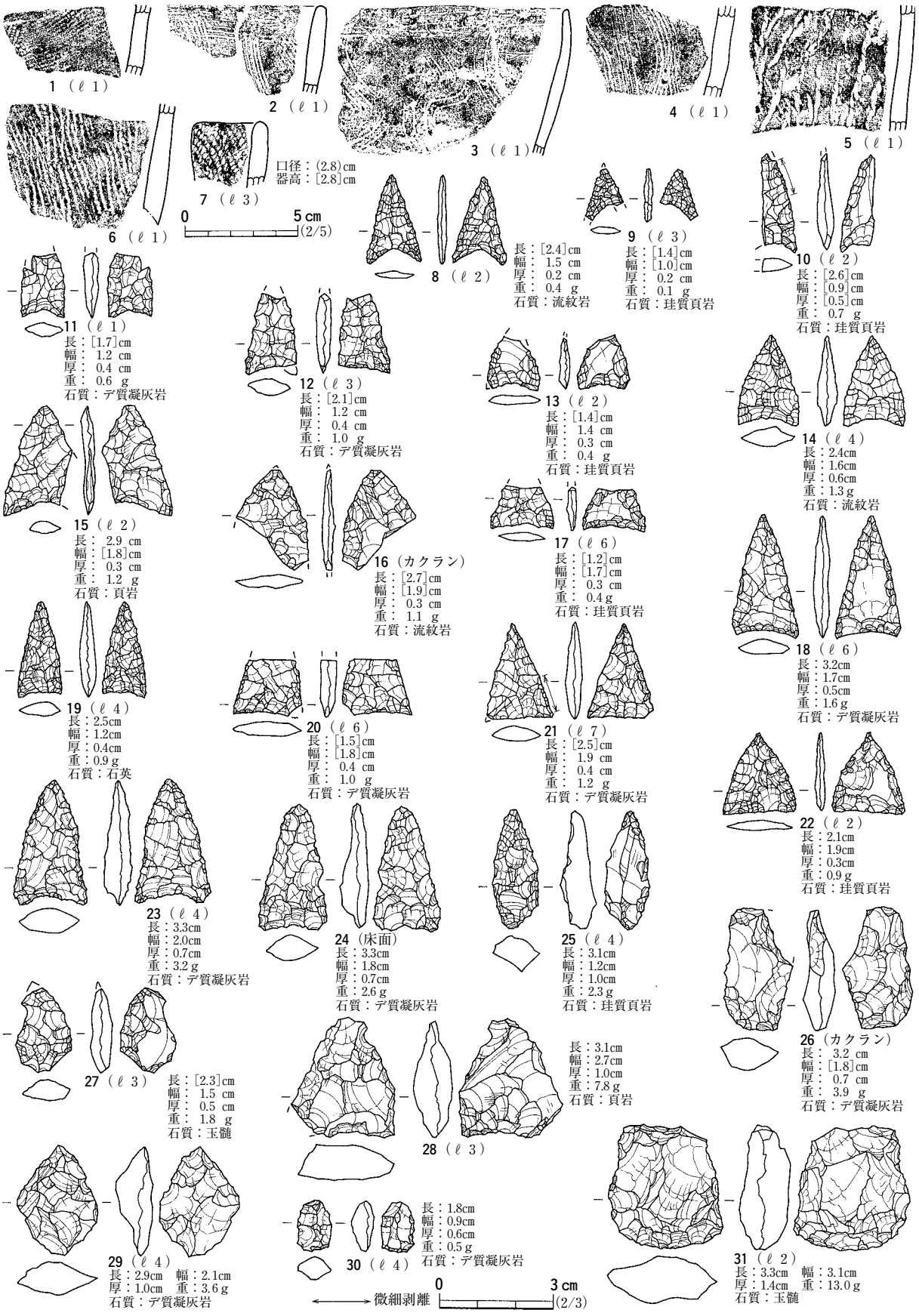


図65　26号住居跡出土遺物（２）

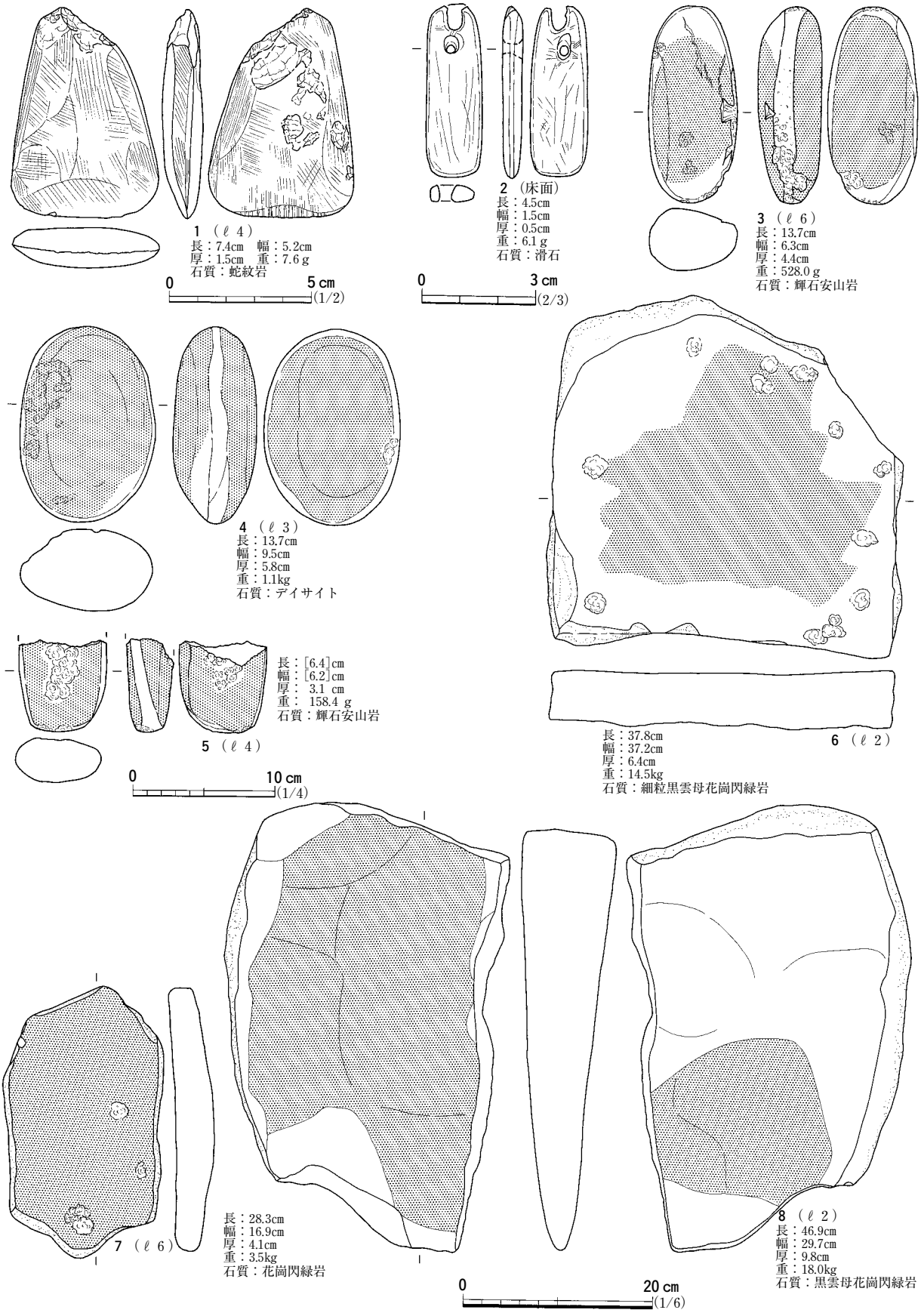


図66　26号住居跡出土遺物（3）

網目状撚糸文が施される粗製土器で，口縁の窄まる短頸壷のような器形である。同図３・４は無文の壷形土器の体部と思われる。同図24・28～32は羊歯状文と綾繰文を施すものである。図65－１～６は粗製土器の破片と思われ，１は斜縄文，２～４は櫛描文，５・６は撚糸文が施文される。図64－33は楕円もしくは渦巻きモチーフを磨消縄文帯で描くもので，弥生時代前期に比定される。

その他は，ℓ２以下の埋め戻し土から出土したものである。図64－５～７は絡条体圧痕や押引状の刺突文が認められる。これら以外はいずれも繊維土器である。同図８・９は地文に撚糸文を持つ繊維土器で，８には沈線で格子状の文様が描かれる。同図１・10・11は縄側面圧痕もしくは沈線によって蕨手状の文様を描き，間隙に短沈線を充塡するものである。１はくびれのない器形で，口縁部上端に鋸歯文，体部に非結束の羽状縄文が施される。10には円形竹管の刺突が見られる。同図12～15は同種の土器の体部破片と思われる。同図16はループ文が施される。同図17・18は底部破片で，底面に外面と同原体の縄文を放射状に施している。同図19は棒状工具による刺突が横走する口縁部破片である。同図20～23・25は櫛歯状工具による有節沈線やコンパス文を重層施文する。同図26・27は網目状撚糸文が施される深鉢の破片である。図65－８～31には石鏃および未成品を示した。８～24は完成品，25～31は成形が完全ではなく未成品と判断される。石質はデイサイト質凝灰岩が多く，凹基が大半を占める。図66－１は磨製石斧である。片刃気味で，扁平な側には使用痕と思われる刃部に対して垂直方向の筋が認められる。同図２は垂飾と思われる。上端は紐ずれによって摩滅した結果，孔が無くなったと考えられ，改めて穿孔し直したものと考えている。同図３～５は磨石で，５には凹みも認められる。同図６～８は石皿である。

ま　と　め　本遺構は縄文時代の長方形を呈する竪穴住居跡である。床面に炉跡は存在していないが，西半部分に顕著な踏み締まりが認められる。時期は，ℓ２以下の人為的堆積土より出土した土器の年代観から縄文時代前期中葉大木２ａ式期に帰属するものと判断される。　（山元）

27号住居跡　ＳＩ27（図67，図版64）

遺　　構　本遺構は，Ｏ20・Ｐ19・20グリッドに所在する。丘陵尾根上の北側急斜面の落ち際に位置している。検出状況は，ＬⅣａ面で25号住居跡に切られる焼土面を検出し，その後ＬⅥまで掘削した後に４個のピットを検出した。ピットの配置が，この焼土面を取り囲むような状況であったことから，これらを住居跡に付帯するものと考え，まとめて報告することにした。重複する遺構は，25・26号住居跡で，焼土面の状況から25号住居跡よりも古いが，ピットが26号住居跡堆積土中で確認できたことから，これよりも新しいと判断している。

炉跡と考えた焼土面は，弱く被熱したのみである。範囲は残存値で最大45㎝の幅を持ち，厚さは３㎝程度である。４個のピットは，炉跡の南東側にあり，北東－南西方向に一列に並ぶ。堆積土は暗～黒褐色土である。Ｐ１は深く，ＬⅥ上面からの深さ61㎝を測る。Ｐ２～４はＬⅥからの深さが30㎝程度であるが，掘込面が検出面よりも上であったことを考慮すれば，それほど浅かったものとは言えない。

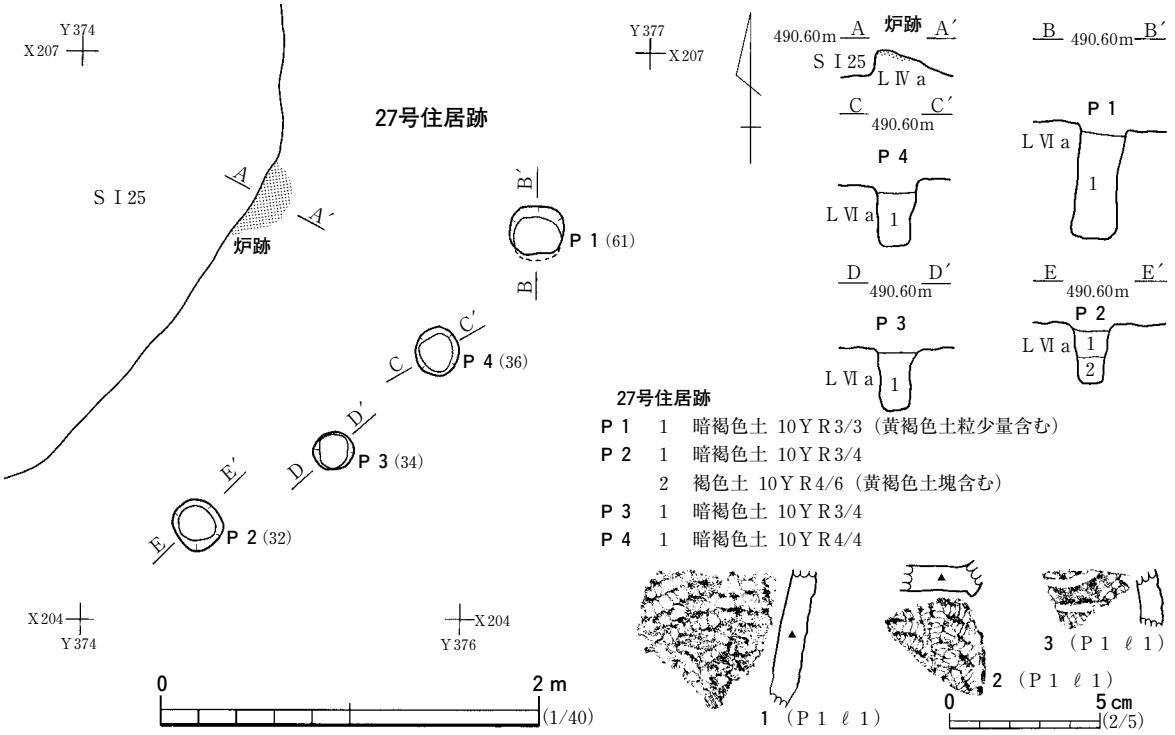


図67　27号住居跡・出土遺物

遺　　物　Ｐ１から土器片３点のみ出土している。図67に示している。１は，単節縄文の施される繊維土器である。２は上底状の底部で，底面には０段多条の縄文を放射状に配している。３は雲形文の一部かと思われる破片である。

ま　と　め　本遺構は，近隣に存在していた炉とピットを住居施設と考え，まとめて報告したものである。よっていずれもが一つの住居として機能していたかは確実でない。機能した年代は，ピット内堆積土の特徴および出土遺物から縄文時代晩期以降と考えられるが，それ以上の詳細な年代を推定することは出来なかった。（山元）

28号住居跡　ＳＩ28（図68・69，図版65・66・143）

遺　　構　本遺構は，O19グリッドに所在する，縄文時代の竪穴住居跡である。立地は，丘陵尾根上から北向き急斜面の落ち際に位置している。検出状況は，25号住居跡の床面で内部にこれとは異なる円形のプランが検出され，これを住居跡として確認した。重複する遺構は25・26号住居跡である。検出状況から25号住居跡よりも古く，26号住居跡よりも新しいと判断される。

平面形は円形である。規模は南北3.3m，東西3.4mを測る。壁は25号住居跡床面から10cmほどの高さである。堆積土は３層に分層される。堆積状況や混合物を多量含む土質から人為堆積土と判断され，25号住居跡を構築する際に投入した土と考えられる。その他に貼床土をℓ４としている。

床面はＬⅥと26号住居跡堆積土である。26号住居跡と重複する掘込中央部分からやや西寄りかけては，貼床がなされる部分も存在する。貼床部分も取り込んだ床面の北西半には，顕著な硬化が帯状に認められ，踏み締まりと認識される。その他に床面からは，付帯施設として，壁溝１条，炉跡

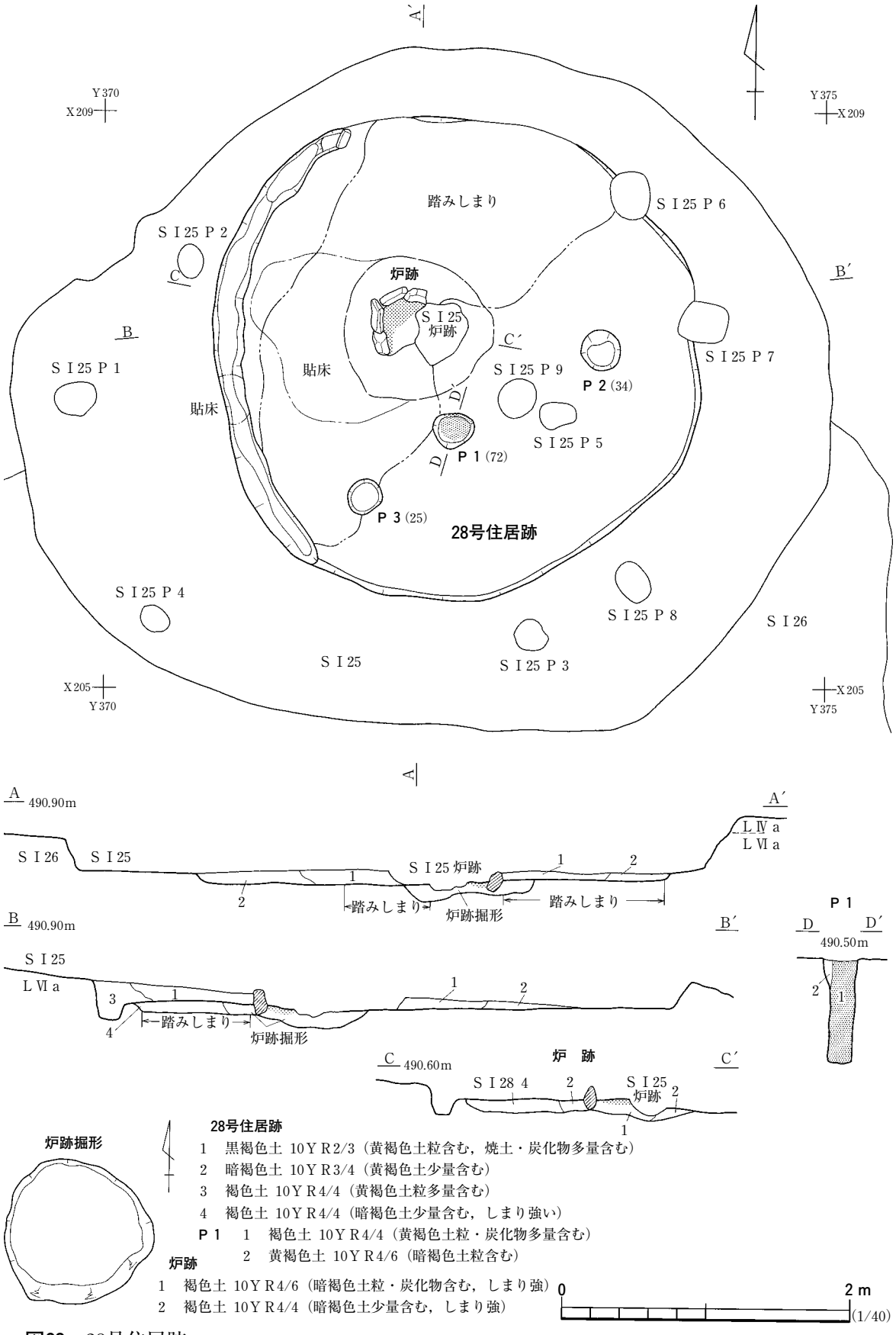

A´
Y370
X209
Y375
X209
踏みしまり
ＳＩ25 Ｐ 6
ＳＩ25 Ｐ 2
C
C´
炉跡
ＳＩ25
炉跡
B
B´
ＳＩ25 Ｐ 1
貼床
ＳＩ25 Ｐ 9
Ｐ 2 (34)
ＳＩ25 Ｐ 7
貼床
D
D´
ＳＩ25 Ｐ 5
Ｐ 1 (72)
Ｐ 3 (25)
28号住居跡
ＳＩ25 Ｐ 4
ＳＩ25 Ｐ 8
ＳＩ26
ＳＩ25
ＳＩ25 Ｐ 3
X205
Y370
X205
Y375
A
A
490.90m
A´
ＳＩ26
ＳＩ25
ＳＩ25 炉跡
1
2
1
2
踏みしまり
炉跡掘形
踏みしまり
Ⅳ a
Ⅵ a
B
490.90m
B´
D
D´
490.50m
Ｐ 1
ＳＩ25
Ⅵ a
3
1
1
2
2
1
4
踏みしまり
炉跡掘形
C
490.60m
炉　跡
C´
ＳＩ28 4
2
ＳＩ25
炉跡
2
1
炉跡掘形
28号住居跡
1　黒褐色土 10Ｙ Ｒ2/3（黄褐色土粒含む，焼土・炭化物多量含む）
2　暗褐色土 10Ｙ Ｒ3/4（黄褐色土少量含む）
3　褐色土 10Ｙ Ｒ4/4（黄褐色土粒多量含む）
4　褐色土 10Ｙ Ｒ4/4（暗褐色土少量含む，しまり強い）
Ｐ 1　1　褐色土 10Ｙ Ｒ4/4（黄褐色土粒・炭化物多量含む）
2　黄褐色土 10Ｙ Ｒ4/6（暗褐色土粒含む）
炉跡
1　褐色土 10Ｙ Ｒ4/6（暗褐色土粒・炭化物含む，しまり強）
2　褐色土 10Ｙ Ｒ4/4（暗褐色土少量含む，しまり強）
0
2 m
(1/40)

図68　28号住居跡

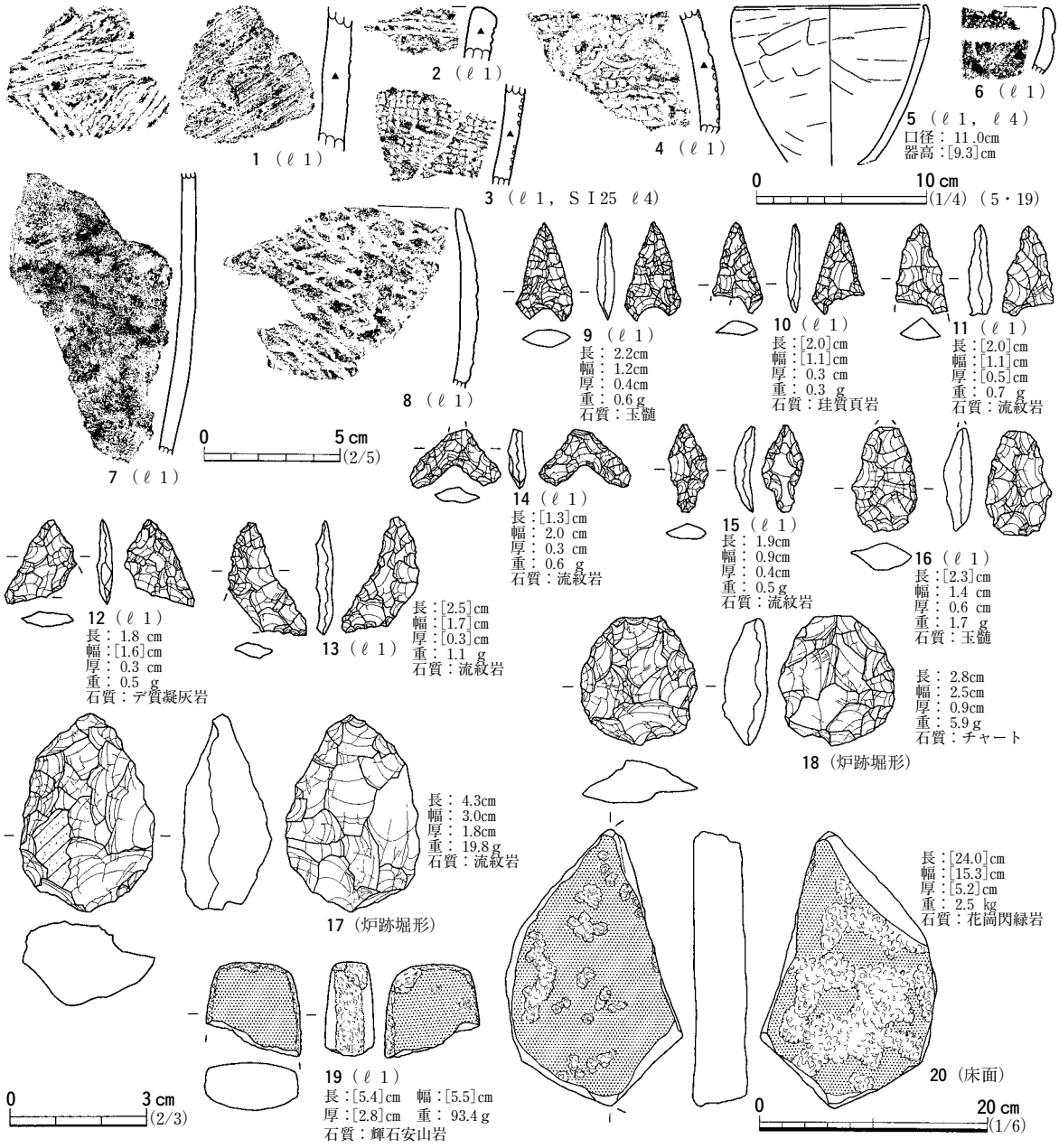


図69　28号住居跡出土遺物

1基，ピット3個を検出している。

壁溝は西壁沿いのみに認められる。幅20cm前後，床面からの深さは10～15cmを測る。意図は不明だが，中央部の26号住居跡と重複する部分には底面に貼り土している。

炉跡は石囲炉で，住居跡中央の北西寄りに位置している。南半は25号住居跡炉の掘形によって壊されている。石囲部の径は55cmで，円形に組んだであろう石組の西半4個が残存する。下部に径1mほどの掘形を持っており，これに貼土，石を設置して構築されている。

ピットは3個検出した。炉の南東側にあたる位置に，東北東－西南西方向に並んでいる。その中央にあるP1のみ柱痕を有し，深さは72cmと深い。他の2つは深さ30cm程度の浅いものである。

遺　　物　ℓ1および炉跡掘形からのみ出土している。ℓ1からは縄文土器60点，石器127点が出

土している。炉跡掘形からは同一母岩の剥片および石器未成品が43点出土している。そのほか床面からは石皿１点が出土している。図69に主なものを示した。

１は地文に撚糸文の施される繊維土器で，沈線で格子状の文様を描く。２は口縁部を３条の平行沈線によって区画する繊維土器である。３・４は櫛歯状工具による刺突とコンパス文を重層施文する。５は小型で，無文の鉢形土器である。内外面ともナデによる調整が認められる。６は単沈線によって文様を描く口縁部で，口端部に縄文，沈線以下は無文である。７は無文，８は網目状撚糸文が施された粗製土器と思われる。９～16は石鏃である。９～13は凹基で鏃身の長い形状である。14は凹基であるが，鏃身の幅が狭く，脚が幅広に開く。15は有茎であるが，形状が整わず，素材剥片の反りが残っている。16は成形が未完である。17・18は炉跡掘形から出土したもので，石器の未成品と思われる。19は磨石，20は床面から出土した石皿である。

ま　と　め　本遺構は，縄文時代の石囲炉を有する住居跡である。25号住居跡の内部で検出されている，炉の位置が重複している，人為的に埋め戻されているという諸々の状況から，本住居を拡幅して，25号住居跡が構築されたものと判断される。故に時期は，これとほぼ同時期である縄文時代晩期中葉大洞Ｃ２式期と考えている。（山元）

29号住居跡　ＳＩ29（図70～72，図版67～70・136・145）

遺　　構　本遺構は，縄文時代の竪穴住居跡である。調査区中央部のＫ16・17グリッドで検出されている。付近は丘陵尾根上の緩斜面にあたり，北向き急斜面への落ち際に位置している。検出面は，ＬⅥ上面である。重複する遺構は，40号住居跡・37号土坑である。それぞれの検出状況や土層ベルトの観察結果などからこれらのいずれよりも古いと考えられる。本遺構の西側には36・37号土坑が存在し，東２ｍの位置に18・32号住居跡が位置している。

平面形は，長軸が南北を向く長方形と考えられるが，東壁は土砂の流出のためか残存しておらず，しかもその南半は40号住居跡によって壊されている。長辺は残存する西壁で6.5ｍを測る。短軸の残存長は北辺で2.7ｍ，南辺で1.4ｍである。本遺跡の中では大型である。壁の高さは，残りの良い西壁で20～30㎝を測る。掘込内の堆積土は６層に分層される。堆積状況・土質などからいずれも人為的なものと判断される。図中のℓ７はＰ５内の堆積土である。

床面は，ＬⅥを削ったままで，貼り床などはなされない。硬化面等も認められない。

床面からは，住居の長軸に沿って並んだ焼け面が３箇所見つかっており，それぞれ地床炉と考えている。中央に位置する１号炉跡は，焼け面が壇状に残って検出されている。径80㎝程の不整形の範囲が焼けている。非常によく焼けており，深さ10～15㎝が被熱して焼土化している。その北側にある２号炉跡は，北側径27㎝，南側径25㎝を測る２箇所の焼け面が８㎝の間隔を置いて存在している。いずれも焼け方が弱い。１号炉跡の南側にある３号炉跡も同様に弱い焼け面で，径30㎝×20㎝の範囲が焼けている。

ピットは19個検出した。Ｐ２～14を周壁沿いに配し，Ｐ１・15～19を短軸に平行に配しているもの

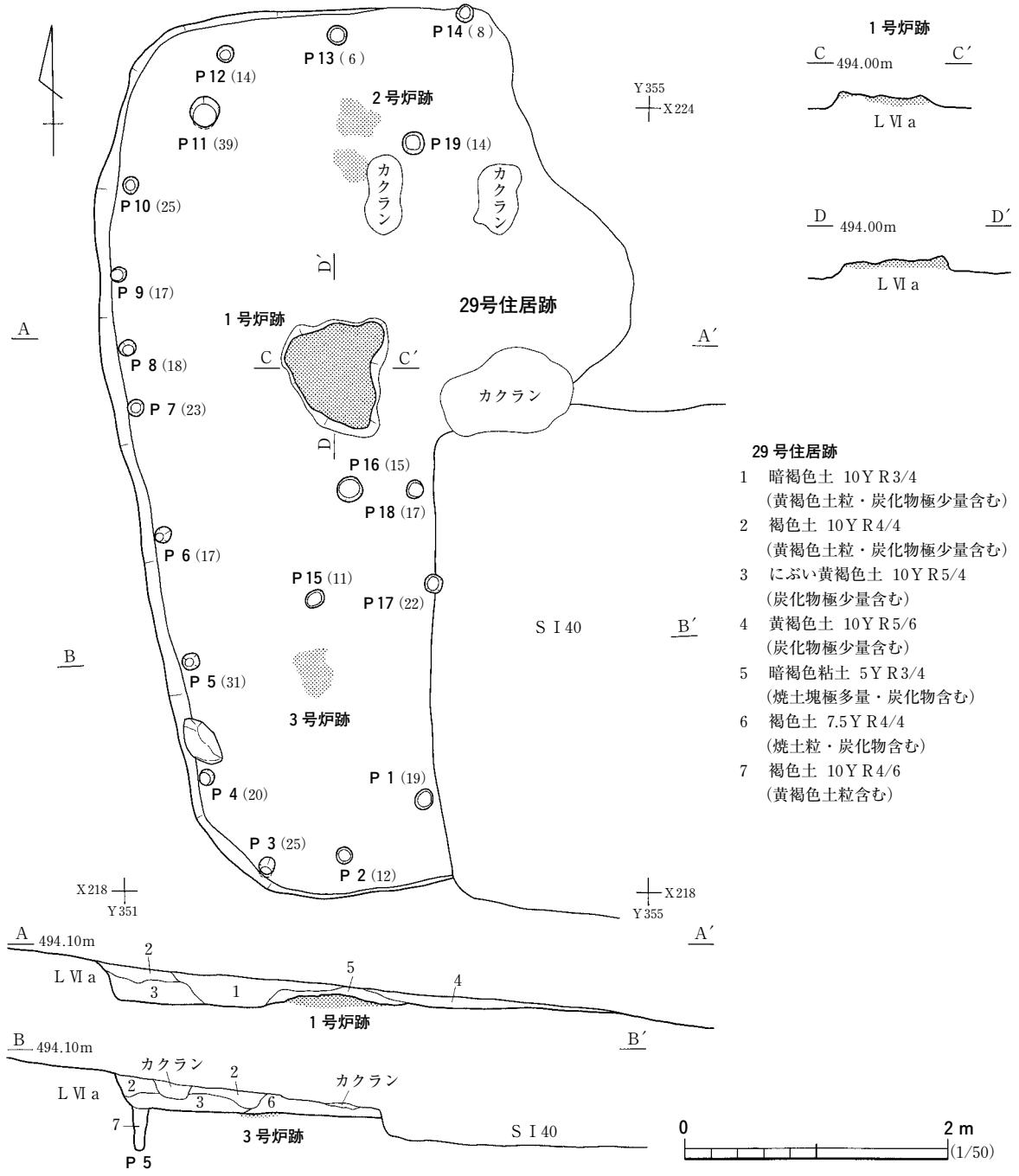


図70　29号住居跡

と理解される。北東隅のＰ11のみ相対的に大型で深いもので，径23cm，深さ40cm程度である。その他は径10～15cm，深さ20～30cm程度の小型のものである。西壁沿いのＰ３・４・８などは掘込の内側に向かって傾く特徴が認められる。

遺　　物　堆積土中から縄文土器片204点，石器12点が出土しているが，床面から出土したものはない。ℓ１から出土したものが半数を占める。土器は早期後葉から前期中葉にかけてのもので，いずれも胎土に繊維を含んでいる。石器の多くは石皿である。図71・72に主なものを示した。

図71－１・２は器形の復元が可能であったものである。１は口縁部と体部は接合せず，図上で復

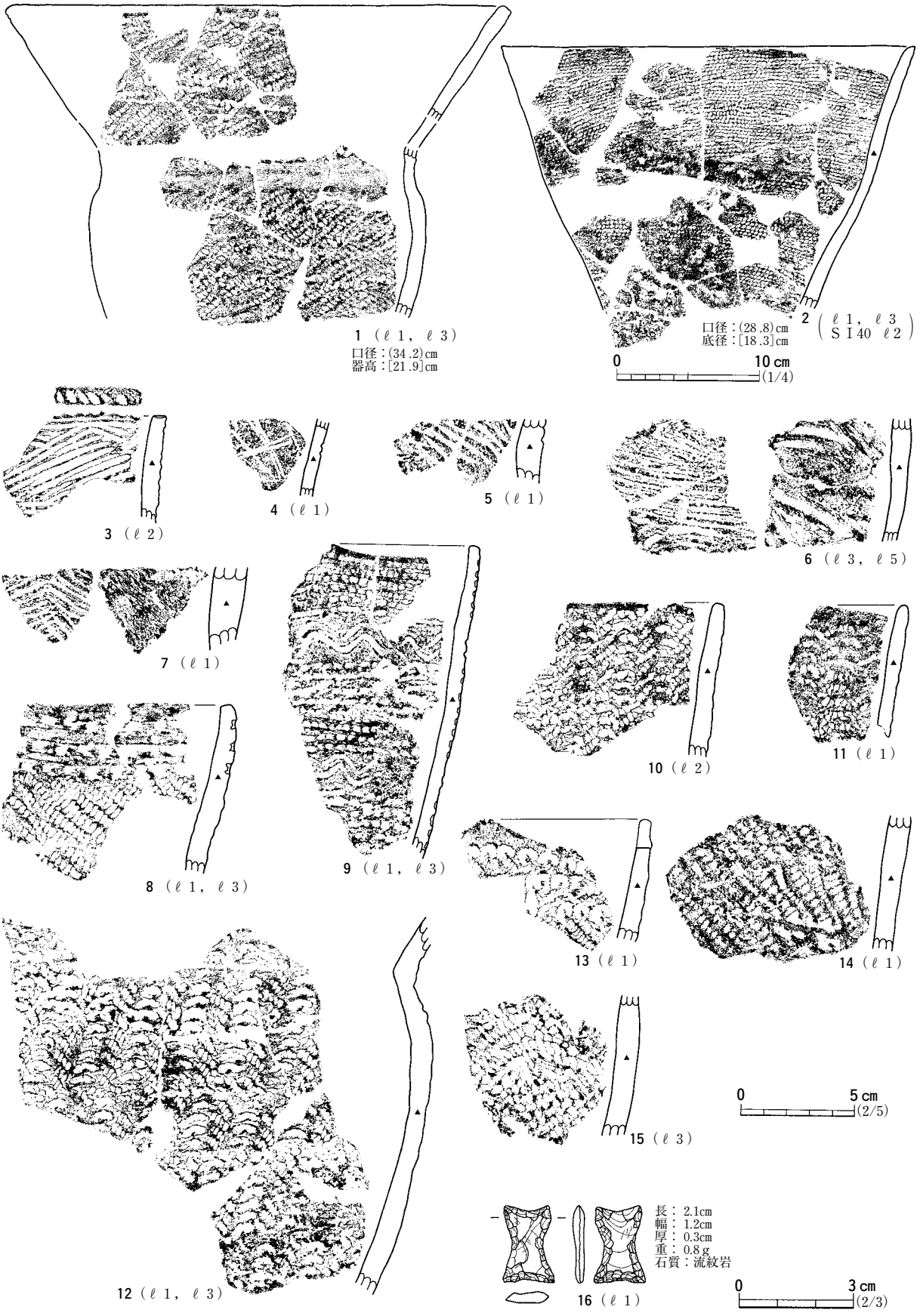


図71　29号住居跡出土遺物（１）

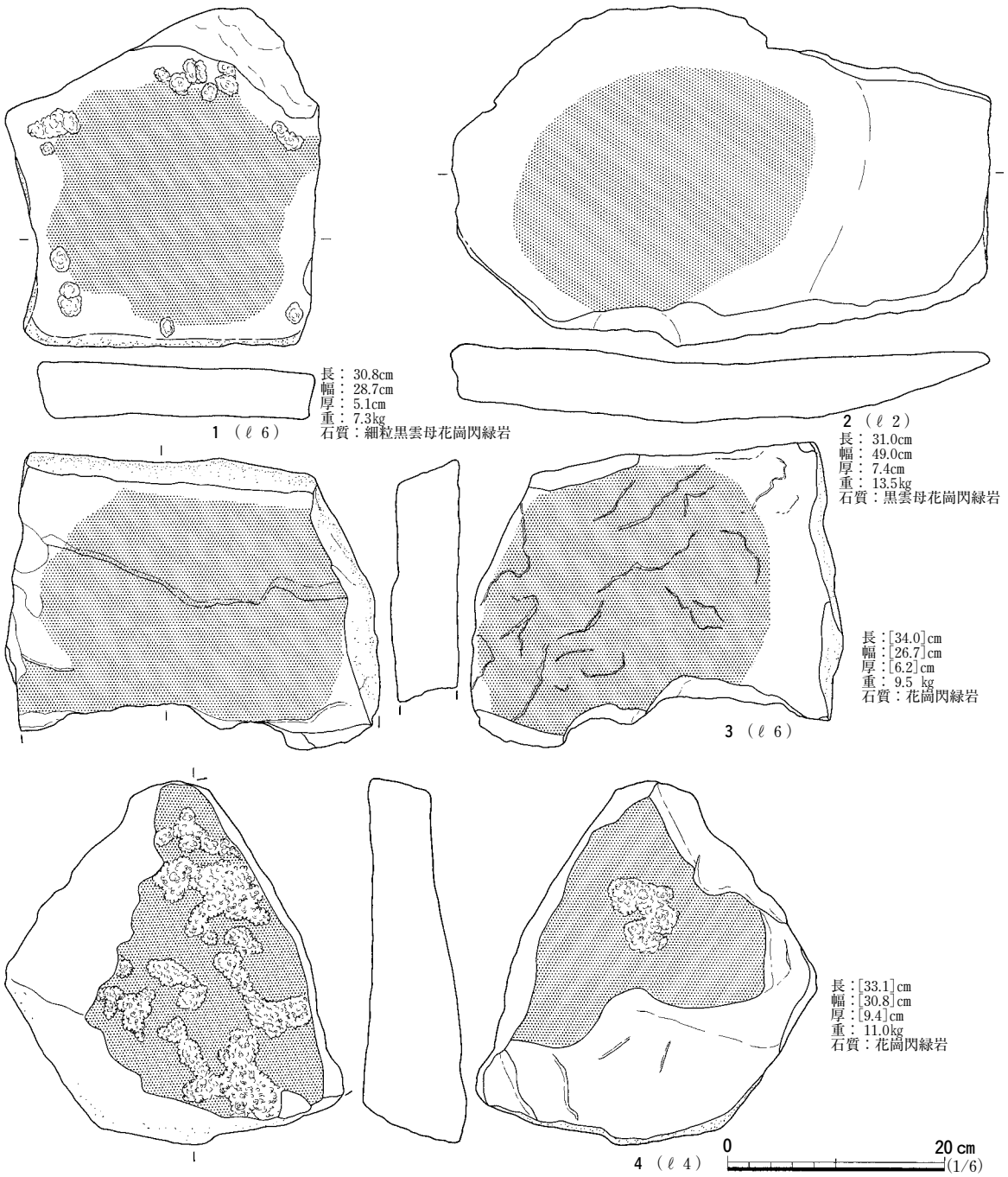


図72　29号住居跡出土遺物（2）

元した。開く口縁部と丸い体部の間にくびれがある深鉢である。文様は末端環付のＲＬ縄文のみである。前期前葉に位置付けられる。2はバケツ状の器形での深鉢で，撚糸文を横方向に施文している。前期中葉であろうか。同図3は集合沈線を鋸歯状に配したもので，口縁端部には棒状工具による刻みが加えられている。同図4は先端の柔い半截竹管で，斜格子を描く。同図5～7は外面に撚糸文が施されるもので，6は内面に条痕，7の内面には擦痕が認められる。同図8は沈線内に半裁竹管による斜方向の連続刺突を加えたものを3条口縁部上端に施している。口縁部下は0段多条の縄文である。同図9は櫛歯状工具による有節沈線2段とコンパス文1段を交互に配する。同図10～

12は側面環付の右撚りの縄文が認められる。同図13は波状口縁の波頂部で，末端環付の原体によるループ文を重層的に施文している。同図14～16はＲＬ縄文のみ施文される。

同図17は糸巻形の異形石器である。表裏に素材の剥離面を残しており，剥片の縁辺に加工して成形したものである。図72には石皿を示している。いずれも大型で扁平な花崗岩礫の平坦面を磨面，敲打面として使用している。

ま　と　め　本遺構は，縄文時代の長方形を呈する大型住居跡である。炉跡は長軸線に沿って３箇所検出している。ピットは周壁沿いに多く確認されているが，小型のものが多い。遺物は堆積土中から石皿が多く出土しており，異形石器も認められた。遺構の時期は，床面出土土器がなく断定までは至らないが，人為的堆積土中の遺物の時期より前期中葉大木２ａ式期と思われる。　（山元）

30号住居跡　ＳＩ30（図73，図版71・137）

遺　　構　本遺構は，調査区中央部のＮ20グリッドに所在する。丘陵尾根上の緩斜面に位置している。検出面は，ＬⅢ上面であり，炉と考えられる焼土面とそれに伴うピット６基を確認した。直接的に切り合った遺構は存在しないが，位置的に37号住居跡と重複し，確認面の違いから，本遺構の方が新しいことがわかる。周囲には本遺構と同様，23・24・31号住居跡など掘込の確認できない住居跡が存在する。

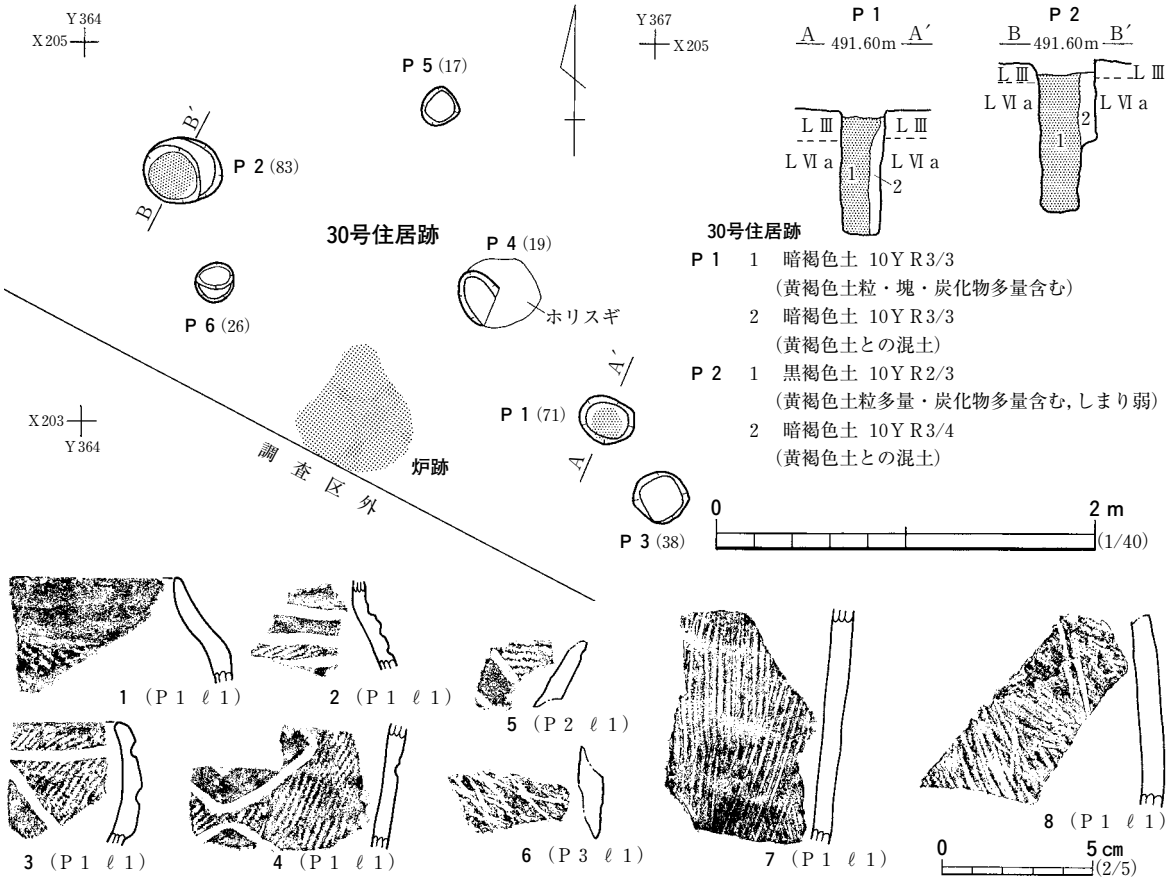


図73　30号住居跡・出土遺物

掘込は存在せず，平面形がいかなる形をしているかは不明である。炉跡が調査区壁際に存在し，南半部分は調査区外へ出ている。調査区壁の土層観察でも，掘込壁の立ち上がりは確認できないことから，掘込が元より存在しないか，すべて流出しているものと考えられる。

炉跡は最大幅60㎝程度の不整形に焼けている。焼け方は弱い。炉の周囲からはピットが6個検出されている。そのうち北西側にあるＰ２と，東側にあるＰ１は，柱痕が存在し，深さも70㎝を超えていることから主柱穴であったものと判断される。それ以外のピットはＰ１・２に対して規則的に配列されているとは言い難く，不規則な柱穴配置となっている。ピット内の堆積土はいずれも暗～黒褐色であった。

遺　　物　Ｐ１ℓ１から縄文・弥生土器15点，Ｐ２ℓ１から縄文土器１点，Ｐ３ℓ１から縄文土器２点が出土している。１は口縁部が無文となる短頸壷と思われる。２～５は変形工字文派生文の一部と考えられる。６～８は粗製土器で，６が網目状撚糸文，７・８が条痕文を施文している。

ま　と　め　本遺構は，掘込が存在していないものの，炉跡の存在，柱穴の深さやその配置状況から住居跡と判断した。時期は検出面，堆積土および出土土器などから縄文時代晩期中葉以降～弥生時代前期と言える。（山元）

31号住居跡　ＳＩ31（図74，図版72・137）

遺　　構　本遺構は，調査区中央部のＮ・Ｏ20グリッドに所在する。調査区南壁際のＬⅢ上面において４基のピットを検出し，その規模および配置状況から，住居跡として判断し報告する。Ｐ１が26号住居跡と重複し，検出面での平面形から本遺構の方が新しいと判断される。周囲には本遺構と同様の遺構が散在する。

ピットは東西に長い楕円形を呈するように配されているのが確認されるが，西半は調査区外へ出ている。このうちＰ１～３には暗褐色を呈する柱痕が確認できる。これらの深さは50～100㎝程度あり，主柱穴と明らかに考えられる。柱痕の規模は18～25㎝である。Ｐ１－２間の距離は1.6m，Ｐ１－３間の距離は2.4mである。東端に位置するＰ４は深さ16㎝と浅く，柱痕も存在しない。支柱穴であろうか。このピットで囲まれる範囲の内部からは床面の痕跡は確認できていない。調査区壁面での土層観察でも掘込などは確認できていないため，どのような形態の建物であったかは定かではない。

遺　　物　Ｐ１ℓ１から縄文・弥生土器５点，Ｐ２ℓ１から縄文・弥生土器２点，検出面から縄文・弥生土器１点が出土している。いずれも晩期から弥生時代に属するものと考えられる。１は口縁部に沈線が巡る鉢の一部と思われる。体部の地文はＬＲ縄文である。２・３は器種不明の破片で，それぞれＬＲ縄文，撚糸文が見られる。

ま　と　め　本遺構は，検出されたピットの規模，状況から竪穴住居跡に類するものと判断したものである。これ以外に付帯施設はなく，床面も確認できていない。これらのピットの時期は，検出面および出土遺物から縄文時代晩期以降弥生時代頃と考えられるが，詳細は不明である。（山元）

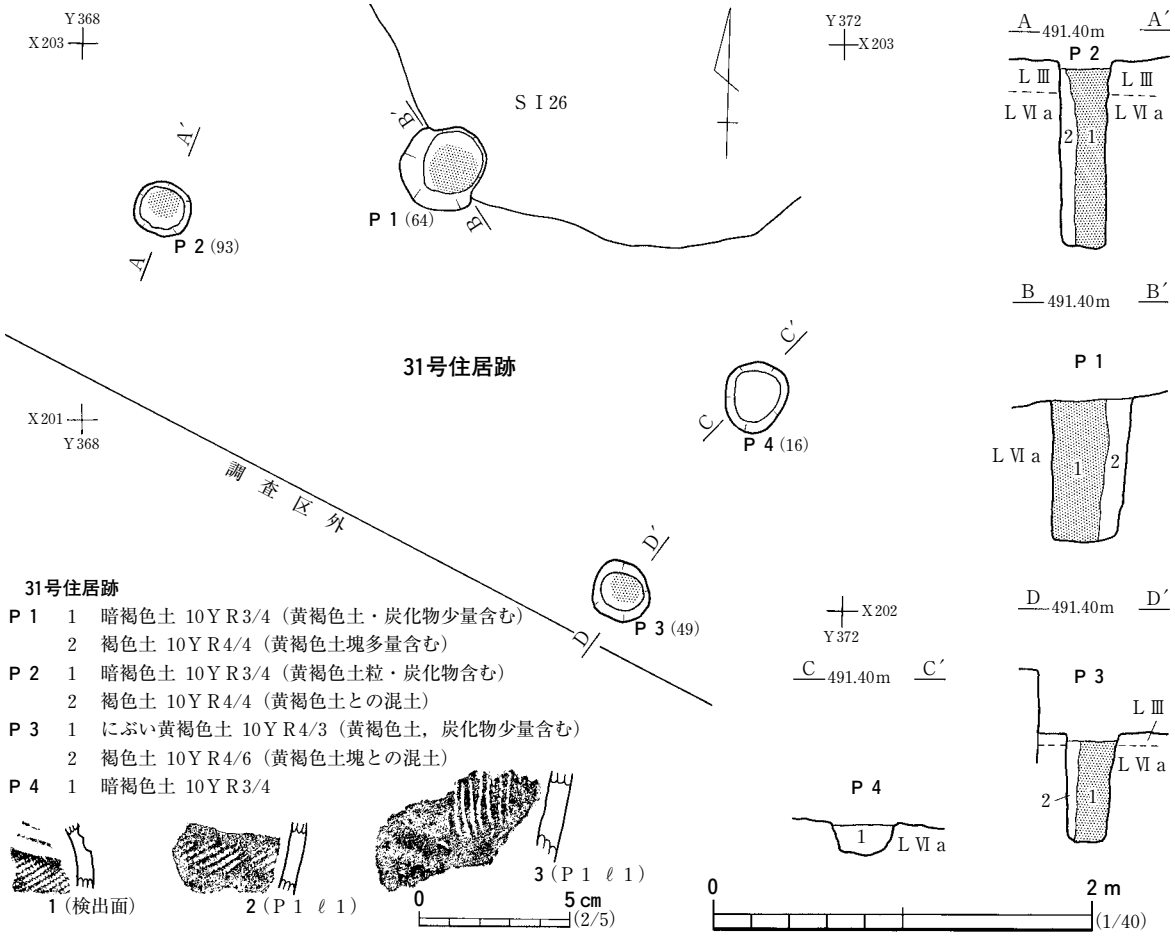


図74　31号住居跡・出土遺物

32号住居跡　ＳＩ32（図75・76，図版73・137）

遺　　構　本遺構は，調査区中央部Ｌ・M17グリッドに所在する縄文時代の竪穴住居跡である。立地は尾根上の緩斜面でも北向き急斜面の落ち際に位置している。検出面はＬⅥ上面で，18号住居跡精査中にこれとは異なる平面プランを確認し，本住居跡と認識した。この状況から，重複する18号住居跡との新旧関係は本遺構が古いと判断している。

平面形は，北部が膨らむ不整な方形と推測される。南壁は木根によって撹乱されており，大半がない。東壁は土砂の流出のため失われている。床面残存部分で計測される規模は，東西3.6m，南北4.8mである。周壁の立ち上がりは20cm程度しか遺存していない。堆積土は２層に分割され，ℓ２は壁等からの崩落土，ℓ１は斜面上方からの流入土と考えている。

床面はＬⅥを削ったのみで，貼り床はなされない。硬化面もとくには確認できていない。床面残存範囲の東端には径30cm程度の弱い焼土面が存在し，地床炉と考えている。ピットは西壁沿いに３個検出されている。径は15cmほどで，深さは南西隅のＰ１のみ50cmと深く，その他は20～30cm程度の浅いものである。ピット内堆積土については，Ｐ１はにぶい黄褐色土，Ｐ２・３は褐色土であった。

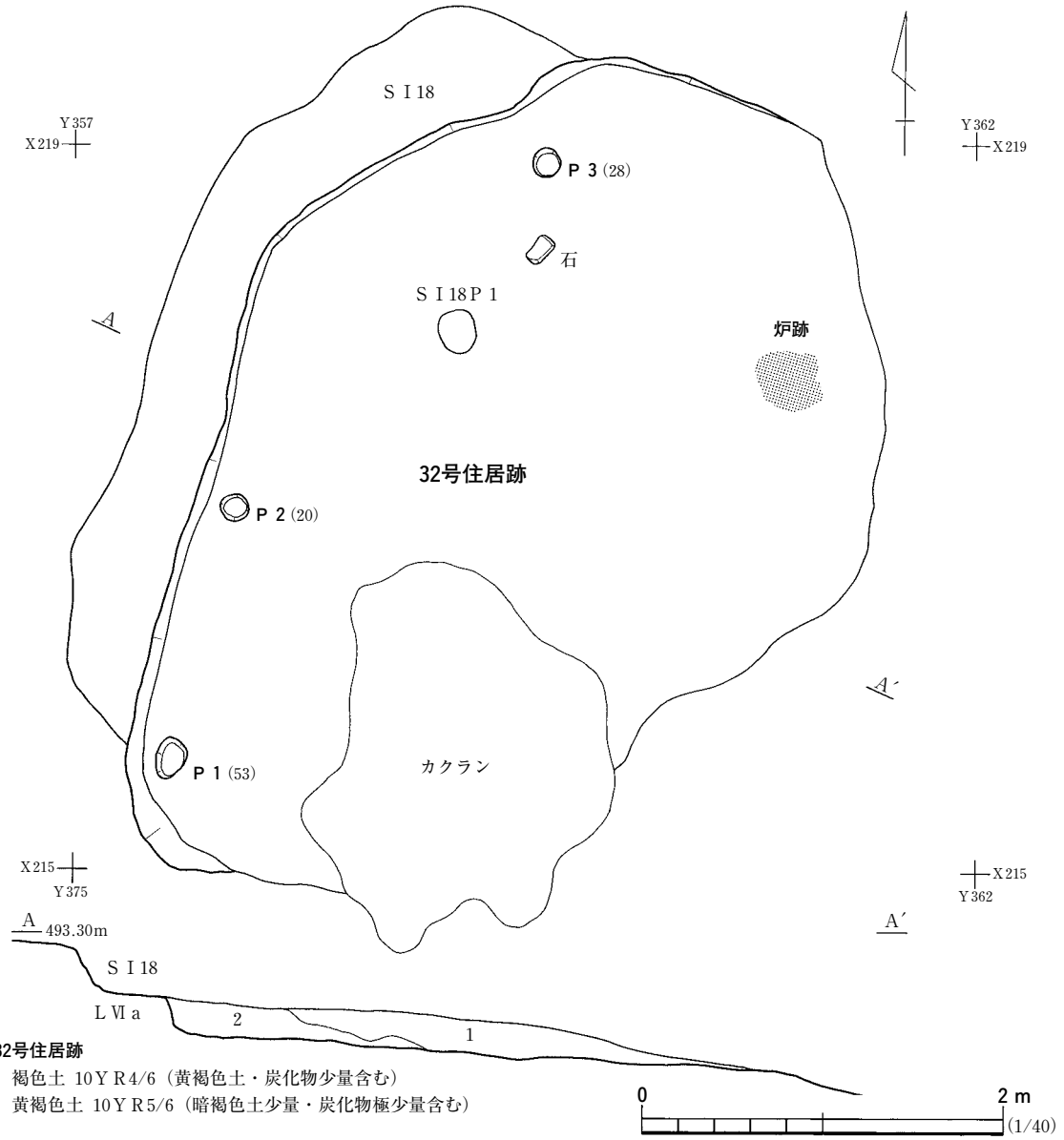


図75　32号住居跡

遺　　物　検出面および堆積土ℓ１中から，縄文土器247点，石器64点が出土している。床面に残されていた遺物はない。土器は早期中葉から前期中葉にかけてのものが出土している。図76に主なものを示した。

１～９は沈線文系土器で，１～４は刺突・押引，５～７は絡条体圧痕，８は条痕が認められる。９は単沈線が認められる平底の破片である。10～12は条痕文系土器で，10は内外面とも条痕，11・12は外面撚糸文が施される。

13以下は前期に属するものである。13・14はキャリパー形を呈する土器のくびれ部分で，いずれも０段多条を地文として13は半裁竹管刺突，14は平行沈線を区画としている。15は地文撚糸文上に沈線で文様を描く。16は横走する有節沈線帯の間にコンパス文を配する体部破片である。17～21は地文のみの繊維土器で，内面は磨かれている。17は口縁部で０段多条の原体によって施文される。

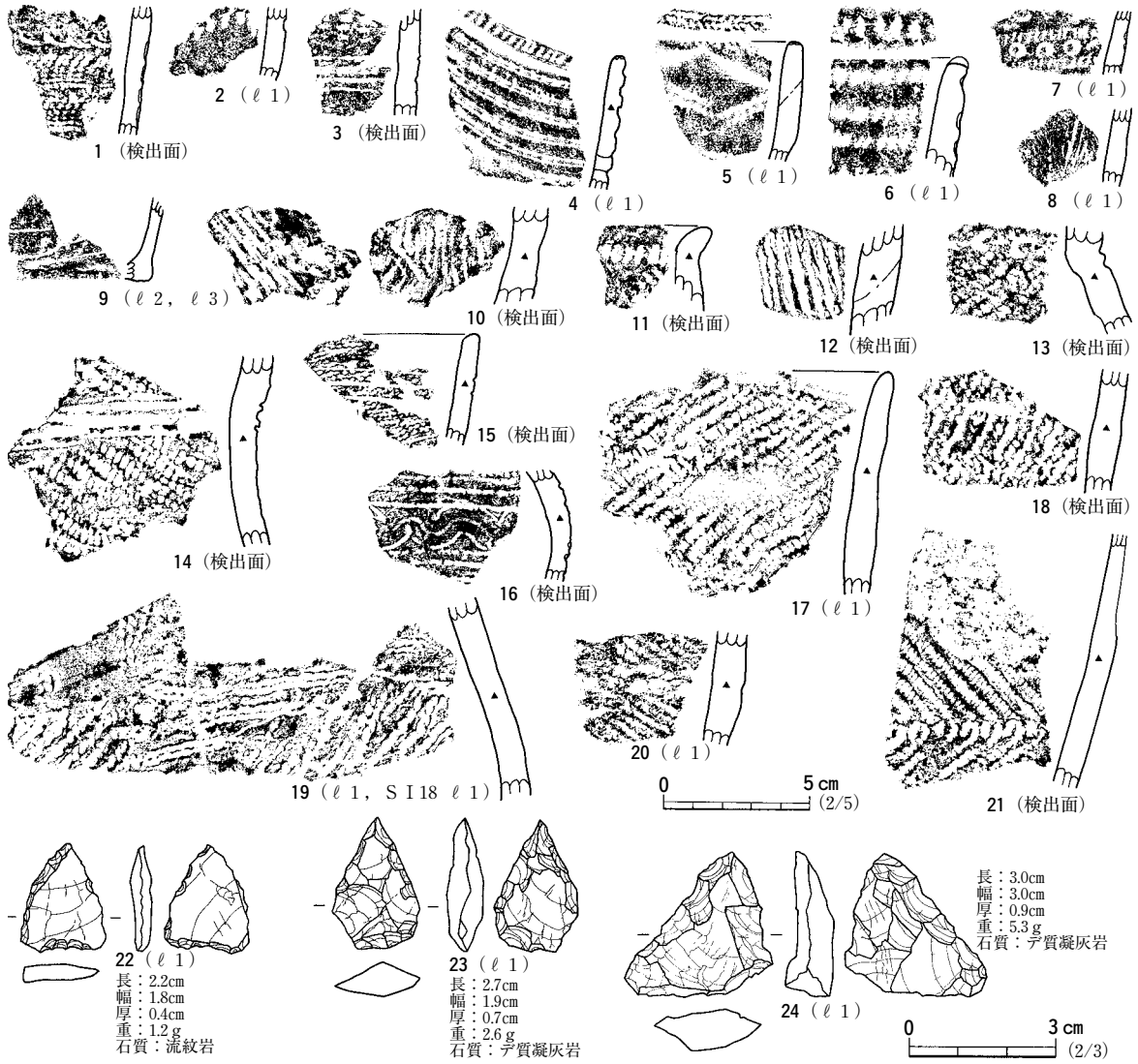


図76　32号住居跡出土遺物

以下は体部で，18が組紐，19は２条の附加条付縄文，20は単節斜縄文，21は末端環付の０段多条の縄を原体とする。

22～24はいずれも石鏃と思われるが，形が整っておらず未成品の可能性もある。

ま　と　め　本遺構は，縄文時代の竪穴住居跡である。掘込内からは，地床炉とピットが検出されている。時期は，床面出土遺物がなく断定は出来ない。堆積土中には縄文時代早期中葉から前期中葉にあたる遺物が出土している。重複する遺構の年代とも併せて，縄文時代早期後葉から前期前半の時間幅で考えておく。　（山元）

33号住居跡　ＳＩ33（図77・78，図版74・143）

遺　　構　本遺構は，調査区中央部，Ｐ20グリッドに所在し，２次調査区東端の道にかかる部分で検出されている。検出面はＬⅥ上面で，暗褐色土の堆積範囲として確認した。33号土坑と重複し，検出時の平面形より本遺構の方が新しいと判断した。西に隣接して29・35・36号住居跡など前期の

住居跡が存在する。東側は道を挟んで10mほど離れた位置に，１次調査区の早期後葉から末葉の住居跡が存在している。

遺存する平面形は方形である。東部は山道造成の為削平されている。軸線はほぼ真北方向を向く。規模は西壁の長さが2.8mで，南・北壁の遺存長は2.5mを測る。検出面からの深さは，遺存状況の良い西壁沿いで，20～30cmを測る。堆積土は２層に分層され，ほぼ水平に堆積する。この堆積状況から人為的に埋め戻されたものと判断される。

床面はＬⅥを平らに削り込んだのみで，貼床はされない。硬化面も特に確認されていない。床面からはピットが２個検出されているのみである。Ｐ１は北西隅に，Ｐ２は中央に位置し，深さが20cmに満たない小型のものである。

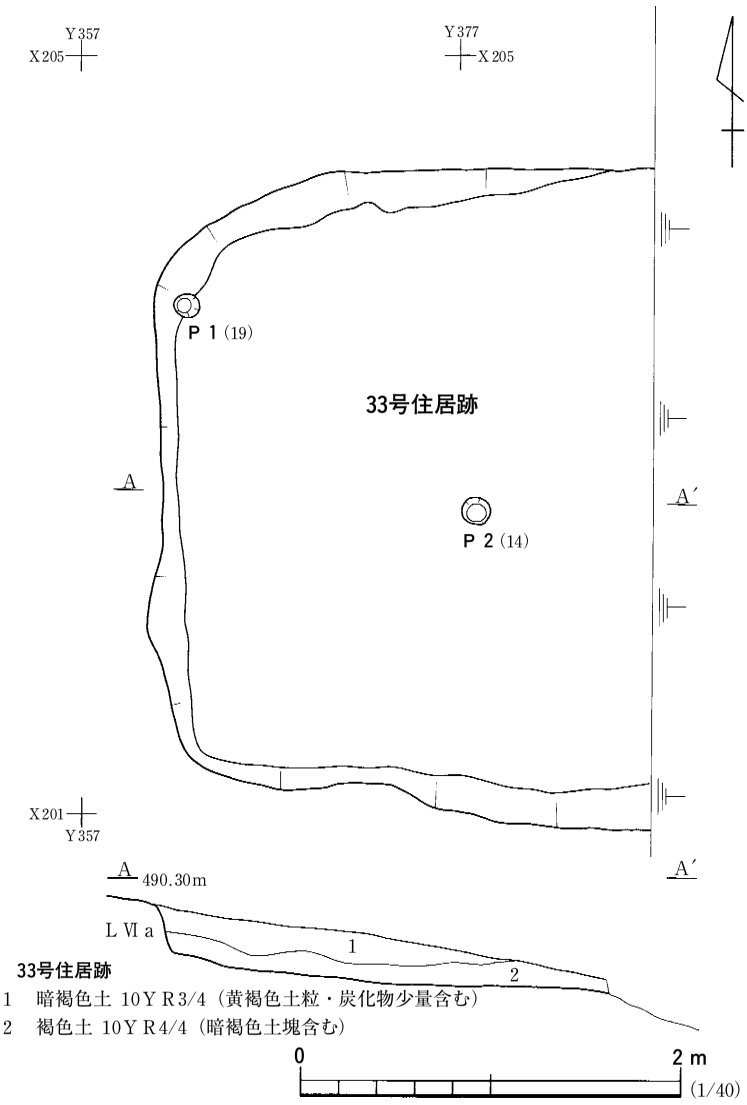


図77　33号住居跡

遺　　物　遺物は床面で確認できたものはなく，すべて堆積土中より出土したものである。数量は，縄文土器86点，石器39点である。図78に主なものを示した。１～15は縄文土器である。１・２は早期後葉の条痕文土器に分類されるもので，１が口縁部の内外面および口端部に単節縄文，２は内外面条痕が施される。４・５は前期初頭に分類されるもので，４には縄圧痕に斜沈線を充填する文様帯の下部に結束羽状縄文を施し，５は刻み付き隆帯下に地文縄文が施されている。６～８は前期前葉の口縁部条線帯を持つ破片で，６・７が下に重層ループ文，８は相互刺突文が施される。３は同時期の底部破片で，体部下端に刺突を加える。９～13は前期中葉に位置付けられ，９には角棒状工具による刺突が２列，10・11は横位の有節沈線が重層する。12・13は網目状の撚糸文が施される。14・15は前期前半の地文のみの資料で，14は単節縄文，15は重層ループ文が施される。

16～19は石器である。16は尖頭部の欠損した凹基の石鏃である。17～19は三角形を呈する小型の石器であるが，調整が器面全体に及んでおらず，石鏃未成品かと推定している。

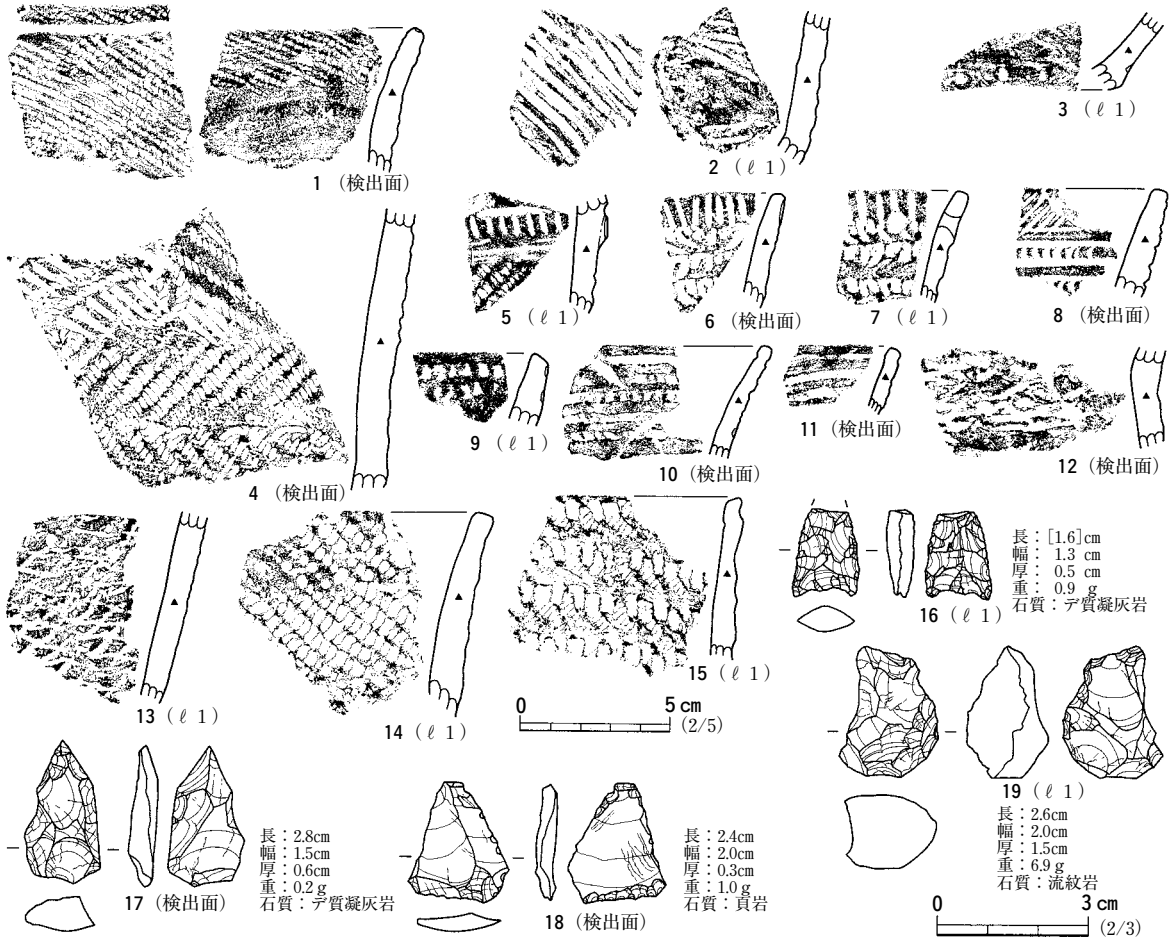


図78　33号住居跡出土遺物

ま　と　め　本遺構は，縄文時代の方形を呈する竪穴住居跡である。センターピットを有するが，小型で浅い。時期は，床面上の遺物がなく決定する根拠に乏しいが，人為堆積土中の遺物の特徴，量から前期中葉と推定される。（山元）

34号住居跡　ＳＩ34（図79・80，図版75・76・138・143）

遺　　構　本遺構は，調査区西部のＨ・Ｉ15グリッドに所在する。丘陵尾根上の緩斜面でも北側の急斜面および沢への落ち際に位置している。検出面はＬⅥ上面で，褐色系の土の堆積範囲として確認された。南西５ｍには近い時期と思われる39・41号住居跡が存在する。

平面形は，方形を呈するが，東壁は土砂の流出のため失われている。軸線は真北より西に傾く。規模は西壁が2.5m，南・北壁の遺存長が2.6mを測る。検出面からの深さは，遺存状況の良い西壁で20cm，南・北壁では15cm程度である。堆積土は３層に分層され，三角堆積であるℓ３は壁の崩落土，ℓ１・２間にはレンズ状の堆積状況が認められ，自然に埋没したものである。

床面はＬⅥを削りこんだもので，貼床はない。硬化面・焼土面も認められない。ピットが３個検出されている。いずれも中央付近に集中し，規則性は認められない。Ｐ１・２は30～40cmの深さがあるが，Ｐ３は４cmと非常に浅い。

遺　　物　ℓ1から縄文土器14点，石器3点が出土した。床面で確認された遺物はない。図80に主なものを示した。1～4は縄文土器である。1～3は縄文を縦位に施すものである。1のように一部に斜縄文を1段挟む部分もある。これらは早期末葉から前期初頭に位置付けられる。4は斜位の縄文が施される前期の土器である。5～7は石器である。5・6は石鏃，7は石皿である。6は調整の状況から未成品である。

ま　と　め　本遺構は，方形を呈する縄文時代の竪穴住居跡である。時期は，決定材料に乏しく断定は出来ないが，堆積土中の遺物の特徴・量から早期末葉から前期初頭と考える。

（山元）

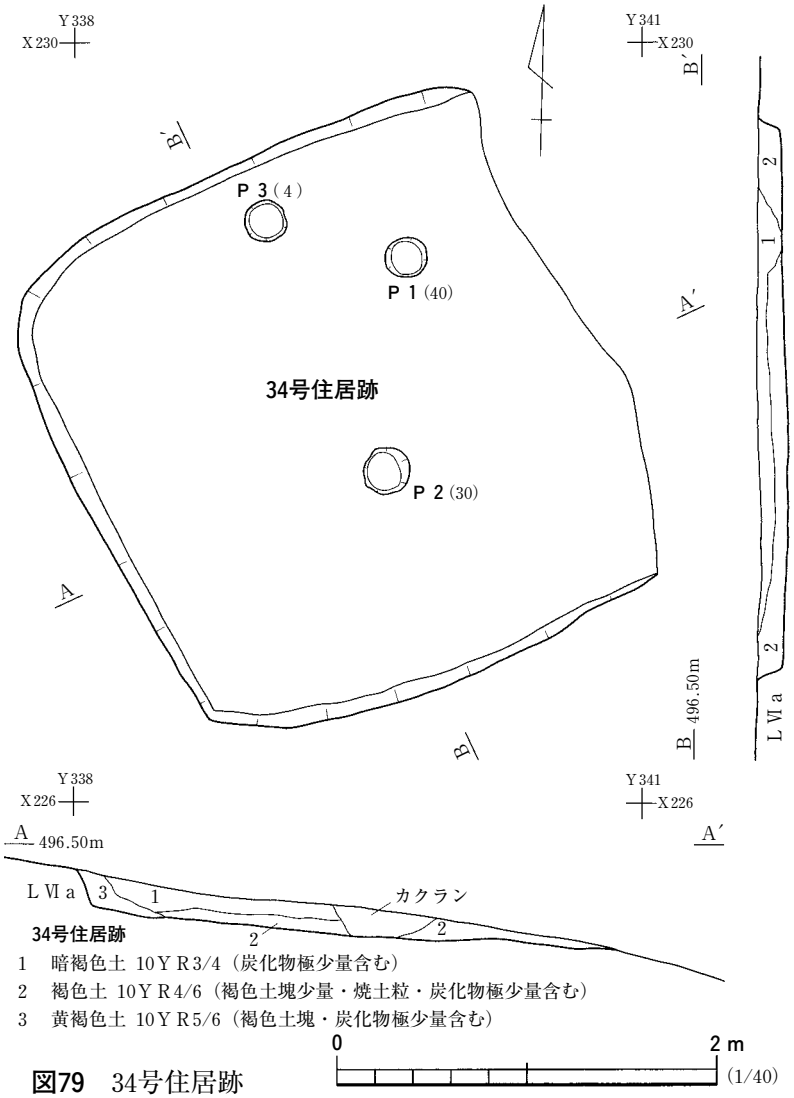


図79　34号住居跡

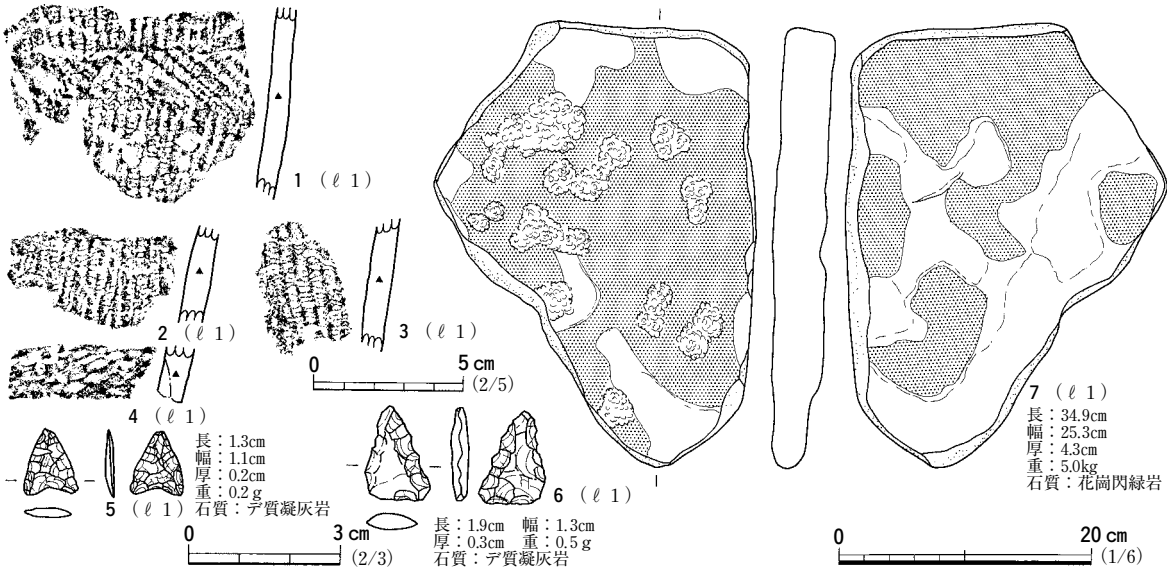


図80　34号住居跡出土遺物

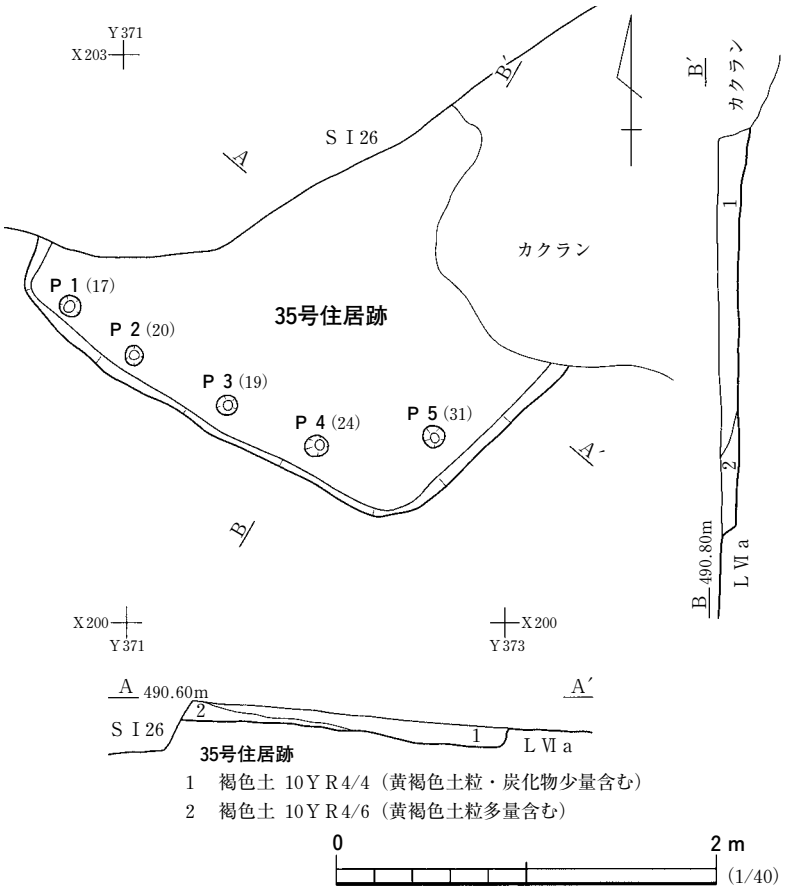


図81　35号住居跡

35号住居跡　ＳＩ35

（図81・82，図版77・137）

遺　　構　本遺構は，調査区中央部Ｏ20グリッドに所在する。丘陵尾根上の緩斜面に位置している。検出面はＬⅥ上面で，褐色土の堆積範囲として確認した。26号住居跡と重複し，26号住居跡の南壁に切られるように検出されている。この状況から本遺構の方が古いと判断した。

北部は大半を26号住居跡および撹乱によって破壊され，残存していない。確認できたのは南壁と東・西壁の一部のみで，平面形は残存部より方形と考えられる。軸線は北東－南西方向である。規模は南壁が2.4ｍを測り，南壁から床面残存範囲の北端までは2.1ｍである。掘込は浅く，検出面からの深さは，10㎝程度である。堆積土は２層に分けられ，斜面上位から順に埋まっている堆積状況から自然に埋没したものと考えられる。

床面はＬⅥを削り込んだのみで，貼床はされない。焼土面・硬化面も認められない。ピットは５個南壁沿いに検出されている。いずれも小型で，深さも15～30㎝程度しかない。

遺　　物　遺物はいずれも堆積土中からの出土で，検出面で確認したものが多い。検出面からは縄文土器33点，石器８点，ℓ１からは縄文土器16点，石器５点，ℓ２からは縄文土器２点を確認している。縄文土器７点を図82に示した。いずれも繊維土器である。１は条痕文土器で，早期後葉に位置付けられる。２・３は有節沈線を重層施文するもので，前期中葉に位置付けられる。４・５も網目状撚糸文が施され，前期中葉の遺物であろう。６・７は同一個体で，単節斜縄文が施される波状口縁の深鉢で，前期前葉に位置付けられる。

ま　と　め　本遺構は，縄文時代の方形を呈する竪穴住居跡である。ピットは周壁に沿って並んでいる。時期は明確に共伴する遺物に乏しく断定は出来ないが，重複遺構の時期などから前期前葉から中葉と考えられる。（山元）

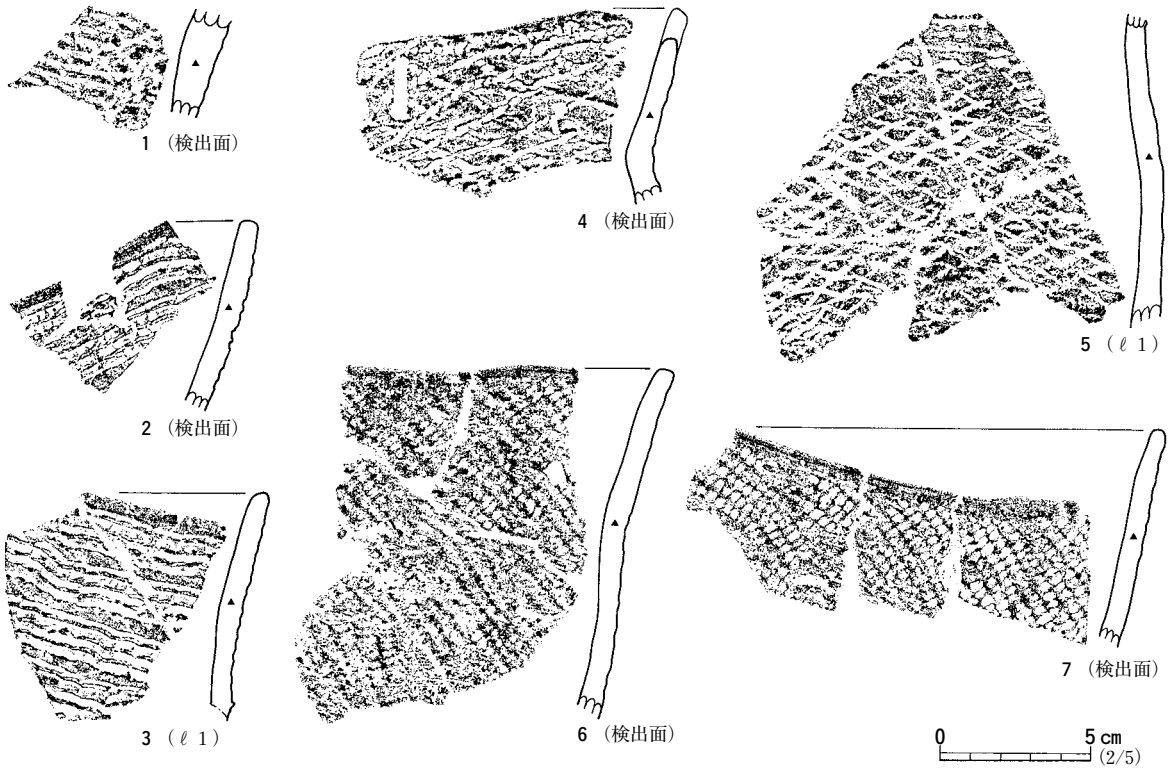


図82　35号住居跡出土遺物

36号住居跡　ＳＩ36（図83・84，図版78・137）

遺　　構　本遺構は，調査区中央部Ｎ19・20グリッドに所在する。丘陵尾根上の緩斜面に位置している。検出面はＬⅥ上面で，褐色土の堆積範囲として確認した。26号住居跡と重複し，26号住居跡の西壁に切られるように検出されていることから，本遺構の方が古いと判断した。

北壁および西壁の一部のみしか確認できず，大半をＳＩ26によって壊されている。残存部より推定される平面形は方形である。遺存する規模は，北壁1.2m，西壁2.0mである。掘込の深さは西壁で25cmである。堆積土は２層に分層され，斜面上位からの土砂の流入によって埋没したものと判断している。

床面はＬⅥを削り込んだのみで，貼床はされない。焼土面・硬化面なども確認できない。ピットが４個検出されるのみである。ピットは北壁沿いにＰ１・２，西壁沿いにＰ４があり，北壁から１m程内側にＰ３がある。いずれも小型で，深さは15～25cm程度である。

遺　　物　出土遺物は堆積土中からのみで，床面からは出土していない。縄文土器71点，石器14点が出土しているが，多くが検出面からの出土である。土器は前期に比定されるものに限られる。図84に主なものを示した。１は櫛歯状工具による有節沈線を重層施文する。口縁部は８単位の波状になると推定される。３～７・９・10も同種の破片であるが，３～６のように間にコンパス文を挟

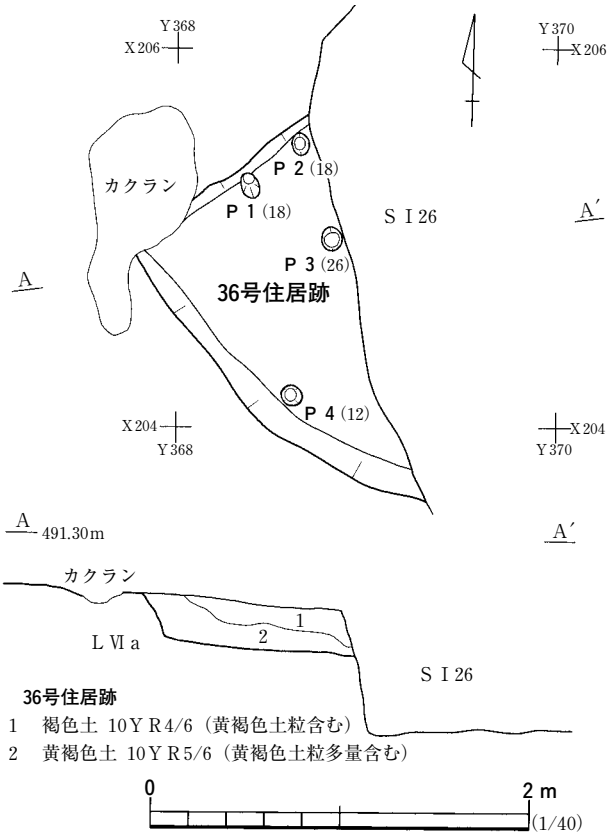


図83　36号住居跡

むものもある。10は上端に同種の文様が認められる土器の体部で，網目状撚糸文が施文される。11・12はこれと同種の破片である。２は口縁部と体部のくびれ部分の破片で，くびれ部には半裁竹管の凸部による押引文が施される。８は棒状工具による刺突の下に横走する沈線が見られる細片である。13はＲＬの単節斜縄文が施される。14は磨石で，表裏に敲打による凹みが確認できる。

ま　と　め　本遺構は，縄文時代の竪穴住居跡である。大半を26号住居跡によって壊されており，遺構の平面形・付帯施設など詳細な部分は不明である。時期は明確な共伴遺物がないため断定は出来ないが，堆積土中の遺物の時期から前期前葉～中葉と考えておく。

（山元）

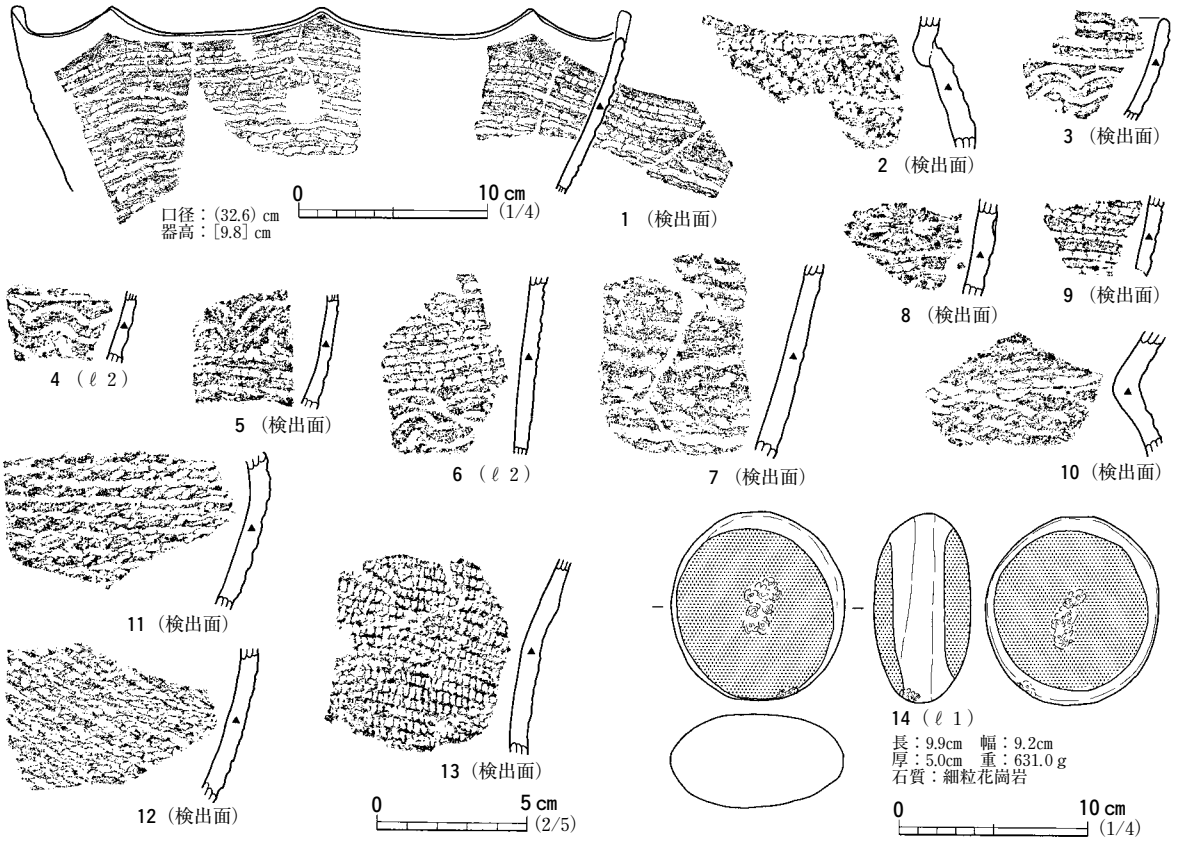


図84　36号住居跡出土遺物

37号住居跡　ＳＩ37（図85，図版79）

遺　　構　本遺構は，調査区中央部M・N20グリッドに所在する竪穴住居跡である。丘陵尾根上の緩斜面に位置し，南半は調査区外へと続いている。検出面はＬⅥであるが，プランが不明瞭であったため上面から20cm程度下げた状態で確認している。30号住居跡Ｐ２と重複し，検出面の違いから本遺構の方が古いことがわかる。本遺構の北西には，38号住居跡が隣接している。

平面形は隅丸方形と思われるが，西・南壁は調査区外へ出ているため確認できない。主軸方位は，北・東壁からほぼ真北を向くものと推測される。確認できた規模は北辺2.5m，東辺が2.3mである。検出面からの深さは10cmを測るが，調査区壁での土層観察では，斜面上位である西側は40cm，下位である東側は20cm程度ＬⅥを掘り込んでいる。掘込内の堆積土は３層に分層され，斜面上位から順に堆積した様子が窺えることから自然堆積と考えている。これらの堆積土の上位にはＬⅢ，Ⅱ´が堆積しており，本遺構の掘込面がＬⅢ下部以下であることがわかる。

床面はＬⅥを削ったもので，貼床はされない。硬化面・焼土面などの生活痕跡は認められない。付帯施設としては，ピットを３個検出している。Ｐ１が北壁際，Ｐ２が東壁際，Ｐ３が北東隅から１ｍほど内側に掘られている。壁際の２個は径10cm，深さ30cm程度のもので，Ｐ３は径18cmと相対的に大きいが，深さ10cmと他よりも浅い。

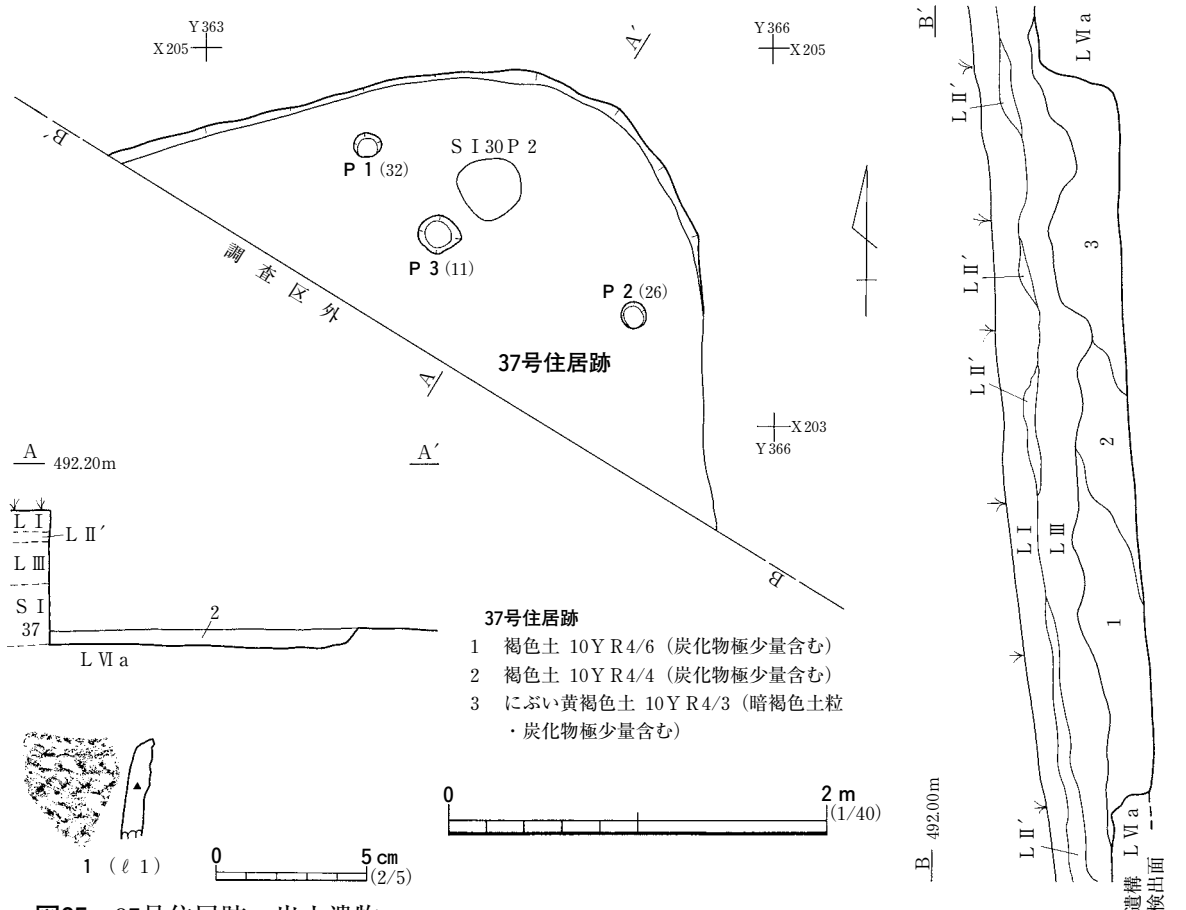


図85　37号住居跡・出土遺物

遺　　物　本遺構からは，堆積土中から縄文土器が１点のみ出土した。図85に示した羽状縄文の施される繊維土器の口縁部破片である。

ま　と　め　本遺構は，縄文時代の隅丸方形を呈すると思われる竪穴住居跡である。南半は調査区外にあたるため全容は不明である。年代は，遺物に乏しく決定するに至らないが，遺構の掘込面に加え，遺構内および周辺の出土遺物から推し量るに縄文時代前期前半以前と考えられる。（山元）

38号住居跡　ＳＩ38（図86，図版80・143）

遺　　構　本遺構は，調査区中央部のM19グリッドで検出された。地形は尾根上の緩斜面に位置する。検出面はＬⅥ上面で，検出層位を違えて23・24号住居跡Ｐ３および炉と重複する。これらはＬⅢ上面で検出されており，本遺構の方が古いことがわかる。本遺構と同時に34号土坑が重複して検出されているが，確認時の平面形から本遺構の方が古いと判断している。本遺構の北東に19号住居跡，南東には37号住居跡が隣接している。

掘込の平面形は隅丸方形である。東壁は撹乱・土砂の流出によって失われている。また，34号土坑が遺存部分の南東隅を壊している。残存する規模は，西壁が2.9m，北壁が2.1mで，南北方向に若干長く，その軸線はほぼ真北を向く。検出面からの深さは，最大20cmほどである。周壁は西壁の残りが最もよく，若干外傾気味に立ち上がっている。遺構内の堆積土は褐色土の単層であった。

床面はＬⅥで，貼床・焼土面・硬化面は確認できない。ピットは北半に集中して４個検出されている。いずれも小型で，深さは30～35cmと一定しているが，配列は不整である。ピット内堆積土はＰ１・２がにぶい黄褐色土，Ｐ３・４が褐色土である。

遺　　物　縄文土器72点，石器12点が出土している。大半が検出面で確認できたもので，堆積土中からは疎らにしか出土せず，床面には存在しない。

土器は早期中葉から前期中葉にかけてのものが出土している。１～４は半裁竹管による平行沈線によって文様を描く。１・２は２～３cm間隔の横線と斜位の沈線を組み合わせて，格子状の文様を描く。３は中央に横線を加えた矢羽状の文様を描く。４は乱雑に引いている。５は外面条痕文，内面擦痕が認められる。これらは，早期後葉の条痕文土器に比定される。６は外面撚糸文，内面擦痕が認められる。早期末葉に比定されよう。７～14は前期前半に比定される土器である。７は非結束の羽状縄文が施文される。９・10は縄側面圧痕と単沈線を組み合わせた細片である。８は附加条の縄文が施される。11は底部の破片で，底面に角棒状工具による刺突を廻らせている。12は網目状撚糸文，13・14は単節斜縄文が施される。15は乳房状の尖底の先端部分である。早期中葉に比定されよう。

16～18は石器である。16は有茎石鏃の未成品と思われる。17は大型の剥片石器の未成品で，石槍だろう。18は磨石で，平坦面に磨面および凹み，側面には敲打痕が認められる。石質は花崗岩である。

ま　と　め　本遺構は，縄文時代の竪穴住居跡である。掘込は隅丸方形である。ピットが４個検

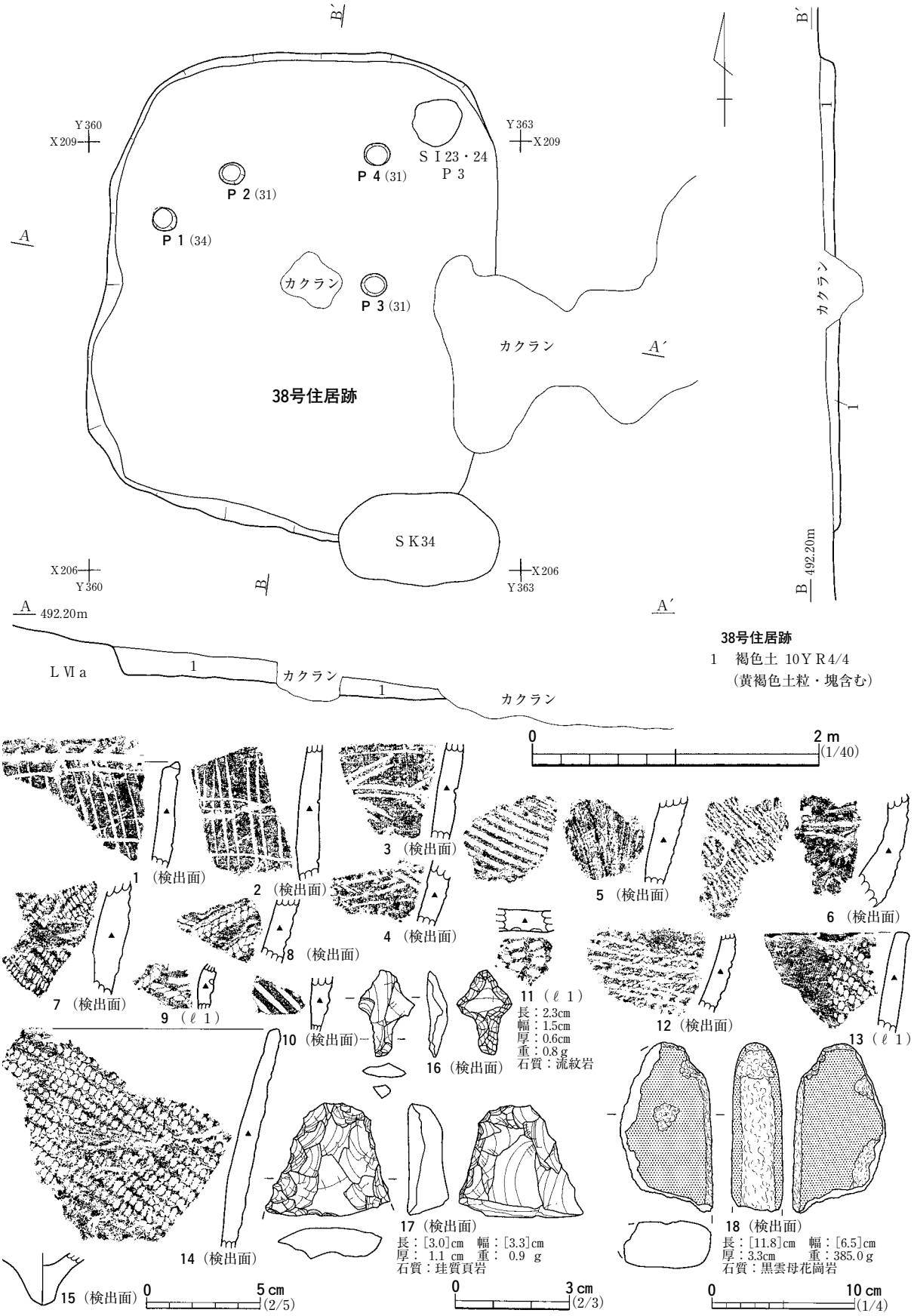


図86　38号住居跡・出土遺物

出されているが，その他に明確な生活痕跡はない。遺構の時期は，共伴遺物がなく断定は出来ないが，遺構の検出面，周囲及び堆積土中から出土した遺物の時期から前期の前半に位置付けられるものと考えている。（山元）

39号住居跡　ＳＩ39（図87，図版81・138）

遺　　構　本遺構はＧ16・17グリッドＬⅥ上面の標高497.2ｍで検出した縄文時代の竪穴住居跡である。本住居跡は尾根頂部の南東向き緩斜面にあり，調査区のなかでも最も高い位置にある。重複する遺構は41号住居跡で，本住居跡が新しい。また，本遺構の北東５ｍには近い時期のものと推測される34号住居跡が存在する。

平面形は西壁が撹乱によって壊され，東壁は斜面の下方にあるためか流出している。このために，掘込本来の形は明確ではないが，北西部にコーナーが確認できることから隅丸方形であったのだろう。壁は外傾気味に立ち上がる。規模は南北3.4m，東西は現状で3.2ｍである。最大壁高は北西隅で19㎝である。堆積土は４層に区分し，堆積状況から流入土と考えている。

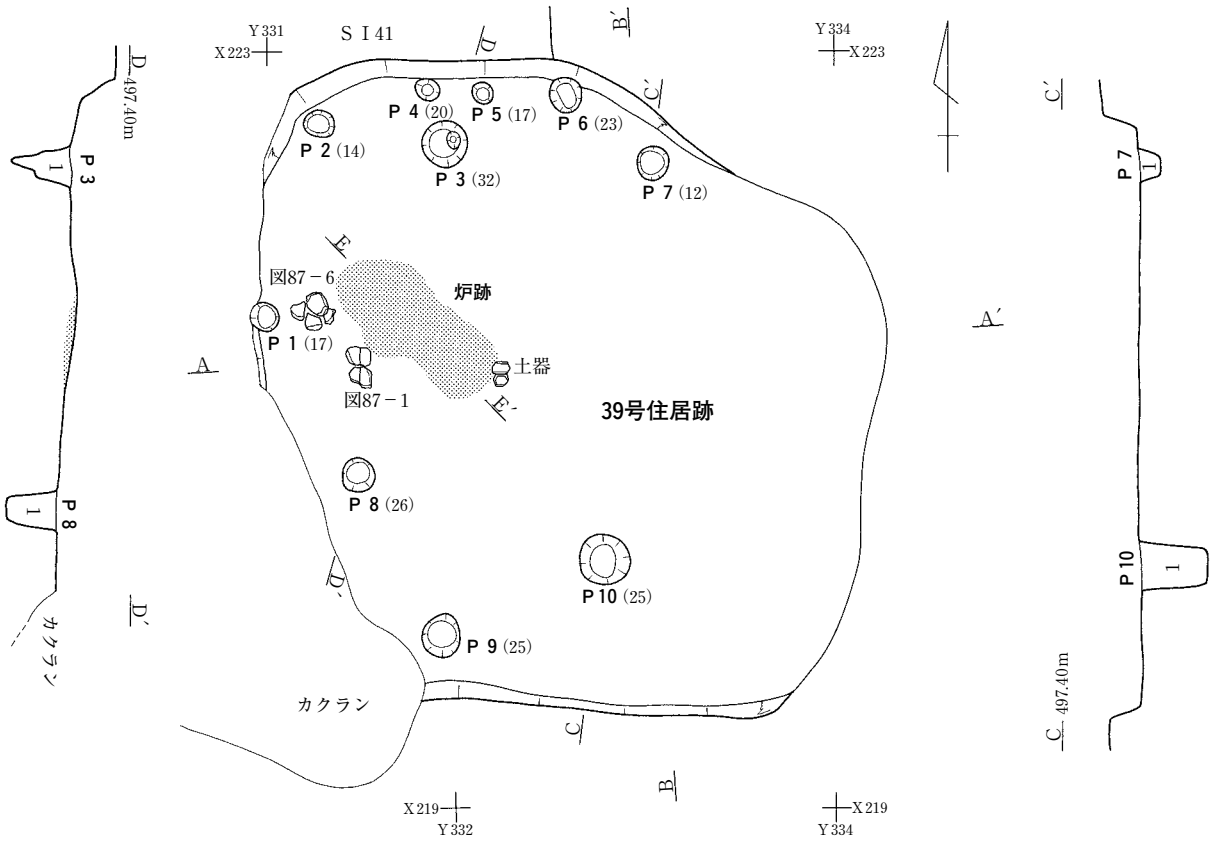
床面からは炉跡と柱穴10個を検出した。柱穴の規模は径８～26㎝，深さ12～32㎝である。そのなかで，Ｐ３・７・８・10はそれぞれの位置関係および規模から主柱穴と考えている。それ以外のＰ１・２・４～６・９は壁柱穴である。壁柱穴の配置をみると，Ｐ１とＰ９の間には撹乱によって欠損しているが，壁柱穴があったことが推定できる。また，東壁際には柱穴は確認できない。ピット内の堆積土はＰ５・９が暗褐色土で，その他は住居内堆積土に近い褐色土である。

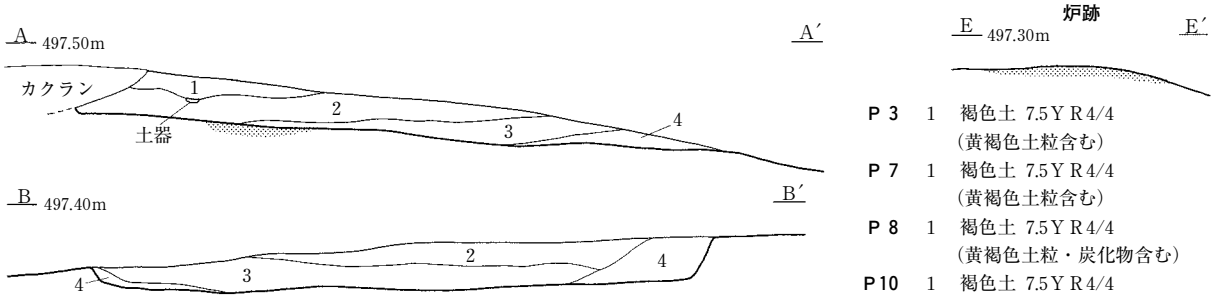
炉跡は床面中央やや西寄りに位置する。北西－南東方向に長い形状の焼け面で，地床炉と考えられる。長軸は約１ｍで，炉跡の下部に掘り込みなどはなかった。被熱の状況は弱く，焼土の厚さは４㎝程度である。

遺　　物　本住居跡から出土した遺物は縄文土器257点，剥片28点である。そのなかから８点の縄文土器を図示した。８以外はすべて胎土に繊維が含まれている。

１・６は同一個体で，堆積土の下層から出土しており，平面図上に出土位置を示した。出土した縄文土器の大半は１・６の同一個体破片が占めていた。外面に撚糸文が施文され，底部は尖底となる。早期末葉に比定される。２はこれらと同種の破片で，撚糸文を地文とし，沈線文が施されている。内面には条痕文が施されている。３には縄圧痕文と刻み，４は非結束の羽状縄文が施されている。前期初頭に比定される。８は撚糸文が施文されている。胎土に繊維は含まれておらず，晩期に比定される。５・７は底部の破片である。５は平底で，単節縄文と思われる地文が確認できる。７は尖底で，内外面無文である。

ま　と　め　本住居跡は撹乱などにより壊され，平面形が明確ではない。一辺が3.4ｍで，調査区のなかでは，あまり規模の大きな住居跡ではない。床面からは地床炉と柱穴を10個検出した。柱穴のうち４個を主柱穴とした。本住居跡の時期は，床面出土遺物がなく明確ではないが，堆積土下層から出土し，土器の大半を占める同一個体資料から，早期末葉大畑Ｇ式期と考えられる。（吉野）





P 3　1　褐色土 7.5Y R4/4
（黄褐色土粒含む）
P 7　1　褐色土 7.5Y R4/4
（黄褐色土粒含む）
P 8　1　褐色土 7.5Y R4/4
（黄褐色土粒・炭化物含む）
P10　1　褐色土 7.5Y R4/4
（黄褐色土粒・炭化物含む）

39号住居跡

1　暗褐色土 7.5Y R3/3（炭化物含む）
2　黒褐色土 7.5Y R3/2（土器・炭化物多量含む）
3　褐色粘質土 10Y R4/4（黄褐色土粒・焼土・炭化物含む）
4　にぶい黄褐色粘質土 10Y R5/4（黄褐色土粒多量・炭化物少量含む）

0　2 m（1/40）

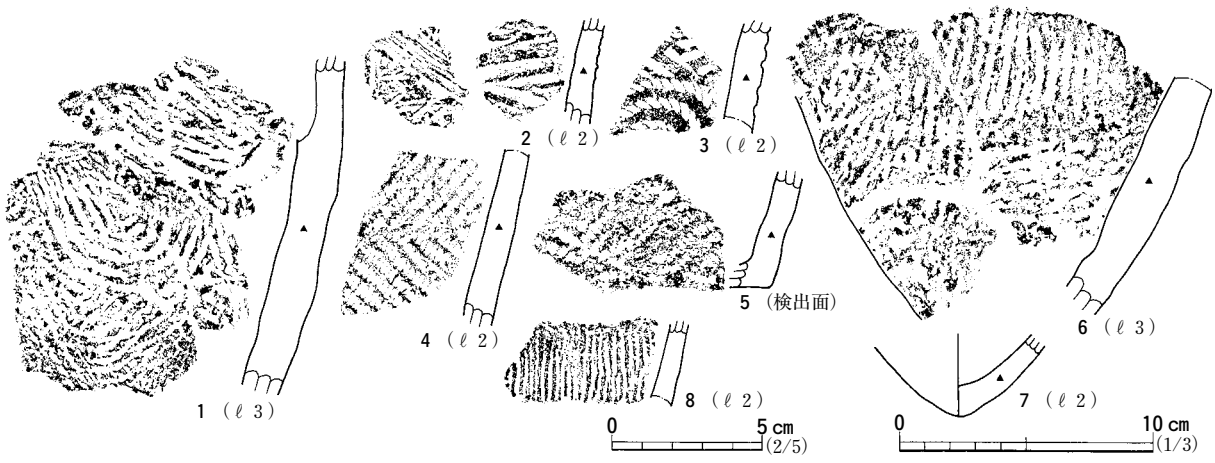


図87　39号住居跡・出土遺物

40号住居跡　ＳＩ40（図88・89，図版82・84・143）

遺　　構　本遺構は調査区中央部，Ｋ・Ｌ16・17グリッドに所在する竪穴住居跡である。丘陵尾根上から北側の急斜面への落ち際に位置している。検出面は，ＬⅥおよび29号住居跡床面上で，29号住居跡を精査中に検出している。29号住居跡の土層ベルトの観察から本遺構の方が新しいものと判断している。37号土坑とも重複し，検出面での状況から本遺構および29号住居跡の方がこれより古いと考える。

遺構の東半は土砂の流出のためか失われている。残存部から推定される平面形は方形で，軸線はほぼ真北を向く。規模は西壁の長さが3.5ｍで，ここから床面残存範囲の東端までの距離は3.4ｍである。掘込の深さは最大15㎝程度である。堆積土は２層に分層され，斜面上位からの流入状況が窺えるため自然に埋没したものと判断している。

床面はＬⅥを削り込んだもので，貼床はされない。数箇所に木の根などによる自然撹乱を受けている。床面からはピットのほかには，硬化面・焼土面などの生活痕跡は確認できていない。ピットは11個を確認している。Ｐ１～７は周壁沿いに並ぶ。西壁は中央にＰ１，北西隅にＰ２，南西隅にＰ５が配される。北壁沿いは，東寄りにＰ３，残存部の東端にＰ４が配される。南壁沿いは西寄りにＰ６，東寄りにＰ７が配される。床面のほぼ中央部にはＰ10が配されている。Ｐ８・９・11は南半にあるが，北半にこれに対応するようなピットの配列はない。いずれも10～30㎝程度の浅いもので，中央のＰ10のみ径25㎝とやや大きいほかは，径20㎝以下の小型である。ピット内の堆積土はＰ５・６のみ暗褐色土で，その他は褐色土である。

遺　　物　堆積土中から縄文土器123点，21点が出土した。床面から出土したのは磨石・石鏃のみである。土器は早期中葉から前期中葉にかけての時期のものが出土している。図88に土器を，図89に石器を示した。

図88－１・２は沈線によって斜格子を描くもので，胎土に繊維は含まない。早期中葉に比定される。３・４は早期後葉～末葉に比定される。３は内外面に条痕文が施される。４は撚糸文が施される。内面は無文である。５～13は前期前半に比定されるものである。５～８は側面環付の縄文が施文される。５は波状口縁，８は底部である。９・11・12は単節斜縄文が施される。12の上端には平行沈線が引かれる。10は撚糸文が施される体部下半の破片である。

図89－１～４は石鏃である。１・２は凹基，３・４は不整な形状であることから未成品かと思われる。５・６は磨石で，５は３面に凹み，６は２面に凹みを持つ。６は床面から出土している。７は石皿で，平坦面を敲打，磨面に使用している。裏面も全面使用されていたのであろうが，風化が著しいため剥落している。

ま　と　め　本遺構は，縄文時代の竪穴住居跡である。平面形は方形である。Ｐ10がセンターピットで，Ｐ１～７が壁沿いに巡る柱穴配置を持つ。床面に炉などの生活痕跡は残されていなかった。本遺構の時期は，明確な時期を示す遺物が存在せず断定は出来ないが，重複関係から前期中葉に属

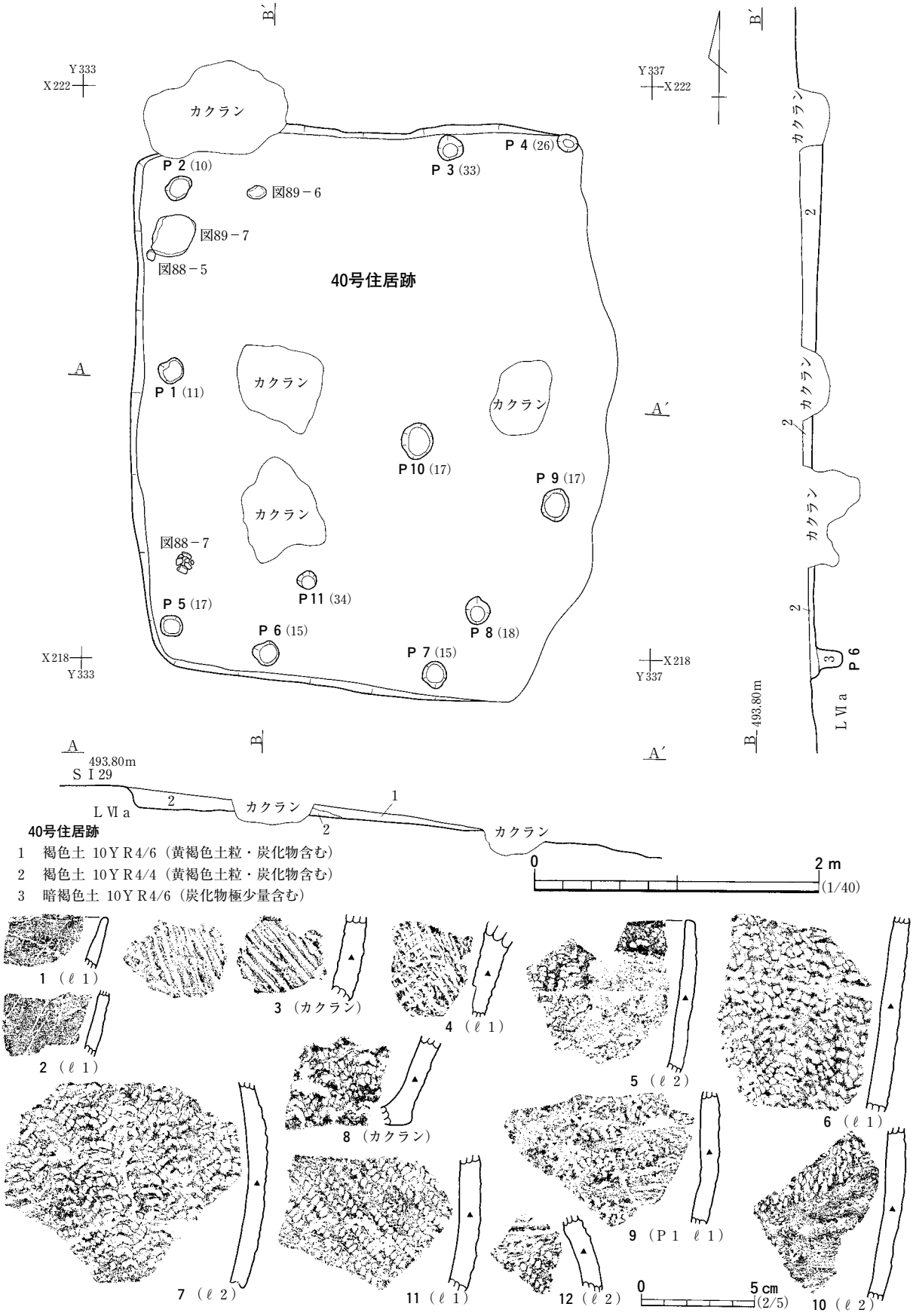


図88　40号住居跡・出土遺物（1）

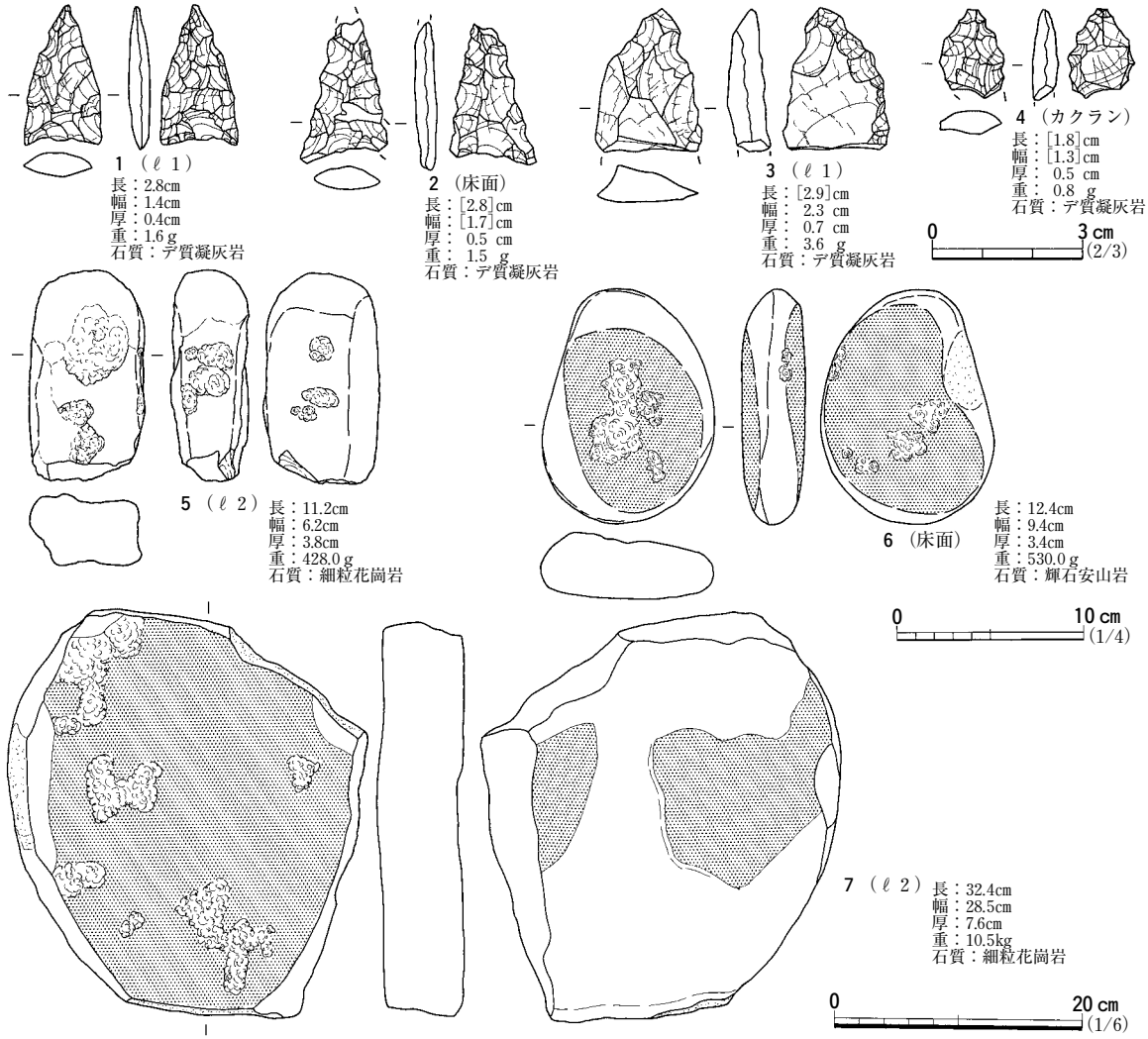


図89　40号住居跡出土遺物（２）

するものと考えられるが，この時期の遺物は少ない。　（山元）

41号住居跡　ＳＩ41（図90，図版83・84・138）

遺　　構　本遺構はＧ16グリッドＬⅥ上面の標高497.6m付近で検出した竪穴住居跡である。尾根頂部の南東向き緩斜面に位置する。本住居跡は39号住居跡とともに調査区内で最も高い位置にある。重複する遺構は39号住居跡で，新旧関係は本住居跡が古い。

住居跡の大半が39号住居跡と撹乱によって壊されているため，住居跡全体の平面形は明確ではないものの，比較的整った方形であったのだろう。規模は東西が2.1m，南北が現状で1.4mとなる。最大壁高は西壁で0.3mである。

堆積土は２層に区分した。層理面はほぼ平坦であることから人為的に埋め戻されたことを考えている。本遺構は住居内施設が検出されていないものの，底面が平坦であること，規模が他の住居跡と遜色がないことから住居跡と判断した。

遺　　物　本住居跡から出土した遺物は縄文土器31点，石器１点，剥片１点である。そのうち縄

文土器２点，石器１点を図示した。出土土器のほとんどは器面が著しく摩滅していた。

１・２の土器には，胎土に繊維が含まれていた。外面は撚糸文を地文とし，平行沈線で弧線文が描かれている。１の内面には条痕が認められる。器面は比較的に堅く焼き締まっている。３は断面多角形の凹・磨・敲石である。

ま と め　本遺構は方形を呈する，竪穴住居跡である。住居跡からは住居施設は検出されなかった。本住居跡の時期は，出土遺物と39号住居跡との重複関係から縄文時代早期末葉大畑Ｇ式期としておく。　（吉野）

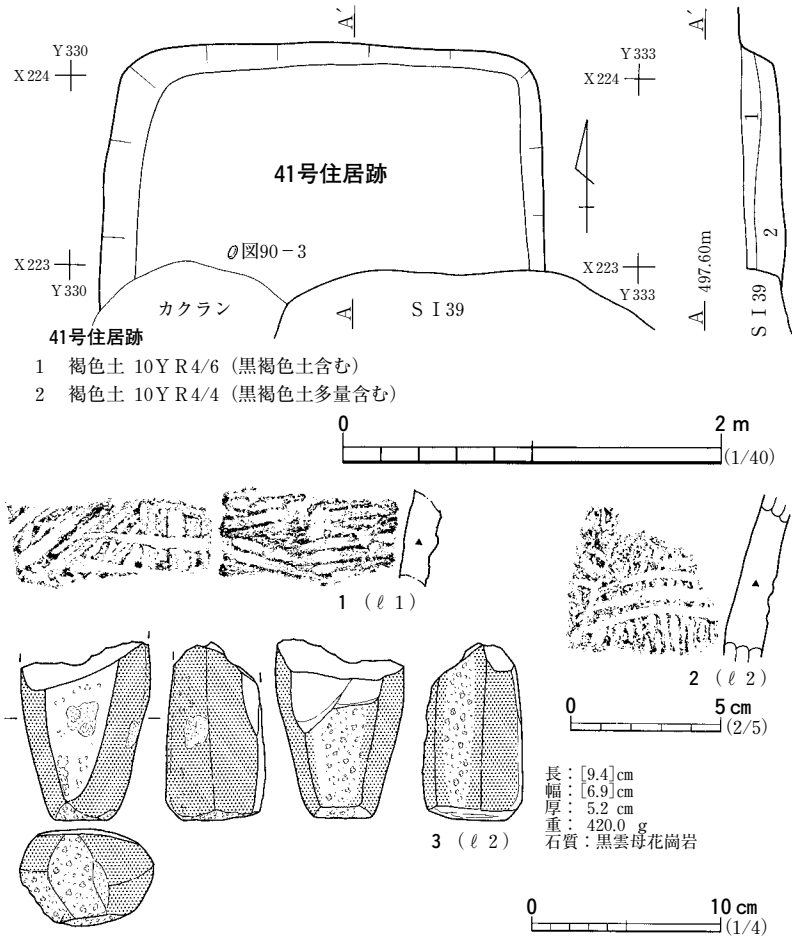


図90　41号住居跡・出土遺物

第２節　掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は，１次調査において８棟を調査した。２次調査においては検出されていない。年代的には縄文時代晩期７棟（２～８号建物跡），古代１棟（１号建物跡）である。建物跡は年代に関わらず調査区東側の丘陵裾部の斜面上，標高478～480ｍの位置に存在する。

縄文時代晩期に属する建物跡７棟は，大型の３棟と小型の４棟に分けることができる。すべて遺構の基本プランは１間×１間の正方形～長方形である。大型の３棟（２～４号建物跡）は，１間3.0ｍ前後で，柱穴の掘形が80㎝前後，柱痕30～40㎝を測り，検出面からの深さは最大のもので1.5ｍにまで及ぶ。また，大型の建物跡にはそれぞれ１・２・４個の小型柱穴が伴う。小型の４棟（５～８号建物跡）は，１間が2.0～2.5ｍ前後の規模である。これらは大型の３棟の周囲に散在する。確認しえた７棟の建物跡は，ＡＡ・ＡＢ27・28グリッドを中心として，これを取り囲むような配置をとっていることが看取される。

古代の建物跡は２間×３間の側柱建物跡であり，他遺構との重複関係から本遺跡中で最も時期の新しい遺構の一つである。

なお報告に際して，柱間寸法は柱痕の中心を結んだ数値で示し，柱痕の遺存が確認できなかったものは底面の中心部から計測している。数値は0.05ｍを最少単位として平面図に記載し，柱痕を基点にしていないものは(　)で示す。

１号掘立柱建物跡　ＳＢ01（図91・92，図版85・86）

遺　　構　Ｙ・Ｚ27・28グリッド，ＬⅣ・ＬＶ面で確認した。調査区南東部の丘陵の裾，南東方向に下る緩斜面上に位置する。Ｐ７・Ｐ８が６号住居跡と重複し，本建物跡が新しい。また位置的に２・３号建物跡と重複し，新旧関係は６号住居跡と３号建物跡との重複関係から２・３号建物跡→６号住居跡→１号建物跡となる。

本建物跡は桁行き３間，梁行き２間となる南北棟の側柱建物跡である。西桁行きを基準とした建物の主軸方向はＮ20°Ｅを指す。柱穴はＰ５・Ｐ９の柱筋に位置するＰ11を含め11個を数える。西・

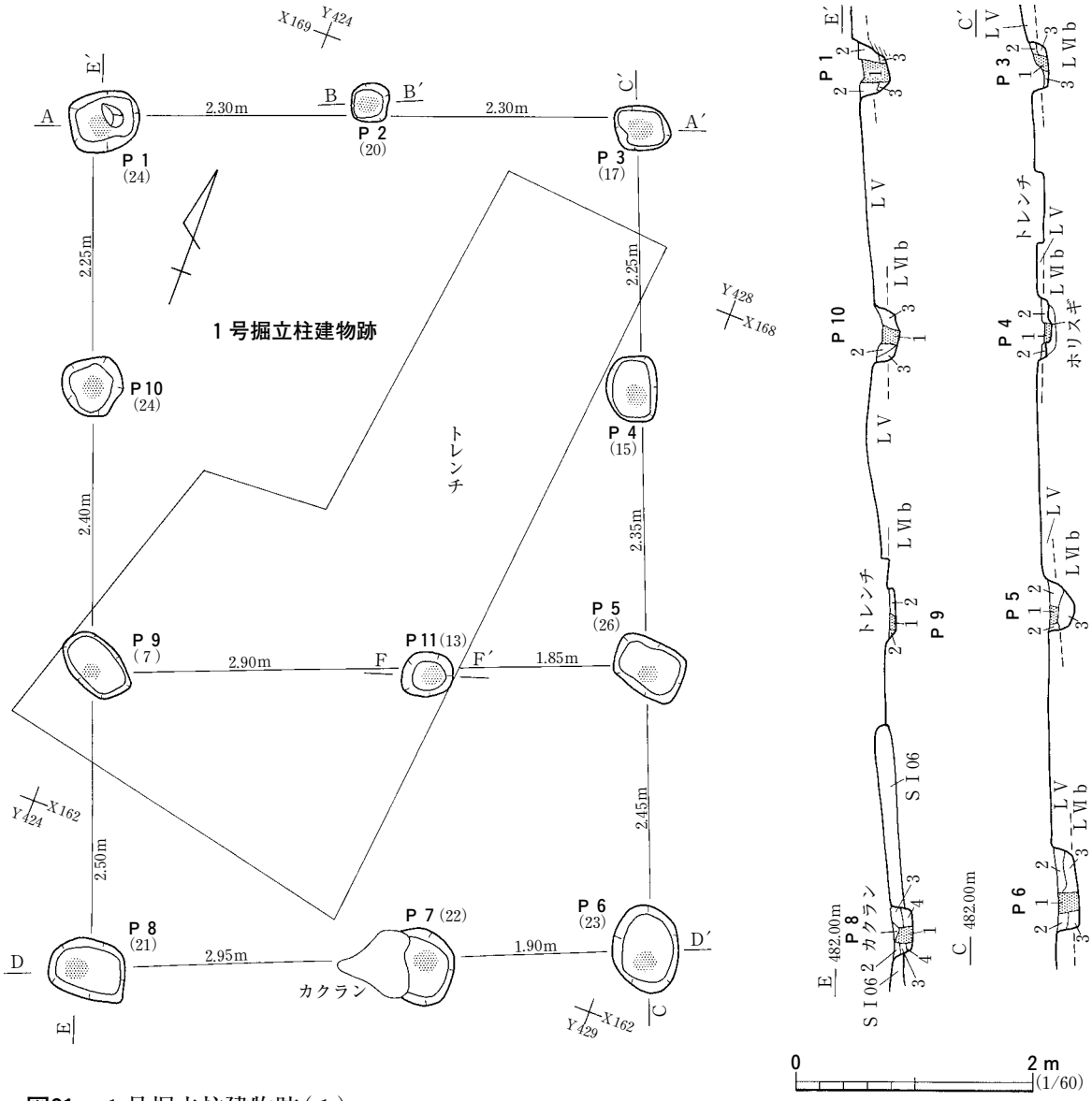


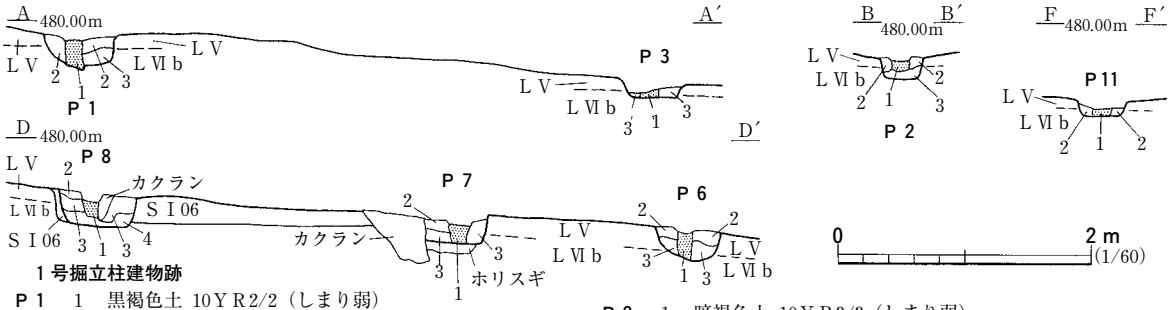
図91　１号掘立柱建物跡（１）

東桁行きの平均総長は7.10m，柱間寸法の平均は2.37m，南・北梁行きはそれぞれ4.85m・4.60mであり，南梁行きが若干広い。また南梁行き及びＰ５－Ｐ11－Ｐ９間の柱間は共に西側が広くなる。平面積は33.5㎡である。

柱穴の平面形は隅丸方形～長方形を基調とする。規模は一辺が50cm前後となるものが多く，Ｐ２・Ｐ11はやや小型である。柱痕はすべての柱穴から確認され，径は15cm前後を測る。柱痕径については掘形の大小とは相関性をもたないようである。

遺　　物　遺物はＰ７・Ｐ８の掘形埋土中から縄文土器片３片が出土したのみである。いずれも本建物跡に直接伴うものではない。

１は晩期精製土器の口縁部片であり，わずかに内湾しながら立ち上がる。口唇部は平坦状につくられ，口端部には口縁に沿うように一本の沈線が入れられる。口縁部外面は口唇部下に３本の横走平行沈線を巡らせ，この下には斜位の沈線と沈線間の磨消縄文が認められる。雲形文の一部かと思われる。２は晩期粗製土器の口縁部片である。わずかに内湾して立ち上がる器形であり，口端部は平坦につくられる。外面には網目状撚糸文が施文されるが，口縁部上端とこれ以下では施文方向が異なるようである。内面は丁寧にナデられている。以上の特徴は隣接して存在する１号土器埋設遺構の深鉢と共通しており，この深鉢の一部が木根などにより破壊され，本遺構の柱穴埋土内に流入した同一個体破片と考えられる。３も同様に外面に網目状撚糸文が施文される土器であり，この小片の特徴はやはり隣接する２号土器埋設遺構に伴う深鉢と共通しており，２と同様の理由で本遺構



１号掘立柱建物跡

Ｐ１　１　黒褐色土 10ＹＲ2/2（しまり弱）
　　２　黒褐色土 10ＹＲ2/3（しまり強）
　　３　暗褐色土 10ＹＲ3/3（黄褐色土との混土）
Ｐ２　１　暗褐色土 10ＹＲ2/2（しまり弱）
　　２　黒褐色土 10ＹＲ3/2（黄褐色土との混土）
　　３　にぶい黄褐色土 10ＹＲ4/3（黄褐色土との混土，しまり強）
Ｐ３　１　黒褐色土 10ＹＲ2/3（しまり弱）
　　２　黒褐色土 10ＹＲ2/2（黄褐色土との混土）
　　３　黒褐色土 10ＹＲ3/2（黄褐色土との混土，しまり強）
Ｐ４　１　黒褐色土 10ＹＲ2/3（しまり弱）
　　２　黒褐色土 10ＹＲ2/2（黄褐色土との混土）
Ｐ５　１　黒褐色土 10ＹＲ2/3（しまり弱）
　　２　黒褐色土 10ＹＲ2/2（黄褐色土との混土，しまり強）
　　３　黒褐色土 10ＹＲ3/2（黄褐色土との混土，しまり強）
Ｐ６　１　黒褐色土 10ＹＲ3/2（しまり弱）
　　２　暗褐色土 10ＹＲ3/3（黄褐色土との混土）
　　３　にぶい黄褐色土 10ＹＲ4/3（黄褐色土多量との混土）
Ｐ７　１　黒褐色土 10ＹＲ3/2（しまり弱）
　　２　暗褐色土 10ＹＲ3/3（黄褐色土との混土）
　　３　暗褐色土 10ＹＲ3/4（黄褐色土多量との混土）
Ｐ８　１　暗褐色土 10ＹＲ3/3（しまり弱）
　　２　黒褐色土 10ＹＲ2/3（黄褐色土との混土）
　　３　黒褐色土 10ＹＲ2/2（黄褐色土少量との混土）
　　４　暗オリーブ褐色土 10ＹＲ2/2（黄褐色土多量との混土）
Ｐ９　１　黒褐色土 10ＹＲ3/2（しまり弱）
　　２　黒褐色土 2.5Ｙ3/2（黄褐色土との混土）
Ｐ10　１　黒褐色土 10ＹＲ2/3（しまり弱）
　　２　黒褐色土 10ＹＲ3/2（黄褐色土との混土，しまり強）
　　３　暗褐色土 10ＹＲ3/3（黄褐色土少量との混土）
Ｐ11　１　黒褐色土 10ＹＲ2/2（しまり弱）
　　２　暗褐色土 10ＹＲ3/3（黄褐色土との混土）

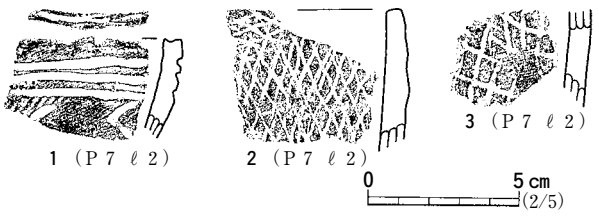


図92　１号掘立柱建物跡（２）・出土遺物

の柱穴内に流入した同一個体破片と考えられる。

ま　と　め　本建物跡は南北３間，東西２間の南北棟側柱建物跡である。古代に属する６号住居跡の一部を壊して構築されており，本遺跡で検出された遺構では最も新しいものである。従って本建物跡の機能年代は奈良時代末葉～平安時代初頭と考えられる。（横須賀）

２号掘立柱建物跡　ＳＢ02（図93・94，図版87～90）

遺　　構　Ｙ・Ｚ26・27グリッド，ＬⅣ・ＬⅤ面で確認した。調査区東部の丘陵の裾，東～南東方向に下る緩斜面上に位置する。１号建物跡Ｐ２・Ｐ３と本遺構は位置的に重複関係にある。また本遺構の中心部分には１・２号土器埋設遺構が存在する。類似した内容を持つ３・４号建物跡とは近接する。

本遺構は，大型の柱穴４個で構成される１間×１間の建物跡で，小型の柱穴１個が付属する。西側柱列（Ｐ１－Ｐ４）を基準とした建物の主軸方向はＮ12°Ｗを指す。柱間寸法は南北長（Ｐ２－Ｐ３，Ｐ１－Ｐ４）が3.10ｍ，東西長（Ｐ１－Ｐ２，Ｐ３－Ｐ４）が2.90ｍを測り，建物の平面プランは僅かに南北に長い長方形を呈する。建物跡の平面積は8.99㎡である。また，遺構西側，Ｐ１－Ｐ４の柱筋の中心から外側55㎝の位置に，小型の柱穴であるＰ５が存在する。

柱穴はすべて円形もしくは隅丸方形を基調とする。Ｐ１～Ｐ４は大型の柱穴である。北西隅のＰ１が最も規模が大きく最大径90㎝，他のＰ２～Ｐ４最大径70㎝前後を測る。小型のＰ５は最大径50㎝弱である。検出面からの深さは斜面上方に位置するＰ１・Ｐ４が85～90㎝，斜面下方に位置するＰ２・Ｐ３は60㎝を測り，底面の標高は478.90～479.00ｍの幅に収まる。Ｐ５はこれらに比べて浅く，検出面から25㎝の深さであり，底面標高は479.70ｍである。柱痕はすべての柱穴から検出され，Ｐ１～Ｐ４は径26～32㎝，Ｐ５では18㎝を測る。柱穴掘形中には基盤層の花崗岩が所々で突出するが，４号建物跡で見られるような自然石を裏込めとして利用したような構築方法は用いられていない。

遺　　物　Ｐ１から１点，Ｐ２から７点出土している。いずれも細片のため図示していない。

ま　と　め　本遺構は大型の柱穴４個で構成される１間×１間の建物跡であり，西側柱列の中心やや外側に小型の柱穴１個が伴う。大型の柱穴で検出した柱痕には30㎝に達するものもあり，本建物跡は大型の建物規模が復元される。建物に伴う小型柱穴についても注意されるが，その具体的な機能については不明とせざるをえない。

本建物跡の内容からその機能時期を判断する材料は見出せないが，同内容の３・４号建物跡の年代観から縄文時代晩期中葉に属するものと確認される。本建物跡内部のほぼ中心部分には時期的に併行する２基の土器埋設遺構が存在し，本建物跡とは何らかの有機的な関連を持つ可能性が高い。よって儀礼もしくは祭祀的な色合いが強いものとして捉えることはできるが，遺構の具体的な性格については直接判断する材料を持ち得ず，今後は周囲に存在する同時期の遺構や遺物の内容，遺跡環境なども含めた多面的な検討が必要である。（横須賀）

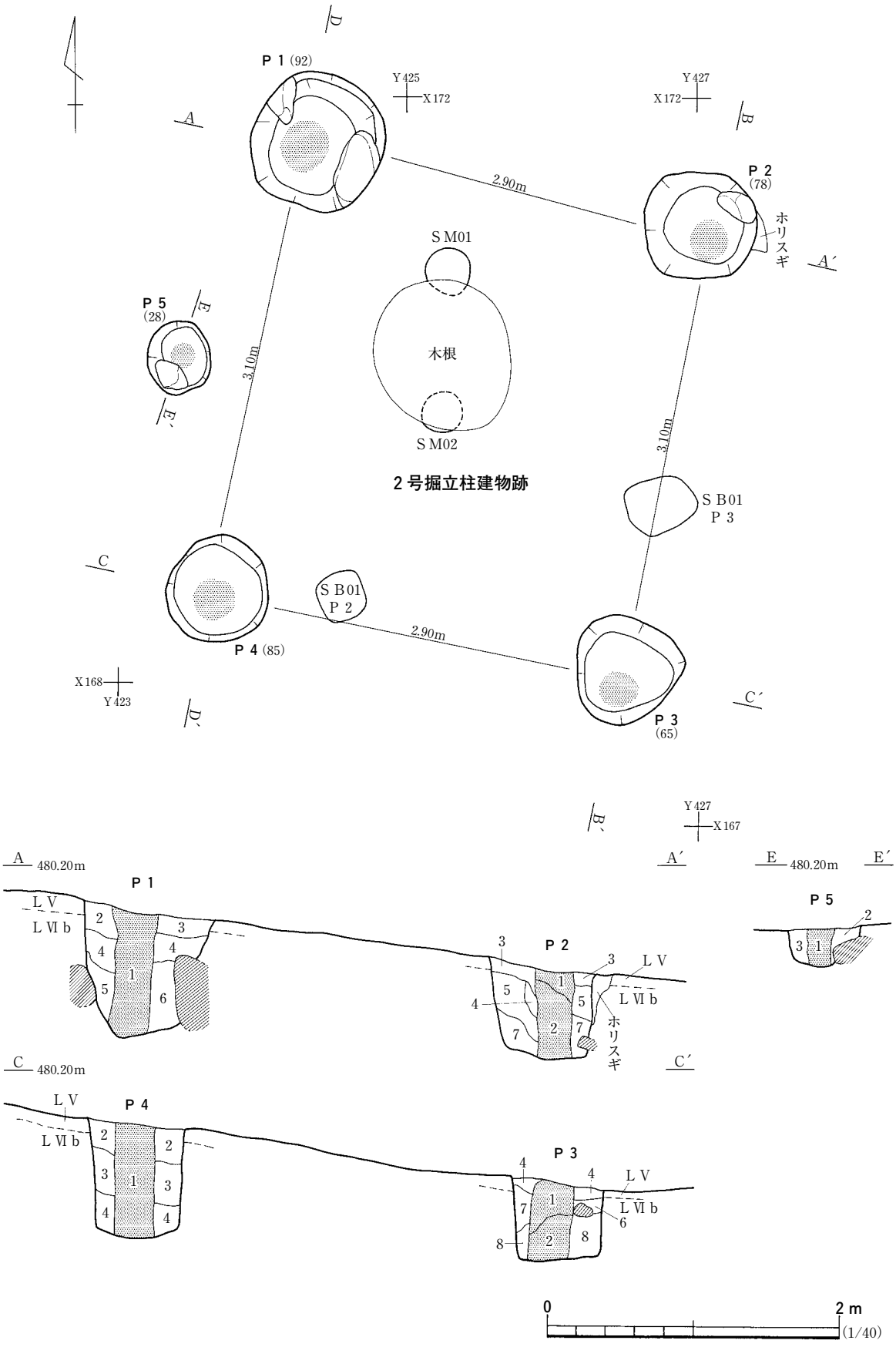
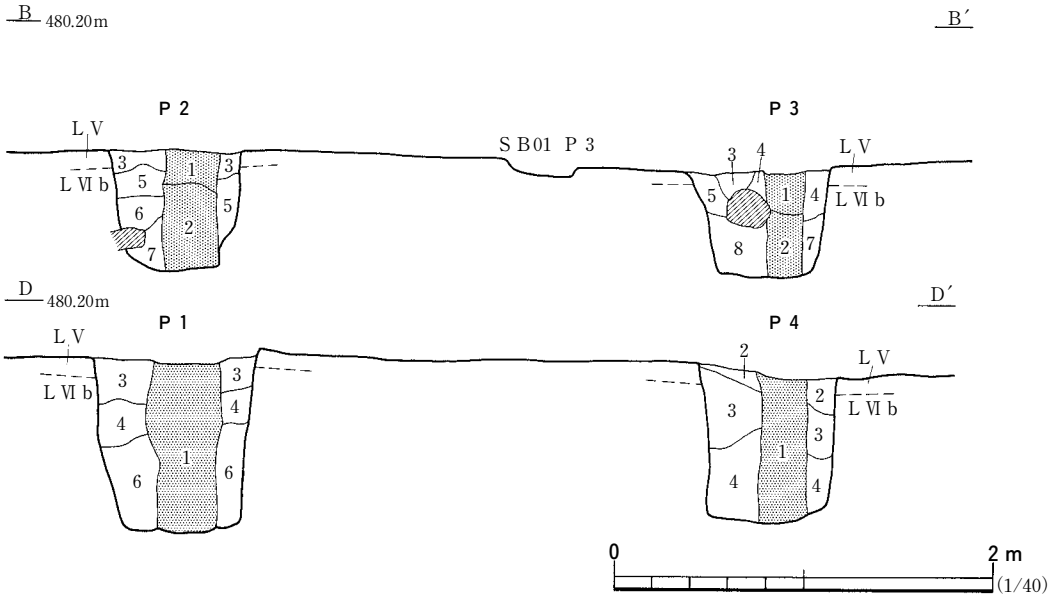


図93　２号掘立柱建物跡（１）



２号掘立柱建物跡

Ｐ１　1　黒褐色土 10ＹＲ2/2（炭化物含む，しまり弱）
2　黒褐色土 10ＹＲ2/3（炭化物少量含む混土）
3　暗褐色土 10ＹＲ3/3（炭化物極少量含む混土）
4　黒褐色土 10ＹＲ3/2（黄褐色土多量・炭化物少量との混土）
5　暗褐色土 10ＹＲ3/3（黄褐色土多量・炭化物少量との混土）
6　にぶい黄褐色土 10ＹＲ4/3（黄褐色土多量との混土）

Ｐ２　1　黒褐色土 10ＹＲ2/2（炭化物含む，しまり弱）
2　黒褐色土 10ＹＲ2/2（黄褐色土，炭化物少量含む）
3　黒褐色土 10ＹＲ2/3（炭化物少量含む混土）
4　黒褐色土 10ＹＲ2/3（黄褐色土・炭化物少量との混土）
5　暗褐色土 10ＹＲ3/3（黄褐色土多量・炭化物少量との混土）
6　暗褐色土 10ＹＲ3/4（黄褐色土・炭化物少量との混土）
7　黒褐色土 10ＹＲ2/3（黄褐色土・炭化物少量との混土）

Ｐ３　1　黒褐色土 10ＹＲ2/2（炭化物少量含む，しまり弱）
2　黒褐色土 10ＹＲ2/3（炭化物少量含む，しまり弱）
3　黒褐色土 10ＹＲ2/3（炭化物極少量含む混土）
4　暗褐色土 10ＹＲ3/3（黒褐色土・炭化物少量との混土）
5　暗褐色土 10ＹＲ3/4（黒褐色土多量との混土）
6　黒褐色土 10ＹＲ3/2（黄褐色土との混土）
7　黒褐色土 10ＹＲ3/2（黄褐色土少量との混土）
8　暗褐色土 10ＹＲ2/3（黄褐色土少量との混土）

Ｐ４　1　黒褐色土 10ＹＲ2/2（炭化物極少量含む，しまり弱）
2　黒褐色土 10ＹＲ2/3（炭化物少量含む）
3　黄褐色砂質土 2.5Ｙ5/4（黒褐色土・花崗岩粒との混土）
4　暗褐色土 10ＹＲ3/3（黄褐色土・花崗岩粒との混土）

Ｐ５　1　黒褐色土 10ＹＲ2/2（しまり弱）
2　黒褐色土 10ＹＲ3/2（黄褐色土少量との混土）
3　黄褐色砂質土 10ＹＲ2/3（黄褐色土多量との混土）

図94　２号掘立柱建物跡（２）

３号掘立柱建物跡　ＳＢ03（図95・96，図版91～94）

遺　　構　Ｚ28グリッド，ＬＶ面で確認した。丘陵の東裾，南東方向に非常に緩やかに下る斜面上に位置する。本建物跡は当初Ｐ１と試掘時のトレンチにかかるＰ２を検出し，遺構の性格を捉えきれないまま柱列として精査した。その後，古代に属する６号住居跡を完掘した際にＰ３・Ｐ４を検出し，建物跡として認識したものである。従って６号住居跡とは重複関係にあり，住居跡が本建物跡の柱穴の上端部を壊している。また１号建物跡とも位置的に重複関係にあり，３号建物跡→６号住居跡→１号建物跡と変遷する。時期的に併行する建物跡との位置関係は北に２号建物跡，南東に６号建物跡，南西に７号建物跡となる。

本遺構は大型の柱穴４個で構成される１間×１間の建物跡である。西側柱列（Ｐ３－Ｐ４）を基準とした建物の主軸方向はＮ22°Ｗを指す。柱間寸法は南北長（Ｐ１－Ｐ２，Ｐ３－Ｐ４）がそれぞれ3.00ｍ・3.15ｍ，東西長（Ｐ１－Ｐ４，Ｐ２－Ｐ３）が2.50ｍを測り，建物の平面プランは南北にやや長い長方形を呈する。建物跡の平面積は7.69㎡である。また，遺構の東西柱筋の中心からやや外側に，

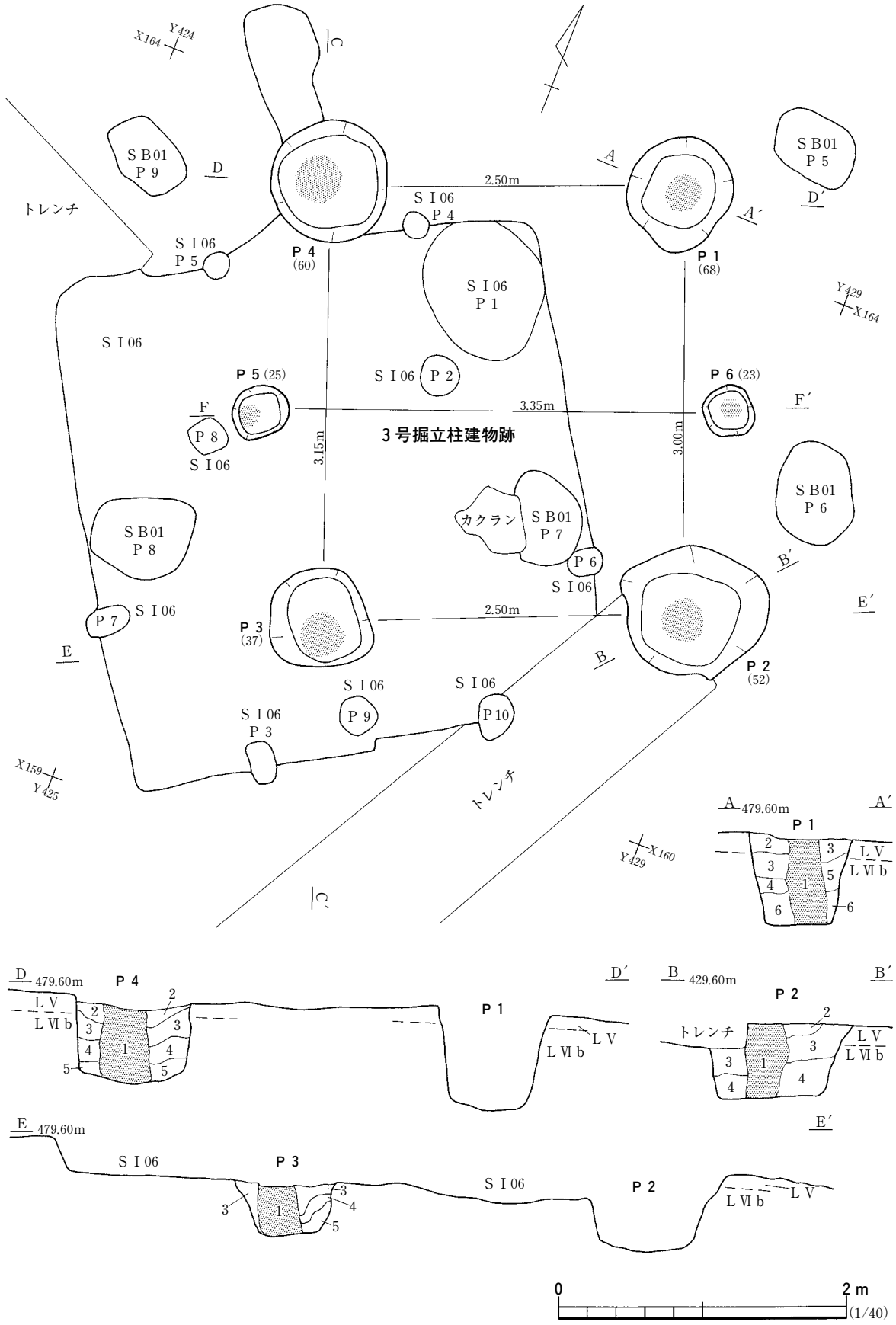


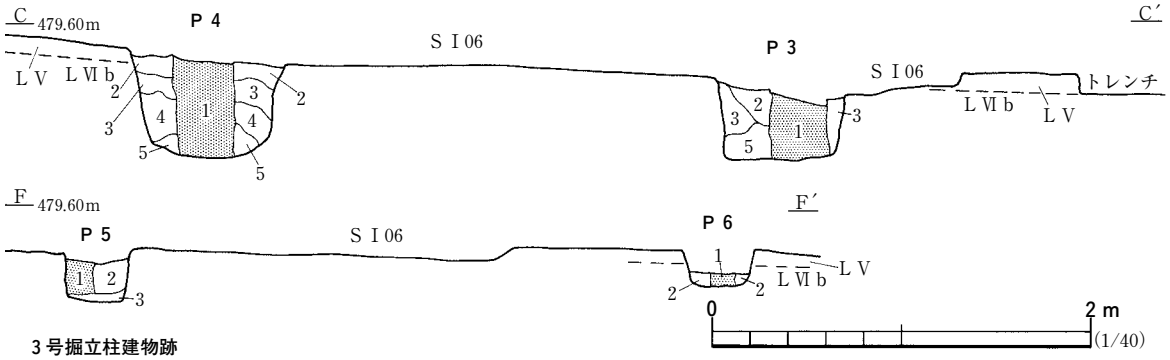
図95　３号掘立柱建物跡（１）

小型の柱穴であるＰ５・Ｐ６が存在する。Ｐ５－Ｐ６間の柱間寸法は3.35ｍを測る。

柱穴はすべて円形～隅丸方形を基調とする。Ｐ１～Ｐ４は大型の柱穴である。南東隅のＰ２が最も規模が大きく最大径95cm，他のＰ１・Ｐ３・Ｐ４は最大径70～85cmを測る。小型のＰ５・Ｐ６は最大径35cm前後である。検出面からの深さはＰ１・Ｐ３・Ｐ４が50～60cm，６号住居跡床面で確認したＰ２は40cmとなるが，底面の標高は478.80～478.90ｍの幅に収まりほぼ一定となる。Ｐ５・Ｐ６は検出面から20～26cmの深さであり，底面標高は479.10～479.20ｍである。柱痕はすべての柱穴から検出され，Ｐ１～Ｐ４は径25～34cm，Ｐ５・Ｐ６ではそれぞれ14・16cmを測る。

遺　　物　３点のみ出土し，いずれも柱痕から出土したものである。１は器厚が４㎜に達しない非常に薄手の土器片である。内面には炭化物が厚く付着する。３本の平行沈線とそれ以下には羽状縄文が施文されている。２は径3.3cmを測る土器片製円盤である。土器の底部付近を再加工したとみられ，一方が厚く，湾曲が大きい。３は縄文施文の繊維土器である。

ま　と　め　本遺構は大型の柱穴４個で構成される１間×１間の建物跡であり，小型の柱穴２個が伴う。柱穴規模が１ｍ近く，柱痕が34cmに達するものもあり，上屋構造は不明であるが大型の建物であったことが推測される。建物跡には東西に２個の小型柱穴が伴い，これらは当初棟持ち柱的な役割を担っていたものと想定した。しかし２号建物跡には１個，４号建物には４個の小型柱穴が付属しており，小型柱穴の機能を限定するには検討を深める必要があろう。



３号掘立柱建物跡

Ｐ１　1　黒褐色土 10ＹＲ2/2（炭化物少量含む，しまり弱）
2　黒褐色土 10ＹＲ3/2（黄褐色土少量との混土）
3　暗褐色土 10ＹＲ3/3（黄褐色土との混土）
4　黒褐色土 10ＹＲ2/3（黄褐色土との混土）
5　暗褐色土 10ＹＲ4/4（黄褐色土多量との混土）
6　にぶい黄褐色土 10ＹＲ4/3（黄褐色土多量との混土）

Ｐ２　1　黒褐色土 10ＹＲ2/3（炭化物少量含む，しまり弱）
2　暗褐色土 10ＹＲ3/4（黄褐色土含む混土）
3　オリーブ褐色土 2.5Ｙ4/3（黄褐色土多量との混土）
4　暗褐色土 10ＹＲ3/3（黄褐色土多量との混土，しまり強）

Ｐ３　1　黒褐色土 10ＹＲ2/3（炭化物含む，しまり弱）
2　黒褐色土 10ＹＲ2/3（黄褐色土との混土，しまり強）
3　暗オリーブ褐色土 2.5Ｙ3/3（黄褐色土との混土，しまり強）
4　黒褐色土 10ＹＲ2/3（黄褐色土との混土，しまり強）
5　オリーブ褐色土 2.5Ｙ4/4（黄褐色土との混土，しまり強）

Ｐ４　1　黒褐色土 10ＹＲ2/2（炭化物含む，しまり弱）
2　黒褐色土 10ＹＲ3/2（黄褐色土との混土）
3　暗褐色土 10ＹＲ3/3（黄褐色土との混土，しまり強）
4　暗オリーブ褐色土 2.5Ｒ3/3（黄褐色土との混土，しまり強）
5　黒褐色土 10ＹＲ2/3（黄褐色土との混土，しまり強）

Ｐ５　1　黒褐色土 10ＹＲ2/2（しまり弱）
2　黒褐色土 10ＹＲ2/3（黄褐色土との混土）
3　黒色土 10ＹＲ3/1（黄褐色土との混土，しまり強）

Ｐ６　1　黒褐色土 10ＹＲ2/2（炭化物含む，しまり弱）
2　黒褐色土 10ＹＲ3/2（黄褐色土との混土）

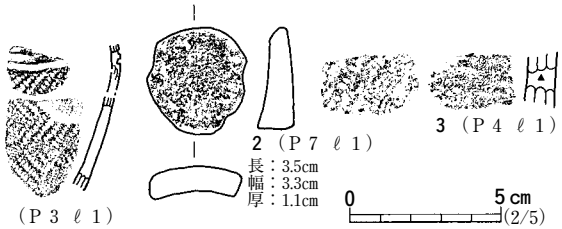


図96　３号掘立柱建物跡（２）・出土遺物

本建物跡はその内容や出土遺物，周囲の遺構群との関係から縄文時代晩期中葉に属するものと判断される。２号建物跡の中心部では土器埋設遺構を検出しえたが，本建物跡の範囲は古代の６号住居跡や１号建物跡が存在し，柱穴以外の施設や付随する遺構などについては失われてしまった可能性が考えられる。現状では直接に建物の性格を明らかにする材料は持ちえない。　　（横須賀）

４号掘立柱建物跡　ＳＢ04（図97～99，図版95～98・142）

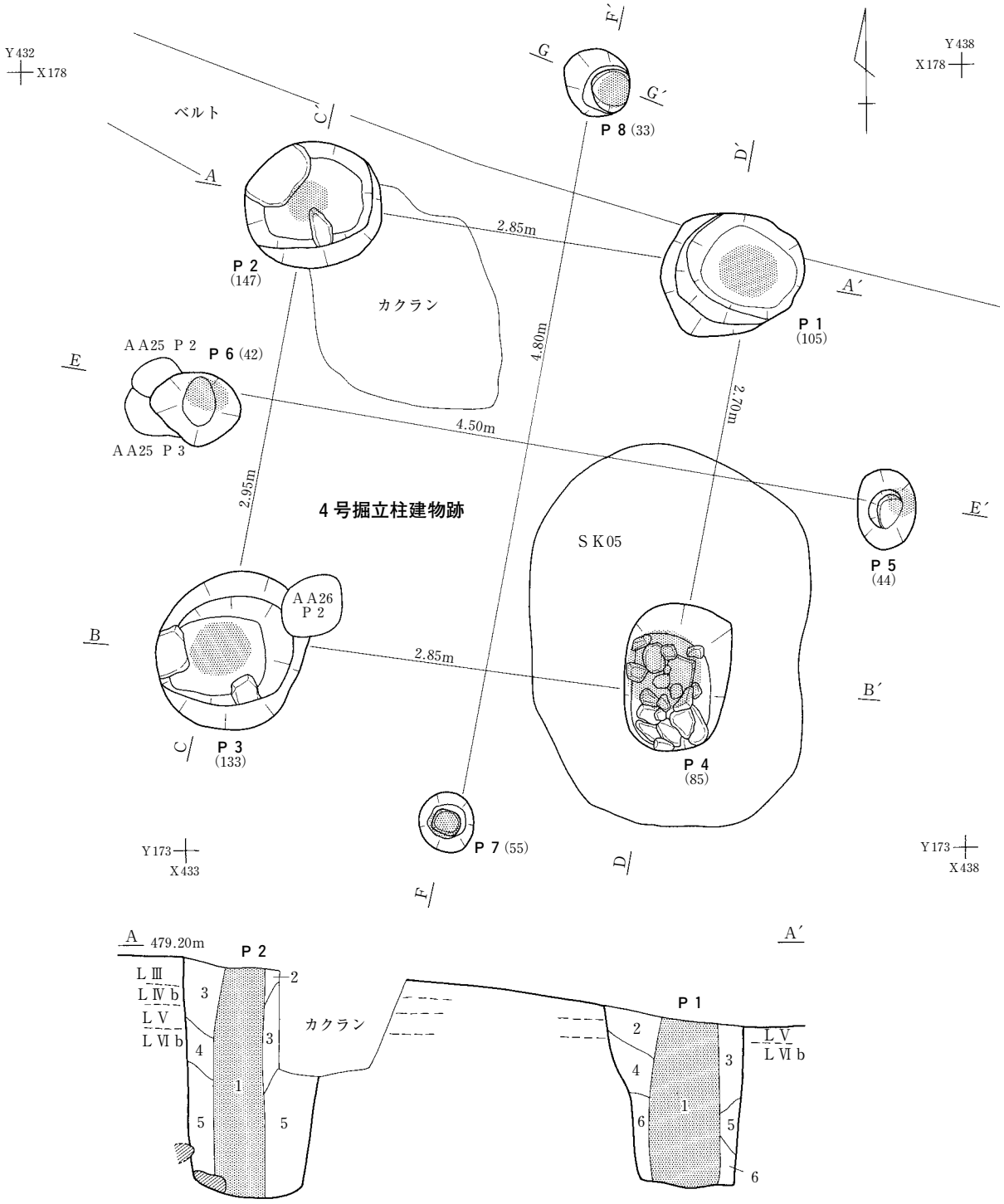
遺　　構　本遺構は１次調査区東部のＡＡ25・26，ＡＢ25・26グリッドに位置する。周囲の地形は，緩やかに黒森川のある北東方向へ下る地形である。本遺構の検出面はＰ２がＬⅢ面，Ｐ１・３・４～７がＬⅣ面，Ｐ８がＬⅥ面である。本遺構は５号土坑，グリッドピット，風倒木痕と重複している。本遺構のＰ２は撹乱により東側の一部を破壊されている。Ｐ３はＡＡ26Ｐ２に一部破壊されている。Ｐ４は５号土坑に大きく破壊され，土坑の底面より検出した。Ｐ６はＡＡ25Ｐ２・３と重複し，いずれも新しい。本遺構の主軸方向はＮ10°Ｅである。

本遺構は，４個の直径80㎝を超える大型ピットと４個の直径30～50㎝の小型ピットで構成されている。北東隅の大型の柱穴をＰ１と呼称し，反時計回りにＰ２・Ｐ３・Ｐ４とした。小型のピットについては検出した順にＰ１とＰ４間に位置するものをＰ５，Ｐ２とＰ３間に位置するものをＰ６，Ｐ３とＰ４間に位置するものをＰ７，Ｐ１とＰ２間に位置するものをＰ８と呼称した。Ｐ１～４の各柱穴間の芯々間距離は2.70～2.90ｍの範囲にある（Ｐ１－Ｐ２間2.85m，Ｐ２－Ｐ３間2.95m，Ｐ３－Ｐ４間2.85m，Ｐ４－Ｐ１間2.70m）。平均2.80ｍを測る。Ｐ１～４で囲まれた面積は7.80㎡である。

小型の柱穴は，大型柱穴の柱筋よりも外側に位置している。Ｐ５はＰ１とＰ４の芯々を結ぶ直線上から約１ｍ外側である東に位置する。同様にＰ６は50cm西へ，Ｐ７は１ｍ，Ｐ８は１ｍを測る。Ｐ６の位置以外ほぼ同距離である。Ｐ５－Ｐ６の芯々間の距離は4.5m，Ｐ７－Ｐ８の芯々間の距離は4.80ｍである。

大型の柱穴であるＰ１～４の平面形は円形または楕円形である。規模は径80～100㎝である。Ｐ４のみは遺存状態が良くないため，径95×65㎝を測る。検出面から底面までの深さは，ＬⅢ面で検出できたＰ２で150㎝を測る。底面標高は477.50～477.65ｍでややばらつきが見られる。４個の柱穴いずれからも柱痕は認められた。柱痕は柱穴のほぼ中央から検出でき，直径は30～40㎝である。Ｐ３掘形堆積土には10～20㎝大の礫を柱痕を囲む枠組のように積んでいる状況が確認できた。Ｐ４底面には10～20㎝大の礫を敷きつめている状況が確認できた。その礫を根固め石のようにして使用していた状況が看取できる。

小型の柱穴であるＰ５～８も，Ｐ１～４と同様に掘形をもち柱痕も確認できた。平面形は円形または楕円形である。検出面から底面までの深さは40～55㎝である。底面標高はＰ５・８が478.15m前後，Ｐ６・７が478.45m前後で南・西が浅い。Ｐ６には同規模のグリッドピットが重複しており，位置関係から見て柱の立て替えの可能性が高い。

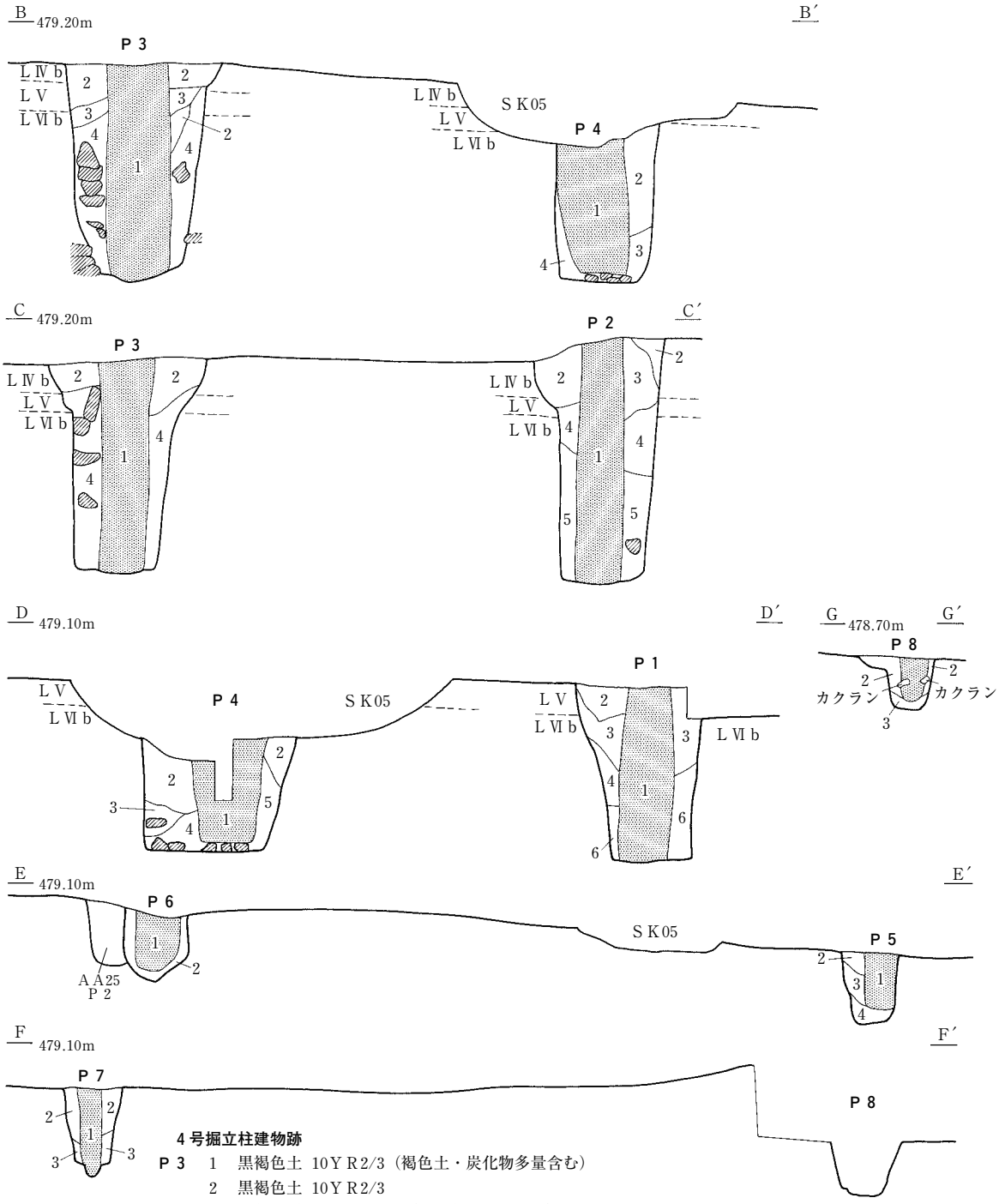


４号掘立柱建物跡

Ｐ１
1　黒褐色土　10ＹＲ2/2（炭化粒極少量含む）
2　暗褐色土　10ＹＲ3/4（焼土粒・炭化粒極少量含む混土）
3　黒褐色土　10ＹＲ2/3（褐色土との混土）
4　暗褐色土　10ＹＲ3/4（褐色土との混土，炭化物極少量含む）
5　褐色土　10ＹＲ4/4（暗褐色土との混土）
6　褐色砂質土　10ＹＲ4/4（暗褐色土との混土）

Ｐ２
1　黒褐色土　10ＹＲ2/3（褐色土・炭化物少量含む）
2　黒褐色土　10ＹＲ2/3（褐色土との混土）
3　黒褐色土　10ＹＲ2/3（褐色土との混土）
4　暗褐色土　10ＹＲ3/4（褐色土との混土）
5　褐色砂質土　10ＹＲ4/4（暗褐色土との混土）

図97　４号掘立柱建物跡（１）



４号掘立柱建物跡

Ｐ３
1　黒褐色土　10ＹＲ2/3（褐色土・炭化物多量含む）
2　黒褐色土　10ＹＲ2/3
3　褐色砂質土　10ＹＲ4/6（暗褐色土との混土）
4　暗褐色砂質土　10ＹＲ3/4（褐色土塊との混土）

Ｐ４
1　黒褐色土　10ＹＲ3/4（褐色土・炭化物少含む）
2　褐色砂質土　10ＹＲ4/4（黒褐色土塊との混土）
3　褐色砂質土　10ＹＲ4/4
4　褐色砂質土　10ＹＲ4/4（黒褐色土塊との混土）
5　褐色砂質土　10ＹＲ4/4（暗褐色土との混土）

Ｐ５
1　黒褐色土　10ＹＲ2/2
2　暗褐色土　10ＹＲ3/3（褐色土塊との混土）
3　黒褐色土　10ＹＲ2/2
4　黒褐色土　10ＹＲ2/3（褐色土塊との混土）

Ｐ６
1　黒褐色土　10ＹＲ2/2
2　黒褐色土　10ＹＲ2/3（褐色土との混土）

Ｐ７
1　黒褐色土　10ＹＲ2/2（暗褐色土との混土）
2　黒褐色土　10ＹＲ2/3（褐色土塊との混土）
3　褐色土　10ＹＲ4/6（黒褐色土塊との混土）

Ｐ８
1　黒褐色土　10ＹＲ2/3
2　黒褐色土　10ＹＲ2/3（暗褐色土との混土）
3　暗褐色土　10ＹＲ3/4（黒褐色土塊との混土）

図98　４号掘立柱建物跡（２）

遺　　物　本遺構の出土遺物は縄文土器片32点，石器７点である。内訳はＰ１ℓ２から縄文土器片11点石器２点。Ｐ３ℓ２から縄文土器片４点，石器２点。Ｐ４ℓ２からは縄文土器片12点，石器２点。Ｐ５ℓ３からは縄文土器片４点，石器２点である。いずれの遺物も各柱穴内の掘形内堆積土からの出土である。出土した土器は故意に埋納した物ではなく，本遺構を建て上げる際に紛れ込んだ物と判断した。石器の出土は剥片石器のみであるが，出土遺物の中で石錐が２点出土しているのが留意される。この２点の石錐は想像を逞しくすれば，本遺構構築時に使用していた石錐で作業中に紛れてしまったものとも考えることができる。

図59－１～６は縄文時代晩期中葉の土器である。これらの遺物は本遺構に直接伴う遺物である。１・２は精製土器の口縁部資料である。浅鉢形の土器になるのであろうか。器壁は薄く胎土は密である。内外面とも良く磨かれている。２は棒状工具及び指頭での圧痕が確認できる。３～６は網目状撚糸文が施文された粗製深鉢の胴部破片である。編み目が粗いものと細かいものがある。

同図７～10は本遺構に直接伴わない土器である。いずれの土器も本遺構よりも古い。７は無文土器である。口端部は角頭状である。端部上面は平坦でやや外剥ぎ気味である。外面は横方向へのケズリが行われていて，ケズリ痕である擦痕が確認できる。８は微細な土器片であり，形態や大きさなどは不明である。貝殻腹縁による刺突が確認できる。９は縄文条痕文土器である。深鉢土器の胴部下半の資料である。10は深鉢胴部破片である。外面に斜縄文が施文される。

同図11・12は石錐である。11は二等辺三角形状である。両側縁から押圧剥離により調整されている。明確なツマミ部は作出されていない。石質は赤色の流紋岩である。12はツマミ部を残す形態である。錐部は細かな剥離によって作出されている。石質は珪質頁岩である。

ま　と　め　本遺構は４個の大型柱穴と４個の小型柱穴で構成される８本柱の掘立柱建物跡である。大型の柱穴は直径80cmを超え，遺存が良い柱穴では検出面からの深さは150cmにも及ぶ。この大

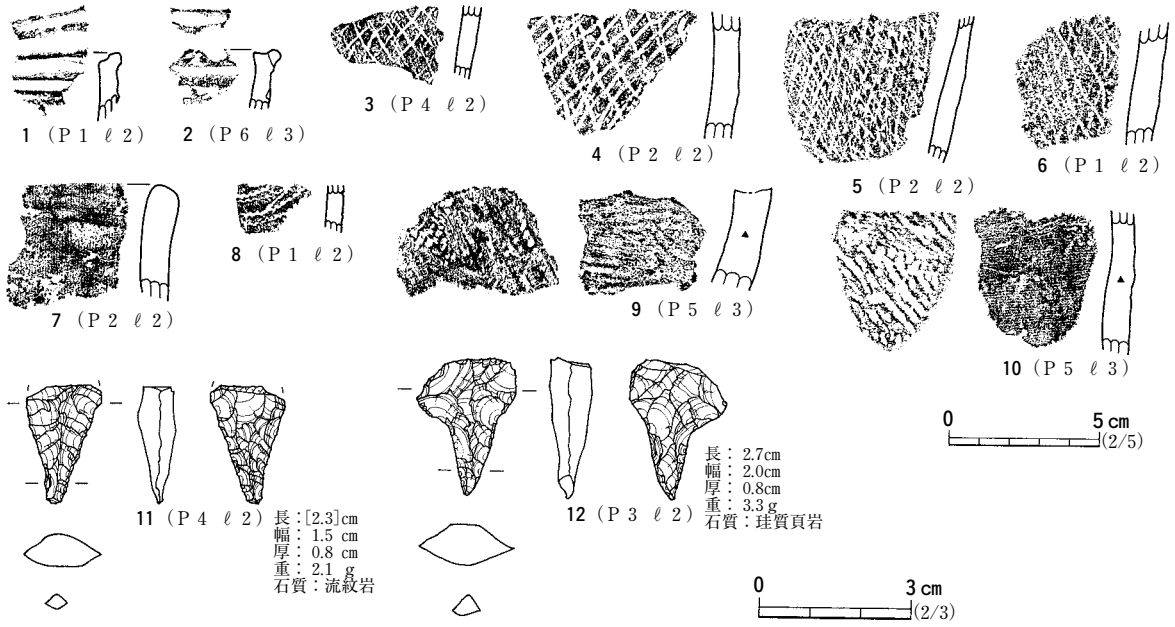


図99　４号掘立柱建物跡出土遺物

型柱穴の柱筋から約１ｍ外側に４個の小型柱穴が位置する。それぞれ対向する柱穴と１組で，大型柱穴で構成される建物の棟持ち柱であった可能性もあるが，まだ検討を要する。本遺構と同規模の大型の柱穴をもつ掘立柱建物跡は２・３号建物跡がある。

建物の機能時期については，縄文時代晩期中葉に属する５号土坑に破壊されているために，縄文晩期中葉以前に構築されている。本遺構内からは縄文時代早期・前期・晩期の土器片が出土しているが，同時期の遺構と思われる２・３号建物跡出土遺物や検出層位や堆積土から判断すると本遺構の時期は縄文時代晩期中葉頃と推定できる。本遺構は掘形や柱痕など規模が大きいのが注視される。これらの特徴から巨大な構造物が立っていたことは容易に想像できるが，使用法や構造物の形については言及できる資料を持ち合わせてはいない。（三浦）

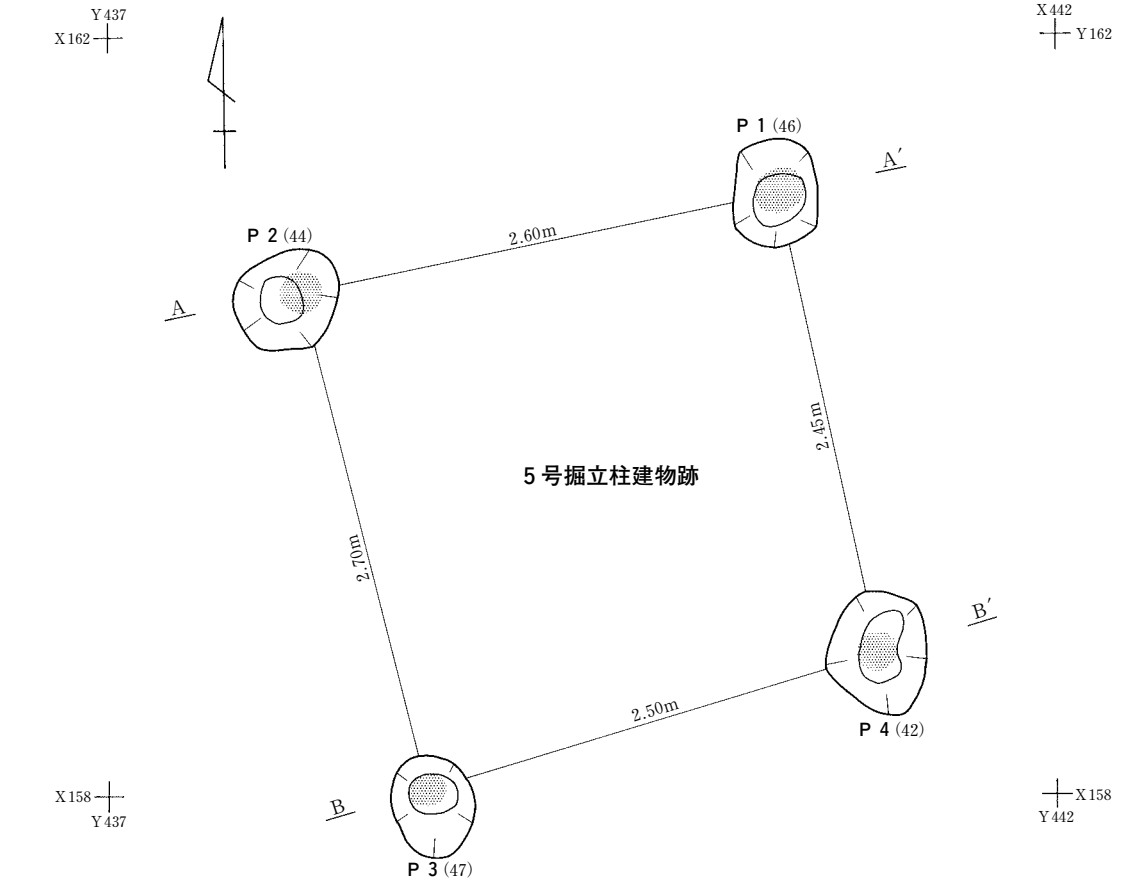
５号掘立柱建物跡　ＳＢ05（図100,図版99・100）

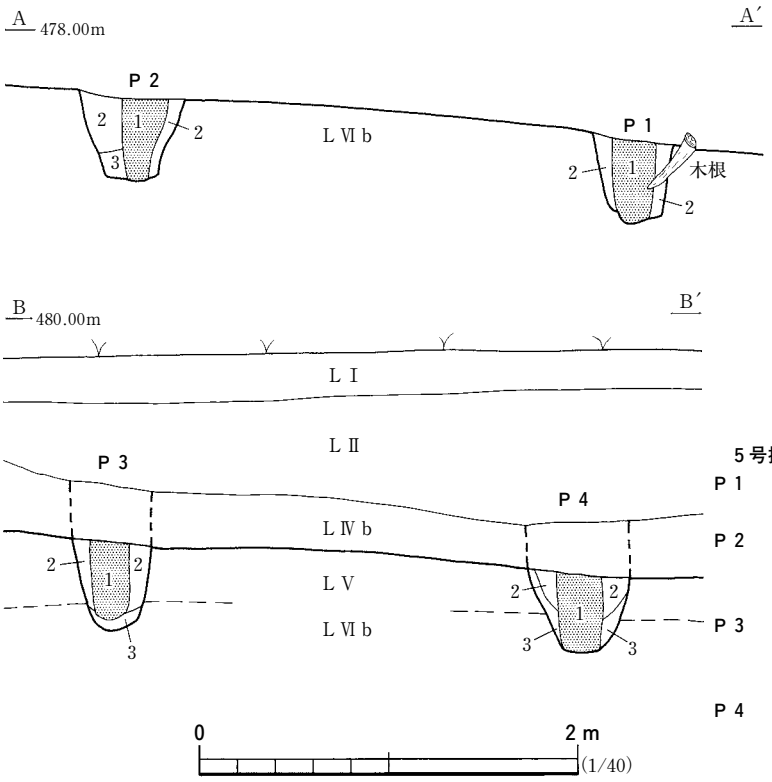
遺　　構　本遺構は１次調査区東端ＡＢ27・28，ＡＣ27・28グリッドに位置する。黒森川へ緩やかに下る概ね平坦な地形に位置する。本遺構の検出面はＬⅥ面である。当初，１次調査区東端の検出作業時に本遺構のＰ１・２である２個のピットを検出し，同様の柱穴は東西北側には認められないことから，南側に延びると予測した。そのため調査範囲を南側に広げて建物跡の検出に努めた。調査区を拡張する際に層序の上層から掘り下げたが，対応する２個のピットが明確に検出されたのはＬⅤ面であった。しかし，検出時の土層断面よりＬⅣｂ上部からの掘り込みが認められたことから，本遺構の本来の掘込面はＬⅣｂ上面である。本遺構には重複関係は見られない。

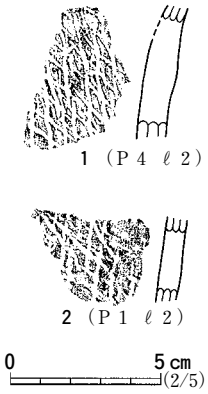
本遺構の主軸方位はＮ14°Ｗである。本遺構は４個の直径50cmを超える柱穴で構成されている。北東の柱穴をＰ１と呼称する。Ｐ１から左回りにＰ２，Ｐ３，Ｐ４とする。柱穴間で構成された平面形は正方形である。各柱穴の平面形は楕円形である。規模は長軸方向で56～68cm，短軸方向で42～50cmである。Ｐ１・２の検出面ＬⅥ面からの深さはＰ１が44cm，Ｐ２が42cmである。Ｐ３・４の検出面ＬⅤ面からの深さはＰ３が48cm，Ｐ４が42cmである。断面で確認できる掘込面からの深さはＰ３が76cm，Ｐ４が72cmである。底面標高は，477.20～478.00ｍの範囲に収まる。西から東に向かって低くなる傾向にあり，斜面なりに大体同じ深さまで掘り込んだものと分かる。すべての柱穴より柱痕が確認されている。柱痕の規模は直径20～27cmである。各柱痕の芯々間の距離はＰ１－Ｐ２が2.60ｍ，Ｐ２－Ｐ３が2.70m，Ｐ３－Ｐ４が2.50m，Ｐ４－Ｐ１が2.45mであり，概ねバランスがとれている。

遺　　物　本遺構からの出土遺物は縄文土器片８点，石器２点である。すべて柱穴内の掘形埋土からの出土である。内訳はＰ３ℓ２から石器剥片１点，Ｐ４ℓ２から縄文土器片８点，石器剥片１点の出土である。出土した土器片はすべて縄文時代晩期の土器片であった。出土した土器片が微細なため，図示が可能であった２点を図60に掲載した。図60－１・２は縄文時代晩期の粗製深鉢の胴部資料である。胴部文様は網目状撚糸文が施文されている。

ま　と　め　本遺構は４個の柱穴で構成された掘立柱建物跡である。調査区の拡張後に検出した







５号掘立柱建物跡

Ｐ１	1	黒褐色土 10ＹＲ2/3
	2	暗褐色砂質土 10ＹＲ3/4（褐色砂質土との混土）
Ｐ２	1	黒褐色土 10ＹＲ2/2
	2	暗褐色砂質土 10ＹＲ3/4（黒褐色土塊との混土）
	3	暗褐色土 10ＹＲ3/4（褐色砂質土との混土）
Ｐ３	1	黒褐色土 10ＹＲ2/2
	2	暗褐色土 10ＹＲ3/4（褐色砂質土との混土）
	3	黒褐色土 10ＹＲ2/3（褐色土塊との混土）
Ｐ４	1	黒褐色土 10ＹＲ2/2
	2	黒褐色土 10ＹＲ2/3（暗褐色土塊との混土）
	3	暗褐色砂質土 10ＹＲ3/3（黒褐色土塊との混土）

図100　５号掘立柱建物跡・出土遺物

Ｐ３・４の断面から本遺構の本来の掘り込み面はＬⅣ面であることが認められた。本遺構に類似する遺構は８号掘立柱建物跡である。柱穴間の距離が約2.8mとほぼ等しい距離である。また，同時期の建物跡として６・７号建物跡が本遺構よりも南西に見られるが，各柱穴間の距離が２ｍと本遺構よりも１ｍ程度小型である。

ＬⅣは縄文時代早期末葉～前期の遺物包含層であり，その面を掘込面としていることから本遺構は縄文時代早期末葉以降の遺構であることがわかる。さらに柱穴内堆積土から縄文時代晩期中葉の土器片が出土することから，本遺構の所属時期は縄文時代晩期中葉大洞Ｃ２式期であると判断することができる。（三浦）

６号掘立柱建物跡　ＳＢ06（図101，図版101・102）

遺　　構　Ｚ・ＡＡ29・30グリッドに位置する。検出面はＬⅥ面であるが，調査区壁面にかかるＰ３・Ｐ４の土層断面からＬⅡ下位，ＬⅣｂ以上より掘り込まれていることが確認できる。調査区の南東端，丘陵の裾部に存在し，他の遺構との重複関係はない。北・東・西方向に年代的に併行する３・５・７号建物跡が位置し，地形的な観点から同時期の遺構群はこれ以上に南に展開しない可能性が高い。

本遺構は小型の柱穴４個で構成される１間×１間の建物跡である。南側柱列（Ｐ３－Ｐ４）を基準とした建物の主軸方向はＮ21°Ｗを指し，北に隣接する３号建物跡とほぼ等しい。柱間寸法は柱痕が

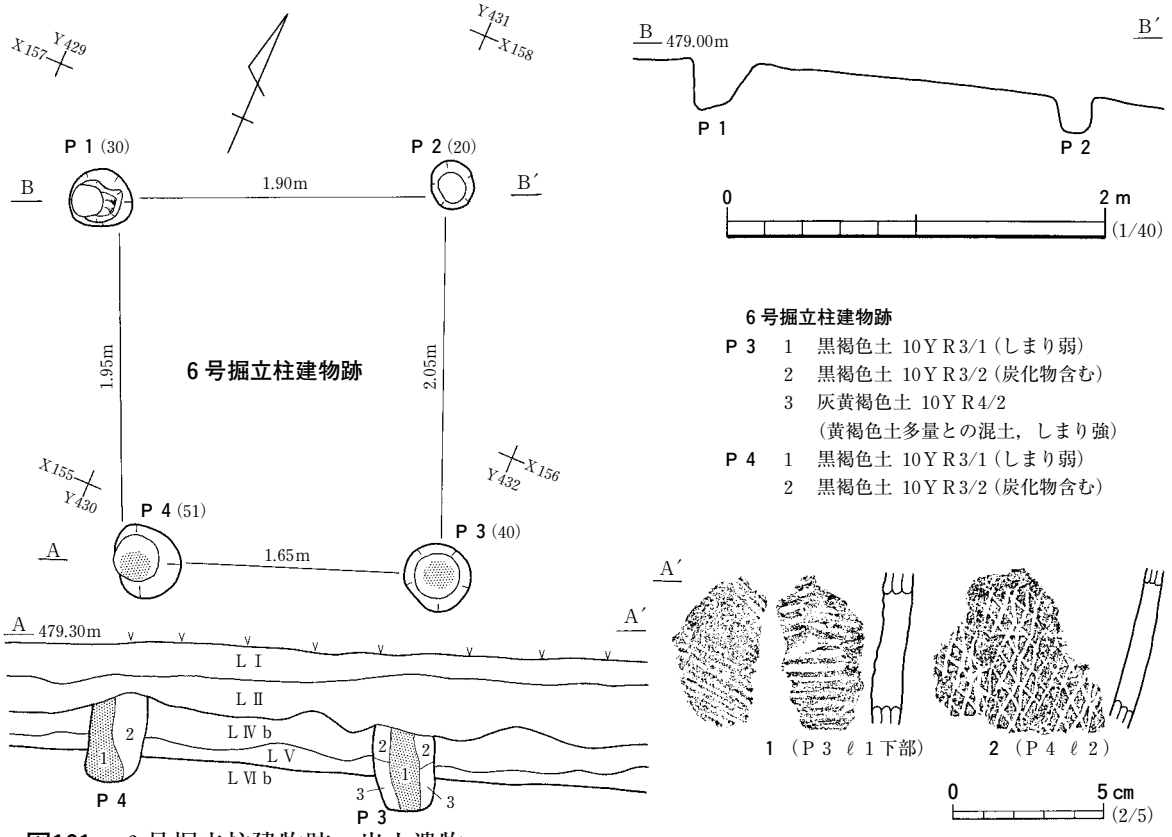


図101　６号掘立柱建物跡・出土遺物

確認された南側列（Ｐ３－Ｐ４）は1.65m，他の３列はＰ１・Ｐ２の底面中央から計測して1.95～2.05mを測る。この計測値から建物跡は南北に若干長い長方形プランに復元される。建物の平面積は3.55㎡である。

柱穴はすべて円形～楕円形を基調とする。柱穴の規模は長径で35cm前後である。検出面からの深さはＰ１・Ｐ２が約25cm，調査区壁面で検出したＰ３・Ｐ４はＬⅡ下から約50cmである。柱穴底面の標高は478.40～478.50mと大きな差は認められない。柱痕はＰ３・Ｐ４において確認され，径は15cm前後に復元される。

遺　　物　２点のみ出土し，１はＰ３柱痕から，２はＰ４掘形埋土から出土している。１は縄文時代早期後葉の条痕文系の土器，２は縄文時代晩期中葉の粗製深鉢片である。

ま と め　本遺構は小型の柱穴４個で構成される１間×１間の建物跡であり，平面形はわずかに長方形となる。本遺構の範囲内及び周囲に柱穴の施設は認められず，遺構の性格を判断する材料は持ち得ない。本建物跡の機能年代については，Ｐ３・Ｐ４が縄文時代晩期の包含層であるＬⅡ下から掘り込まれていること，重複関係から年代が推定される３・４号建物跡と有機的な関連が推測されることから，縄文時代晩期中葉と判断される。（横須賀）

７号掘立柱建物跡　ＳＢ07（図102，図版103）

遺　　構　Ｙ29グリッドに位置し，検出面はＬⅥ面である。調査区の南端，丘陵の裾部に存在し，

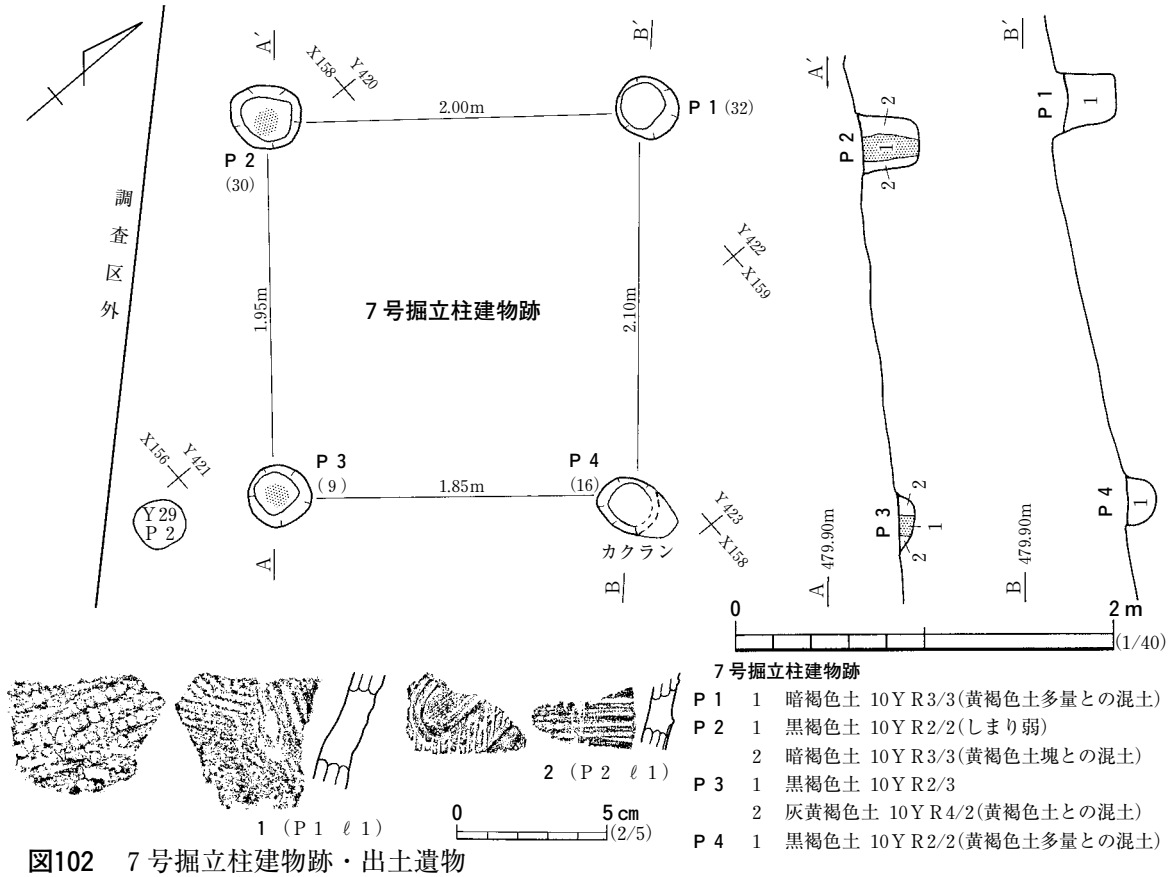


図102　７号掘立柱建物跡・出土遺物

他の遺構との重複関係はない。本遺構は縄文時代晩期に属する７棟の建物跡のうち，最も西側に位置する。

本遺構は小型の柱穴４個で構成される１間×１間の建物跡である。西側柱列（Ｐ２－Ｐ３）を基準とした建物の主軸方向はＮ52°Ｗを指す。柱間寸法は柱痕が確認された西側柱列（Ｐ２－Ｐ３）は1.95ｍ，他の３列はＰ１・Ｐ２の底面中央から計測して1.85～2.10ｍを測る。この計測値から建物跡は正方形プランに復元される。建物の平面積は3.95㎡である。

柱穴はすべて円形～隅丸方形を基調とする。柱穴の規模は長径で35㎝前後である。検出面からの深さは斜面上方のＰ１・Ｐ２が約35㎝，斜面下方のＰ３・４は10～15㎝である。底面標高はＰ４のみ479.20ｍ，他の３個は479.40ｍ前後となる。柱痕はＰ３・Ｐ４において確認され，径は13㎝前後を測る。

遺　　物　２点のみ出土し，それぞれ１はＰ１の掘形埋土，２はＰ２の柱痕から出土した。１は縄文時代早期末葉頃の内外面縄文施文の土器，２は外面に細隆起線文と集合沈線文，内面に条痕文が施文された縄文時代早期後葉野島式に比定される深鉢片であり，本遺構に直接伴うものではない。

ま　と　め　本遺構は小型の柱穴４個で構成される１間×１間正方形プランの建物跡である。本遺構の範囲内及び周囲に柱穴の施設は認められず，遺構の性格を判断する材料は持ち得ない。

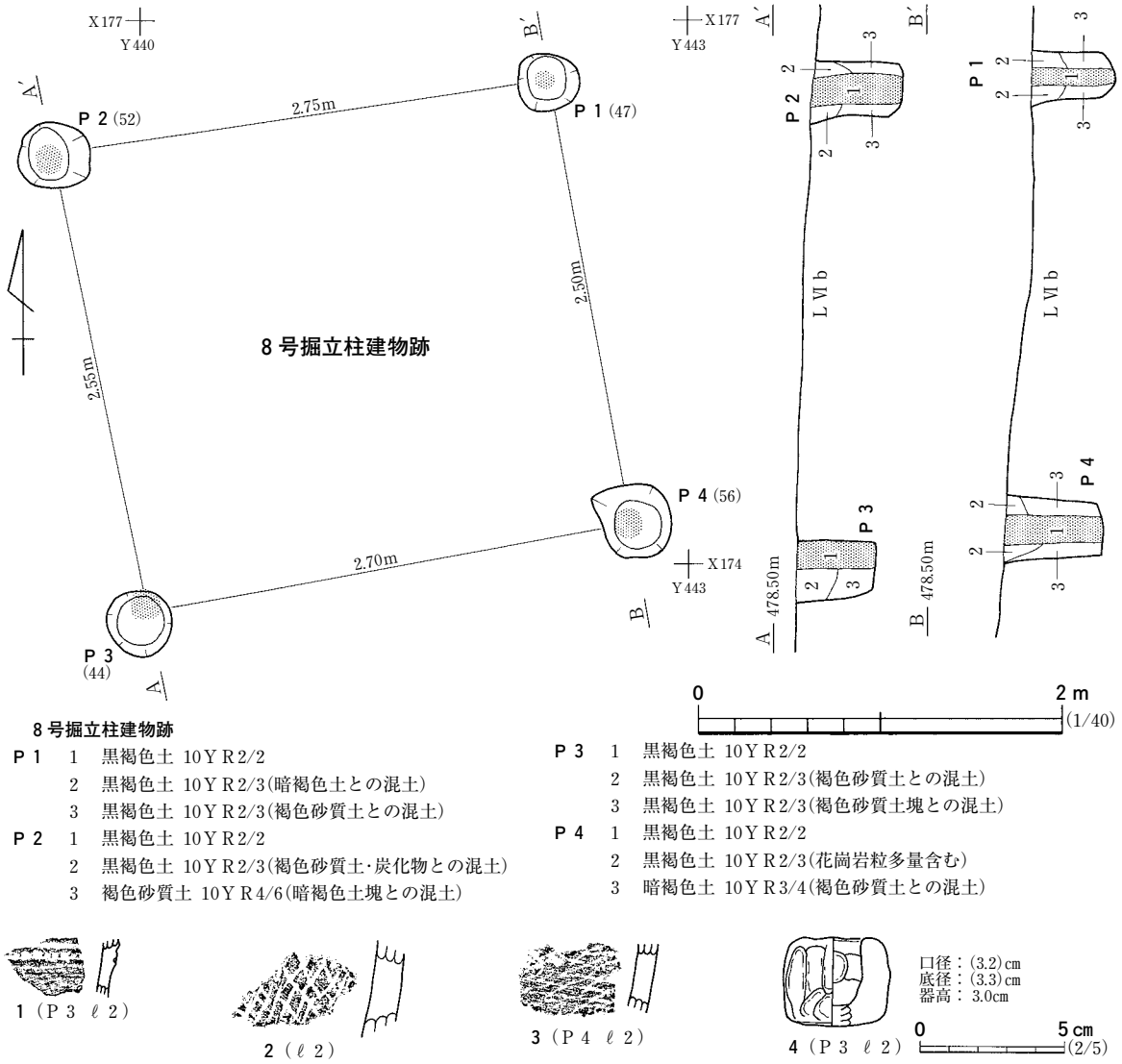
本建物跡の機能年代については，同内容となる５・６・８号建物跡などの年代観に沿い，縄文時代晩期中葉と判断される。縄文時代晩期の建物跡群では最も西側に位置するが，該期の遺構群はさらに西側調査区外へと連続する可能性が高いと考えられる。　（横須賀）

８号掘立柱建物跡　ＳＢ08（図103，図版104）

遺　　構　本遺構は１次調査区南東部ＡＢ25・26，ＡＣ25・26グリッドに位置する。緩やかに黒森川へ傾斜するが，概ね平坦な地形である。南東端から検出されたピット群の西に位置する。検出面はＬⅥ面である。本遺構に重複関係はないが，近接して４号建物跡，５・11・26号土抗が存在する。本遺構の主軸方位はＮ10°Ｗである。

本遺構は４個の直径40㎝の柱穴で構成されている。北東端の柱穴をＰ１と呼称し，以下左回りにＰ２・Ｐ３・Ｐ４とする。柱穴間で構成された平面形は正方形になる。各柱穴の平面形は円形を基調とし，多少不整になるものもある。各柱穴の長軸38～42㎝，短軸32～38㎝を測る。検出面からの深さは44～56㎝である。柱穴底面の標高は，東側のＰ１・４が477.50ｍ前後，西側のＰ２・３が477.85ｍ前後である。斜面上位の西側が高く，斜面なりに同じ深度で掘り込まれたものと想定される。すべての柱穴から柱痕が確認されている。柱痕の規模は径12～18㎝である。柱痕はほぼピットの中央に配置されているが，Ｐ３は大きく北にずれている。掘形埋土はすべて２層に分かれ，黒褐色や暗褐色の混土である。

各柱痕の芯々間の距離はＰ１－Ｐ２間が2.3ｍ，Ｐ２－Ｐ３間は2.5ｍ，Ｐ３－Ｐ４間は2.7ｍ，Ｐ４－Ｐ１間は2.5ｍを測り，概ねバランスがとれている。



8 号掘立柱建物跡

Ｐ１　1　黒褐色土 10ＹＲ2/2
　　2　黒褐色土 10ＹＲ2/3(暗褐色土との混土)
　　3　黒褐色土 10ＹＲ2/3(褐色砂質土との混土)
Ｐ２　1　黒褐色土 10ＹＲ2/2
　　2　黒褐色土 10ＹＲ2/3(褐色砂質土･炭化物との混土)
　　3　褐色砂質土 10ＹＲ4/6(暗褐色土塊との混土)
Ｐ３　1　黒褐色土 10ＹＲ2/2
　　2　黒褐色土 10ＹＲ2/3(褐色砂質土との混土)
　　3　黒褐色土 10ＹＲ2/3(褐色砂質土塊との混土)
Ｐ４　1　黒褐色土 10ＹＲ2/2
　　2　黒褐色土 10ＹＲ2/3(花崗岩粒多量含む)
　　3　暗褐色土 10ＹＲ3/4(褐色砂質土との混土)

図103　８号掘立柱建物跡・出土遺物

遺　　物　本遺構からは縄文土器４点，石器１点が出土した。すべてＰ４ℓ２からの出土である。出土した遺物はすべて縄文時代晩期に属する資料である。図103－１は精製土器の胴部上半資料である。２・３は網目状撚糸文が施文された，粗製深鉢の胴部資料である。４は手捏ねで作られた土器である。器面には指ナデ痕や指頭圧痕が明瞭に残る。胎土は赤褐色で他の土器の胎土と比べて異質である。

ま　と　め　本遺構は４個の柱穴で構成された掘立柱建物跡である。ピットが多く検出された西端に位置する。４個の柱穴で構成された平面形は正方形をなす。

本遺構の南に位置する５号掘立柱建物跡と柱穴の規模や各柱穴間の距離などに共通点が認められる。これらの状況や各柱穴堆積土内からの出土遺物より本遺構の所属時期は，縄文時代晩期中葉に当てはめられよう。　（三浦）

第3節　土　　坑

土坑は1次調査27基，2次調査10基の計37基を調査した。詳細は本文中で述べるが，年代的には縄文時代早期前葉～中葉10基(15～22・25・27号土坑)，同早期後葉～末葉6基(1・3・12～14・23・24号土坑)，同前期前半7基(28・29・33～37号土坑)，同前期後半以降7基(4・6～10・26号土坑)，同晩期中葉1基(5号土坑)，不明6基(2・11・23・30～32号土坑)に分かれる。以下年代順に報告するが，図および写真図版については番号順に示している。

縄文時代早期前葉～中葉の土坑　ＳＫ15～22・25・27

計10基を調査し，すべて1次調査区中央部に存在する。本遺構群はＬⅤ・ＬⅥとなる検出面，周囲の遺構との重複関係，及び出土遺物から縄文時代早期前葉～中葉に属する可能性が高い。以下形態・規模の類似する8基(15・17～19・21・22・25・27号土坑)とこれら以外(16・20号土坑)に分けて報告する。

15・17～19・21・22・25・27号土坑（図107～110・115，図版109～112・140）

遺　　構　Ⅴ～Ⅹ24・25グリッド，1次調査区中央部に位置する土坑群である。周囲は花崗岩の露頭が一部途切れる範囲であり，この範囲を任意に選択して構築したものと考えられる。まず重複関係を整理する。縄文時代早期後葉とした9号住居跡は17・25号土坑の一部を壊し，縄文時代早期前葉とした17号住居跡は25号土坑により一部を壊される。27号土坑は縄文時代早期前葉の可能性もある14号住居跡下から検出された。15号土坑は18・19号土坑に一部を壊される。

本土坑群のプランは楕円形～隅丸方形となる。検出面からの深さは総じて浅く，10～20㎝程度である。規模は15号土坑が最大であり長径1.8×短径1.5m，他は長径1.0～1.4m×短径0.8～1.2mの範囲に収まる。底面はほぼ平坦となる。堆積土はＬⅥを起源とするものもあり，すべて自然堆積と考えられる。本土坑群には周囲や底面に施設を有するものは存在しない。

遺　　物　15・17～19・25・27号土坑から数点ずつ土器片が出土している。すべて堆積土中から出土した小破片である。15号土坑からは3点認められた(図115－9～11)。9は縄文時代早期前葉の撚糸文系土器，10・11は早期中葉の土器であり，10には格子状の細沈線が認められる。10の胎土には金雲母が多量に含まれる。

17・18号土坑からはそれぞれ2点ずつ出土し，いずれも縄文時代早期前葉の撚糸文系土器である(図115－16～19)。16は口縁部資料であり，ほぼ直線的に立ち上がる。口端部は，これを口縁に沿って調整するため僅かに平坦状を呈し，外側へ若干肥厚する。外面の撚糸文は口唇部下1.2㎝以下に施文され，この間は無文帯となる。4点とも内外面の調整は雑なナデであり，内面は胎土の砂粒が表出し，ザラザラとした触感となる。

25号土坑からは4点出土した(図115－24～27)。いずれも縄文時代早期前葉～中葉の無文土器，あ

るいは無文部の破片である。24は赤褐色に近い色調であり，内面には多量の煤が付着する。25は胎土の特徴から，縄文時代早期前葉の撚糸文系土器に併行する無文土器と判断される。26は胎土に金雲母を多量に含み，文様は認められない。27は口端部に貝殻による刺突列が付される。26・27とも縄文時代早期中葉の貝殻沈線文系土器に併行すると考えられる。

ま　と　め　いずれも楕円形に近い形態の浅い土坑であり，ほぼ立地条件も同じくする。いずれも集落に伴うものであろうが，性格については明確にする材料をもたない。

出土遺物は縄文時代早期前葉と，中葉でも後半段階の資料に２分されるようである。撚糸文系土器のみを出土する17・18号土坑は貝殻沈線文系土器を出土する15号土坑より新しい。このように本土坑群を含め周囲は遺構が密に存在し，堆積土中から出土した土器の小片から年代を推定することは難しい。竪穴住居跡も早期前葉の可能性がある13・14・17号住居跡と早期中葉と考えられる15・16号住居が近接しており，土坑群との明確な関連性は示し難い。よって本土坑群の機能年代については，縄文時代早期前葉～中葉の幅で示すに留めておきたい。　（横須賀）

16・20号土坑（図108・115，図版110・111・140）

遺　　構　両土坑ともＵ25グリッドに存在する。検出面はＬⅤ・Ⅵである。両土坑とも17号住居跡と近接するが，重複関係は認められない。16号土坑は遺構の大半が調査区外に伸び，全容は明らかとならない。20号土坑は長径50㎝×短径40㎝の楕円形を呈し，検出面からの深さは50㎝程を測る。20号土坑は当初柱穴の可能性も考慮して精査したが，柱痕が認められず，周囲に同様の遺構の存在が確認されないため，土坑として報告するものである。

遺　　物　16号土坑からは４個体分(図115－12～15)，20号土坑からは１点(図115－20)の土器片が出土している。16号土坑から出土した土器は，13・14が縄文時代早期前葉の無文土器，12が縄文時代早期中葉の土器の無文部と考えられる。15については判断がつかない。12は胎土に多量の金雲母を含む特徴があり，底部はおそらく尖底となる。15の内面には多量の煤が付着する。20号土坑出土の20は内面が剥落し，帰属年代の判断は難しい。

ま　と　め　16号土坑は遺構の大半が調査区外に位置し，全容は詳らかでない。ただし，遺構の深度は浅く，先述した８基の土坑と同様のプランとなると推測している。20号土坑は近接する17号住居跡に付随する施設の可能性もあるが，明確な判断は困難である。両土坑の帰属年代は先述の８基と同様，縄文時代早期前葉～中葉の幅で示しておきたい。　（横須賀）

縄文時代早期後葉～前期前半の土坑　ＳＫ01・03・12～14・23・24・28・29・33～37

１次調査において６基，２次調査において７基の計13基調査した。１次調査の６基については，１次調査区西端の尾根上に位置する１・３・23・24号土坑と１次調査区中央に位置する12～14号土坑に分布域が分かれる。２次調査の７基については遺構の集中する２次調査区の東半から検出されている。これらは，１次調査区のように位置的なまとまりはないものの，形態・規模から３種に分けられる。以下この分布域および分類に従って報告する。

1・3・23・24号土坑（図104・110・113・115・116，図版105・111・139・140）

遺　　構　1次調査区西端，R・S21～23グリッドに存在する。この範囲は丘陵尾根から裾へ向かう東向きの比較的急な斜面である。検出面は4基ともⅥであるが，1号土坑は土層観察から掘り込み面がⅢと確認できた。24号土坑にのみ重複関係が認められ，3号住居跡より古くなる。本土坑群の周辺には3～5号住居跡，1号屋外焼土遺構が存在する。

本土坑群のプランは楕円形～不整な隅丸方形となり，長径1.15～1.60m×短径0.95～1.15mを測る。1・3・24号土坑の底面はほぼ平坦となり，周壁はやや急激に立ち上がる。23号土坑の底面は丸みを帯びて断面はボウル状となる。検出面からの深さは20～35cm程度であるが，上端の流失を勘案すると構築時はこれより更に深いものであったと考えられる。4基とも底面や周囲からピットなどの施設は検出されていない。堆積土中には褐色土塊を含むものが多く，大半は人為堆積によるものと判断した。

遺　　物　図示しえたものは1号土坑出土の土器片3点(図113－1～3)，石器1点(図116－1)，23号土坑から出土した土器片3点(図115－21～23)である。すべて堆積土中から出土した細片であり，遺構の年代を決定する際の主材料とはならない。1号土坑出土土器のうち，1・3は撚糸文，2は条痕が外面に認められる。石器は無茎平基石鏃である。

23号土坑出土の図115－21・22は縄文時代早期中葉の資料である。21は肋脈のない貝殻により刺突を施している。22は口縁部に櫛歯状工具により連続刺突を施し，口端部には棒状工具により刻みを施文する。23は底部資料である。外面には短沈線により綾杉状の文様を施文する。底面には細い半截竹管による押引文を放射状に施す。前期前葉に比定される。

ま　と　め　4基とも不整な楕円形を基調とする小型の土坑である。周辺には3軒の早期末葉に比定した竪穴住居跡と1基の屋外焼土遺構が存在する。位置関係から，本土坑群はこれら遺構群と関連すると思われたが，1号土坑の掘り込みが前期の土器も包含するⅢ中から確認できることは，層位的に矛盾している。2次調査区ではⅢ中位から前期に比定される住居跡が確認されており，機能年代は，早期末葉～前期前葉までの幅で考えておきたい。性格についても，形態や規模から貯蔵穴とも考えられるが，判然としない。　　（三浦・横須賀・山元）

12～14号土坑（図107・115，図版108・109・140）

遺　　構　V23～25グリッド，1次調査区中央部の丘陵尾根端部に存在する。検出面はⅢ下，Ⅵ上面である。14号土坑は10号住居跡と重複し，本土坑が新しい。13号土坑の中心部は，遺物包含層の土層確認用に空けたトレンチで壊してしまっている。本土坑群の周囲には8～12号住居跡が存在する。縄文時代早期前葉～中葉とした土坑群とも近接するが，検出レベルや立地条件が異なるため，年代的に同列に扱うことはできない。堆積土は斜面上方から流れ込んだ自然堆積土である。

平面プランは12・14号土坑が円形，13号土坑は楕円形を基調とし，規模は前者が径0.85m前後，後者は長径1.3m×短径1.0mを測る。12・13号土坑は底面に花崗岩が露出し，深さを規制されている。3基とも底面や周囲に施設は認められない。

遺　　物　13号土坑から１点のみ確認している(図115－８)。８は外面に貝殻による押し引き文が施文される縄文時代早期中葉の土器片である。

ま　と　め　本土坑群は円～楕円形を基調とする小型の土坑である。周囲や重複する位置には縄文時代早期後葉の住居跡が存在し，本土坑群はこれらと関連する可能性が高い。遺構の性格については判然としない。（横須賀）

29・33・34号土坑（図111・112，図版113～115）

遺　　構　いずれも２次調査区東部の丘陵尾根上に位置し，住居跡と重複して検出されている。29号は縄文時代晩期の22号住居跡床面，33・38号はＬⅥ上面において確認されている。それぞれ22・33・38号住居跡と重複している。29・33号土坑は22・33号住居跡より古く，34号土坑は縄文時代前期と思われる38号住居跡よりも新しい。

平面形は楕円形で，規模は長軸1.2m程度，短軸0.7～0.9m程度である。底面は平らで，壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は，33・34号が褐色系の自然流入土，29号がＬⅥを多量含む暗褐色土で，人為的埋め戻し土と判断される。

遺　　物　34号土坑ℓ１から０段多条縄文の繊維土器１点が出土しているが，細片のため図示していない。

ま　と　め　これらは，楕円形の小型の土坑である。形態・規模は１次調査で検出された同時期に比定した遺構と類似している。ただ，29号土坑のみ検出状況，堆積土ともに異質で，その他と同じ意図の下に掘り込まれたかは不明である。本類土坑自体の用途も検討する材料が乏しく，不明と言わざるを得ない。時期については検出面および周囲の遺構・遺物から早期後葉～前期中葉の間と類推されるのみである。

35・36号土坑（図112・115・116，図版115・116）

遺　　構　２次調査区の中央部，丘陵尾根上に位置する。住居跡群西側の遺構のまばらな部分に存在する。そのため，いずれにも重複する遺構はない。検出面はＬⅥ上面である。

平面形は円形である。底面は丸みを帯びる。壁面は底から緩やかに立ち上がり，やがて直立する。規模は径1.5m前後で，検出面からの深さは35号土坑が最大55㎝，36号土坑が最大88㎝である。堆積土は35号が堆積状況から人為的な埋め戻し，36号が，ℓ２・３に壁の崩落土と思われる黄褐色土を多量含み，レンズ状の堆積状況を呈していることから自然流入土によって埋没したものと考える。

遺　　物　35号土坑ℓ１からは縄文土器６点，石器17点が出土している。図115－30は櫛歯状工具の刺突と波状文を施文する。同図31は隆帯上に貝殻腹縁刺突，下に半截竹管凸部による刺突を加える。早期中葉～後葉に帰属すると思われ，ここに図示していないものも，ほぼ同様の時期と思われる。

図116－14・15は石鏃である。いずれもデイサイト質凝灰岩製である。そのほかはデイサイト質凝灰岩の剥片である。

36号土坑はℓ１から縄文土器１点が出土しているが，細片のため図示していない。

ま　と　め　これらの遺構は円形で壁の直立する土坑である。検出面，周囲の遺構・遺物の時期

から縄文時代早期末葉から前期初頭のものと考えるが，詳細な時期は分からない。縄文時代早期末葉～前期前半の幅の中で考えておきたい。用途については，形態から貯蔵穴である可能性もあるが，断言するには根拠に乏しい。

28・37号土坑（図111・112・115・116，図版113・116）

遺　　構　これらは2次調査区東部の丘陵尾根上に位置している。検出面はⅬⅥで，住居跡にかかるように検出されている。28号土坑については，19・22号住居跡精査後に検出し，これらおよび32号土坑と重複する。検出時の状況から，これらのいずれよりも古いものとして認識している。37号土坑については29・40号住居跡精査中に，両者の南壁および底面ににぶい黄褐色土の堆積範囲として確認した。これらの住居跡と重複し，検出時の状況からいずれよりも古いものと考えている。

平面形は37号土坑の形態から長楕円形と思われるが，28号土坑については東西端をそれぞれ撹乱，19・22号住居跡によって破壊され，全容は不明である。いずれも底面は平らで，壁の立ち上がりは緩い。長軸方向については28号土坑が東西，37号土坑が南北を向いている。規模は，長軸2.5m，短軸1.3～1.5mで，検出面からの深さは15cmほどである。堆積土は，ⅬⅥを多量含む土の単層で，28号については硬くしまっている。土質から人為的に埋め戻されたものと考えている。

遺　　物　28号土坑は，堆積土中から縄文土器6点，石器1点が出土している。縄文土器は細片のため図示していないが，早期末葉から前期前半のものを含んでいる。図116－13はデイサイト質凝灰岩製の平基石鏃である。

37号土坑は，検出面および堆積土から縄文土器54点が出土している。図115－33～38に主なものを示した。38は平行沈線で斜格子を描くもので，早期中葉に比定される。37は，口端部に棒状工具による深い刻みを加えて小波状とした口縁を持つ。口縁部文様は集合沈線を矢羽状に配したものである。33は外面に地文撚糸文上に沈線による格子文，口唇部内面に条痕が認められ，早期末葉に比定される。34～36は縄文施文の繊維土器で，34は0段多条，35は側面環付，36は単節の原体である。前期前半に比定される。

ま　と　め　これらの遺構は重複関係や人為堆積土中の出土土器から前期前半のものと考える。用途については検討材料に乏しく，不明と言わざるを得ない。（山元）

縄文時代前期後半以降の土坑（落し穴状土坑）　ＳＫ04・06～10・26

すべて落し穴状土坑とされるもので，Ａ～Ｃ類に分けることができる。Ａ類：平面プランは長方形状となり，底面に2ないし3個の坑底施設を有する（4・8～10・26号土坑）。Ｂ類：平面プランは長楕円状となり，底面に多数の坑底施設を有する（7号土坑）。Ｃ類：平面プランは溝状となり，坑底施設を伴わない（6号土坑）。

Ａ類：4・8～10・26号土坑（図104・106・110・113～116・図版105・107・108・112・139・142）

遺　　構　4号土坑のみ1次調査区西部の丘陵尾根上，他の4基は調査区東部の丘陵裾部に存在する。丘陵裾部の土坑群はⅬⅣ・ⅬⅤにおいて存在を確認しえたが，プランを明確に検出するため

ＬⅥまで下げた後精査を行なっている。それぞれ，重複関係は認められない。堆積土の観察から，４・10・26号土坑は一部が人為的に埋め戻されたものと判断した。８・９号土坑は自然堆積により埋没しており，堆積土の下層には壁面上部の崩落土が含まれていた。

平面プランは長方形を基調とする。底部の形状も長方形を基調とするが，４・９号土坑は中央が若干括れ，撥形に近くなる。すべて底面は平坦となり，壁面は崩落した部位を除けばほぼ垂直に近い状態で立ち上がる。検出面における規模は長辺が1.6～2.3m，短辺は0.8～1.0mを測る。遺構の長軸方向は斜面に平行するもの(４・９・26号土坑)と直交するもの(８・10号土坑)に分けられるが，地形や遺構の位置関係から相関性は確認できない。

本土坑群は底面に坑底施設を伴う。８・９・26号土坑は２個，４・10号土坑は３個の掘形を有する。棒状痕跡は４号土坑を除く４基で確認している。26号土坑では掘形１個につき１本，８～10号土坑では複数本の痕跡が認められる。

遺　　物　本土坑群から出土した遺物はすべて堆積土中から確認されたものであり，流入資料と考えられる。

４号土坑の資料は土器片５点，石器１点を図示し得た(図113－９～13，図116－２)。９は貝殻文が付された縄文時代早期中葉の土器片であり，10・12・13は羽状縄文土器，11は斜縄文上に半截竹管による平行沈線が施文された縄文時代前期の土器片である。石器は木の葉形の無茎平基石鏃が出土している。

８号土坑からは縄文時代早期後葉～末葉の土器片が７点出土した(図114－24～30)。24は半截竹管による横・縦位の沈線，及び口唇部に撚糸文を付す口縁部資料である。25は沈線を伴う条痕文－条痕文土器，26は縄圧痕文－条痕文土器，27～29は縄文－条痕文土器，30は縄文－擦痕土器である。またℓ３からは完形の石槍が出土している(図116－７)。頁岩製で，基部にくびれを持つものである。前期後半によく見られる有撮石器とよばれるタイプのもので，これらの土坑が前期後半に帰属する重要な証左となる。

９号土坑からは縄文時代早期後葉～末葉の条痕文－条痕文土器３片が出土している(図114－31～33)。31・33は口縁部資料であり，33の口端部内面にはキザミが付されている。また石器３点(図116－８～10)が出土しており，８は石鏃，９は掻器，10は一部が研磨された凹石である。

10号土坑の資料は縄文時代早期後葉～前期の土器片７点，石器１点を図示した。図115－１・２・５は縄文－条痕文土器であり，１の外面は縦走縄文である。図115－３・４は条痕文地に縦位に連続して絡条体圧痕文が施文される。図115－６・７は斜縄文が施文され，内面は磨かれる。図116－11は二次的な加工が加えられた不定形石器である。

26号土坑から図示し得る遺物は出土していない。

ま　と　め　本遺構群は形状や坑底施設から落し穴状土坑と判断される。９・10・26号土坑はそれぞれ約15m間隔，約60cmの比高に配置されており，一連の施設であった可能性も考えられる。本土坑群の堆積土中から出土する遺物は，圧倒的に遺物包含層に含まれる縄文時代早期後葉～前期前

半の土器が多い。8～10・26号土坑の周囲には縄文時代晩期の遺構群が密に存在するが，本土坑群から該期の遺物は認められていない。従って，これらの遺構は晩期には埋没していた可能性が高い。本土坑群の時期を特定することはできないが，出土土器からは縄文時代前期以降晩期以前の幅の間と類推され，中でも，8号土坑出土の有撮石器の存在を重視すれば，縄文時代前期後半のものである可能性が高い。（横須賀・三浦・山元）

Ｂ類：７号土坑（図105・114，図版107・139）

遺　　構　調査区東部の丘陵裾部に存在する。ＬⅤにおいて存在を認識しえたが，プランを明確に検出するためＬⅥにおいて検出した。重複関係は認められない。堆積土の観察から，自然埋没と判断される。

遺構上端，及び底部の平面プランは隅丸長方形～長楕円形となる。底面は平坦となり，壁面は垂直に近い状態で立ち上がる。遺構の西側短辺は露頭した花崗岩によって制限される。規模は長辺が1.7m，短辺は0.5m前後を測る。遺構の長軸方向は斜面に向かって斜行し，西北西を向く。

本土坑は底面に坑底施設を伴い，5個のピットを確認している。5個のピットはすべて径10cm未満であり，断面形から木材などを直接底面に刺し込んだ痕跡と捉えられる。

遺　　物　すべて堆積土中から出土し，流入資料と考えられる。縄文時代早期の土器片が4点出土している(図114－20～23)。20は縄文時代早期前葉の撚糸文系土器である。21・22は撚糸文－条痕文土器，23は縄文－条痕文土器であり，縄文時代早期末葉頃に比定される。

ま　と　め　規模・形状・坑底施設からＡ類とは区別しうるが，他に同様の遺構は存在しない。堆積土中から縄文時代早期末葉の土器が出土し，本土坑は少なくとも該期以降に構築されたものと判断される。（横須賀）

Ｃ類：６号土坑（図105・114・116，図版107・139）

遺　　構　調査区東部，黒森川に向かって緩やかに下る地形に位置している。本遺構は7号住居跡掘り下げ時に7号住居跡の床面及び堆積土観察用のベルト断面で確認した。ベルト断面の観察から，本遺構は7号住居跡の堆積土上から掘り込まれており，7号住居跡より新しい遺構であることが確認できる。堆積土は5層に分層され，レンズ状の自然堆積となっている。ℓ１・２には沼沢起源と思われる黄白色軽石が認められる。

平面形は東西に長軸方向をもつ溝状となる。規模は長軸150cm，短軸は40cmである。東側壁面はプランの外側にえぐれながら底面に至る。底面には階段状に数段の段差が認められ，底面幅は12cm，深さは最深部で検出面から52cmである。底面からはピットなどの付帯施設は認められなかった。

遺　　物　本遺構の出土遺物は土器2点，磨石1点を図示した(図114－18・19，図116－６)。18は縄文時代晩期頃の撚糸が施文された土器片である。19は無文土器で，時期は不明である。雲母を多量含んでいる。図116－６は器面の風化が激しく磨り部は明確でない。

ま　と　め　本遺構は7号住居跡掘り下げ時に確認されたため，遺構の大半を住居跡床面まで掘り下げてしまっている。本土坑は底面に段差が認められるものの，形態から溝状落とし穴と推定さ

れる。本類土坑は今回の調査では唯一である。

本土坑は，堆積土中に沼沢パミスと思われる黄白色軽石が認められたことから，縄文時代前期末葉以前に開口され，廃絶されたものと推定できる。また埋没した７号住居跡上から構築されており，上限は縄文時代早期中葉以降となる。調査成果から周辺は縄文時代早期後葉～前期前葉には集落であったと推測され，狩猟場に伴うと考えられる本土坑の性格から，縄文時代前期前葉～後葉にかけて造られた遺構であると推測できる。（三浦）

縄文時代晩期の土坑　ＳＫ05

５号土坑（図105・113・114・116，図版106・141・142）

遺　　構　本遺構は１次調査区東部のＡＢ25・26グリッドに位置する。黒森川に向かって僅かに下る平坦な地形である。ＬⅣ上面で存在を確認しえたが，プランが明確となるＬⅣ中位まで掘り下げ検出した。本遺構は４号建物跡Ｐ４と重複する。４号建物跡Ｐ４は本遺構の底面より検出され，本遺構が新しい。

遺構内堆積土は５層に分層した。ℓ１～４は黒色土，ℓ５は褐色土主体である。いずれの層にも炭化物・焼土粒が含まれ，遺物が多量に混入する。堆積状況や混入物の状況から人為堆積であると判断した。

本遺構は南北に長軸をもつ楕円形を呈し，規模は長軸2.5m，短軸1.7mである。底面形も南北に長軸をもつ楕円形であり，規模は長軸1.8m，短軸1.3mを測る。底面は凹凸があり雑に掘り下げたままである印象を受けた。底面から壁面にかけては丸みを帯びながら緩やかに立ち上がる皿状を呈す。底面から検出面までの深さは最深部で40cmである。

遺　　物　本遺構から出土した縄文土器42点，石器３点を図113－14～35，図114－１～17，図116－３～５に図示した。図113－17は胎土や文様など同一個体と思われる資料で図上復元を試みた。精製の深鉢であろう。口縁部に小突起をもち，丁寧に磨いた胴部上半には点列と沈線により文様を描く。胴部下半から底部にかけては，網目状撚糸文を施文する。同図18～34は精製土器の口縁部または口縁部付近の資料をまとめた。20は精製土器の波状口縁資料である。部分的に赤色顔料が認められる土器である。24～26・28は胎土や文様から同一個体と判断した。31～33は口縁端部に溝が見られ，口縁部には１段または２段の点列がある。35は注口浅鉢土器の注口部である。

図114－１・２は粗製の深鉢である。１は深鉢というよりは鉢であろうか。口縁部に突起をもち，頂部に刺突されている。無文の口縁部には対の粘土粒を貼り付けて，それらを短沈線でつなぐように施文している。口縁内側には１条の溝が認められる。２は複合口縁の深鉢である。口縁部は横位，胴部は縦位に撚糸を施文する。歪みが大きく推定口径は割り出せなかった。同図３～６は精製土器の口縁部資料である。丁寧に磨かれている。同図７～18は粗製土器の資料をまとめた。１段撚糸文，網目状撚糸文などで施文される。９は沈線を用い，網目状の文様効果を表している。

図116－３～５は石器を図示した。３は無茎平基の石鏃である。一側縁は剥離の過程で大きく抉ら

れてしまったようである。4は先端部の剥離は行われていない石鏃未製品であると判断した。5は石剣の欠損品である。本遺跡付近では確認できない石材を用いている。石質によるためか縦方向に磨かれた擦痕が顕著に確認できる。図113－14・15および16は各々，早期中葉・後葉のものである。

ま　と　め　本遺構は調査区東側ほぼ平坦面に位置する楕円形の土抗である。4号掘立柱建物跡Ｐ4と重複し，本遺構のほうが新しい。本遺構内堆積土は黒色土が主体であり，基本土層ＬⅡとほぼ同層である。また，炭化物や焼土粒などとともに多数の遺物が含まれていた。本遺構の使用方法は炭化物・焼土粒や土器片が含まれる状況や形態から，廃棄穴の可能性を考えているが明確ではない。時期は出土遺物や堆積土から縄文時代晩期中葉大洞Ｃ2式期であると推定される。　（三浦）

時期不明の土坑　ＳＫ02・11・30～32

2号土坑（図104・113，図版105・139）

遺　　構　本遺構は1次調査区と2次調査区の境に当たるQ20グリッドに位置する。周囲は丘陵上の東向き斜面である。重複する遺構はない。本遺構の北側には4号土抗，南側には3・5号住居跡が位置する。1次調査時にＬⅥ上面において調査区壁にかかる遺構の東半部分を検出し，2次調査においてその西半部分も確認できたので補足調査を行った。本遺構の堆積土は3層に分層した。ℓ1・2は堆積状況が不自然であることから，人為堆積と判断した。ℓ3は底面に薄く認められる層で自然堆積である。1次調査時の壁を利用した土層観察の結果，本遺構はＬⅣａ中から掘り込まれているのが確認できる。

本遺構の平面形は，東西に長い不整な楕円形である。平面規模は長軸方向で170cm，短軸方向で85cmである。底面形も楕円形で長軸長150cm，短軸長75cmを測る。底面は中央が僅かに丸みを帯びる皿状である。底面から壁面にかけては緩やかに立ち上がる。底面にはピットなどの施設は認められなかった。

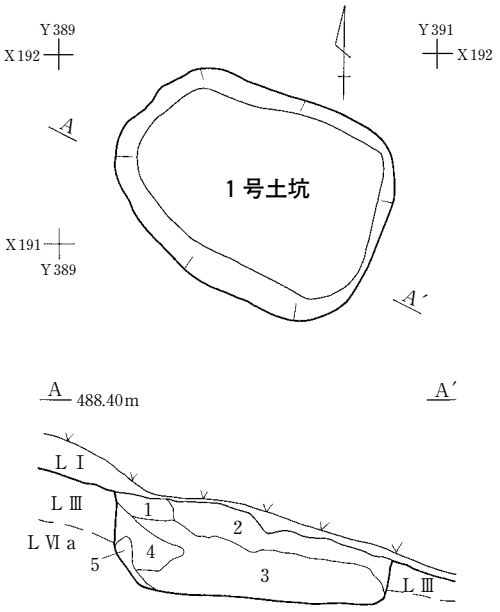
遺　　物　本遺構からは5点の遺物を図示した。図113－4・5は縄文時代早期中葉の土器片である。いずれも絡条体を押圧して施文している。4は横位や斜位に施文し，文様を構成する。5は「×」字状の絡条体を押圧している。図113－6・7は縄文時代早期後半の土器であり，6は絡条体条痕文上に絡条体圧痕を施す土器，7は貝殻条痕文土器である。8は縄文時代前期の土器であり外面に斜縄文が施文される。

ま　と　め　本遺構は調査区西際に位置し楕円形状を呈する土坑であるＬⅥａを掘り込んで造られているが，時期や性格は明確にはできない。　（三浦）

11号土坑（図107・116，図版108・141）

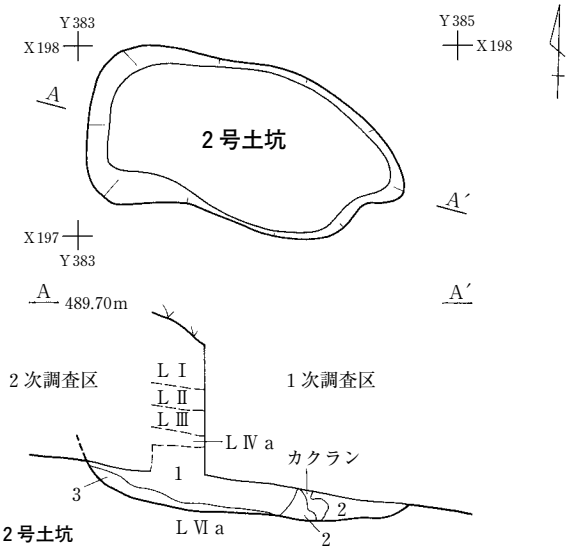
遺　　構　本遺構は1次調査区東端ＡＤ25・26に位置する。地形は黒森川に向かって緩やかに下る。検出面はＬⅥ面である。本遺構には重複関係が見られないが，近接して26号土坑・8号建物跡が位置する。

本遺構の堆積土は3層に分層できた。堆積土の観察から，上層は自然堆積，最下層は人為堆積と



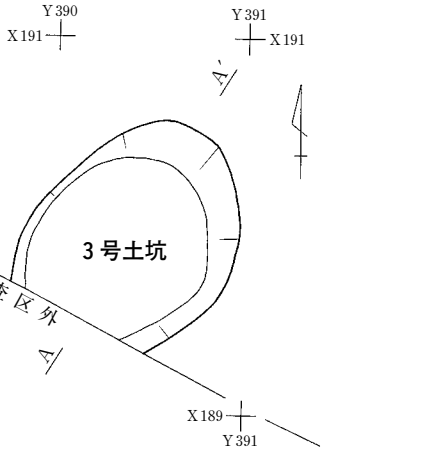
1 号土坑

1　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/3(炭化物極少量含む)
2　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/4(炭化物極少量含む)
3　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/4(褐色土多量，炭化物少量含む)
4　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/4(炭化物極少量含む)
5　褐色土　10Ｙ Ｒ4/6(暗褐色土含む)



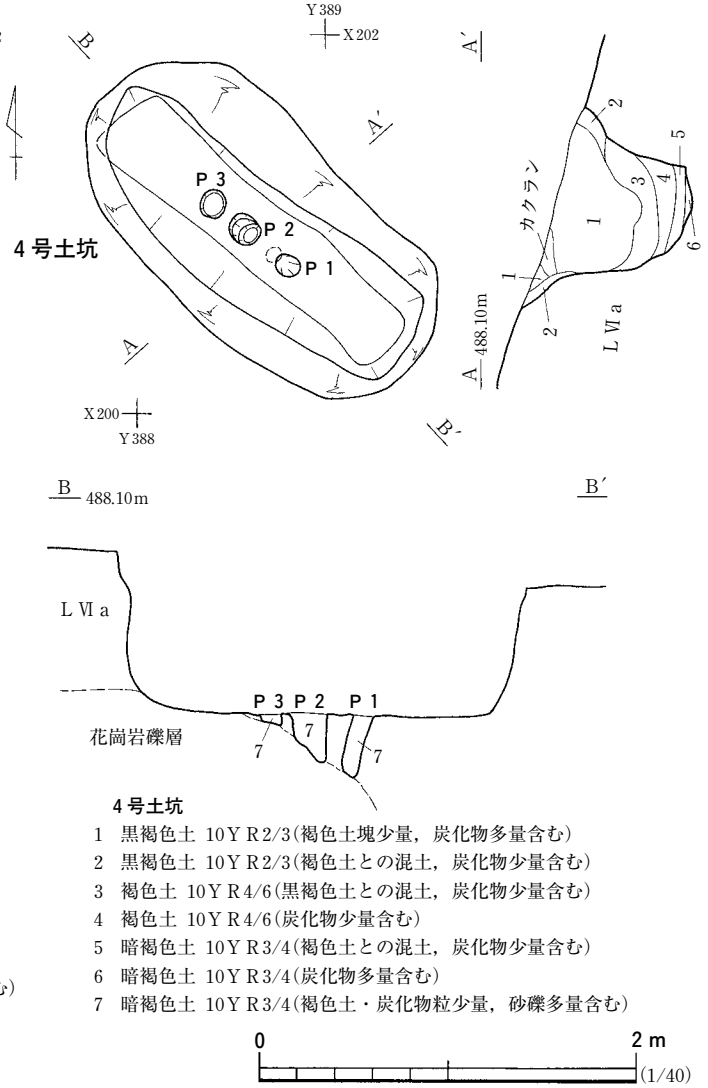
2 号土坑

1　黒褐色土　10Ｙ Ｒ2/3(炭化物極少量含む)
2　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/4(褐色土との混土，炭化物極少量含む)
3　褐色土　10Ｙ Ｒ4/6(暗褐色土多量含む)



3 号土坑

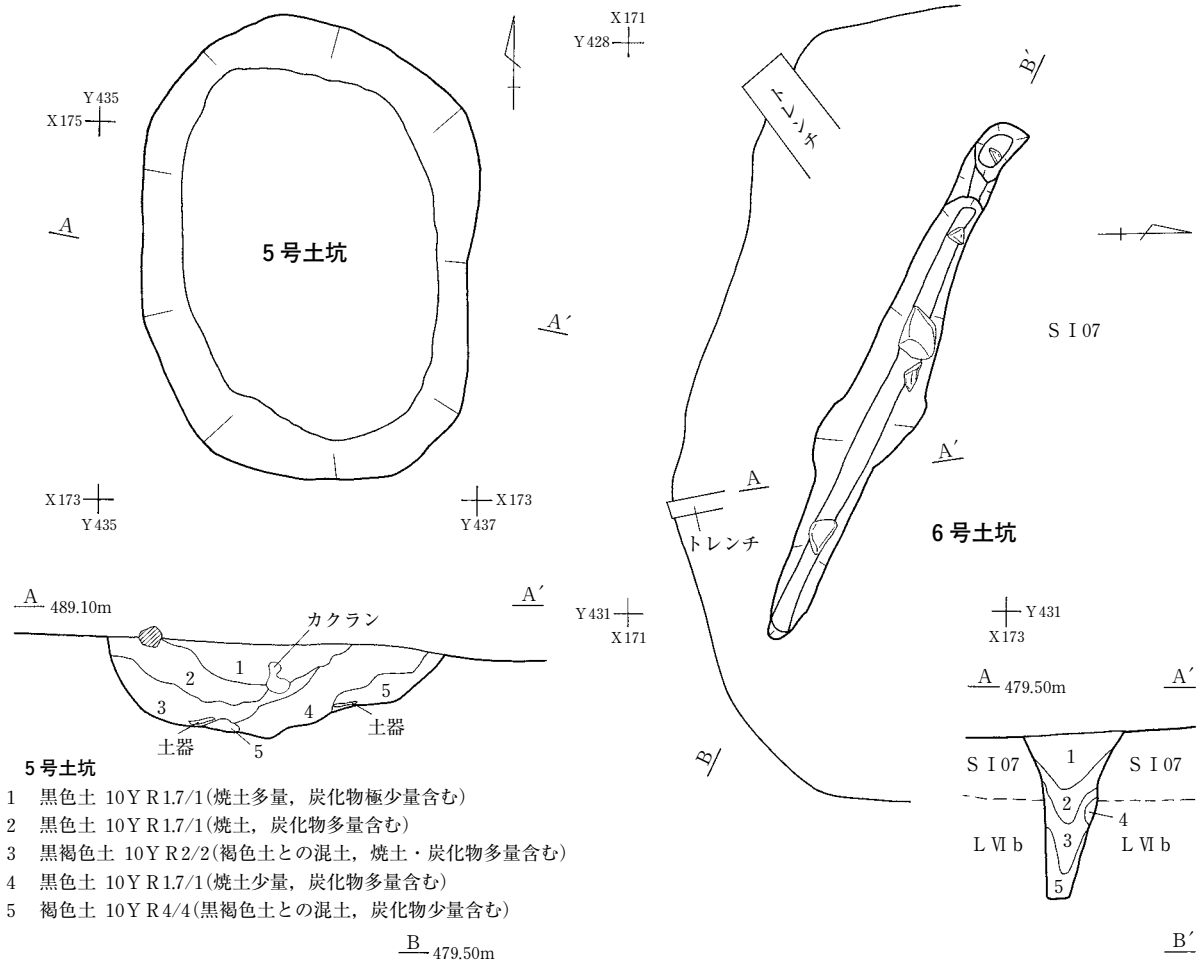
1　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/4(褐色土多量含む)
2　黒褐色土　10Ｙ Ｒ2/3(暗褐色土多量，炭化物極少量含む)
3　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/4(炭化物極少量含む)
4　褐色土　10Ｙ Ｒ4/6(炭化物極少量含む)
5　褐色土　10Ｙ Ｒ4/6(炭化物少量含む)



4 号土坑

1　黒褐色土　10Ｙ Ｒ2/3(褐色土塊少量，炭化物多量含む)
2　黒褐色土　10Ｙ Ｒ2/3(褐色土との混土，炭化物少量含む)
3　褐色土　10Ｙ Ｒ4/6(黒褐色土との混土，炭化物少量含む)
4　褐色土　10Ｙ Ｒ4/6(炭化物少量含む)
5　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/4(褐色土との混土，炭化物少量含む)
6　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/4(炭化物多量含む)
7　暗褐色土　10Ｙ Ｒ3/4(褐色土・炭化物粒少量，砂礫多量含む)

図104　１～４号土坑



5号土坑

1　黒色土　10YR1.7/1(焼土多量，炭化物極少量含む)
2　黒色土　10YR1.7/1(焼土，炭化物多量含む)
3　黒褐色土　10YR2/2(褐色土との混土，焼土・炭化物多量含む)
4　黒色土　10YR1.7/1(焼土少量，炭化物多量含む)
5　褐色土　10YR4/4(黒褐色土との混土，炭化物少量含む)

6号土坑

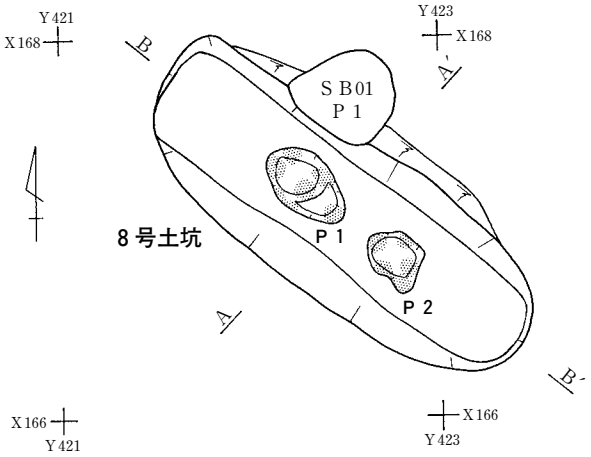
1　黒色土　10YR1.7/1(焼土・軽石少量含む)
2　黒色土　10YR1.7/1(軽石極少量含む)
3　黒褐色土　10YR2/2
4　黒褐色土　10YR2/2(褐色土との混土)
5　黒褐色粘質土　10YR2/3

7号土坑

1　黒褐色土　10YR2/3(花崗岩粒含む)
2　黒褐色土　10YR2/3(花崗岩塊含む)
3　暗褐色土　10YR3/3(花崗岩粒含む)
4　暗褐色土　10YR3/3(花崗岩粒・黄褐色土塊含む)
5　黒褐色土　10YR2/3(花崗岩粒少量含む)
6　黒褐色土　2.5Y2/3(花崗岩粒少量含む)

0　2m
(1/40)

図105　5～7号土坑



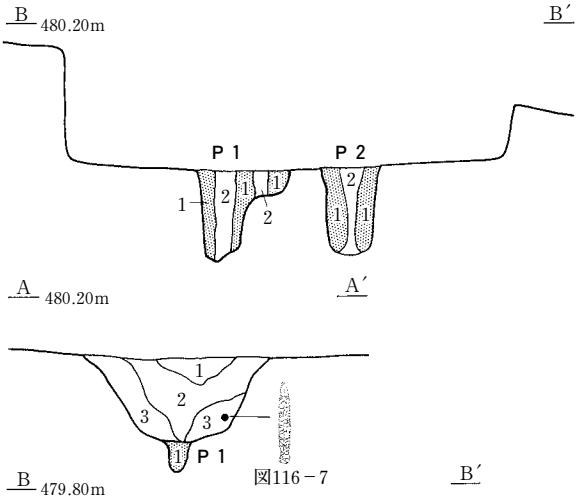
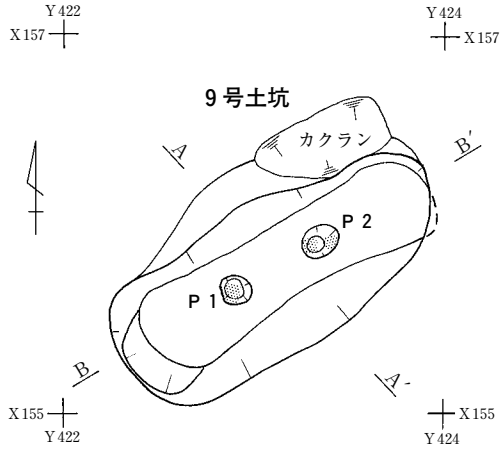
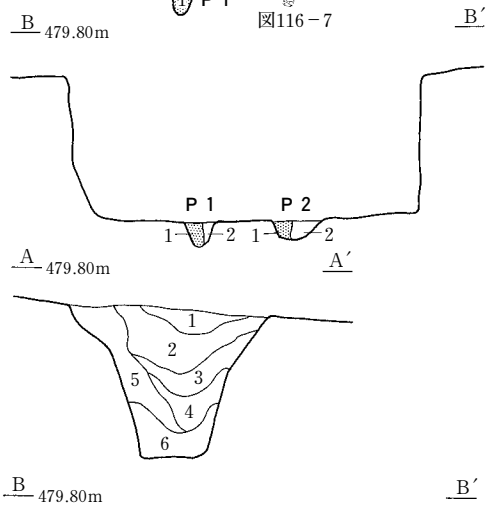
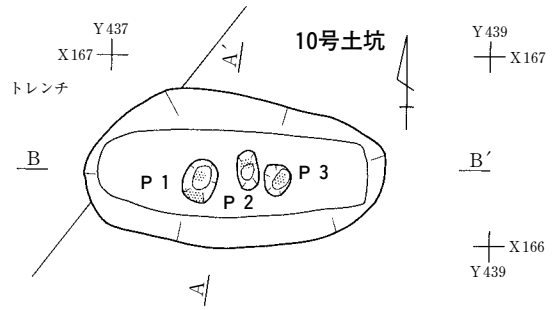
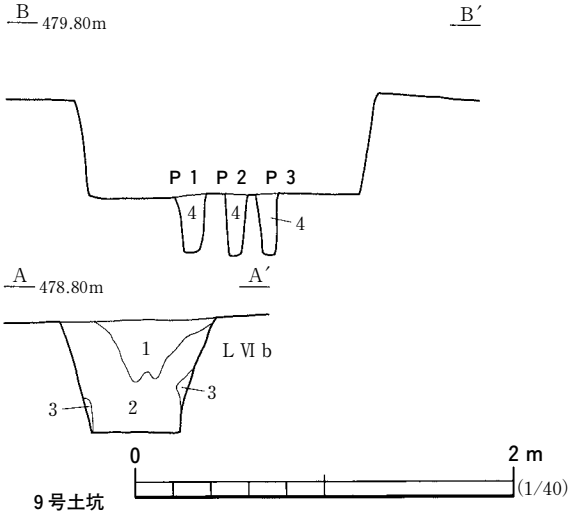


図116－7









8 号土坑

1　暗褐色土 10Ｙ Ｒ3/3(花崗岩粒多量含む)
2　黒褐色土 10Ｙ Ｒ2/3(花崗岩粒多量含む)
3　黒褐色土 10Ｙ Ｒ3/2(花崗岩粒多量含む)

Ｐ 1　1　暗褐色土 10Ｙ Ｒ3/3(花崗岩粒少量含む)
　　2　明黄褐色砂質土 10Ｙ Ｒ6/6(花崗岩粒との混土)

Ｐ 2　1　暗褐色土 10Ｙ Ｒ3/3(花崗岩粒少量含む)
　　2　明黄褐色砂質土 10Ｙ Ｒ6/6(花崗岩粒との混土)

10号土坑

1　黒色土 10Ｙ Ｒ1.7/1(黒褐色土多量，焼土・炭化物極少量含む)
2　黒褐色土 10Ｙ Ｒ2/2(褐色土塊との混土，黒色土塊多量，
　　炭化物極少量含む)
3　褐色土 10Ｙ Ｒ4/4(黄褐色土含む)
4　灰白色粘質土 10Ｙ Ｒ8/2

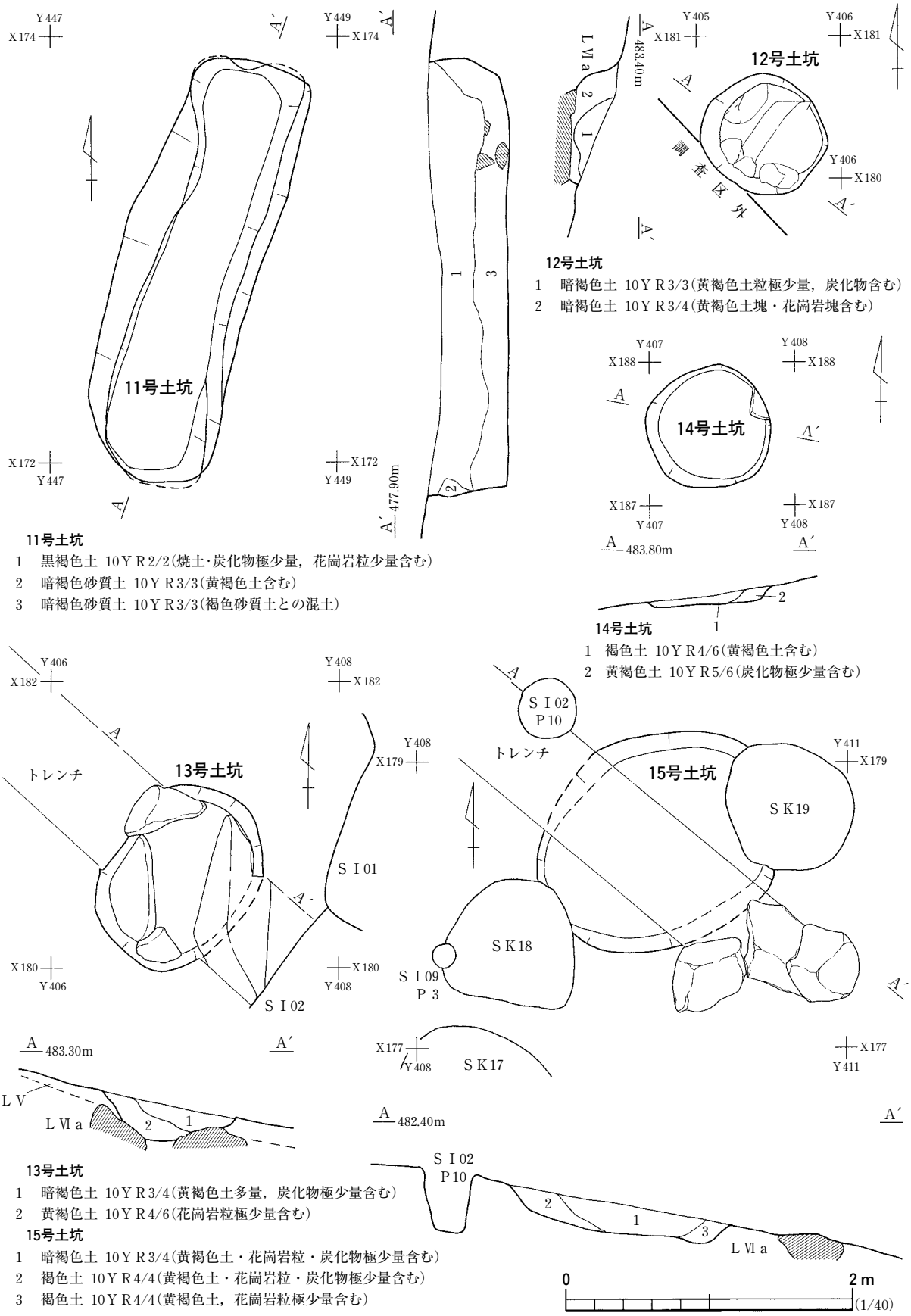
9 号土坑

1　黒褐色土 10Ｙ Ｒ2/3(花崗岩粒含む)
2　黒褐色土 10Ｙ Ｒ2/2(花崗岩粒含む)
3　黒褐色土 10Ｙ Ｒ3/2(黄褐色土塊・花崗岩粒含む)
4　にぶい黄褐色土 10Ｙ Ｒ4/3(黄褐色土塊多量，花崗岩粒含む)
5　黒褐色土 10Ｙ Ｒ3/2(黄褐色土塊・花崗岩粒含む)
6　褐色土 10Ｙ Ｒ4/4(黄褐色土極多量，花崗岩粒含む)

Ｐ 1　1　暗オリーブ褐色土 2.5Ｙ3/3
　　2　明黄褐色砂礫質土 10Ｙ Ｒ6/8(花崗岩粒との混土)

Ｐ 2　1　暗オリーブ褐色土 2.5Ｙ3/3
　　2　明黄褐色砂礫質土 10Ｙ Ｒ6/8(花崗岩粒との混土)

図106　８～10号土坑



11号土坑
1　黒褐色土 10YR2/2(焼土･炭化物極少量，花崗岩粒少量含む)
2　暗褐色砂質土 10YR3/3(黄褐色土含む)
3　暗褐色砂質土 10YR3/3(褐色砂質土との混土)

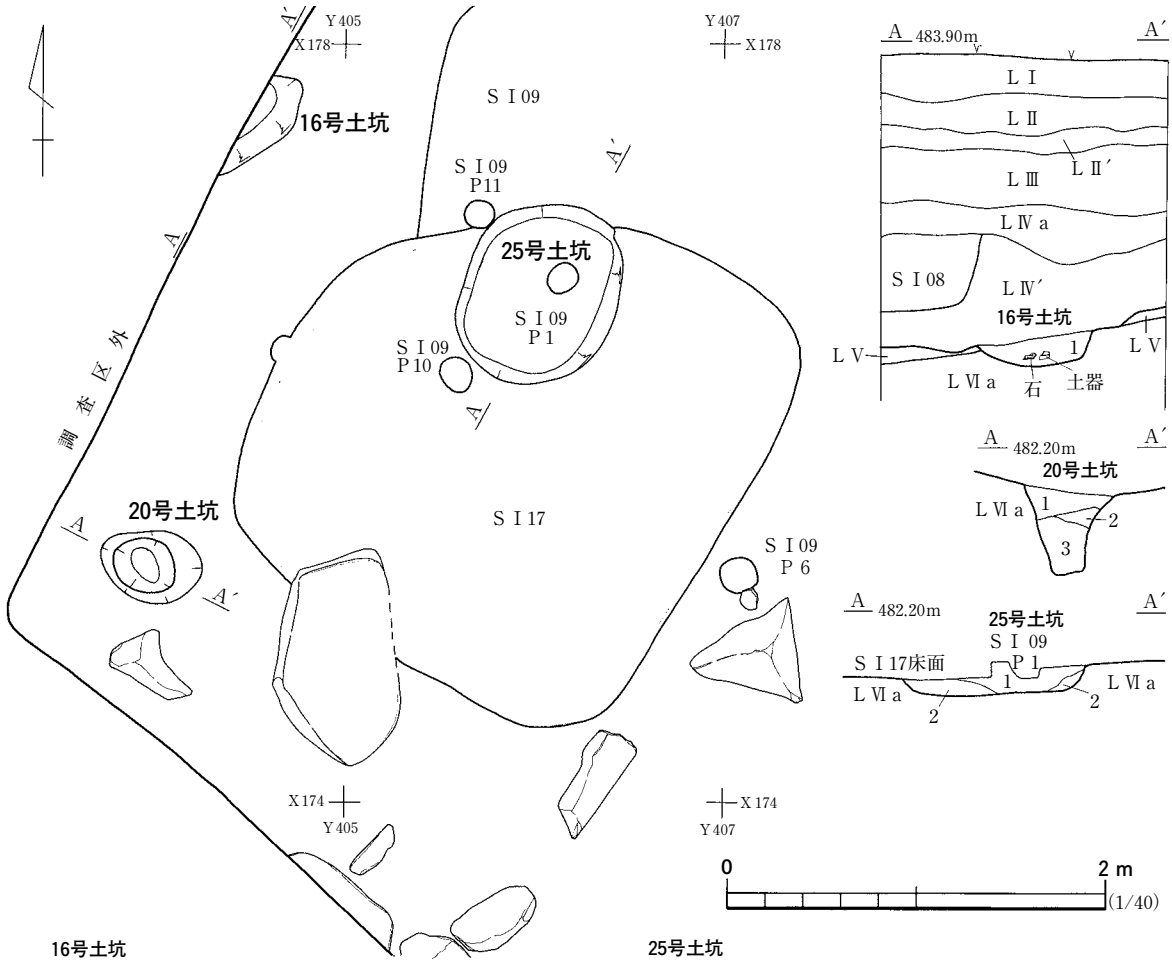
12号土坑
1　暗褐色土 10YR3/3(黄褐色土粒極少量，炭化物含む)
2　暗褐色土 10YR3/4(黄褐色土塊・花崗岩塊含む)

14号土坑
1　褐色土 10YR4/6(黄褐色土含む)
2　黄褐色土 10YR5/6(炭化物極少量含む)

13号土坑
1　暗褐色土 10YR3/4(黄褐色土多量，炭化物極少量含む)
2　黄褐色土 10YR4/6(花崗岩粒極少量含む)

15号土坑
1　暗褐色土 10YR3/4(黄褐色土・花崗岩粒・炭化物極少量含む)
2　褐色土 10YR4/4(黄褐色土・花崗岩粒・炭化物極少量含む)
3　褐色土 10YR4/4(黄褐色土，花崗岩粒極少量含む)

図107　11～15号土坑



16号土坑
1　にぶい黄褐色土 10ＹＲ4/3(炭化物多量含む)
20号土坑
1　暗褐色土 10ＹＲ3/4(黄褐色土塊多量，炭化物極少量含む)
2　にぶい黄褐色土 10ＹＲ4/3(炭化物極少量含む)
3　暗褐色土 10ＹＲ3/4(黄褐色土粒含む)

25号土坑
1　暗褐色土 10ＹＲ3/4(黄褐色土・炭化物含む)
2　褐色土 10ＹＲ4/4(黄褐色土・炭化物含む)

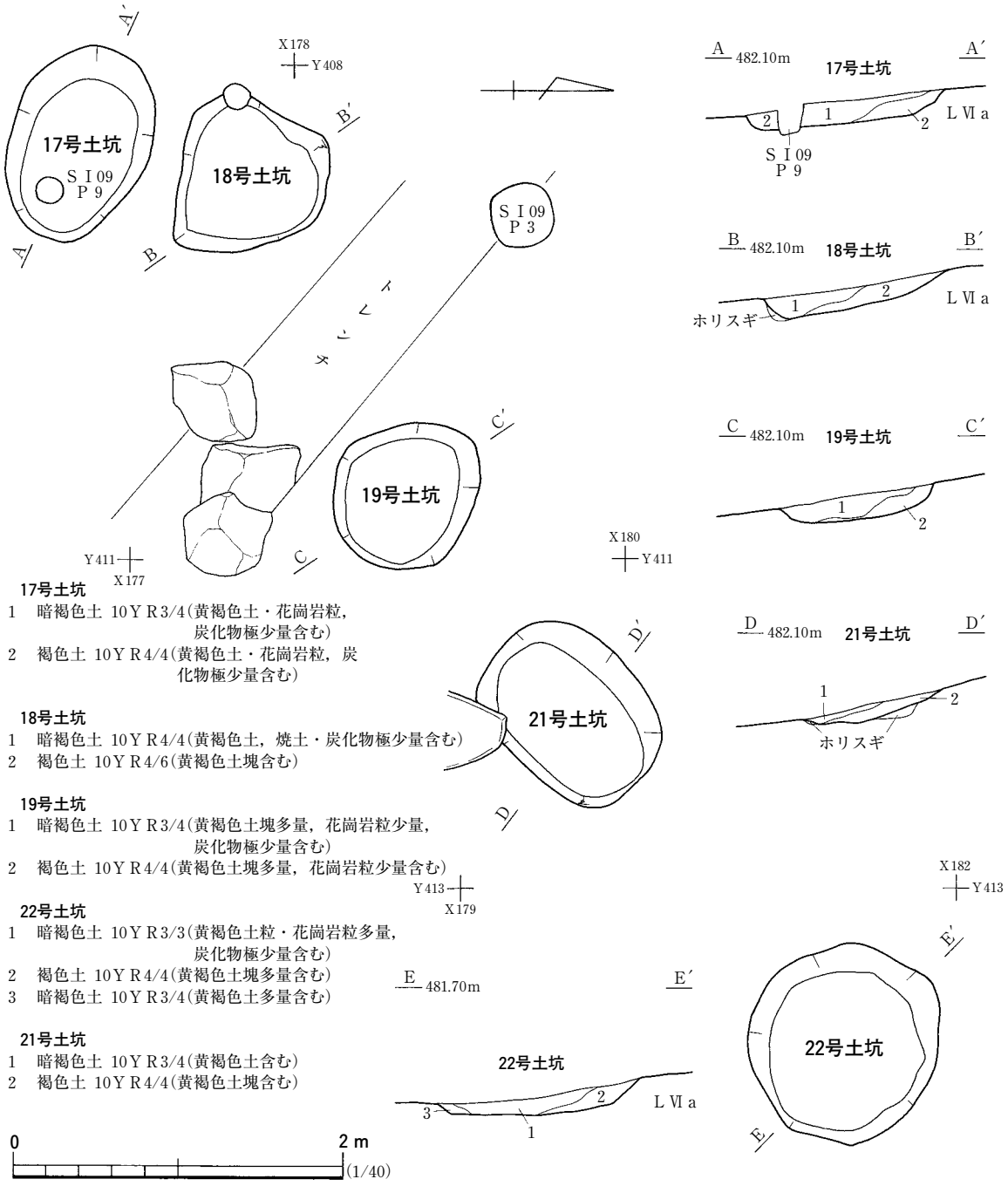
図108　16・20・25号土坑

判断した。ℓ３はＬⅥｂを主体としていると考えられ，人頭大の礫が含まれる様相から本遺構を構築した際の廃土が埋め戻されたものと推測される。

本遺構の平面形は長軸を北方向にもつ長大な土坑である。規模は長軸が３ｍ，短軸は１ｍを測る。底面の平面形は長軸を北にもつ楕円形であるが，北側の一部で僅かに括れる。底面規模は長軸2.8m，短軸60㎝である。底面はほぼ平坦であるが，わずかに北側が下がる。底面からピットなどの施設は認められない。北壁は丸みを帯びながら立ち上がるが，他の壁面はほぼ垂直に立ち上がり，途中から外側に向かって広がる。

遺　　物　本遺構からは図116－12を図示した。蛇紋岩製の磨製石斧である。刃部の一部に欠損が認められるのみで，ほぼ完形品である。

ま　と　め　本遺構は調査区東端に位置する長大な土坑である。長軸を北にもち，長さが３ｍと非常に大きい。平面形からは長楕円形であり，落し穴状土抗と判断し調査を進めた。しかし，あまりにも規模が大きい点や堆積土中に磨製石斧及び礫を混入する点など通常の落し穴状土坑とは異質



17号土坑
1　暗褐色土 10YR3/4(黄褐色土・花崗岩粒，炭化物極少量含む)
2　褐色土 10YR4/4(黄褐色土・花崗岩粒，炭化物極少量含む)

18号土坑
1　暗褐色土 10YR4/4(黄褐色土，焼土・炭化物極少量含む)
2　褐色土 10YR4/6(黄褐色土塊含む)

19号土坑
1　暗褐色土 10YR3/4(黄褐色土塊多量，花崗岩粒少量，炭化物極少量含む)
2　褐色土 10YR4/4(黄褐色土塊多量，花崗岩粒少量含む)

22号土坑
1　暗褐色土 10YR3/3(黄褐色土粒・花崗岩粒多量，炭化物極少量含む)
2　褐色土 10YR4/4(黄褐色土塊多量含む)
3　暗褐色土 10YR3/4(黄褐色土多量含む)

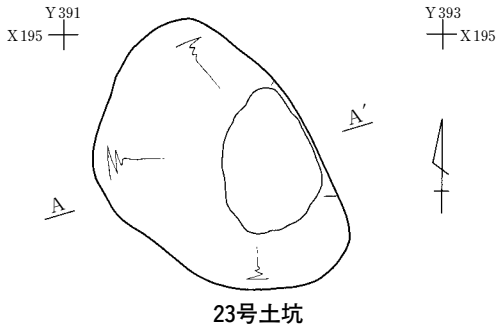
21号土坑
1　暗褐色土 10YR3/4(黄褐色土含む)
2　褐色土 10YR4/4(黄褐色土塊含む)

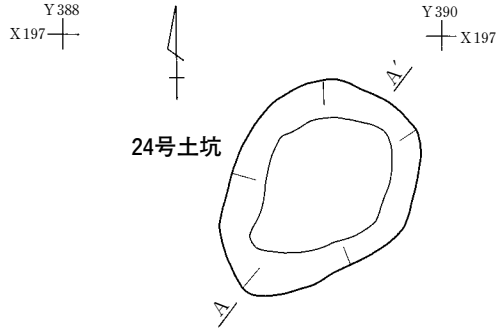
図109　17～19・21・22号土坑

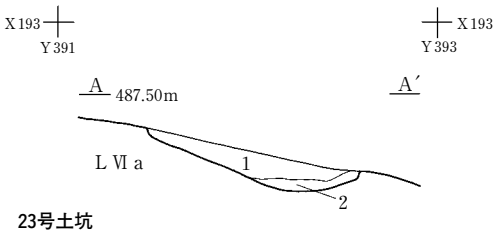
である。落し穴状土抗の他に本遺構の使用目的として考えられるのは，墓坑であろうか。ℓ3は明らかな人為堆積であるし，磨製石斧の優品の出土も見逃せない。もし墓坑であるとすれば，ℓ1も自然堆積の単層に見えるが，人為に埋め戻された可能性がある。しかし，墓坑と仮定してもやはり3mを超える点には疑問符がつく。本遺構の時期についても出土遺物などが少なく，明確に言うことはできない。（三浦）

30・31号土坑（図111・115，図版113・114）

遺　　構　これらの遺構は，2次調査区東部の丘陵尾根から北斜面への落ち際に位置している。

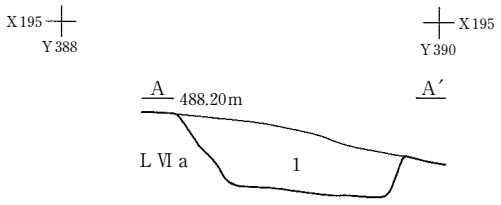






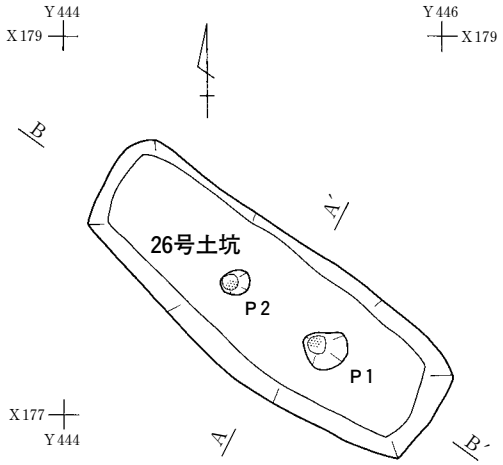
23号土坑

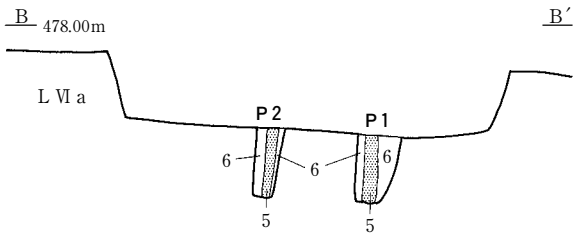
1　暗褐色土 10ＹＲ3/4（褐色土多量,炭化物少量含む）
2　暗褐色土 10ＹＲ2/4（褐色土との混土）

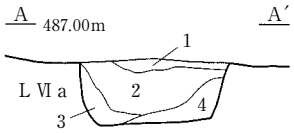


24号土坑

1　暗褐色土 10ＹＲ3/4（褐色土との混土,炭化物極少量含む）

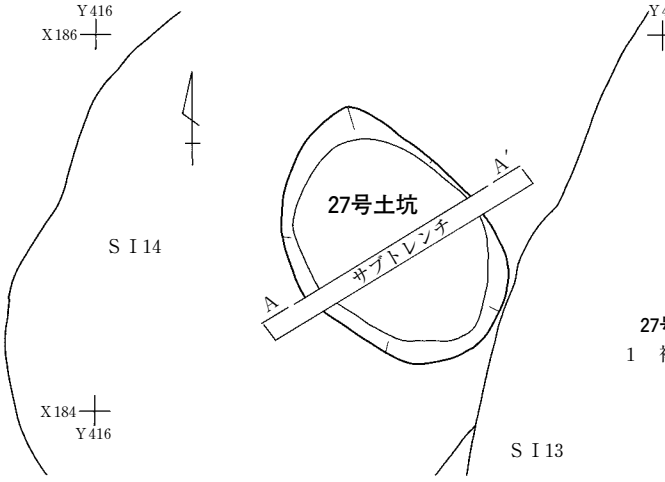






26号土坑

1　黒褐色土 10ＹＲ2/3
2　黒褐色土 10ＹＲ2/3（褐色土との混土）
3　褐色土 10ＹＲ4/6（黒･暗褐色土との混土）
4　暗褐色土 10ＹＲ3/4（しまり強）
5　褐色粘質土 10ＹＲ4/6（暗褐色土との混土）
6　褐色粘質土 10ＹＲ4/6



27号土坑

1　褐色土 10ＹＲ4/6（焼土少量,炭化物・花崗岩粒多量含む）

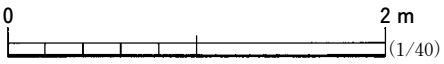
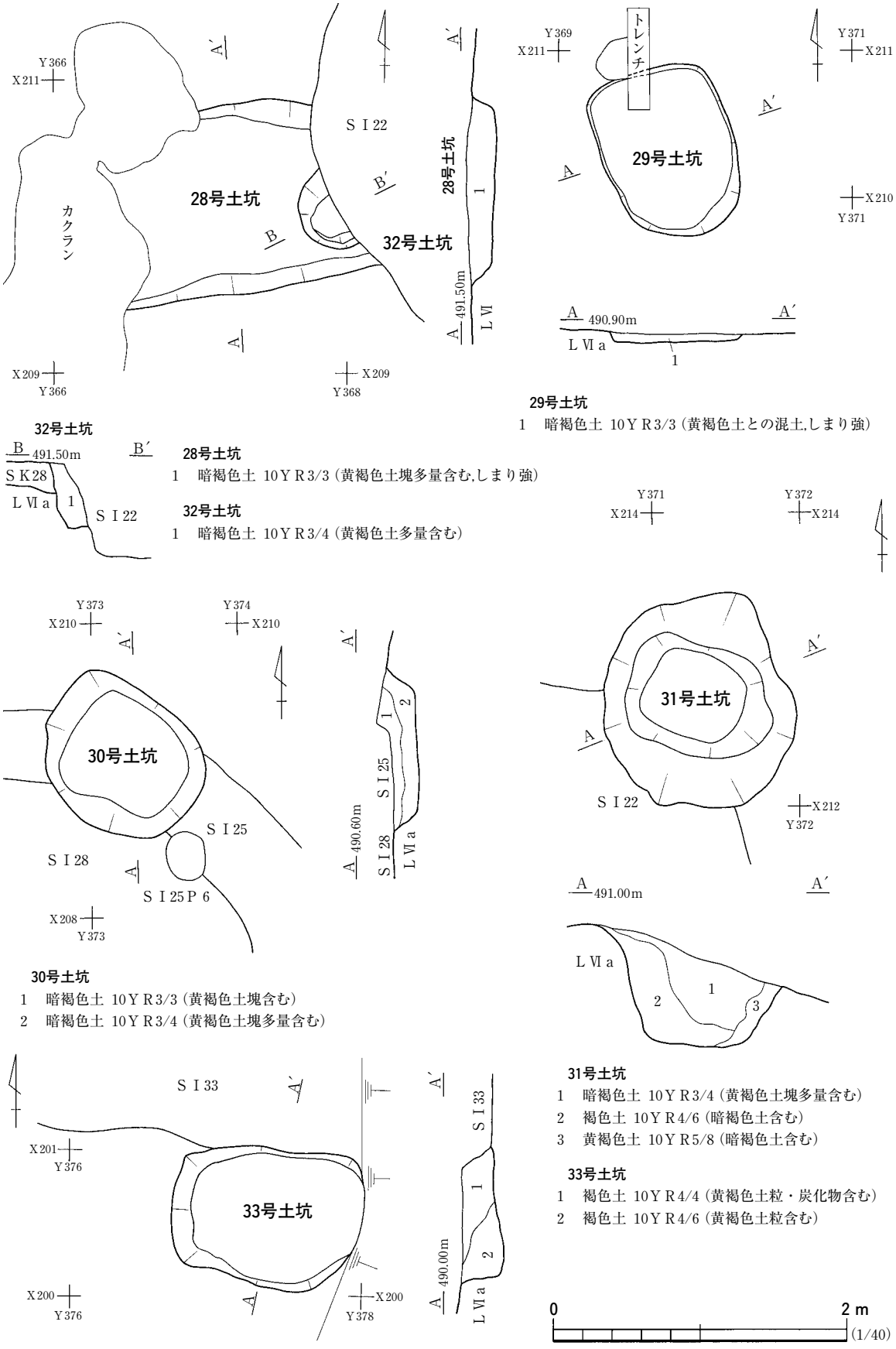


図110　23・24・26・27号土坑



29号土坑

1　暗褐色土 10ＹＲ3/3（黄褐色土との混土,しまり強）

32号土坑

28号土坑

1　暗褐色土 10ＹＲ3/3（黄褐色土塊多量含む,しまり強）

32号土坑

1　暗褐色土 10ＹＲ3/4（黄褐色土多量含む）

30号土坑

1　暗褐色土 10ＹＲ3/3（黄褐色土塊含む）

2　暗褐色土 10ＹＲ3/4（黄褐色土塊多量含む）

31号土坑

1　暗褐色土 10ＹＲ3/4（黄褐色土塊多量含む）

2　褐色土 10ＹＲ4/6（暗褐色土含む）

3　黄褐色土 10ＹＲ5/8（暗褐色土含む）

33号土坑

1　褐色土 10ＹＲ4/4（黄褐色土粒・炭化物含む）

2　褐色土 10ＹＲ4/6（黄褐色土粒含む）

図111　28～33号土坑

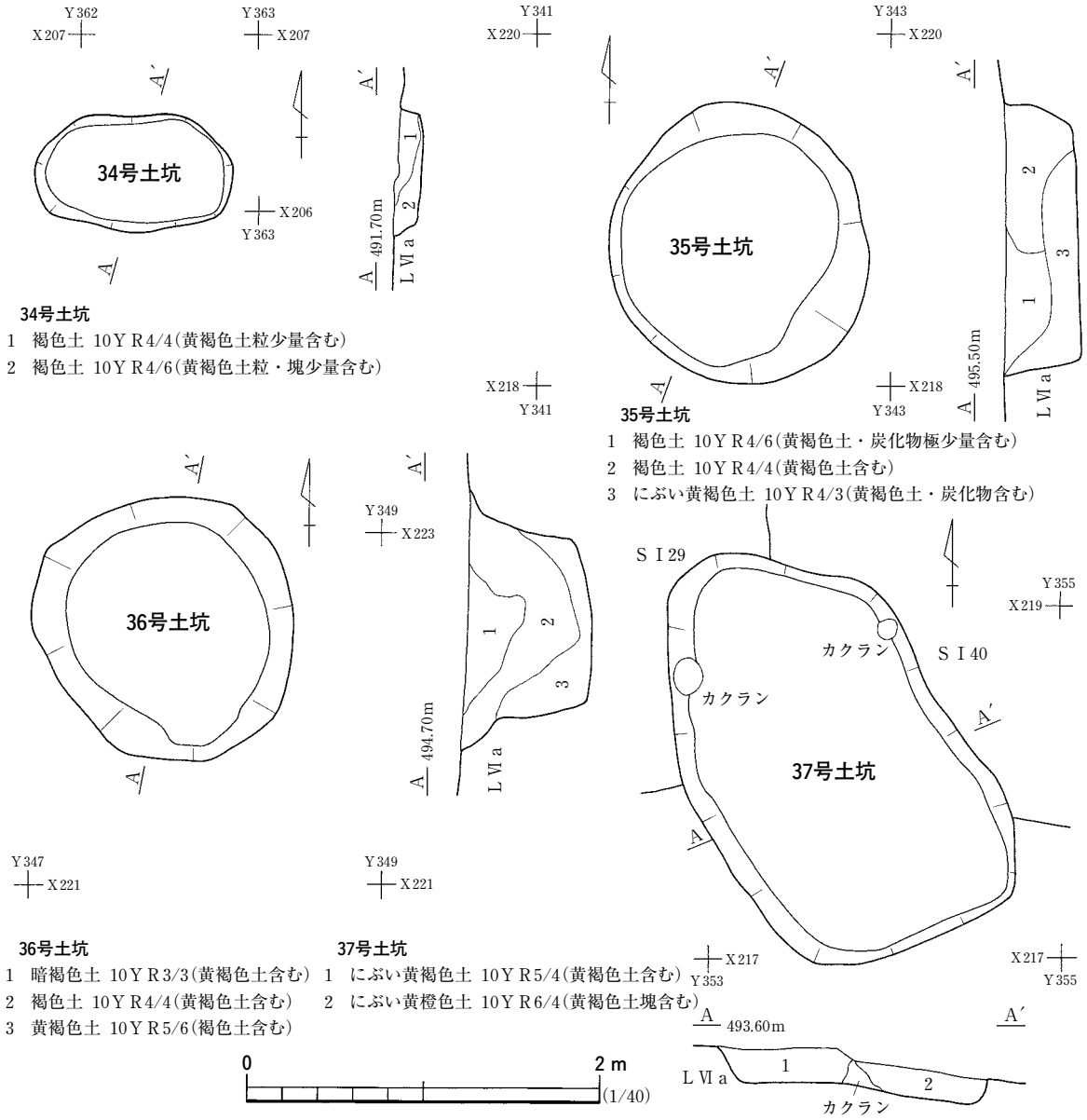


図112　34～37号土坑

検出面はＬⅥで，いずれも縄文時代晩期の住居跡にかかるように検出されている。30号土坑が22号住居跡，31号土坑が25号住居跡と重複し，いずれも住居跡より古い。

平面形は隅丸方形を基調とする。31号土坑については壁の崩落のため，上端が崩れた形状である。底面については，30号土坑はほぼ平坦であるが，31号土坑は一定せず凹凸が激しい。いずれも壁は外傾している。規模は長軸1.0～1.2m，短軸0.9m前後である。堆積土は縄文時代晩期の住居跡内堆積土に似た暗褐色土を主体としている。30号土坑については不整な層理面であることから人為的な埋め戻し，31号土坑については壁際に壁の崩落土を含む土が堆積することから自然に埋没したものと考えている。

遺　　物　30号土坑からは，縄文土器７点，石器２点が出土している。31号土坑から遺物は出土していない。図115－28・29は30号土坑のℓ１から出土したもので，28は非結束の羽状縄文，29は撚

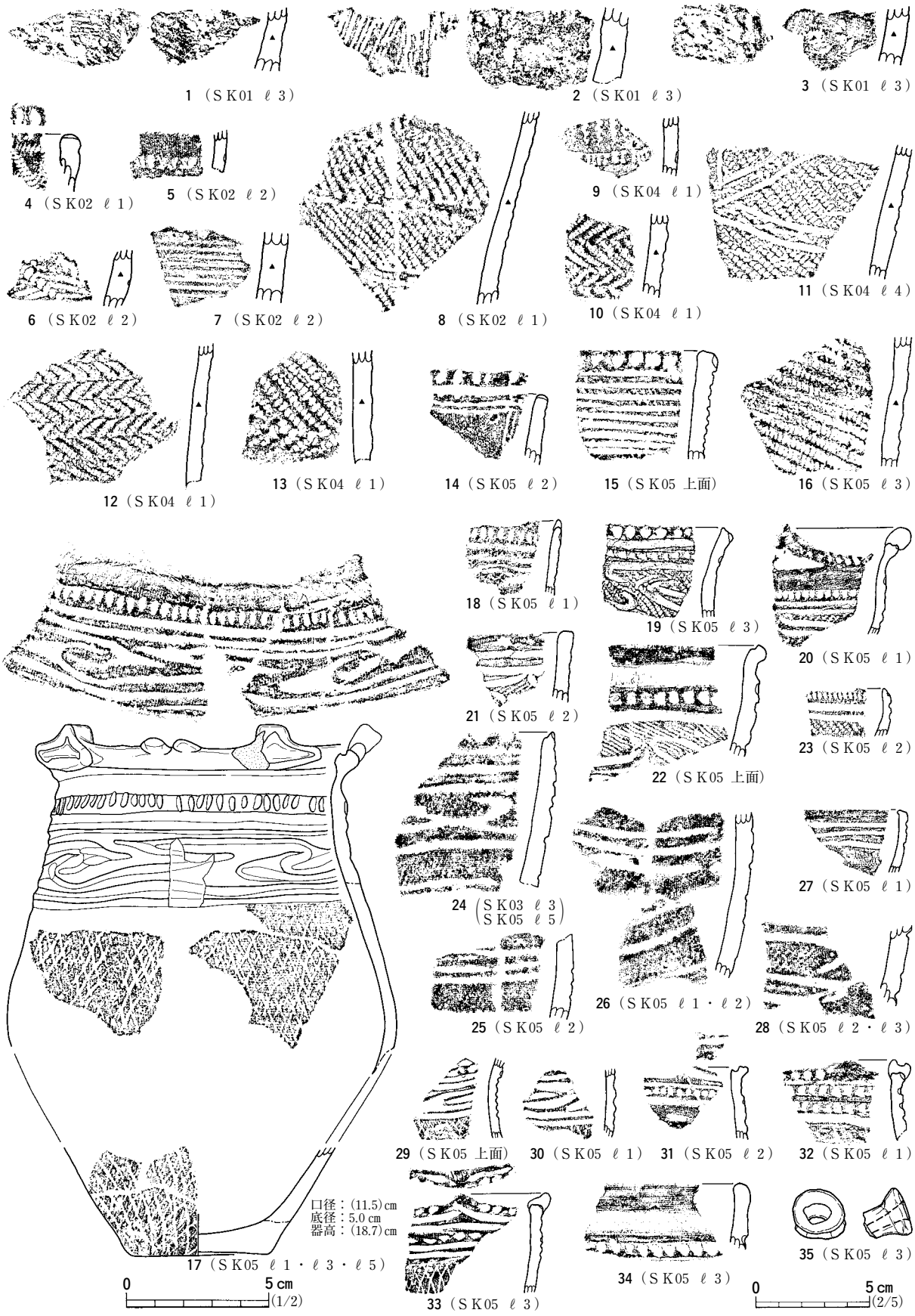


図113　1～5号土坑出土土器

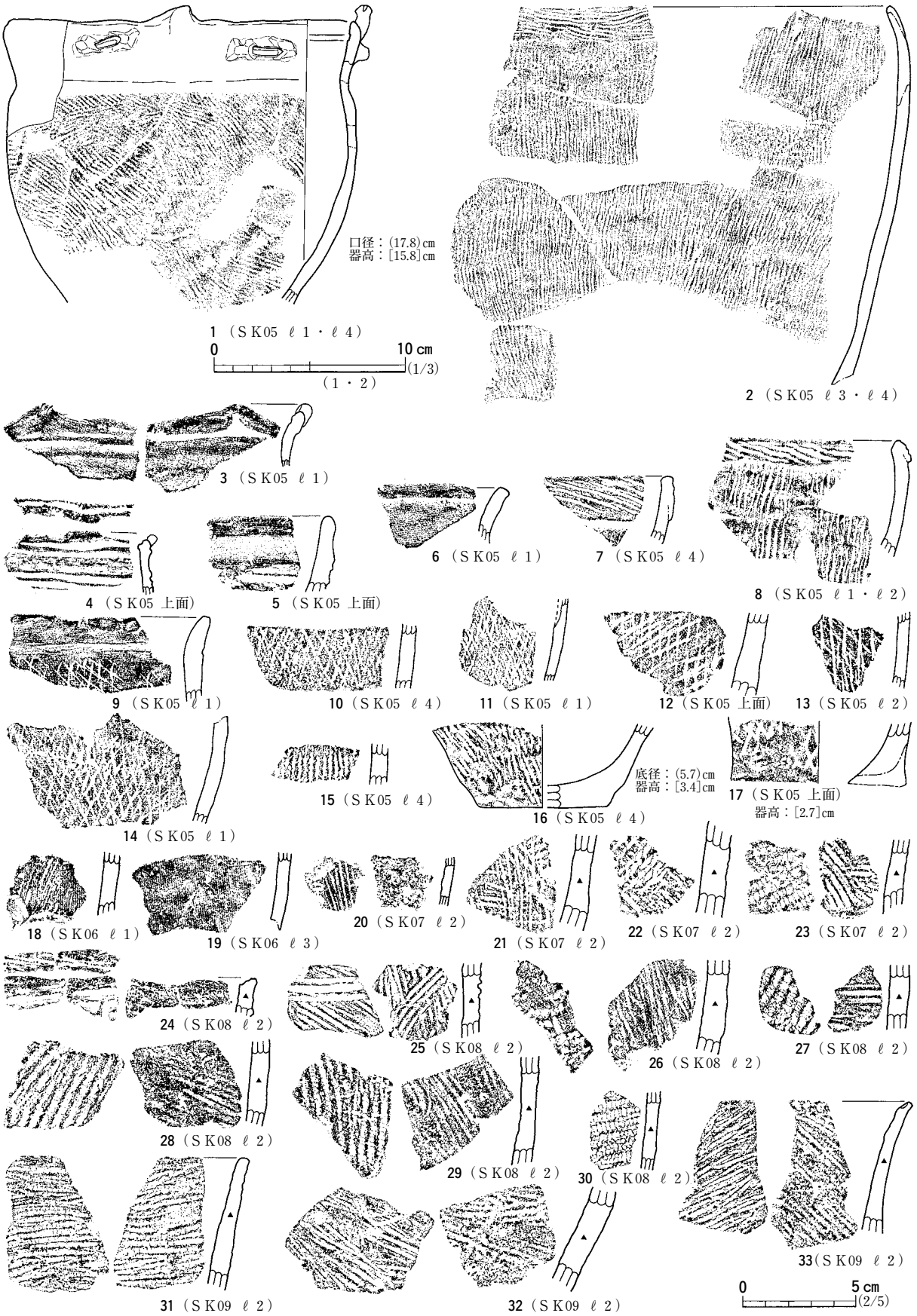


図114　５～９号土坑出土土器

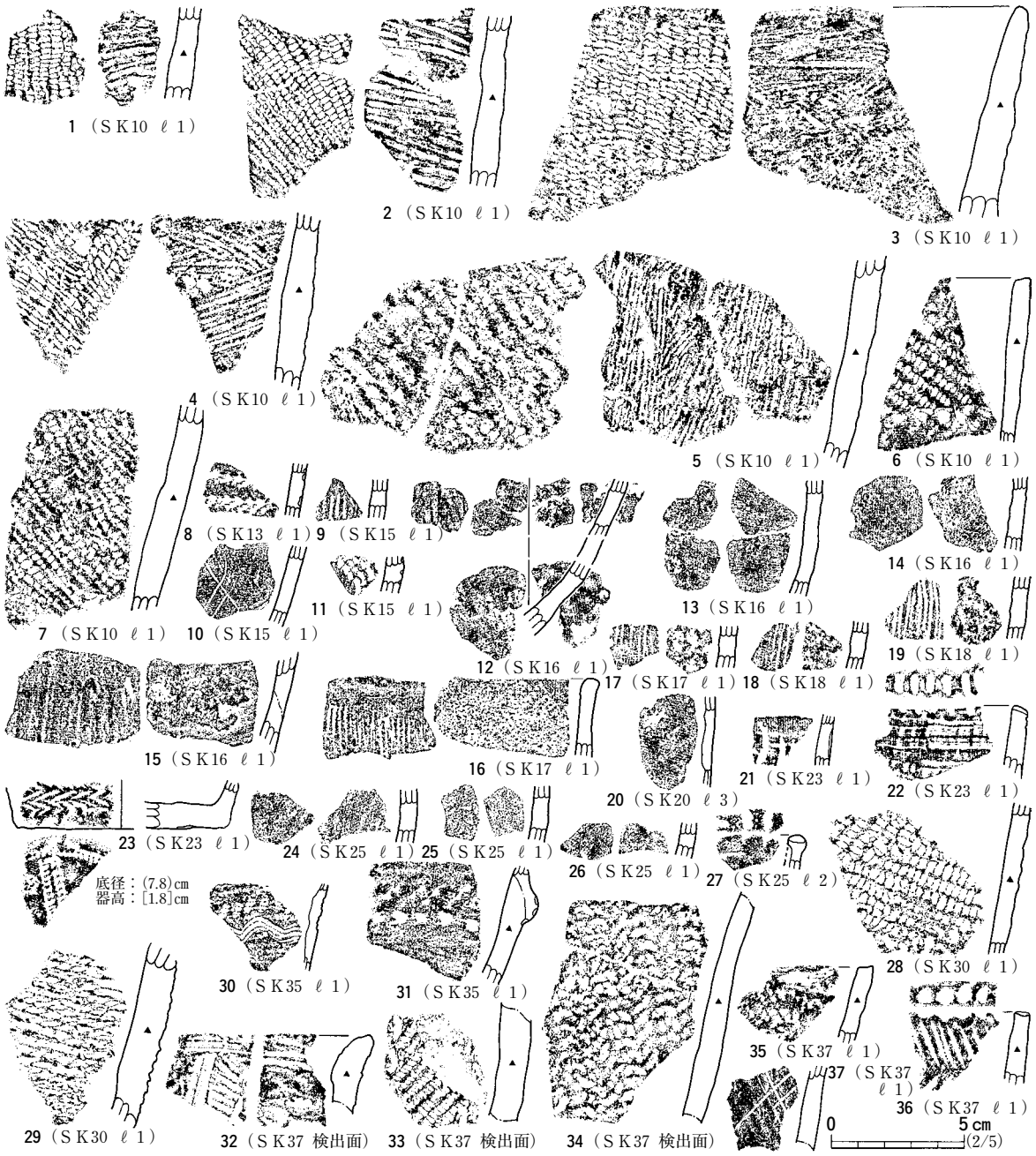


図115　10・13・15～18・20・23・25・30・35・37号土坑出土土器

糸文が施文される繊維土器である。それぞれ前期前半，早期末葉に比定される。

ま と め　これらの遺構は立地，形態が似ていたためまとめて報告した。いずれも縄文時代晩期の住居跡に似た堆積土であるが，当該期の遺物が出土しておらず，時期決定に至らない。これらの用途についても不明である。（山元）

32号土坑（図111，図版114）

遺　　構　本遺構はM18・19グリッドに位置する。22号住居跡精査時に，住居西壁に遺構の存在を認識し，精査終了後ⅬⅥまで下げて平面形を確認した。結果，28・32号の２つの土坑とした。重複するこれらの遺構との新旧関係は，検出時の状況および土層断面での観察から22号住居跡よりも

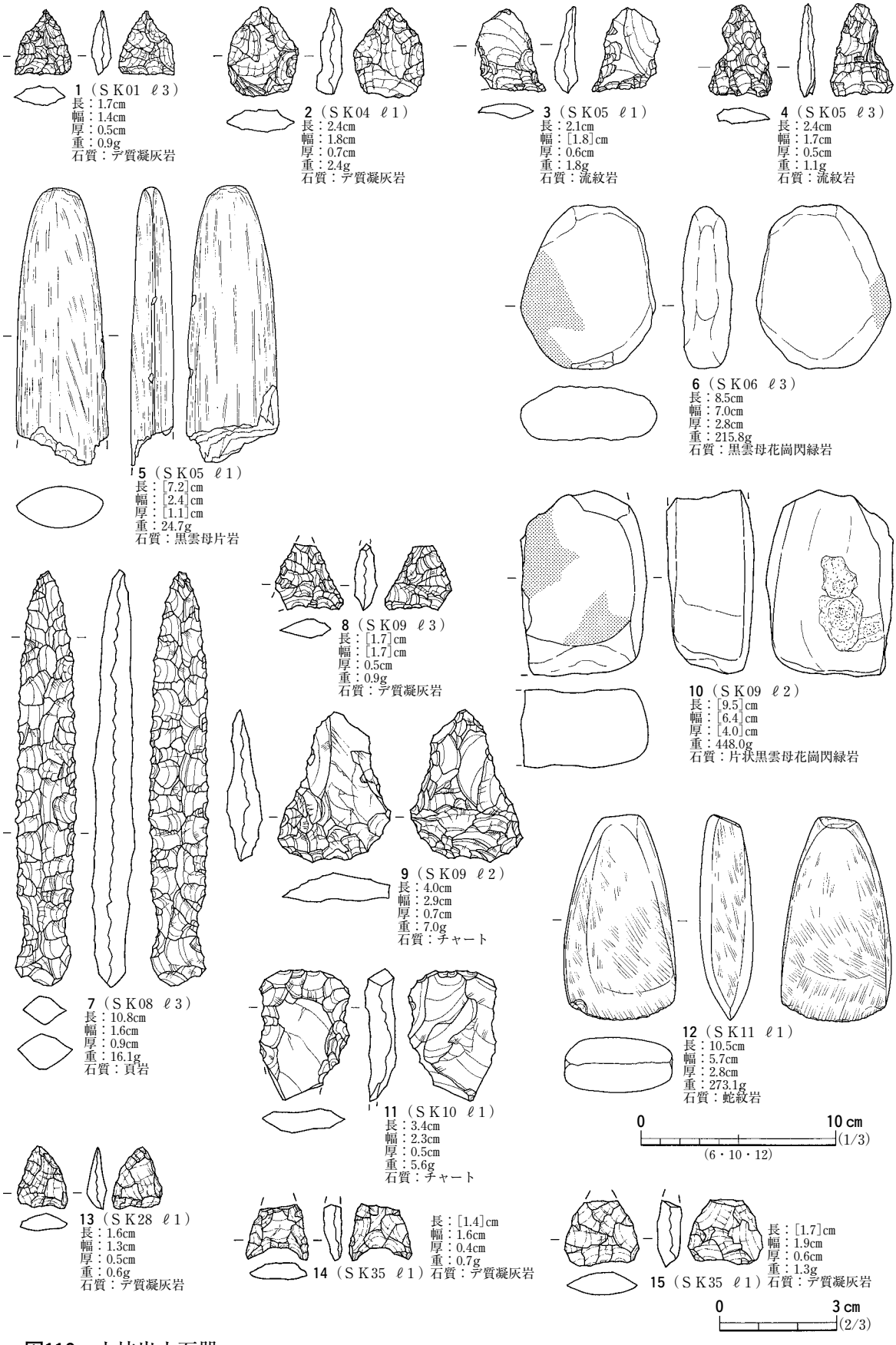

1（ＳＫ01　ℓ３）
長：1.7cm
幅：1.4cm
厚：0.5cm
重：0.9g
石質：デ質凝灰岩
2（ＳＫ04　ℓ１）
長：2.4cm
幅：1.8cm
厚：0.7cm
重：2.4g
石質：デ質凝灰岩
3（ＳＫ05　ℓ１）
長：2.1cm
幅：[1.8]cm
厚：0.6cm
重：1.8g
石質：流紋岩
4（ＳＫ05　ℓ３）
長：2.4cm
幅：1.7cm
厚：0.5cm
重：1.1g
石質：流紋岩
5（ＳＫ05　ℓ１）
長：[7.2]cm
幅：[2.4]cm
厚：[1.1]cm
重：24.7g
石質：黒雲母片岩
6（ＳＫ06　ℓ３）
長：8.5cm
幅：7.0cm
厚：2.8cm
重：215.8g
石質：黒雲母花崗閃緑岩
8（ＳＫ09　ℓ３）
長：[1.7]cm
幅：[1.7]cm
厚：0.5cm
重：0.9g
石質：デ質凝灰岩
10（ＳＫ09　ℓ２）
長：[9.5]cm
幅：[6.4]cm
厚：[4.0]cm
重：448.0g
石質：片状黒雲母花崗閃緑岩
9（ＳＫ09　ℓ２）
長：4.0cm
幅：2.9cm
厚：0.7cm
重：7.0g
石質：チャート
7（ＳＫ08　ℓ３）
長：10.8cm
幅：1.6cm
厚：0.9cm
重：16.1g
石質：頁岩
12（ＳＫ11　ℓ１）
長：10.5cm
幅：5.7cm
厚：2.8cm
重：273.1g
石質：蛇紋岩
0　10 cm
(1/3)
(6・10・12)
11（ＳＫ10　ℓ１）
長：3.4cm
幅：2.3cm
厚：0.5cm
重：5.6g
石質：チャート
13（ＳＫ28　ℓ１）
長：1.6cm
幅：1.3cm
厚：0.5cm
重：0.6g
石質：デ質凝灰岩
14（ＳＫ35　ℓ１）石質：デ質凝灰岩
長：[1.4]cm
幅：1.6cm
厚：0.4cm
重：0.7g
15（ＳＫ35　ℓ１）石質：デ質凝灰岩
長：[1.7]cm
幅：1.9cm
厚：0.6cm
重：1.3g
0　3 cm
(2/3)

図116　土坑出土石器

古く，28号土坑よりも新しい。

大半は22号住居跡に壊されており，遺構の西部を断片的に検出したのみである。よって平面形は円形を基調とするようであるが，全容は不明である。底面は凹凸が著しく，壁面も南壁に不整な段があり，北壁は緩やかであるなど一定ではない。28号土坑堆積土中より掘り込まれ，底面はＬⅥに達する。深さは最大44cmを測る。

遺　　物　遺物は出土していない。

ま　と　め　本遺構は，重複関係から縄文時代の土坑といえる。調査時には，22号住居跡の付帯施設の可能性も考えていたが，両者の関連は確認できなかった。従って，詳細な時期およびその性格も不明である。（山元）

第４節　その他の遺構

屋外焼土遺構６基，土器埋設遺構２基，道跡１条およびピット群については，検出数が限られるため本節で一括して報告する。

屋外焼土遺構　ＳＧ（図117，図版117・118）

屋外焼土遺構は，１次調査において６基確認し，１～６号とした。１号焼土遺構は１次調査区西端の尾根上，Ｓ22グリッド，ＬⅥで検出した。標高は487.30m前後である。周囲には３～５号竪穴や土坑群が存在し，これらの遺構群とは有機的な関連が想定される。よって周囲の遺構群の年代観から，本焼土遺構は縄文時代早期末葉のものである可能性が高い。また，周囲に位置する３基の竪穴から炉跡は検出されていない。

２～４号焼土は１次調査区の中央部Ｗ・Ｘ24・25グリッドに位置する。検出面はＬⅣであり，いずれも花崗岩露頭集中範囲の縁に存在し，花崗岩塊に隣接する位置にある。標高は481.40～481.70mの地点である。本焼土遺構群の機能年代は検出面がＬⅣであること，下層から縄文時代早期前葉～中葉の遺構群が検出されることから，縄文時代早期後葉～末葉に属するものであろう。９号住居跡は近接し，検出面もＬⅣであるが，同内容の10号住居跡と共に床面に２基の炉跡が確認される。

５号焼土遺構の位置はＶ26グリッド，検出面はＬⅤ，６号焼土遺構の位置はＹ23グリッド，検出面はＬⅥである。周囲は花崗岩露頭が集中する範囲であり，５・６号焼土遺構共にその花崗岩塊の間隙で確認された。周囲に存在する花崗岩は自然礫であり，加工痕などは確認されない。５号焼土遺構は花崗岩間の間隙一杯に広がっており，周囲の岩石を利用して使用されたものであろうか。両者とも検出面から本遺跡では最古期の遺構と判断され，機能年代は周囲の遺構の年代観から縄文時代早期前葉に比定される。（横須賀）

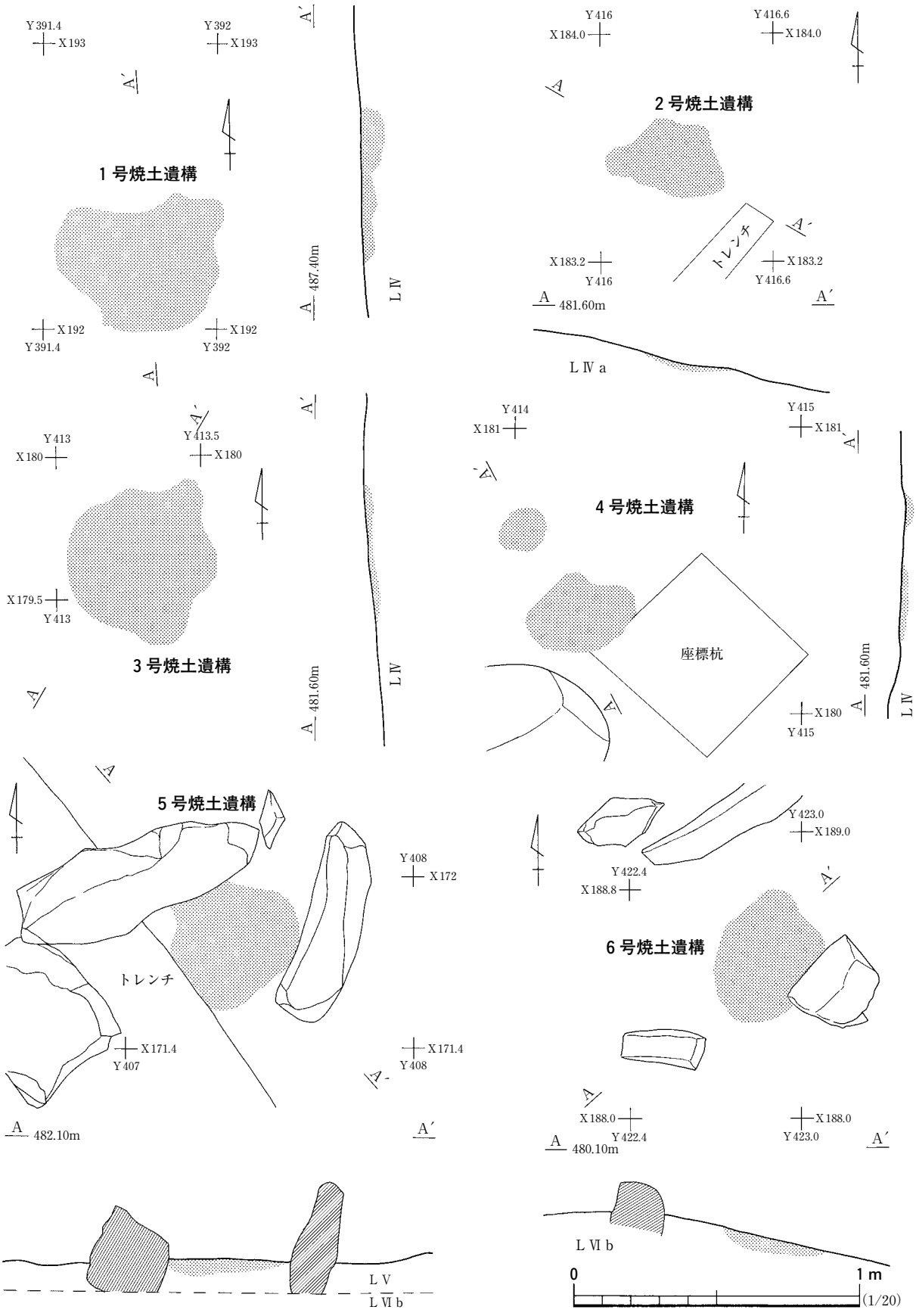


図117　１～６号屋外焼土遺構

土器埋設遺構　ＳＭ（図118，図版119・120・141）

土器埋設遺構は，１次調査において２基確認し，１・２号とした。両遺構はＺ26・27グリッドに位置し，検出面はＬⅤである。また両遺構は２号建物跡の範囲内に存在する。いずれも木根下，その細根に絡まった状態で検出した。そのため埋設状況を含めた詳細な記録はとりえず，２号土器埋設遺構については検出状態の立面図のみを掲載している。

埋設された土器については，１・２がそれぞれ１・２号土器埋設遺構のものに対応する。１・２とも大型の深鉢であり，口径はそれぞれ41㎝・33㎝を測る。口縁部は１が内湾し，２は内湾したのち直立する。両者とも底部を欠いており，欠損状態及び出土状況から故意に底部を欠いて使用したものと考えられる。１・２とも外面には網目状撚糸文が施文され，１は口縁部端にまで及ぶ。両者の外面，２の内面下端には煤の付着が顕著に認められる。１の内面上半部はナデによる丁寧な調整がなされるが，下半の調整は雑であり，胎土中の砂礫が表面に露出する。２は内外面とも丁寧なナデで調整される。器厚は７～９㎜と比較的薄手につくられている。

埋設土器は縄文時代晩期中葉大洞Ｃ２式期のものであり，２号建物跡の年代観と併行する。よって本埋設遺構は建物跡に伴い，両者には何らかの性格的な関連性が想定される。　（横須賀）

ピット群　Ｐ（図119～121，図版121・145）

建物跡に帰属させ得なかったピットについて，ここで報告する。総数21個を数え，すべて１次調査区東部の丘陵裾部に存在する。帰属年代については，ピットの形状や検出範囲から多くの掘立柱建物跡同様縄文時代晩期中葉と考えられる。以下特徴的なものについてのみ述べる。ピットの番号は，グリッド毎にＰ１・２・３…と付し，グリッド名との組み合わせで呼称する。

Ｚ29Ｐ１・Ｐ３は斜位に掘り込まれる。Ｐ１は検出面から70㎝の深さに達し，柱痕も確認された。柱痕径は８㎝を測る。両者の間隔は約３ｍ，傾斜の方向は異なっている。Ｚ30Ｐ１・２の柱間寸法は約2.4ｍであり，南東側に対応するピットが存在し，建物跡として成立する可能性も考えておきたい。ＡＡ28Ｐ１・Ｐ２の柱間寸法は約1.6ｍ，ＡＡ25Ｐ１とＡＡ26Ｐ１の柱間寸法は約2.1ｍであり，それぞれ建物跡の可能性を考慮して周辺を精査したが，対応する柱穴は検出されていない。

ＡＡ26Ｐ２は４号建物跡Ｐ３と重複し，これを壊している。本ピットにおける掘形埋土からは石冠が立った状態で検出され，故意に埋めたものと判断される。図122－１がその石冠である。石材は白雲母片岩を用いており，上部は裁頭円錐状に下部は一部を欠損するが直方体の台状に作られる。表面は全面丁寧に研磨される。上部には４条の切込みが入れられている。　（横須賀）

道跡　ＳＦ（図122，図版116）

道跡は，２次調査区西部，Ｇ14・Ｅ～Ｇ15・Ｅ16グリッドで１条検出している。これを１号道跡（ＳＦ01）とした。検出面はＬⅥ上面である。ここは南東側に延びる尾根が，谷によって北東側に開

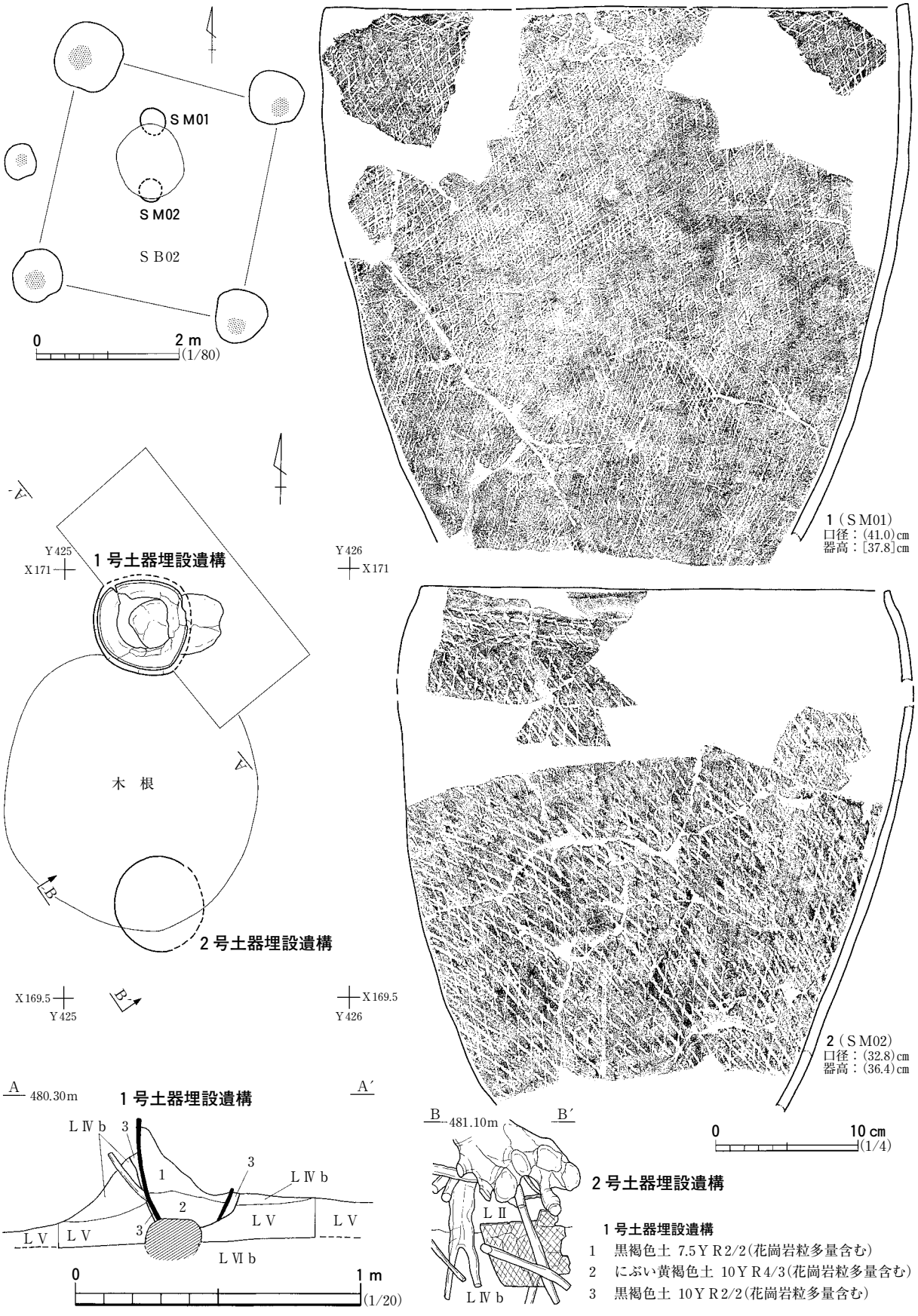


図118　１・２号土器埋設遺構

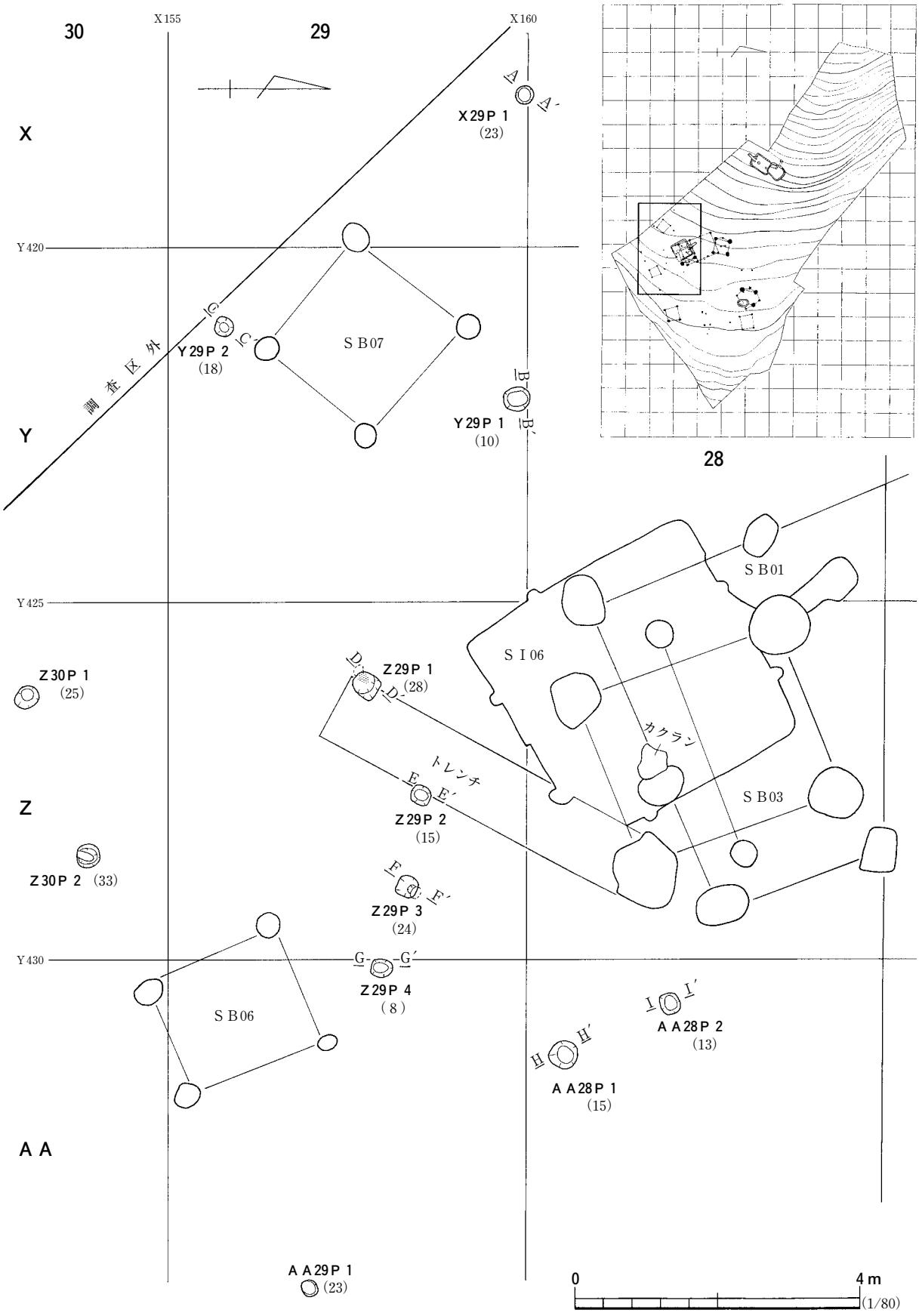

30
29
28
X155
X160
X
Y
Y420
Y425
Y430
Z
AA
調査区外
X29P 1
(23)
Y29P 2
(18)
Y29P 1
(10)
SB07
SB01
SI06
SB03
SB06
カクラン
トレンチ
Z29P 1
(28)
Z29P 2
(15)
Z29P 3
(24)
Z29P 4
(8)
Z30P 1
(25)
Z30P 2 (33)
AA28P 2
(13)
AA28P 1
(15)
AA29P 1
(23)
A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
E
E′
F
F′
G
G′
H
H′
I
I′
0
4m
(1/80)

図119　ピット群（１）

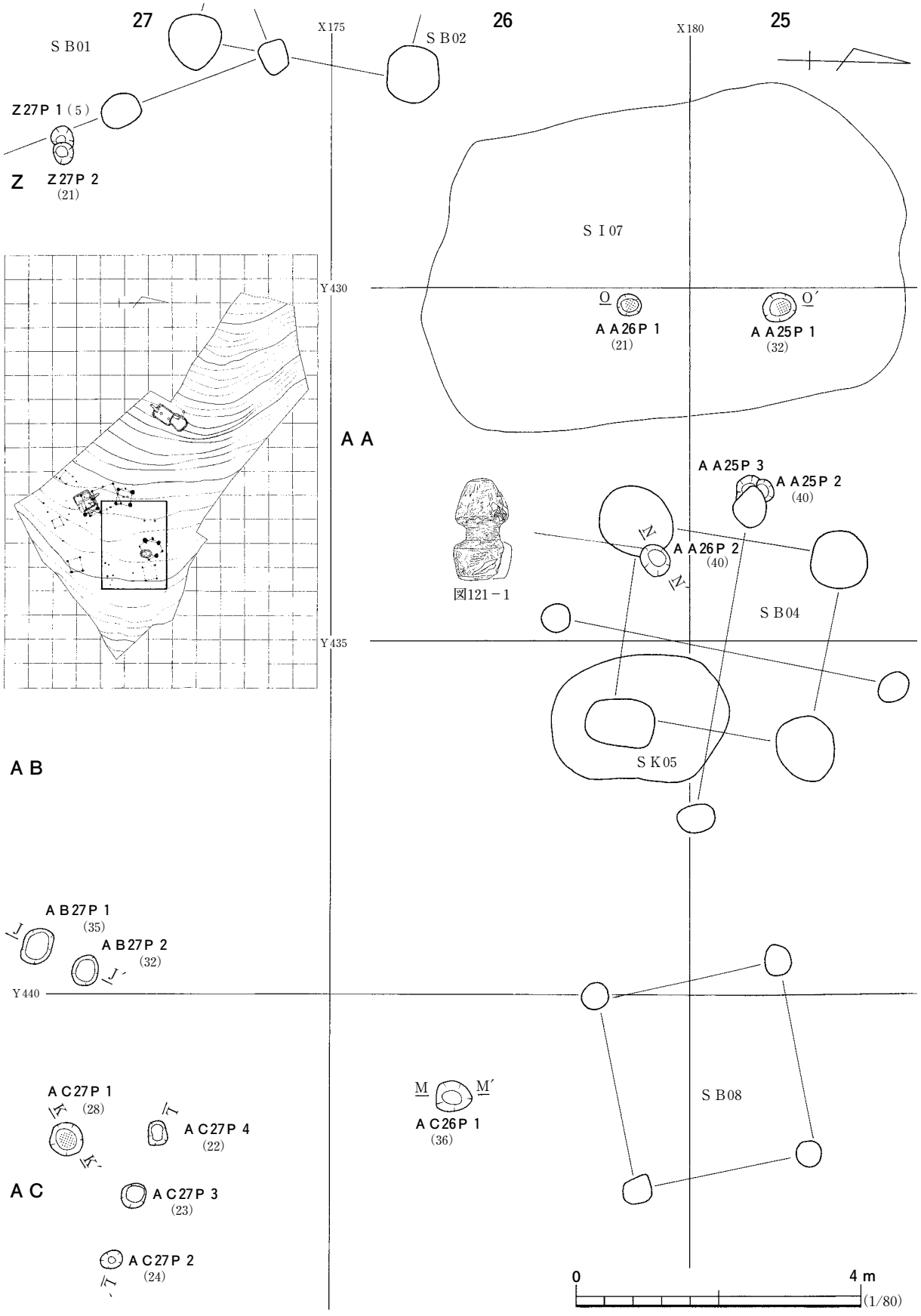
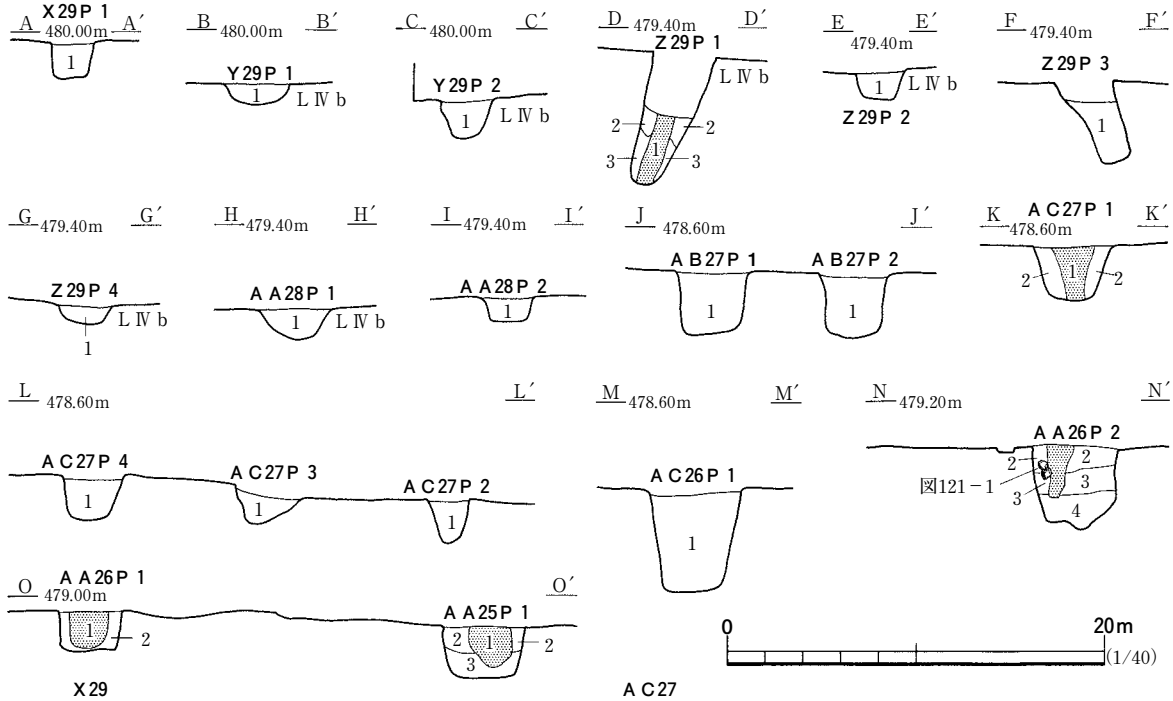

27
26
25
X175
X180
S B01
S B02
Z 27P 1 (5)
Z
Z 27P 2
(21)
S I 07
Y430
O
A A26P 1
(21)
O′
A A25P 1
(32)
A A
A A25P 3
A A25P 2
(40)
A A26P 2
(40)
図121－1
S B04
Y435
S K05
A B
A B27P 1
(35)
A B27P 2
(32)
Y440
A C27P 1
(28)
A C27P 4
(22)
A C
A C27P 3
(23)
A C27P 2
(24)
M
M′
A C26P 1
(36)
S B08
0
4 m
(1/80)

図120　ピット群（２）



X29

P 1　1　黒褐色土 10ＹＲ2/2(黄褐色土との混土)

Y29

P 1　1　黒褐色土 10ＹＲ2/3(黄褐色土との混土)
P 2　1　黒褐色土 10ＹＲ2/3(黄褐色土との混土)

Z29

P 1　1　黒褐色土 10ＹＲ2/2
　　2　黒褐色土 10ＹＲ3/3(黄褐色土との混土)
　　3　黒褐色土 10ＹＲ2/3(黄褐色土との混土)
P 2　1　黒褐色土 10ＹＲ3/2(黄褐色土との混土)
P 3　1　暗褐色土 10ＹＲ3/3(黒褐色土との混土)
P 4　1　黒褐色土 10ＹＲ3/2(黄褐色土との混土)

AA28

P 1　1　黒褐色土 10ＹＲ2/2(黄褐色土少量との混土)
P 2　1　黒褐色土 10ＹＲ2/2(炭化物極少量含む)

AB27

P 1　1　黒褐色土 10ＹＲ2/3(黄褐色土との混土)
P 2　1　黒褐色土 10ＹＲ2/3(黄褐色土との混土)

AC27

P 1　1　黒褐色土 10ＹＲ2/2
　　2　暗褐色土 10ＹＲ2/3(黄褐色土多量との混土)
P 2　1　黒褐色土 10ＹＲ2/3(黄褐色土との混土)
P 3　1　黒褐色土 10ＹＲ2/3(黄褐色土との混土)
P 4　1　黒褐色土 10ＹＲ2/3(黄褐色土との混土)

AA26

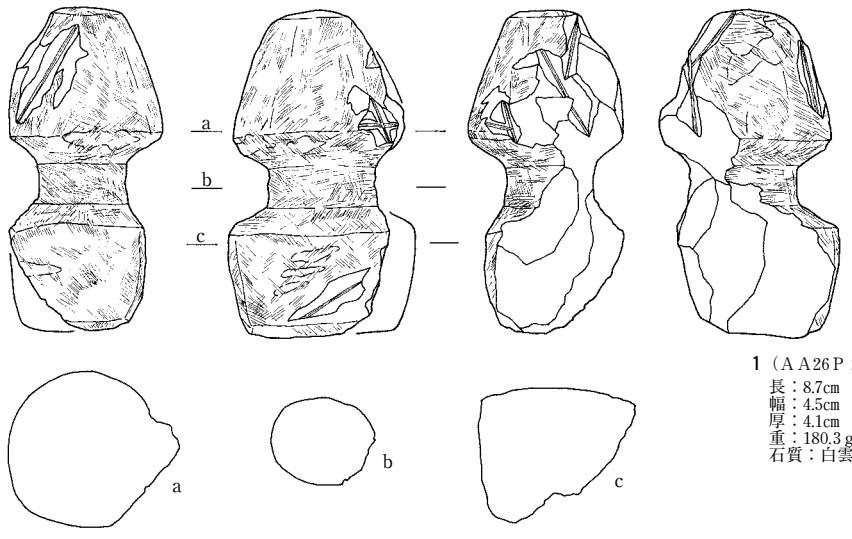
P 1　1　暗褐色土 10ＹＲ3/4
　　2　暗褐色土 10ＹＲ4/4(黒褐色土少量との混土)
P 2　1　黒褐色土 10ＹＲ4/4(しまり弱)
　　2　黒褐色土 10ＹＲ2/3(褐色土少量との混土，しまり強)
　　3　黒褐色土 10ＹＲ2/3(暗褐色土との混土，しまり強)
　　4　暗褐色土 10ＹＲ3/4(褐色土少量との混土，しまり強)

AC26

P 1　1　黒褐色土 10ＹＲ2/3(黄褐色土との混土)

AA25

P 1　1　暗褐色土 10ＹＲ3/4
　　2　暗褐色土 10ＹＲ3/4(黒褐色土との混土)
　　3　褐色砂質土 10ＹＲ4/4(黒褐色土との混土)



1（ＡＡ26Ｐ２　ℓ２）
長：8.7cm
幅：4.5cm
厚：4.1cm
重：180.3ｇ
石質：白雲母片岩

0 5cm
(1/2)

図121　ピット群（３）・出土遺物

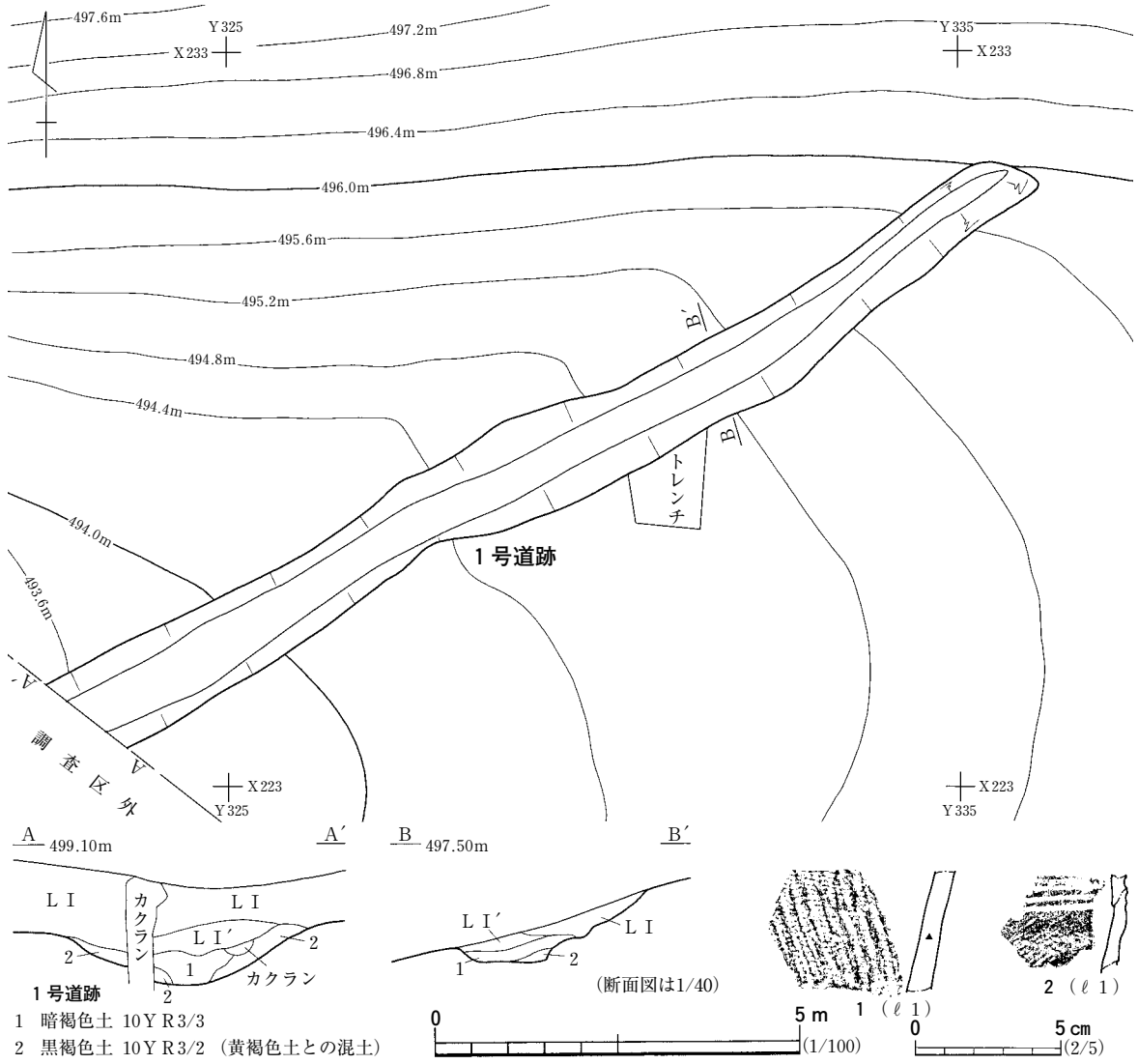


図122　１号道跡・出土遺物

析されている場所である。谷には急傾斜のためか遺構はなく，縄文時代早期末葉～前期中葉の遺物包含層が形成されていた。

道跡はほぼ北東方向に伸びている。南西側はさらに調査区外にも伸びている。それは地表においても凹地として容易に観察できる。調査区内における全長は15m，幅は0.8～1.4mで北東側に向うほど幅が狭くなってゆく。検出面からの深さは0.16～0.4mである。堆積土は暗褐色土と黒褐色土の２層に区分したが，どちらも砂質土層ではない。また，遺構内には表土ＬＩも堆積していた。

本遺構からは縄文土器７点，炭化物１点が出土した。出土遺物の大半は細片で，図示できたのは２点のみである。１は縄文時代早期のもので胎土に繊維が含まれ，縦走縄文が施されている。２は縄文時代晩期のもので器厚が薄く，羊歯状文の一部が確認できる。

本遺構は堆積土の状況から，水が流れていた痕跡が認められない。これにより，道跡と判断した。時期については明確ではないが，遺構内に表土が堆積していることを考えると近世以降の可能性が高い。　（吉野）

第５節　遺物包含層

概　　要

ここで言う遺物包含層は，調査区内の標準堆積土であるＬⅡ～Ⅳを指す。本編第１章第３節で述べたように，ＬⅡ～Ⅳはいずれかが調査区の各所に堆積しており，多少の濃淡はあるものの，遺物の確認できない箇所は少ない。すなわち調査区のほぼ全域が遺物包含層の範囲といえる。故にＬⅠや攪乱から出土したものについても元々遺物包含層に含まれていたものと考えられ，遺構外出土遺物として区分すると記述が煩雑になることなども含めて，住居跡など遺構の掘込外から出土した遺物については，すべて本節で扱うこととする。

調査区内の堆積状況を再度述べると，調査区西部から中央部の尾根上の堆積層は薄く，ＬⅡ・Ⅲが50㎝程度堆積するだけである。尾根の縁から斜面中腹にはＬⅣａがこれに加わり，裾部にはＬⅣｂが加わる。また，尾根から裾部に向かう緩斜面，Ｖ～Ｘ25～27グリッド付近にのみＬⅣ′がＬⅣａ・ｂ間に加わる。１次調査区の北向き斜面にはＬⅣｂ～ｄが加わる。２次調査区の北向き斜面および西部の谷にはＬⅣａ・ｂがこれに加わる。東端の旧河道中にのみＬⅣｅが確認できる。ただし，ＬⅣの細分については，調査の進捗過程で設定されたものであり，細分以前にＬⅣもしくはＬⅣ上部・下部として取り上げた遺物も多く，層位によって時期別の遺物数量データを示すのは難しい。

出土した遺物の数量は，２次調査での調査区東端部も含めた東半の１次調査区部分が縄文・弥生土器21,180点・土師器149点・須恵器５点・石器2,639点である。西半の２次調査区では縄文・弥生土器20,457点・土師器２点・須恵器２点・石器2,062点である。

層位別の縄文・弥生土器の点数は，１次調査部分でＬⅣが12，827点で１次調査時の６割を占め，ＬⅡが22%，ＬⅢが13%とこれに次ぐ。しかし，東端の裾部のみ見た場合にはＬⅡ出土遺物がＬⅣを逆転している。このＬⅡにはいわゆるＦＰ・ＦＡという古代に降下した榛名山起源の火山灰が検出される。遺構・遺物の状況をおおまかに見れば，裾部のＬⅡ～ＬⅣ上面で縄文時代晩期の遺構・遺物を検出する。ＬⅣａ・ＬⅣ′・ＬⅣｂの厚く堆積する緩斜面では縄文時代早期後葉～末葉の土器が多く出土し，同時期の遺構はＬⅣ′上面で確認できる。ＬⅣｂ～ｅおよびＬⅤは早期前葉～中葉の土器が出土し，ＬⅤ以下で同時期の遺構が検出できる。２次調査ではＬⅣａが10,894点で53%を占め，ＬⅢが20%，ＬⅡ～ＬⅢ上面が16%とこれに次ぐ。ＬⅣｂからの遺物の出土は1,362点で７%しかない。この部分では，縄文時代早期末葉～前期前半の土器が大部分を占めており，田戸上層式以前の遺物は皆無に等しい。また，ＬⅡ～ＬⅢ上面で縄文時代晩期・弥生時代前期の遺構・遺物を検出でき，縄文時代前期の遺構は26号住居跡のようにＬⅢ中位からぼんやりと確認できる。

上記のテフラ分析や遺物の出土状況・遺構の検出状況から，ＬⅡは古代以降の堆積層，ＬⅢは縄文時代前期前半以降の堆積層，ＬⅣａは縄文時代前期前半ぐらいまでの堆積層，ＬⅣ′・ＬⅣｂは早期後葉ぐらいまでの堆積，ＬⅣｃ以下は早期中葉以前の堆積層と一応想定している。

土　　器（図123～204，図版146～170）

土器の分類は，群は早期前葉・中葉・後葉…など大まかな時期に対応させた。時期的に併行するものでも系統が異なるものについては，別群に分類した。それより下位の類は，型式にほぼ対応させ，それ以下の種については型式内における文様の違いなどを示す。なお，縄文時代の６期区分については，撚糸文系土器から早期と見なす説に従っている。

Ⅰ群　早期前葉の撚糸文系土器（図123，図版148）

１類　細い縄を条間狭く巻いた原体を用いるものである。図123－１～43に示した。口縁部の違いからａ・ｂの２種に分けられる。口縁部はすべて平縁である。遺物包含層出土のものは細片のみで，それ以上，器形が分かるものはない。器壁の厚さは５～８㎜である。器面の調整は粗いナデのみで，ざらついた印象がある。胎土には石英・長石を含むが，雲母は認められない。13・14・17号住居跡から出土した撚糸文土器も本類に分類される。分布の状況は，この時期に当たる17号住居跡に近い，Ｖ～Ｙグリッドの丘陵裾へと至る緩斜面に多く分布し，尾根部にあたる２次調査区からは出土していない。出土層位はＬⅣでも下部，ＬⅣｂ～Ⅴを主体とする。出土量は多くない。

ａ種：口縁直下から撚糸文が縦走するものである。１～３・７～12がこれに該当する。口縁部は丸棒状で，直立する。11・12のように角頭状で内外に肥厚し，若干外反するものも認められる。

ｂ種：１類同様の原体を用い，口縁直下が無文帯となるものである。４～６・13がこれに該当する。口端部が丸く，若干肥厚しながら外反するような形状を成す。

14～43は上記２種に細分不能な体部破片である。これらの土器は，ａ種が夏島式～稲荷台式期，ｂ種が稲荷台式の古い段階に比定されよう。

２類　条間の広い原体を用いるものである。図123－44～67がこれにあたる。口縁部の形状は１類ｂ種同様で，施文の状況も似ている。66および67から底部は丸底となることが分かる。器壁の厚さは口縁部が５～６㎜で，体部下半で８～10㎜程度である。器面は１類に比して丁寧なナデが施され，外面に光沢を帯びる。胎土には１類同様石英・長石を含み，雲母を含むものも認められる。分布の状況は，調査区東半の１次調査区ＡＡ～ＡＥグリッドの丘陵裾部に多く，１類同様，２次調査区からは出土していない。出土層位はＬⅣでも下部のＬⅣｂ・ＬⅣｅを中心とするようである。出土量は多くない。本類土器は，口縁部に稲荷台式の特徴もあるが，条間の広い撚糸文ということで，同型式の新しい段階から後続する稲荷原式期に架かるものと考える。

Ⅱ群　早期前葉から中葉の押型文土器（図124，図版149）

すべて重層山形押型文を地文に平行線状押型文が認められる，日計型押型文土器である。１～７に示した口縁部は，地文上に平行線状押型文を施すものがほとんどである。中には斜沈線をその上から加えるもの（６・７）も認められる。14～38に示した体部は押型文間に横区画沈線を加え，多段

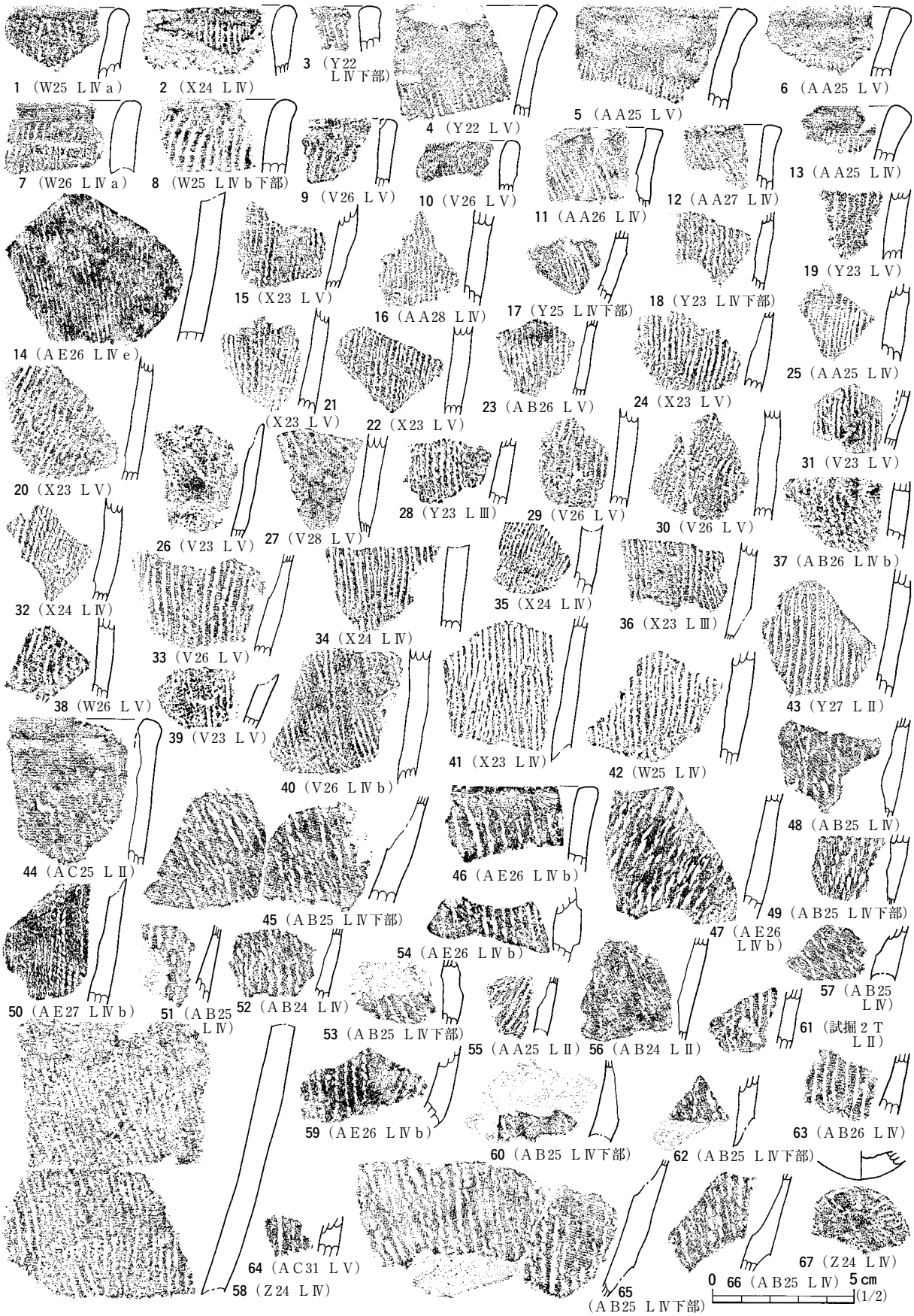


図123　遺物包含層出土土器（1）　Ⅰ群土器

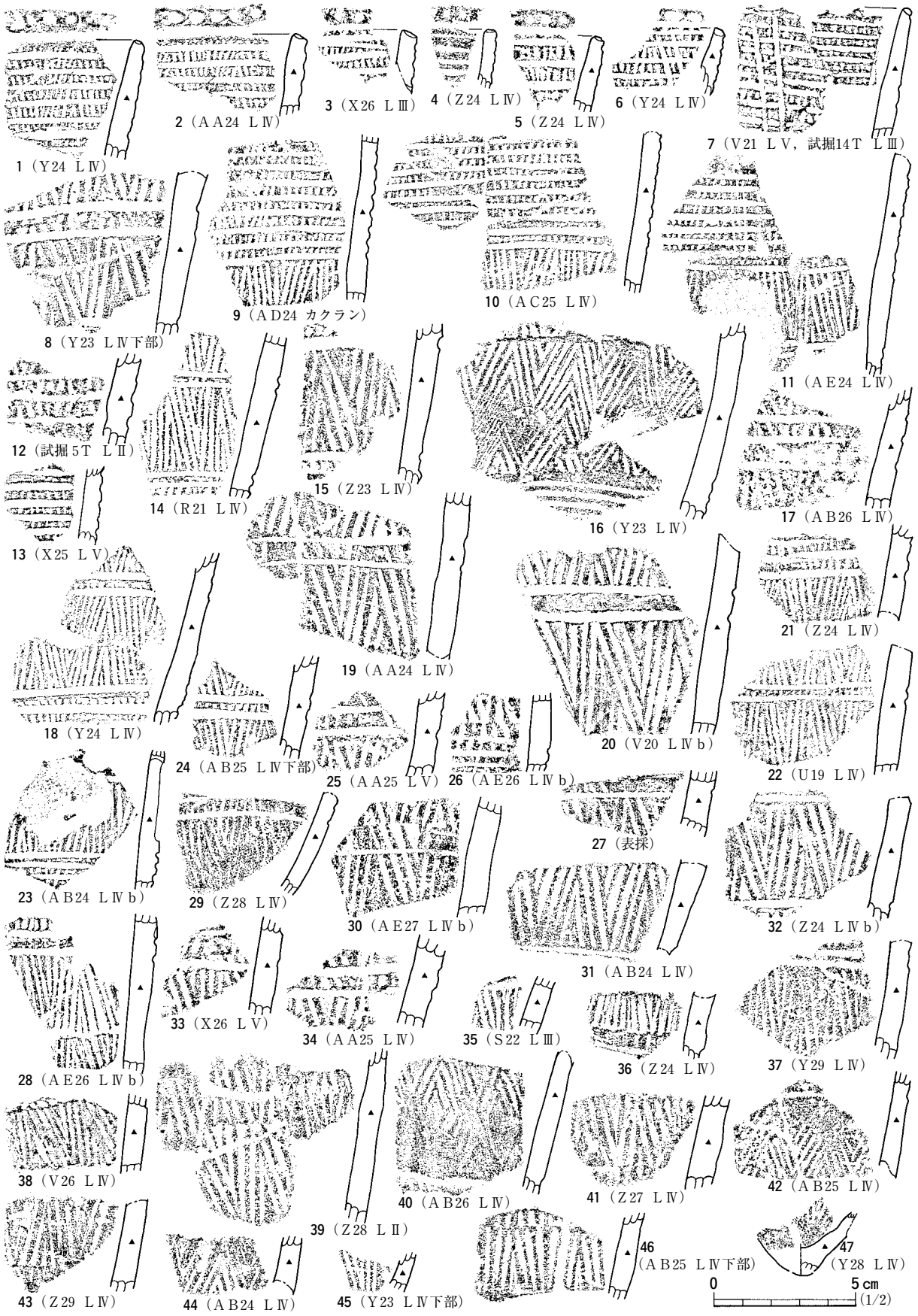


図124　遺物包含層出土土器（２）　Ⅱ群土器

構成をとる。38～46は押型文のみ認められる体部破片である。重層山形押型文が多いが，40のように重層菱形押型文となるものも認められる。口縁部は外傾し，若干内湾するものも見られる。口端部の形状は，丸棒状もしくは尖頭状になり，棒状工具を押しつけたスリットが入る。底部については，47の尖底のみ認められる。器壁の厚さは口縁部で４～５㎜，体部で６～９㎜程度である。胎土については，ほぼ全てが繊維を含んでいる。また，石英・長石など砂粒は含むが，雲母は認められない。

これらの土器は，Ⅰ群土器同様，１次調査区の丘陵裾部を主に分布し，２次調査区を含めた尾根からも若干出土している。出土層位は，ＬⅣ下部・ＬⅣｂ・ＬⅤとⅠ群土器と同様である。出土量は多くない。

Ⅲ群　早期前葉から中葉にかけての無文土器（図125・126，図版150）

１類　薄手の無文土器である。図125－１～21に示した。口縁部は平縁で，外反し，端部が肥厚する。底部は19のような平底と17・18・20・21のように尖底となるものの２種が認められる。平底については，底面外縁が若干外側に張り出すような形状である。器壁の厚さは４～５㎜で，体部下端でも６㎜程度である。器壁については割と均一に成形されている。積み上げ痕で剥がれているものが多いのも特徴といえる。胎土には，石英，細砂などを含み，金雲母も若干確認できる。

調整はナデを基本としている。外面は丁寧にナデられ，平滑であるが，内面の調整は粗雑でざらつくものが多い。外面のナデの痕跡は明瞭には残っていないが，口縁部片では３に口縁部上端に横方向のナデ，体部片には17のように縦方向にヘラ状工具によるナデの跡が残る物もある。２・20は外面に指頭痕がのこる。４はここに分類した中では特殊で，櫛歯状工具による条痕が外面に認められ，体部に膨らみを持つようである。

これら以外に，13・14・17号住居跡から出土した無文土器も本類に分類される。分布状況は，これらの住居跡周辺の調査区東部，Ｕ～ＡＤグリッドの尾根から続く緩斜面から裾部に多く分布する。出土層位はＬⅣ下部としたＬⅣｂ，ＬⅤが中心となり，Ⅰ・Ⅱ群と共通する。出土量は多くない。

２類　１類よりも厚手の無文土器で，口縁部が直立もしくはやや外傾し，端部が丸棒状となるものである。図125－24～26・31がこれに該当する。いずれも口縁部破片で平縁のみ認められる。器壁の厚さは６～８㎜程度である。胎土には細砂を含む。内外面とも丁寧にナデ調整され，平滑に仕上げられる。出土量は僅かである。

３類　口縁部が外半し，端部が丸く肥厚するか，肥厚した上端に平坦面が形作られ外削ぎの三角形を呈するものである。図125－27～30・33・35・36・39がこれに該当する。いずれも口縁部破片で平縁のみ認められる。器壁の厚さは７～10㎜で２類よりも厚めである。胎土には，石英・長石・砂粒などを含む。口縁部上端に横方向のミガキ，体部内外面にもミガキが加えられ，光沢を帯びた器面となる。出土量は僅かである。

４類　外面に擦痕の認められる無文土器である。図125－22・23・32・34・37・38・40～44・図126

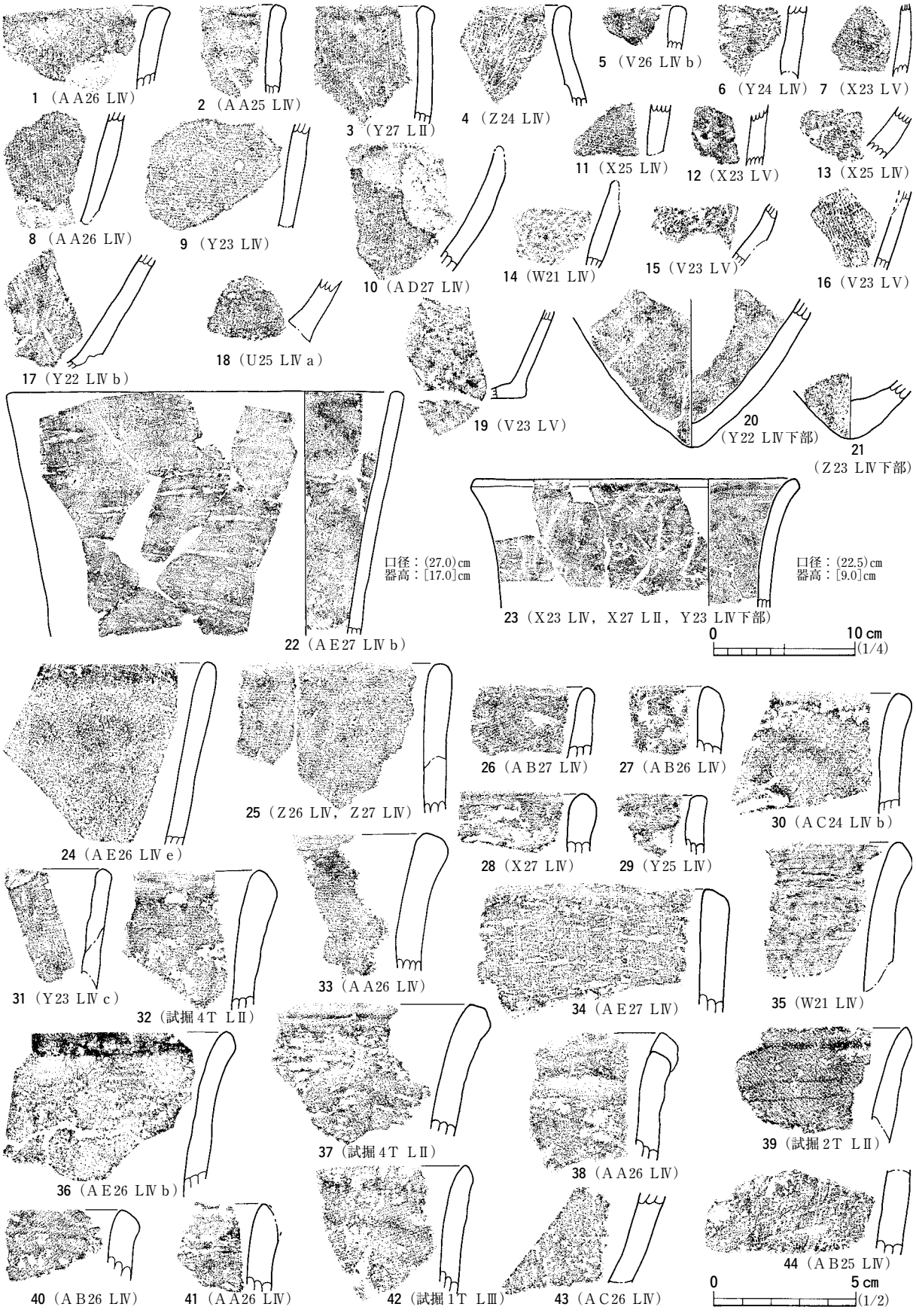


図125　遺物包含層出土土器（３）　Ⅲ群土器

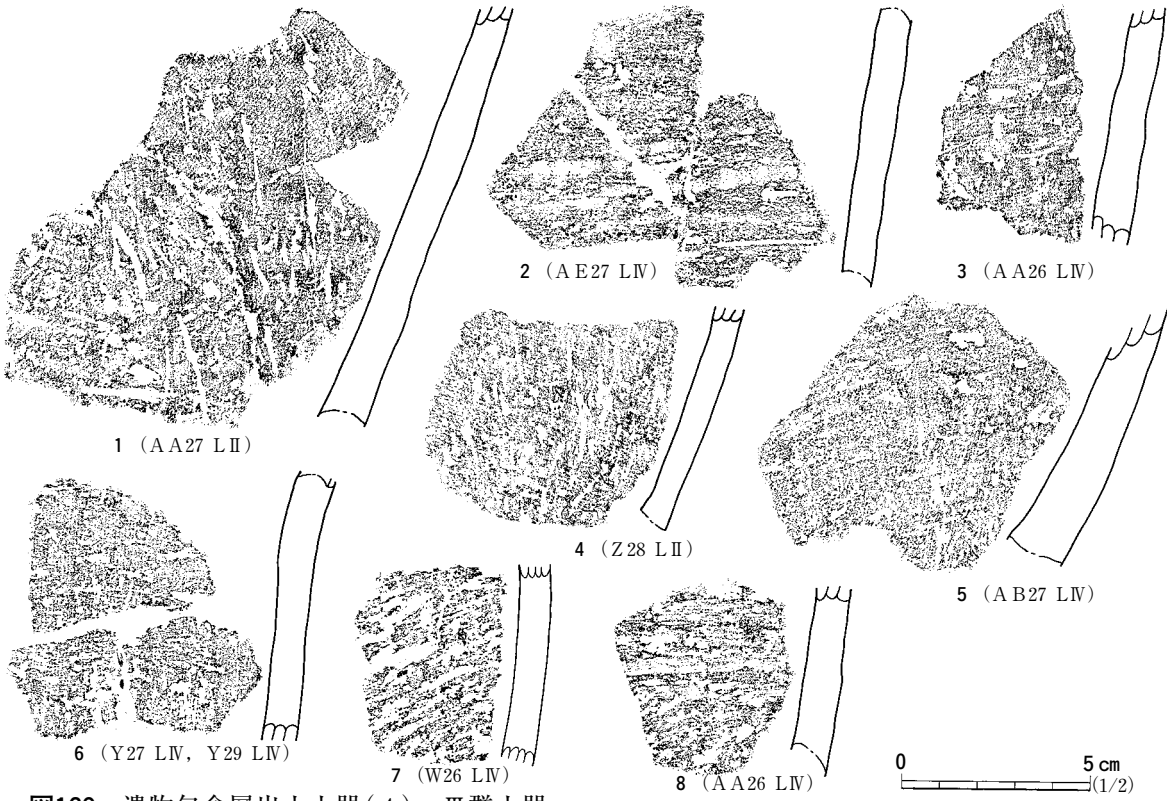


図126　遺物包含層出土土器（４）　Ⅲ群土器

－１～８に示した。図125－22のように口端部を角頭状とし直線的に外傾するものと，同図23のように口縁部上端が強く外半し，肥厚した端部上端に平坦面が形成されるものがある。口縁部には平縁しか認められないが，同図38のように歪んで若干の凹凸を持つものも認められる。器壁の厚さは，７～10㎜程度である。胎土に大粒の石英・長石・砂粒を含み，この器面を口縁部は斜めもしくは横方向，体部は縦方向にケズリ調整したことによって砂粒が移動し，擦痕が残される。内面は口縁部上端からミガキもしくは丁寧なナデが施され，平滑である。出土量は少ない。

これらの２～４類は，調査区東部，１次調査区のＷ～ＡＥグリッドにあたる丘陵裾部から沢部にかけての部分から大部分が出土している。出土層位はＬⅣでも下部のＬⅣｂ・ｅが主体となるようである。

Ⅳ群　早期中葉の貝殻沈線文系土器（図127～129，図版151）

１類　三戸式に比定できるものである。図127－１～21・28に示した。出土量は僅かである。東半の１次調査区Ｕ～ＡＤグリッドにわたる部分から出土している。出土層位はＬⅣを中心としておりＬⅣｄなどＬⅣでも下部からの出土が認められる。

ａ種：横方向に太い沈線が多条めぐるものである。図127－１～16がこれにあたる。口縁部は外傾しながら立ち上がり，端部は角頭状に整形される。１～４は沈線施文前に外面にケズリを施しており，砂粒の移動した擦痕が明瞭に確認できる。内面はミガキで平滑である。それ以外の外面はナデ調整のみである。内面はケズリのあるものと同様に平滑である。沈線は12のように横向きの「Ｕ」字状

に折り返すものや，16のように途中で区切られるものも認められる。器壁の厚さは７～10㎜程度である。胎土にはいずれも大粒の石英・長石・砂粒を含む。

ｂ種：口縁部に横線を施し，その下位の文様帯に帯状格子目文を施すものである。図127－17・28のみ確認できた。17は口端部が尖頭状となり，そこにスリットが加えられる。28は口縁部の横線文帯のみ確認できる。口端部は内削ぎとなる。器壁の厚さはそれぞれ７㎜・５㎜で，胎土には石英などを含む。

ｃ種：半截竹管状工具による押引きと平行沈線を多段に施すものである。図127－18～21に示した。いずれも同一個体の可能性がある。口端部は内削ぎ状となり，外面に刻みが加えられる。胎土には石英など細砂を含む。器壁の厚さは６㎜である。

２類　田戸下層式に比定できるものである。図127－22～27・29～33に示した。数量的には僅かであるが，15号住居跡倒木痕出土の図45－２もこれにあたる。これも１類同様，１時調査区Ｕ～ＡＥグリッドからのみ出土する。出土層位はＬⅣｃなどＬⅣの下部が多く見られる。22・23・27は口縁直下が無文となり，文様帯との間に区画線が入る。27に斜めに入る線はガジリである。25・26・29は平行沈線の直線を用いて文様を描く。24・30は斜位の沈線が認められる体部である。31は平行沈線に左方向からの斜位の刺突が沿わされる。32は平行沈線が多重に横に巡る。33は体部下半の破片で太い沈線が多重に横に巡る。

３類　田戸上層式に比定できるものである。図128・129に示した。全体に比しての数量は少ないが，田戸下層式までの土器に比べれば多い。沈線による直線・曲線で文様を描くが，小片ばかりで，接合個体も少ないため全体のモチーフが窺えるものはない。器面は丁寧にナデ調整され，平滑なものが多い。器壁の厚さは６～８㎜程度で，胎土には細砂・金雲母などが認められる。１次調査区Ｘ～ＡＥグリッドの丘陵裾部から出土する。層位は，ＬⅣでもＬⅣｂ以下の下部から出土し，旧流路のＬⅣｅからの出土も認められる。

ａ種：単沈線によって直曲文様を描くものである。図128－１・２・４～11・17・図129－７～９・18～20が該当する。図128－２・10のように山形文を描くもの，図129に示したもののように曲線による区画内に貝殻腹縁圧痕を充填するものなども見られる。20にはボタン状の貼付文も認められる。口端部に刻みを持つが，内側に刻みを付すものは少ない。

ｂ種：平行沈線によって文様を描くものである。図128－３・12～16がこれにあたる。

ｃ種：貝殻を沿わせた沈線文によって文様を描くものである。図128－18～48・図129－１～６がこれにあたる。図128－18～30は単沈線に貝殻腹縁圧痕を沿わせる。口縁部は波状となり，口縁部上端には外側に刻み付のボタン状貼付文，内側には刻みを施されるものが多い。24には渦巻状の曲線文様が認められる。図128－31～図129－６は平行沈線間に貝殻腹縁圧痕を沿わせ，これによって曲線・波線を描く。31・34・35のように円形竹管刺突を口縁部上端上の突起下に縦に並べるものも認められる。口端部の刻みは内側に施される。

ｄ種：貝殻文で文様を描くものである。図129－10～12・16・17に示した。10・11は波状口縁で，波

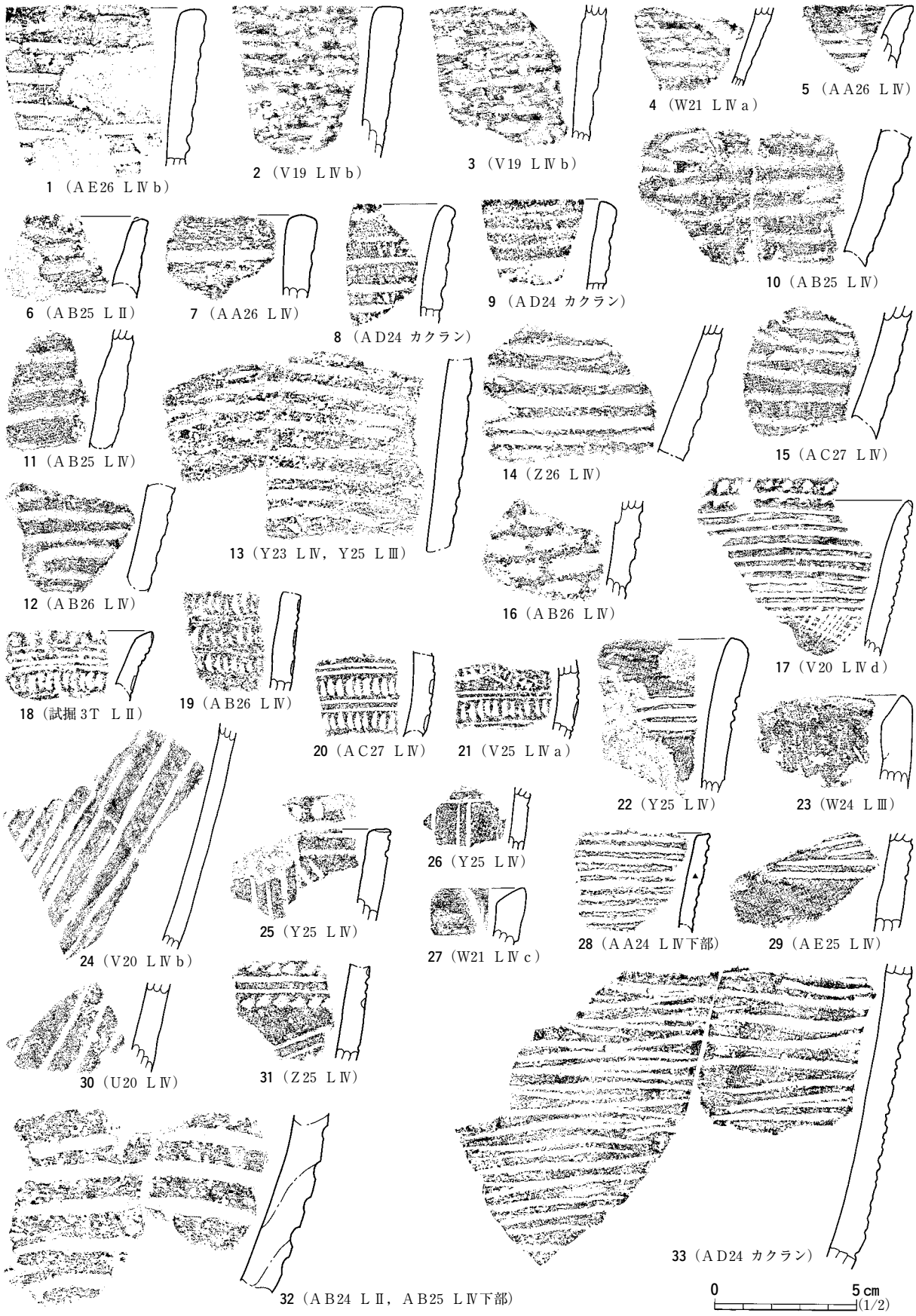


図127　遺物包含層出土土器（5）　Ⅳ群土器

図128　遺物包含層出土土器（６）　Ⅳ群土器

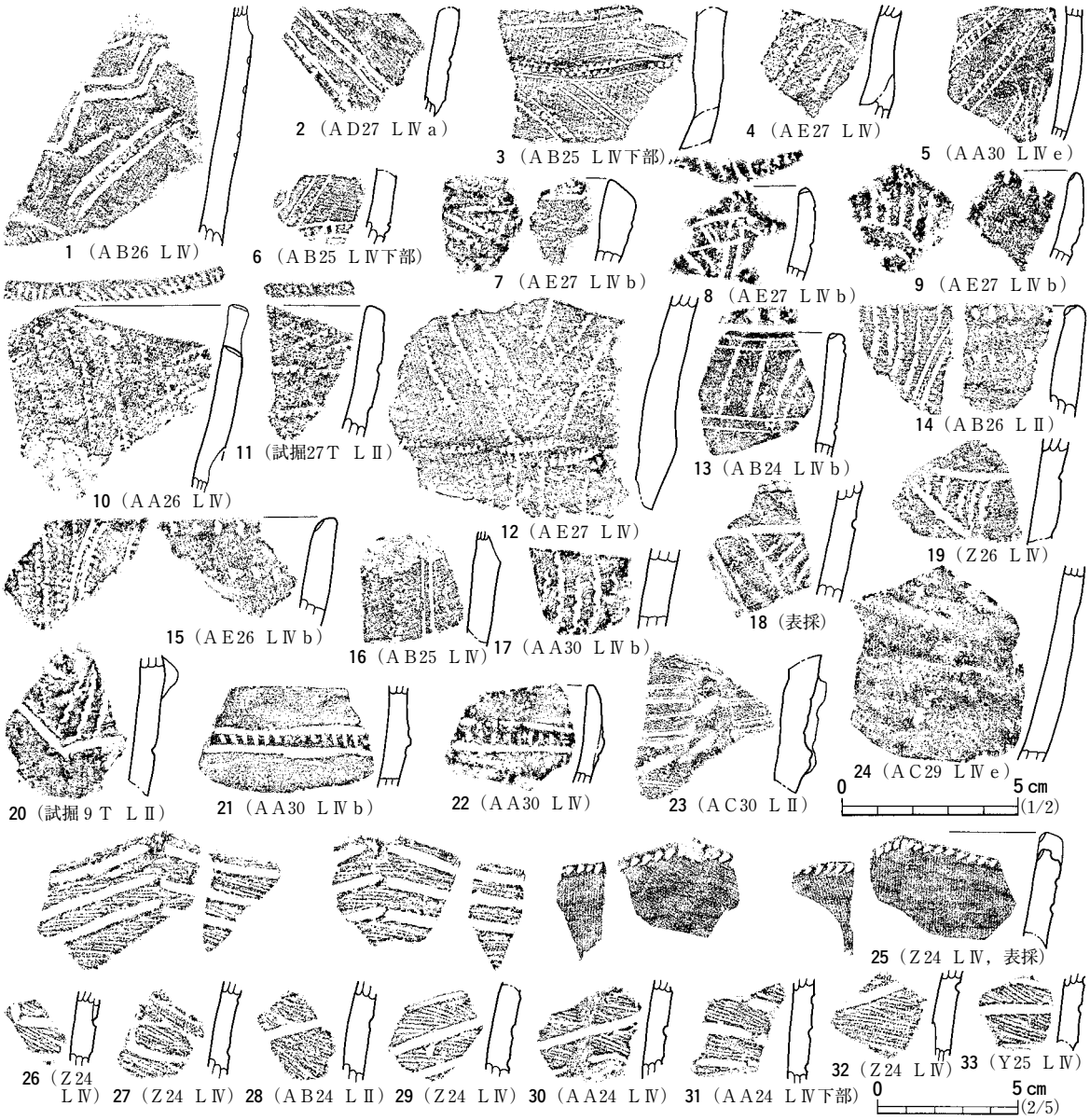


図129　遺物包含層出土土器（7）　Ⅳ群土器

頂部下に縦位，その外側に斜方向の腹縁圧痕が認められる。12は体部に横方向の圧痕付の隆起帯を持ち，上部に重層山形状下部に縦位の腹縁圧痕が施される。

e種：図129－13～15は口縁部から縦方向に貝殻腹縁圧痕を施す。14・15は同一個体と思われ，内面には2条刺突列が巡る。本種については常世1式の可能性がある。

f種：図129－25～33は同一個体で，条痕地文に単沈線を多段に横走させる。口縁部は波状口縁で，口端部上も沈線が巡り，内側には刺突が加えられる。これらについてはⅤ群の可能性もある。

g種：その他のもので，図129－21～24である。21・22は両側に沈線を沿わせた刻み付の隆線を一巡させる。23は縦位・横位の刻み付の隆帯が付され，横位の平行沈線が施されている。24は無文の体部破片である。

Ｖ群　早期中葉から後葉にかけての土器。常世１式から子母口式に併行するもの

（図130～142，図版152・153）

１類　外面地文が無文のものである。図130～138に示した。

ａ種：文様要素が沈線文のみである。図130に示した。器壁は５～８㎜で，胎土に石英粒・金雲母などを含むが，繊維はほとんどない。外面は丁寧なナデ，内面は粗雑なナデ調整が多く，条痕も認められる。

ａ１種：平行沈線で連弧・鋸歯状のモチーフを描く。波状口縁・文様の頂部(弧の連結部・山形の頂部)に縦位区画線を入れるものが多い。図130－１～６・15～19である。口縁は波状が多く，口端部には器面に平行な押引き状の刺突が入る。その他に３のように波頂部に突起が貼り付けられるものや，１のように小突起が付き，器面に対して垂直方向に棒状工具を押しつけて小波状にするものなども見られる。18・19に関しては，くびれを持ち，有段の器形となるようである。

ａ２種：縦区画が無く多段構成を取る。図130－７～14である。文様は半截竹管状工具による平行沈線で描く。口縁部は波状で，端部には竹管もしくはヘラ状工具による器面に平行な連続刺突が入る。同一個体である11・13のように器面に対して垂直方向に半截竹管を強く押しつけて，小波状としたものも認められる。

ａ３種：複数の波状文と直線文の組み合わせを縦横斜めに配するものである。図130－20～33である。工具は半截竹管の束もしくは櫛歯状工具と思われる。口縁部は20～22のような平縁と26の波状の２種がある。26の口端部には平行沈線状の刻みが施される。文様は，横位多段の構成をとるもの，26・27のように波頂部付近に波状文を３本含む沈線文帯を縦区画として加えるもの，32のように鋸歯状に配するものがある。外面は丁寧なナデが施され平滑だが，内面には粗いナデもしくは条痕が確認される。

ｂ種：文様要素が半截竹管・櫛歯状工具の押引き文・連続刺突文であるもの。図131～133に示した。器壁・胎土その他の特徴はａ種と同様である。

ｂ１種：連弧・鋸歯状のモチーフを持つもので，ａ１種の文様を置換したものと思える。図131－２～４・11，図132－14～18である。図131－２～４・11が半截竹管，図132－14～18は半截竹管を櫛状に束ねたものを施文具としている。

ｂ２種：多段構成をとるもので，ａ２種の沈線を置換したものと理解される。図131－１・５～43・図132－１～11・13・19～27がこれにあたる。口縁部は平縁と波状縁が認められる。口縁部上端が外反するものが多く，図132－１・13のように複合口縁状となるものもある。口端部の上面には刺突が施される。口端部刺突の多くは施文と同じ工具の押引きないし連続刺突であるが，図131－１・図132－４のような円形竹管刺突，図131－６・図132－９は絡条体圧痕，図131－29・40・42・図132－13など端部内側への刻みも認められる。器壁よりも工具幅の方が広く，強く器面に押しつけているため小波状となるものも認められる。押引きは右斜め上から刺突し，左から右へと進んでいくものが大

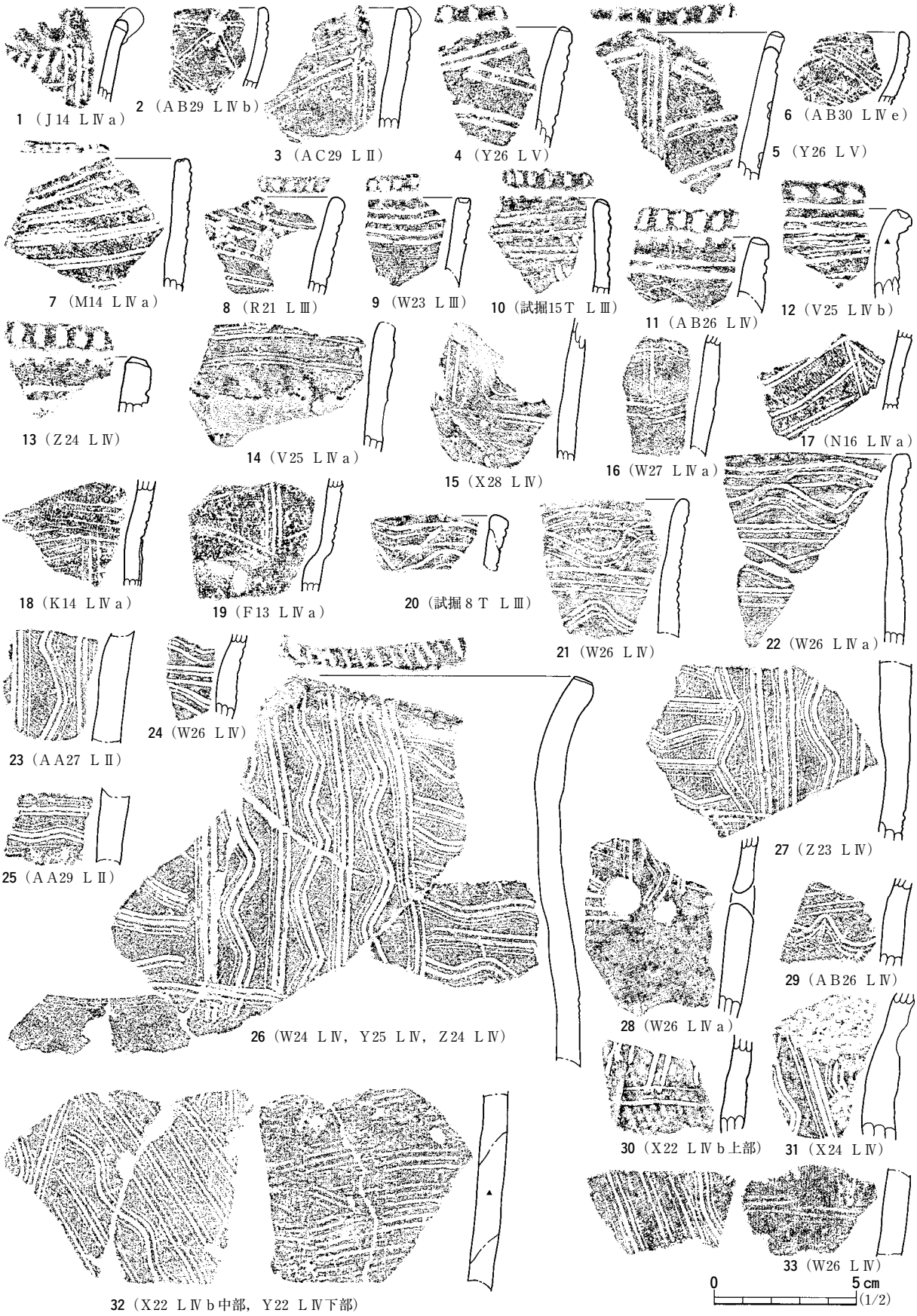


図130　遺物包含層出土土器（8）　Ⅴ群土器

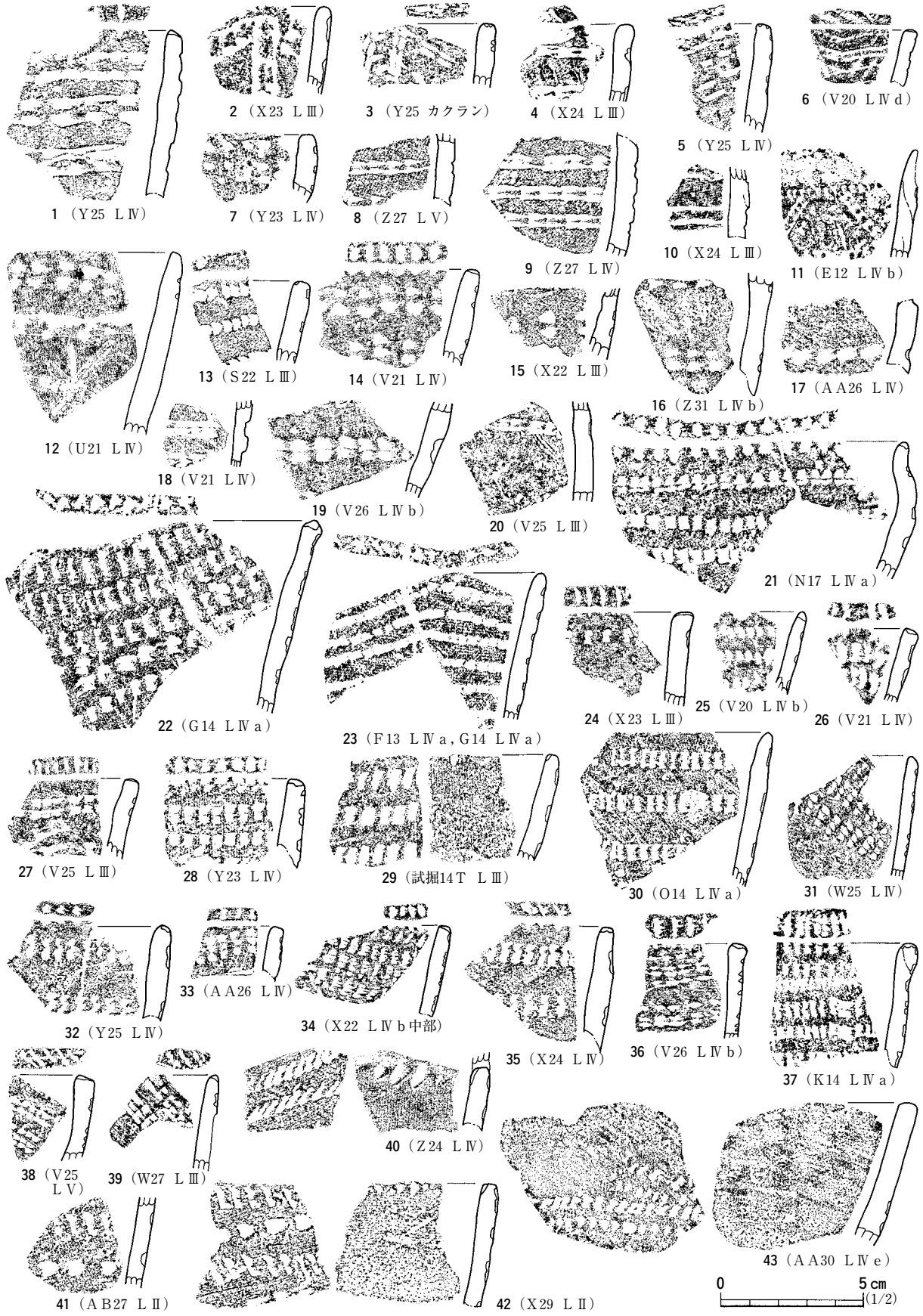


図131　遺物包含層出土土器（９）　Ⅴ群土器

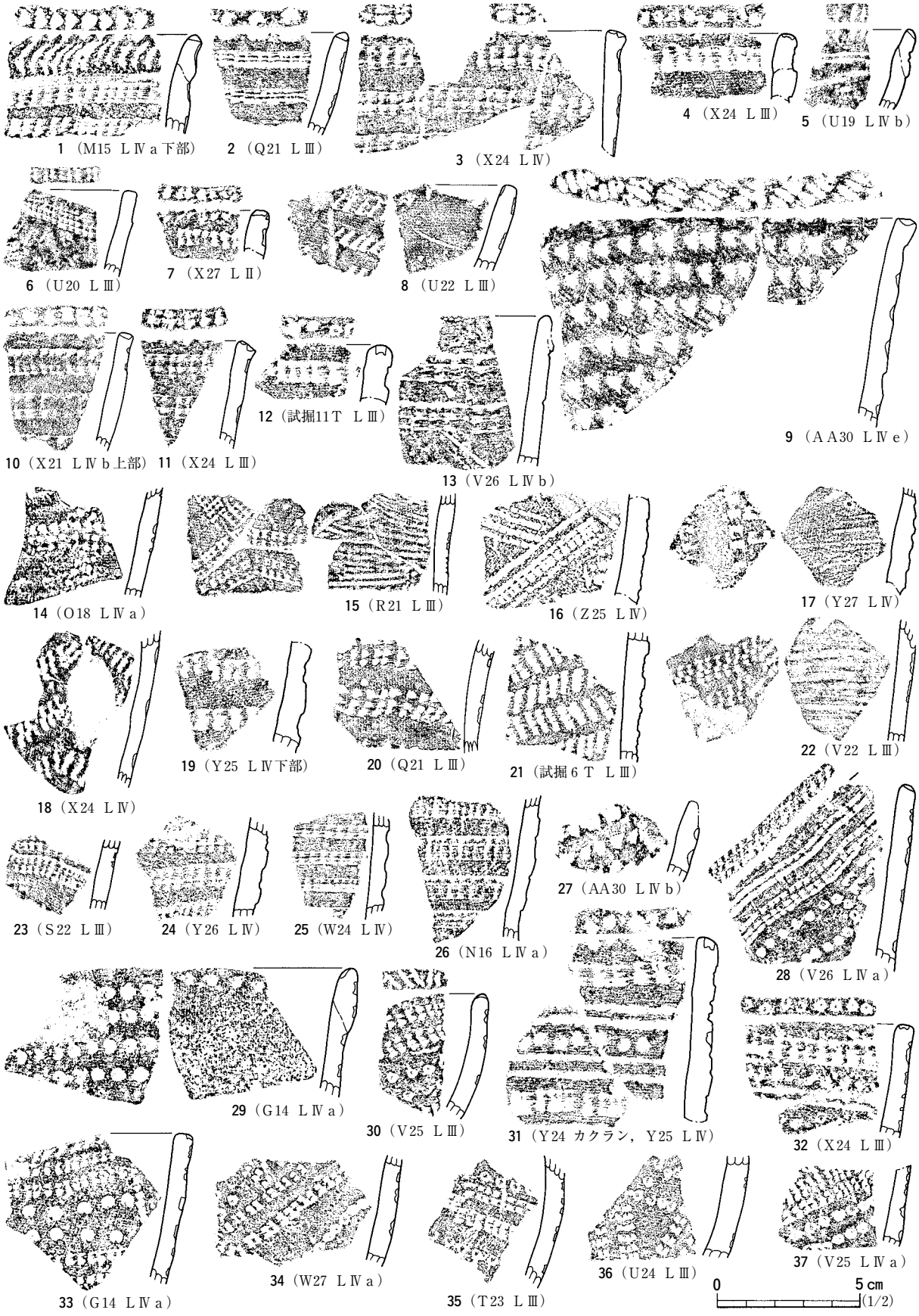


図132　遺物包含層出土土器(10)　Ⅴ群土器

半で，図131－21のように逆方向に進むものも稀に認められる。工具は図131－１・６・８～10・17・20・23・25・26が１本の半截(多截)竹管，それ以外は半截(多截)竹管２～３本の櫛状束である。特殊なものとしては図131－19・31が半截竹管束凸部を用い，図131－41・42は同一個体で，半截竹管束凹部と竹管凸部の刺突を併用する。半截竹管束も上下で凸部・凹部を組み替えている。図132－９・27については斜めに截断した竹管が原体かと思われる。

ｂ３種：円形竹管刺突列と竹管束の連続刺突列を組み合わせるもの。図132－12・28～37である。12・29・31・32のように多段構成をとるものもあるが，28・33・36のように縦，斜方向の区画を加え，内部に円形竹管刺突を並べるものもある。連続刺突の工具はｂ２種と同様の半截(多截)竹管の束である。口端部には刺突が施され，28・30は器面と同工具の連続刺突，29は内側に円形竹管の連続刺突，31・32は上面に円形竹管刺突，33は外側に刻み状の連続刺突が観察される。刺突の方向はｂ２種と変わらない。口縁部は内湾もしくは直立し，29のように肥厚するものも見られる。12・31・32と28・30・34～37はそれぞれ同一個体片と思われ，個体数はそれほど多くはない。

ｃ種：文様要素が平行沈線と刺突文であるもの。図133に示した。器壁・胎土その他の特徴はａ種と同様である。

ｃ１種：平行沈線によって文様を描き，補助的に刺突を用いるもの。図133－１～４・６・38・47がこれにあたる。１・２は平行沈線間に棒状工具の円形刺突を加える。３・４は同一個体と思われる。３本１単位の櫛歯状工具による沈線で肋骨状の文様を描き，同工具による連続刺突を区画に沿って加える。38も同種の施文を半截竹管によって行う体部破片で，くびれを持つ。６は平行沈線による横区画上に棒状工具による刺突が２列観察される。47は平行沈線による連弧文の下位に２条を１単位とする円形竹管刺突列が見られる。

ｃ２種：平行沈線と組み合わせて多段構成をとるもの。図133－17～26・30・40・44・48である。19～22・44・48は同一個体と思われ，下部に斜格子文がつく。施文具は，19のように「ハ」字状に見える部分も存在することから凸部から凹部に向かって斜めに削いだ半截竹管を凹・凸部を入れ替えながら施文したと考えられる。口端部には同工具による連続刺突が認められる。18・23～25は下部には貝殻腹縁圧痕が縦位に施される。施文具は同様の斜めに削いだ半截竹管を用いると思われ，23～25については施文角度が低いため刺突と言うよりは平行短沈線となっている。40は半截竹管を施文具とする。そのほかは半截竹管の束を施文具とする。

ｃ３種：連続刺突文・平行沈線の組み合わせで文様を描くもの。図133－７～16・27～29・31・36がこれにあたる。７・８・12，９・14はそれぞれ同一個体である。施文具は15が半截竹管の凹部と凸部の２本を組み合わせたもの，９・11・13・14・27・31が半截竹管の束，29・36が角棒状工具で，以外はヘラ状の平らな工具である。８の口端部には器面と同工具による連続刺突，16は内側に器面と同工具の刺突が施される。その他９の上端には突起，13には左右交互に刺突が施される隆帯が垂下しているのが認められる。

ｃ４種：連続刺突と波状文・山形文を併用するもの。図133－32～35・37・45である。いずれも連続

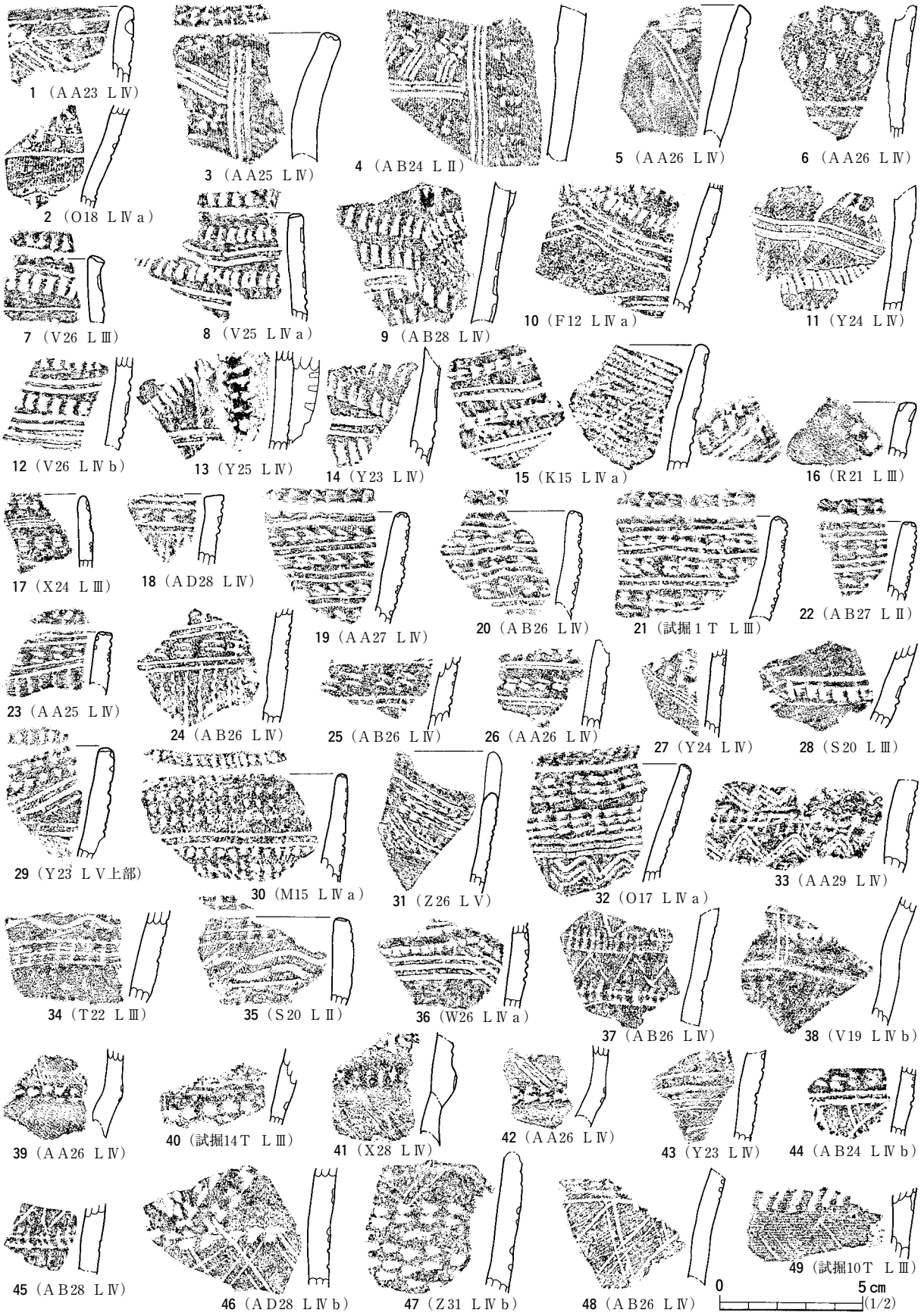


図133　遺物包含層出土土器(11)　Ⅴ群土器

刺突は半截竹管の束を用いる。同一個体の37・45が単沈線による山形文を施すほかは，刺突と同工具による波状文が描かれる。

ｃ５種：体部破片で格子目文を持つもの。図133－５・39・41～43・46・49である。39・42は同一個体で，半截竹管刺突を持つ段を有する。41は刻み付の隆帯を持つ。49が半截竹管凹部・凸部の組み合わせ束であるほかは半截竹管を施文具とする。

ｄ種：絡条体圧痕が文様主体となるもの。図134～135・137－８に示した。器壁・胎土その他の特徴はａ種と同様である。

ｄ１種：絡条体圧痕のみを重層させるものである。時に縦区画を絡条体圧痕で施すものもある。図134－１～５・７・８・10～18・20・22～38・図135－４～36・図137－８に示した。口端部の刺突にはｂ・ｃ種に見られる半截竹管の束を用いるものが多く，図134－29はヘラ状工具による刻み，図134－７・８・11は貝殻腹縁，図134－17は絡条体圧痕である。図134－３～５・12・18は同一個体で，口縁部が波状となり，波状となる中位に突起が付く。図134－32・35のように輪積みを残して複合口縁状にするものも認められる。図137－８は口端部に半截竹管による深い連続刺突を加え小波状となる。

ｄ２種：絡条体圧痕で山形状の文様を描く。図134－９・21・40～45・図135－１～３である。図134－42は絡条体圧痕による縦区画，図134－43は隆帯による縦区画が施される。口縁部の刺突はｄ１種同様，半截竹管を用いる。

ｄ３種：平行沈線と組み合わせるものである。図135－37～44である。多くは平行沈線に絡条体圧痕を沿わせるものだが，40は２条の絡条体圧痕を施した上に重ねるように波状文を描いている。41は下位に斜格子の一部が確認できる。口端部の刺突は，37・39が貝殻文，38が半截竹管である。

ｄ４種：刺突文と組み合わせて用いるものである。図134－19・図135－45～50は連続刺突との組み合わせ，図134－６・図135－51～59は円形刺突との組み合わせである。円形刺突は図139－55・56が円形竹管と思われるほかは，丸棒状の工具による垂直刺突と考えられる。いずれの文様も，山形状の文様を描くか，多段に重層させている。図134－６のように半截竹管の刺突を施した隆帯が垂下するものも見られる。口縁部の刺突は，図135－39・55が貝殻であるほかは半截竹管によるものである。その他，図135－51の口縁は積み上げ痕を残して複合口縁状となり，端部は丸棒状の工具の側面を押圧して小波状にする。

ｄ５種：横位の隆帯と組み合わせるもの。図134－39・図135－60である。いずれも隆帯の上下に絡条体圧痕を沿わせ，隆帯上には前者が絡条体圧痕を平行に，後者は貝殻腹縁圧痕を斜位に施す。後者の隆帯下位には斜位の絡条体圧痕が施され，圧痕に沿って施文時についた爪痕も確認できる。

ｅ種：貝殻腹縁圧痕が文様主体となるものである。図136・図137－１～７に示した。器壁・胎土その他の特徴はａ種と同様である。

ｅ１種：貝殻文のみ多段に施すものである。図136－１～21・23～37・図137－２～４である。器面に対して角度を付けて施文具を押しつけた三日月状の腹縁圧痕を多段に施し，図136－20・21のように

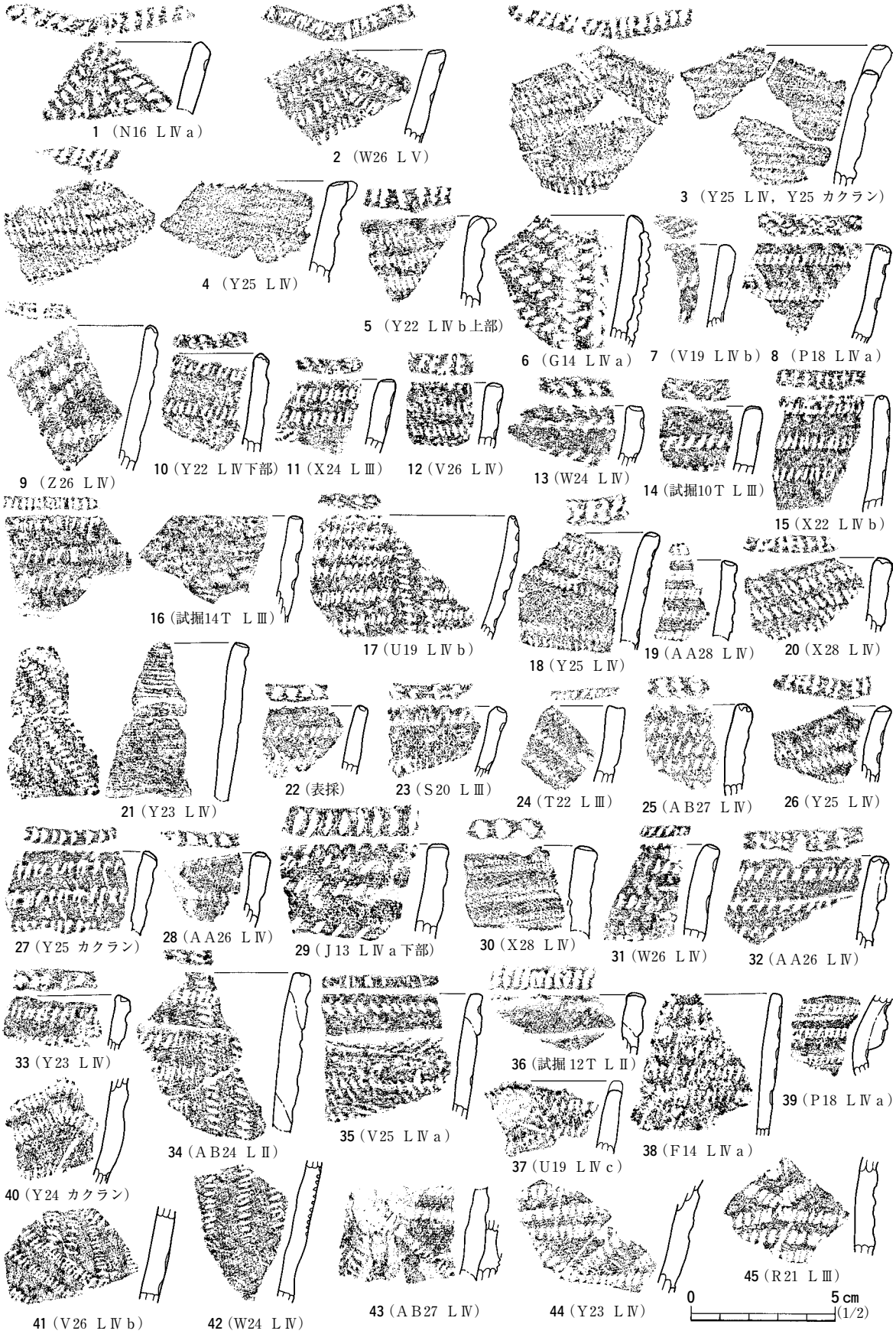


図134　遺物包含層出土土器(12)　Ⅴ群土器

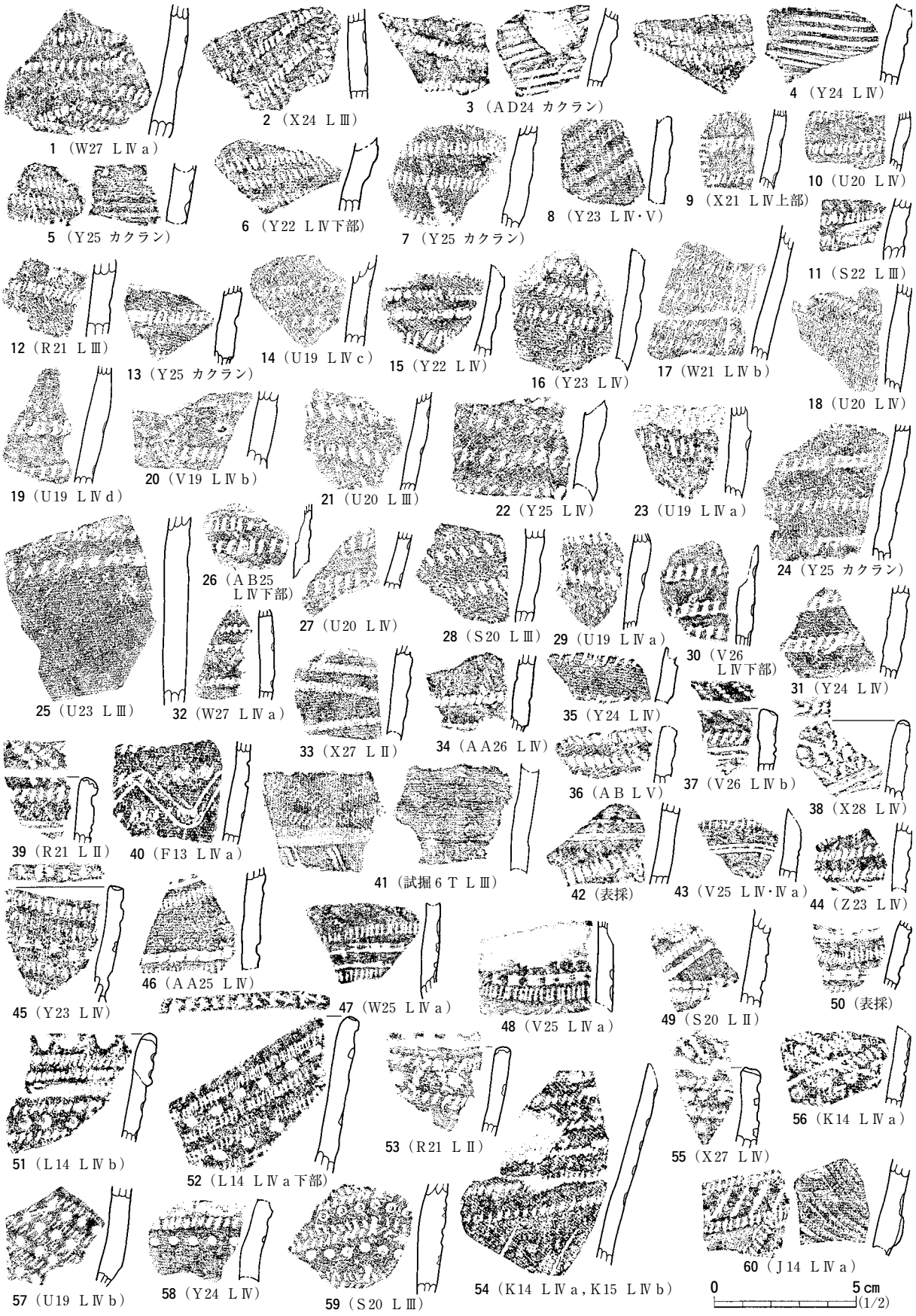


図135　遺物包含層出土土器(13)　Ⅴ群土器

図136　遺物包含層出土土器(14)　Ⅴ群土器

刺突付の隆帯による縦区画を施すものもある。その他，図136－23は貝殻文を模した沈線を矢羽状に配する。口端部の刺突は器面の施文具と同一のものが多いが，図136－18は指頭押捺によって凹ませている。

ｅ２種：半截竹管の刺突文と組み合わせるもので，図136－38～42である。38～40は貝殻文と半截竹管束の連続刺突が横位に施される。38は口端部内側にも貝殻による刻み，39は口端部内側に半截竹管による刺突が施されている。41は半截竹管凸部刺突と組み合わされる。42は貝殻腹縁圧痕上に平行沈線を引きその下位に丸棒状工具による円形刺突列が施される。

ｅ３種：絡条体圧痕と併用するもので，図136－22である。丸棒状工具による円形刺突付の隆帯が横走し，上位に絡条体圧痕，下位に貝殻腹縁圧痕が施される。

ｅ３種：平行沈線と組み合わせるものである。図137－１・５～７である。いずれも縦位の貝殻腹縁圧痕に平行沈線を横位に施す。口縁上にも貝殻による刺突が認められる。

ｆ種：無文の口縁部片を集めた。図137－９～21である。口端部に連続刺突を加えるものが多く，14のように角棒状工具側面による押圧も認められる。

ｇ種：体部の格子目文破片である。図137－22～46に示した。

ｈ種：体部の無文破片である。図138－１～13に示した。

ｉ種：底部を一括した。図138－14～22である。14～16は乳房状の尖底である。17～22は通常の尖底である。20は外面条痕が認められる。22は手捏ねで作られたもので，ミニチュア土器だろう。内面には手捏ね成形時の爪痕が残る。

２類　外面地文が条痕文であるもの。図139～142－１に示した。

ａ種：沈線で文様を描くもの。図139－１～８に示した。図139－１～６は同一個体であり，半截竹管状工具による平行沈線で１類ａ３種と同じ文様を描く。

ｂ種：連続刺突を施すもの。図139－９～15・図140－２に示した。図139－９～14・図140－２は半截竹管の束を用いる。15は半截竹管凸部による「Ｄ」字状刺突を加えた隆帯を貼り付ける。

ｃ種：絡条体圧痕をもつもの。図139－16～19・21・22に示した。17は口端部に半截竹管束による連続刺突を施し，波状口縁頂部から絡条体圧痕を垂下させる。18・21は同一個体で，丸棒状工具の円形刺突と併用している。

ｄ種：単軸絡条体第５類を押圧した「Ｘ」字状の絡条体圧痕を施すもの。図139－20である。器面が乾燥してから施した縦位の浅い条痕が見られ，４条の絡条体圧痕を施す。その上位が文様帯となるらしく，斜位の圧痕が認められる。

ｅ種：貝殻腹縁圧痕を施すもの。図140－１・３～７である。１類ｅ種と同様な施文が施される。

ｆ種：地文の条痕文のみ認められるもの。図140－８～32・図141・図142－１である。図140－８～10は同一個体の口縁部である。外反する波状口縁で，口端部には半截竹管の刺突が施される。図140－13・14は同様の外反する口縁部で，いずれも貝殻腹縁圧痕が口端部に施される。図140－11・12も同一個体で内湾気味の口縁部である。以下同図15～図142－１は体部の破片である。

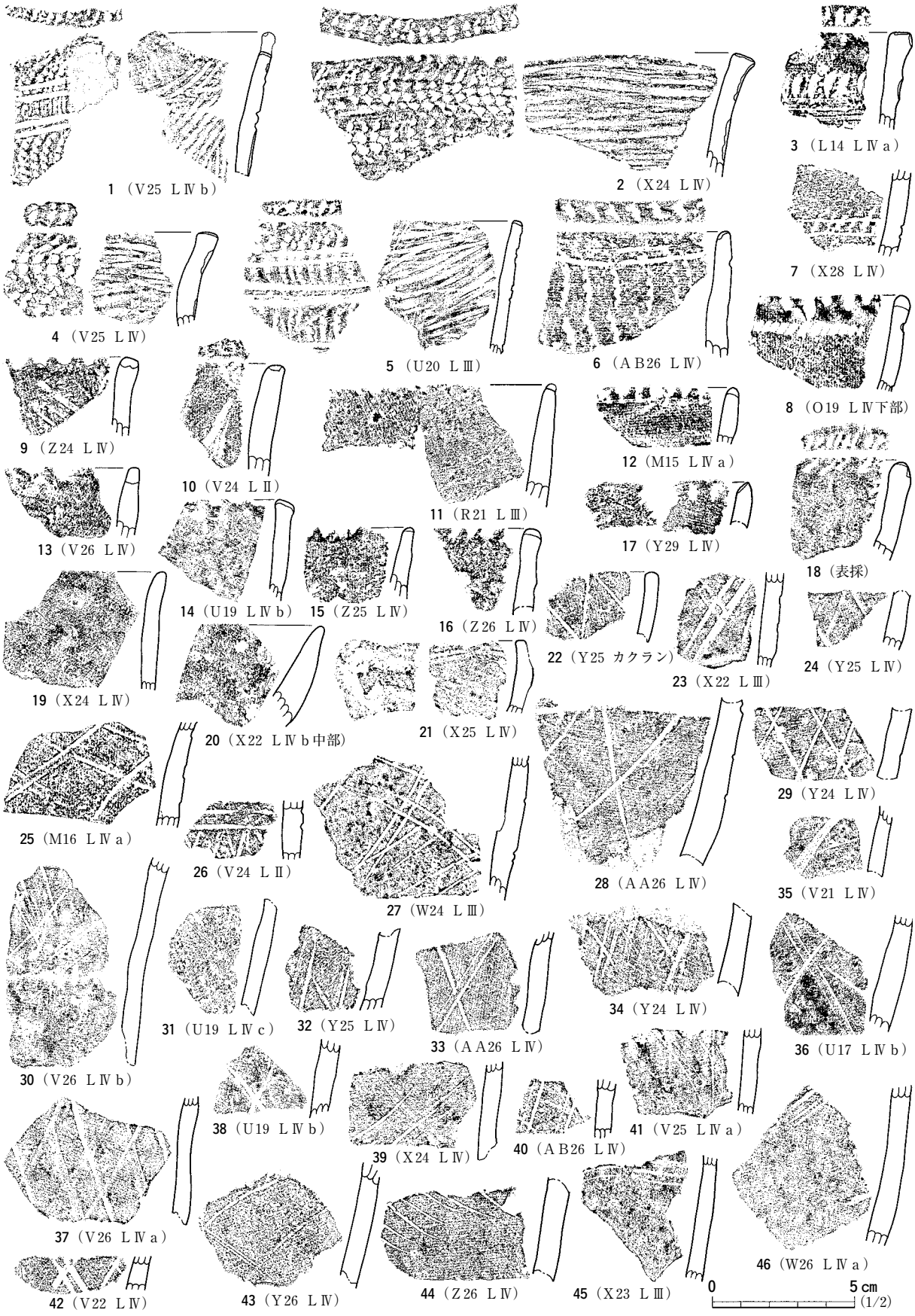


図137　遺物包含層出土土器(15)　Ⅴ群土器

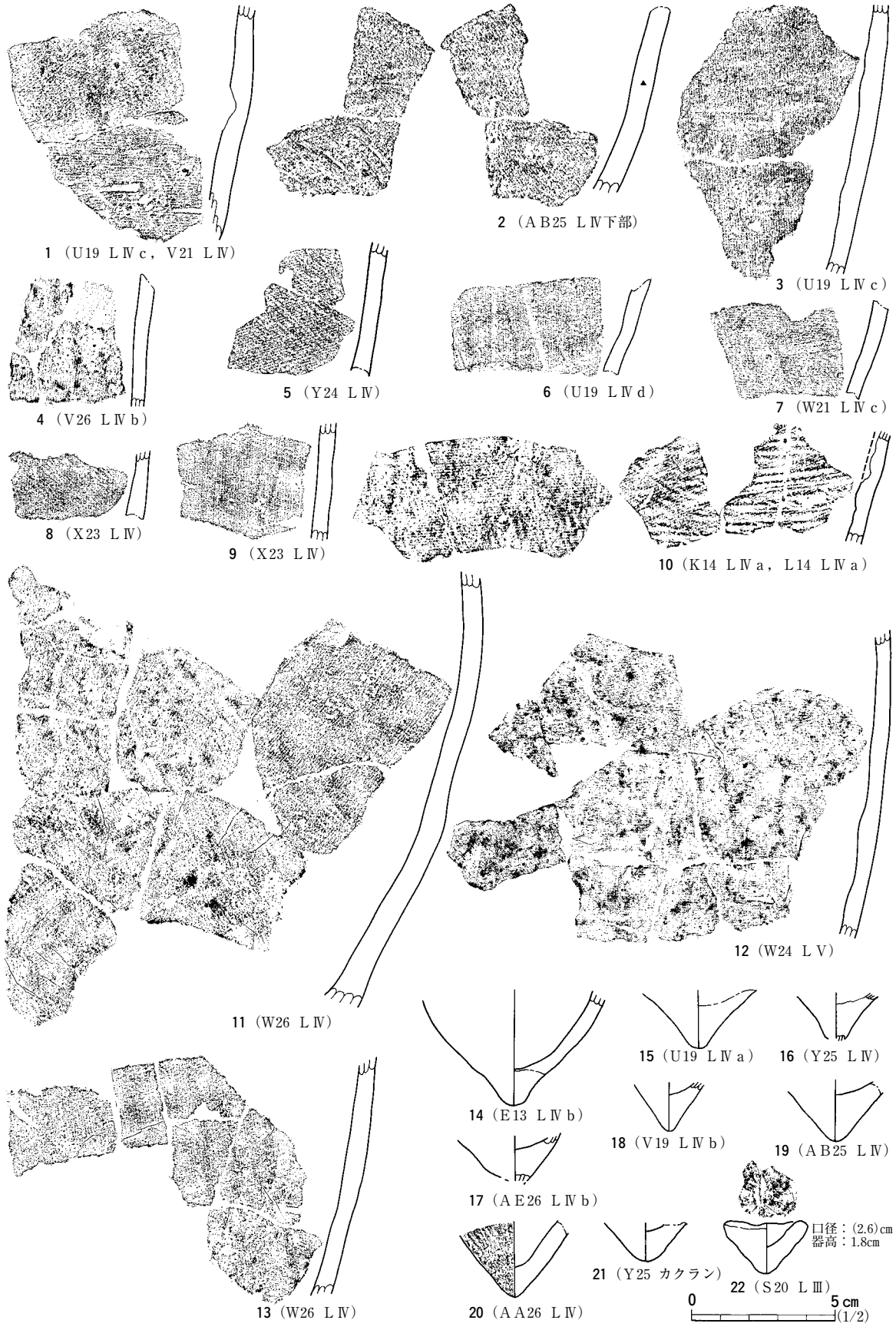


図138　遺物包含層出土土器(16)　Ⅴ群土器

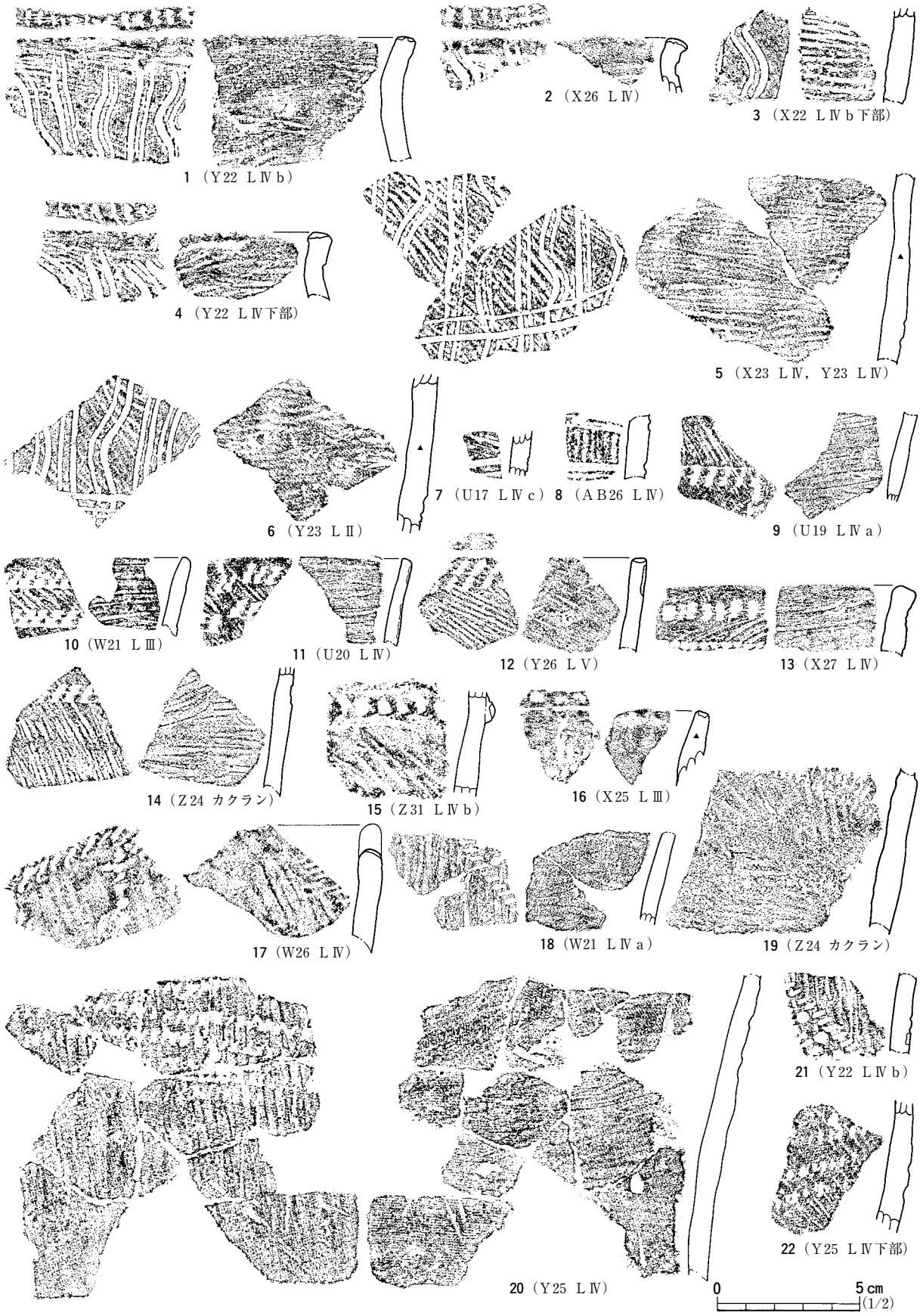


図139　遺物包含層出土土器(17)　Ⅴ群土器

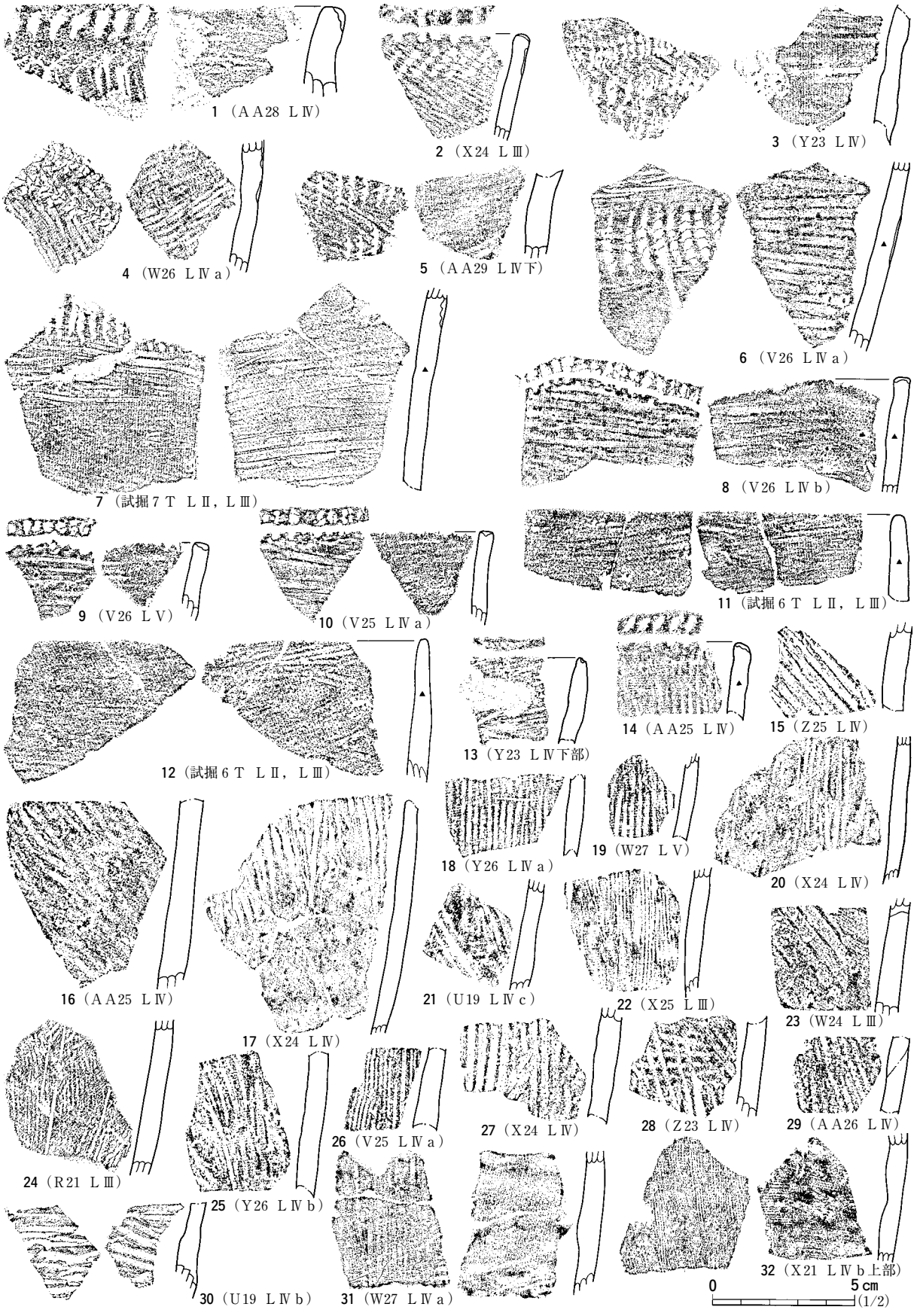


図140　遺物包含層出土土器(18)　Ⅴ群土器

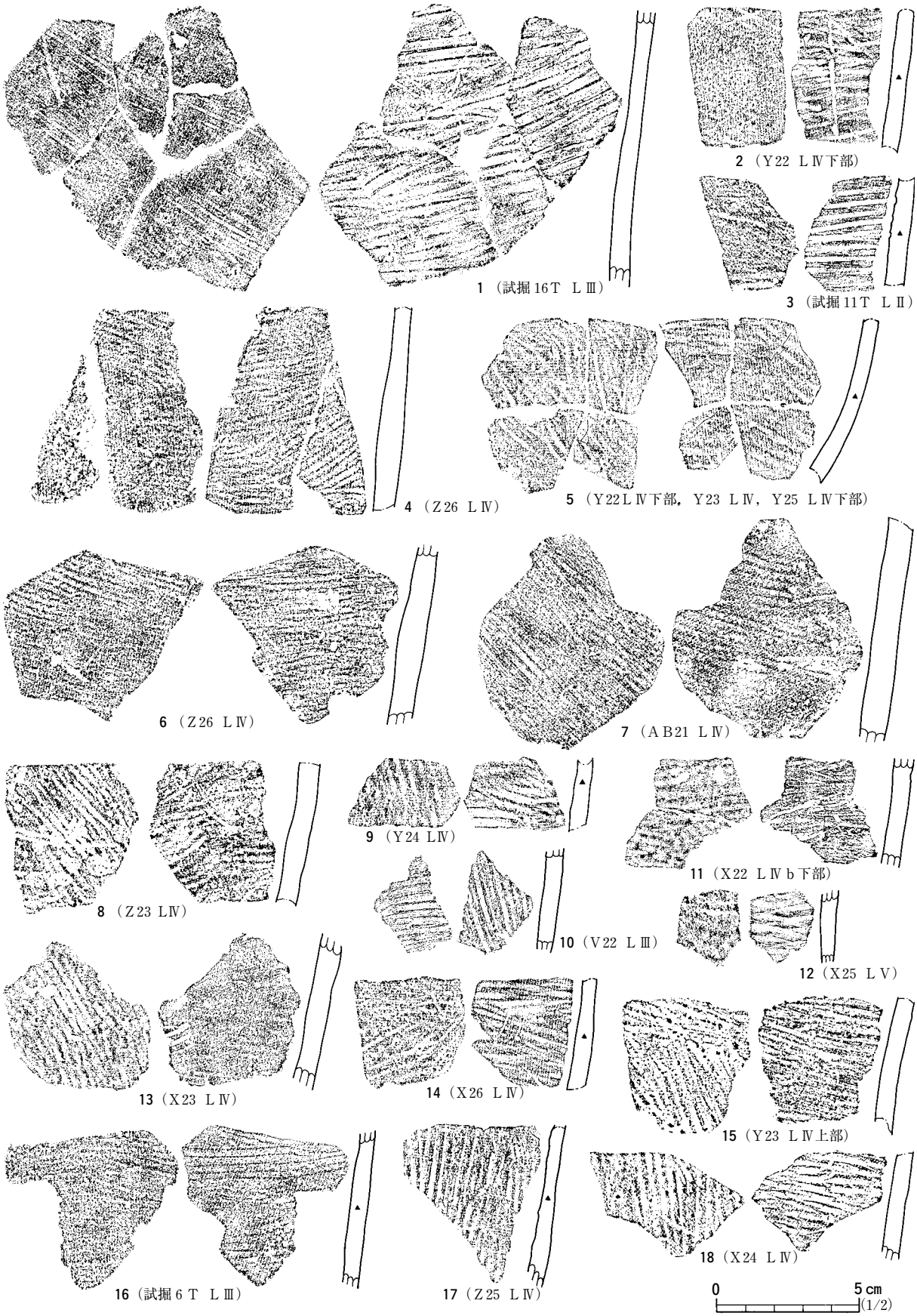


図141　遺物包含層出土土器(19)　Ⅴ群土器

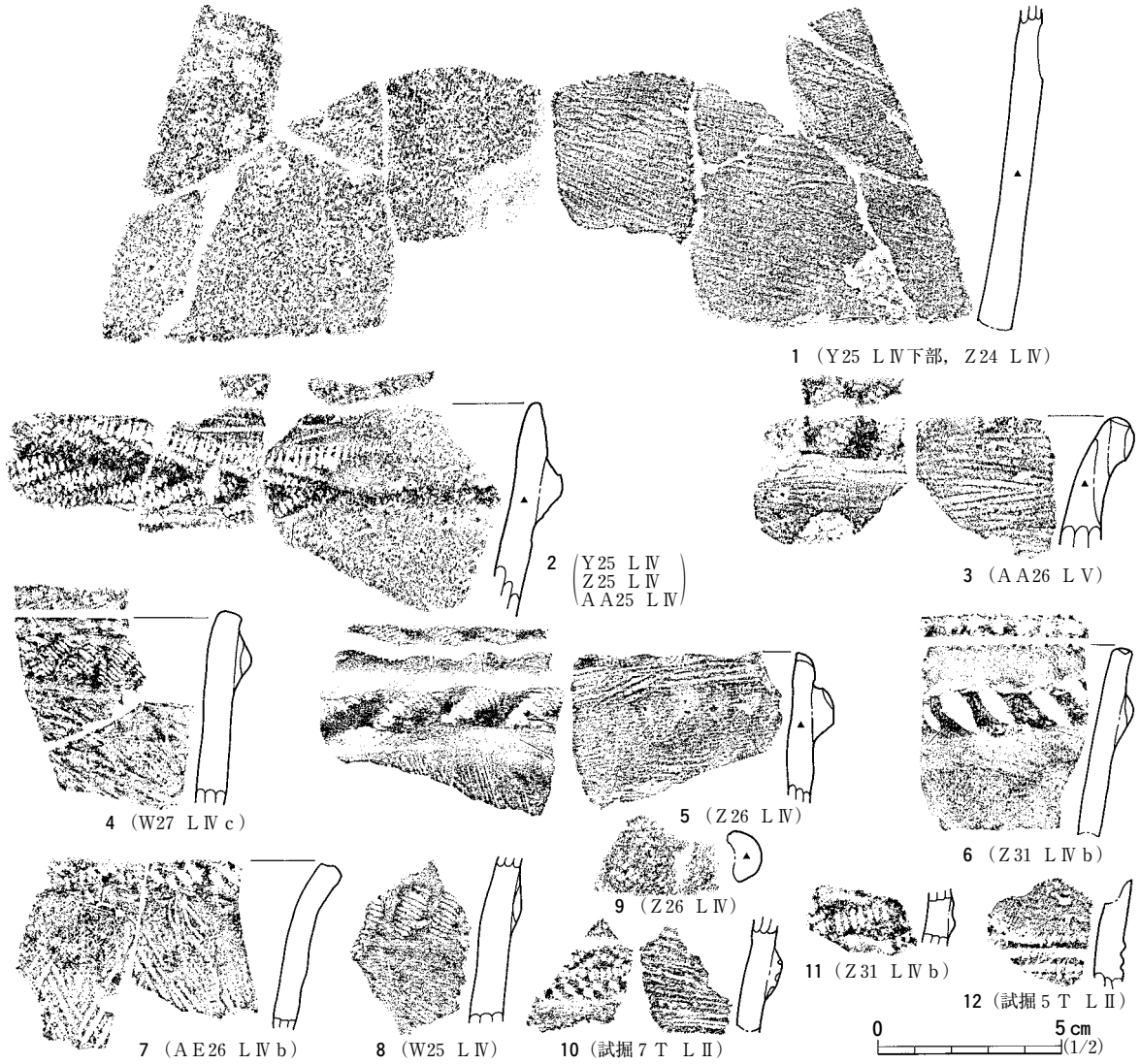


図142　遺物包含層出土土器(20)　Ⅴ群土器

３類　口縁部直下に絡条帯圧痕を施した太い隆帯を一巡させるもの。図142－２～11に示した。口縁部は基本的に平縁で，口端部上にも絡条体圧痕が斜位に施される。２は隆帯に矢羽状に押圧される。９は２と同一個体の隆帯部分である。３は隆帯が口縁部上端に貼り付けられ，斜位の絡条体圧痕が施される。内外面には条痕が認められる。４・５・８・11は隆帯上に斜位に絡条体圧痕が施される。６は絡条体圧痕を刻みおよび刺突に置換したものと考えられる。７は口端部に絡条体圧痕を施し，内外面には条痕が観察される。10は内面条痕で，隆帯上に貝殻による圧痕と刻みが施されている。12は沈線に絡条体圧痕を沿わせるものである。これについては，ここに図示してしまったが，胎土の特徴などからⅦ群３類(常世２式併行)の土器である可能性が高い。本類は１・２類に比して細砂の含有が目立ち，繊維の含有率も高い。

本群土器は，１次調査区全域，２次調査区北向き斜面から出土する。出土層位はＬⅣが多く，ＬⅣでも下部のＬⅣｃ・ｄ，沢部ではＬⅣｅからの出土も見られる。

Ⅵ群　早期後葉の地文条痕文土器（図143～156，図版154～157）

１類　隆起線によって幾何学文様を描く，野島式に併行するものである。図143・144に示した。

ａ種：野島式に比定されるものである。図143－１～３・８・９～16に示した。出土量が僅かな上，個体数も少ない。器壁の厚さは７㎜程度で，胎土には繊維を含むが，２類以下ほど多量には含まれない。１～３は同一個体である。口縁部は緩い波状となり，波頂部に突起が付く。波頂部からは刻み付の隆帯が垂下する。太沈線によって格子・鋸歯状に区画し，区画内には沈線を充塡する。胎土には石英・金雲母などを含んでいる。９～16も同一個体片である。口縁部は波状となり，端部に刻みが加えられる。文様は２本の隆起線によって波頂部下に弧状，体部に楕円状のモチーフを描く。隆起線間は無文とし，外部に沈線を充塡する。胎土に細砂を含むが，石英・金雲母は確認できない。８は沈線区画内部に細沈線を充塡するものである。これらは，丘陵裾部のＸ～ＡＡグリッドから出土している。出土層位はＬⅣである。

ｂ種：槻木１式に比定されるものである。図144－１～29に示した。出土量は僅かで，細片が多い。器壁の厚さは５㎜前後で，胎土に金雲母を含む。繊維を含むものの微量確認できる程度である。口縁部は１・２のように波状となるものと，３～６のように平縁のものがある。文様は区画線・充塡される直線ともに細い粘土紐を貼り付けた細隆起線によって描かれる。１・２は同一個体片で，口端部には刻みが加えられる。文様は波頂部下を無文としてそこから背中合わせの三角形を描く。三角形の一辺にはさらに短隆線を貼り付け梯子状とする。５・６も同一個体で，口縁直下に梯子状の文様帯を一巡させる。７～10は口縁部細片，11以下は体部片である。いずれも細隆起線によって直線を用いた幾何学文様を描く。分布はａ種とあまり変わらず，出土層位はＬⅣである。

２類　口縁部・文様帯下部を刺突列によって区画するものである。図145～147・図148－３に示した。波状口縁で，口縁部下が「く」字に外側に屈曲，もしくは隆帯を持ち，以下がくびれる器形となるものが多い。器壁の厚さは８～12㎜程度で，胎土には石英粒・繊維を多量含んでいる。調査区内に広く分布する。１次調査区ではＬⅣ，２次調査区ではＬⅣａから出土したものが多い。

ａ種：円形竹管の刺突が認められるものである。図145－１・２に示した。１は小型の円形竹管刺突が弧状に認められ，口端部にも同工具による刺突が加えられる。２は体部のくびれ部分の破片で，円形竹管刺突が縦位に確認できる。最下部の屈曲部には刻みが加えられる。出土数は極めて少ない。

ｂ種：図145－２～16・18・図148－３がこれにあたる。口縁部が大波状となる，もしくは山形の突起を持つ器形で，波頂部・突起から刺突を施した隆起線が垂下する。体部には大体屈曲が認められるが，図145－11のように屈曲のないものも存在する。口端部には内外に刺突・刻みを加える。刺突は半截竹管状工具を施文具とするが，図145－５・図148－３のように指頭もしくはそれぐらいの大きさの工具で隆起線上に押捺し，同じく図145－５・16のようなヘラ状工具による刻みが施されるものもある。刺突・刻みで区画される文様帯には，半截竹管による集合沈線で口縁部に沿って弧線を描き，下位にヘラ状工具による鋭い沈線，もしくは図145－18のような平行沈線で鋸歯状の文様を描く。

図143　遺物包含層出土土器(21)　Ⅵ群土器

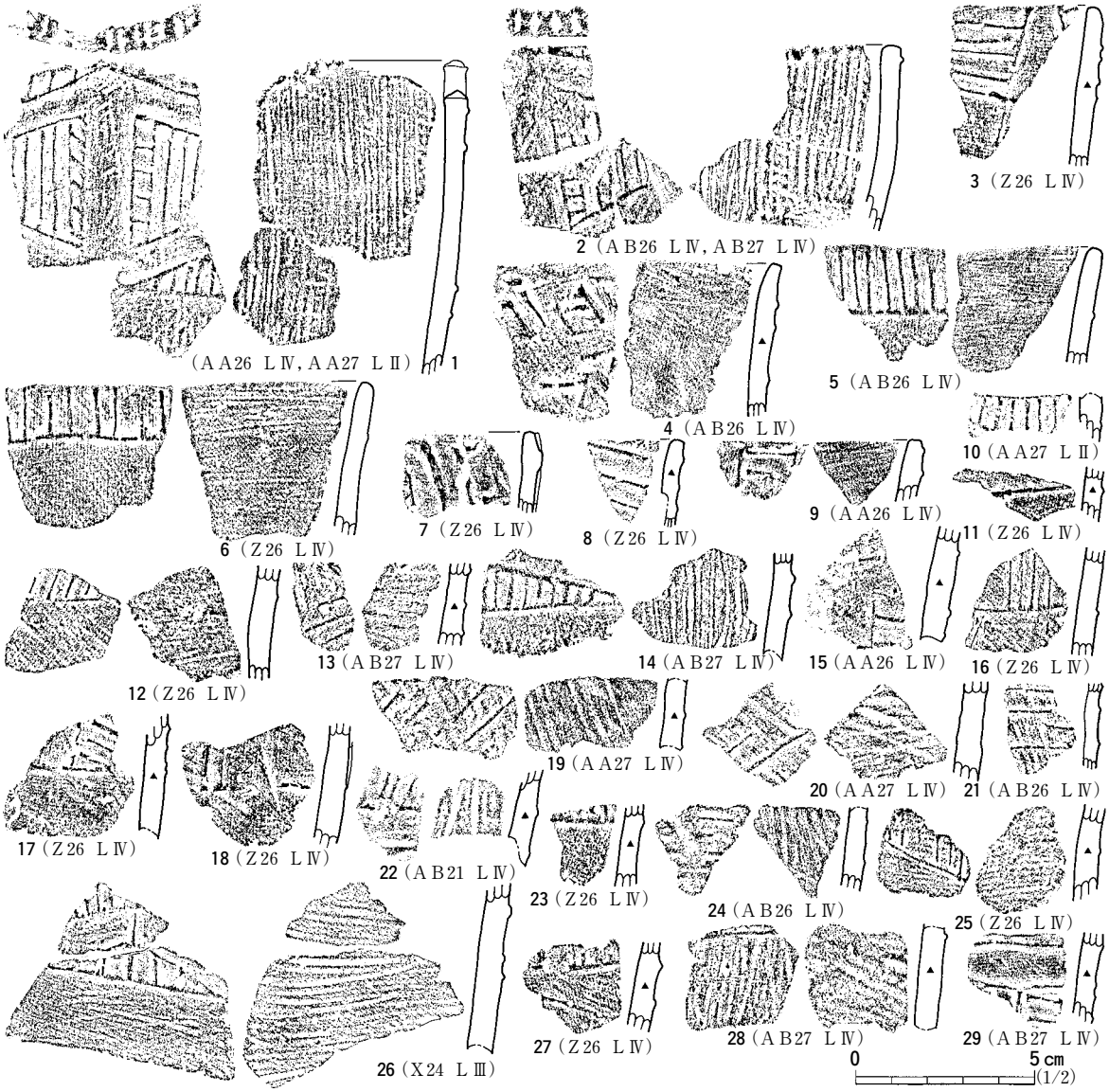


図144　遺物包含層出土土器(22)　Ⅵ群土器

図145－５・12・14・16・18・図148－３などは内面に条痕が認められるが，条痕の見られないものが多い。

ｃ種：図145－17・19・20・図146－１・２のような半截竹管の押引き・連続刺突で文様を描くものである。図145－17・19・20は２～３条の押引き文を用い，縦区画を加え，菱形，山形の文様を描く。図146－２は体部にくびれを持つ器形で，口縁部は波状となる。口端部の外部はヘラ状工具の刻み，内部および体部の屈曲部には角棒状工具の刻みが加えられる。２条１組の押引き文で縦区画のみ施される。

ｄ種：図146－１は８単位前後の波状口縁が推定される。口縁部は外反し，体部に屈曲はない。口端部には刻みが加えられ，刺突文列による波頂部からの縦区画と下位の文様帯区画が認められる。

ｅ種：口縁部上端の内外に半截竹管刺突が施される。図146－３・５に示した同一個体資料である。

ｆ種：外反する口縁部に刻みが施されるものである。図146－４・６～13・16に示した。６～９・16

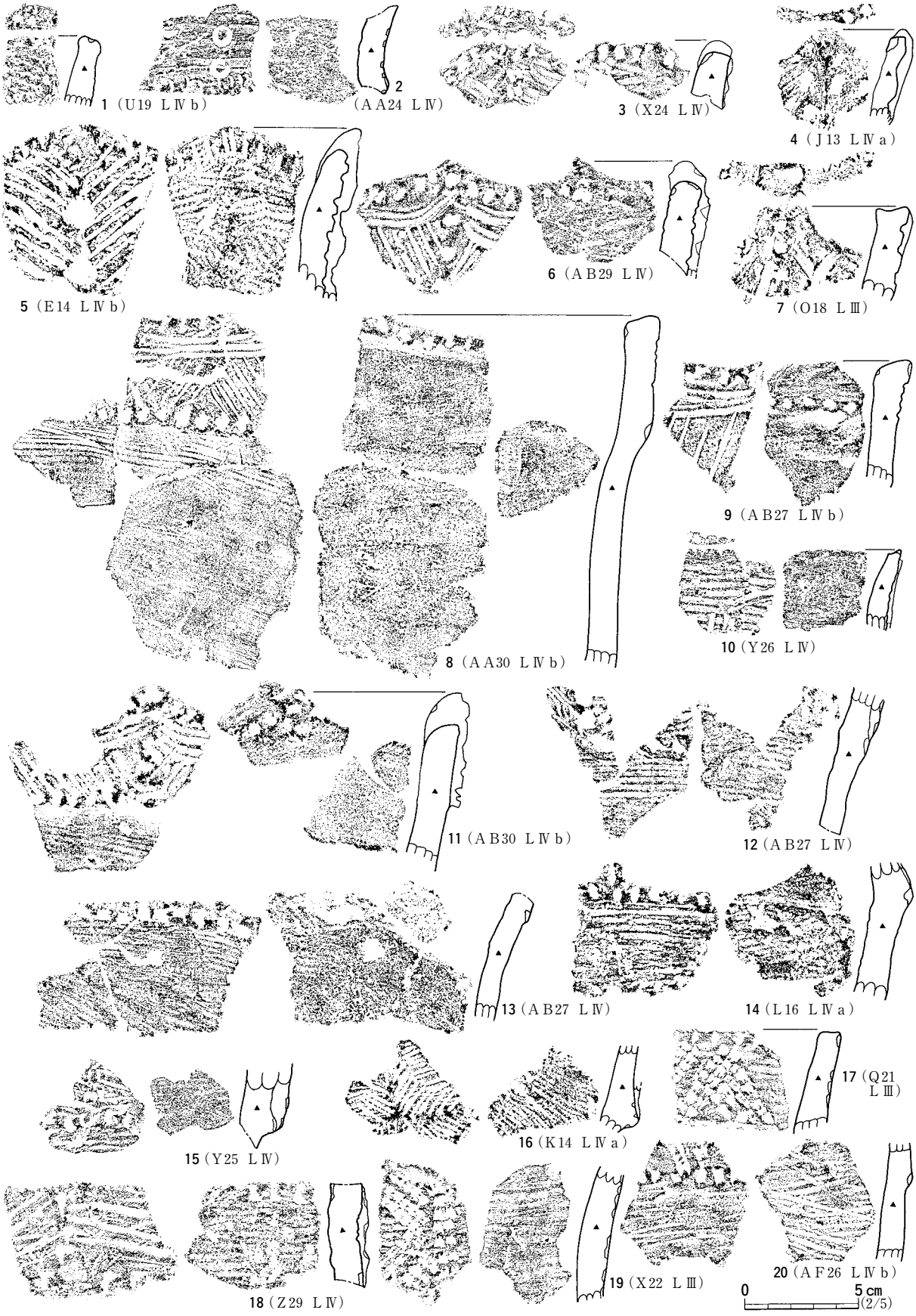


図145　遺物包含層出土土器(23)　Ⅵ群土器

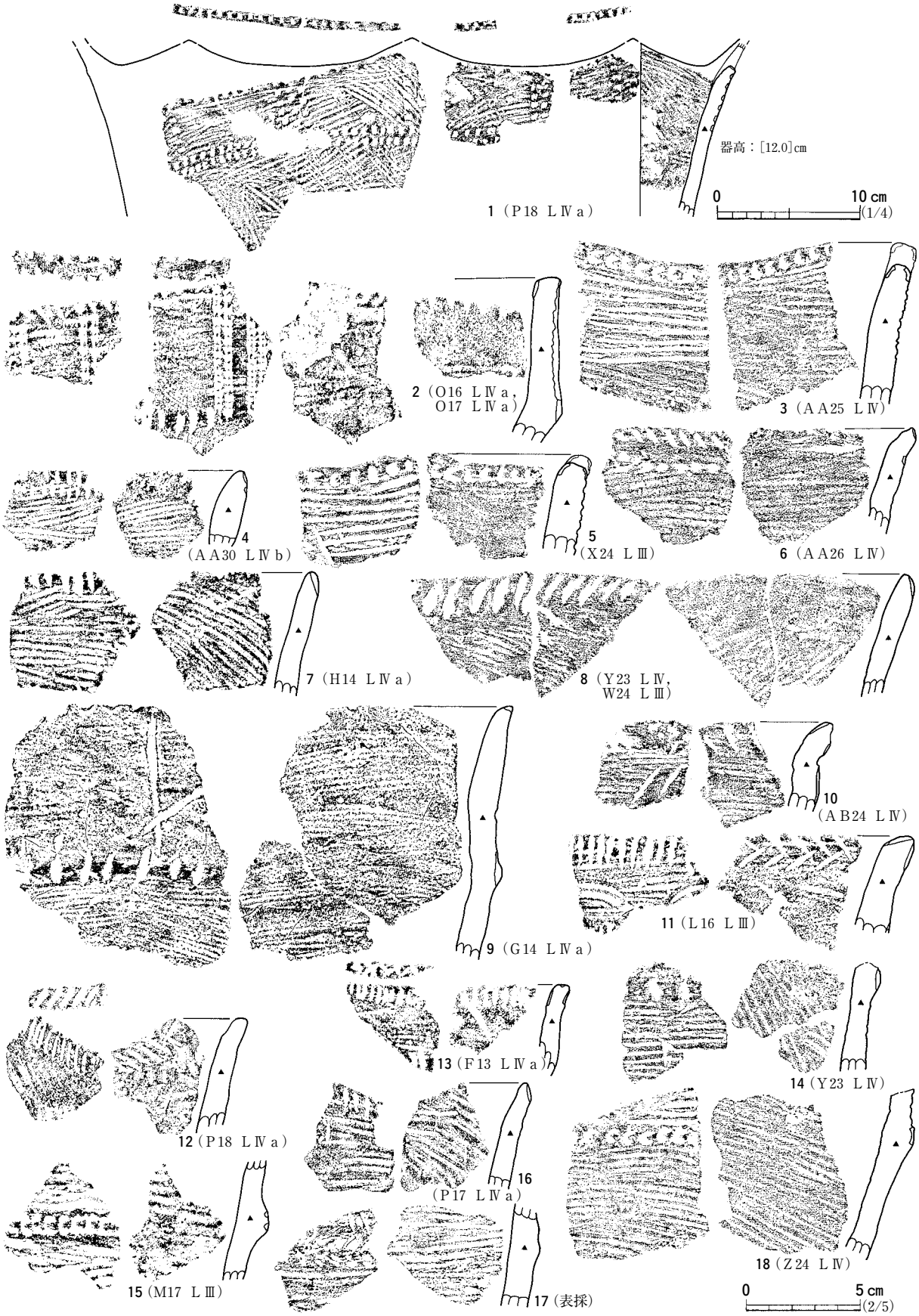


図146　遺物包含層出土土器(24)　Ⅵ群土器

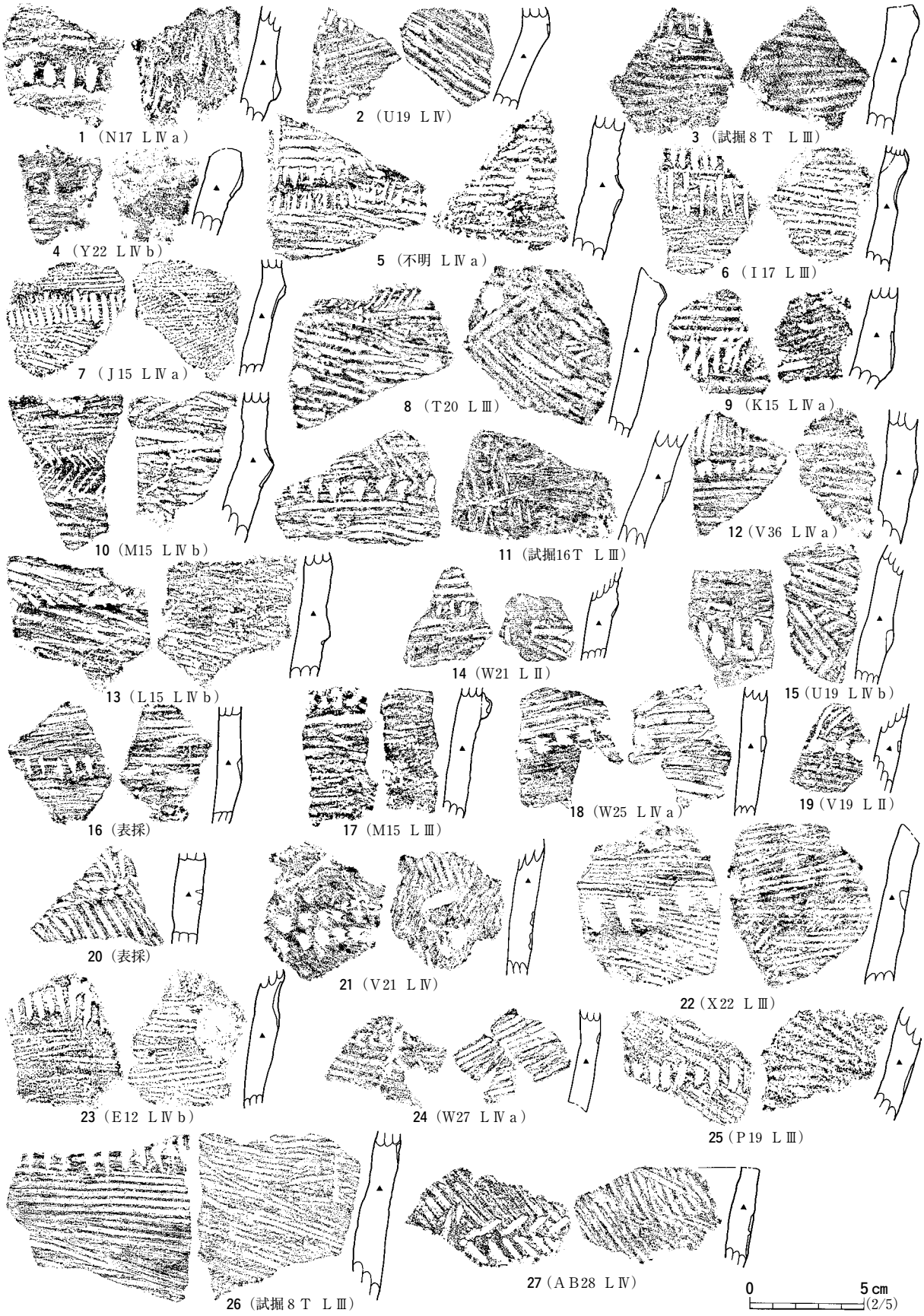


図147　遺物包含層出土土器(25)　Ⅵ群土器

が外面のみである以外は内外面に施される。６は口端部にヘラ状工具による刻みを加え，直下に半截竹管の刺突が一巡する。11は内面の刻みが矢羽状に施され，外面に条痕が弧状に施されている。９は口端部が尖頭状となり，刻みが加えられる。口縁部下にくびれを持ち，屈曲部には棒状工具による刻みが加えられる。口縁部には単沈線によって文様が描かれている。

ｇ種：口縁部下の屈曲部の破片を一括した。図146－14・15・17・18・図147－１～10・12・17である。図146の４点は半裁竹管による刺突が施される。同図17は刺突が矢羽状に配される。図147－12は半截竹管を下から上へ突き上げて刻みを付す。同図17は隆帯を貼り付け，その上に半截竹管の刺突を加える。以外はヘラもしくは棒状の工具を用いた刻みを加えている。同図５・６のように上下に刻みを施すもの，９のように「Ｘ」字状，10のように矢羽状に配するものも見られる。

ｈ種：口縁部下に屈曲のない体部破片である。図147－11・18～27である。18～21・24が半截竹管の横方向の刺突，22が半截竹管凸部による下から上に突き上げる刺突である。11・23・25・26は棒状工具を突き上げた刻み，27が棒状工具刺突による刻みを矢羽状に配したものである。

３類　肉厚の半截竹管もしくは棒状工具による太い沈線を用いて文様を描くもの。図143・148～149に示した。大破片が無く器形は不明な部分が多いが，口縁部はいずれも平縁と見られる。口端部上・あるいは端部内外角に刺突・刻みが加えられる。内外面に条痕が認められるものが多い。器壁の厚さは10～15㎜で，胎土には石英粒・繊維を多量含む。稀に金雲母を含むものもみられる。量的には１次調査区が多く，２次調査区からも出土しており，丘陵の尾根・谷部・裾部を問わずほぼ全域から出土する。出土層位はＬⅣａ・ＬⅣ上部が主となるがＬⅣｂからも稀に出土している。

ａ種：集合沈線による重弧文を描くもの。図148－１・２・４～７である。幅４㎜程度の半截竹管を用いて施文する。口縁部は丸頭状で，２・６の尖頭状，４の角頭状も見られる。口端部にはヘラ状工具による刻み目が施され，２には内面にも刻みが加えられる。文様は４・６のように弧線が対向するもの，７のように山形文と組合わさるものも認められる。

ｂ種：棒状工具で櫛や入り組み状の文様を描く。図143－４～７・図148－12～16である。口縁部は波状のものも認められ，端部が図143－５・６・図148－12のような丸頭のものと，図148－13～15のように角頭状の二種がある。前者には上部に刻み，後者には内外角に刻みが加えられる。

ｃ種：沈線で斜格子・斜線を描くもの。図148－17～26である。幅７㎜程度の半截竹管を用いて施文する。口縁部が丸頭状となるものが多い。端部には刻みが加えられ，17・18・22は内外角に刻みが認められる。25は最下位に半截竹管の刺突による区画が認められる。

ｄ種：縦位の沈線を描くもの。図149－１～５・８・10である。１～３は同一個体で，口縁上に刻み，文様帯下には半截竹管による縦方向の刺突が加えられる。４は口縁直下が屈曲する器形である。10は口端部の内外角に刻みが加えられる。

ｅ種：半截竹管による横位の沈線を隙間無く施文するもの。図149－６・７・９である。口端部の外角には細かな刻み，内角には半截竹管の「Ｃ」字状刺突が施される。９はそれに加えて斜方向の刻みが加えられる。

ｆ種：図149－11～19・24は口縁部が強く外反し，半截竹管により縦位・格子状の文様を描く。12は口縁部上に刻み，13・15は同一個体で内角に棒状工具の連続刺突が施される。11・14・16も同一個体で，文様帯下部は半截竹管による横方向の刺突で区画される。

ｇ種：その他モチーフの不明なもの。図148－８～11である。図148－８・９は同一個体で曲線を用いた文様を描く。口縁部上には刻みが見られる。図148－10は平行沈線を縦位に施し上位・中位を沈線で区画する。同図11は山形口縁の頂部で，半截竹管の刺突上位に放射状の沈線が認められる。

４類　ヘラ状工具もしくは半截竹管による鋭い沈線で鋸歯状・格子目状の文様を描くもの。図149・150・151に示した。口縁部が外反する器形が多く，波状口縁となるものも多い。基本的に内外面に条痕が認められる。器壁の厚さは10㎜前後で，胎土には石英粒・繊維を含む。１次調査区の尾根，北向き斜面から多く出土しており，２次調査区ではあまり出土していない。

ａ種：鋸歯・格子文を描くもの。図149－20～23・図151－３・７～９である。いずれも平縁で口端部には刻みが施され，23は指頭で凹ませている。図149－22・図151－７は同一個体で，縦位に沈線を描いた上にヘラ状工具による斜格子を描いている。

ｂ種：半截竹管による平行沈線で格子目文を描くもの。図149－５・25・26・図150－１～26である。３類としたものよりも５㎜程度と工具幅が狭く，且つ施文角度が低いと思われ，線間幅が広く鋭い沈線が引かれている。口縁部は波状が多く，口唇部には刻みもしくは半截竹管状工具の連続刺突が施される。図150－９は口端部上に絡条体圧痕を用いている。図149－25・26・図150－10のような格子の交差部に円形・半円形の文様を付すものも認められる。図150－６のように文様帯の区画線に半截竹管の連続刺突を用いるものもある。同図17は文様帯下部区画にヘラ状工具の連続刺突を用い，同図25は縄圧痕を用いている。図150－１は格子目間に縦位に赤色塗彩を加え，内面にも縦位に塗彩する。顔料はベンガラである。

５類　条痕で文様を描くものである。図151－１・２・４～６・10～12に示した。口縁部は外反し，口端部に刻み・刺突は認められない。基本的に内外面に条痕が施されるが，２の内面は口端部のみ条痕が認められる。器壁は７～10㎜で，胎土に石英・繊維を含む。１・４～６には斜格子状，２・11は鋸歯状・縦区画，10・12は弧状に条痕を施している。

６類　地文条痕のみ認められるものである。図151－13～図156－８に示した。

ａ種：口縁部である。図151－13～図154－14に示した。口縁部が外傾し，端部が丸・角頭状で刻みが加えられるもの(図151－13～図152－19)，口縁部が若干外反し，端部が丸・角頭状であるもの(図152－20～図153－８)，口縁部が強く外反し，端部が丸頭・尖頭状で，刻み・連続刺突が加えられるもの(図153－９～図154－14)がある。

ｂ種：体部である。図154－15～図155－13に示した。３・４類の体部破片もここに含まれていると考えられる。

ｃ種：底部である。図155－14～17・図156－８に示した。認められるのは平底のみである。底面にも条痕を施し，図156－５には底面に回転縄文が見られる。図155－14・16・17・図156－４など上げ底

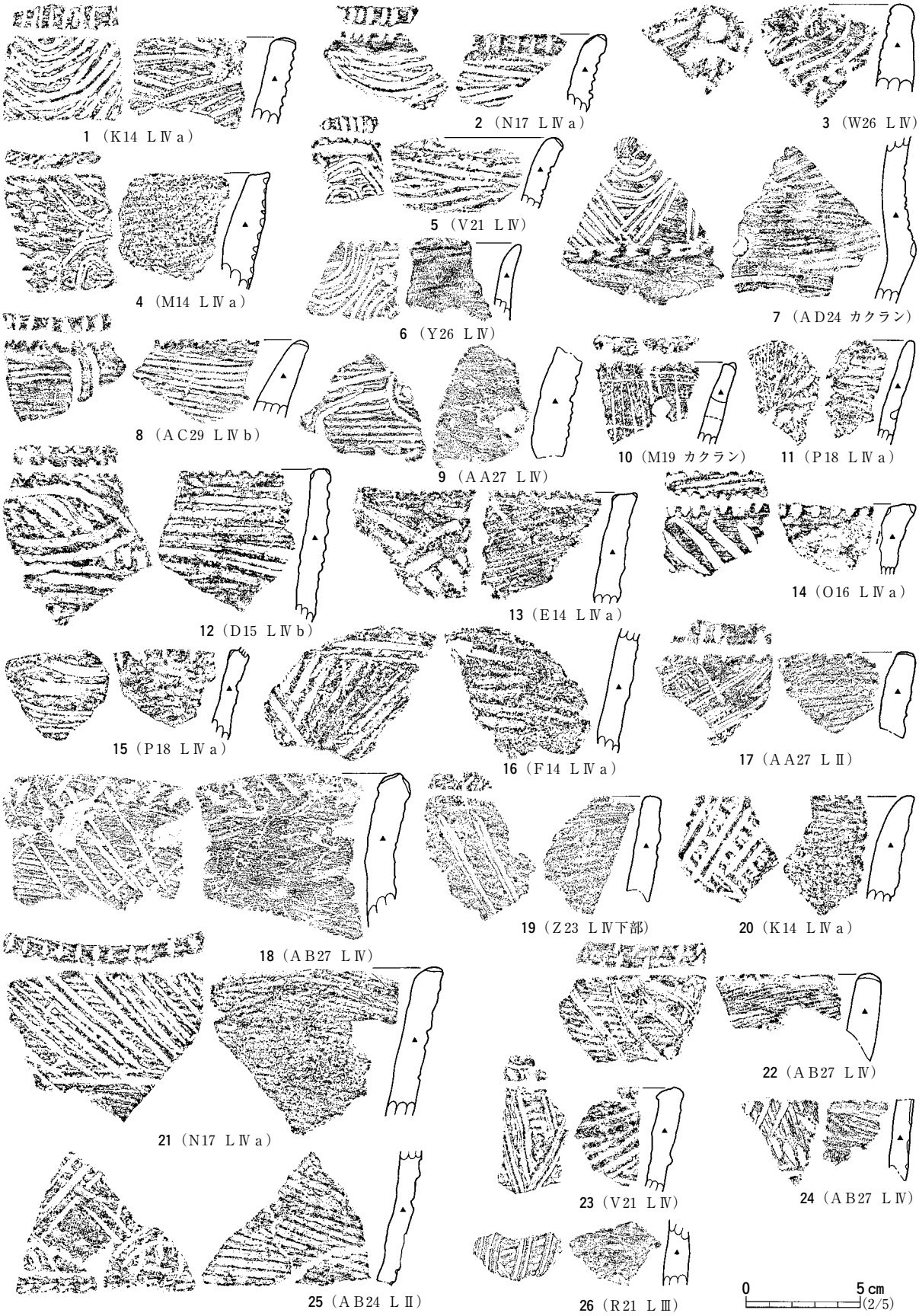


図148　遺物包含層出土土器(26)　Ⅵ群土器

図149　遺物包含層出土土器(27)　Ⅵ群土器

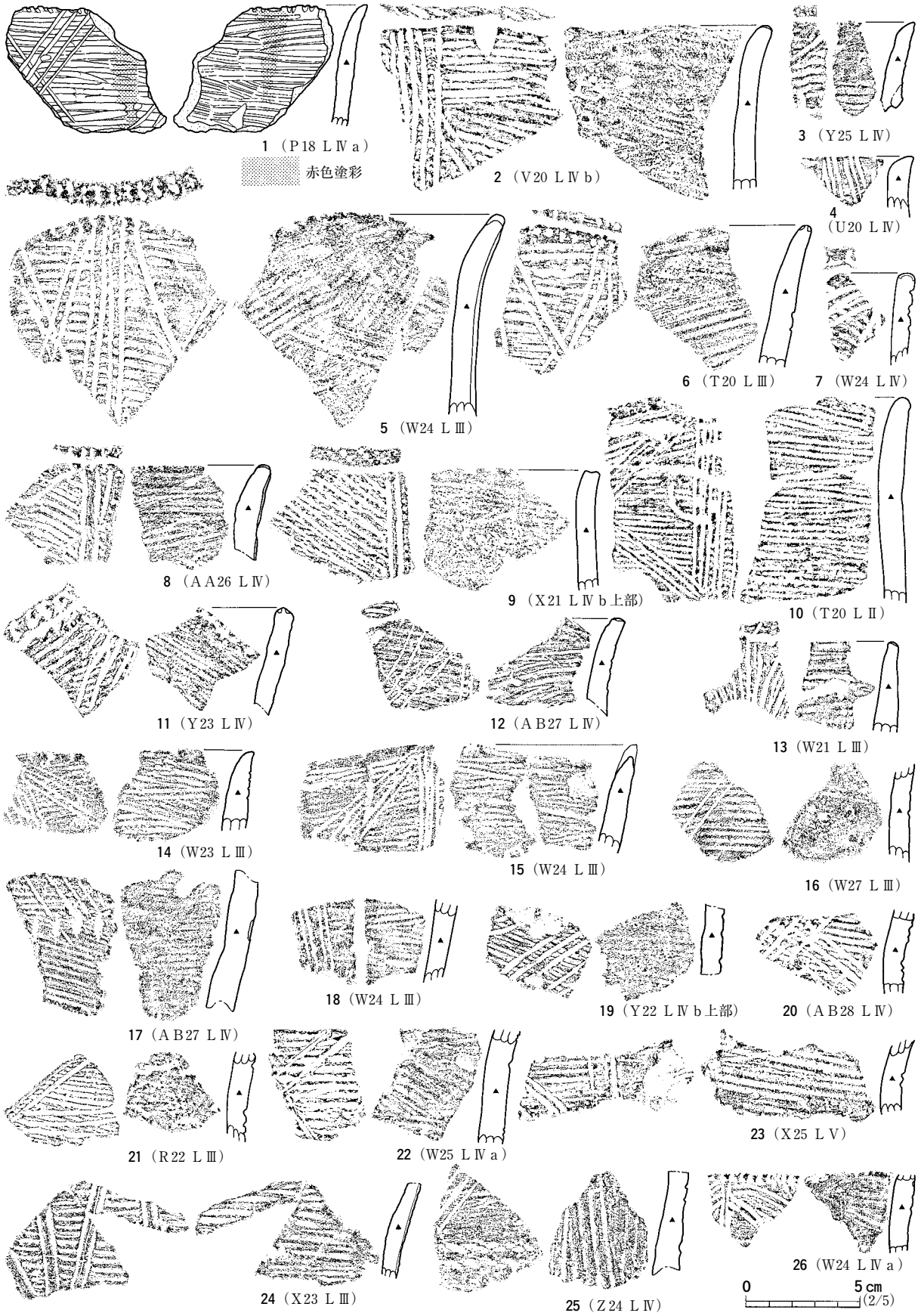


図150　遺物包含層出土土器(28)　Ⅵ群土器

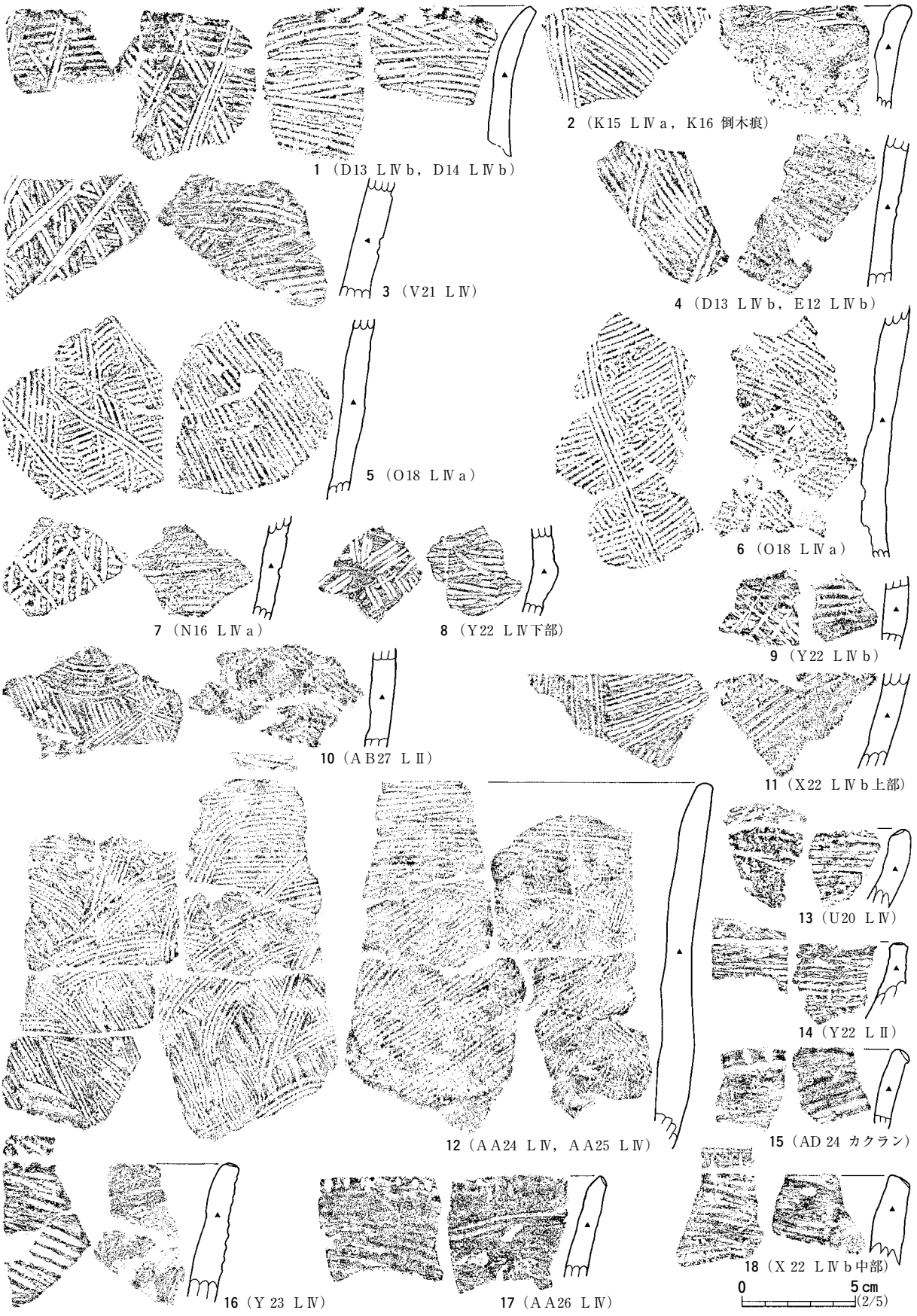


図151　遺物包含層出土土器(29)　Ⅵ群土器

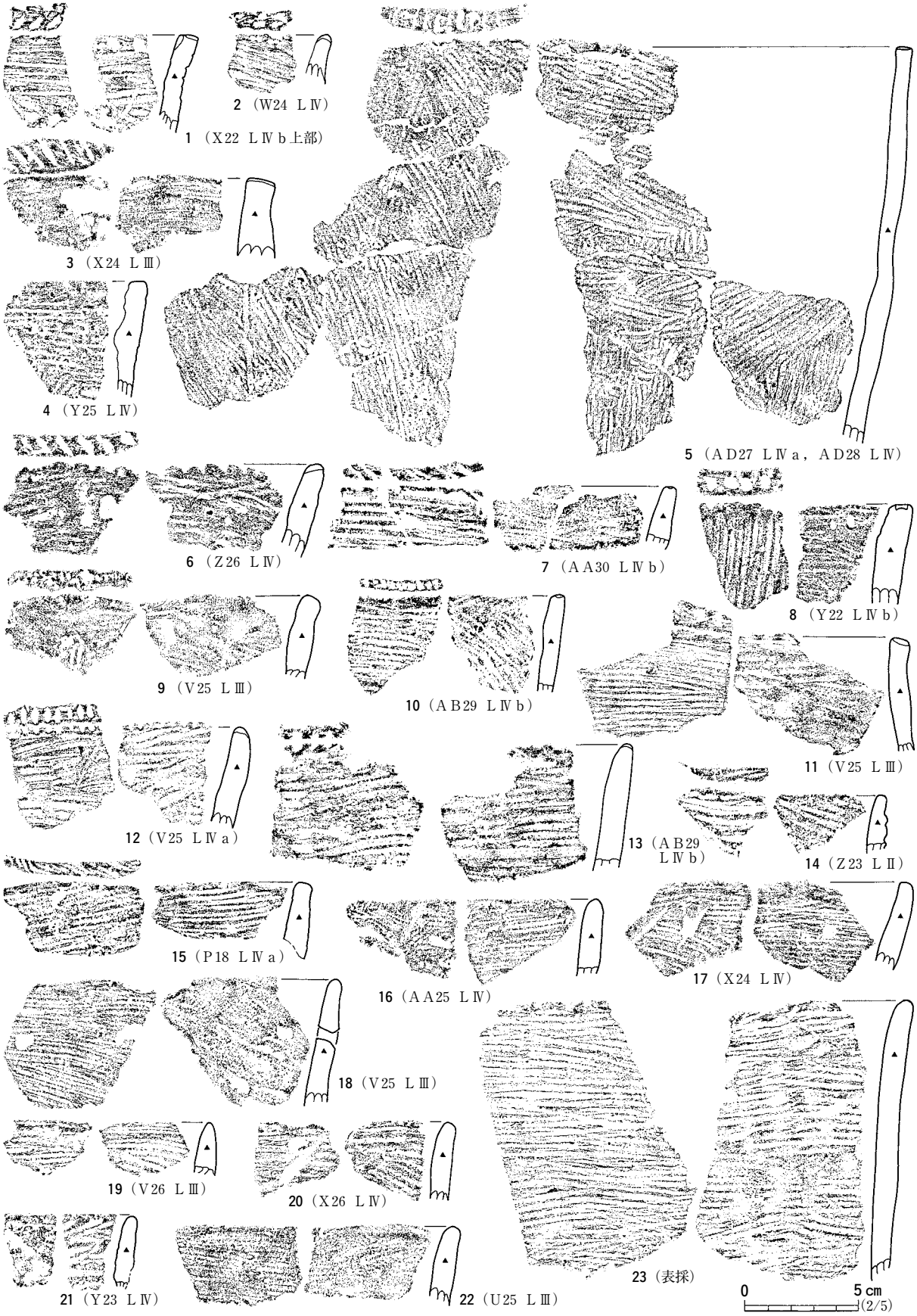


図152　遺物包含層出土土器(30)　Ⅵ群土器

図153　遺物包含層出土土器(31)　Ⅵ群土器

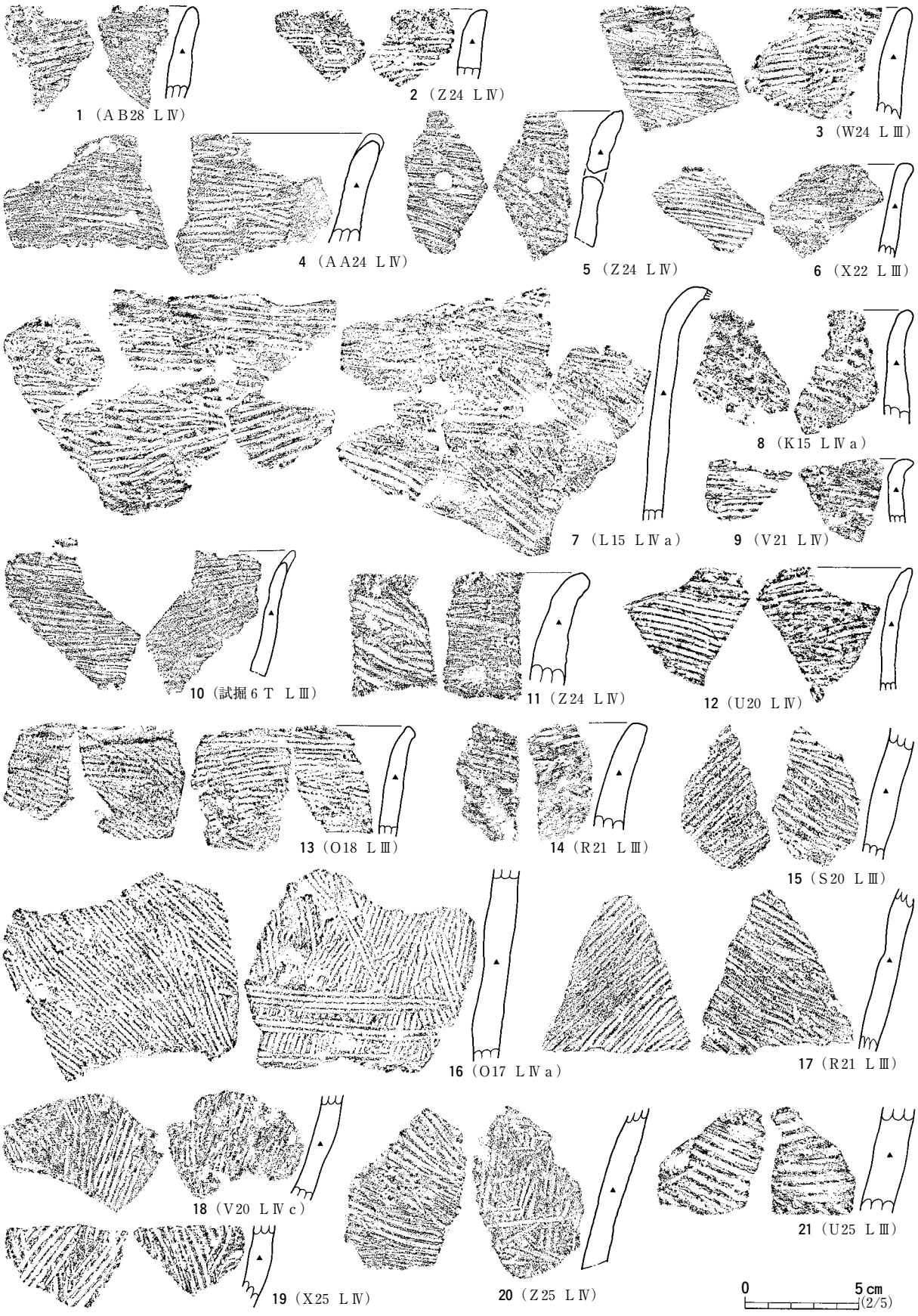


図154　遺物包含層出土土器(32)　Ⅵ群土器

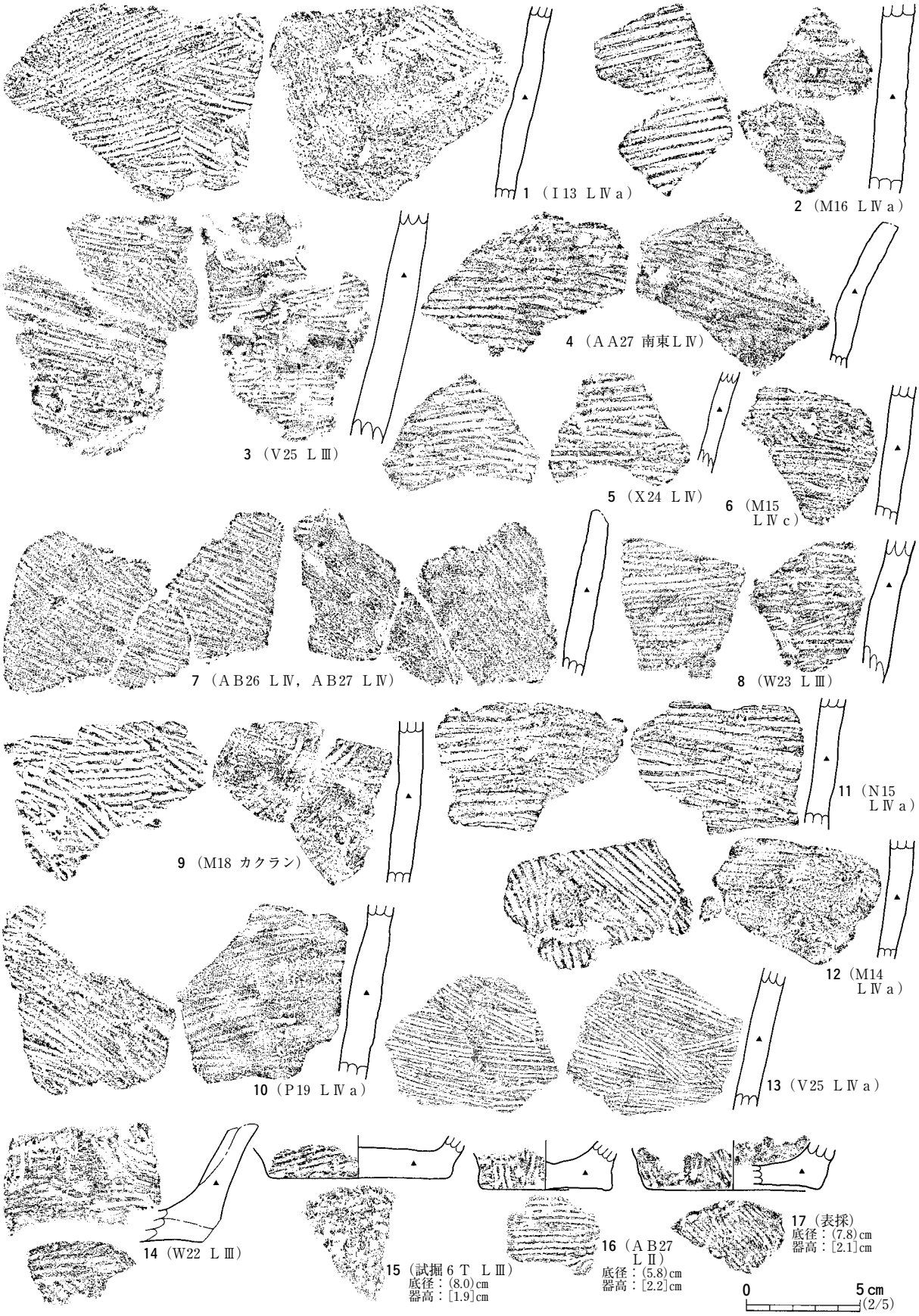


図155　遺物包含層出土土器(33)　Ⅵ群土器

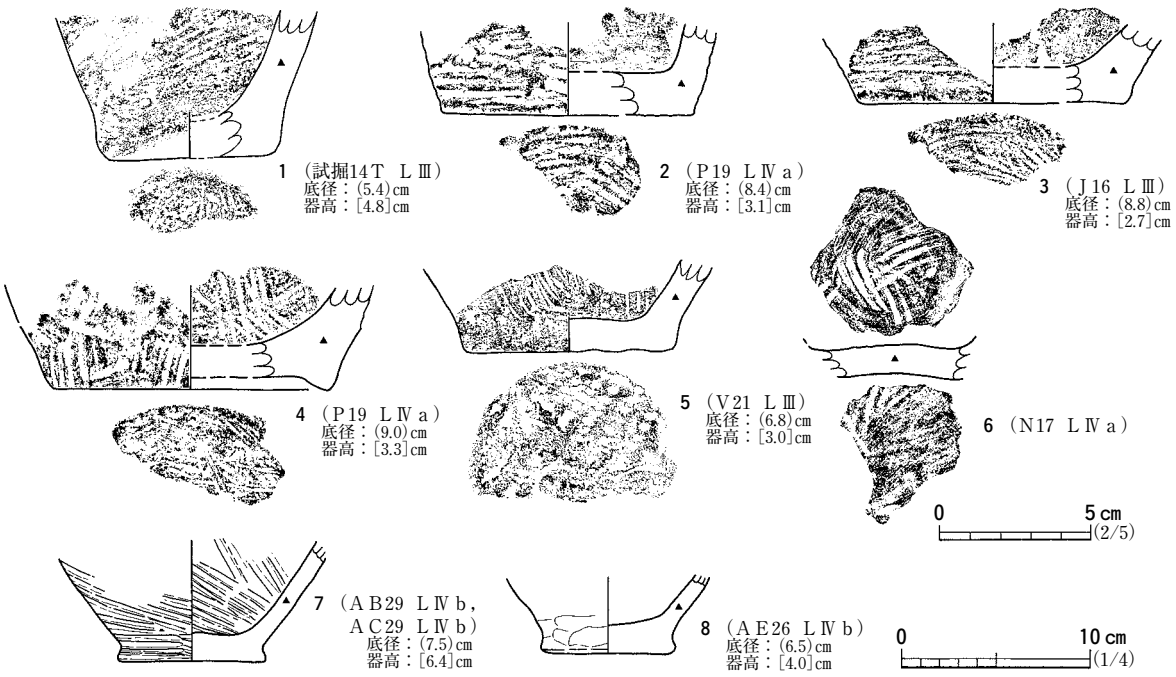


図156　遺物包含層出土土器(34)　Ⅵ群土器

となるものも認められる。図156－７・８は底面の張り出しが顕著である。

Ⅶ群　早期後葉の絡条体条痕に特徴づけられる土器（図157～162，図版158・159）

１類　絡条体圧痕が施されるもの。いわゆる常世２式である。図157～162に示した。口縁部がやや外傾ないし外反する器形で，波状・平縁の２種が見られる。底部は平底と上げ底の２種がある。内外に絡条体条痕を施し，口縁部を文様帯とする。文様は２～３条を１単位とした絡条体圧痕で描く。体部最下部にも縦位の絡条体圧痕を密に施文する。口端部には器面に平行に絡条体圧痕を施す。底面は条痕と圧痕の２種が認められる。器壁の厚さは10㎜前後である。胎土には石英粒など砂粒を多量含み，繊維を含んでいる。出土量は貝殻条痕文系土器に比しては少ない。分布は，１次調査区の北向き斜面と裾部からの出土が認められ，２次調査区からも若干出土する。出土層位はⅬⅣｂに比較的まとまって見られる。

ａ種：縦位に絡条体圧痕が施されるもの。図157－１～12に示した。１は同一個体と思われる底部と口縁部・体部破片の器形を推測したものである。底部から口縁部に向かって開く器形で，口縁部は波状となる。底部は上げ底となり，絡条体圧痕が施される。２は縦位の短い絡条体圧痕を並べて文様帯区画とする。文様は２条の絡条体圧痕を垂下させる。

ｂ種：縦区画に斜位の文様を加え肋骨状に施すもの。図158－１～９に示した。１は横位の絡条体圧痕で文様帯を区画し，下位に半截竹管の縦方向の刺突を加える。３は右下がりの絡条体圧痕に縦区画を加えたものである。

ｃ種：山形文が描かれるもの。図159－１～６・図161－１～９である。図159－１は横位の絡条体圧痕を１巡させ，文様帯を２段に区切っており，上位は縦位，下位は山形に絡条体圧痕を配する。図

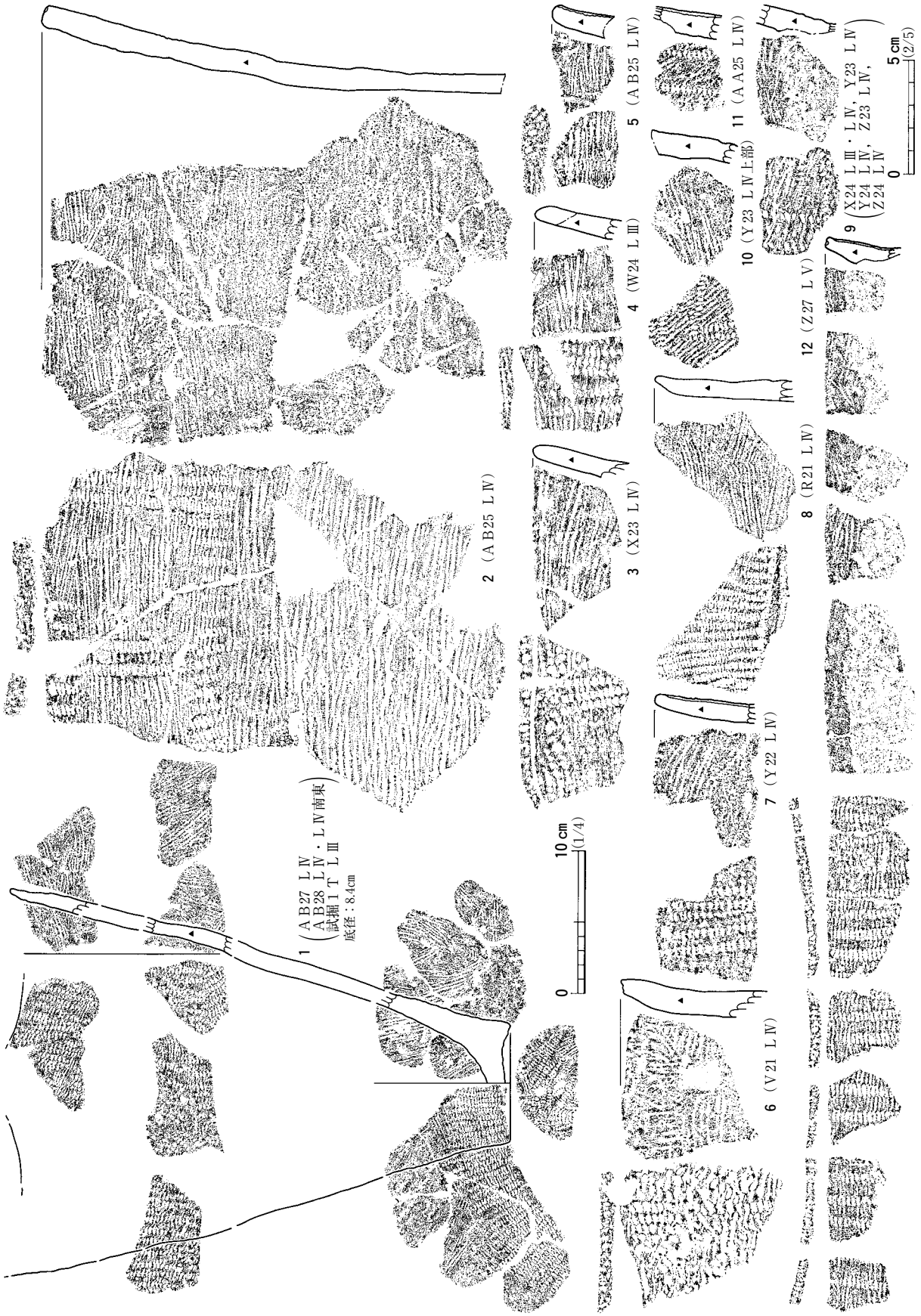


図157　遺物包含層出土土器(35)　Ⅶ群土器

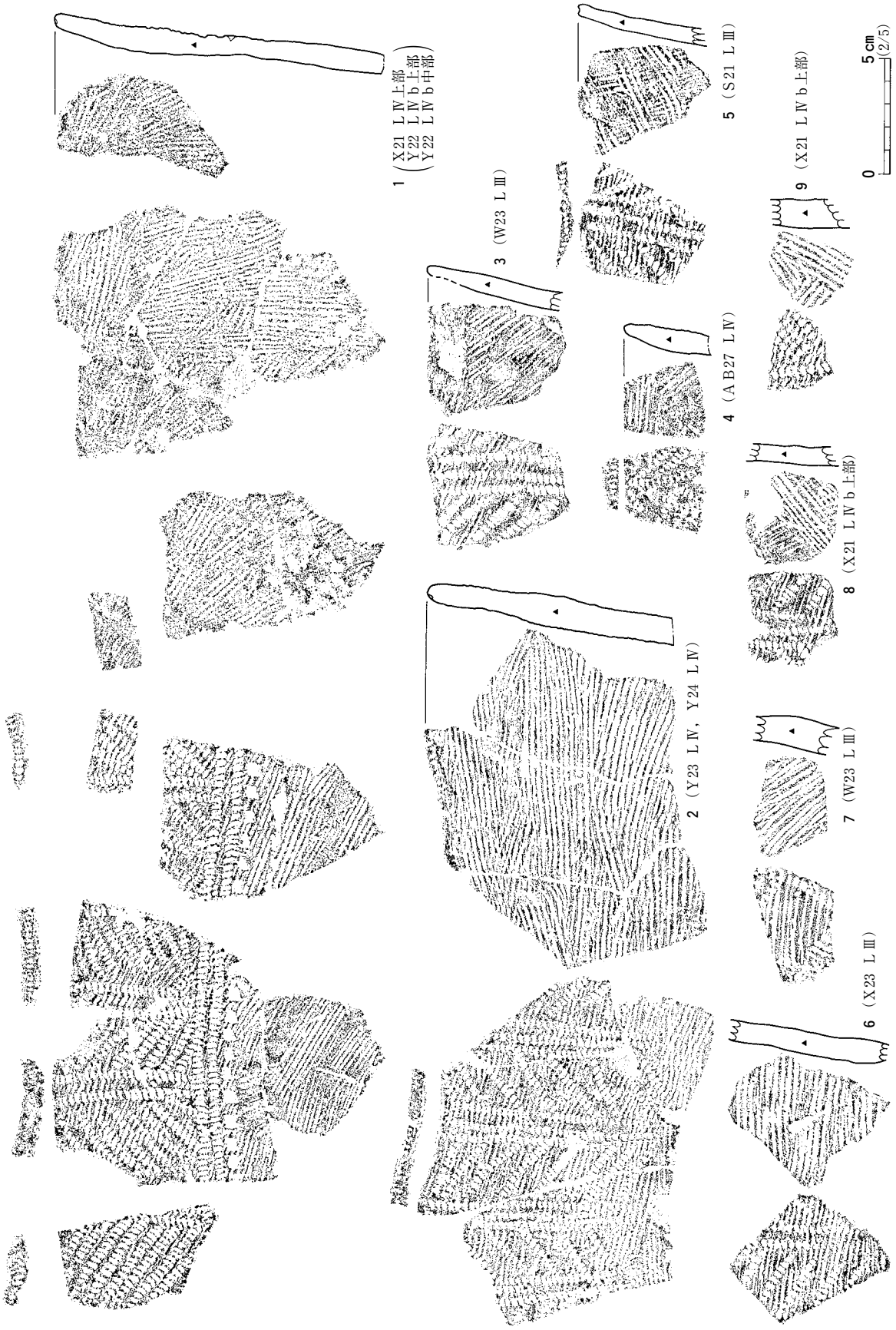


図158　遺物包含層出土土器(36)　Ⅶ群土器

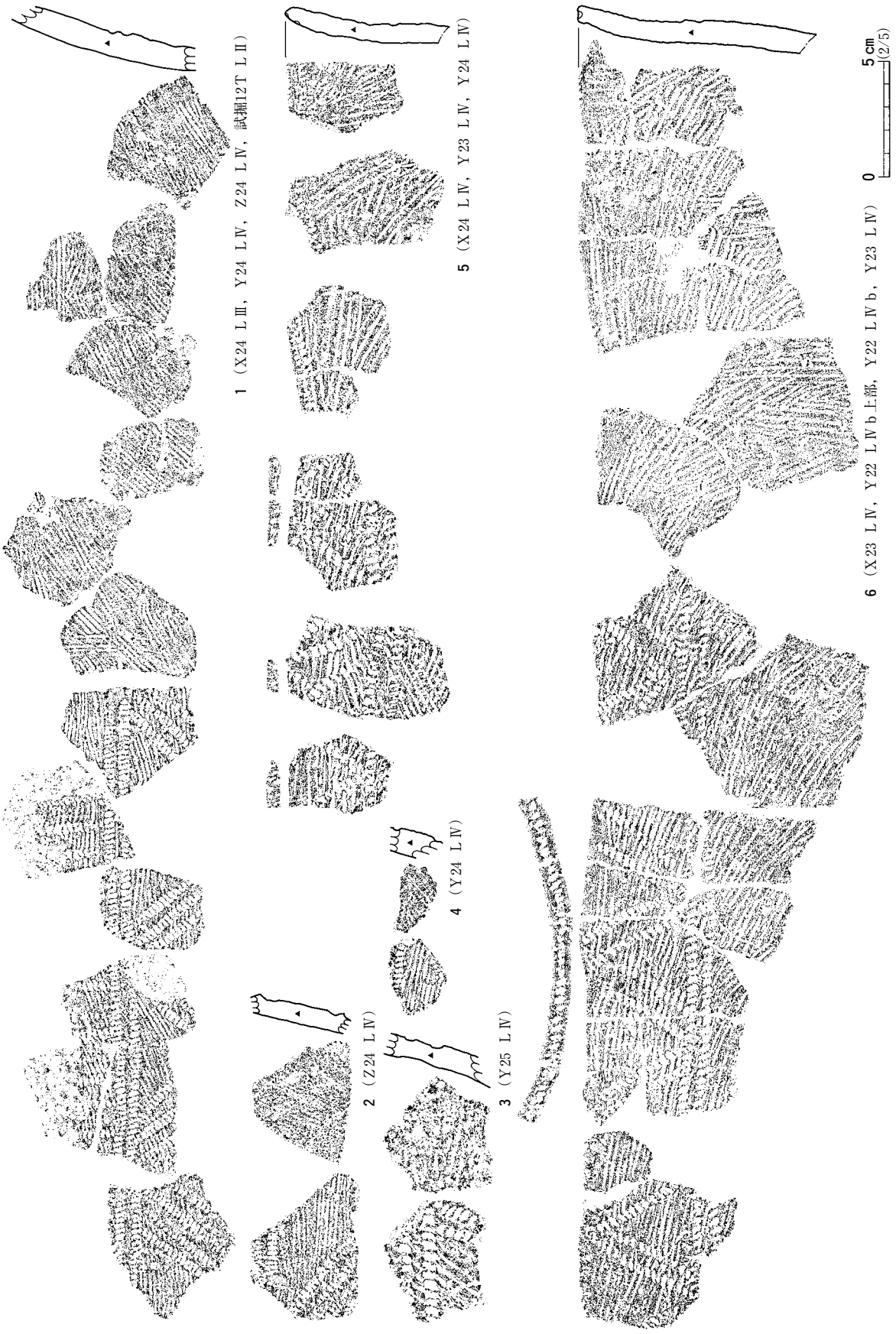


図159　遺物包含層出土土器(37)　Ⅶ群土器

図160　遺物包含層出土土器(38)　Ⅶ群土器

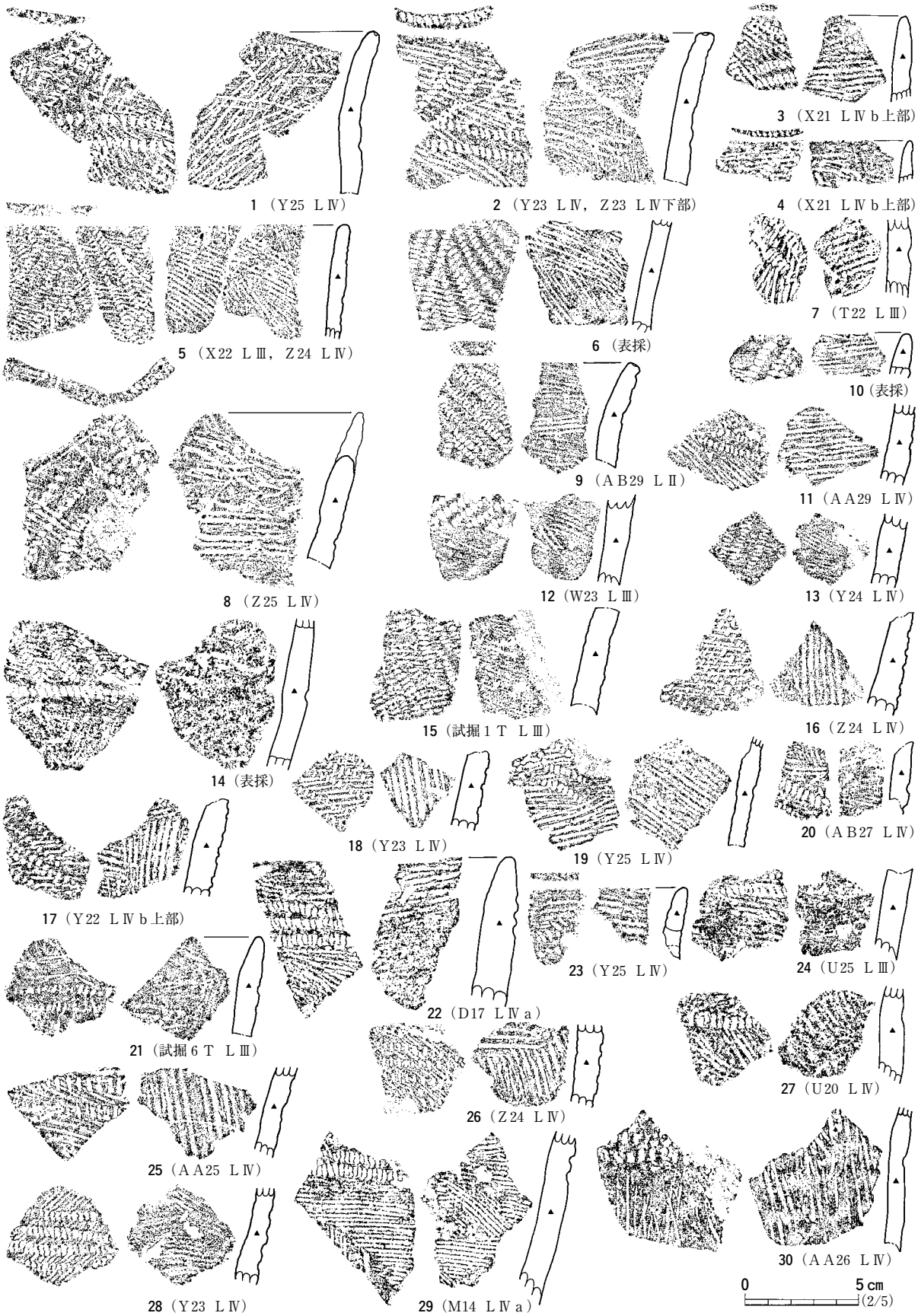


図161　遺物包含層出土土器(39)　Ⅶ群土器

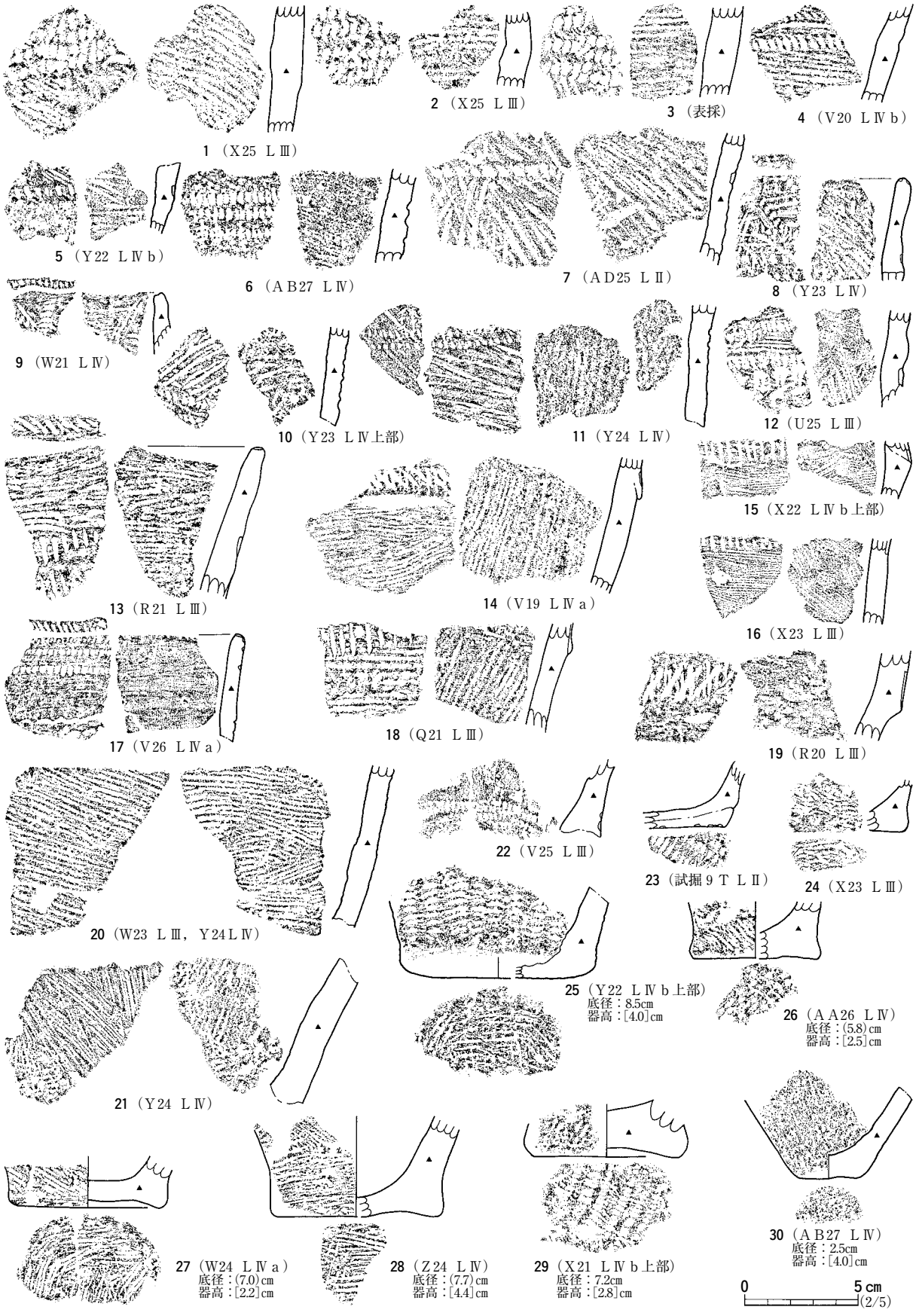


図162　遺物包含層出土土器(40)　Ⅶ群土器

159－５・図161－１は口縁部上端内面にも絡条体圧痕を一巡させている。

ｄ種：斜格子が描かれるもの。図160－１・４・５・図161－14である。図160－１は口縁直下に斜位の絡条体圧痕列を施し，１条の圧痕で斜格子を描く。文様帯下部の区画線はない。

ｅ種：斜位の絡条体圧痕が施されるもの。図160－２・３・図161－10～13・15～20である。図160－２はａ～ｄ種よりも文様帯が狭い。１条の絡条体圧痕で施文され，口縁部内面にも外面と同様の圧痕が施される。３は密に施文され，文様帯下部の区画は施されない。図161に示したのは細片で，他の文様の一部である可能性もある。

ｆ種：横位その他の文様が描かれるもの。図161－21～30・図162－１～11である。細片もあり，上記の文様の一部である可能性もある。

ｇ種：底部片を一括した。図162－22～30である。22・30のように体部下端に横位に絡条体圧痕を巡らすもの，25のように縦位の絡条体圧痕を巡らすものがある。23・26・29は底面に絡条体圧痕を施す。形態には27～29のような上げ底，30のような極端に小さい平底も認められる。

２類　口縁部と体部の境に刻みを施すもので，図162－12～16・18・19に示した。Ⅵ群２類とした土器の地文が絡条体条痕のものである。12は絡条体圧痕が横位に巡り，その下部に半截竹管による縦位の刺突を加える。以下はヘラ状工具による刻みが施されている。

３類　沈線文が施されるもの。図162－17である。８号住居跡出土の深鉢(図35－１)もこれにあたる。17は口端部に刻みを加え，沈線内に串状の細い工具による刺突を付した有節沈線を２条口縁直下に巡らせる。無文帯を挟んで以下は小波状の平行沈線が見られる。胎土は密で，砂粒を多量含むが，繊維の含有量は１・２類に比して少ない。

４類　地文の絡条体条痕のみ認められるもの。図162－20・21に示した。

Ⅷ群　早期後葉から末葉の地文斜縄文土器（図163～168，図版160・146）

１類　沈線文によって格子などの文様を描くもの。図163－１～22に示した。口縁部は外反し，波状となるものが多い。口端部には半截竹管状工具による刺突が施される。器壁の厚さは７～10㎜程度で，胎土に砂粒を多量に含み，繊維を少量含んでいる。いわゆる北前式に近い文様が描かれる。１次調査区のＵ～Ｘグリッド付近の尾根から北斜面にかけての部分から多く出土する。２次調査区でも散発的に出土する。

ａ種：文様帯が無地・条痕地であるもの。図163－１～７・10～12・22である。波頂部下に縦区画を加え，円形文を伴う格子状の文様を描く。縦区画には７のように半截竹管の刺突を沿わせるものも認められる。また，文様帯区画は，６・12が半截竹管刺突，５が刺突を伴った稜，10・11は縄圧痕を用いる。22は縦位の平行沈線を密に施文する。

ｂ種：文様帯が地文縄文であるもの。図163－８・９・13～21である。モチーフの分かるものは少ないが，ａ種と同様の直線を主体とした文様と思われる。文様帯区画には，８・21の半截竹管刺突や９・20のような絡条体圧痕，18のような沈線が見られる。

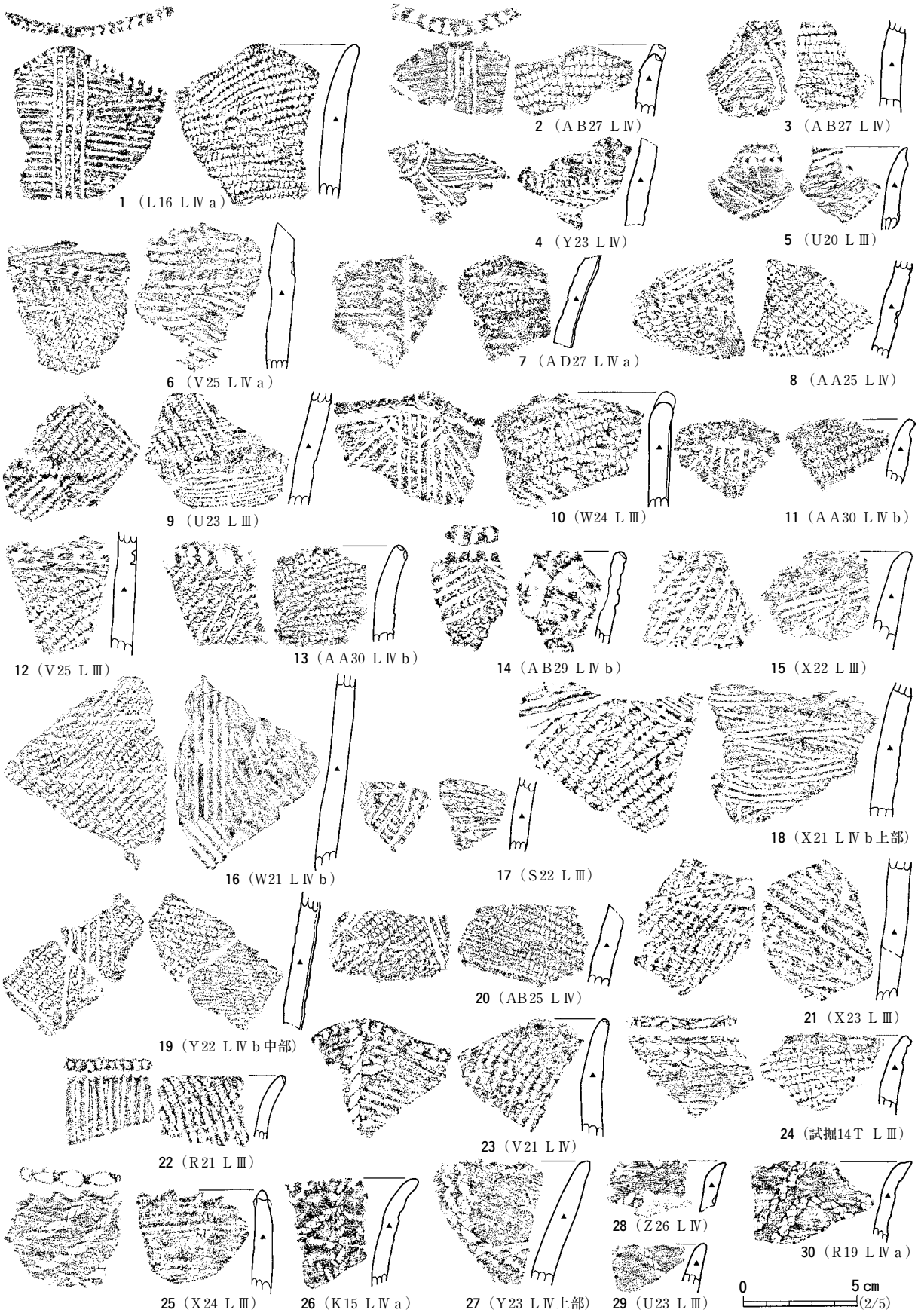


図163　遺物包含層出土土器(41)　Ⅷ群土器

２類　無文地に縄圧痕によって文様を描くもの。図163－23～30・図164－１～７・９・10である。薄手で口縁部が外反するもの，厚手であまり外反しないものがある。施文には単節ＲＬの縄が用いられる。調査区中央部Ｐ～Ｘグリッドの尾根から北斜面，Ｙ～ＡＡグリッドの裾部，２次調査区の尾根の縁などから散発的に出土する。出土層位はＬⅣａが多い。

図163－26・28～30・図164－５・６などは薄手で，胎土に砂粒をあまり含まず，繊維の含有量もさほど多くない。器壁は５～８㎜である。口縁部は外反する平縁のみ認められる。尖頭状となる口端部には棒状工具による浅い刻みが加えられる。内面は無文である。図163－28～30は10号住居跡出土土器(図39－１)と同一個体と思われ，弧状の曲線を用いたモチーフを描く。そのほかも同様なモチーフを描くと思われ，図163－26のような縦区画を加えたものも認められる。

図163－23～25・27・図164－１～４・７・９・10は厚手で，胎土に石英粒も含む砂粒を含んでいる。繊維の含有量は多くはない。どちらかといえば１類に近しい胎土である。器壁は７～10㎜である。図163－23は口端部に半截竹管刺突を加え，条痕文地に波頂部下に縄圧痕を１条垂下させる。同図24は口縁直下に２条の縄圧痕を施す。これらの内面には縄文が確認できる。同図25は口端部に棒状工具を押しつけて小波状とする。外面は斜方向の縄圧痕が確認でき，内面には条痕が見られる。これら以外は内外面とも無文で，器面は丁寧にナデている。

３類　縄文地に縄圧痕によって文様を描くもの。図164－８・11～15・図167－13・14である。胎土に砂粒を多量含み，繊維は少量含む。胎土は１類土器に似る。器壁は８㎜程度である。図163－８・11～13と同図15・図167－14・15はそれぞれ同一個体で個体数は少ない。いずれも地文・圧痕には０段多条の縄を用いる。図167－14・15のように口縁部が棒状工具押捺により小波状を呈するものが見られる。文様はいずれも縦位・横位の区画が認められる。分布の状況および出土層位は２類と同様である。

４類　文様のないもの。図164－16～26・図165・図166・図167－１～12・15～24・図168である。口縁部は端部が尖頭状となり外反するものが多い。本群土器の中で最も数量が多い。出土状況は１～３類同様，中央部の尾根から北斜面を中心として裾部まで出土する。調査区西部の谷でも若干出土している。出土層位はＬⅣａ・ｂが中心となる。

図164－16～26・図165－１～11は，外面縄文で，内面は口縁部に縄文以下に条痕が認められる。器形の復元できる図164－19は，口縁部に向かって開く器形で，底径がかなり小さい。口縁部は平縁である。底面はヘラ状工具によるナデ調整である。口縁部には補修孔が穿たれる。図164－16・26は口端部に刺突，図164－25・図165－１・５・７には口端部に回転縄文を施す。１・７は波状口縁となる。これら以外の破片も口端部から内面に向かって縄文を回転させているため，端部上に縄文が認められる。

図165－12～22・図166－１～３は外面縄文で，内面は口端部直下から条痕が認められる。口端部には，15～19が刺突，14・20～22は回転縄文が施される。図165－16・18・図166－３は波状口縁となる。図166－４～15は体部の破片で，12が内面縄文である以外は条痕である。

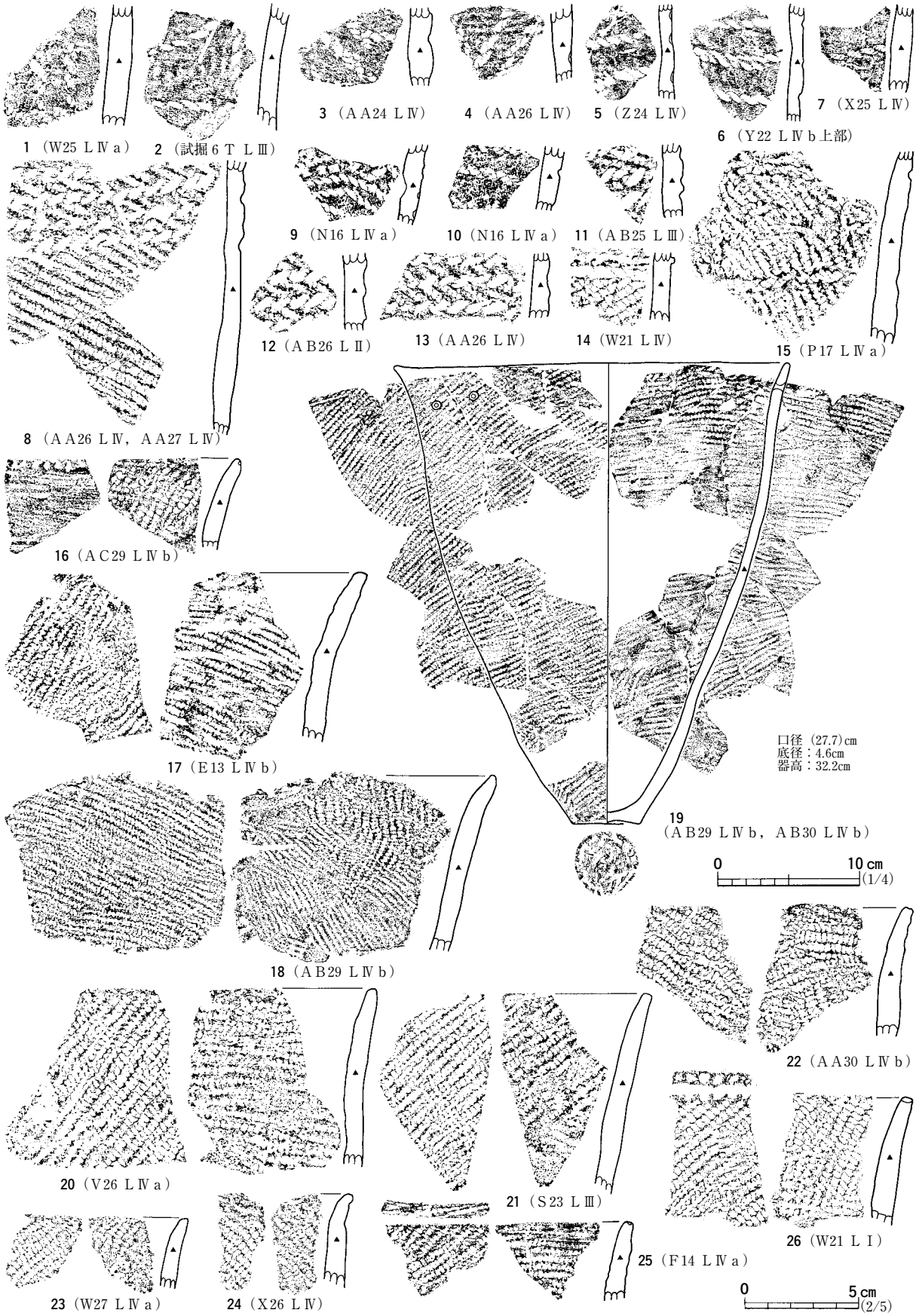


図164　遺物包含層出土土器(42)　Ⅷ群土器

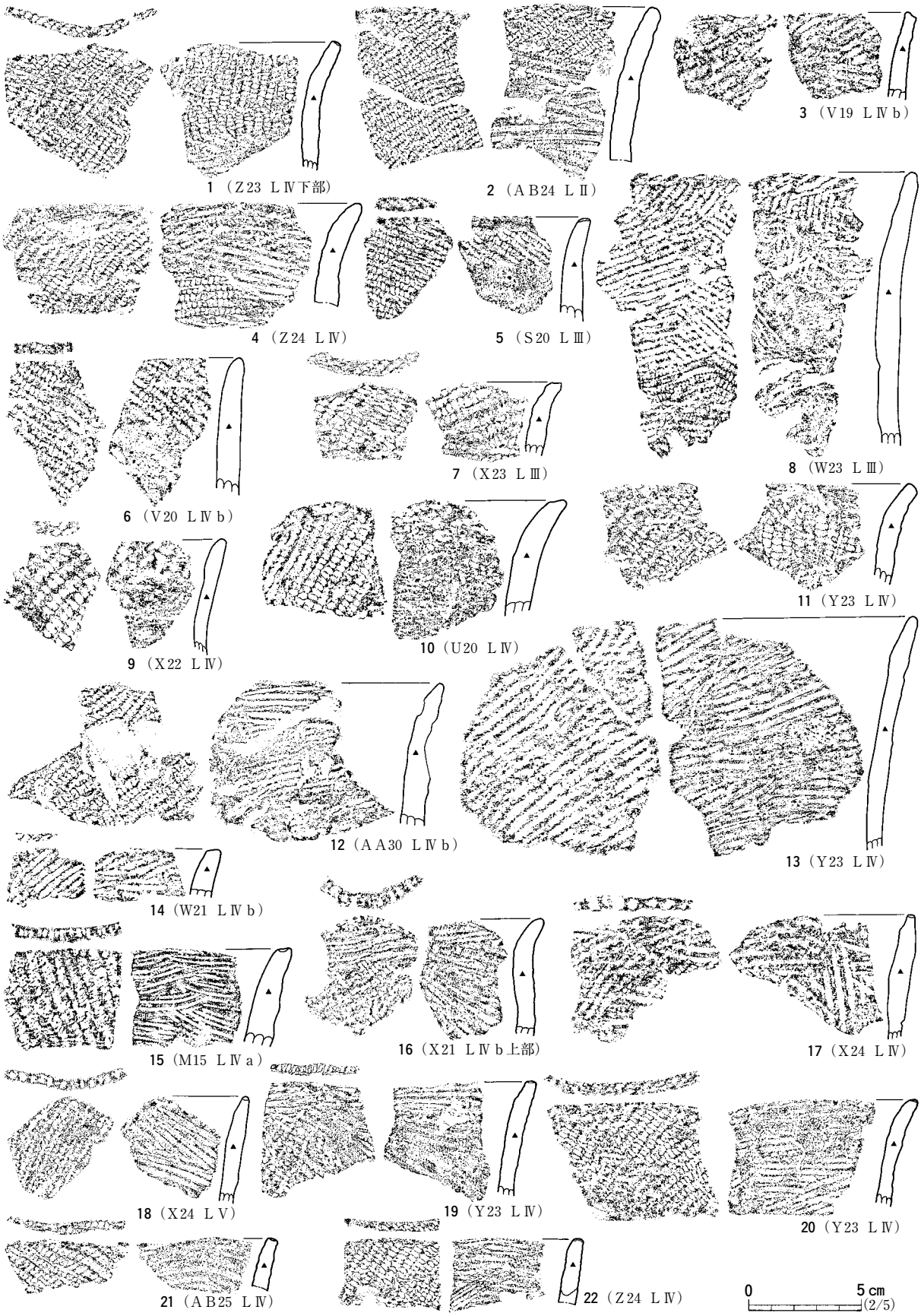


図165　遺物包含層出土土器(43)　Ⅷ群土器

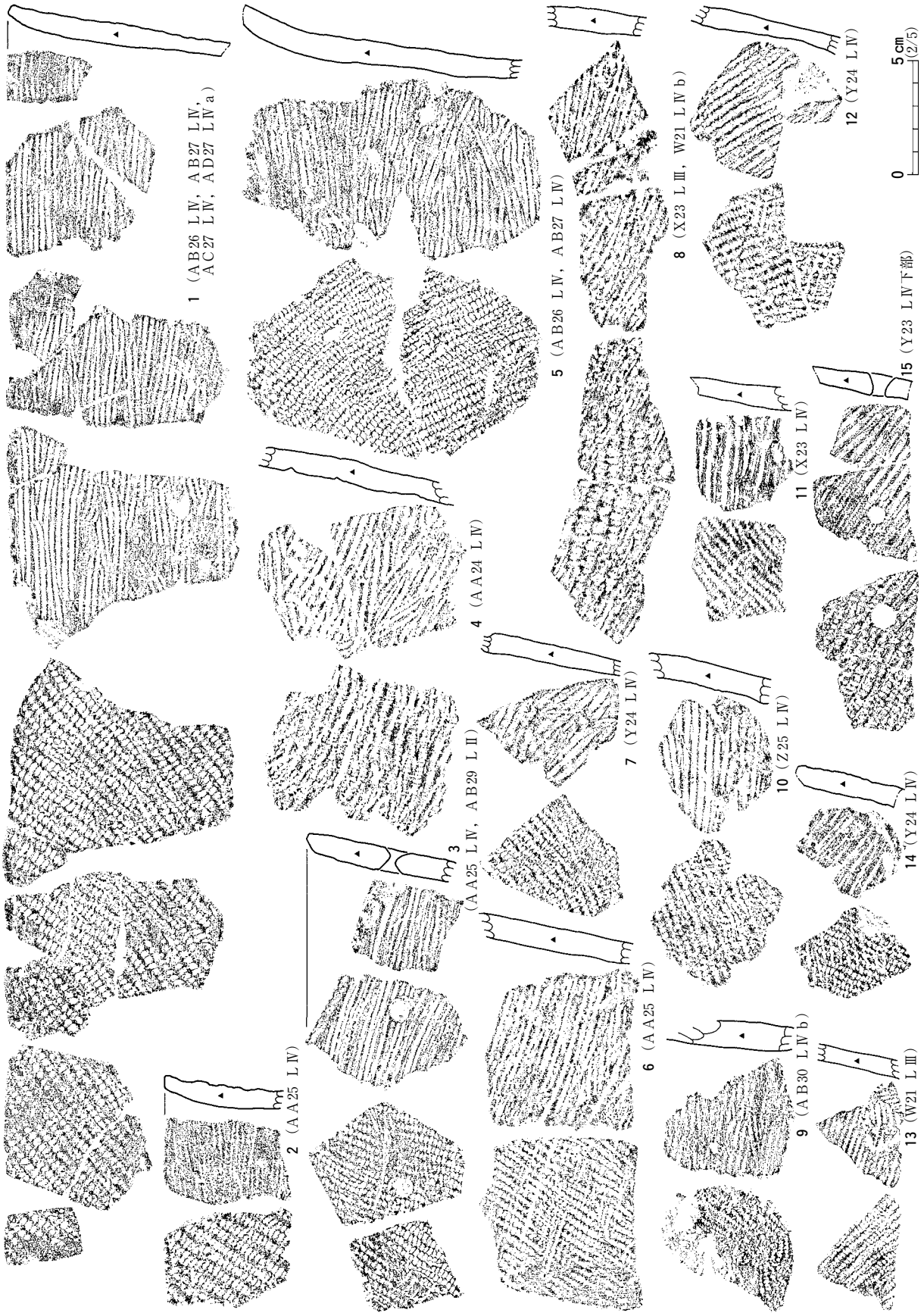


図166　遺物包含層出土土器(44)　Ⅷ群土器

図167　遺物包含層出土土器(45)　Ⅷ群土器

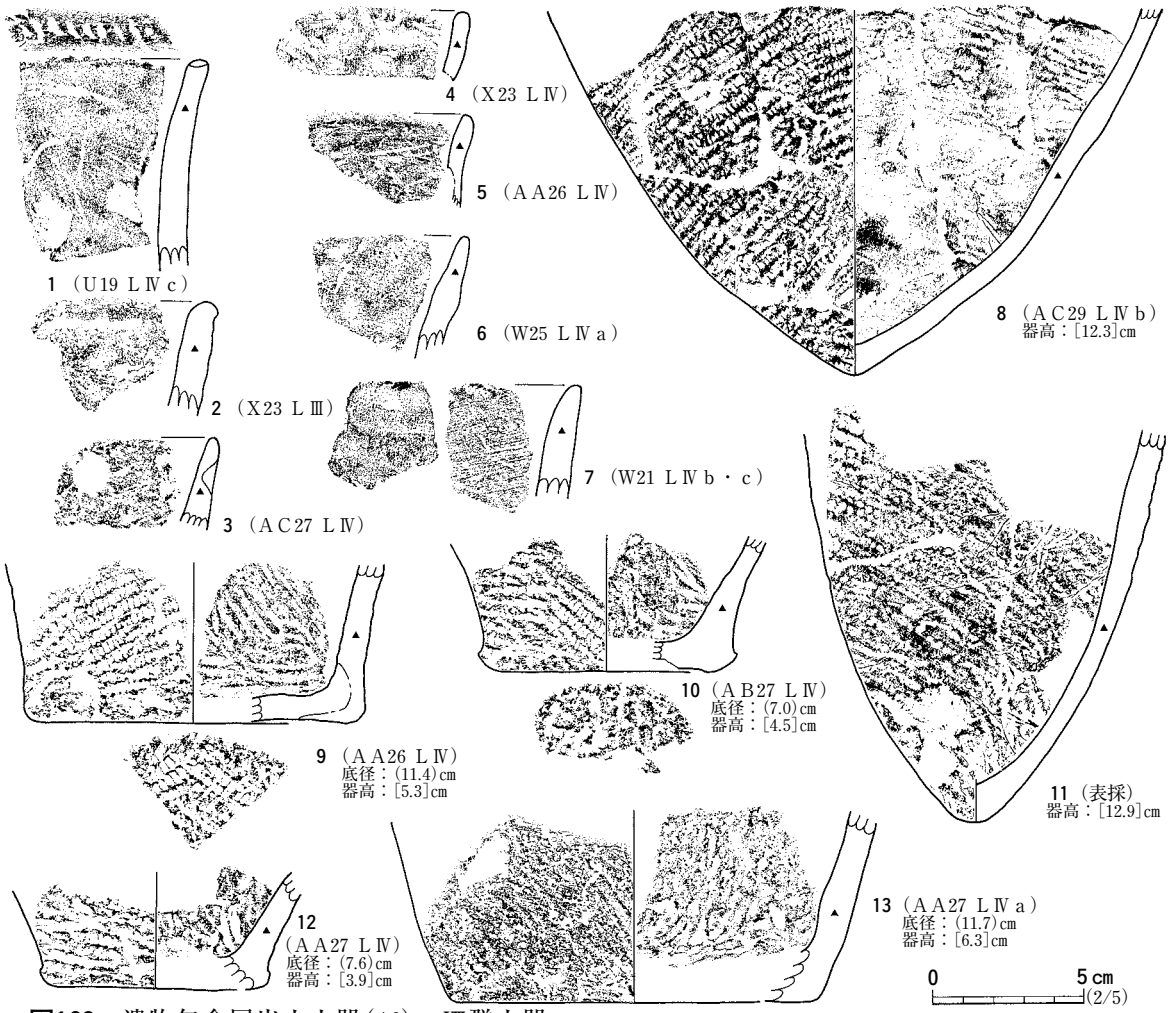


図168　遺物包含層出土土器(46)　Ⅷ群土器

図167－１～12・15～24は内面無文のものである。１は平口縁で，端部に刺突が施される。補修孔を穿とうとして途中で止めている。３は口端部に０段多条の縄の側面圧痕が見られる。同様に４・15・20は半截竹管による刺突，２・７・10・11は回転縄文，５・６・８・12などは刻みが施されている。24は尖底部に近い破片である。

図168－１～７は無文の口縁部である。１の口唇部上には刻みが施されている。３は穿孔途上の補修孔が見られる。同図８～13は底部を集めた。尖底と平底が見られる。平底は９・13のように径10cm以上の底部から外傾して立ち上がるものと，10・12のような径７cm前後の底部から外反気味に立ち上がるものがある。９の底面には回転縄文が施される。８・11は尖底となる。

Ⅸ群　早期末葉の土器（図169～178，図版161～163，146）

１類　外面地文が撚糸文の土器。大畑Ｇ式に比定されるものである。図169～176に示した。口縁部は平縁のみ認められ，端部が強く外反するものが多い。体部は直立するものが多く，外傾するものも認められる。底部は尖底のみ認められる。器壁は他に比べて厚く，10㎜前後が多く，厚いものでは15㎜を超すものもある。胎土には砂粒・繊維を多量含む。また金雲母が認められるものもある。

焼成は良好だが，繊維が多く軟質な印象を受けるものが多い。文様は半截竹管凹部を用いて施文するものが多く，その他の工具はあまり見られない。口縁部内面には条痕もしくは撚糸文が施され，体部内面には条痕が施されるものと，無文もしくは擦痕が残るものがある。口縁部の外反の度合いが強いものは口縁部上端内面に撚糸文が施文され，それほど強くないものについては体部と同じ条痕を施す傾向にある。分布の状況は調査区西部の谷部，中央部の北斜面などから多量に出土する。出土量が最も多く，大破片・接合資料も多数見られる。出土層位はＬⅢ・ＬⅣａが多い。

ａ種：沈線による施文を持ち，内面条痕のもの。図169－１～３・図170－１～12・図171－１～25・である。地文の撚糸文は縦位・斜位に重なるように施文される。口縁部はいずれも外反し，端部が尖頭状となる。

ａ１種：直線による図形が描かれる。図169－１は格子に斜格子を合わせた文様が描かれる。体部内面には条痕，口縁部上端には撚糸文が施される。同図２・３は１と同様の文様の中央に横区画を加え，２段の文様帯に山形文を描くような形になる。内面については１と同様である。図170－１～５にはこれと同様な口縁部破片，図170－10～12・図171－１～３には体部破片を示した。

ａ２種：図170－６～９・図171－４～11に弧線文を持つものを示した。図170に示したのは口縁部で，図171は体部片である。縦横の格子状区画の内部に弧線を配置するものが多く，図170－８・図171－５のように横区画の上下に向かい合わせに描くものもある。

ａ３種：図171－12～25のような上記のいずれか判別できない体部片である。

ｂ種：外面地文のみで，内面条痕のもの。図169－７・図172－１～13である。地文はａ種同様，縦位・斜位に密に施される。図172－３は口縁部が外反せず，端部が角頭に整形される。上面には器面と同施文具による撚糸文が施されている。

ｃ種：沈線による文様を持ち，内面無文もしくは擦痕が認められるもの。図169－４～６・図173－１～14・図174－１～24・図175－12～15・21・22・図176－８である。口縁部は外反し，口縁部内面に撚糸文があるものと無いものがある。地文はａ・ｂ種同様，縦位・斜位に施される。

ｃ１種：文様帯の上下で文様が異なるもの。図169－４は文様帯を２段に区画し，上位に山形文・下位に連弧文を施す。縦区画は見られない。図174－１はこれと同様の文様で，上段の鋸歯文にも弧線が伴う。いずれも内面は擦痕である。

ｃ２種：図169－５は文様帯を多段に区画し連弧文を描く。図169－７は文様帯が１段で，縦区画を付した鋸歯文が描かれる。図174－２～11・14は弧線を描くもので，これらと同様の破片と思われる。３・４・14は同一個体と思われ，端部の外反が極まって鍔状に迫り出す形態となる。上面には撚糸文が施される。

ｃ３種：ａ１種と同様の文様を描く。図173－１は格子と斜格子の組み合わせだが，斜格子が集合沈線化する。同図２～14・図176－８はこれと同様もしくは，これに横区画を加えた文様を描く。

ｃ４種：モチーフの判別の難しいもの。図174－12・13～24・図175－12～14・21・22のような縦横の区画のみが確認できるものである。

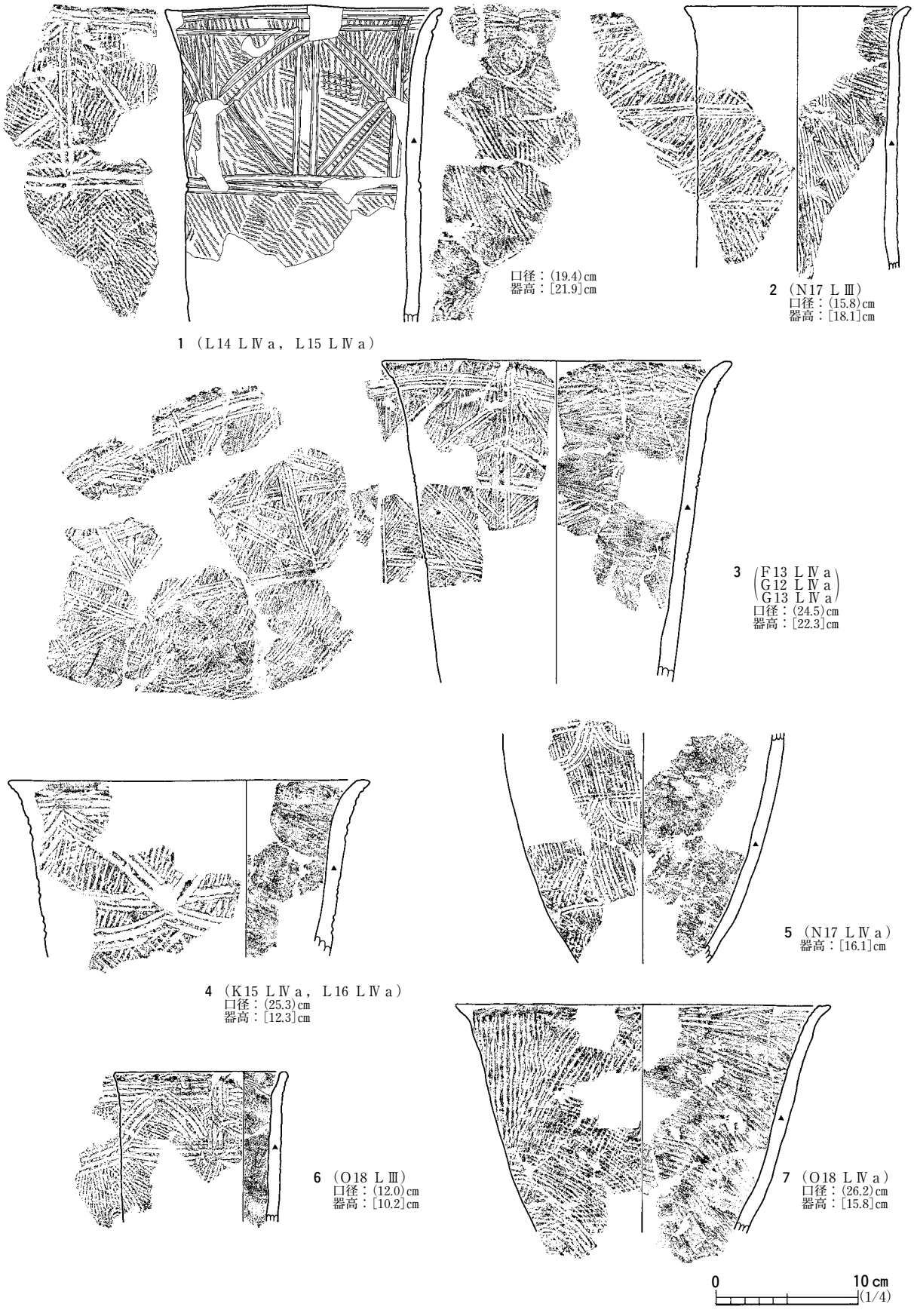


図169　遺物包含層出土土器(47)　Ⅸ群土器

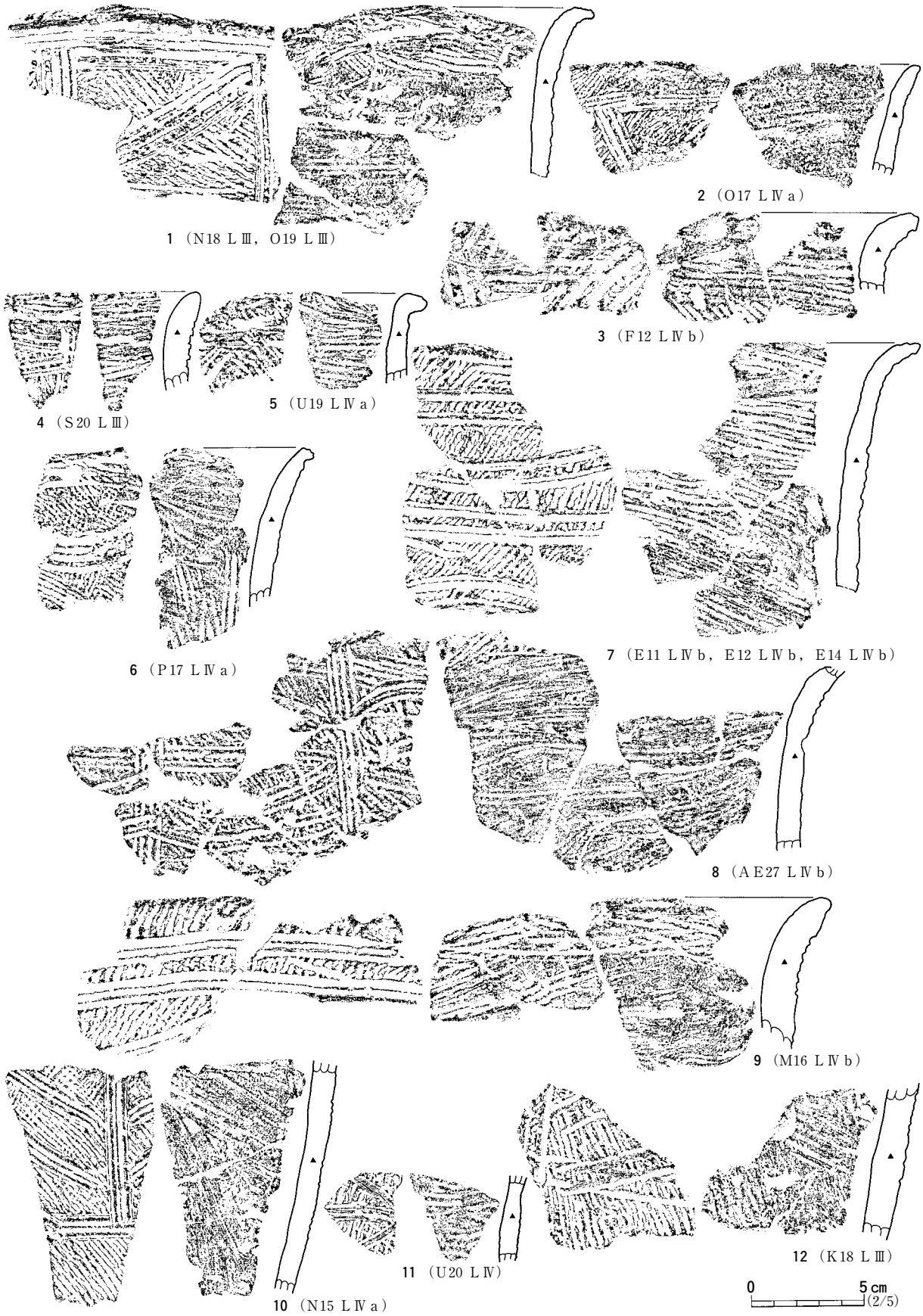


図170　遺物包含層出土土器(48)　Ⅸ群土器

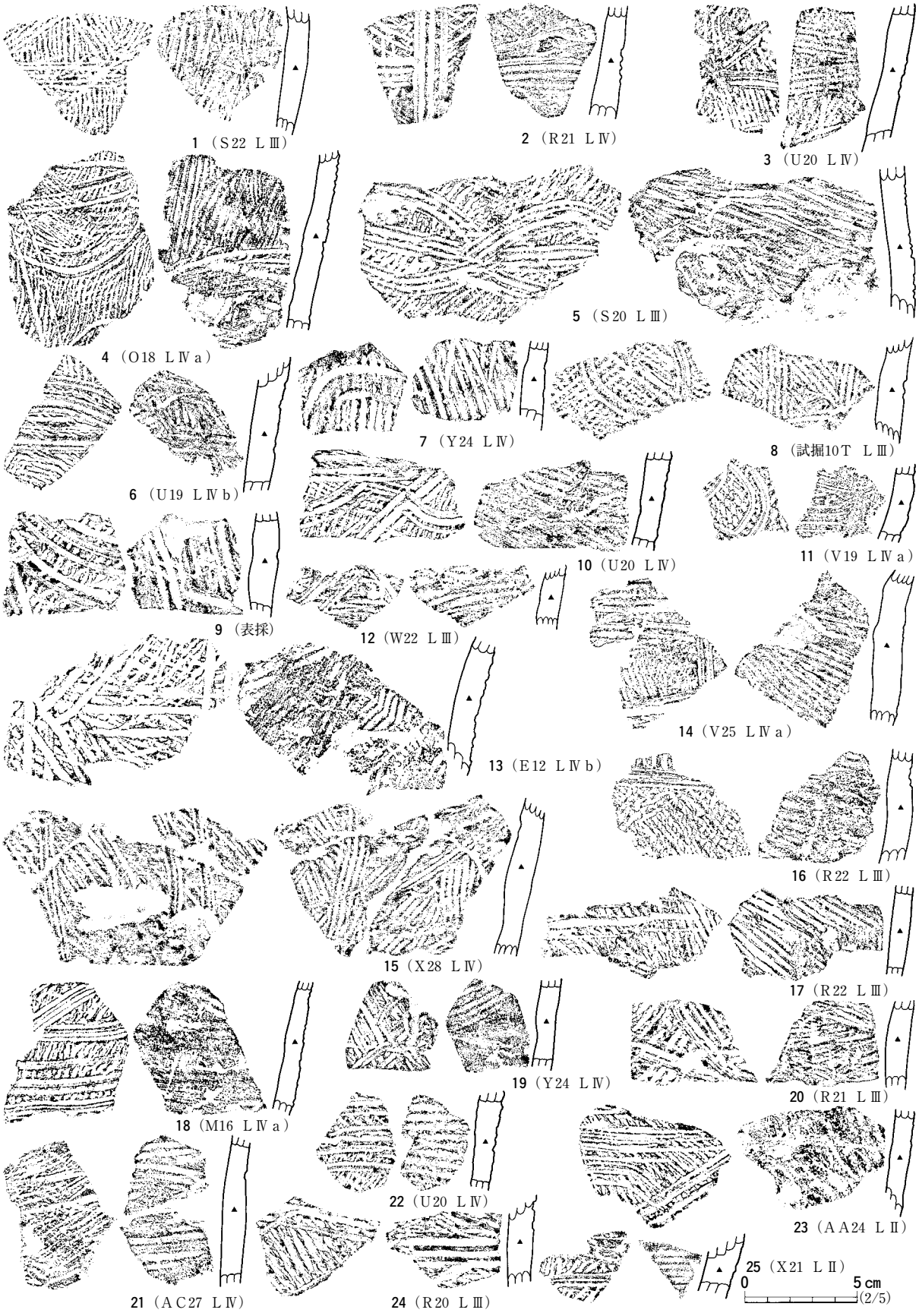


図171　遺物包含層出土土器(49)　Ⅸ群土器

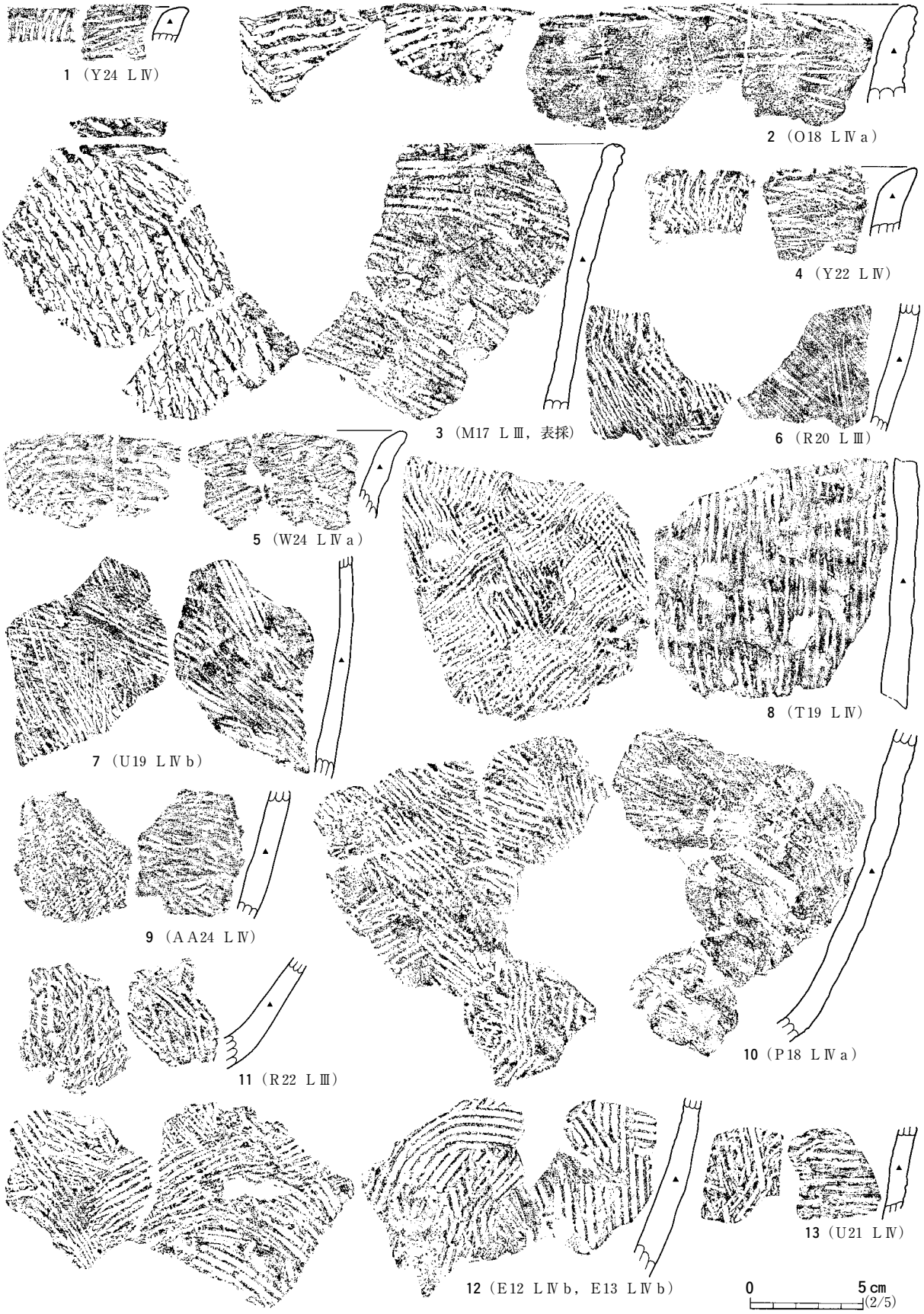


図172　遺物包含層出土土器(50)　Ⅸ群土器

図173　遺物包含層出土土器(51)　Ⅸ群土器

図174　遺物包含層出土土器(52)　Ⅸ群土器

図175　遺物包含層出土土器(53)　Ⅸ群土器

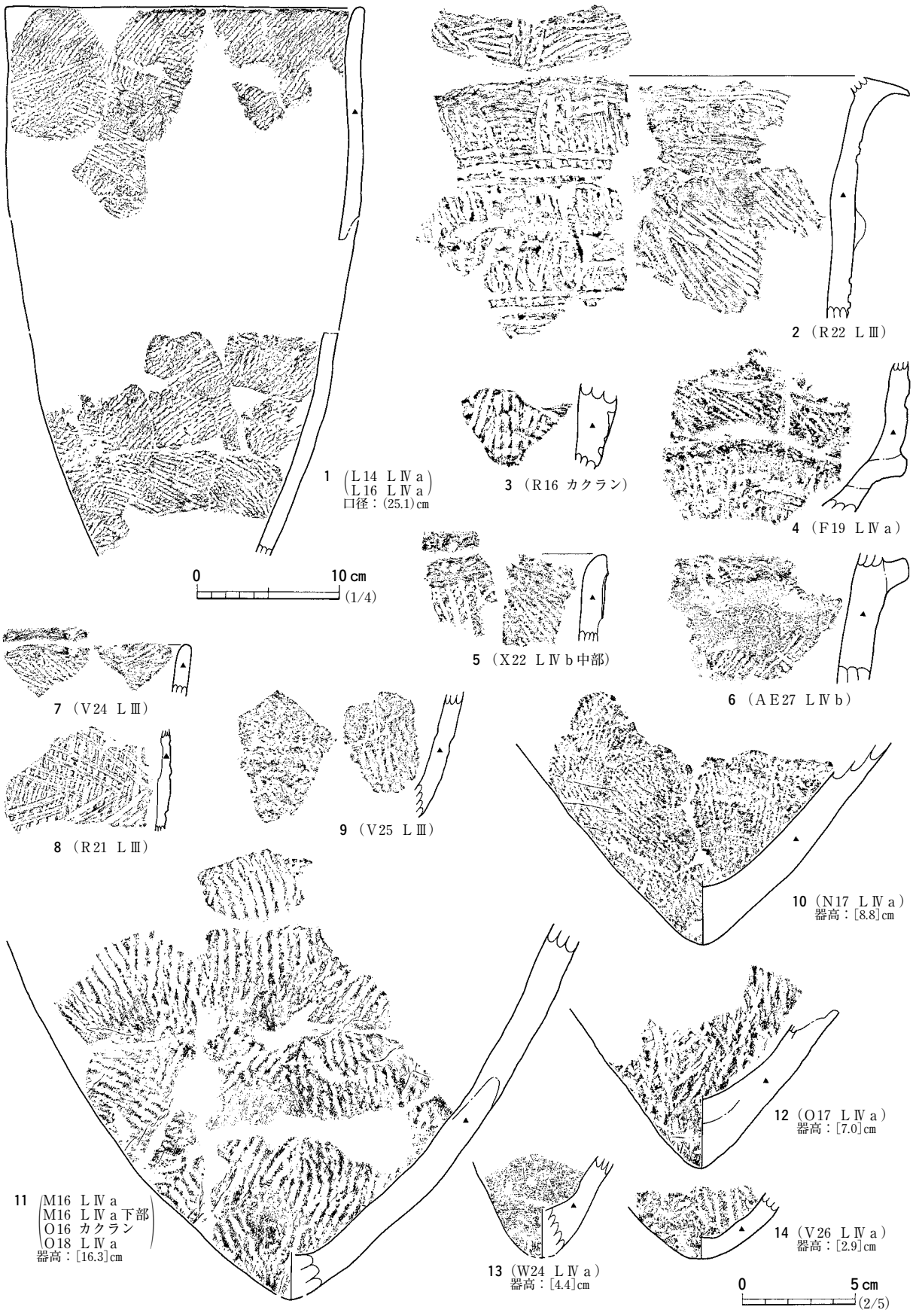


図176　遺物包含層出土土器(54)　Ⅸ群土器

ｄ種：外面地文のみで，内面無文のもの。図175－１～11・15～20・23～25・図176－１である。図176－１は，口縁部と体部下半の破片が出土したもので，上下は接合しない。口縁部は直立気味である。これと同様な口縁が図175－９～11である。これら以外の口縁部は外反する。図175－１～３は口縁直下に一旦施文原体の絡条体を押しつけてから回転施文するもので，絡条体押捺の痕跡が認められる。15以下は体部の破片である。

ｅ種：ａ～ｄ種以外の特異なもの。出土量は少ない。図176－２～７に示した。２は口縁部上端が鍔状に迫り出し，下位にも横位の隆帯が一巡する。外面地文は撚糸文であるが，内面，口端部には条痕が施される。地文は隆帯上にも及ぶ。文様は格子文である。３は櫛歯状工具による刺突が縦位に施される。内面には擦痕が認められる。４は体部の途中で屈曲し，隆帯状に張り出す器形である。文様は縦区画を有する弧線文を隆帯の上位に描く。内面は擦痕が認められる。５は外面には縦位の沈線が施され，内面に撚糸文が認められる。６は横位の隆帯が施され，下位に撚糸文が見られる。内面は無文である。７は直立する口縁部で，内外に撚糸文が認められる。

ｆ種：図176－９～14に示した底部である。いずれも尖底で，内面無文である。

２類　地文が縦走する縄文である土器で，集合沈線による鋸歯文・連弧文が描かれる。いわゆる日向前Ｂ式と呼ばれる資料と同類のものである。図177～図178に示した。口縁部は平縁のみ認められ，直立もしくは，やや外傾する。端部は丸・尖頭状で，細かい刻み状のスリットが加えられる。底部そのものは出土していないが，体部下半の破片から見るに尖底もしくは丸底である。内面には横方向のナデによる擦痕が認められる。器壁の厚さは７㎜程度が主体で，厚いものでも10㎜以下である。胎土には砂粒・繊維を含み，いずれも金雲母が含まれる。焼成は良好で，堅緻である。分布の状況は，調査区西部の谷，中央部の北斜面が主で，１次調査区からはほとんど出土しない。出土層位はＬⅣａが主であるが，ＬⅣｃも見られる。

ａ種：連弧文が描かれるもの。図177－１・３・４～６である。４の口端部には縄文が見られる。３は他に比べて異質で，口縁部が外反し，端部は尖頭状となる。文様は半截竹管によって波状文を描く。内面には条痕が施される。胎土も金雲母を含まず，軟質である。時期的に古いものである可能性がある。

ｂ種：鋸歯文が描かれるもの。図177－２・７～26である。14・15が横向きの矢羽状，25・26が重層山形(縦位の矢羽)状に施す以外は，集合沈線を鋸歯状に配するものである。また，２・19・21には文様帯の下位に連弧文が認められる。

ｃ種：太い沈線によって重層弧線文を描くもので，図177－27である。半截竹管を垂直に立てて施文していると思われ，平行沈線化していない。内面は擦痕である。

ｄ種：太い短沈線を矢羽状に配するもの。図177－28～30である。胎土や色調，内面の調整の状況などが似ており，同一個体の可能性がある。円形竹管を低角度で器面に押しつけ，抜くように施文する。口縁部上端外面に刻みが施される。28・30は横位，29は斜位に配する。

ｅ種：菱形文が描かれるもの。図178－１である。棒もしくは円形竹管を用いた沈線２条で菱形文を

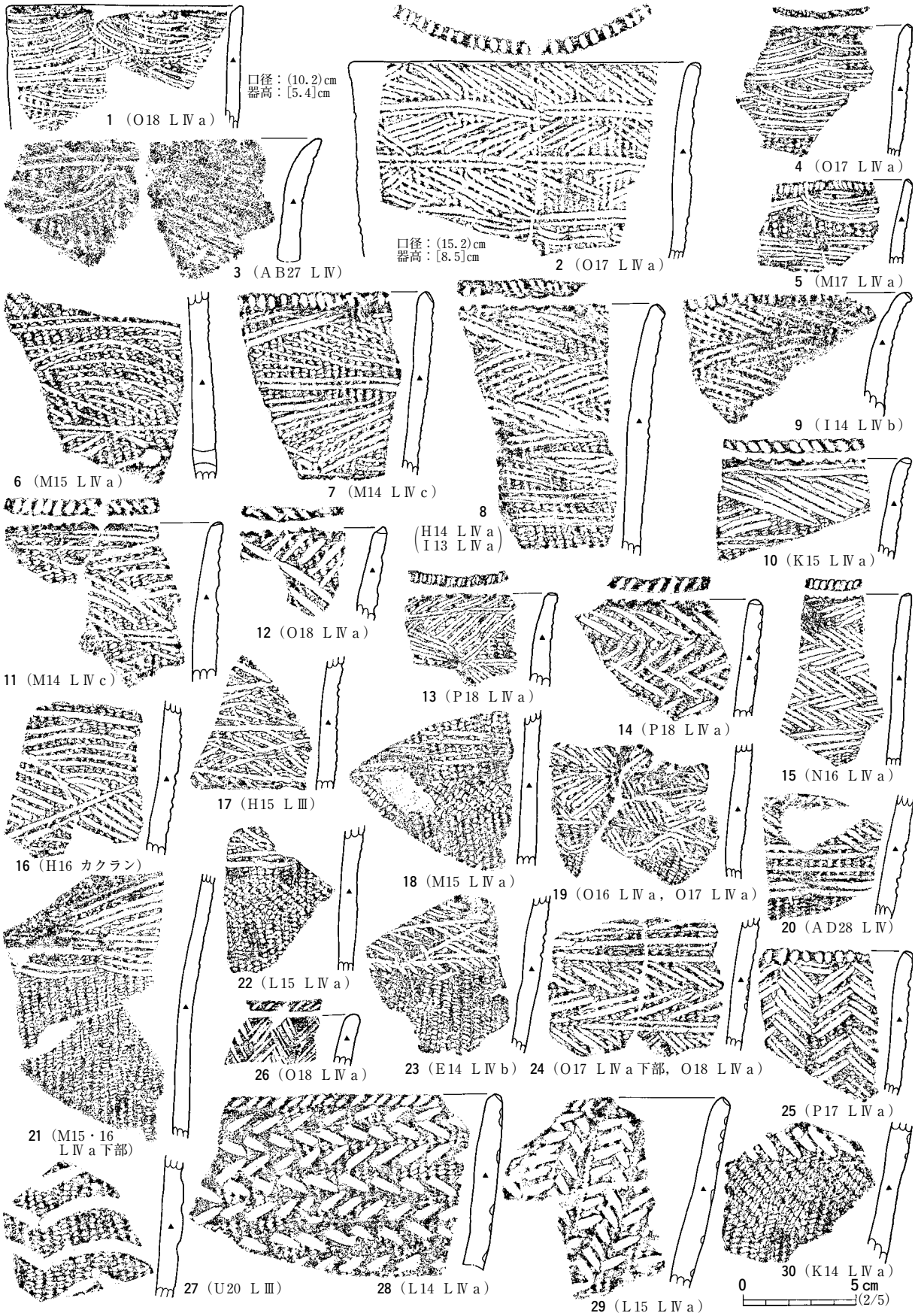


図177　遺物包含層出土土器(55)　Ⅸ群土器

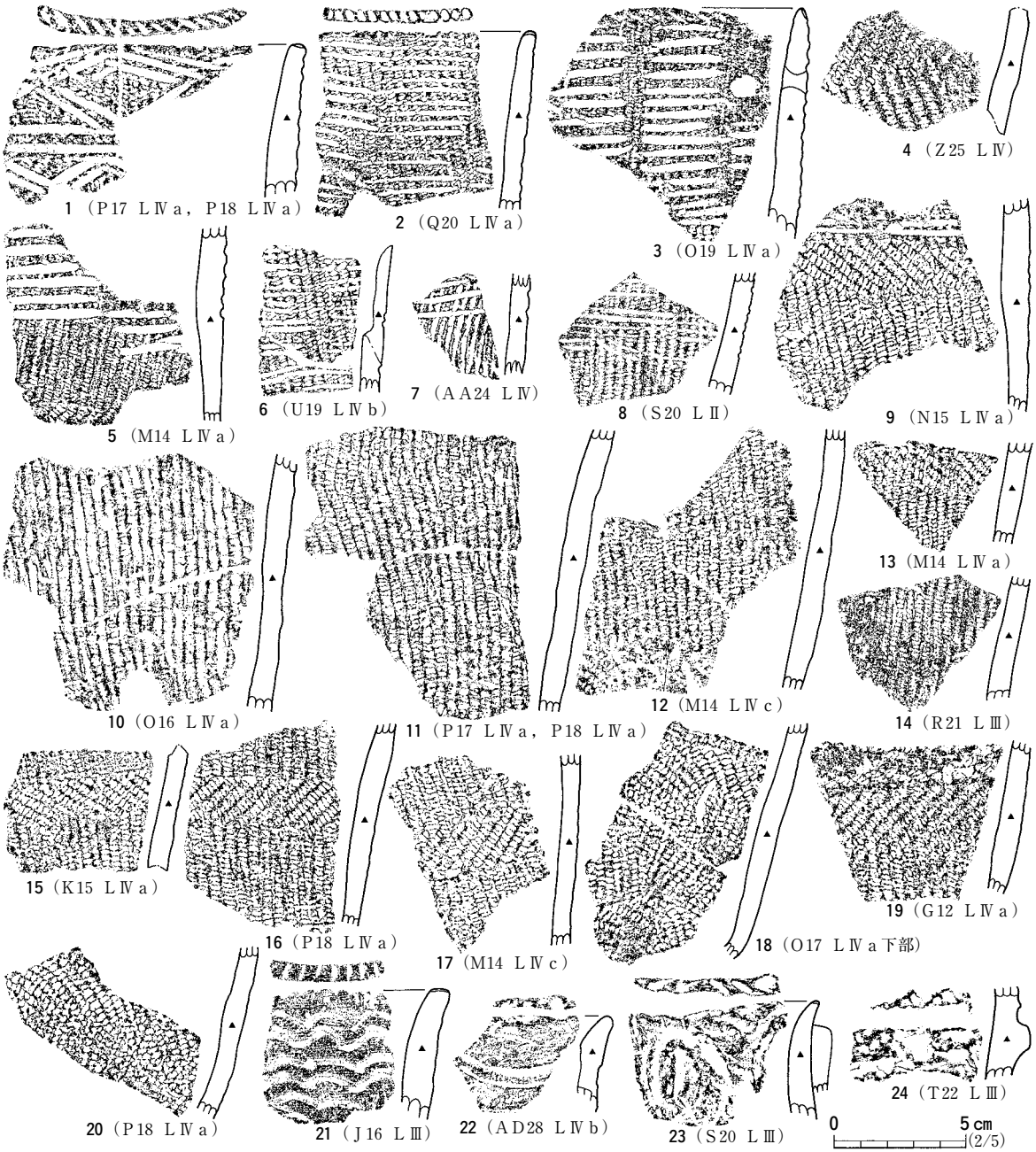


図178　遺物包含層出土土器(56)　Ⅸ群土器

描く。文様帯は2段に分かれ，下位にも同様の文様が描かれている。

f種：横線文が描かれるもの。図178－2・3・5～9である。2は口端部上にスリット，3は口縁部上端外面に刻みが施される。

g種：体部破片を一括した。図178－4・10～18・20である。いずれも縦位の縄文のみ施文されるが，4・15～17のように一部に斜縄文を挟むものもある。18・20は体部下端片である。

3類　胎土などから時期的に本群に含まれると思われるが，上記に含まれないもの。図178－19・21～24である。19は無地の文様帯下に縄圧痕が見られる。地文が縦走縄文であるのでここに含めたが，Ⅷ群2類に帰属する可能性もある。21は半截竹管による波状文を多段に施文する。口端部には

ヘラ状工具の連続刺突が施される。22は半截竹管による弧線文が描かれる。口端部上には刻みが入る。23は隆帯を渦巻もしくは楕円状に施すものである。口端部には「ハ」字状にヘラ状工具による刻みを加えている。胎土には砂，繊維を含んでいる。24は太い隆帯が横走するもので，隆帯上には回転縄文が認められる。胎土に繊維を多量含み，軟質である。

Ｘ群　前期初頭から中葉に比定されるもの（図179～196，図版164～167・146・147）

１類　前期初頭，花積下層式に比定されるもの。図179～181に示した。器壁の厚さは７～８㎜程度で，胎土には２㎜大の石英粒などの砂粒を多量含み，繊維は少量である。内面は多くにミガキが確認できる。基本的には金雲母は含まれないが，微量含むものもある。調査区中央部の尾根・北斜面から多く出土し，東部の裾部・西部の谷からの出土は少ない。出土層位はＬⅢ・ＬⅣａからの出土が多い。

ａ種：口縁部上端外面に隆帯を貼り付けるもの。図179－６である。施文は非結束の羽状縄文で，条の長さが3.5㎝程度である。内面はナデのみでミガキはない。器壁の厚さは11㎜である。胎土には砂粒を含み，金雲母も微量認められる。

ｂ種：集合沈線による鋸歯文を描く文様帯を持つもの。図179－17・25・図180－２である。文様帯は２段に分割され，上下に鋸歯文が描かれる。体部地文はいずれも非結束羽状縄文である。内面はナデ調整される。器壁の厚さは７～８㎜で，胎土には金雲母を微量含んでいる。図179－17は内湾気味の口縁部で，口端部にスリットが入る。文様帯上・中位の区画は１条の縄圧痕によってなされ，下位の区画はない。沈線は円形竹管を低角度で器面に押しつけ，抜くように施文する。図180－２は円形竹管の斜角刺突によって文様帯下位を区画する。文様帯中位の区画は沈線である。施文方法は17と同様である。図179－25は半截竹管によって施文される。文様帯下位の区画は半截竹管の刻み付隆帯で施す。

ｃ種：口縁部が「く」字に内折し，口縁部文様帯が円形竹管の斜角刺突文で区画されるもの。

ｃ１種：図179－１・５・７～９・12・19・24・図180－３・４に示した。屈曲部に細い円形竹管を低角度で下から上へと刺突したものを施して文様帯を２段に分割し，上位に鋸歯文，下位に縄圧痕による蕨手状文を横位に連結した文様を描く。文様間には円形竹管による短沈線を充填する。いずれも内面にミガキが観察され，器壁の厚さは７～８㎜程度である。これらの胎土には金雲母が微量認められるものもある。９のような山形突起をもつものもある。12は口縁部上端外面に竹管凸部による刻みが施され，上部の文様帯にも縄圧痕による渦巻が描かれる。図180－３は文様帯の下端で，同様の刺突で区画されている。

ｃ２種：図180－１・７・８はｃ１種に見られた円形竹管の斜角刺突が体部中位に見られる。いずれも条の長さが2.5㎝程度の非結束羽状縄文が施される。器壁の厚さは８～11㎜で，内面はナデ，擦痕が認められる。７は縄文の上端が上位の粘土によってつぶされており，体部中位まで成形→施文→乾燥→上部の成形という製作工程が窺える。

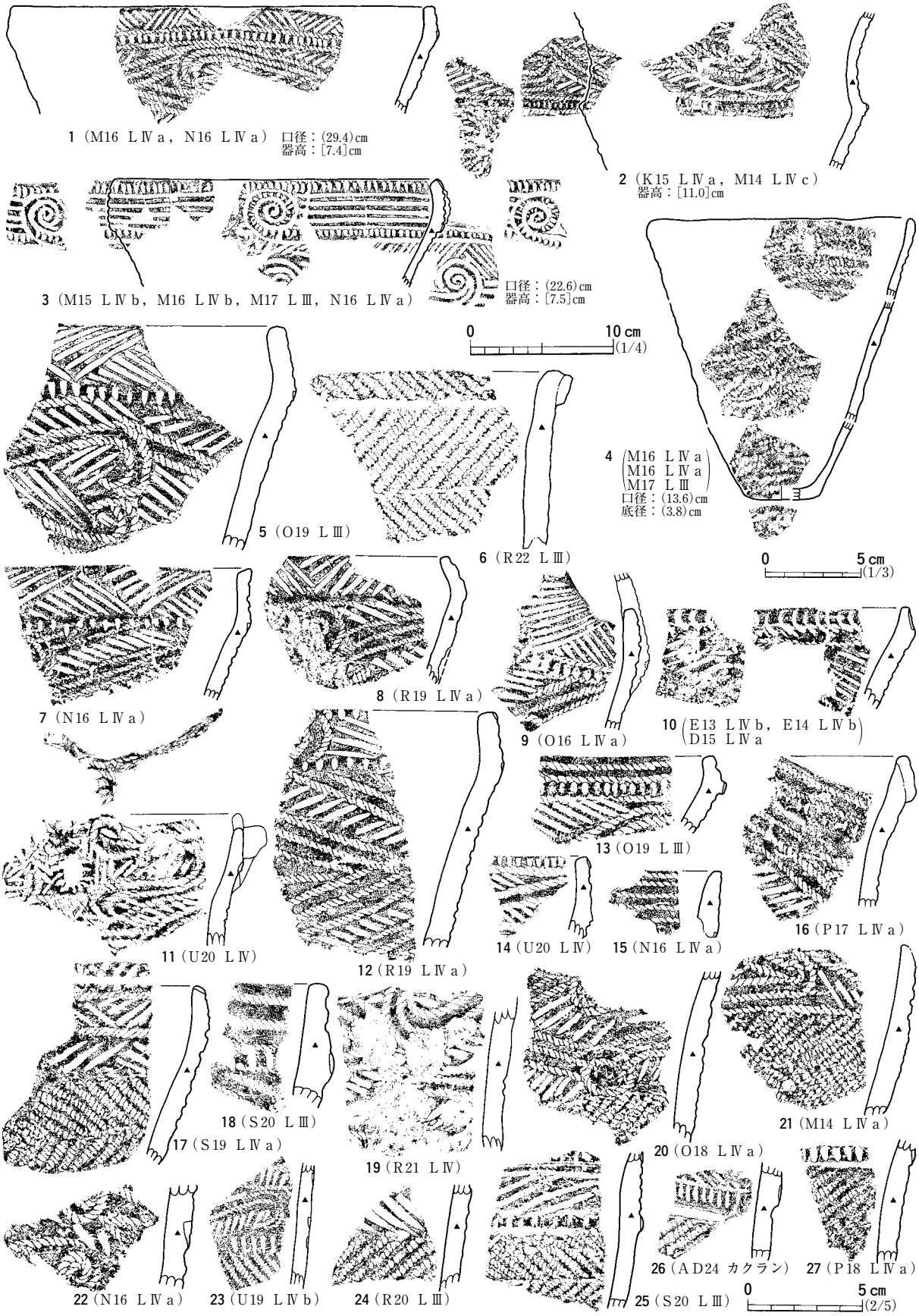


図179　遺物包含層出土土器(57)　X群土器

ｄ種：口縁部が「く」字に内折し，口縁部文様帯が竹管凸部による刻みを付した隆帯によって区画されるもの。ｃ１種同様下部の文様帯には蕨手状文が描かれ，竹管凸部による沈線を充填する。胎土・調整はｃ１種と同様である。

ｄ１種：図180－11は文様帯上部に集合沈線による鋸歯文を描く。下部の文様には縄圧痕ではなく，沈線を用いる。

ｄ２種：図179－10は「Ｃ」字状の刺突文を施す。文様帯区画には縄圧痕を用いている。文様は剥落部分が多く不明であるが，充填文様と思われる沈線が認められる。

ｄ３種：図179－13～16・18・22に示した，口縁部に横位の縄圧痕を施すものである。文様はｃ１種と同様の文様を描くと思われる。16に見えるように山形突起が付くもの，14のように口縁部上端に刻みがあるものも認められる。18・22は同一個体で，口縁部はほぼ直立する。

ｄ４種：図179－３は屈曲部の隆帯と連結した渦巻をつけ，渦巻間を５条の沈線で結ぶ。口端部は内削ぎとなり，外面には刻みが施される。下位の文様帯は連結する渦巻と，充填文を沈線で施文する。

ｄ５種：図179－２は縄圧痕の文様帯の下部で再び屈曲する器形を持つ。体部の屈曲に縄圧痕を沿わせた隆帯を貼り付け文様帯区画とする。隆帯の下位は二次焼成を受け明瞭ではないが，縄圧痕による狭い文様帯を入れ，その下部が地文縄文となっている。文様帯の充填には短沈線を用いる。

ｄ６種：体部片である。図179－20・21・26は文様帯下部の資料で，20・21が縄圧痕による区画，26が刻み付隆帯による区画である。羽状縄文の幅は２㎝である。

ｅ種：口縁部が内折しないもの。図179－３は口縁に向かって開く器形の平底の小型土器である。縄圧痕による文様間に沈線の充填はされず，文様帯以下は斜縄文である。図179－11も小型の土器で，口縁部がやや内湾し，台形状の山形口縁となる。頂部に丸い突起の付く楕円形の隆帯を貼り付け，隆帯上には刻みも付される。文様は横位に連結する蕨手状の文様が描かれ，竹管凸部による沈線が充填される。器壁は６㎜と他に比べて薄く，胎土中に砂粒は少ない。

ｆ種：口縁部上端の外面に刻みが付され，沈線による蕨手状文が描かれる。図180－12・13である。同一個体で，口縁部は外傾する。器壁は厚く，13㎜を計る。拓本では蕨手状文を描く沈線内が汚れて見えるが，元々縄圧痕で施文したものの上に沈線を重ねたものであり，内部に条の痕跡が残存しているからである。

ｇ種：図180－14～17は外傾する口縁部上端に刻みが付される。文様は沈線によって描き，連結部に円形竹管刺突が付される。器壁はａ～ｆ種よりも薄い。

ｈ種：図180－18～29に示した。３～４本一組の縄圧痕で蕨手状文を描き，渦巻の中央・文様の連結部に円形竹管刺突を施す。文様間には細い円形竹管による短沈線を充填する。口縁部上端には刻みが付され，文様帯の下端は刻み付隆帯で区画する。器壁はａ～ｆ種よりも薄手である。

ｉ種：文様帯の見られないものである。

ｉ１種：２指幅以上の原体を用いた羽状縄文を施す。図180－31・32・図181－２～８・15である。図

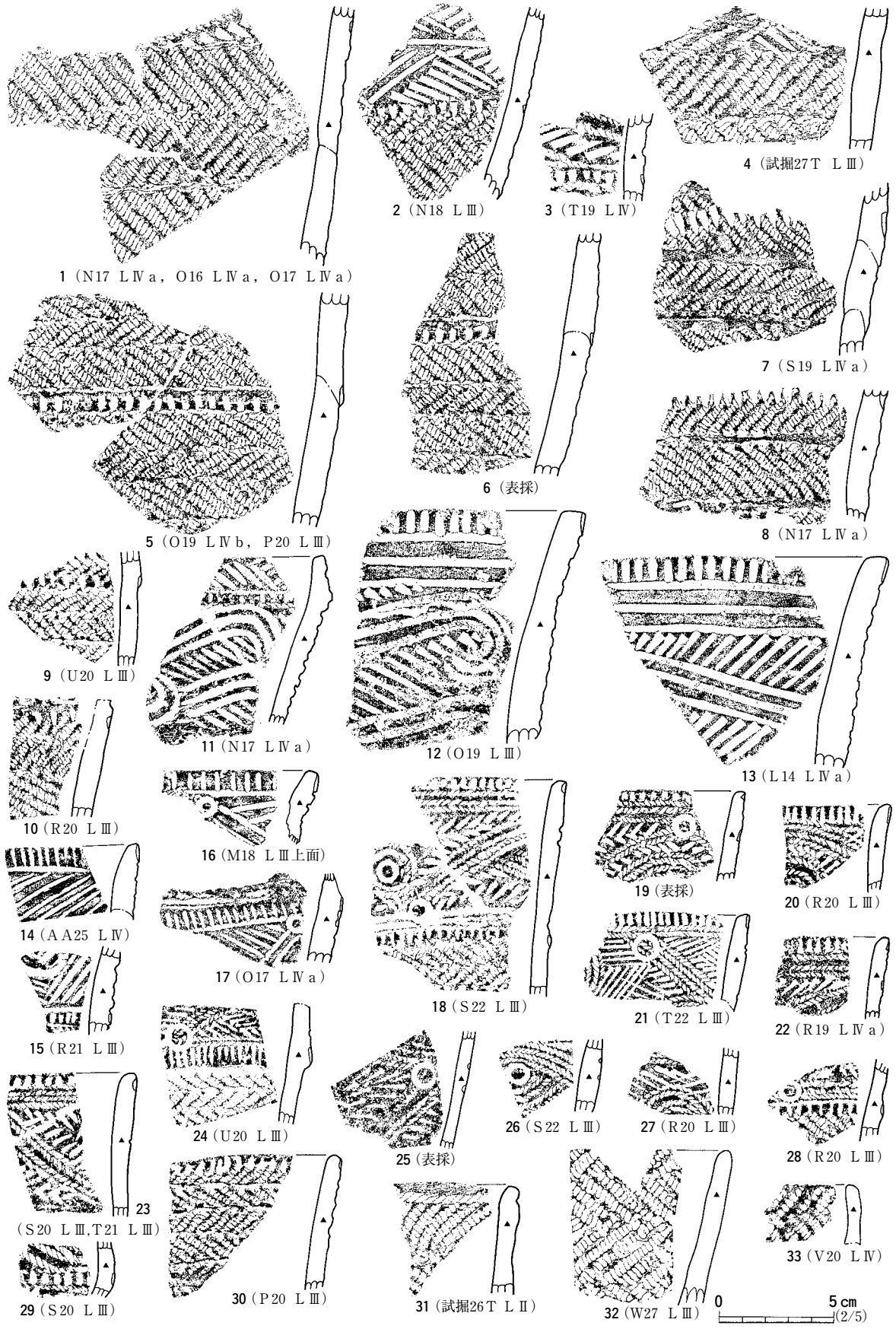


図180　遺物包含層出土土器(58)　X群土器

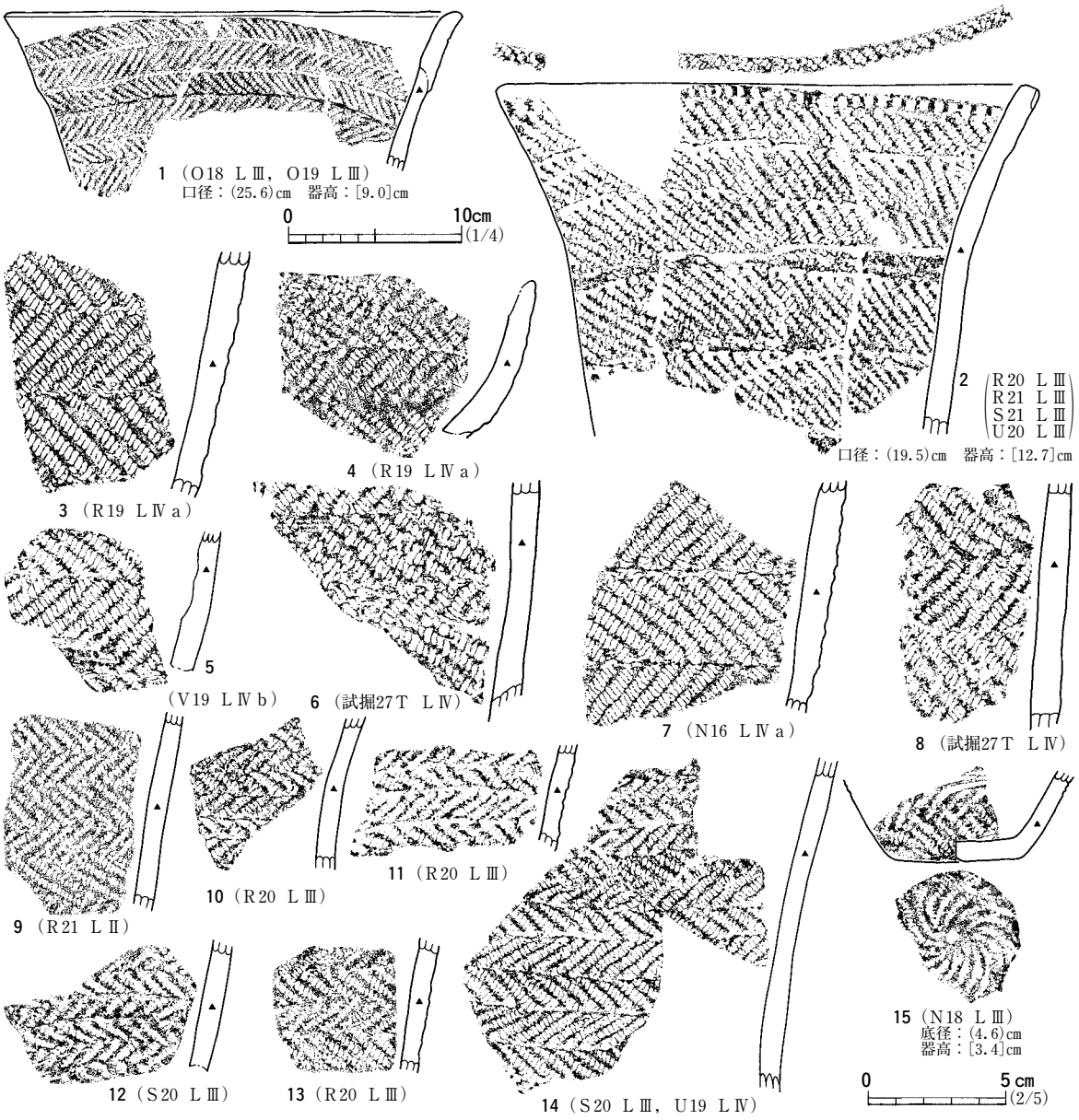


図181　遺物包含層出土土器(59)　Ｘ群土器

180－31は口縁部上端に縄圧痕を１条施す。図181－２は上端に刻みが付され，口端部には回転縄文が認められる。ここに示してしまったが，地文は整った横回転施文がされているが羽状とならないため２類以下のものである可能性がある。図181－４は平丸底状の底部へと続く体部下端の破片である。15は平底で，底面には中央に陥没があり，周囲に縄文が風車状に配される。破片の上端に集合沈線の一部が認められる。

ｉ２種：１指幅程度の羽状縄文を施すもの。図180－５・６・９・10・30・33・図181－１・９～14である。図180－５・６・９・10・30は口縁部上端と体部中位に刻みの付くものである。図181－１は折り返し状の複合口縁となっている。

２類　前期前葉から中葉に位置づけられるであろう地文縄文土器を図182～188に示した。地文し

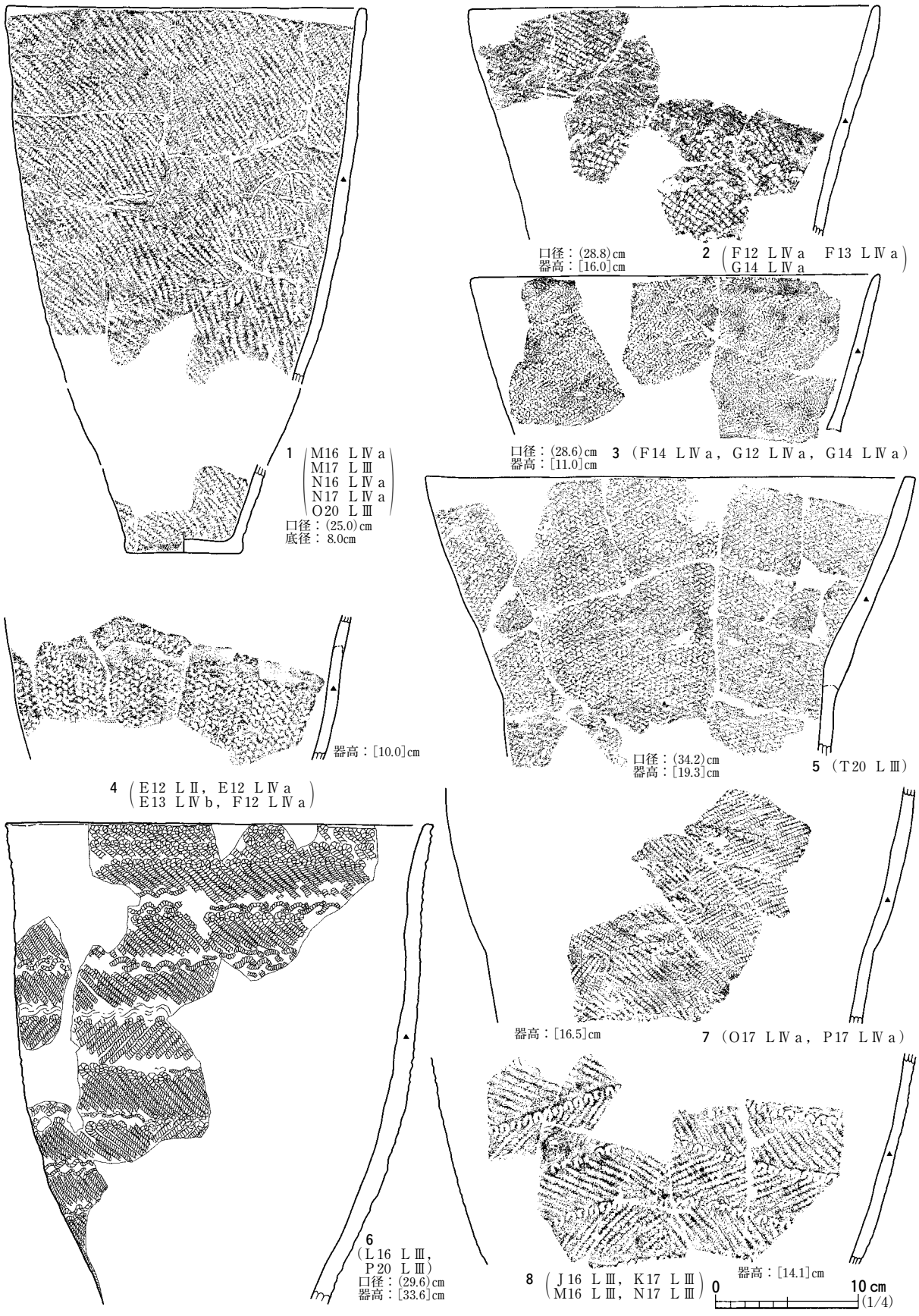


図182　遺物包含層出土土器(60)　X群土器

図183　遺物包含層出土土器(61)　Ｘ群土器

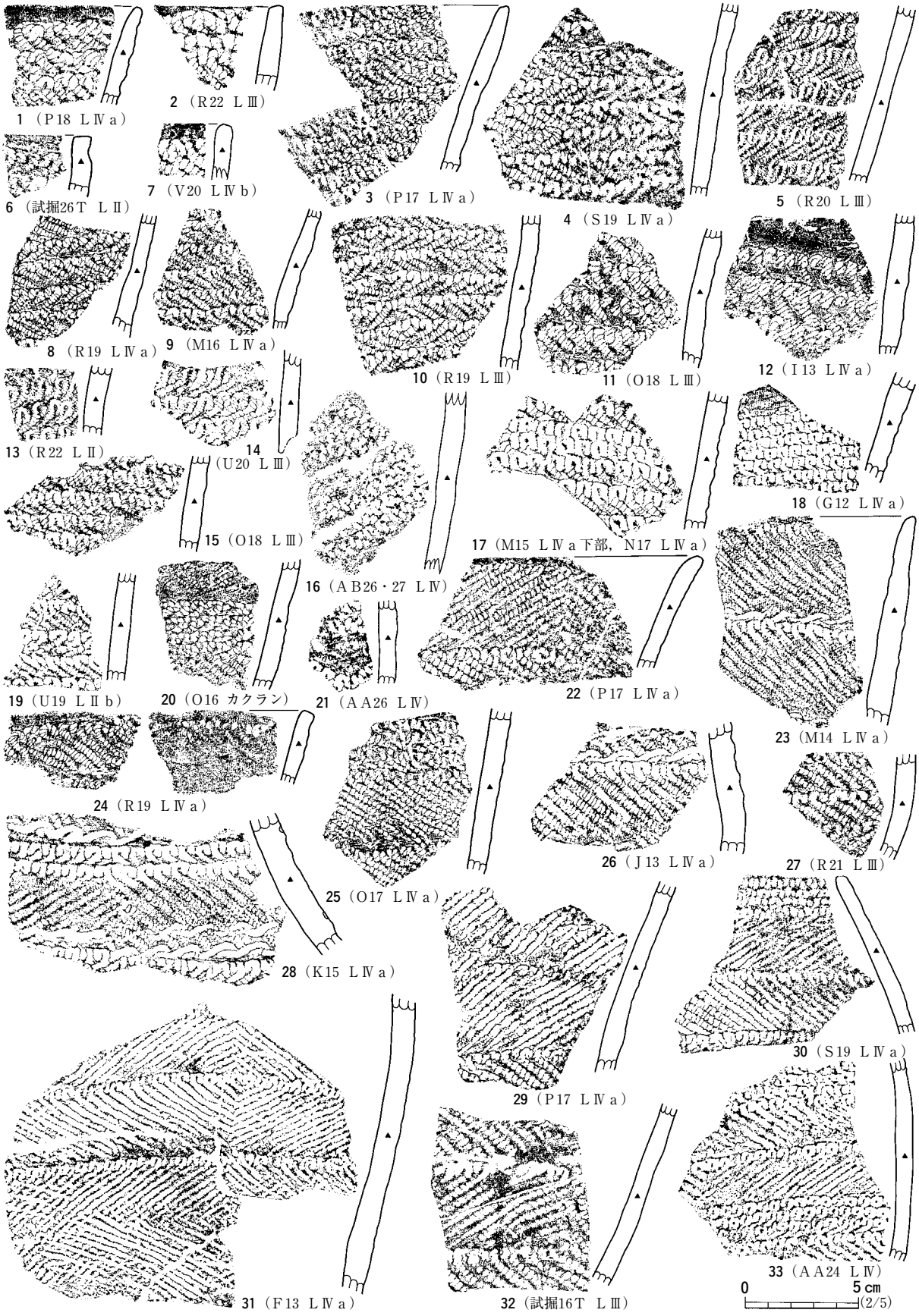


図184　遺物包含層出土土器(62)　X群土器

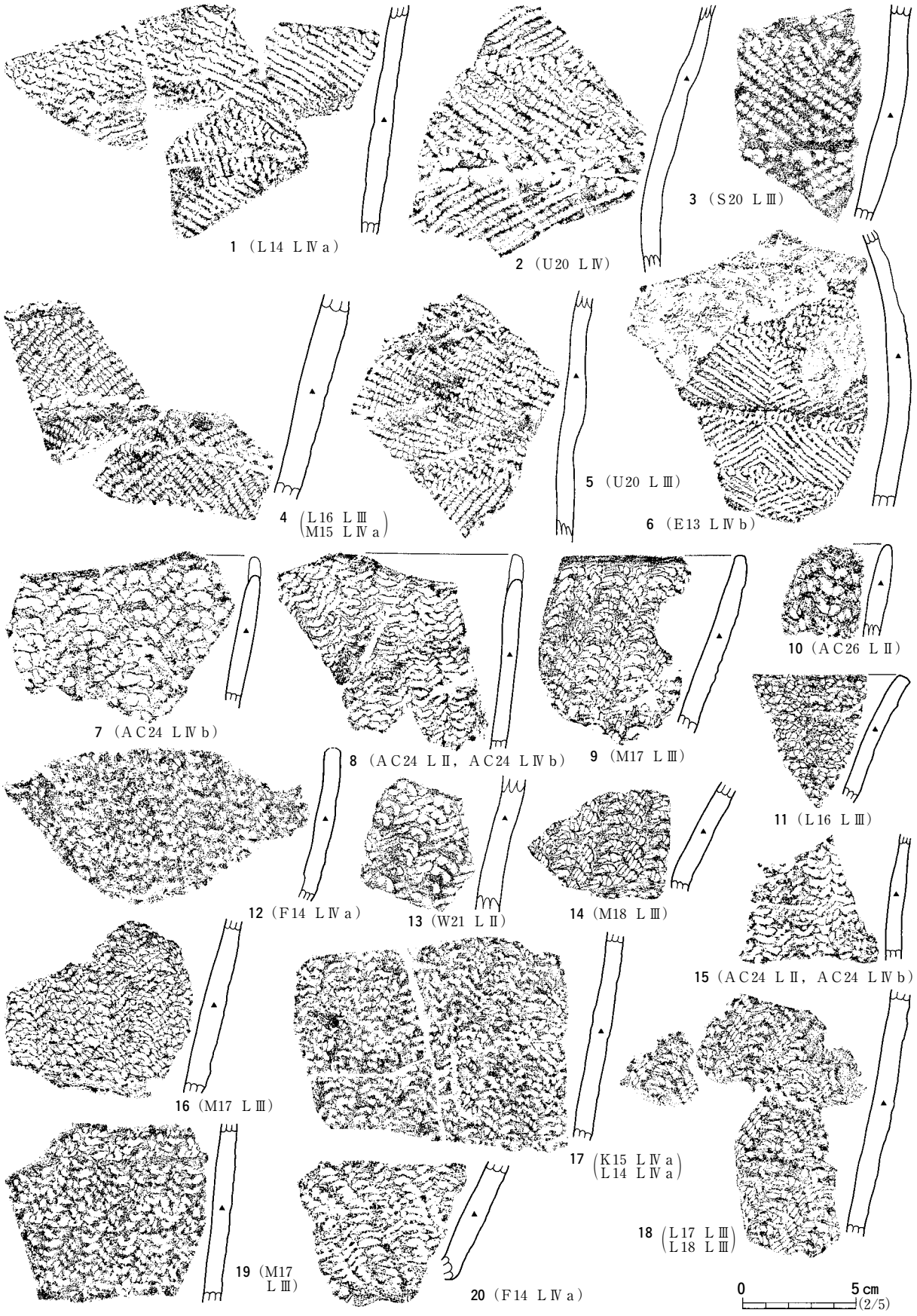


図185　遺物包含層出土土器(63)　Ｘ群土器

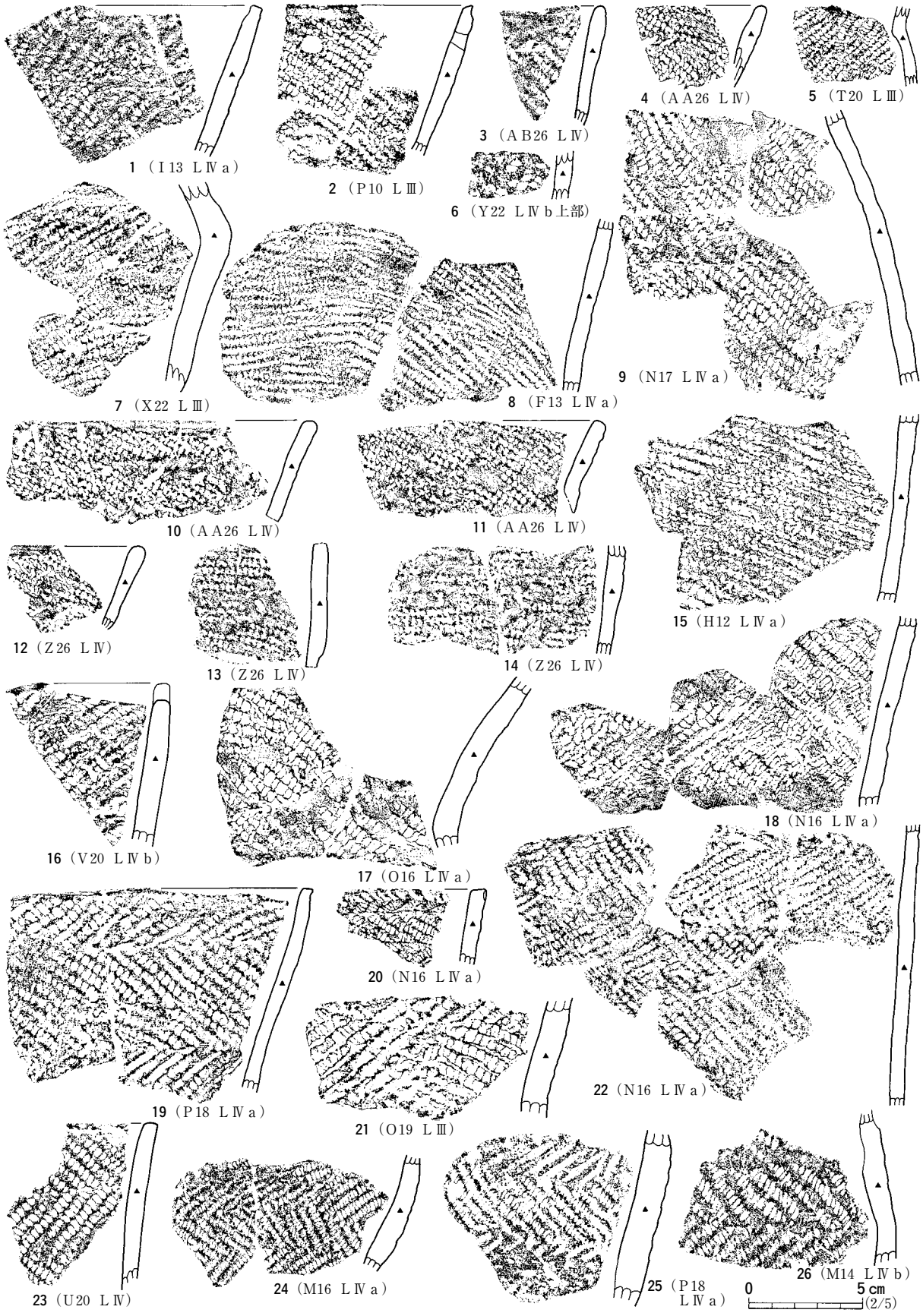


図186　遺物包含層出土土器(64)　X群土器

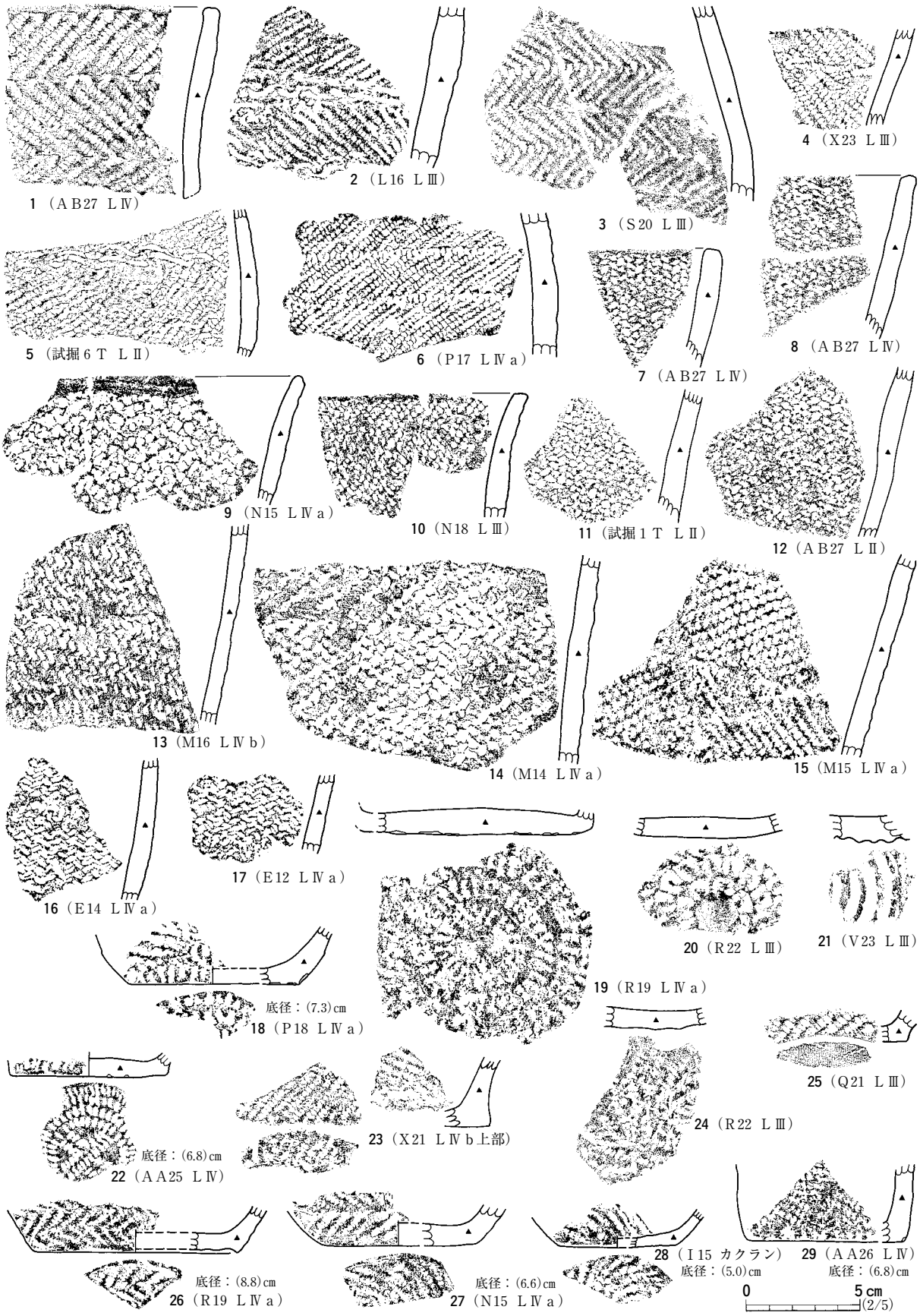


図187　遺物包含層出土土器(65)　Ｘ群土器

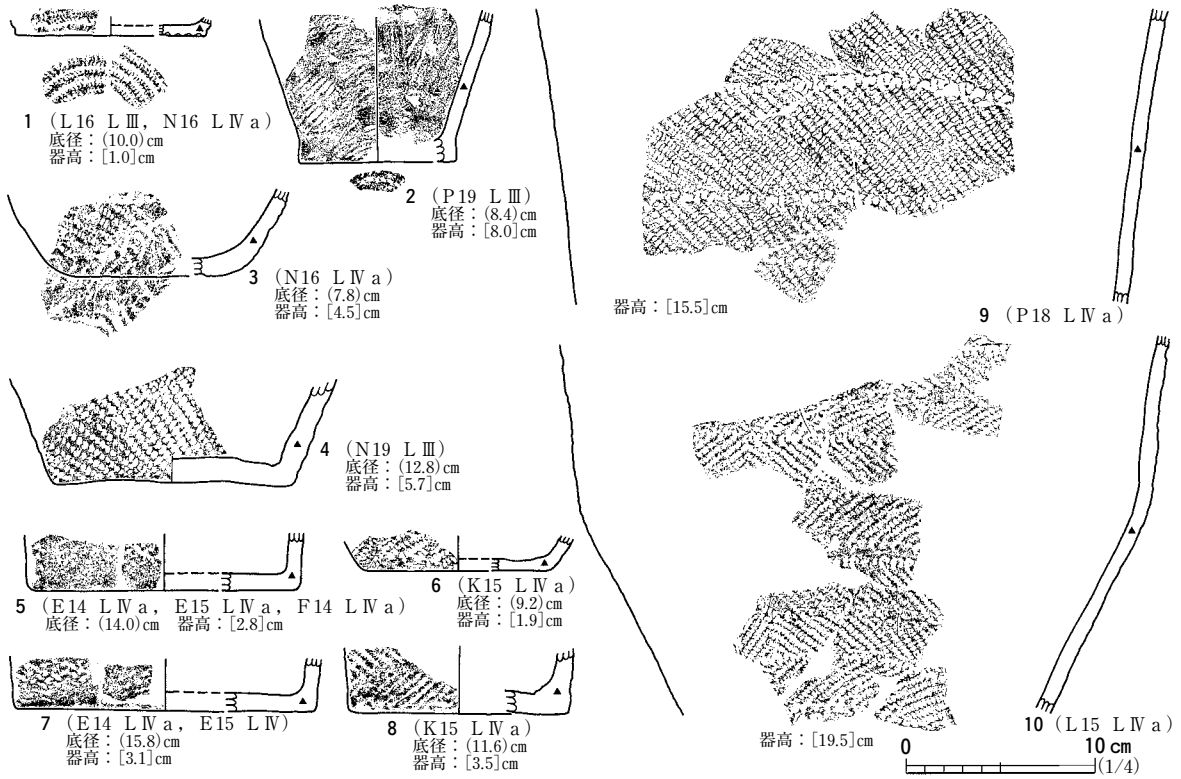


図188　遺物包含層出土土器(66)　X群土器

かないもので，3類や後続する4類の体部片およびそれに併行する地文縄文土器も含んでいる可能性はある。器壁は8～15㎜と厚めで，内面はミガキが確認できる。胎土には細砂を少量，繊維を多量含む。雲母を微量含む。大多数が調査区中央部の尾根・北斜面から出土し，ＡＣグリッドなど裾部からも若干出土する。ＬⅣａ以上の層位が多い。

器形が復元できる個体を図182～183・188などに示した。ここで見られる器形は，ａ種：図182－1・6のように口縁が直立するもの，ｂ種：図182－2～5・図188－9・10のように口縁部が外傾し，体部との境が緩く括れるもの，ｃ種：図183－1のように体部が大きく膨れ，その上下が括れるようなもの，ｄ種：図183－2～7のように口縁部に三角形の突起が付き，体部との境が緩く括れるものなどが見られる。突起には左右非対称のものも認められる。

図184～図187－17には口縁部から体部の破片を示している。

図184－1～21は重層ループ文である。口縁部ではａ種，ｂ種の器形を持つものが多い。21は一部に無文部が認められ，ループ文帯で菱形などの文様を描くものと思われる。これらは数量が少なく，器形が復元できるような大破片もない。

図184－22～33・図185－1～6は末端ループの縄文を羽状，菱形に配したものである。比較的数量は多い。図184－23・26・28・図185－4，また図182－6に見られるように縄文を重畳せずに，開いた端の結節回転を残すものも多い。これらからは，原体の長さは3指幅とわかる。器形は，図182－6のようなａ種，同図2・7・8のｂ種，図185－2・3・5・6のようなｄ種が認められる。また，図184－28・30のような強く屈曲するものや，同図33，図185－6のように丸く膨らんだ体部片も認め

られるが，これらは，３類土器の体部片であるかも知れない。

図185－７～20には側面環付の縄文を集めた。比較的数量が多い。口縁部が直立するもの，膨らむ体部片などは少なく，ｂ種や，図183－２・図185－７・８のようなｄ種の器形が多いと思われる。

図186－１～17には斜縄文を示した。数量は最も多い。器形はａ～ｄ種のいずれも認められる。ａ種は図182－１，図186－１・２などの外傾する口縁はｂ種，同図７・９・17はｃ種の体部片，ｄ種は図183－４などである。

図186－18～26・図187－２にはループのない非結束羽状縄文を集めた。数量は多くない。図187－２は開いた端の結節回転が認められる。

図187－７～17は組紐である。比較的多い。口縁部が垂直に立ち上がるものは無く，図182－３～５に示したｂ種や，図183－１のようなｃ種，同図７のようなｄ種が多いものと思われる。

図187－１・３～６にはその他のものを示した。１・６は閉じた端の回転が認められる。４・５は結節回転が見られる。図187－３は結束羽状縄文である。これらは僅かである。

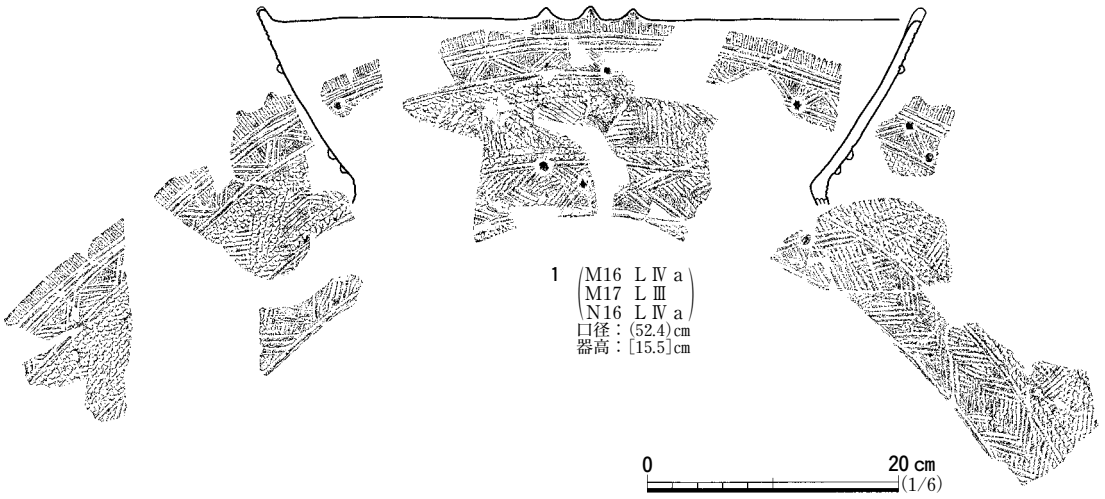
図187－18～29・図188－１～８には底部を示した。底面に文様が描かれるものが多く，図187－18・19・22・図188－２には連続刺突が認められる。18・22は体部下端にも刺突される。図187－21・図188－１は沈線を施す。１には沈線内に刻みを付す。体部下端にも同様の文様が付される。図187－20はループ文，同図23・24・26～28・図188－３は回転縄文が施される。図187－29は体部下端のみに刺突が認められる。

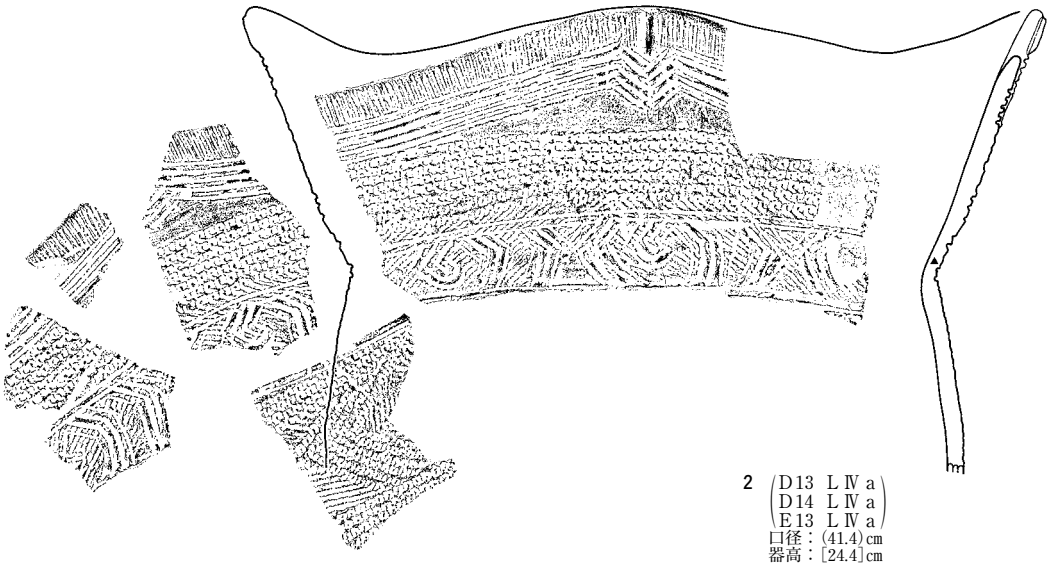
３類　前期前葉から中葉に位置づけられる，沈線施文のある土器である。器体の中位で屈曲する器形が多く，ここでは屈曲の上を口縁部，下を体部とする。器壁の厚さは７～10㎜程度で２類に比して若干薄い。胎土には細砂少量，繊維を多量含み，雲母を微量含むものもある。沈線は基本的に半截竹管で描く。出土状況は２類と変わりない。

ａ種：地文縄文上にコンパス文が施文されるもの。図191－１・２である。口縁部は外反し，地文の重層ループ文を磨り消して半截竹管によるコンパス文を描く。同一個体で，他の個体は見られない。

ｂ種：口縁部上端に条線文帯を施すもの。図189－１～３・図190－４・図191－３～11・27～39・図192－１～４である。大破片が多いが，個体数は多くはない。外傾して内湾気味に立ち上がる口縁部と丸い体部の間で強く屈曲する器形を持つ。口縁部は波状となるものが大半を占める。施文は半截竹管による蒲鉾状の沈線で描かれるものが多い。

図189に器形の復元可能な個体を示した。１は３個一組の突起を有する平縁の土器の口縁部である。条線文帯下に一部に相互刺突文を施す２条の平行沈線を引く。沈線による鋸歯文帯を挟んで，その下位には地文上に重層ループ文帯によって鋸歯文を描き，文様帯下端には沈線による菱形文を描く。沈線施文部には沈線の連結部にボタン状貼付文が施される。２は４単位の波状口縁となる。波頂部には棒状の隆帯を垂下させ，下部の２条の平行沈線文はその部分だけ三角に下に折れ曲がる。波頂部では無文帯を挟んで，水平な重層ループ文帯が施され，口縁部下端には菱形状の渦巻を描いている。体部上端には地文上に重層ループ文帯による菱形文が描かれる。３は７～８単位の波状口縁で





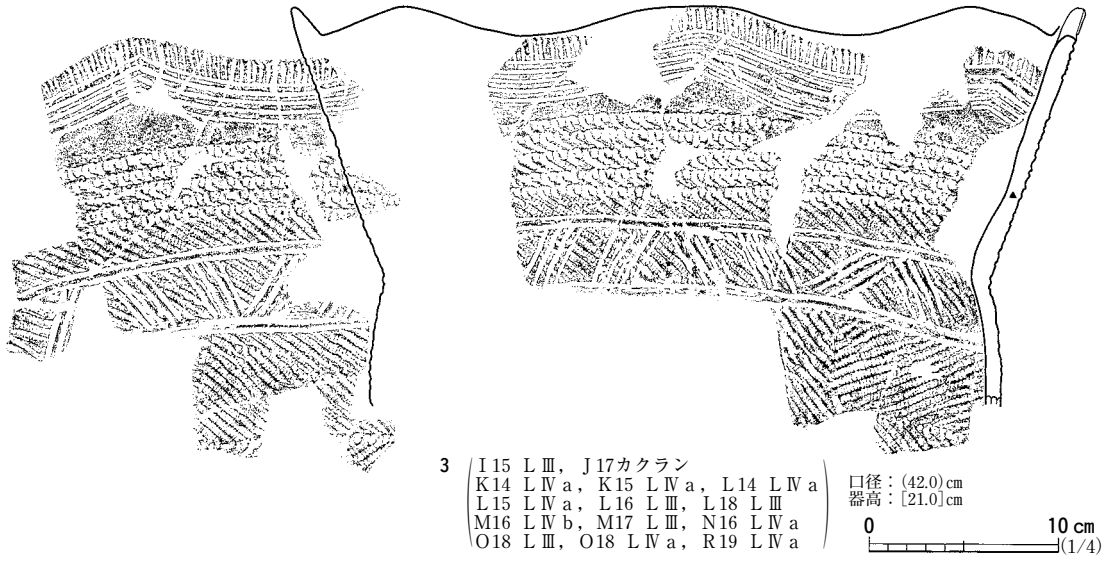


図189　遺物包含層出土土器(67)　X群土器

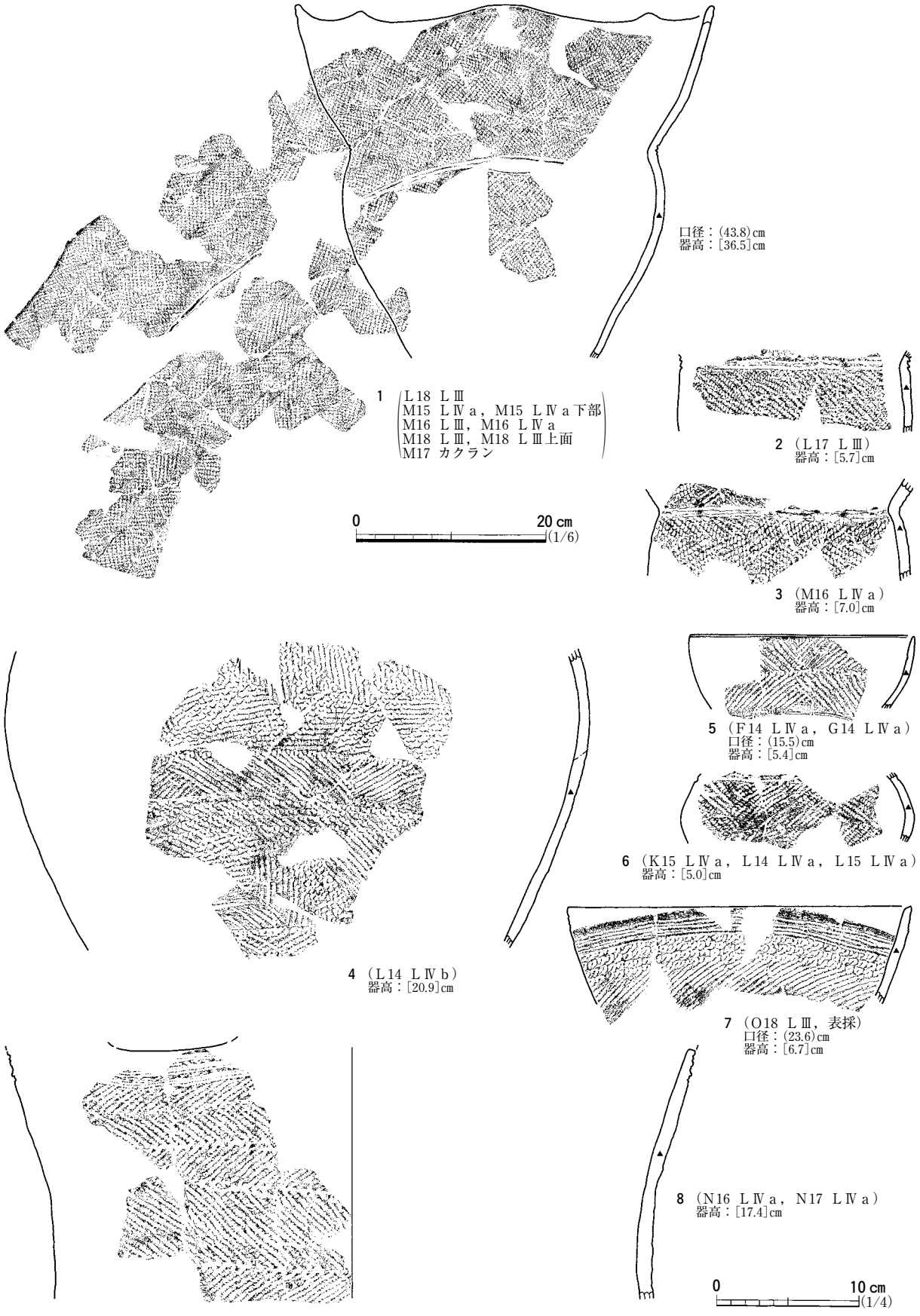


図190　遺物包含層出土土器(68)　Ｘ群土器

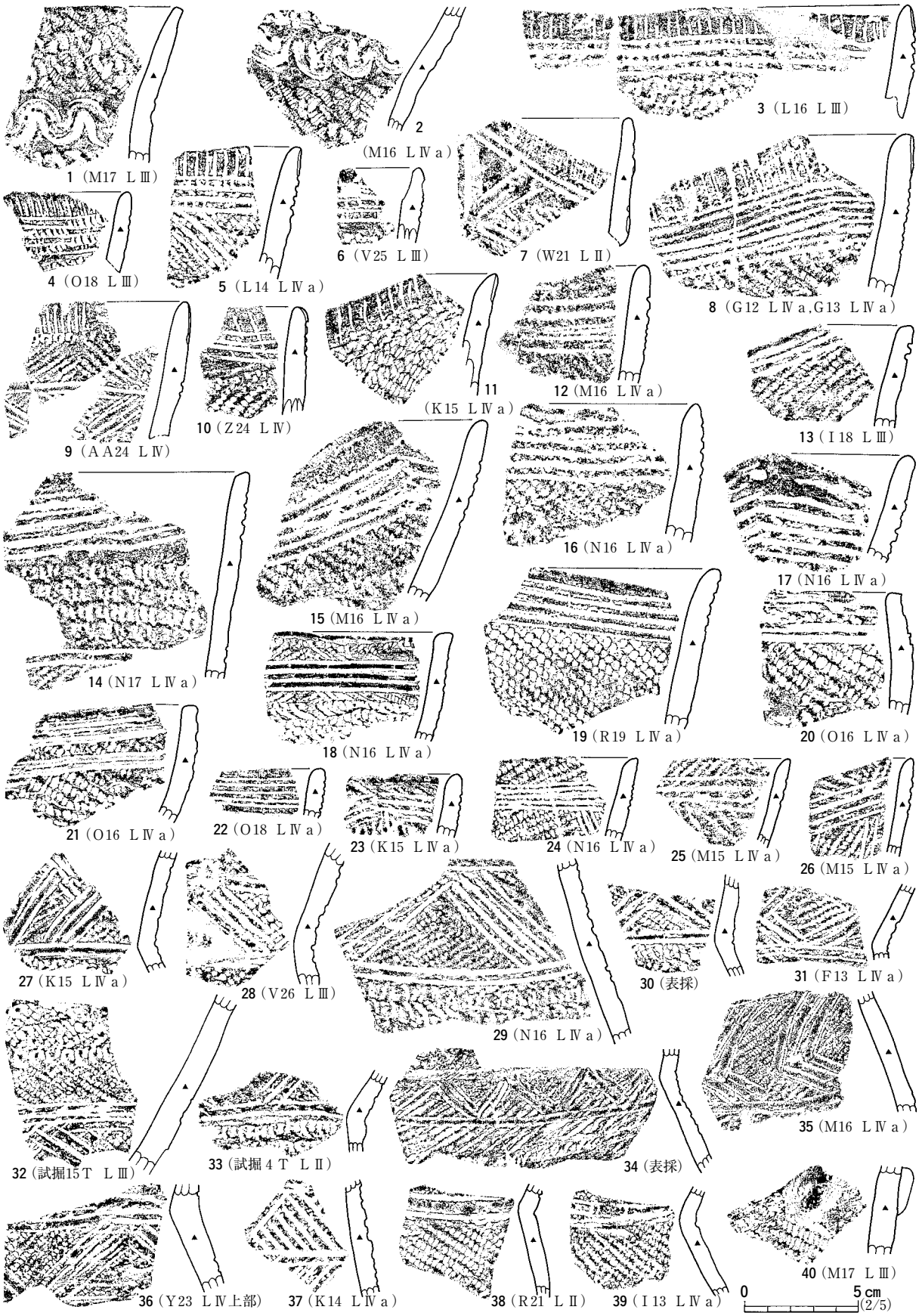


図191　遺物包含層出土土器(69)　X群土器

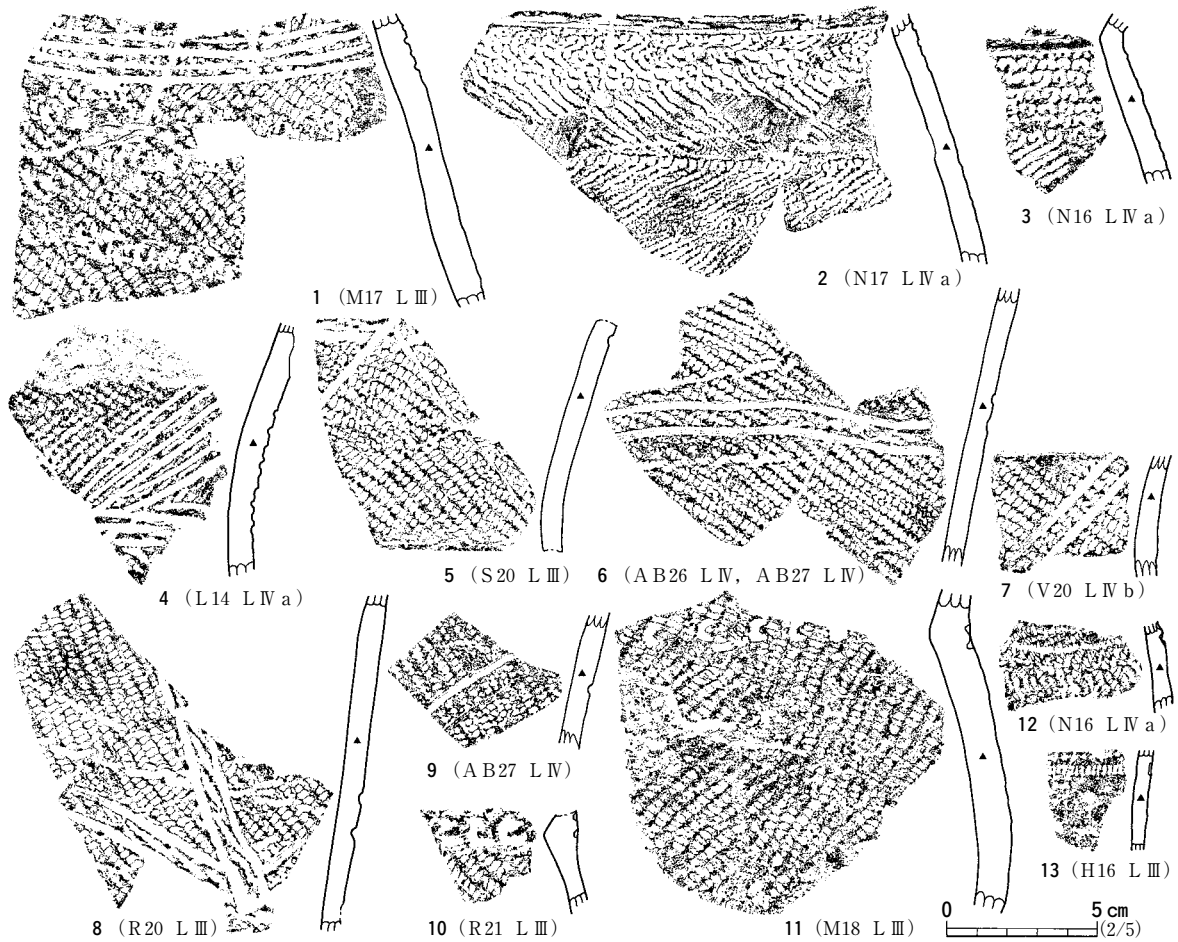


図192　遺物包含層出土土器(70)　Ｘ群土器

ある。文様は２とほぼ同様で，口縁部下端の文様が鋸歯文となる。体部は縄文を菱形に配する。図190－４はこれらの体部片と思われ，ループ文帯による菱形文を地文縄文状に描く。

図191－２～11には口縁部片，同図27～39・図192－１～３に屈曲部破片を示した。２～６はいわゆる相互刺突文が施されるものである。刺突は沈線施文後の半截竹管凹部の刺突によるものであるが，６についてはヘラ状工具の刻みである。５については条線帯直下より沈線文様が描かれる。７は波頂部付近の破片で，放射状の文様が平行沈線で描かれる。９・11は条線文帯下の平行沈線が施文されずに直下から地文である重層ループ文が施される。

ｃ種：条線帯が認められず，蒲鉾状の平行沈線のみが口縁部に施される。図190－７・図191－12～26である。口縁部は波状が多く，図191－18・20・21・24～26など口縁部上端から地文を施すものもある。図191－14は水平に施されるループ文帯の下部に平行沈線による文様帯を有しており，構成はｂ種と変わらないと思われる。他は口縁部上半の破片のみで体部まで残存する破片が無く，下位にどのような文様があるかは分からない。図191－12・15・18・24などはｂ種では条線帯があったであろう部分を空白にする。地文は単節斜縄文・末端環付が多い。

ｄ種：屈曲部に１条沈線を施すだけのもの。図190－１～３・５・６である。いずれも半截竹管による蒲鉾状の沈線で区切る。いずれも外傾して内湾気味に立ち上がる口縁部と丸い体部の間で強く屈

曲する器形である。１は４単位の大波状口縁の間に三角形の小突起を付す。原体が複節と思われる縄文を菱形状に配する。２以下は同様の器形を持った小型の深鉢である。２が斜縄文である以外は，いずれも縄文を菱形状に配している。

ｅ種：屈曲部に半截竹管の刺突を加えるもの。図192－10～13である。10・11は半截竹管刺突のみ認められる。12は地文上に蒲鉾状の沈線を施し，ヘラ状工具による刻みを沈線に付す。13は連続刺突を加える。本種については４類ｄ種の体部片の可能性もある。

ｆ種：その他のもの。図190－８は口縁部に平行沈線を３本１組の施文具で口縁部上端に沈線を３条施す。地文は結束羽状縄文である。器形にくびれはなく，口縁部は大波状となる。図192－４～９は同一個体と思われ，結節回転を持つ地文上に幅広の平行沈線で，鋸歯状の文様を描く。

図191－４は地文縄文上に棒状の隆帯が垂下する，波頂部付近の破片である。

４類　前期中葉，大木２ａ式期に位置づけられる土器。図193～196に示した。櫛歯状工具や半截竹管の刺突による文様に特徴づけられる。器壁は４～７㎜で，内面は丁寧なミガキが施され，平滑である。胎土には砂粒少量と繊維を比較的多く含んでいる。分布の状況は調査区中央部の尾根から北斜面が最も多く，西部の谷にも若干見られる。また，裾部のＡＣグリッド周辺からもまとまって出土している。出土層位はＬⅢ・ＬⅣａである。

ａ種：刺突文帯・コンパス文帯が重層するもの。図193－１～６・９・図194－１～43・図195－１～８である。工具はいずれも櫛歯状工具である。器形が復元できたものを見ると，１・２のような器壁が薄く，文様が精緻で体部まで及ぶものは鉢形であり，４～６・９のような深鉢は器壁が厚く，文様は粗雑で，体部は地文縄文となるようである。地文には４・５のような網目状撚糸文，９の組紐などが見られる。図194・図195に示したものは破片である。図194－１～37は刺突・有節沈線とコンパス文・波状文が交互に施されるものである。１のように波状口縁の内面に沈線を刻むもの，２のような波頂部に菱形状の文様を描くものも見られる。文様の粗雑な17～19などは深鉢と思われ，体部に文様のある４・20～26などは鉢になろうかと思われる。図194－38～43は櫛歯状工具による細い沈線で横線と波状文を描く。図195－１～４・６は刺突のみで描かれるものである。１～３・６は波状文も刺突で表現される。同図５・７・８は半截竹管による有節沈線で文様を描く。８にはボタン状の貼付が付く。

ｂ種：沈線で区画した刺突文帯で文様を描くもの。図193－７・図195－９～14である。図193－７・図195－10は縦区画を付した対弧線状のモチーフを描く。図195－９は山形状の文様を描いた文様帯の下部に太い沈線で，波状文を施す。同図11～14は細片でモチーフは不明である。

ｃ種：図195－15～23に示した，櫛歯状工具による細沈線により渦巻や山形状の文様を描くものである。15は体部破片であり，横位の撚糸文上に渦巻状文が認められる。16～21と22・23はそれぞれ同一個体である。前者は同工具刺突を伴う直線・曲線による文様，後者は有節沈線で文様が描かれる。

ｄ種：図195－24～40に示した，口縁部上端に半截竹管刺突などの文様帯を持つもの。文様帯以下は

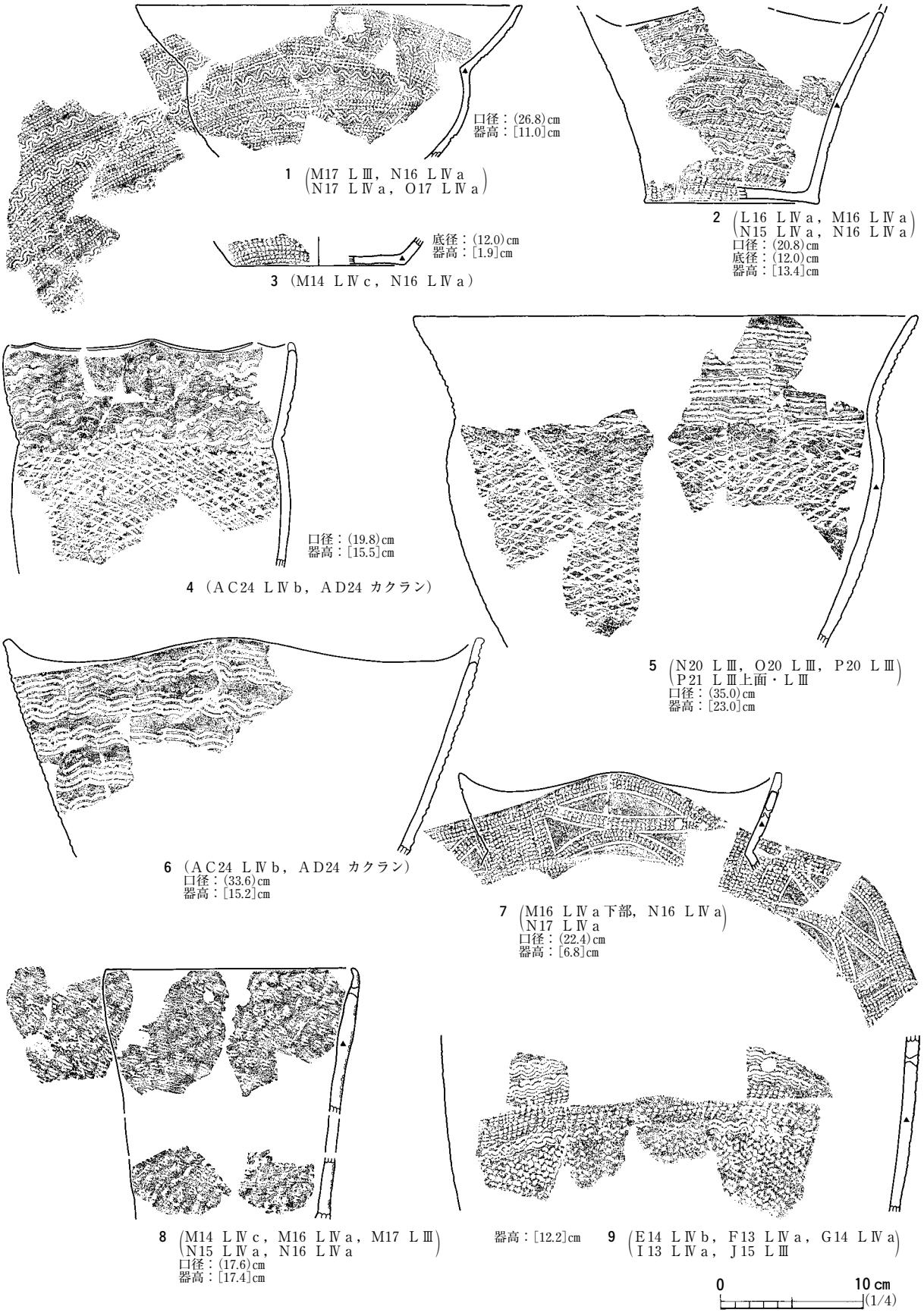


図193　遺物包含層出土土器(71)　Ｘ群土器

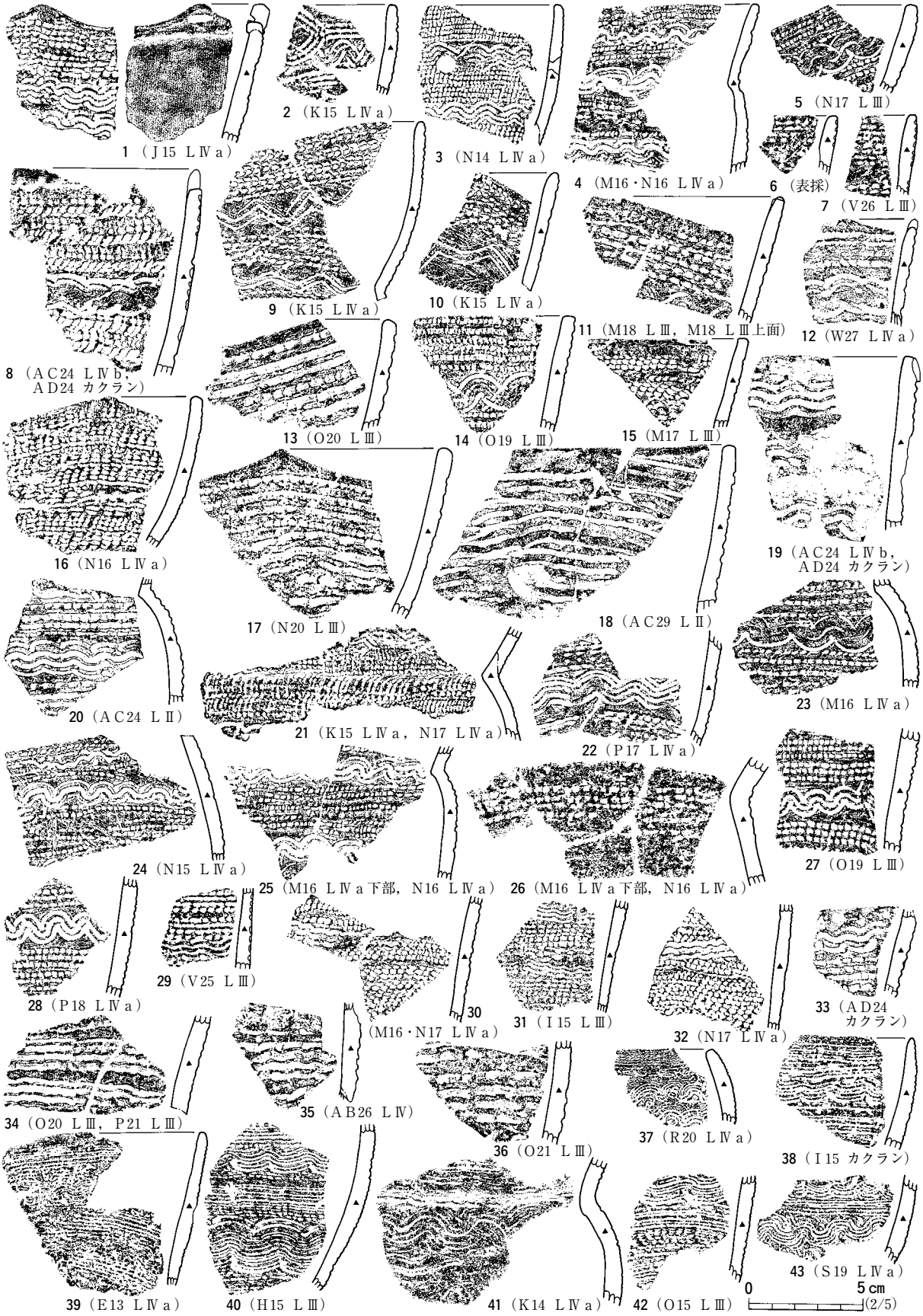


図194　遺物包含層出土土器(72)　X群土器

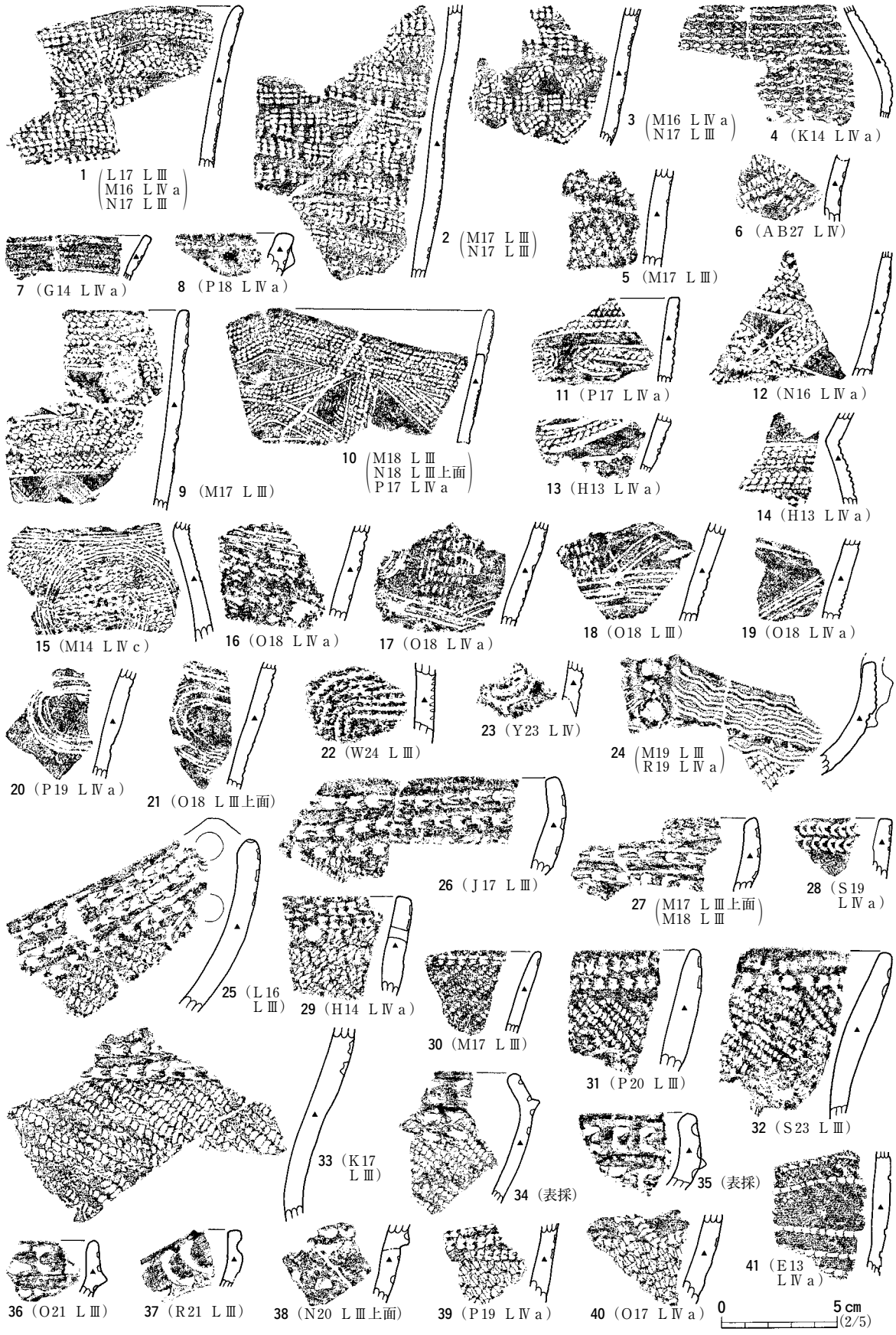


図195　遺物包含層出土土器(73)　Ｘ群土器

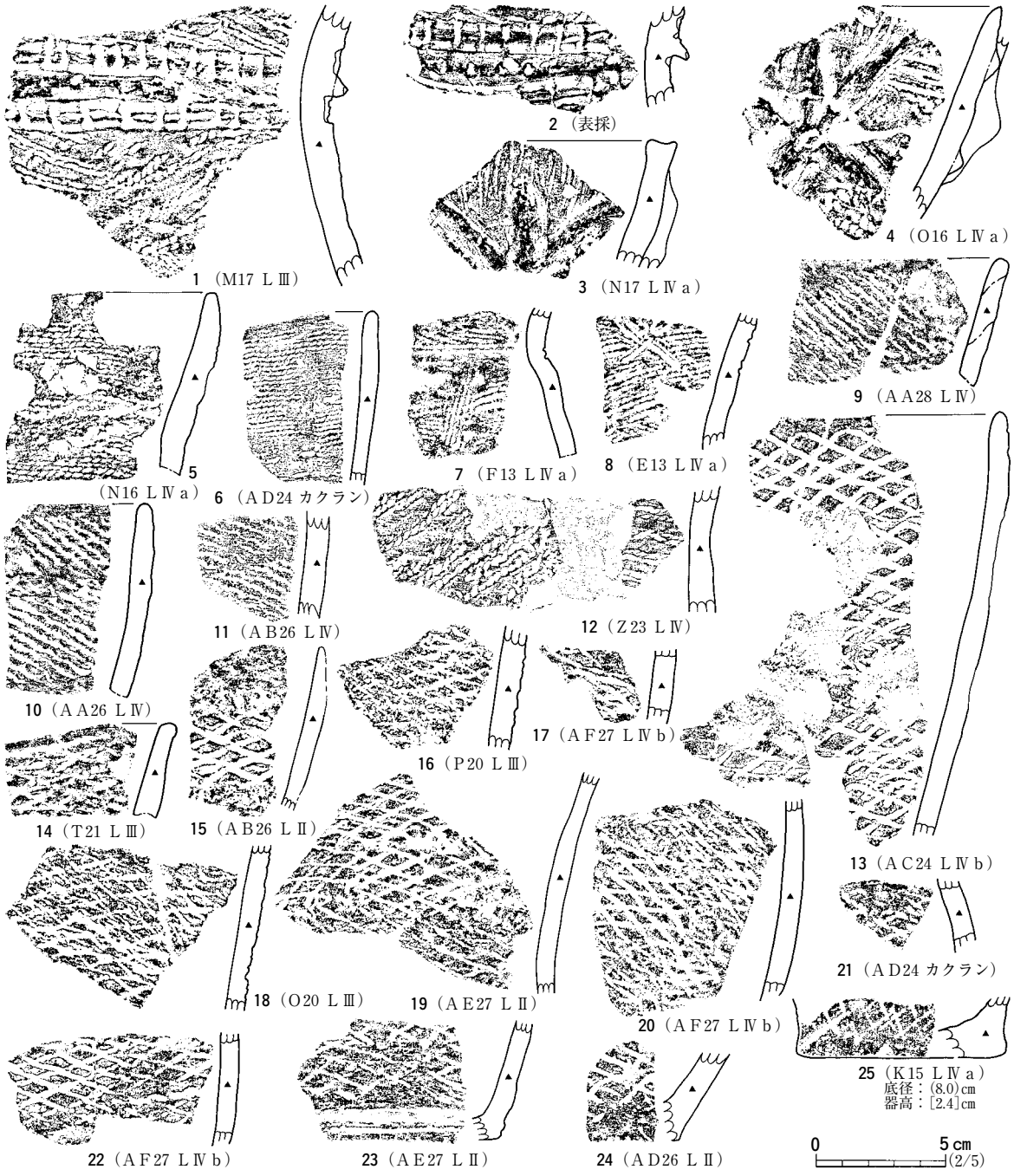


図196　遺物包含層出土土器(74)　X群土器

地文が施文されるものが多い。器壁は9㎜に及ぶような他に比べて器壁の厚いものが見られる。24は波頂部に突起が付く物で，円形の貼付が縦位に施されている。口縁部文様帯は隆線で区画され，波状文が描かれる。25～27・33は同一個体である。半截竹管の連続刺突を3条施す。25は波頂部付近で，破片の端に孔が2つ開けられる。28～32は外傾する口縁部である。29は地文が重層ループ文である。34～37は口縁部が内折し，隆線を施す。隆線の上下には太い半截竹管による刺突が見られる。38は隆線に「C」字形の刺突を沿わせる。下位には沈線文が描かれる。39・40は口縁部が残存していないが，半截竹管の連続刺突で文様を描いている。地文はループ文で若干古い可能性がある。

ｅ種：上記に当てはまらないもの。図193－８はくびれのない器形の深鉢で３本１組の櫛歯状工具の刺突だけが施される。図195－41は多截竹管による有節沈線で，横位に展開する文様を描く。図196－１・２は同一個体で，屈曲部に隆帯を貼り付け，その上下に刺突を施す。地文は附加条である。同図３・４は波頂部の破片で，放射状の隆帯を貼り付ける。３類ｂ種の図191－７に見られた文様を隆帯で施したものと理解される。上部は沈線が充塡され，下部は地文縄文が観察される。同図５～25は撚糸文が施される。５～８は横位の撚糸文が施され，８には「Ｘ」字状の沈線文が描かれる。９～12は斜位に施される。13～25は網目状撚糸文が施されるものである。

Ⅺ群　後・晩期・弥生土器（図197～204，図版168～170・147）

１類　後期末葉に属するものである。図198－１～３である。１・２は同一個体で，口縁部に沈線を２条施し，瘤を貼り付ける。３は入組帯縄文を施す。出土量は極めて僅かである。

２類　晩期前葉の大洞ＢＣ式に比定される，羊歯状文に特徴づけられるもの。図197－10・図198－４～11である。４～10は精製土器で，口縁部に羊歯状文が施され，体部には斜縄文が施される。縄文帯には綾絡文を沈線で表現するものが多く，結節回転は10のみである。11・12は半精製の土器と思われ，綾絡文を施す地文縄文の土器である。これらの出土量は僅かで，調査区中央部２次調査区寄りの尾根および北斜面でのみ出土する。

３類　晩期中葉大洞Ｃ１式に比定されるものである。図198－12・13は雲形文が描かれる小型の鉢と思われる。出土量は非常に僅かである。

４類　晩期中葉の大洞Ｃ２式に比定される精製土器である。雲形文およびそこから派生した文様に特徴づけられるもの。図197－１～９・11・図198－12～48・図199・図200－１に示した。１次調査区東部の丘陵裾からの出土が多く，調査区中央部尾根上からも出土する。出土層位はＬⅡが大部分である。

ａ種：短頸の壺形土器。図197－１・４・５である。外傾する口縁部と丸い体部を持つ器形のものである。１は８単位の突起を口縁部に持ち，波底部には２個１対の貼り瘤が施される。内面には沈線が一巡し，突起内面は三角形に彫られる。頸部は有節沈線，沈線で飾られる。体部には上位に単節斜縄文，下部に撚糸文が施される。５は４単位の波状口縁で，口端部に沈線を施す。頸部は無文となり，体部との境に刺突付隆帯を一巡させる。４は口縁部にメガネ状付帯文を持ち，内面に沈線が一巡する。頸部は無文で，体部との境に刺突列を施し，２個１対の突起を付す。

ｂ種：長胴の壺形土器。図197－３に示した。５号土坑出土土器(図113－７)が例となる器形のものである。口縁部が内傾もしくは直立し，体部に向かって開いていく。体部は上半で径が最大となり，底部に向かって直線的にすぼまる器形である。３は口縁部には突起が付き，上端に刻みが付される。刺突の入る沈線文帯を挟んで，雲形文系の文様を単節斜縄文上に描く。体部には網目状撚糸文が施される。これらと同様の器形を持つと思われる破片を図199－12～26に示した。12・13はＡ突起，14にはＢ突起が認められる。

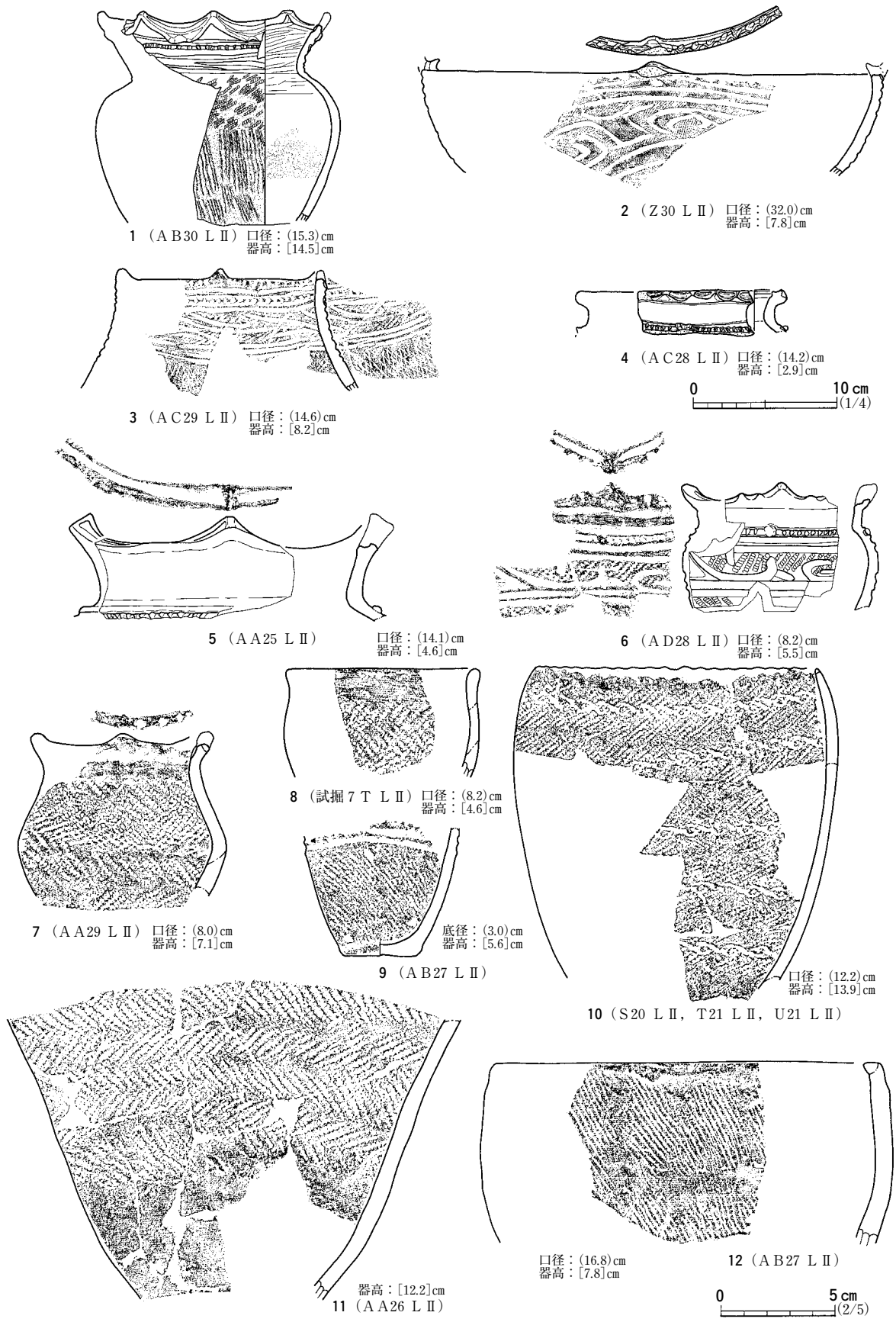


図197　遺物包含層出土土器(75)　Ⅺ群土器

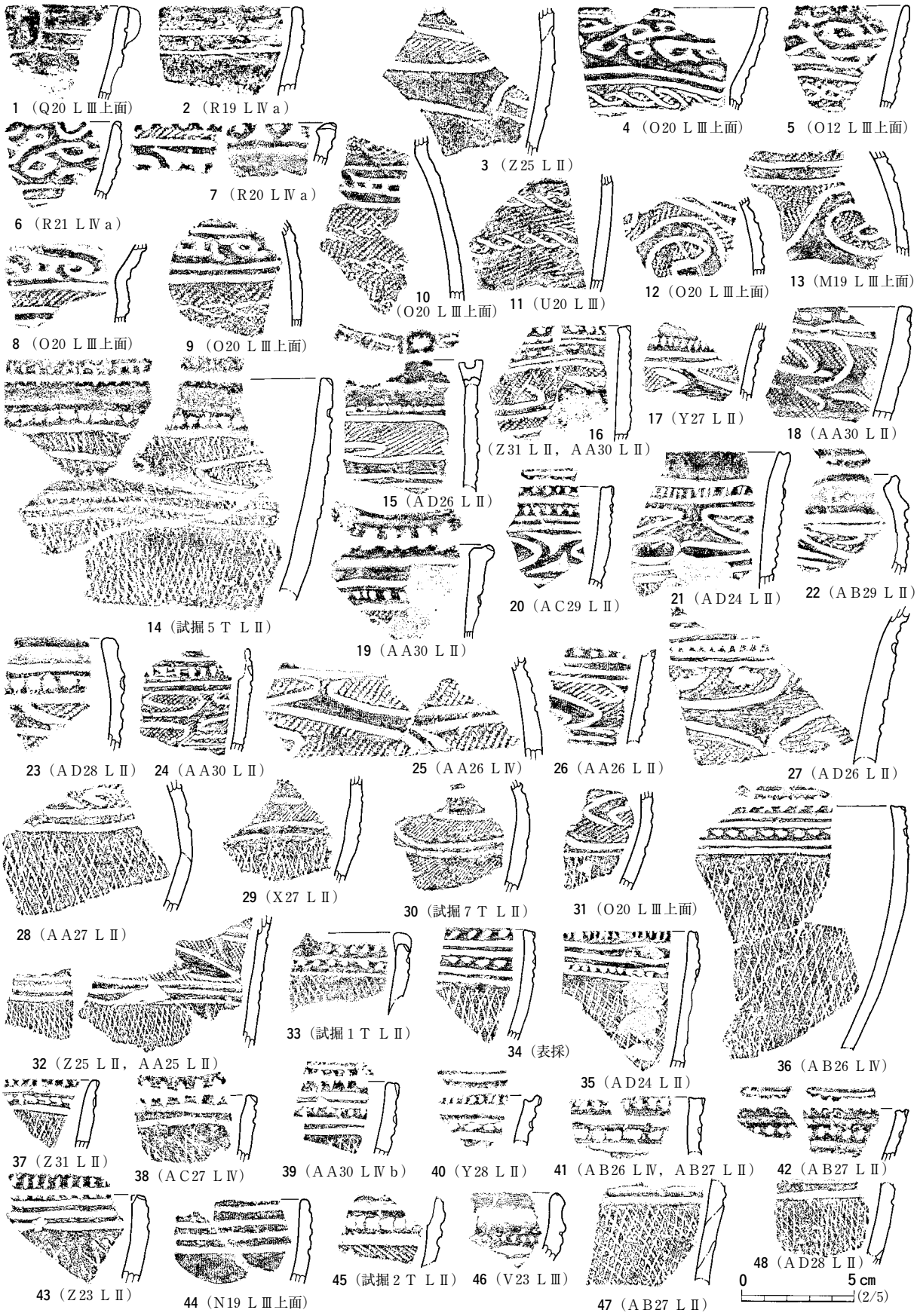


図198　遺物包含層出土土器(76)　Ⅺ群土器

図199　遺物包含層出土土器(77)　Ⅺ群土器

ｃ種：深鉢。図198－14～48に示した。いずれも直立ないし内湾する破片である。14～32は雲形文帯を有するものである。口縁部上端に刺突列を施し，下位に文様帯を配置する。15のように突起が付くものも認められる。多くは文様帯内に斜縄文，体部に網目状撚糸文が施されるが，14はすべて網目状撚糸文である。33～48は文様帯のない半精製の深鉢もしくは鉢かと思われる。

ｄ種：鉢。図197－６は小型鉢で，口縁部が外反し，短い頸部が丸い体部とつなぐ器形を持つ。口縁部にはＡ突起・Ｂ突起が付く。体部は雲形文から派生した文様を描く。図199－１～５・７はこれに似た器形もので，外反する口縁部が体部とつながる器形である。口縁部は無文で，大小の突起が付く。体部との境には沈線・刺突が施され，２・４に見られるような突起が付けられる。体部上半が文様帯となる。同図６・８～10は半精製土器で，内傾する短い口縁部が体部につながる器形で，22号住居跡出土土器(図56－１)と同様の器形を呈するものである。

ｅ種：浅鉢。図197－２・図199－27～37はいずれも口端部が内側に肥厚し，32のように広く迫り出すものも認められる。突起が付く物は口端部の内外角から飛び出す断面二瘤状の突起となる。雲形文が施される197－２は文様帯が下位まで続く様であるが，「Ｃ」字状など雲形文の派生文様が描かれる199－30・37は文様帯の幅が狭く，沈線で区画した下位は無文となっている。肥厚する口端部には交互刺突(197－２・199－31・34)，沈線および縄文帯(32)，肉彫調の入組文様(33)などが施される。図200－１は口縁部の内湾する浅鉢片で，メガネ状付帯文が施される。下位には刺突を有する縄文帯が施される。

ｆ種：上記以外のもの。図197－７は小型の壺，同図８は小型の短頸壺と思われる。いずれも体部は羽状に配した縄文である。同図９は小型鉢の体部～底部破片である。同図11は半精製の深鉢の体部下半と思われ，羽状の縄文が施されている。

５類　弥生時代前期に比定できるもの。変形工字文あるいはそこから派生した文様に特徴づけられる。図200・図201に示した。多くは細片のため器種は分からないものが多いが，多くは鉢・深鉢と考えられる。

図200－２～10・17～19は変形工字文を地文縄文上に描くものである。内湾するものが多く，大半が深鉢かと思われる。６は中央に円形竹管の低角度刺突を加える。砂粒を多く含む。同図11は幅狭の変形工字文の中央部をＵ字形に窪める文様だと思われる。

同図12～15は地文上に対角線で区切った四角を横に連ねる形で変形工字文を描くもので，沈線によって区画された外側を磨り消す。これらには雲母を含む。同図16・20・23～26・30～36は変形工字文から発展した磨り消し文様を描く。変形工地文では沈線によって区切られていた三角形が変形，曲線化したようなものであろう。同図21は横位の区画線のみ確認できる。

同図22・54は高杯で，変形工字文の一部が確認できる。54は高台部には３箇所円形の透かしが入るようである。

同図27・28は同一個体で，縄文を充填した区画の内部に曲線状の無文帯が入りこむ。内湾する器形で鉢の可能性がある。同図29は磨消縄文部が曲線的なモチーフを描く。同図40は縦に区画のはい

図200　遺物包含層出土土器(78)　Ⅺ群土器

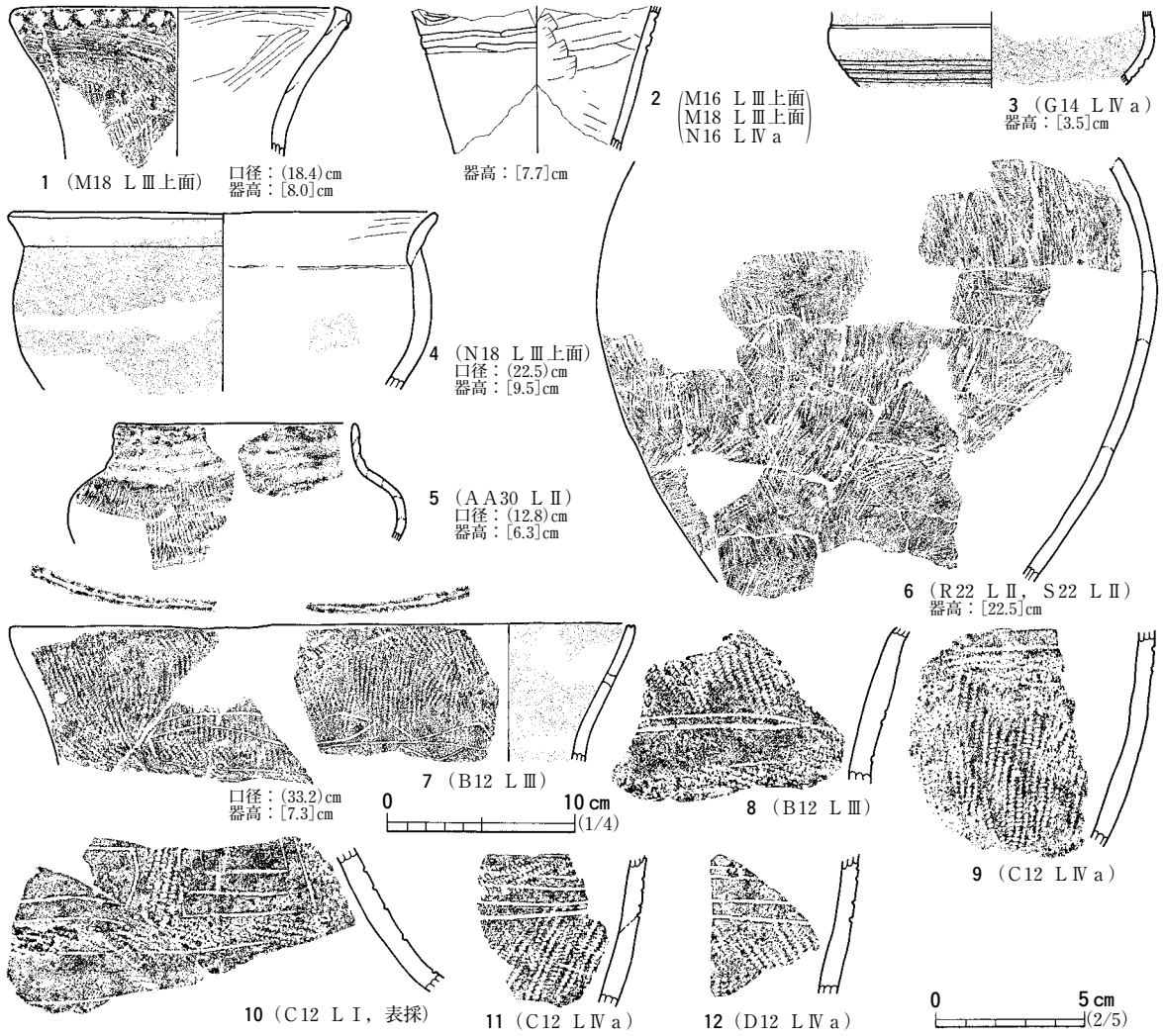


図201　遺物包含層出土土器(79)　Ⅺ群土器

る鉢の一部である。

同図37～39は壺と思われる。37は上端に縄文を施す口縁部で，38・39は肩部の破片である。同図41～43は深鉢の同一個体片と思われ，上位に縄文帯，下位に条痕が認められる。

同図45～48は無文部に横位の沈線が確認できる。45・46が深鉢，47・48は壺と思われる。49は単節斜縄文施文の蓋で，中位で屈曲して天井へと続く器形のようである。同図44・50・51・55～56は有文の体部下端から底部で，鉢，深鉢であろう。同図52・53は台付鉢の無文底部破片で，53の内面には赤色塗彩される。同図57・58は地文のみ認められる底面の張り出す底部で，筒形の体部を持つ土器の底部であろう。58は撚糸文施文で，底面には木葉痕が確認される。

図201－１～４・６には復元可能なものを示した。図201－１は壺の口縁部で，口縁部上端に刺突，以下に条痕が施される。同図６は条痕文が施される壺の体部であろう。２は筒形の体部で，沈線が２条中位を巡り，上位に何らかの文様の断片が認められる。同図３・４は鉢と思われ，いずれにも

炭化物が付着する。

６類　各時期の粗製土器。図201－５・202～204に示した。

ａ種：後期末葉～晩期前葉に比定されるもの。櫛歯状工具で施文するものである。図202－１～４・図204－１・４・５である。図202－１～４・図204－１は波状文を描く。図204－４・５は格子状に櫛描する。粗製土器の中でも占める量は少ない。

ｂ種：晩期中葉に比定されるもの。

ｂ１種：撚糸文が施されるもの。図201－５・図202－５～28・図203－１～14である。図202には網目状撚糸文の深鉢を示した。５～14は外傾して立ち上がり，口縁部上位で内湾する形態となる。14については口縁部上端とそれ以下で，絡条体の回転方向を変えている。15～18は積み上げ痕を残し複合口縁となるものである。器形はいずれも内湾する。これも口縁部上端と以下では原体の回転方向を変えている。19～23は口縁部上端が無文となるものである。19・21は内湾して再び端部で外反する。20・22・23は無文部をヨコナデして地文施文部との間に緩い段を付けるようにしている。24～28は体部の破片である。図201－５は粗製の短頸壺である。口縁部無文となり，体部には撚糸文が施される。図203には撚糸文の破片を示したが特徴は網目状撚糸文施文のものと同様である。同図６～12は底部である。出土量は本類土器の中で多い。

ｂ２種：縄文施文されるもの。図203－15～21・29～35である。15～18・21は短頸壺の器形になるもので，無文の口縁部に体部に縄文が羽状に配されるものである。頸部には沈線が巡るものも見られる。21の肩部には刺突が施される。19は深鉢片で，口縁部上端をヨコナデする。20は体部破片，29以下は底部である。

ｃ種：晩期末葉～弥生時代に帰属するもの。

ｃ１種：図203－23～27は縄文施文の粗製甕の口縁部である。

ｃ２種：条痕が施されるもの。図204－２・３・６～19である。２・11は甕の口縁部である。８～10は積み上げ痕を残す複合口縁の破片である。12は地文条痕の口縁部に沈線を一巡させる。17は台付の鉢もしくは甕の高台部である。基本的には無文であるが，一部に条痕が認められる。18・19は壺の底部かと思われ，いずれも木葉痕がつく。これら以外は体部破片である。

ｄ種：無文のもの。図204－20～36である。20～23・25～29は鉢の口縁部と思われる。内外面にミガキが施され，平滑である。沈線を巡らすもの(20)，ヨコナデを施した段を有するもの(21・22)，突起を持つもの(25・26)がある。これらについては晩期の可能性がある。24・31は深鉢の口縁部で，31は複合口縁となる。30は甕の口縁部である。32～36は底部である。32は小型の杯状の器形である。36は台付鉢の底部と思われる。32～34には木葉痕が認められる。

７類　弥生時代後期に比定されるもの。図201－７～12に示した。いずれも胎土の特徴や炭化物が内外に顕著に付着するなどから同一個体の可能性がある。７に示した口縁部片は口端部に沈線が巡り，地文には縦位の縄文が施される。緩く括れる頸部には単沈線による文様を描く。８も同様の頸部と思われる。10は体部上半の破片と思われ，方形状のモチーフが描かれる。９・11・12は体部下

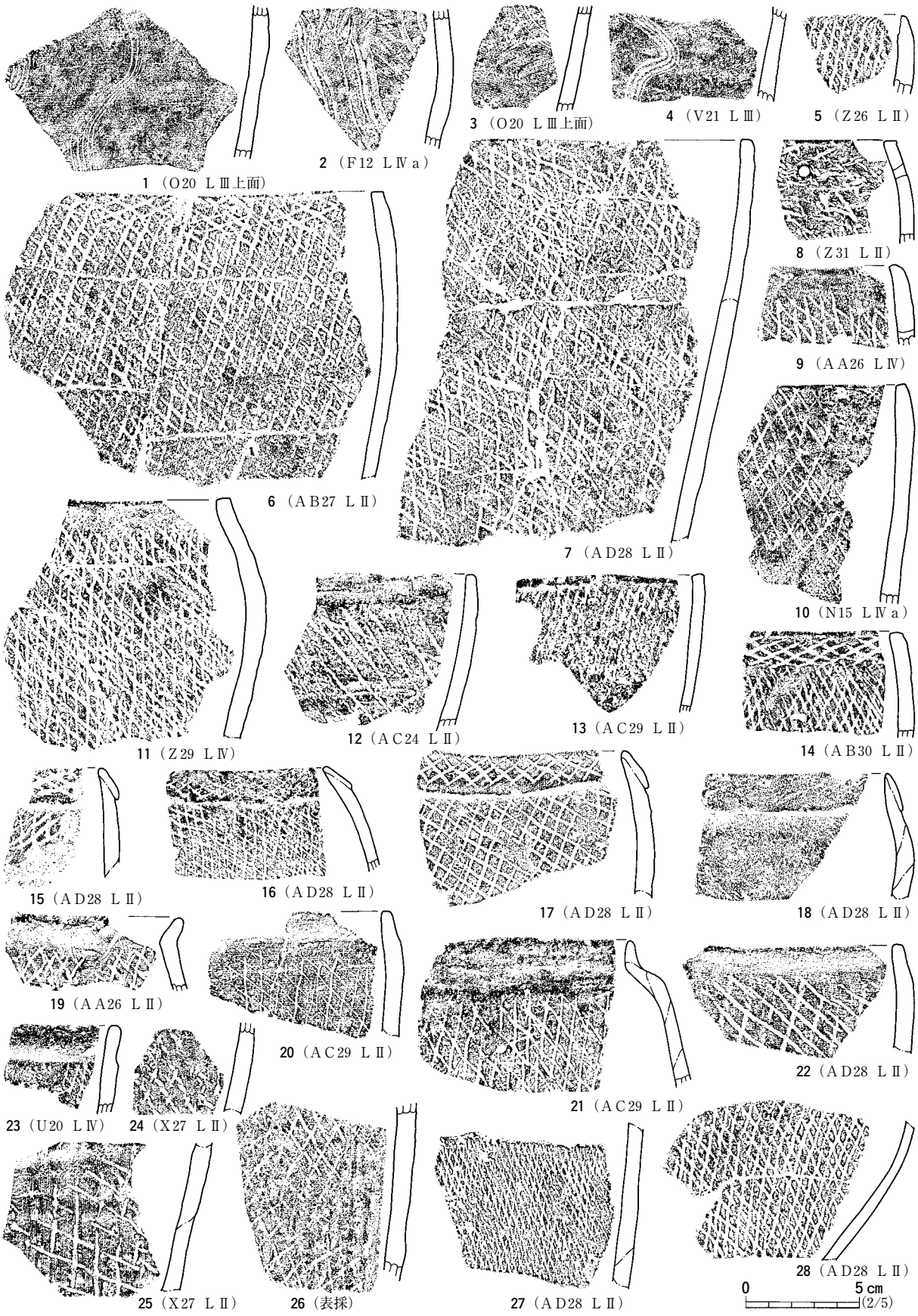


図202　遺物包含層出土土器(80)　Ⅺ群土器

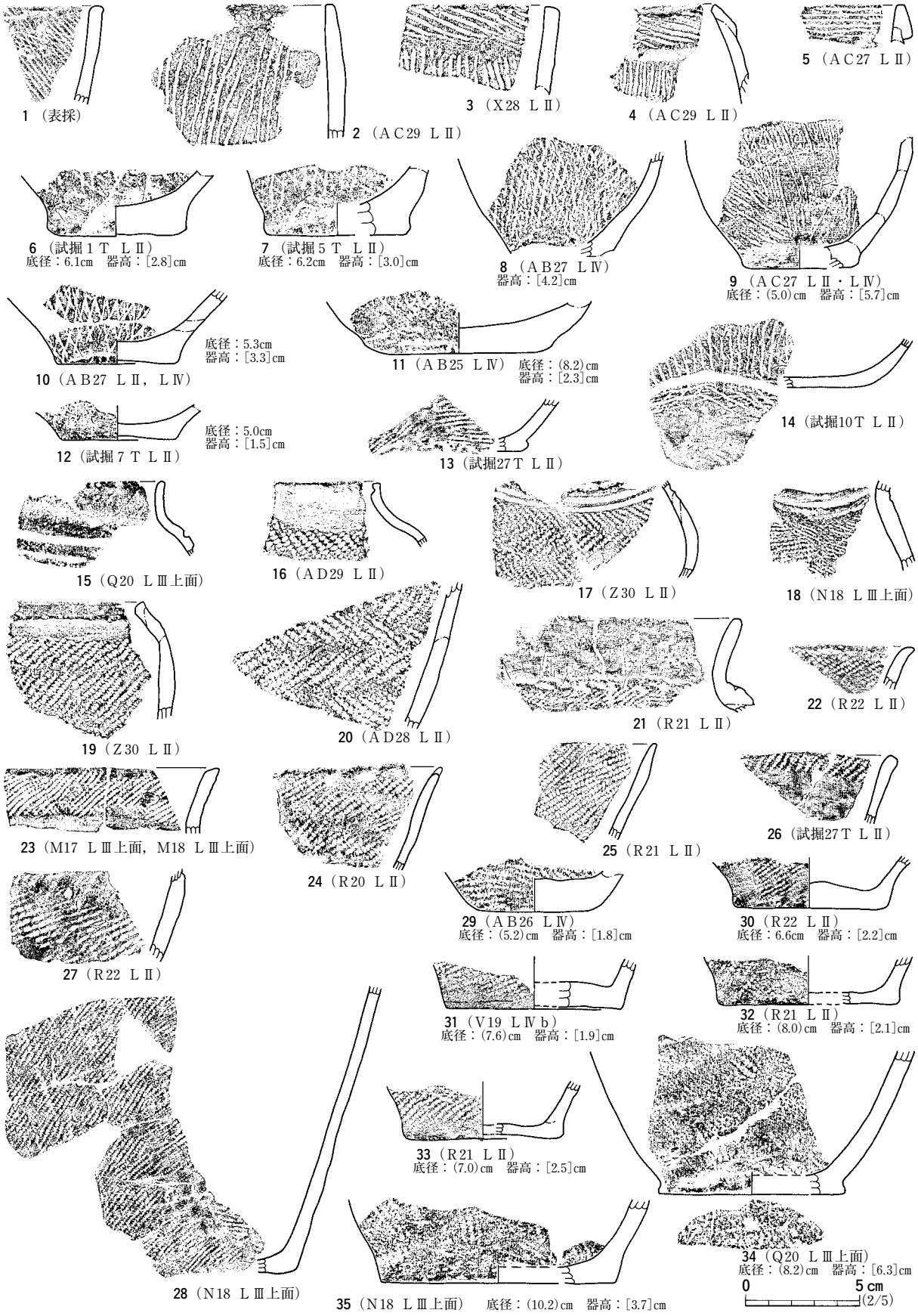


図203　遺物包含層出土土器(81)　Ⅺ群土器

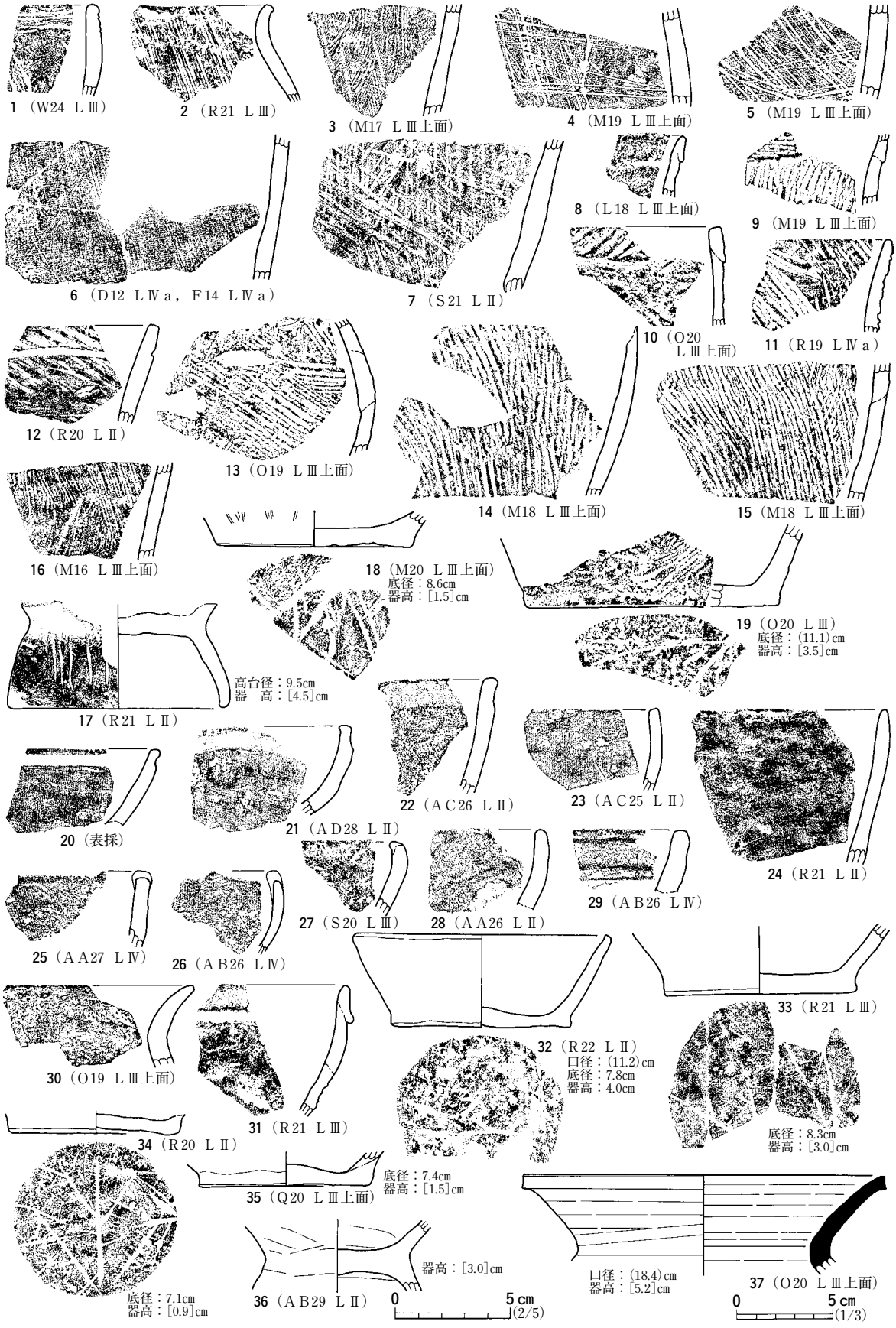


図204　遺物包含層出土土器(82)　Ⅺ群土器

半の破片と思われ，横位の沈線が認められる。これらは調査区西部の谷の西側から出土した。

Ⅻ群　古代に属する土師器・須恵器（図204）

図204－37の須恵器１点のみ図示した。壺の口縁から頸部の破片である。平安時代に帰属しよう。

石　　器（図205～223，図版171～175）

石鏃　図205～図210－10に示した。石器完成品のうち出土量は最も多い。デイサイト質凝灰岩が多用され，流紋岩がこれに次ぐ。大半が凹基無茎石鏃である。

図205～図207－25は凹基の石鏃である。図205～206－11は長幅比が２前後の鏃身の長いものである。図205－１は珪質頁岩製で大型である。石鏃形に成形されているが，重さは５ｇを超えており，実用品かどうかは疑問である。同図２～８は長さが３㎝程度の大型で，基部は抉れ部が弧を描いて脚が若干飛び出る形状である。これらは珪質頁岩やチャートなど良質の石材を用いることが多い。同図９～図206－２には長さ２～３㎝のものを集めた。17・18のように最大幅が脚の直上にあり側縁が弧を描くような形態のものは流紋岩，側縁が直線的な形態のものはデイサイト質凝灰岩が多い。図206－３～６はいずれも流紋岩製である。３は脚の直上でくびれるような形態である。４・５は基部が深く抉れ，尖頭部が三角形に尖る。６は脚部が横に張り出すような形態となる。図206－７～図207－12は長幅比が1.5程度のものである。図206－７～11は長さ２㎝を超えるものである。10は表裏に磨り面が認められる。図206－12～図207－12は長さ２㎝未満の小型のもので，これらにはデイサイト質凝灰岩が多い。図207－13～17は長幅比が1.5以下の幅広のものである。13・14のような大型品には珪質頁岩，小型品はチャートを用いる。同図18・19は鏃身が短く抉れの深い脚長のものである。同図20～22は鏃身の幅が狭い三叉状のもので，いずれも流紋岩である。同図23～25は凹基に成形されているが左右非対称で，未成品と考えるものである。

図207－26～図208－11は平基の石鏃である。大型品は珪質頁岩，小型品にはデイサイト質凝灰岩が多い。図208－12～20は円基の石鏃である。デイサイト質凝灰岩が多い。同図208－21・22は基部の一方が長い左右非対称のものである。

図208－23～図209－１は有茎石鏃である。石材は流紋岩が多い。図208－32～図209－１は未成品と考えている。完成品には23～25・29のように二等辺三角形の鏃身に長い茎のつくもの，26～28のような正三角形に近い鏃身に長い茎のつくもの，30・31のような正三角形に近い鏃身に短い茎がつくものがある。

図209－２～14は基部に欠損部分があり上記の分類に当てはめられないものである。図209－15～図210－10は完成形態不明な未成品である。図209には三角形に大まかに成形したもの，図210には三角形の素材に若干加工を入れたものを示している。図210－６は研磨面を剥離が切っており，磨製石斧の破片を再加工したものと考える。

石槍　図210－11～17に示した。撮みがあっても両面加工のものは石槍とした。11・12は基部が抉

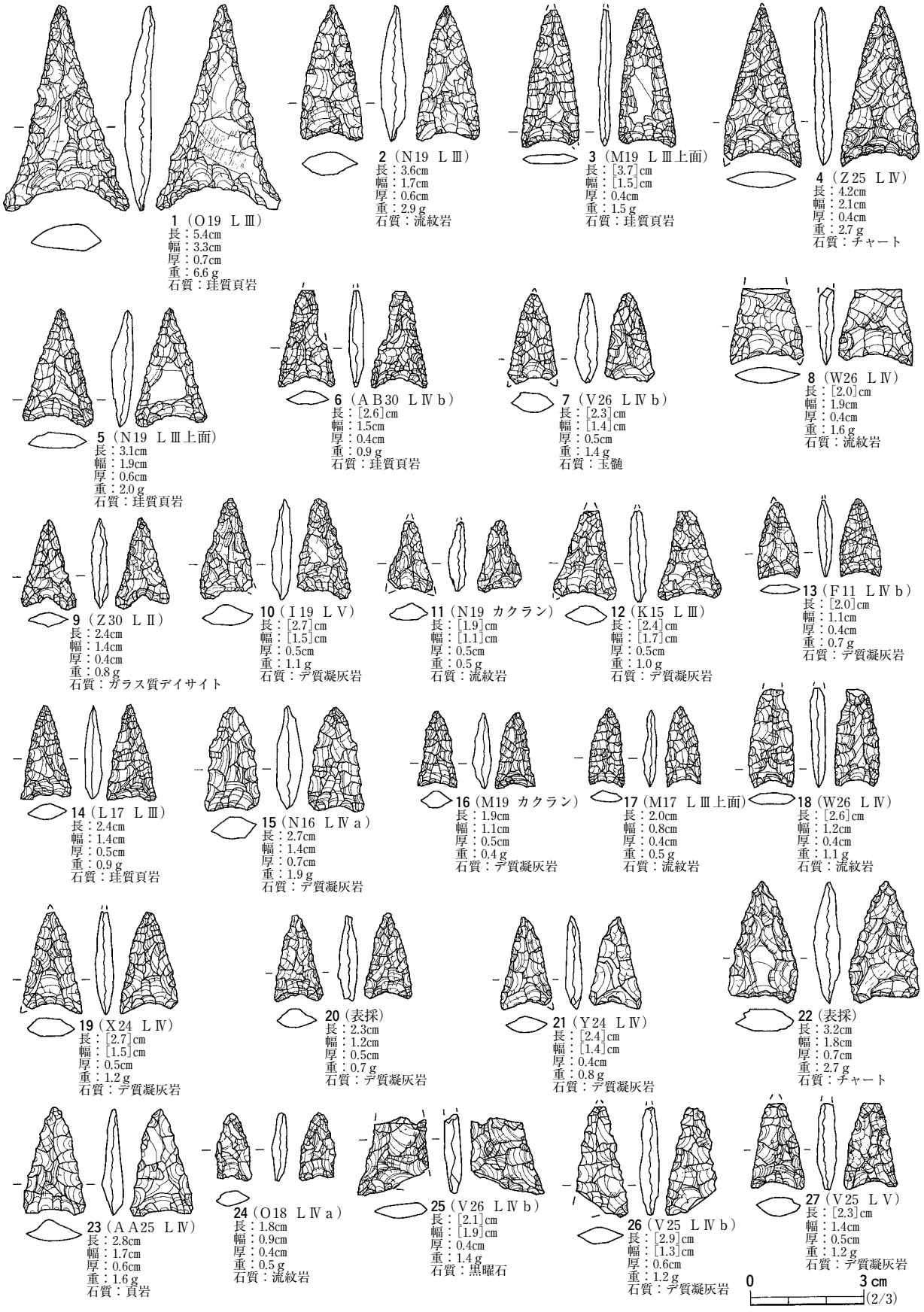


図205　遺物包含層出土石器（１）

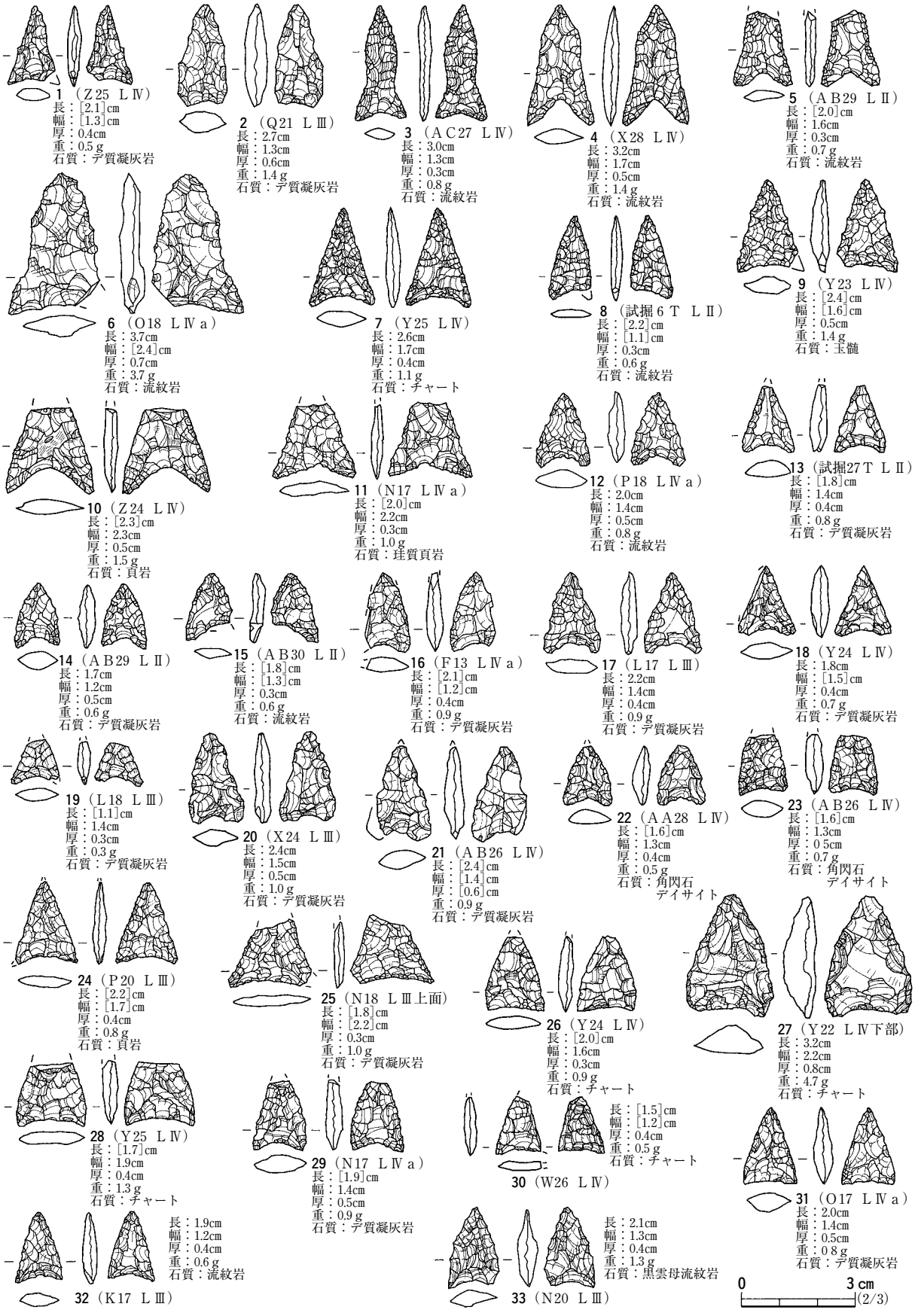


図206　遺物包含層出土石器（2）

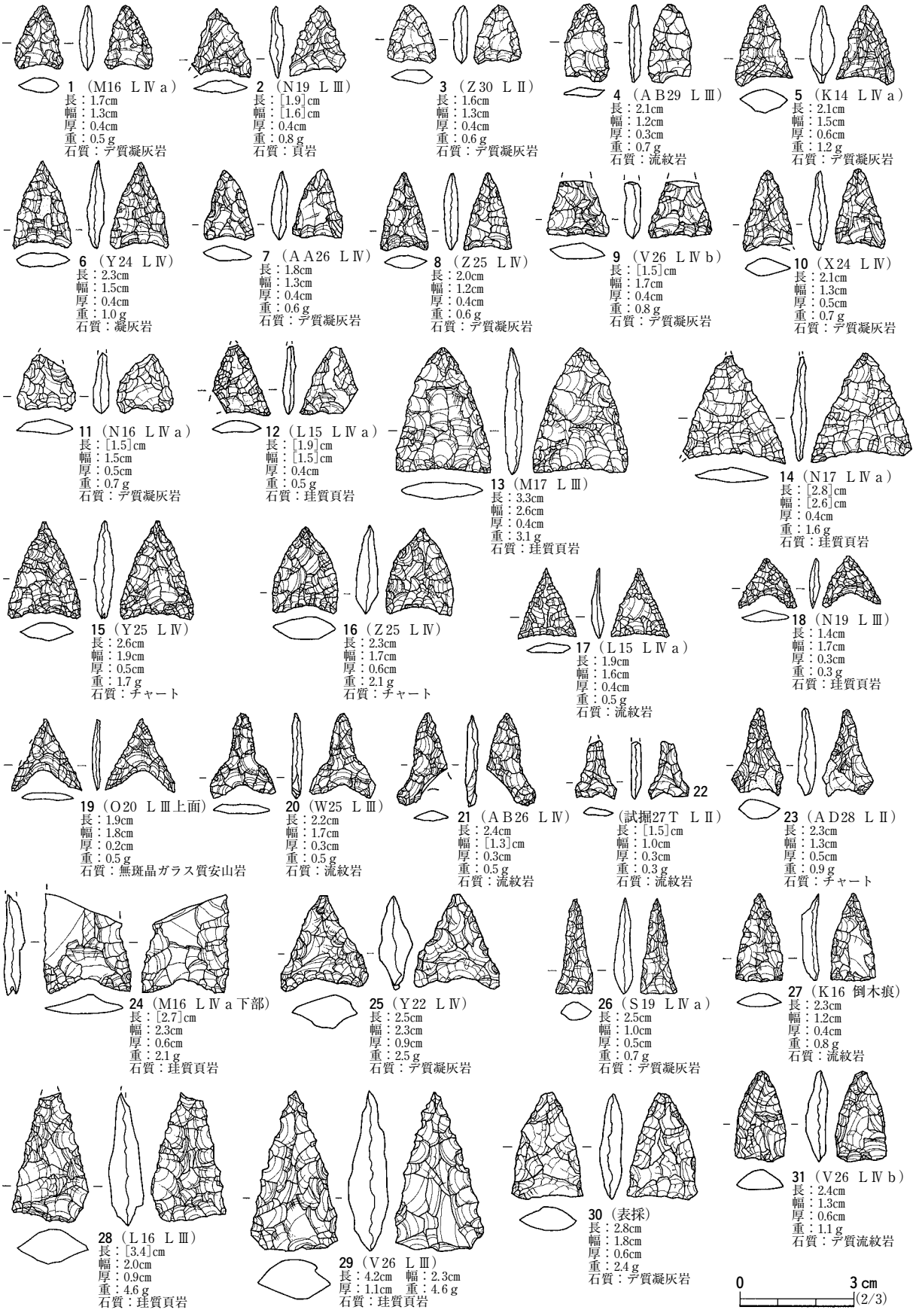


図207　遺物包含層出土石器（３）

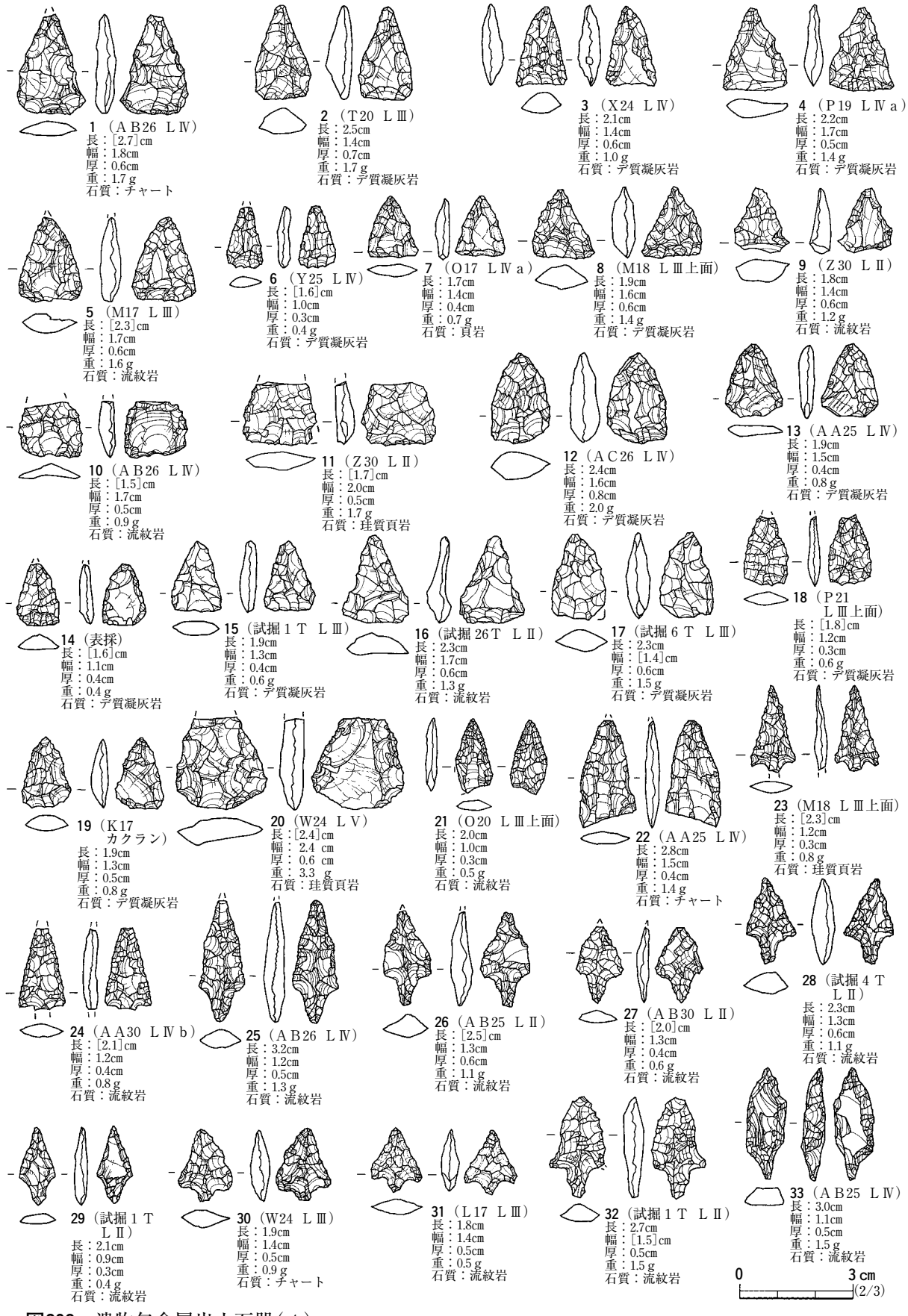


図208　遺物包含層出土石器（4）

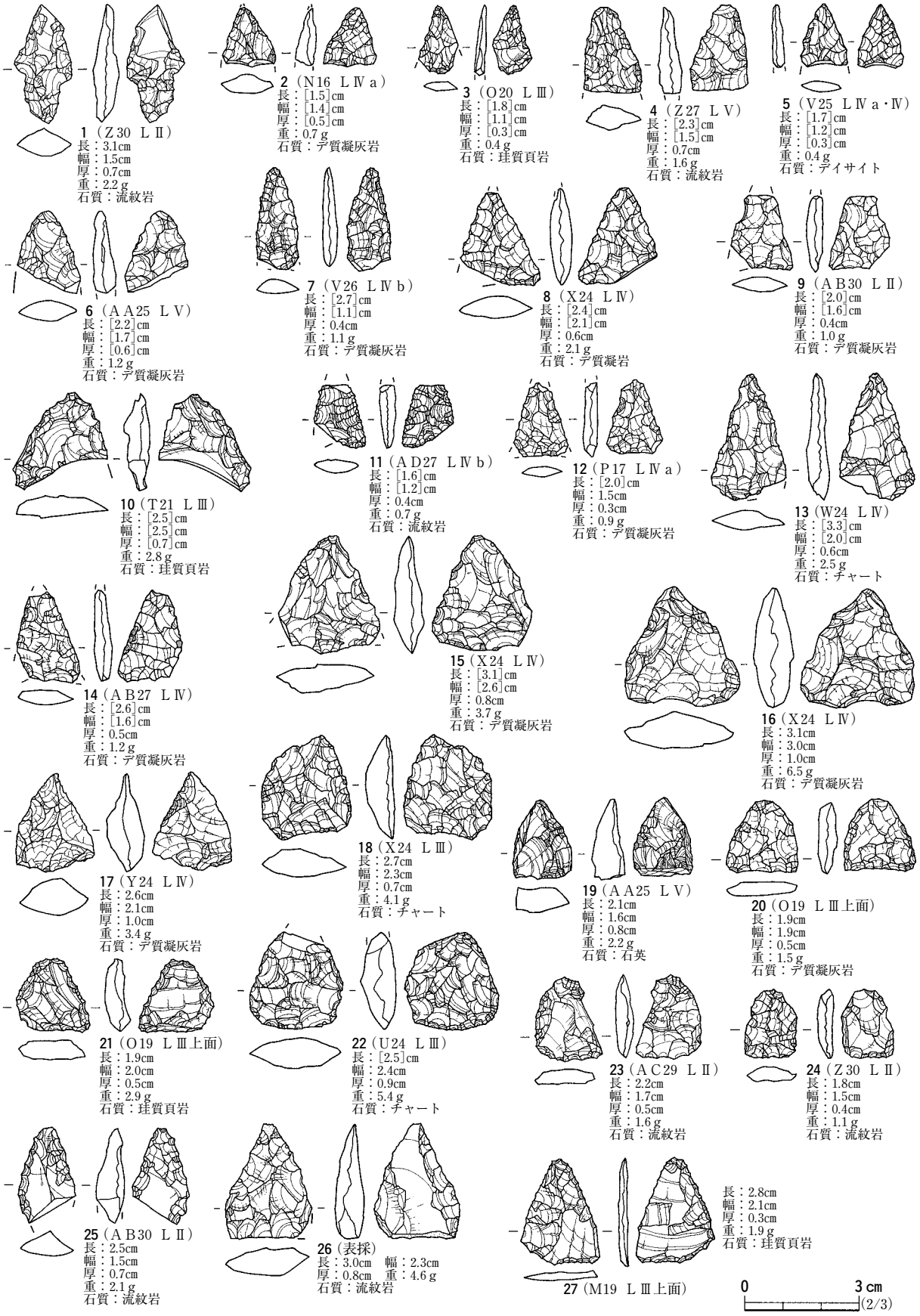


図209　遺物包含層出土石器（５）

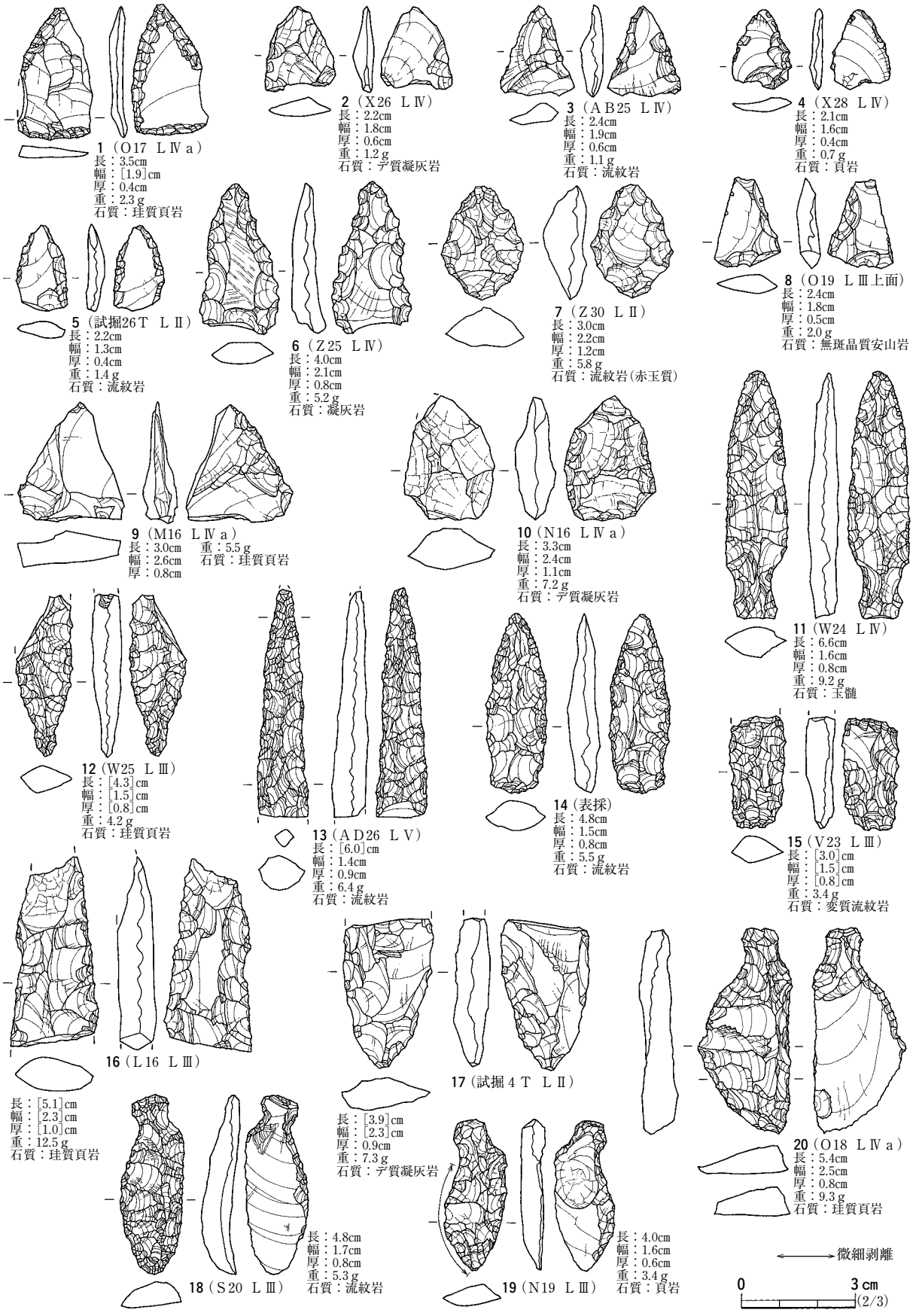


図210　遺物包含層出土石器（6）

れ，撮みのあるものである。11は珪質頁岩ではなく玉髄を用いる。13は断面円形に近く，石錐の可能性もある。15は尖頭部を欠損する。16・17は他に比べて剥離が大きく，調整途上のものかもしれない。

石匙　図210－18～図211－８に示した，剥片の背面に加工を集めた，つまみを有するものである。石材は多くが珪質頁岩である。図210－18～図211－４は縦型石匙で，長軸上につまみがつく。素材の腹面を大きく残す。背面側は左側縁が鋭角，右側縁が鈍い刃部となるよう加工される。19は腹面が焼けはじけている。20については，左側縁上部は鋭角であるが，末端付近は鈍い刃部となる。図211－５～７は長幅比が小さい石匙で，両側縁が鋭角な刃部となる。６は微細剥離が認められる。同図８は横型石匙で，両面に加工が及ぶ。末端には微細剥離が認められる。

スクレイパー　図211－９～図212－６に示した。図211－９は素材の背面に二次加工を集め，腹面をほぼそのまま残す。同図10～12は小型で末端が幅広となる形態の両面加工石器で，石鏃未成品の可能性もある。同図13は右側縁，末端に加工を集める。これについては表側末端の稜が摩滅している。図212－１は全周に二次加工される。これも表側末端の稜，図上では破線で示した部分が摩滅している。同図２・４～６は篦形に成形される。同図３は珪質頁岩の小型剥片に加工して円形に成形したものである。

石錐　図212－７～図213－５に示した。流紋岩が多用される。212－７は基部に抉りがはいるもので，石匙の末端を錐部に加工したような形態である。同図８は縁辺に二次加工が入り，一端に錐部が作出される。これらは頁岩系の石材を利用しており，スクレイパーとの複合石器の可能性もある。同図９～11は幅広のつまみと思われる部分がある。同図12～図213－３は器体全体が細く錐部状に加工される。図212－17・図213－１は両端が錐となる。特に１は両端に磨痕が認められ，使用による摩滅と考えられる。図212－15・図213－２・３は小型である。図213－４・５は剥片の一端に若干加工を加えたものである。

二次加工ある剥片　図213－６～14である。６～８は３㎝前後の剥片末端に二次加工が加えられる。９は右側縁が折れ面となっており，腹面側に折れ面からの加工が入る。10・11は横長剥片の末端に細かい剥離が入る。12～14は２㎝以下の小型剥片に細かい剥離のはいるものである。

石核　図213－15～図214－３である。図213に示した５点はデイサイト質凝灰岩である。15は長軸の上下に打面を設定し，縦に長い剥片を剥いだようである。両極石核の可能性もある。16・18は多面体を呈するものである。18については加撃により稜がつぶれている。17・19は円盤状の石核である。いずれも表裏に作業面が形成され，石器の未成品の可能性もある。図214には流紋岩２点と玉髄１点を示した。１は表裏に作業面の形成される円盤状石核の一種と捉えられる。２は１面に自然面を残す。外周縁上に打面を設定して剥離されており，円盤状石核の一種もしくは石器の未成品の可能性もある。玉髄の３は両極石核である。

磨製石斧　図214－４～図215－５である。図214には大型なものを示した。４は断面楕円形を呈するもので，凹み石に転用される。５・６は断面扁平な両刃石斧である。６は研磨があまく剥離・敲

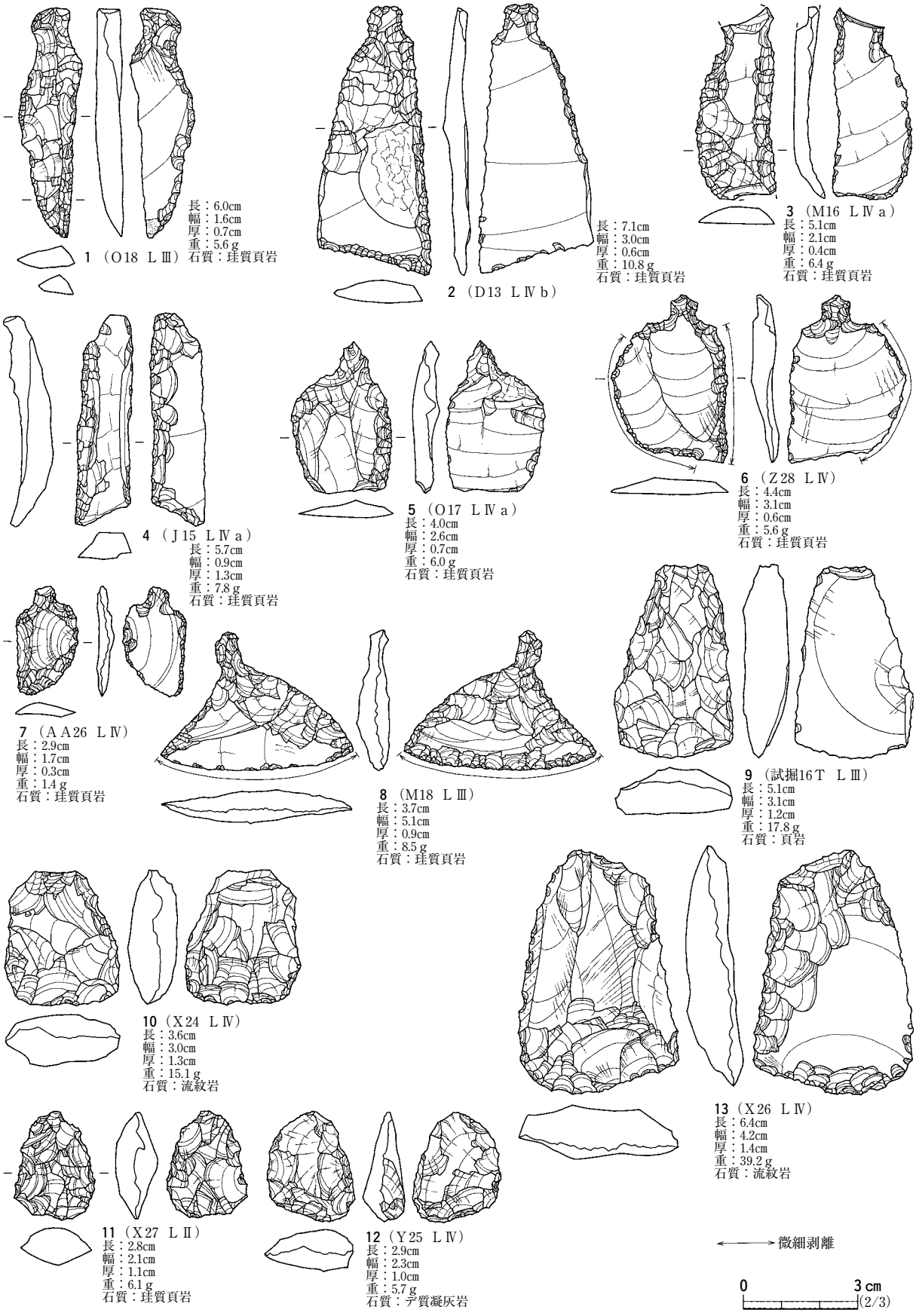


図211　遺物包含層出土石器（7）

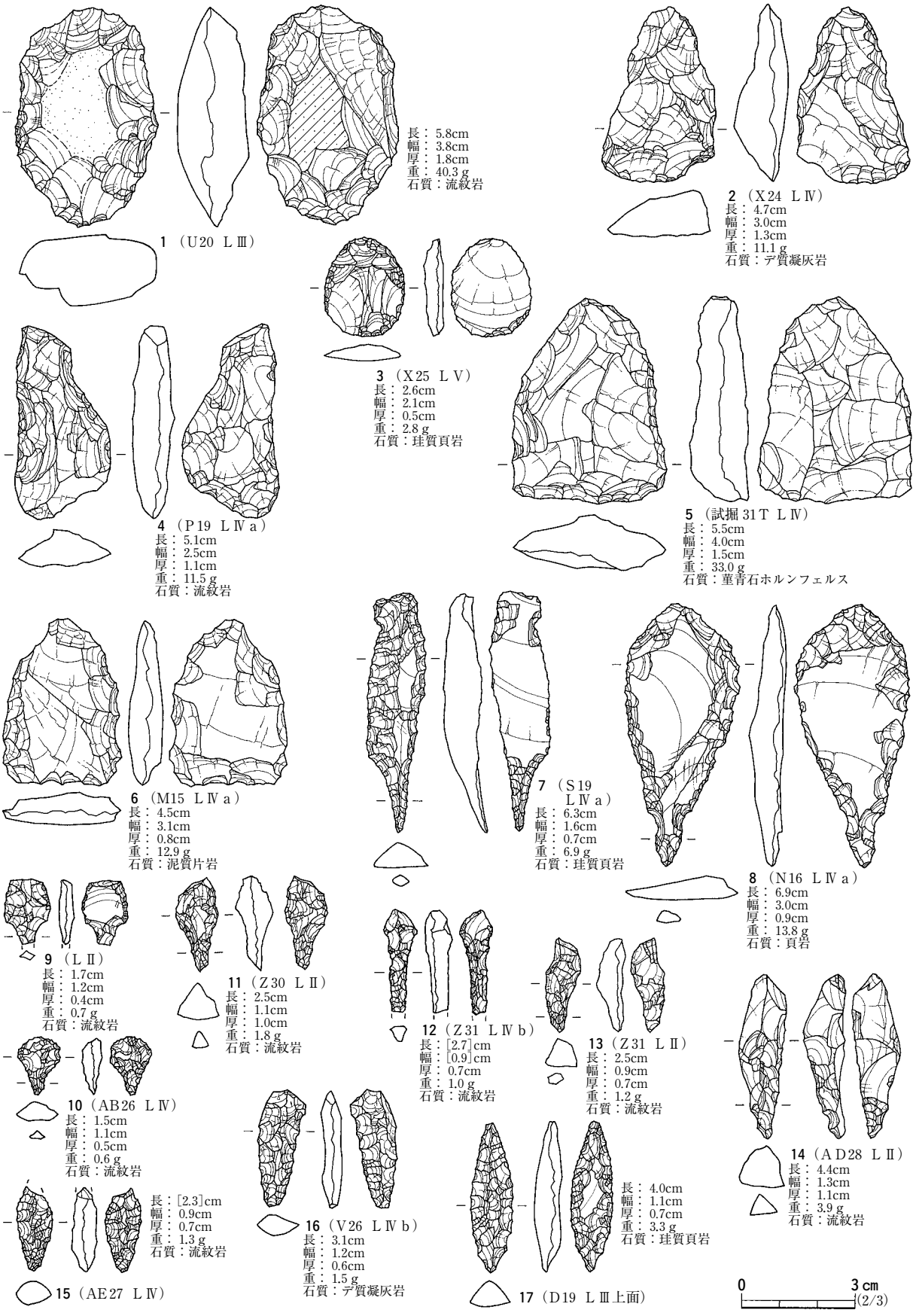


図212　遺物包含層出土石器（８）

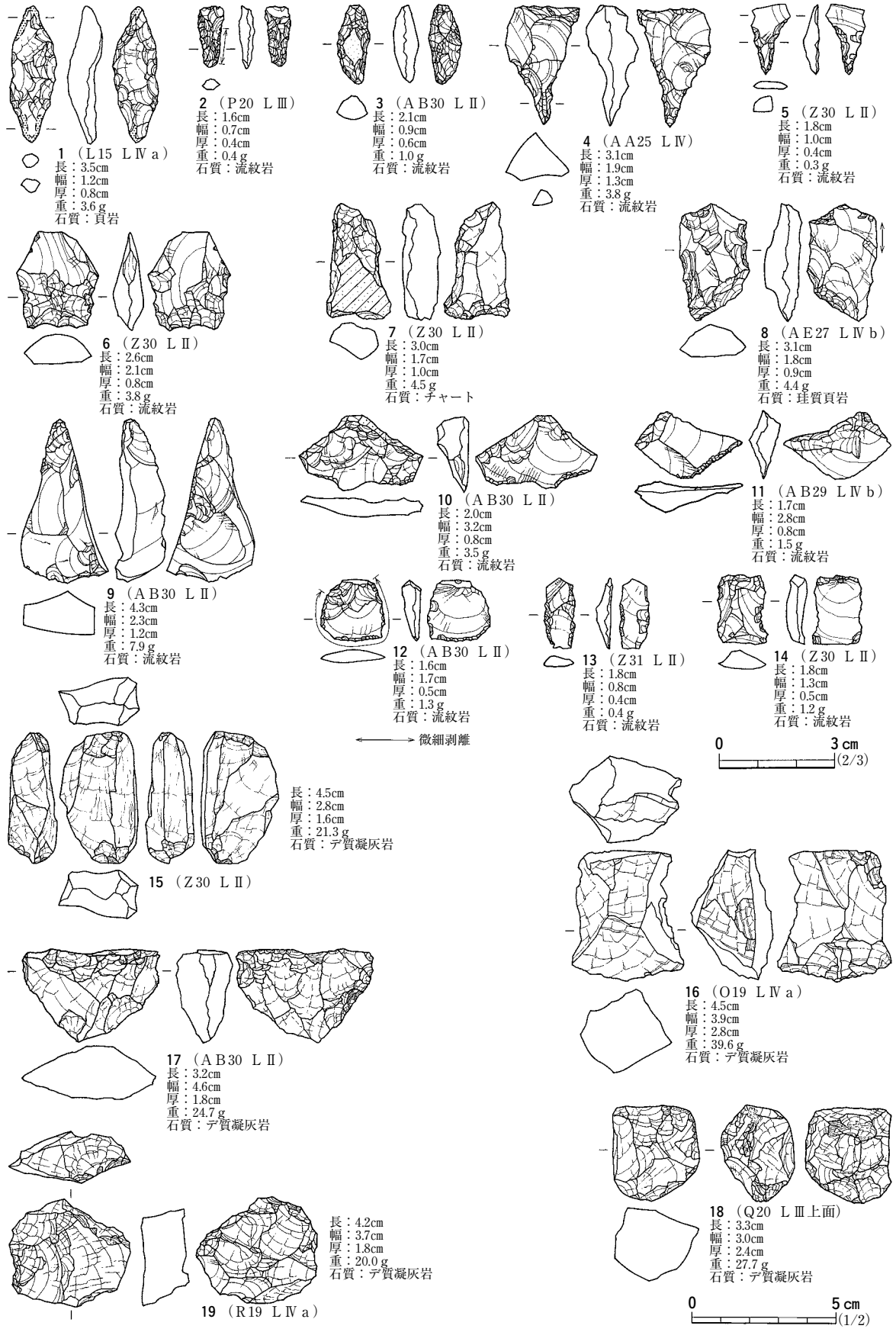


図213　遺物包含層出土石器（９）

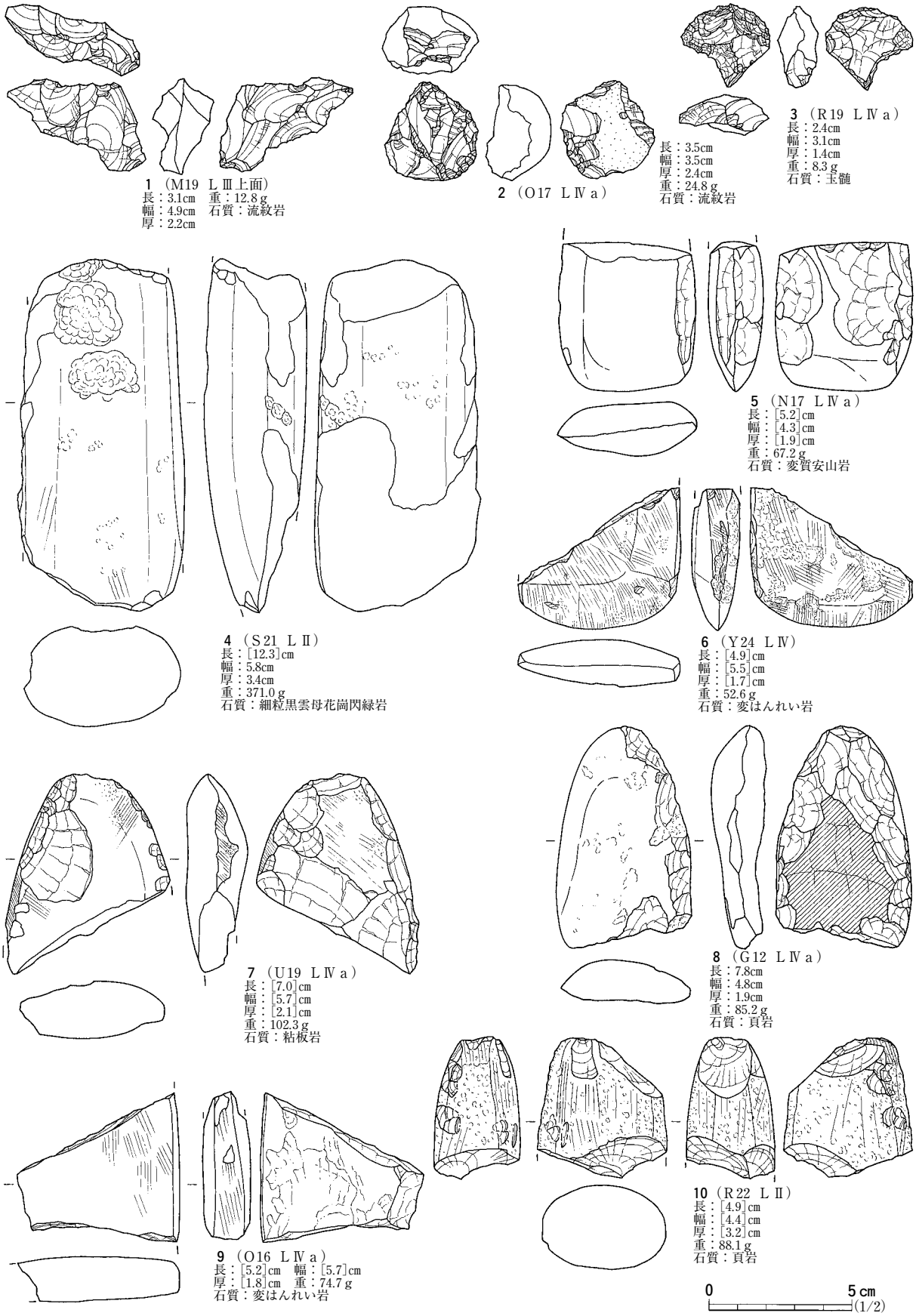


図214　遺物包含層出土石器(10)

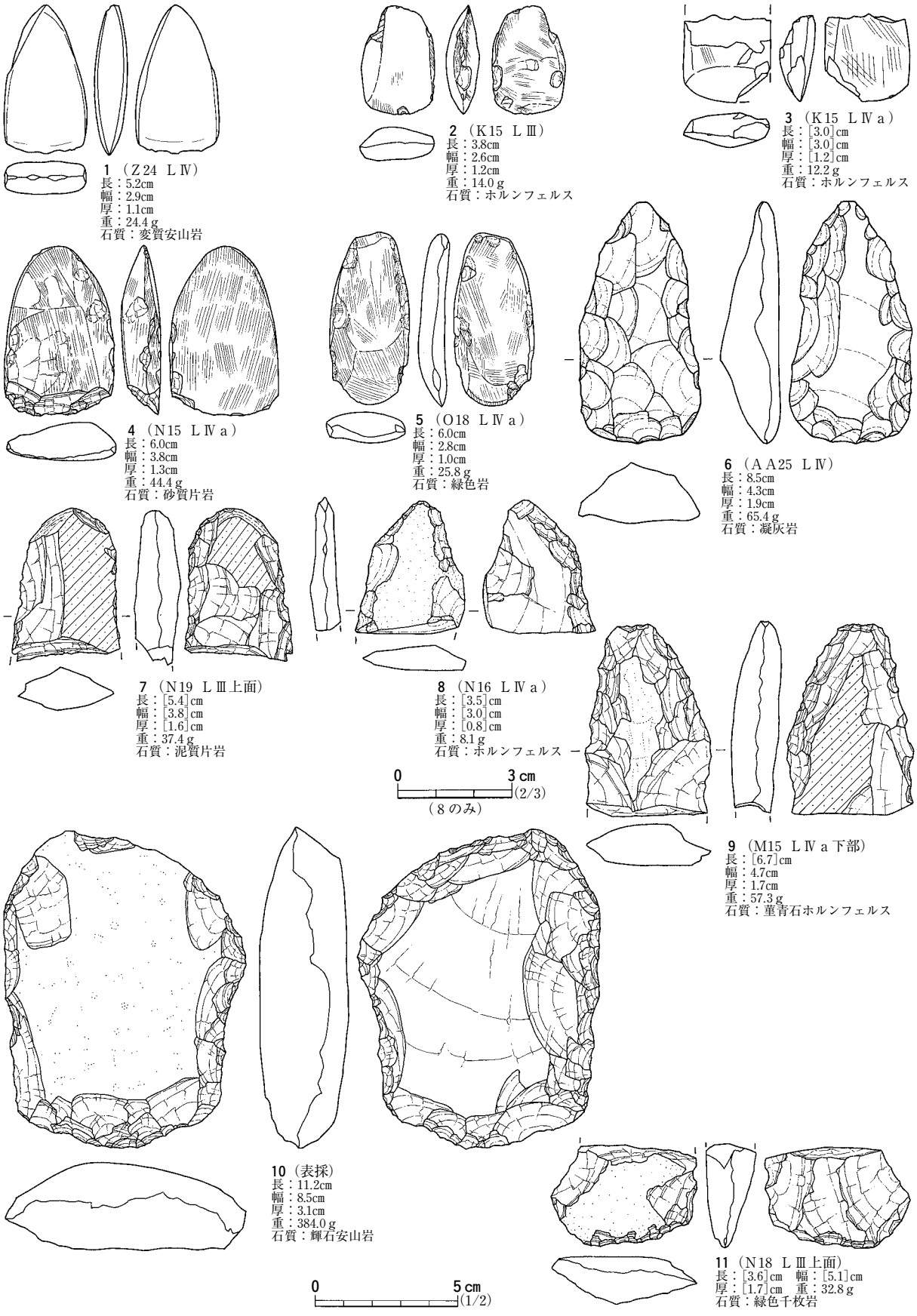


図215　遺物包含層出土石器(11)

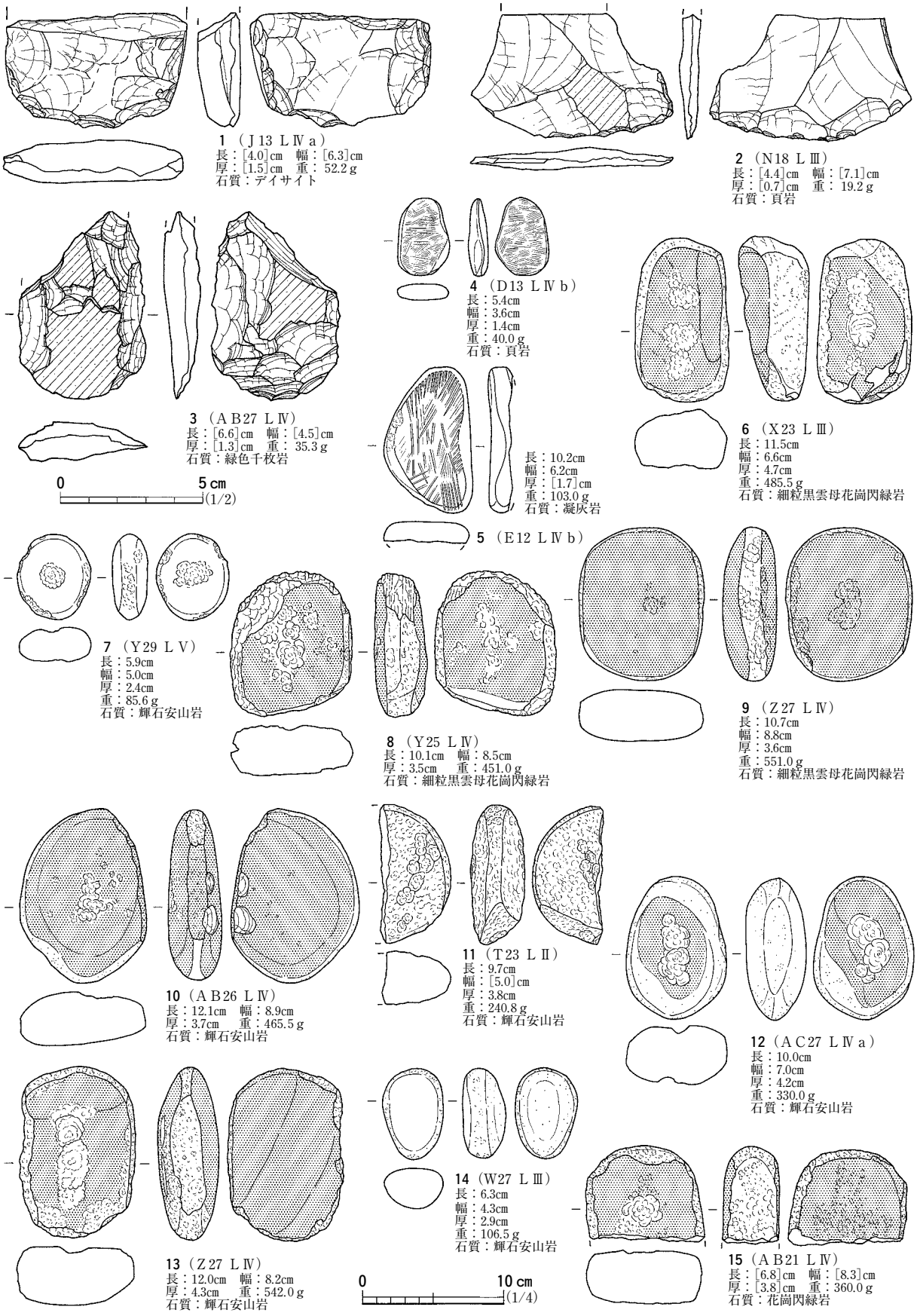


図216　遺物包含層出土石器(12)

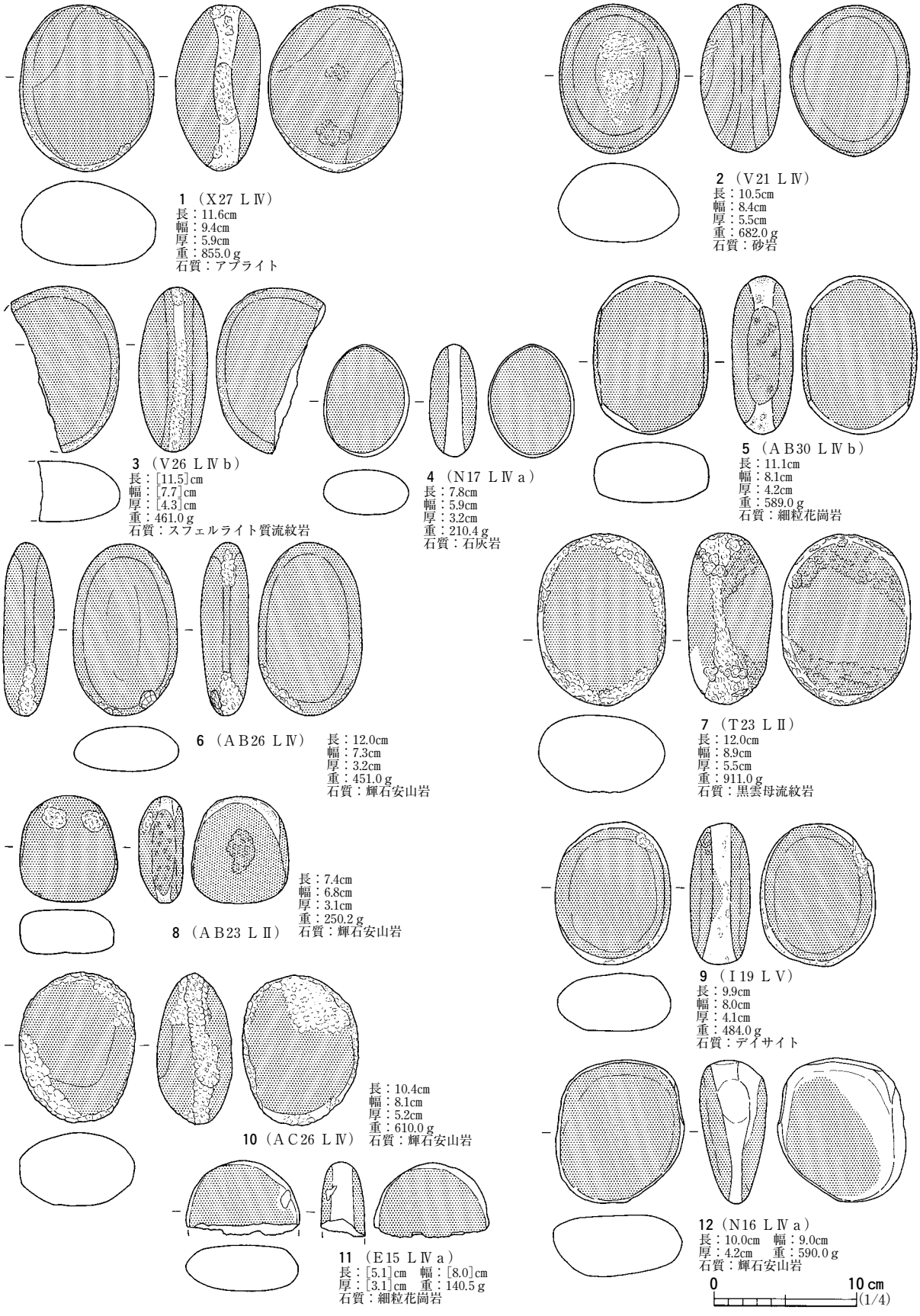


図217　遺物包含層出土石器(13)

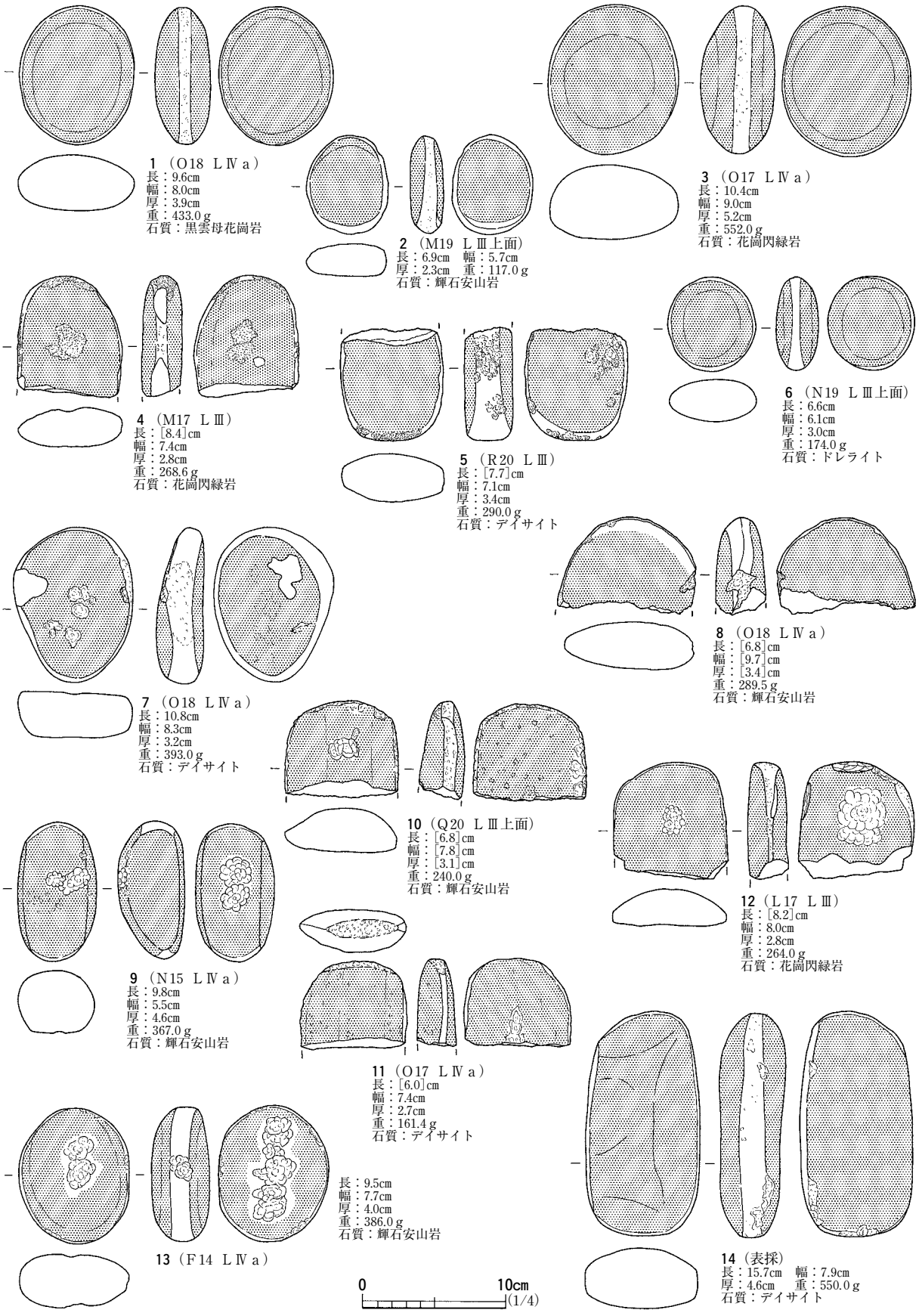


図218　遺物包含層出土石器(14)

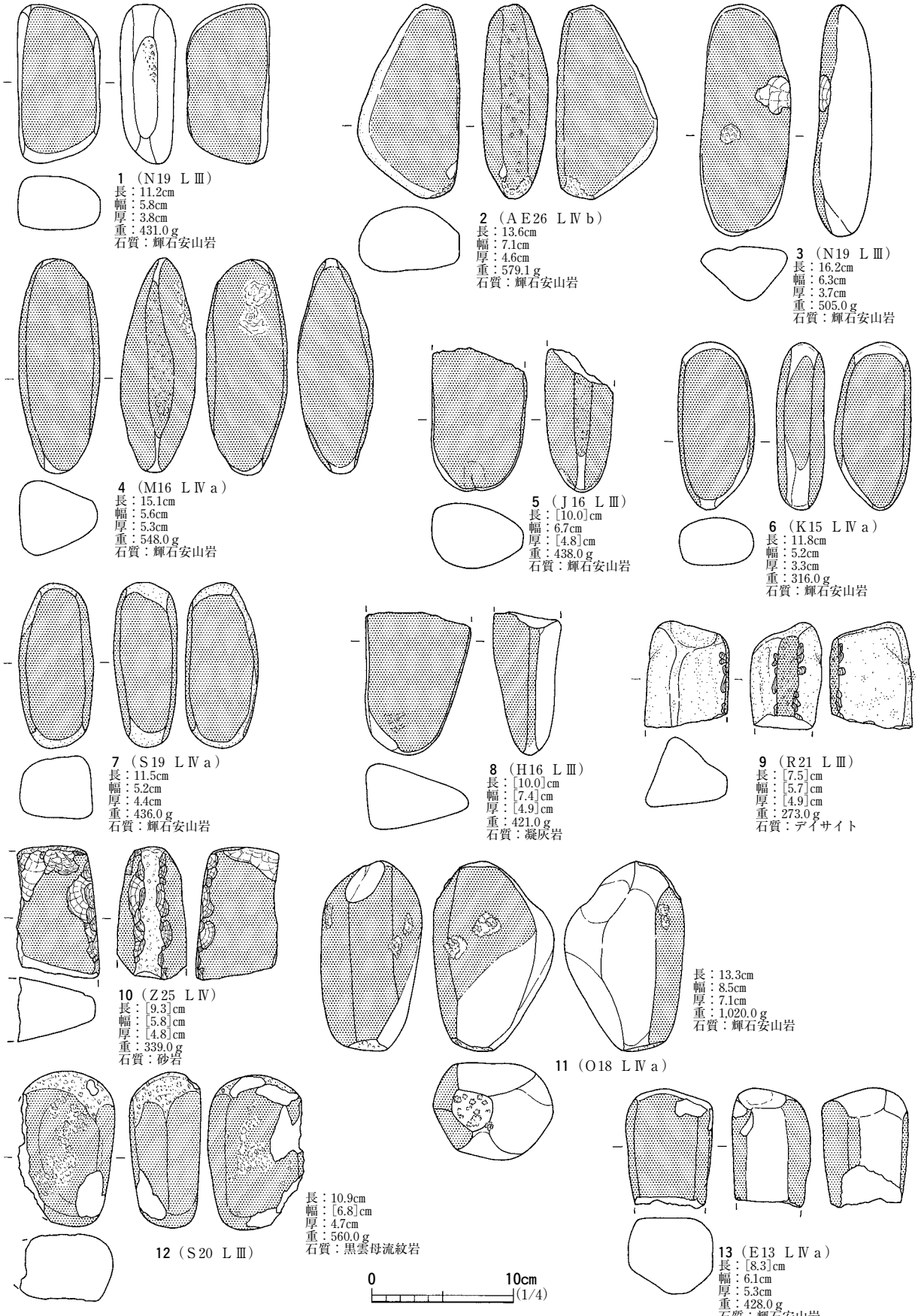


図219　遺物包含層出土石器(15)

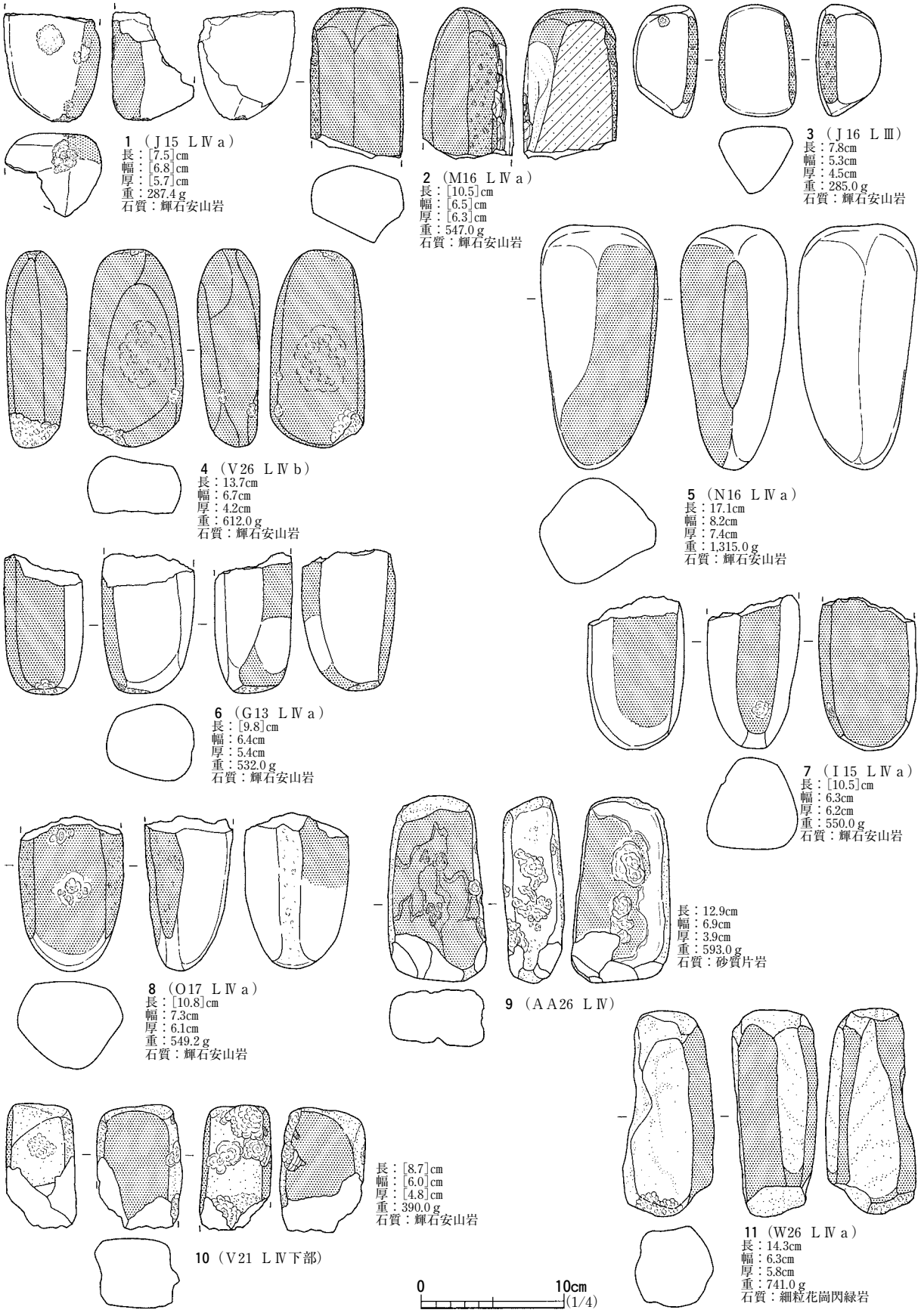


図220　遺物包含層出土石器(16)

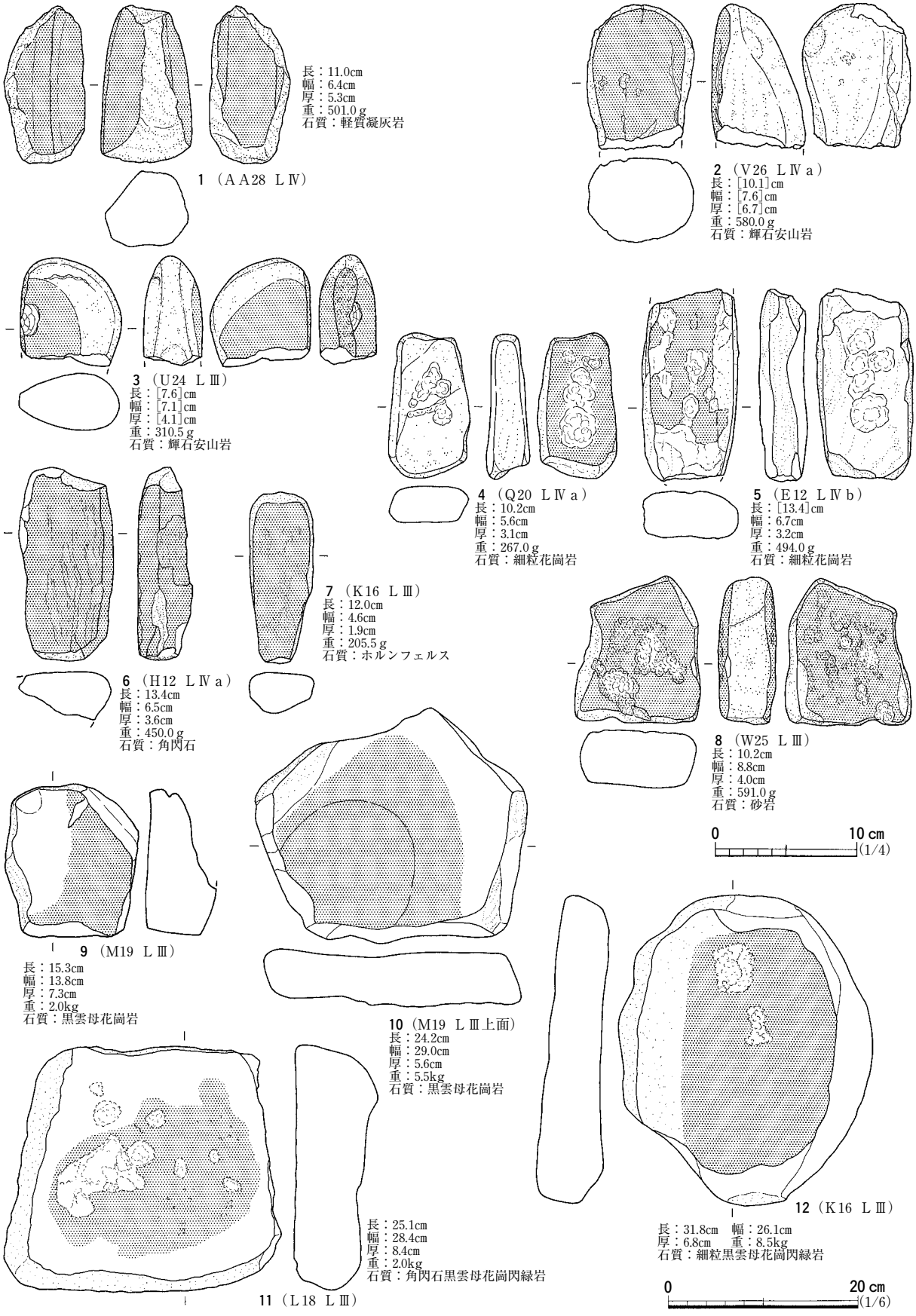


図221　遺物包含層出土石器(17)

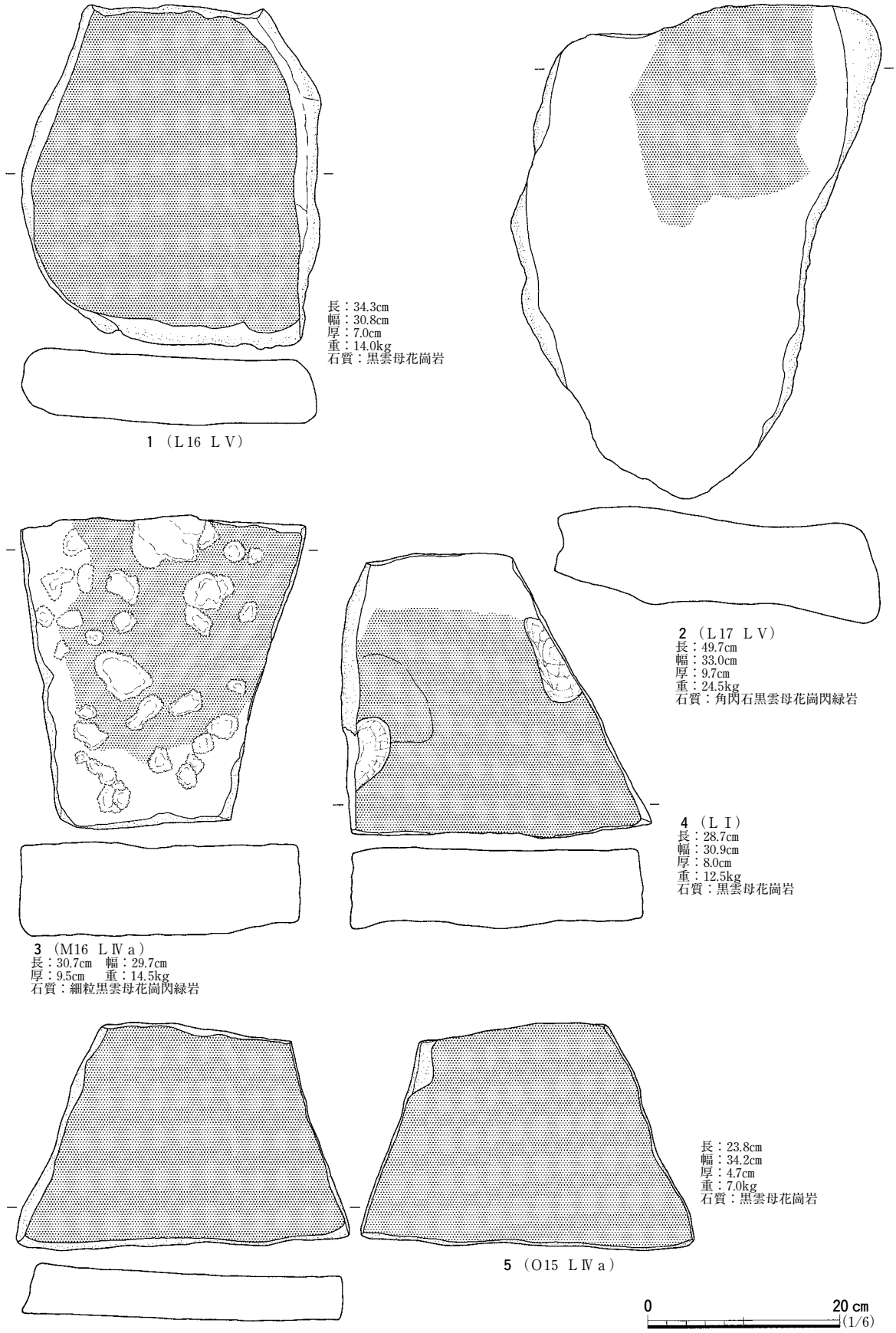


図222　遺物包含層出土石器(18)

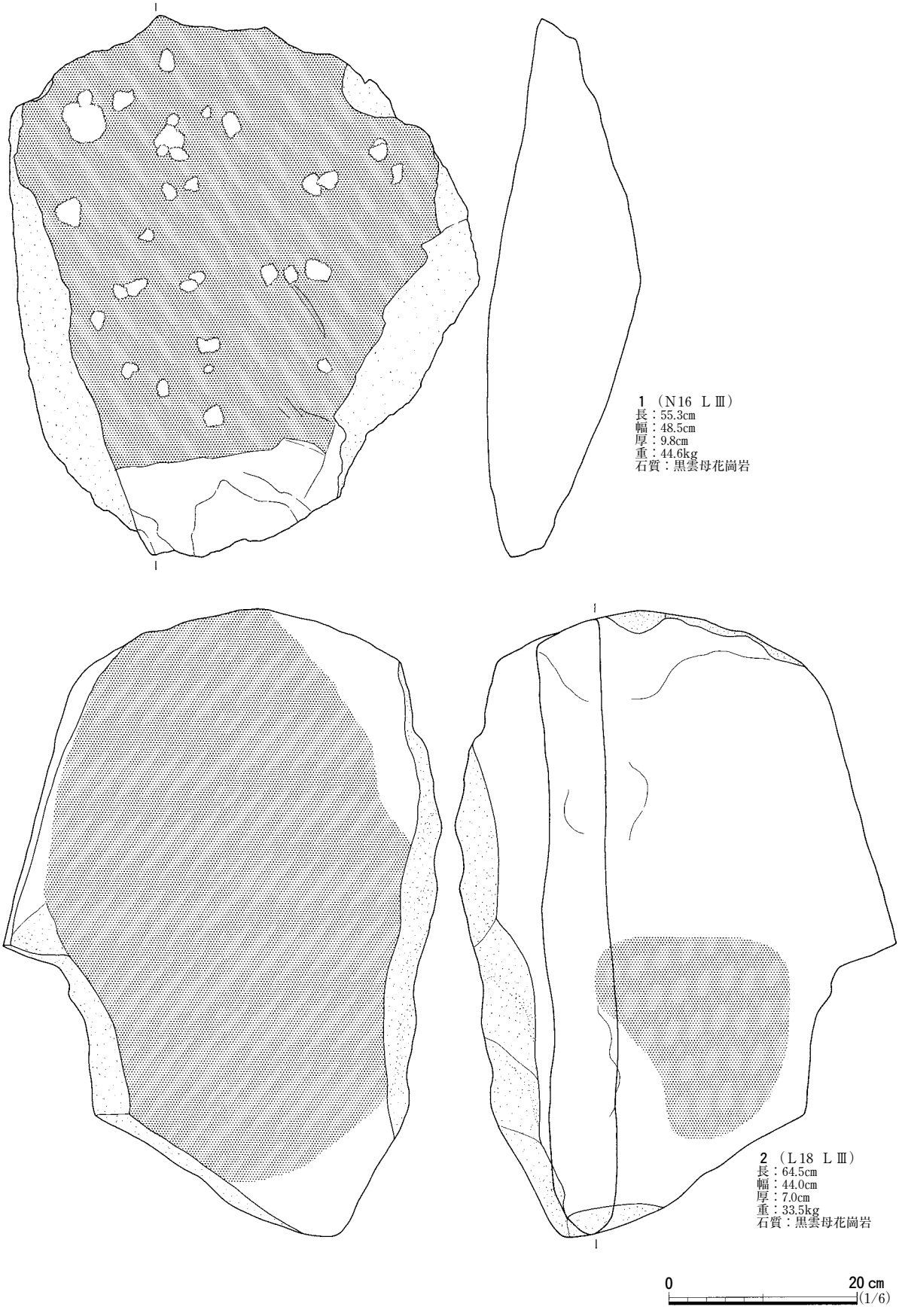


図223　遺物包含層出土石器(19)

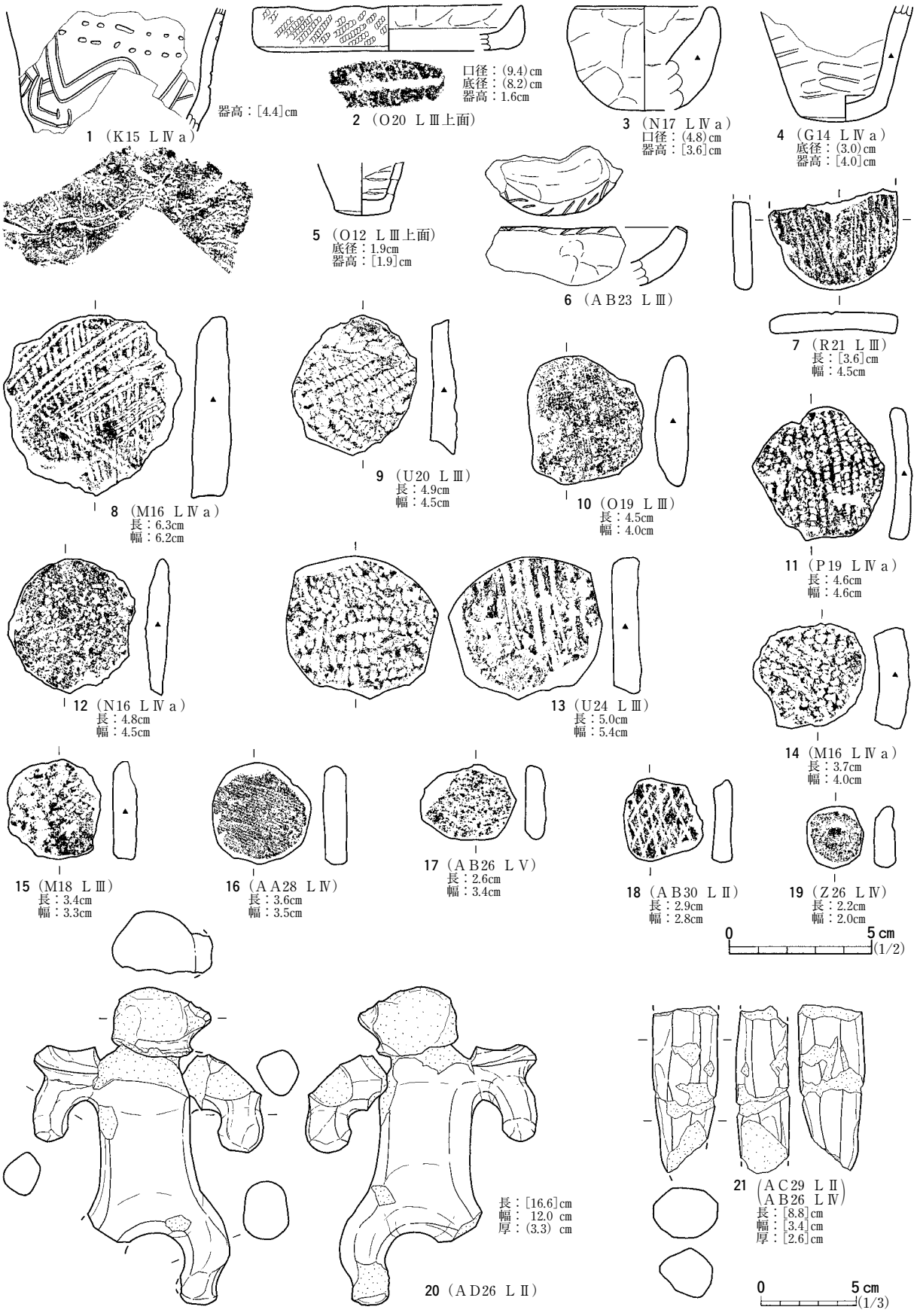


図224　遺物包含層出土ミニチュア土器・土製品

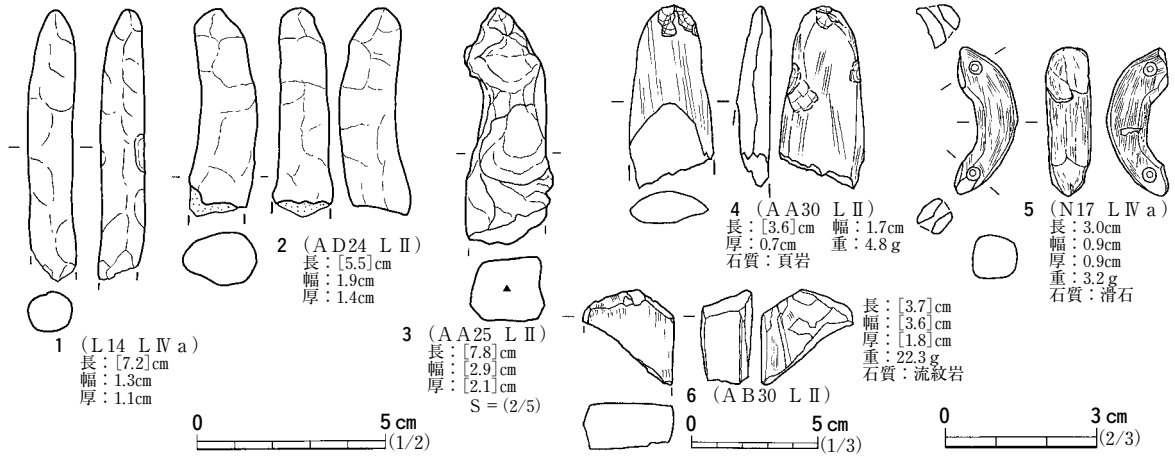


図225　遺物包含層出土土製品・石製品

打調整の痕跡を残す。5は未研磨の剥離面を残し，再生途上であろうか。7～10は基部破片である。7・8は未研磨の剥離面を残す。9・10も研磨の調整があまく剥離・敲打の調整痕を残す。図215には小型のものを示した。これらも研磨があまい。1・2は両刃，3・5は片刃である。4は刃部再生途上のものと考える。

打製石斧　図215－6～図216－3に示した。ホルンフェルス，千枚岩，泥質片岩など節理面で薄く剥離し易い石材を多用する。完形品は少ない。図215－7～9は尖頭状となる基部である。図215－10は弧面を呈する平滑な自然面を残す。図215－11～図216－3は刃部片である。

磨石　図216－4～図221－8に示した。図面上では特に平滑な面に網点を施している。図216－4は小型で明瞭な擦痕が確認できる。同図5は擦痕および溝が確認できる。同図6～図218－13は亜円礫を用いるものである。平坦面中央に凹みを持ち，側面を敲打するものが多い。石材は花崗閃緑岩，輝石安山岩を多用する。図218－14～図219－8は長幅比の大きい亜円礫を用いている。輝石安山岩が多い。図219－9～図220－8・図221－1～3などは断面多角形を呈するもので，側面を主な磨り面・敲打面とするものが多く，平坦面は使用しないものも存在する。これらも輝石安山岩を多用する。図220－9～11・図221－4～8などは亜角礫を用いるものである。これらには花崗岩類が多い。

石皿・台石　図221－9～図223－2である。いずれも花崗岩類の板石を用いる。風化が著しく，石英などの結晶が剥落したものが多く，敲打か風化か判別しにくい。研磨作業により多少窪むものは存在するが，磨り面を故意に窪ませるよう加工したものは無い。図221に示した10kg未満の小型から50kg近い大型のものまで存在するが，10～20kg程度のものが多い。

土製品（図224・225，図版147）

ミニチュア土器　図224－1～6に示した。1は上位に半截竹管による点状の刺突が付され，下位に同工具の平行沈線で曲線文様が描かれる。2は底部の粘土板に端部を摘み上げた皿状の器形を持つ。体部に縄文，底面には木葉痕がつく。3・6は手捏ねによって成形される。6の口端部には刻みが付される。4・5は輪積みによって成形される。4には棒状工具によるナデが認められる。

土器片円盤　図224－７～19に示した。いずれも土器片を円形に打ち欠き，割れ面を研磨するものである。７・８がⅥ群土器，９～12・14・15がⅩ群土器，13がⅧ群土器，16～19はⅪ群土器を素材とする。

土偶　図224－20・21に示した。20は左足を欠損する。文様は描かれず，全体をユビナデにより調整される。頭部は剥落部分が多いが，左右に鍔状の突起を持つようである。右肩にも円盤状の突起が付され，左肩は剥落しているが同様であろう。腕・脚部は胴から「∩」形に取り付けられ，足は脚より若干細く表現されている。21は脚の破片と思われる。これもユビナデ調整のみ行われる。いずれの胎土も石英粒など砂粒を多量含み，雲母を含んでいる。

焼成粘土　図225－１～３である。１・２はユビオサエによって紐状に加工されたものである。胎土には石英粒など砂粒多量，雲母を含む。３は指で捏ねただけの塊である。指紋も明瞭に残っている。胎土には細砂と雲母，繊維を含んでいる。

石製品（図225，図版145）

石剣　図225－４は石剣の一部と思われる。石材は粗質の頁岩である。裾部の出土で，晩期に属する。

装飾品　図225－５は滑石製の装飾品で，勾玉様に成形されるが，両端に穿孔され，垂飾の可能性もある。２次調査区の出土で，早期末葉から前期にかけてのものだろう。

砥石　図225－６は流紋岩製の砥石である。古代の所産だろう。　（山元）

第3章　ま　　と　　め

第1節　遺　　構

2カ年の調査で検出した遺構は，住居跡41軒，掘立柱建物跡8棟，土坑37基，屋外焼土遺構6基，土器埋設遺構2基，道跡1条，21基のピットで構成されるピット群1箇所である。遺構は単一時期ではなく，かつ立地においても特徴が認められそうであるので，以下に時期ごとにまとめておく。

縄文時代の遺構と集落について

早期前葉　撚糸文系土器の時期である。この時期の遺物を出土したのは，13・14・17号住居跡である。このうち，13・14号住居跡は，倒木による撹乱を大きく受けている上，堆積土中に早期中葉以降の土器片も多く含んでいる。このことから，この2軒については確実にこの時期に構築されたものとは判断し得ず，検討の材料にできない。唯一17号住居跡が，堆積土中からとは言え，出土遺物の大半が夏島式～稲荷台式に比定され，この時期の遺構である可能性を持っている。

17号住居跡は，掘込が2.7m程度の隅丸台形を基調とし，柱穴配置は不規則な竪穴住居跡である。形状についてはこの時期の住居跡として報告されてきた遺構と類似しているが，17号住居跡の場合，床面中央に窪みのある地床炉を有しており，この時期では希有な例と言える。堆積土中から早期中葉に比定される土器片(図48－11)も伴出しており，時期が下る可能性も否定はできないが，遺物包含層の最下部に掘り込まれた状況，出土炭化物の測定年代(付編2参照)などから撚糸文土器期の可能性が高いと考える。立地の面では，13・14・17号住居跡はいずれも尾根から裾部への変換点付近の花崗岩帯露出の隙間をねらって住居を構築している。このほか，検出面から5・6号焼土遺構がこの時期のものと推測されている。検出面から考えると，早期中葉以前に遡る可能性があり，位置関係からそれぞれ17号住居跡，13～16号住居跡に伴うものであろう。これ以外には15～22・25・27号土坑とした円形・楕円形の皿状の土坑についてこの時期に構築された可能性が指摘されるが，後続する中葉～後葉段階の遺物も伴出しており，幾つかはこの時期に構築されたものである可能性はあるものの確定はできない。

早期中葉　貝殻沈線文系土器に比定される遺物包含層Ⅳ群土器を伴う時期である。この時期の遺物が多く出土する住居跡は，7・13～16号住居跡であるが，これらの住居跡からは同時に後続する時期の遺物も多く出土しており，この時期のものと確実には言い切れない。ただし，15号住居跡を破壊した倒木痕出土の田戸下層式(図45－2)は同一個体片がまとまって出土したものであり，13～16号住居跡のいずれかがこの時期の遺構であったものと推測される。これ以外に確実にこの時期のものと判別される遺構は調査区内にはない。

早期中葉～後葉　常世1式・子母口式期に比定される遺物包含層Ⅴ群土器が伴う時期である。こ

の時期の遺物が出土する遺構は，７・13～16号住居跡である。13～16号住居跡については重複・撹乱が著しく検討の材料とはできないが，Ⅴ群２類ｂ種に比定できる15号住居跡倒木痕出土の略完形土器(図45－１)の存在は，これらのいずれかがこの時期に帰属するものであることを示すであろう。７号住居跡については複数時期の遺物が出土しているが，遺物包含層Ⅴ群土器に比定されるものが相対的に多く出土しており，この時期に帰属するものとして考えられている。掘込は長軸７ｍ，短軸4.4ｍ程度の隅丸長方形で，地床炉が掘込中央に位置するという特徴を持つ。今回調査したものでは大型の部類に入る。掘込の形態・規模は前期に比定した26・29号住居跡と似ており，周囲の遺物包含層から前期の土器が比較的多く出土している事実もあることから，前期の竪穴住居跡の可能性も考慮される。しかし，本住居跡は柱穴の本数が少なく，炉の周囲のみに配置している。立地も前期の住居は尾根上緩斜面に構築されているのに対して，本住居跡はこれから離れた場所に位置している，ＬⅣｂでぼんやり確認できる検出状況など前期に比定したものとは差異も存在している。

以上に記した，早期前葉から中葉の段階における遺構は，確実に時期比定できるものに乏しい状況ではあるが，遺物包含層の出土状況も併せて考慮すると，１次調査区中央部の尾根から裾部への変換点付近の花崗岩が露出する隙間をねらって遺構を構築して，居住していたであろうことは指摘できる。

早期後葉～末葉　条痕文系土器に比定される遺物包含層Ⅵ～Ⅸ群土器が伴う時期である。この時期に比定されている住居跡は１次調査では３～５・８～12号住居跡，２次調査では34・39・41号住居跡である。このうち８号住居跡は掘込が確認できておらず，平面形が不明である。11・12号住居跡は遺物の出土量が少なくこの時期のものとは断言し切れない。

９・10号住居跡は１辺が３～４ｍの方形の掘込を持つ。炉は掘込隅に位置し，柱穴が壁沿いに配置される。これらの住居からは遺物包含層Ⅷ群土器に比定される縄文条痕土器，Ⅶ群２類に比定される絡条体条痕土器が堆積土中から出土している。８号住居跡については，内部に大型の土器片円盤を入れた遺物包含層Ⅶ群３類土器が床面に倒置されていたと想定される。内部の大型土器片円盤は底部にはめられた蓋状の用途が考えられ，郡山市大槻八頭遺跡においても近い時期に比定される土器内から同様の円盤が出土しており，類例と考えられる。また，床面に倒置するという行為は，住居廃絶等に伴う何らかの儀礼によるものと思われる。これらの住居跡の周囲には，12～14号土坑，２～４号屋外焼土遺構が検出されている。いずれも伴出遺物に乏しく時期比定に至らないが，検出面を同じくすること，および位置関係から上記の住居跡群と関連するものとして考えている。

立地については，いずれも１次調査区中央の裾部から若干上った尾根上緩斜面に位置しており，早期中葉までの遺構群から若干斜面上位に遺構を構築しているといえる。

Ⅸ群土器が伴う住居跡は，３～５・34・39・41号住居跡である。方形を基調とするものが多く，５号住居跡が５ｍを超える以外は，いずれも３ｍ前後の小型のものである。炉は39号住居跡に認められる以外は存在しない。39号住居跡の炉は西側に偏在しており，Ⅷ群土器を伴う住居の特徴と共通する。柱穴配置は３・39号が周壁沿いに並ぶ以外は不規則な配置となる。立地については８～12号

住居跡よりも更に斜面の上位に住居を構え，尾根の頂部付近まで進出している。

これら以外には地文条痕の野島式～茅山下層式段階の住居跡は検出されておらず，早期後葉でも茅山上層式併行期以降，後半段階になってからの遺跡利用の活発化が想定される。

前期前半　遺物包含層Ｘ群土器が伴うものである。この時期に比定した住居跡は，２次調査の18・19・26・29・32・33・35～38・40号住居跡である。いずれも丘陵尾根上の斜面落ち際に位置する。29号住居跡以西のＩ・Ｊグリッドには遺構が存在しないことから尾根端部に集中して住居を構築しているといえる。

26・29号住居跡は長軸７ｍ×短軸５ｍほどの大型の隅丸長方形を呈する。これらは前期中葉大木２ａ式期に帰属する。周壁・短軸にそって柱穴を配置するなど同様の特徴がある。炉は29号にしか確認できないが，長軸線状に並んでいる。軸方向は29号がほぼ南北方向，それより南東にある26号が北東－南西方向を向いている。尾根中央部に長軸線を向けている様子が窺え，前期中葉の集落が広場空間を意識して構成されている可能性が指摘できる。これ以外のものは早期末葉と同様に１辺４ｍを超える18・19・32・40号住居跡，１辺３ｍ前後で小型の33・35・38号住居跡がある。いずれも複数時期の遺物が伴出しており，時期決定には不安があるものである。小型の35・36号住居跡などは26号住居跡に切られており，この種の小型住居は前期前葉以前に位置づけられる可能性を指摘できる。一方の１辺４ｍ超の住居跡は，不整方形の18・32号住居跡，整った隅丸方形の19号住居跡，整った方形の40号住居跡に分けられる。不整方形のものは，形態や，炉が中央から偏った位置にあるなど１次調査の早期後葉から末葉の住居跡と共通する特徴が認められ，早期後葉まで遡る可能性もある。40号住居跡については，重複する29号住居跡よりも新しいという調査所見が得られているが，出土土器を見る限りでは，29号住居跡堆積土中に含まれており，それを破壊しているはずの住居の堆積土から出土してしかるべき前期中葉に比定できる遺物が少ない。これについては調査時の認識ミスがあった可能性も否定できず，時期は前期中葉以前と考えておきたい。

前期後葉　この時期に帰属する遺構は，４・６～10・26号土坑などの落し穴とした遺構である。６号土坑の堆積土上位に前期末葉に降下した沼沢軽石と思しき火山灰を含むこと，８号土坑の堆積土中に前期中葉から後葉によく見られる有撮石器(図116－７)が出土していることなどから前期末葉以前に埋没が始まっていた可能性が高く，これらの落し穴を前期後葉に位置づける根拠としている。この時期の遺物は黒森川の流域では，本遺跡に隣接するこまちダム関連の沢目木遺跡，あぶくま高原道路関連で調査された柳作Ｂ遺跡，鹿島遺跡などで出土しており，これらとの関連が窺える。また，４号土坑を除いて，１次調査区の丘陵裾部に認められ，尾根の上位には構築されない。明らかに水場に近い丘陵裾部をねらって構築したと考えられる。丘陵裾部に落し穴を構築するのは，こまちダム関連で調査した反田Ｃ遺跡と同様の立地条件である。

この時期以降，中期・後期と遺跡の利用は痕跡として残されていない。

晩期中葉～弥生時代　この時期に比定される住居跡は20～25・27～28・30・31号住居跡である。いずれも２次調査区の丘陵尾根上に位置しており，前期の集落と立地を同じくする。斜面落ち際に位

置する20～22・25・28号住居跡は円形の掘込を持つ竪穴住居跡であり，丘陵尾根上に位置する23・24・27・30・31号住居跡は掘込の確認できないものである。

前者の中，20・21号住居跡は小型で，20号は炉が確認できない。これらの堆積土からはこの時期の遺物も確認できておらず，確実にこの時期のものとは言い切れない。残る22・25・28号住居跡は，堆積土中から遺物包含層Ⅺ群４類とした晩期中葉大洞Ｃ２式に比定される土器が出土しており，この時期の遺構と考えられる。これらは掘込中央に炉を持ち，重複する25・28号住居跡が石囲炉で，22号住居跡は地床炉である。22・28号住居跡が径3.5～４ｍ程度であるのに対し，28号からの拡幅が認められる25号住居跡は径５ｍ超と拡大化する。この住居跡からは剥片が多量に出土していることから石器製作も行われていたと考えられ，継続的な居住が想定される。

後者の掘込のないものについては，いずれも地床炉に不整な配列状況の柱穴を伴うものである。掘込の確認できない理由は，もともと平地式の住居として構築されたか，土壌の流出によって掘込が失われたかのいずれかであろう。土壌の流出によるものとすれば，斜面際の竪穴住居跡よりも掘込が浅かったと考えられ，掘込面が異なっている可能性も考えられる。平地式だとしても住居構造が異なるものであり，竪穴住居跡とは時期が違うものの可能性も認識される。これらの検出面付近からは大洞Ｃ２式に混じって相当量の弥生時代前期の土器細片が出土しており，竪穴住居跡よりも新しい，弥生時代まで下る可能性も考えておきたい。

上記した住居跡以外には，２～８号掘立柱建物跡，５号土坑，１・２号土器埋設遺構，ピット群が検出されている。これらはいずれも住居跡とは分布を異にして丘陵裾部に集中して検出されている。

掘立柱建物跡は，小型の５～８号掘立柱建物跡はいずれも４本柱正方形のものである。大型の２～４号掘立柱建物跡には，２号が５本柱五角形，３号が６本柱六角形，４号が８本柱八角形など正方形にさらに１～４本の支柱穴が柱筋に直行するように配置される。４～６本柱のものは県内でも福島市南諏訪原遺跡，宮畑遺跡などで確認でき，他県の例でも確認できるものであるが，４号掘立柱建物跡に見られる８本柱八角形は希有である。同遺構はＰ３・４に根固め石も確認できる。

２号掘立柱建物跡内部には２基の土器埋設遺構が検出される。建物の中央に位置することから，偶々重複する位置にあったというわけではなく，両者は関連するものであろう。従ってこれらの建物群と土器埋設遺構は同時期と考えられる。これらの遺構の帰属年代は埋設土器から大洞Ｃ２式に比定されており，尾根上の竪穴住居跡群と一致する。付近からは，ピット内から石冠，５号土坑・遺物包含層から石剣，土偶など非日常的道具も出土している。これらの状況から丘陵裾部は集落域から離れた同時期の墓域・祭祀域と捉えた方がいいであろう。

古代の集落について

１・２・６号住居跡，１号掘立柱建物跡が古代に属する遺構である。いずれも丘陵裾部に位置し，重複関係がある。１号住居跡がロクロ整形の土師器杯の特徴から９世紀前葉に位置づけられる。６

号住居跡は主柱穴が周壁上に配置され，壁際主柱穴間にもピットが配される。この種の住居跡は黒森川流域でもあぶくま高原道路関連で調査した柳作Ａ・Ｃ遺跡，鹿島遺跡で同様の住居跡が検出されており，このうち，柳作Ａ遺跡１号住居跡は壁際主柱間にもピットが配されている状況が類似している。カマドの燃焼部が掘込外側まで飛び出す状況も共通し，両者がほぼ同時期の遺構と考える。これには８世紀末から９世紀初頭の年代が与えられており，６号住居跡もこの年代と考える。それを壊す１号掘立柱建物跡はこれよりも新しい年代が与えられ，１号住居跡と近い時期のものと考える。１号住居跡に壊される２号住居跡については，１号住居跡出土杯(図10－４)と同一個体と思われる破片が貼床土から出土していることから，１号住居跡より若干古く９世紀初頭から前葉と考えられ，６号住居跡と同時期かやや新しいものと考えられる。以上のように古代の集落は，２・６号住居跡と１号住居跡・１号掘立柱建物跡の８世紀末から半世紀ぐらいのごく短期間の中での２時期に分かれる。１時期１～２軒程度の小規模な集落であり，鹿島遺跡報告書中の菖蒲谷地区すなわち黒森川流域の古代集落について「丘陵裾部の狭い平坦地に小規模集落ないしは各戸ごとに散在的に居住していた」という指摘がそのままあてはまる。遺跡の存続期間も，上記した３遺跡に本書に所収した堂田Ａ遺跡も含めて９世紀半ばまでに終焉を迎えるという共通した特徴が認められる。

第２節　出土土器の特徴

今回出土した土器は縄文・弥生土器48,296点，土師器281点，須恵器10点を数える。ここでは多量に出土した縄文土器の特徴についてまとめる。

早期前葉　７・13・14・17号住居跡などより出土した撚糸文土器および，無文土器，遺物包含層出土Ⅰ～Ⅲ群土器がこの時期に比定できる。いずれも調査区東半の北向き斜面から裾部に集中するが，数量的には少ない。17号住居跡出土土器は，口縁端部が丸頭状の尖底土器で，条間の狭い撚糸文を施すものである。調整はナデのみで，器面がざらついた状態である。撚糸文は口縁部上端より施文される。これらは遺物包含層Ⅰ群１類としたものと同様であり，これらについては，関東における夏島式から稲荷台式の古い時期に比定されよう。

遺物包含層からはこれとは異なる，Ⅰ群２類とした口縁直下が無文部となるもの，同３類とした光沢を持った器面に条間の広い撚糸文が施されるものも認められ，これについては同様に稲荷台式期のそれぞれ古い方と新しい方に比定できるものである。

Ⅱ群土器については，押型文土器の中でも日計式に比定できる。これらについては，平行線状押型文多用や多段構成を取るものが存在することなどから，日計式でも新しい段階のものと言える。さらに図124－６・７のように斜沈線を施す資料などは，太い横沈線上に鋸歯状文を描く三戸式との関連も窺える。これについては，後続するⅢ群１類とした沈線文系土器の三戸式に比定した一群中にも，本群土器に類似した口縁を有するものがある(図127－17)。これらから，本遺跡の日計式はいわゆる竹之内式など初期沈線文土器から三戸式に併行する可能性が指摘できる。

撚糸文系土器の時期に比定した13・14・17号住居跡からは，いわゆる薄手無文土器も伴出しており，遺物包含層出土土器中のⅢ群１類土器もこれにあたる。これについては，17号住居跡の出土状況から夏島式期に伴っていたものと考えられる。

このほか，遺物包含層Ⅲ群２～４類土器については，隣接する沢目木遺跡で竪穴状遺構中から同種の土器が出土しており，型式学的検討を行っている。それに従えば，２類が稲荷台式併行，３類が大浦山・稲荷原・花輪台式など撚糸文土器の末期に併行，４類が撚糸文土器の終末である平坂式から初期沈線文土器に併行するものと言える。

以上を整理すれば，撚糸文系土器期は，撚糸文系土器と無文土器の２系統の土器が併存し，撚糸文から沈線文への過渡期には無文土器・日計型押型文土器の２系統が併存するものとできる。そこに貝殻沈線文系土器の系統が加わるか，もしくは無文土器に取って代わるといえよう。

早期中葉　いわゆる貝殻沈線文土器の時期であり，三戸式，田戸下層式，田戸上層式が確認できる。遺物包含層Ⅳ群土器がこれにあたる。三戸・田戸下層式の数量は僅かであり，田戸上層式になって若干増加する。これらは調査区東端の裾部に集中する。遺構内からは，７・13～16号住居跡の出土遺物中にこの時期の土器が確認できる。三戸式では，１類ａ種とした太沈線の施されるものについては，茨城県伏見遺跡などで確認されるものと同種の土器と認識される。本種の土器を見た場合，胎土・調整・口縁部形態などはⅢ群４類とした無文土器とほぼ同様であり，Ⅲ群４類土器の上に横線が引かれたものと考えられる。１類ｂ種としたものについてはⅡ群土器のところで述べたように，日計式に類似する口端部形態を持つものもある。よって本遺跡における三戸式・Ⅲ群４類無文土器・日計式は時間的に併行するものと捉えられる。田戸下層式については，15号住居跡出土土器(図45－２)の器形が復元できる以外は破片のみで，点数がかなり少ない。田戸上層式については，単沈線施文で入組み文様を描くものから，貝殻圧痕で山形文様を描く，また刻み付き隆帯をもつようなものなど，古期のものから新しい時期まで出土している。この中では貝殻沈線によって入組み文様を描くものが多い。とは言え，この時期までは出土量が全体の中で少ないものである。

早期中葉～後葉　貝殻沈線文系土器から貝殻条痕文系土器への移行期であり，土器型式で言えば東北の常世１式・関東の子母口式の併行期とできる。遺物包含層Ⅴ群がこの時期の遺物にあたり，住居跡出土土器中で早期中葉とした遺物の大半はこの時期のものである。15号住居跡を破壊する倒木痕出土の図45－１もこの時期のものと考えている。出土点数は早期中葉までから飛躍的に増加し，且つ調査区の全域に見られるようになる。１類・２類は沈線・刺突・絡条体圧痕を特徴とする。条痕の有無によって分類したが，文様構成，施文具，胎土などに共通する要素が多く，これらは同時期に位置づけられるものである。体部にくびれがあるものなど常世１式の古い時期に比定されるものも混じっていると思われるが，これらは，概ね第１編堂田Ａ遺跡の早期中葉～後葉１・２類としたものと同類であり，子母口式期に併行する中村五郎の言うところの「塩川南原期」の土器と考える(中村2002)。３類については隆帯・複合口縁上に絡条体圧痕を施すなど，竹之内遺跡15－ｂ・ｃ類と同類の土器である。１・２類に比べて出土点数が極端に少なく，胎土も１・２類は粒の大きい石

英などを含むが，３類では細砂に加え繊維を若干含むもののほうが目立つなど異なる特徴を示す。胎土中の繊維の増加などから，時期的に１・２類よりは後出するものと考えられる。

早期後葉～末葉　この時期に伴う遺物は，遺物包含層Ⅵ～Ⅸ群である。Ⅵ群土器では１類とした野島式とそれに先行する槻木１式がまず認められるが，点数は少ない。後続する鵜ケ島台式に関しては，２類ａ種とした円形竹管刺突を有する細片２点(図145－１・２)にその可能性があるのみで，皆無といって良い。これらの時期における遺跡の利用は低調であったと考えざるを得ない。

茅山下層式以降は条痕文土器を２類以下にまとめた。２・３類については破片が多く文様要素で分類したため，段階差がうまく分類上に反映されていないが，新しいものほど口端部の外反・尖頭化，屈曲の弱化する方向に進むと考える。２類ｂ・ｃ種・３類ａ～ｄ種に見られる直立する口縁から，３類ｅ種に見られる肥厚する口縁を経て，２類ｄ種とした図146－１のような茅山上層式に比定できるものへと変遷すると思われる。２類ｆ種についても口縁部が外反し，条痕による文様を描いているもの(図146－11)も認められることから茅山上層式期に比定される。その他，２類ｈ種・３類ｆ種なども器形から同時期に比定されるものであろう。続く４類についても同様に口縁部が外反することから茅山上層式併行期に比定され，文様モチーフその他がⅧ群１類と共通することから，これとも同時期の条痕施文土器と考えられる。５類は条痕で文様を描くもので茅山上層式に比定される。また，６類とした条痕のみのものについてもⅧ群土器に似た口縁部が外反するものが多く，これらおよび茅山上層式併行のものが多いと思われる。

Ⅶ群土器については１類とした常世２式とそれと近い時期の２・３類に分けられる。２類は９号住居跡堆積土出土土器(図37－２)や体部の連続刺突上に絡条体圧痕が組み合わされるもの(図162－12)などがあり，Ⅵ群２類ｈ種と同種と考えられる。３類については８号住居跡出土の床面倒置土器(図35－１)が良好な資料となる。口縁部上端の沈線はⅥ群２類ｆ～ｈ種に見られる口縁部上端・屈曲部に施される沈線による刻みと類似する。且つ郡山市大槻八頭遺跡15号住居跡出土の常世２式の口縁部上端に同様の沈線文帯が施されている。これらから３類については常世２式と併行もしくは前後するものとできる。

Ⅷ群土器については，９・10号住居跡から比較的良好な資料が出土している。９号住居跡堆積土出土土器(図37－１)は遺物包含層Ⅷ群１類土器に比定される。10号住居跡堆積土出土土器(図39－１)はⅧ群２類土器に比定される。１類はいわゆる北前式と呼ばれるもの，２類は梨木畑式と呼ばれるものに近い。Ⅷ群１類についてはⅥ群４類とした条痕地文のものとモチーフを共通させ，近い時期のものと判断される。

Ⅸ群土器については，１類は大畑Ｇ式に比定される。調査区全域から出土し，大破片且つ出土量も最も多く，本遺跡の最盛期と捉えられる。沈線文様があるａ種・ｃ種について，内面無文のｃ種には文様帯上下で山形文・弧線文と異なる文様を描くもの，格子目文も集合沈線化したものなどが認められ，ｃ種に後続する日向前Ｂ式に近い要素が見て取れる。ｅ種の中には，広野町上田郷Ⅵ遺跡ⅡＢ群に近い隆帯を貼り付けるもの(図176－２・４・６)や刺突文を持つもの(同図３)などがある

が，本遺跡での出土量は少ない。２類は日向前Ｂ式である。縦走縄文地文であるが器形，文様，胎土が大畑Ｇ式に近い図177－３が１次調査区出土であるのを除けば大方２次調査区の出土で，後続する前期に近い出土の状況を見せる。多くは集合沈線によって鋸歯文を描くものである。また，図177－28～30のように施文技法が花積下層式の充塡沈線に類似するものもある。そのほか，３類中の隆帯貼付土器(図178－23・24)は，隆帯上に縄文が施されるなどの特徴から，同時期の関東系土器の可能性がある。

以上から茅山下層式期から出土量が増加し，Ⅸ群土器の段階において本遺跡の最盛期を迎えると言える。この時期については，大槻八頭遺跡において本遺跡でⅦ～Ⅸ群土器とした土器の共伴が指摘されている。Ⅶ・Ⅷ群についてはⅧ群１類中に縄圧痕・絡条体圧痕が認められ(図163－９～11)，確かに施文具の相互入れ替えと言うべき状況が認められる。器形も体部が直線的に外傾し，口縁部上端が外反するという共通する特徴が認められ，底部形態もⅧ群のみに尖底が認められるものの，底径が小さく上げ底となるものなどはⅥ・Ⅶ・Ⅷ群すべてに認められる。Ⅶ群土器を出した８号住居跡，Ⅶ・Ⅷ群土器が出土する９号住居跡，Ⅷ群土器が出土する10号住居跡が近接した位置にあることも注意される。Ⅸ群との関係についても縦走縄文地文の縄圧痕施文土器(図178－19)などが見られ，Ⅷ群に見られる尖底はⅨ群段階の尖底部と類似する。これらの事実から，これらの土器すべてが併行するとまでは言えないまでも，各型式間に併行する段階があった可能性は指摘できる。

前期前半　遺物包含層Ｘ群土器がこの時期に当たる。遺構出土土器では２次調査区の大半の住居跡から出土している。１類は花積下層式に比定される。この時期の土器は飯舘村羽白Ｄ遺跡，相馬市山田Ｂ遺跡，小野町小滝遺跡などで段階設定が行われている。同町内にある小滝遺跡では古・中・新の３段階を設定しているが，これに当てはめれば，ａ・ｂ種が古段階，ｃ～ｆ種が中段階，ｇ・ｈ種が新段階に対応し，古期のものから新期のものまで出土している。量的には中段階に比定されるものが多く，新段階がそれに次ぐ。古段階は僅かである。古段階の土器については，ａ種は羽白Ｄ遺跡Ⅱ群０類としたものにあたり，Ⅸ群１類ｅ種中の隆帯貼付土器でふれた上田郷Ⅵ遺跡ⅡＢ群土器と関係あるものと考えられる。ｂ種は山内幹夫が日向前Ｂ式との関連を指摘する，平田村柳橋Ａ遺跡，白河市泉川遺跡例と類似するものである(山内1983)。本遺跡のものは区画線が縄圧痕であったりすることからこれよりも後出的な要素を持っていると言える。中段階の土器については，ｃ種の口縁部文様帯の鋸歯文はｂ種に見られた鋸歯文と共通する意匠である。また蕨手状文に充塡する短沈線に用いられる，円形竹管を押しつけた後に引き抜くような技法はⅨ群２類ｄ種(図177－28～30)に見られるものと同様のものであり，これらの土器が近い時期にあると想像させるものである。よってｃ種についてはこの段階中でも古いものとできよう。ｄ種は口縁上端に刻みが付され，蕨手状文を沈線施文するものが見られるなどｃ種よりも若干後出的な要素も見られる。ｆ種は口縁の屈曲が失われたもので，新段階に比定される円形竹管刺突を付すものへと変化していく途上のものと考えている。新段階のｈ種としたものについては山田Ｂ遺跡のⅡ群１ｂ類とされたものと同種の資料と考えられる。

２・３類については前期前葉～中葉の時期にあてた。これらについては，２類の地文縄文土器が多く，いわゆる「相互刺突文土器」を含む３類ｂ種が次ぐ。無地の文様帯に重層ループ文帯で菱形文様を描くような，いわゆる「宮田Ⅲ群土器」は僅かである。関東系土器も図191－１・２に示した関山Ⅱ式に比定される同一個体片があるのみで非常に貧弱である。

４類は前期中葉大木２ａ式期に比定される。ａ種は会津高田町冑宮西遺跡資料などに代表されるものに比定される。この時期で最も多く出土している。本遺跡の場合，地文に網目状撚糸文，組紐を用いており，附加条・撚糸文も見られる。他遺跡で見られる葺瓦状撚糸文は存在しないことが特徴としてあげられる。ｂ種とした櫛歯状工具の刺突文帯で文様を描くものについては，図193－７・図195－10の口縁部文様帯に注目すれば，モチーフ自体は大木１式段階で描かれていた菱形文に縦区画を加え，縦区画が発達して交差部分のみが取り残されたものと理解され，そこに櫛歯状工具による刺突という文様要素を新たに加えたものであろう。そこから考えれば，櫛歯状工具の刺突というものは，重層ループ文を置換した地文と考えられ，更に言えば，ａ種の文様は，前段階の地文にコンパス文帯および波状文帯を挟む土器の地文を刺突に置換したものと捉えられる。ｃ種についてはいずれも細片で，器形・モチーフは不明であるが，福島市下ノ平Ｅ遺跡や会津高田町冑宮西遺跡１号土坑などに見られる渦巻や鋸歯状文を描くものと同様のものと考えられる。ｄ種については福島市宇輪台遺跡資料に代表されるものに比定できる。これについては注口部痕跡が図195－25のように円窓であるものと，同図24のように隆帯上に付された盲孔の２種があり，本種内でも新旧があると考えられる。後者をはじめとした隆帯で区画する同図34～37などが新しいものと想定される。

本遺跡ではこれ以降の前期土器は確認できておらず，遺跡の集落としての利用はここで一旦途切れるものと考えられる。

晩期・弥生時代　後期末葉から晩期前葉段階の土器も若干認められるが，大半を占めるのは，中葉の大洞Ｃ２式である。多くが口縁部をＡ突起・Ｂ突起で飾るものであり，メガネ状付帯文など新しい様相を持つものは僅かで，後続する大洞Ａ式は確認できない。ここからこの時期の集落および墓域は大洞Ｃ２式期の１時期のみで，前後に継続期間はほとんど無いものと考えられる。これら以外には晩期末葉大洞Ａ′式から弥生時代前期の御代田式にかかるものが，細片が多いものの出土している。これについては，２次調査区東部からその下の北向き斜面にかけて出土しており，この付近に給源が求められることから，尾根上の掘込の確認できない住居跡がこの時期に属するものかと推測している。

第３節　出土石器の特徴

今回の調査で出土した石器は7,677点である。完成品のうち６割は石鏃が占め，磨石が２割程度でこれに続く。残りの２割がその他の石器である。なお，岩石名については第１編と本編では鑑定者が違うため，異なっている。デイサイト質流紋岩は風化面が白色を呈し，破断面は青灰色で珪質で

ある。内部には黒色・透明の斑晶が認められるなど，第１編堂田Ａ遺跡では黒雲母流紋岩とされたものと同質である。同様に流紋岩は石英とされたものと同質である。以下には第１編での石材名を(　)つきで併記する。

石鏃など小型の剥片石器にはデイサイト質凝灰岩(黒雲母流紋岩)，流紋岩(石英)が多用される。形態はほとんどが凹基無茎鏃である。有茎鏃がこれに次いで多く，その他は僅かである。同時に未成品も多く出土している。堂田Ａ遺跡では早期の住居跡内からデイサイト質凝灰岩(黒雲母流紋岩)剥片が多量に検出され，石器製作址と考えられている。本遺跡では晩期に比定される25号住居跡で流紋岩(石英)剥片が多量に出土し，同様に石器製作址と考えられる。ここから流紋岩(石英)製の剥片石器は晩期，デイサイト質凝灰岩(黒雲母流紋岩)製の剥片石器は早期その他の時期と考えられる。有茎鏃や図206－３～５に示した五角形鏃の多くは流紋岩(石英)製であり晩期に比定されよう。そのほか小型の石錐は流紋岩(石英)製のものが多く，これも晩期の所産であろう。デイサイト質凝灰岩(黒雲母流紋岩)の石鏃についても，未成品が多く出土していることから，遺跡内で製作していたと考えられる。石鏃が多量に残されるのは，遺跡内で石鏃など小型の石器に多量に加工していたこれらの石材については失敗作を含め廃棄したが，それ以外の大型の石器は移動の際に遺跡外へ持ち去ったからであろう。

また，石槍・石匙・大型の石錐など出土数の少ない剥片石器については，珪質頁岩が多く用いられる。石匙は縦型が多い。大型の石錐については，縦型石匙の末端を錐部としたようなものが見られ，石匙・大型の石錐は具体的な時期は明確でないものの，同時期の所産と考えられる。同様の石器は前期の遺跡で多く見られ，おそらく前期に帰属するものが多いと思われる。石斧類については数量が少なく，その中では小型磨製石斧が，比較的その割合が高いことが注意される。打製石斧については撥形を呈するものが多く，大畑貝塚Ｇ地点ほかの早期末葉の遺跡で確認される片面加工の石斧はない。

その他に特殊なものとしては前期には26号住居跡出土の滑石製垂飾，同じく29号住居跡出土の異形石器がある。異形石器については，福島市獅子内遺跡などでも類例が確認される。晩期には25号住居跡から玉，ピットから石製品が出土する。ピット出土の石冠は，埋納されていたと推定され，祭祀具としての用途が考えられる。

第４節　ま　と　め

縄文時代の集落については，早期～前期において，早期前葉・中葉段階には尾根から裾部へと至る緩斜面付近を居住域としていたが，時代を経るにつれ尾根上位へと移していく。早期末葉に最盛期を迎え，前期中葉段階には尾根端部を取り囲むような環状集落になっている可能性も指摘できるが，この時期で一旦集落としての遺跡の利用は途絶える。遺物についても早期後葉の鵜ケ島台式期において出土数が低下するのみで，早期前葉から前期中葉に至るまでほぼ切れ目無く出土している。

前期後葉段階においては狩猟場として利用されるのみで，中期・後期には人の通行等はあったであろうが，活動の痕跡はほとんど残されていない。縄文時代晩期中葉に至って，再び尾根上に集落が構成され，裾部に墓域・祭祀域が展開する。

古代においては，黒森川流域の8世紀後半から9世紀前半の集落に，住居形態から丘陵裾部に世帯ごとといえるような小規模集落が展開するという集落のあり方までに共通する特徴が見いだせる。

あぶくま高原道路や，本遺跡同様こまちダム建設に関連して調査された菖蒲谷・雁股田地区の遺跡と比して，縄文時代における遺構数・遺物量は頭抜けており，縄文時代早期～前期・晩期における本遺跡は，この地域で多時期にわたって継続的に利用された拠点的集落として評価できる。出土遺物も，分類・時期比定に錯誤等が多々あるであろうが，資料自体はこの時期における当地域の標準となりうるものである。（山元）

引用・参考文献

会津高田町教育委員会　1984『胄宮西遺跡』

相原淳一　1982「日計式土器群の成立と解体」『赤い本』創刊号

相原淳一　1990「東北地方における縄文時代早期後葉から前期前葉にかけての土器編年－仙台湾周辺の分層発掘資料を中心に－」『考古学雑誌』76－1

我孫子昭二　1982「子母口式土器の再検討」『東京考古』1

伊藤信雄　1978『宮城県遠田郡不動堂村素山貝塚調査報告』

井上國男　1977「久慈川上流域における縄文時代早期縄文土器」『福島考古』18

井上國男　1987「日向前Ｂ式土器覚書」『奥久慈考古』5

井上國男　1996「久慈川上流域における縄文時代早期無文・沈線文系土器の様相」『論集しのぶ考古　目黒吉明先生頌寿記念』

いわき市教育委員会　1974『大畑貝塚調査報告』

いわき市教育委員会　1982『竹之内遺跡－縄文時代早期の調査－』

いわき市教育委員会　1985『龍門寺遺跡』

いわき市教育委員会　1995「中倉Ｂ遺跡」・「中ノ内Ｃ遺跡」『東北横断自動車道関連遺跡Ⅰ』

笠懸野岩宿文化資料館・岩宿フォーラム実行委員会　2003『第11回岩宿フォーラム／シンポジウム刺突具の系譜予稿集』

金子直行　1992「子母口式土器研究序説」『縄文時代』3

金子直行　1994「貝殻沈線文系土器群終末期の様相」『縄文時代』5

興野義一　1967「大木式土器の理解のために(Ⅰ)」『考古学ジャーナル』13

興野義一　1968「大木式土器の理解のために(Ⅱ)」『考古学ジャーナル』16

郡山市埋蔵文化財発掘調査事業団　1999『大槻八頭遺跡－発掘調査報告書－』

埼玉県考古学会　1990『シンポジウム大木，有尾，そして黒浜－縄文前期中葉土器群に見る系統と交流の実態－』

佐藤典邦　1989「大畑Ｇ式以後(上)」『踏査』8

佐藤典邦　2001「大畑Ｇ式土器研究へのコメント」『史峰』28

澁谷昌彦　2001「関東・中部・北陸地方の大木２ａ式土器の研究－土器型式から見た周辺地域との交流－」『縄文時代』12

縄文セミナーの会　1997『前期中葉の諸様相』

縄文セミナーの会　2000『早期後半の再検討』

仙台市教育委員会　1980『三神峯遺跡発掘調査報告書－東北電力送電線鉄塔移設に伴う北東部Ｃ地点緊急発掘調査－』

仙台市教育委員会　1982『北前遺跡発掘調査報告書』

大工原豊　2003「模倣と模造－硬質頁岩製石匙・石槍の流通と型式変容」『縄文時代』14

堤　仙匡　1998「「大畑Ｇ式土器」の再検討」『いわき地方史研究』35

堤　仙匡　2000「「日向前Ｂ式期」土器の検討」『和田文夫先生頌寿記念献呈論文集　民俗と考古の世界』

長野県考古学会縄文時代(早期)部会　1997 『シンポジウム押型文と沈線文　本編』
中村五郎　1985 「東北地方南部の縄紋早期後半の土器編年試論」『福島考古』24
中村五郎　1986 「東北地方の古式縄紋土器の編年－福島県内の資料を中心に」『福島の研究１　地質考古編』
中村五郎　1997 「福島県内縄紋早期土器研究の諸問題」『福島考古』38
中村五郎　2002 「常世式土器から槻木１式まで」『福島考古』43
日本考古学協会2001年度盛岡大会実行委員会　2001 『亀ヶ岡文化－集落とその実体－晩期遺構集成Ⅰ・Ⅱ』
野内秀明　2001 「条痕文土器群後半期の諸段階－茅山下層式・茅山上層式とその周辺の土器群－」『考古論叢神奈河』第９集
芳賀英一　1975 「常世遺跡出土の早期縄文式土器に就いて」『遮光器』 9
芳賀英一　1977 「常世遺跡出土の早期縄紋土器をめぐる２，３の問題点」『福島考古』18
原田昌幸　1983 「撚糸文期の竪穴住居－資料の集成とその解題的研究－」『土曜考古』 7
原町市教育委員会　1983 『赤沼遺跡試掘調査報告』
日立市教育委員会　1998 『泉原貝塚発掘調査報告書』
福島県教育委員会　1980 「泉川遺跡」『東北新幹線関連遺跡発掘調査報告Ⅰ』
福島県教育委員会　1983 「牡丹平遺跡」・「柳橋Ａ遺跡」『広域農業開発事業阿武隈地区遺跡分布調査報告(Ⅲ)（中部第二地区)』
福島県教育委員会　2000 『福島県内遺跡分布調査報告６』
福島県教育委員会　2002 『福島県内遺跡分布調査報告８』
福島県教育委員会　2003 『福島県内遺跡分布調査報告９』
福島県文化センター　1984 「一斗内遺跡」『国営総合農地開発事業母畑地区遺跡発掘調査報告16』
福島県文化センター　1987 「羽白Ｄ遺跡(第１次)」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅹ』
福島県文化センター　1988 「羽白Ｄ遺跡(第２次)」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅺ』
福島県文化センター　1993 「小滝遺跡」『東北横断自動車道遺跡発掘調査報告21』
福島県文化センター　1996 「獅子内遺跡(第１次調査)」『摺上川ダム遺跡発掘調査報告Ⅱ』
福島県文化センター　1997 「山田Ｂ遺跡」『相馬開発関連遺跡調査報告Ⅴ』
福島県文化センター　1997 「獅子内遺跡(第２次調査)」『摺上川ダム遺跡発掘調査報告Ⅳ』
福島県文化センター　1998 「獅子内遺跡(第３次調査)」『摺上川ダム遺跡発掘調査報告Ⅵ』
福島県文化センター　1999 「柳作Ａ・Ｂ・Ｃ遺跡」『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告４』
福島県文化センター　1999 「上田郷Ⅵ遺跡(１次調査)」『常磐自動車道遺跡発掘調査報告18』
福島県文化センター　2001 「上田郷Ⅵ遺跡(２次調査)」『常磐自動車道遺跡発掘調査報告22』
福島県文化振興事業団　2002 「鹿島遺跡」『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告16』
福島県文化振興事業団　2003 「沢目木遺跡」『こまちダム遺跡発掘調査報告１』
福島県文化振興事業団　2004 「反田Ｃ遺跡」「沢目木遺跡(２次調査)」『こまちダム遺跡発掘調査報告２』
福島県文化振興事業団　2004 「仁井殿遺跡」『福島空港・あぶくま南道路遺跡発掘調査報告17』
福島市振興公社　1991 『南諏訪原遺跡　松川小学校移転予定地内発掘調査報告』
福島市振興公社　1993 「宇輪台遺跡」『第三期山村振興農林漁業対策事業水原小谷地地区農道改良工事関連発掘調査報告』
福島市振興公社　1994 「下ノ平Ｅ遺跡」『摺上川ダム埋蔵文化財発掘調査報告３』
福島市振興公社　2004 『摺上川ダム埋蔵文化財発掘調査報告13　総括編』
伏見遺跡調査会　1980 『常陸伏見』
細田　勝　1991 「縄文時代前期中葉の諸様相」『埼玉考古学論集』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
宮崎朝雄　1991 「夏島式土器及び稲荷台式土器について」『埼玉考古学論集』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
宮崎朝雄　2004 「縄文早期撚糸文文化の竪穴住居について－関東における初期定住化－」『縄文時代』15
山内幹夫　1983 「阿武隈山地を中心とした縄文前期初頭土器編年について－牡丹平２群１類土器を中心として－」しのぶ考古８
山内清男　1979 『日本先史土器の縄紋』
領塚正浩　1987 「田戸下層式土器細分への覚書」『土曜考古』12
領塚正浩　1992 「「三戸式」と「日計式」－縄文時代早期に於ける地域間交渉の実体－」『人間・遺跡・遺物－我が考古学論集２－』
領塚正浩　1997 「子母口式土器の成立過程」『奈和』35

報　告　書　抄　録

ふりがな	こまちだむいせきはっくつちょうさほうこく
書　　名	こまちダム遺跡発掘調査報告３
シリーズ名	福島県文化財調査報告書
シリーズ番号	第424集
編著者名	高橋信一・吉野滋夫・山元　出・横須賀倫達・阿部知己・三浦武司
編集機関	財団法人福島県文化振興事業団　遺跡調査部　遺跡調査課 〒960-8116　福島県福島市春日町５-54　℡024-534-2733
発行機関	福島県教育委員会　　〒960-8688　福島県福島市杉妻町２-16　℡024-521-1111
発行年月日	2005年３月29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
どうでん 堂田A	ふくしまけんたむらぐん 福島県田村郡 おのまちおおあざしょうぶや 小野町大字菖蒲谷 あざどうでん 字堂田	522	00135	37° 16′ 52～53″	140° 35′ 3″	2003年５月13日 ～ 2003年11月18日	800㎡	ダム（こまちダム）建設に伴う事前調査
にしだ 西田H	ふくしまけんたむらぐん 福島県田村郡 おのまちおおあざしょうぶや 小野町大字菖蒲谷 あざにしだ 字西田	522	00144	37° 16′ 58″	140° 34′ 41″	2002年６月26日 ～ 2002年12月20日 2003年６月23日 ～ 2003年12月17日	5,700㎡	同　上

所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
堂田A	集落跡	縄　文 平　安	竪穴住居跡（19） 土坑（５） 屋外焼土遺構（２） 小穴（５） 遺物包含層（１）	縄文土器 土師器 須恵器 石器 剥片 炭化物	平安時代と縄文時代早期後葉と末葉の集落跡。縄文早期の竪穴住居跡は重複が著しい。
西田H	集落跡 狩猟地	縄文 奈良・平安	竪穴住居跡（41） 掘立柱建物跡（８） 土坑（37） 屋外焼土遺構（６） 土器埋設遺構（２） 小穴（21） 道跡（１） 遺物包含層（１）	縄文土器 弥生土器 土師器 須恵器 石器 石製品 炭化物	縄文時代早期・前期・晩期の集落跡。丘陵尾根上に早期～前期・晩期の住居跡群，丘陵裾部には晩期の掘立柱建物跡群が構築され，斜面には遺物包含層が形成される。このほかに縄文時代前期後半の落し穴，奈良・平安時代の住居跡も確認された。

経緯度の数値は世界測地系による

福島県文化財調査報告書第424集

こまちダム遺跡発掘調査報告３

堂田（どうでん）Ａ遺跡
西田（にしだ）Ｈ遺跡
本　文

平成17年３月29日発行

編　集	財団法人福島県文化振興事業団遺跡調査部	
発　行	福島県教育委員会	（〒960－8688）福島市杉妻町２－16
	財団法人福島県文化振興事業団	（〒960－8116）福島市春日町５－54
	福島県土木部	（〒960－8070）福島市杉妻町２－16
印　刷	株式会社 山川印刷所	（〒960－2153）福島市庄野字清水尻１－10

本報告書は中性紙を使用しています。